SHOUT
SHARE
IT

THE LIBRARY OF CONGRESS
1800

Class QK1
Book .B33

植物學雜誌

第五卷　第四十七號

明治廿四年一月十日

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 47.

January, 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TOKYO BOTANICAL SOCIETY.
TŌKYŌ, JAPAN.

QK1
B33

地學雜誌

第貳拾四巻
十二月二十五日發兌

定價金拾錢郵稅一錢六冊前金郵稅共五十四錢十二冊前金一圓八錢

◎論說

●本邦水界の氣象（承前）　水路部長海軍大佐　肝付兼行君
●日本群島（承前）　地質調査所技師ドクトル　原田豐吉君
●地球上氣候の變化に付て　理科大學簡易科生徒　石川一男君
●島の區別　理科大學　山上萬次郎君

◎雑錄

●長崎縣下巡回土産（承前）　たゝな生君
●日本の海岸に驗潮器を設くるを聞て　大川台北君
●政治地理篇第二回　在愛知縣　酒井恒三郎君
●結晶記號法一斑　石川一男君
●すゞみ臺第五稿　地質調査所員　大川通久君
●石狩國上川地理小誌　理學士　淺井郁太郎君

◎雑報

●銀山鳴動●高知公園の化石●北海道の長き地名●北海道第四紀の浮石層●新倉の石膏●雨畑の硯石●全國の人口●八ッ澤の石炭●東京市常盤橋外の地底●日本の神靈●雲報●大人の足蹟

◎質疑　十二件

◎應問

●各大陸の三角形を成す理　山形縣　菅谷熊一郎君
●氷河氷田の解　高知縣　和田完君
●日本八種の出處に付て　簡易科生　山本頼輔君
●「ノッペラポウ」の件に就き　和田完君
●氣象學を學ぶ英書　やゝき生君
●印度洋に鹽分多き理　やゝき生君
●瀬戸內沿岸製鹽十州に就き　遠湖漁長君
●梅雨並驟雨の太さ　仝君

◎批評

●大日本地誌の組織を評す（上）　金良生君
●鑛物字彙　よゝま生君

◎地學會記事●總集會●會員の移動●寄贈書目

發行所
神田區裏神保町一番地　地學會事務所

賣捌所
神田區裏神保町一番地　敬業社
日本橋區通三丁目　丸善商店

動物學雜誌

第二十六號十二月十五日發兌

壹部拾錢郵稅一錢六部前金郵稅共六十六錢

●日本產ノ蝸牛科（第一回附圖第十版）　飯島魁君
●蟬ノ發音器ニ就テ（四二〇頁ノ續）　波江元吉君
●理科大學標本頭脚類目錄（第二回）　池田作次郎君
●形態學ノ一大問題（四七九頁ノ續キ）　岸上鎌吉君
●海產動物保存法（第二回）　丘淺次郎君
●鯉、鮒ニ就テ　松原新之助君

◎寄書

●動物聲音考第十三（牛）　野村彥太郎君

◎雑錄

●新刊書●共益生活の一奇例●日本重要魚介產卵期一覽表●せみほうぼう●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）●生物ノ壽命（承前）

◎東京動物學會記事

發行所
東京神田裏神保町　敬業社

QK
1
B7485
BOT

2

201
1773
Pat 44

植物學雜誌

vol: 5

第五卷

自第五十九號至第七十號

東京植物學會編輯所發行

明治二十五年

植物學雜誌第六卷目錄

Articles in ENGLISH.

Ecklonia radicosa. By K. Okamura p. 1.
Saxifraga Watanabei, nov sp. By R. Yatabe, Sc. D. 43.
Notes on Japanese Plants. By Mr. T. Makino. p. 45. 180.
Senecio Makineanus, Nov. sp. By R. Yatabe. Sc. D. p. 115.
Ptilota dentata, sp. nov By Mr. K. Okamura. p. 149.
Machilus Thunbergii, Sieb. et Zucc. var. japonica, By R. Yatabe, Sc. D. p. 177.
Euonymus lanceolatus, nov. sp. By R. Yatabe. Sc. D. p. 179.
Puccinia corticioides, Berk. et Broome. By Mr. S. Hori. p. 211.
Calanthe kirshimensis, nov. sp. By R. Yatabe, Sc. D. p. 253.
Polygonatum amabile, nov. sp. By R. Yatabe, Sc. D. p. 279.
Thalictrum Watanabei, nov. sp. By R. Yatabe, Sc. D. p. 307.
Stylophorum lanceolatum, nov. sp. By R. Yatabe, Sc. D. p. 308.
Cladratis Tashiroi, nov. sp. By R. Yatabe, Sc. D. p. 345.
Spiræa dasyantha, Bunge, By R. Yatabe, Sc. D. p. 348.
Milletia purpurea, nov. sp. By R. Yatabe, Sc, D. p. 379.
Eugenia Cleyeæfolia, nov. sp. By R. Yatabe. Sc. D. p. 405.

あ之部

あいぬノ植物名ノ組織　頁 209.
あいぬト日本語對照北海道植物名一斑附錄　61號頁 1. 62號 7.
あゐたで　頁 49. 129.
Ainsliæa　頁 55.
あをがし　頁 135. 177.
あを(青)けや赤けや　頁 332.
あをたで　頁 168.
あをだも　頁 168.
あをてんつき　頁 47.
あをさんぼ　頁 48.
あをぼもみ　頁 168.
あかき　頁 168.
あかしあ(Acacia)　頁 187. 189.
あかつゝじ　頁 53.
あかぬま原　頁 296.
あかばなはうちはかへで　頁 293.
あかまつだけ　頁 328.
あか(赤)松ノ兩性花叢　頁 238.
あかわし　頁 164.
あきなし　頁 49.
あくこよぎ　頁 164.
Actinodaphne　頁 135.
あくちにぢあ(Actinidia)　頁 134.
あさだノ產地　頁 32.
あしかき　頁 48.
Aspidium　頁 46. 47.
Asplenium　頁 45. 46.
Aster　頁 55.
あぜたさぎり　頁 51.
Acer　頁 51. 292. 293.
あぢさゐ　頁 294.
Adenophora　頁 54.
あなめ　頁 259.
あはだん　頁 157.
Abelia　頁 55.
あま(天)城山方言　頁 262.
あまも　頁 169.
Araujia　頁 33.
あらびす(Arabis)　頁 100.
あ(亞)拉畏亞護謨　頁 190.
Arisæma　頁 47.
ありつすむ　頁 101.
Ardisia　頁 53. 133. 134.
あれきさんごりあ產旃那　頁 94.
Arenaria　頁 49.
あんず　頁 391.
あんさくめ　頁 1.

い、ゐ之部

いぎす科　頁 259.
いさ葉ノ色素粒　頁 141.
いす　頁 164.
いそぎく　頁 19.
いそつゝじ　頁 161.
Isopyrum　頁 97.
いたがし　頁 164.
いたどり　頁 166.
いたや　頁 167.
いたやかへで　頁 167.
いちゐがし　頁 164.
いてうニ付テ　頁 148.
いてうノ化學性分　頁 237.
いぬうめもどき　頁 158.
いぬざんせう　頁 165.
いぬすみれ　頁 131.
いぬせんぶり　頁 53.
いぬたうき　頁 51.
ゐ(猪)子吉人氏　頁 273. 376.
いはがんすげ　頁 47.
いはつくばねうつぎ　頁 55.
いはゆきのした　頁 343.
Evodia　頁 156. 157.
いまめがし　頁 165.
Euonymus　頁 159. 179.
Elatine　頁 134.
いらもみ　頁 168.
Ilex　頁 158. 157.

う之部

うすばしらくちづる　頁 134.
うちだしみやましきみ　頁 157.
うなぎつかみ　頁 49.
うみすげ　頁 169.
うらじろうつぎ　頁 52.
うらじろごしゆゆ　頁 156. 157.
うらぼしのこぎりしだ　頁 46.
うるい　頁 167.
うる(得)撫島探撿　頁 107.
うんらん　頁 344.

え、ゑ之部

えい(英)國ノ朝顔　頁 343.
えぞおさきりさう　頁 27.
えぞこすみれ　頁 100.
えぞしやくなげ　頁 161.
えぞのじやにんじん　頁 100.
えぞのたちつぼすみれ　頁 100.
えぞのはまはたざを　頁 100.
えぞはこべ　頁 132.
えぞはたざを　頁 100.
えぞふうろ　頁 156.
えぞふすま　頁 133.
ゑちごひめうづ　頁 97.
ゑさはむし　頁 162.
ゑんじゆ　頁 165. 206.

を、お之部

をう(應)用植物　頁 325.
をかさだけ　頁 168.
をかのり　頁 163.
をか(岡)村金太郎氏　頁 306.
をか(岡)山縣産被害小麥ノ實驗　頁 277.
Oxalis　頁 156.
をき(興)津蜜柑病名　頁 265.
をぢころし　頁 164.
をさぎりさう　頁 24.
をさこしだ　頁 46.
をさこぶだう　頁 51.
おにく　頁 168.
おにせん　頁 167.
おほあみかさだけ　頁 249.
おほいぬふぐり　頁 186. 199.
おほひめわらび　頁 47.
おほくさぼたん　頁 50. 170.
おほくぼしだ　頁 364.
おほくまやなぎ　頁 51. 170.
おほみやすみれ　頁 102.
おほもみぢがさ　頁 55.
おほばのきはだ　頁 157.
おほばむらさき　頁 181.
おほばめぎ　頁 50.
おほやましろがねさう　頁 97.
おやりはぐま　頁 55.

おらんだせんにち　頁 162.
をん(溫)泉中ノ水藻　頁 266.

か　之　部

かい(海)金砂　頁 343.
がう(濠)州產バンクシア、オルナータノ話　頁 372.
かう(香)水木トハ如何ナルモノカ　頁 295.
かうぼく　頁 135.
カシア　頁 94. 121. 184.
かゞノ種類　頁 331.
かしは　頁 167.
かつ(褐)藻類　頁 118. 396.
が(芽)ノ保護　頁 248.
Cardamine　頁 100.
Callicarpa　頁 54. 181
カルト、井ルヘルム、フオン、オーゲリー氏の傳　頁 203.
Carex　頁 47.
かわらけな　頁 162.
かん(甘)蔗ノ寄生害菌　頁 196.
かん(甘)扁桃　頁 313.
かんぼく　頁 163.

き　之　部

きうりさう　頁 162.
きうりな　頁 162.
きゝやうかたばみ　頁 156.
きざみばすみれ　頁 131.
き(寄)生植物ノ變遷　頁 195.
きつかうつげ　頁 158.
きづた　頁 163.
きつねさゝげ　頁 165.
きつねのひばし　頁 165.
きばなのはうちはかへで　頁 293.
きばなのはたざを　頁 18. 102.
きふぢ　頁 164.
きむらたけ　頁 168.
ぎやうゞやぶき　頁 162.
きやう(杏)仁　頁 391.
きやう(杏)仁水　頁 416.
きよすみひめわらび　頁 46.
ぎよ(魚)類ニ有毒ナル植物　頁 31.
きりしまゑびね　頁 253.
きれはすみれ　頁 131.
きん(近)刋植物書　頁 196.
ぎん(銀)杏ノ化學的性分　頁 337.

く　之　部

くさすぎかづら　頁 295.
くさたづ　頁 166.
くさごう　頁 167.
くさびよう　頁 25.
くさめのき　頁 164.
くしやみのき　頁 164.
くしろわちがひ　頁 133
くぬぎ　頁 164.
く(苦)扁桃　頁 351.
く(苦)扁桃水　頁 351.
く(苦)扁桃油　頁 388.
くまだら　頁 162.
くもらん　頁 48.
Krascheninikowia　頁 133.
くらら　頁 165.
Chrysanthemum　頁 19.
Chrysosplenium　頁 52.
くるまばさう　頁 162.
Cleome　頁 102.
くれをめさう　頁 102.
Clematis　頁 50. 96. 170.
くろがねしだ　頁 45. 128.
くろこむぎ　頁 277.
くろまつ　頁 168.
くわい(槐)　頁 206.
くわい(會)員彙報　頁 112.
くわい(會)員死亡　頁 344.
くわう(光)蕈　頁 299.
くわにんがやつり　頁 47.
くわ(花)粉ニ付ヘライユ氏ノ研究　頁 37.
くわ(花)粉ノ發育法　頁 29.

け　之　部

Chelonopsis　頁 54.
けん(研)究ノ衝突　頁 144.
げん(顯)花植物分科撿索表　69號附錄 1, 70號 5.
げん(原)形質及感應性　頁 428.

けんぼなし 頁 343.

こ之部

こあぜてんつき 頁 47.
こうぐひすかぐら 頁 55.
こう(紅)藻類 頁 117. 259.
こう(紅)皮綠柴 頁 160.
こうまごやし 頁 293.
こねさきりさう 頁 26.
こからすざんせう 頁 51.
ごきす 頁 164.
Cocculus 頁 98.
Cochlearia 頁 101.
こけねさぎりさう 頁 27.
こけしのぶ 頁 128.
こけほらごけ 頁 45.
こしやうばい 頁 158.
こたちすみれ 頁 131
こつ(骨)狀澱粉 頁 19.
こつるむめもどき 頁 159. 292.
こ(蝴)蝶戲珠花 頁 160.
こなでしこ 頁 132.
こなら 頁 164.
ごれづ 頁 160.
こばなかへで 頁 292.
こまつなぎ 頁 293.
こみやまみすれ 頁 130.
こむぎのゑんごう 頁 278.
Corydalis 頁 99.
ごりんばな 頁 163.
こんろんさう 頁 100.

さ之部

さい(埼)玉縣下採集土產 頁 315.
Cyperus 頁 47.
さう(皂)角 頁 343.
Saccarobium 頁 48.
さぎすげ 頁 169.
Saxifraga 頁 52.
さくらの氣根 頁 295.
さく(作)物病名 頁 330.
さゝげノ學名 頁 310.
さゝばねんごさく 頁 [illegible]99.
Sagittaria 頁 49.
さつ(殺)蟲粉功驗 頁 33.
さつ(殺)蟲粉末 頁 30.
さはぐるみ 頁 169.
Salix 頁 49.
Sarcochilus 頁 48.
さるすべり 頁 168.
さるなめ 頁 168.
Thalictrum 頁 96.
さん(三)月下旬志州鳥羽ノ開花植物 頁 199.
Zanthoxylon 頁 51.
さん(酸)類及ビアルカリ類ノ花瓣色素ニ於ケル反應ノ實驗 頁 231.

し之部

しぎんからまつ片山村ニ產ス 頁 364.
じ(磁)石草 頁 143.
Schizopepon 頁 54.
したきさう 頁 53.
しづ(靜)岡近傍ノありごほしトねず 頁 250.
しづ(靜)岡縣下採集土產 頁 261.
しづ(靜)岡縣產植物錄 頁 284. 334. 407.
しづ(靜)岡縣ノはまばう 頁 250.
しでがやつり 頁 47.
しなのねさぎりさう 頁 27.
しなのき 頁 163.
しなのなでしこ 頁 132.
しなのはうちはかへで 頁 292.
しばいすみれ 頁 129.
しばつこ 頁 167.
しほじ 頁 167.
しほぜ 頁 167.
しまゑんじゆ 頁 345.
しやくじやうさう 頁 162.
しやらめ 頁 259.
しやりんばい 頁 166.
じゆ(樹)木大小 頁 333.
しゆろ 頁 169.
しよく(食)蟲草ノ消化作用 頁 34.
じよう(丈)菊 頁 160.
しようじようだけ 頁 159.
しよう(莊)內植物一般 頁 364 384.

しよく(植)物學夏季講習會 頁 339.
しよく(植)物學雑誌体裁變更ニ付キテ 頁 8.
しよく(植)物學ノ進化 頁 243. 267. 296. 366. 397.
しよく(植)物學敎化書 頁 207.
しよく(植)物葉ノ防雨法 頁 248.
しよく(植)物ニ生ヘル毛ノ話 頁 182.
しよく(植)物ノ模型 頁 272.
しよく(植)物標本(Herbariun)ノ語原 頁 105.
しよく(植)物ノ類化幷ニ蒸散作用 頁 195.
しよく(植)物分類ト解剖學トノ關係 頁 141. 207.
しよく(植)物分類餘錄 頁 60.
しよく(食)用バクテリア 頁 36.
しらねひはこべ 頁 133.
しらつが 頁 168.
しら(白)井光太郎氏 頁 306.
しろいぬなづな 頁 101.
しろばなのいぬなづな 頁 101.
しん(新)刊批評 頁 107.
しん(震)燒木 頁 322. 366.

す之部

すい(西)瓜 頁 338.
Swertia 頁 53.
Scutellaria 頁 54.
すごり 頁 167.
すしめ 頁 254.
すゝめのいひ 頁 261.
すゝめのこびヱ 頁 48. 128.
すゝめのまご 頁 261.
Stuartia 頁 134.
Stellaria 頁 132. 133.
Stephanotis 頁 53.
するがらん 頁 274.

せ之部

Senecio 頁 55.
Sedum 頁 52.
せつ(雪)上ノ黴菌 頁 249.
せのき 頁 167.
せりはわうれん 頁 96.
せりやはん 頁 162.
せん(川)芎 頁 399.
せんにちぎく 頁 162.

そ之部

うくづ 頁 166.
Sophora 頁 53.

た之部

たい(退)會者姓名 頁 404.
たい(大)木數種 頁 264.
だいこんさう 頁 164.
たう(當)歸 頁 400.
たうなす 頁 166.
たうなす類果實の氣孔性 頁 39.
たうはくか 頁 162.
たかねさきり 頁 51.
たちすみれ 頁 50.
たちでんだ 頁 46.
たちれこのめさう 頁 52.
たちはこべ 頁 49.
たにじやかうさう 頁 54.
たびらこ 頁 162.
Daphne 頁 52.
たまからまつさう 頁 307.
たまりんご 頁 17.
Damnacanthus 頁 55.

ち之部

ちゑ(枳)椇子 頁 343.
ちがや 頁 167.
ちく(筑)前國植物俗名通知 頁 369.
ち(千)島植物誌 頁 140.
ちゝぶしろかれさう 頁 97.
ちさせかづら 頁 58.
ぢむかでノ產地 頁 32.
ちやんちんの寄生菌 頁 35.
ちやんちんのくろしぶ 頁 214.
ぢんちやうげ 頁 52.
ちんねうゑりー旃那 頁 171.

つ之部

つが 頁 168.
つがもみ 頁 168.
つきぬきさぎりさう 頁 26.
つたもめぢ 頁 167.

つちとりもぢ　頁 159.
つちもち　頁 159.
つちやまもち　頁 159.

て之部

てい(帝)國大學總長ヨリノ謝狀　頁 148.
てう(朝)鮮國ノ有用植物　頁 105.
てう(朝)鮮釜山浦ノ海藻　頁 117.
Deutzia　頁 52.
てばこわらび　頁 46.
てふとりかづら　頁 32.
てんき　頁 167.

と之部

とう(冬)期中原形質ノ運動ヲ視察スル方法　頁 102.
とう(東)京植物學會會員ノ卒業論文　頁 374.
とう(荳)科植物ノ種子ニ於ケル無窒素貯蓄養料　頁 30.
とが　頁 168.
とがとつ　頁 168.
とがもみ　頁 168.
ときはかへで　頁 167.
と(土)佐國羊齒科植物目錄增補　頁 127.
ときしもつけ　頁 6.
とさのもみぢさう　頁 115.
とさむらさき　頁 54.
とちのき　頁 168.
とべらノ名義　頁 263.
ともゑさう　頁 25.
とりがたはんせうづる　頁 50.
Trichosanthes　頁 54.
Trichomanes　頁 45.

な之部

なか(中)津川村　頁 323.
ながはのあをつゝらふぢ　頁 98.
ながはのすみれさいしん　頁 50.
ながはのたちつぼすみれ　頁 131.
ながはのつめくさ　頁 133.
ながはのやまぐるま　頁 98.
ながはのあをつゝらふぢ　頁 98.
ながみしゝらん　頁 47.
なたくまけやき　頁 265.
なづなノ異狀果實　頁 241.
なゝ(七)種ニ就テ　頁 41.
なにはづ　頁 162.
なすび　頁 305.
なんぶいぬなづな　頁 101.
なんぶわちがひ　頁 133.

に之部

にう(入)會者姓名　頁 148. 209. 404.
にく　頁 168.
にくけいさう　頁 161.
にくこり　頁 164.
に(二)三藥用植物化學的實驗ニ就テ　頁 404.
にちりんさう　頁 160.
につくわらからまつさう　頁 96.
につくわうまゆみ　頁 159.
にはとこ　頁 166.
にほん(日本)海藻ノ分布　頁 56. 113.
に(日)本產焦燥菌　頁 211.
に(日)本植物新稱　頁 18.
に(日)本植物新名　頁 95. 129. 156. 292.
に(日)本植物報知　頁 45. 128. 169. 180.
に(日)本釀造上ノ植物學的驗究　頁 113.
に(日)本藥局方植物篇　頁 14. 91. 119. 171. 187. 217. 225. 281. 311. 349. 388.

ぬ之部

ぬまがや　頁 167.

ね之部

Nepenthes ハ肉食植物ニ非ス　頁 36.
ねむろかはほね　頁 99.
ねむろはこべ　頁 134.

の之部

のう(農)業植物ノ變化　頁 191.
のう(農)業植物論　頁 152. 191. 352.
のう(濃)原ナル海水ノ海藻ノ成長ニ及ホス作用　頁 195.
のぢしや　頁 164.
のにがな　頁 56.
のぼろぎく　頁 163.

は之部

Paspalum　頁 128. 48.
Berberis　頁 50.
ばあろぶニ就テ　頁 28.
Viola　頁 50.
Hydrocotyle　頁 51.
はい(胚)ニ綠素アリ　頁 29.
ばく(麥)角發見　頁 35.
はくさんもち　頁 155.
ばくちのき　頁 283.
ばくてりあ之効用　頁 360.
ばく(麥)角奴ノ豫防法　頁 105
はく(白)皮綠紫柴　頁 160.
はしぼ　頁 161.
はたがき　頁 164.
は(巴)旦杏と壽星桃　頁 385.
はゝきゞ　頁 166.
はないたや　頁 167.
はな(花)の色香　頁 22. 74.
はな(花)の黑色　頁 433.
はなひりのき　頁 164.
は(葉)ノ刷印法　頁 32.
はへさりばな　頁 66.
Habenaria　頁 48.
はまさじ　頁 206.
はまにんにく　頁 167.
はまもくこく　頁 166.
はむぶりー氏及ビねりうゐる氏ノ生藥品及經濟植物學ニ係スル突擊　頁 431. 275. 302. 339.
はやましだ　頁 45.
ばらもみ　頁 168.
はりぎり　頁 167.
はりぶき　頁 162.
はりもみ　頁 168.
はるばりうむ(Herbarium)(植物標)ノ語原　頁 105.
ばん(萬)國理學家人名錄　頁 374.

ひ　之　部

ひいらきノ神社　頁 366.
ひかげわらび　頁 46.
ひうがつるうめもどき　頁 59.
ひきをこし　頁 294.
ひぐるま　頁 160.
ひこさんひめしやら　頁 134.
Vicia　頁 53.
ひ(被)子植物分類法ノ一大變革　頁 241.
ひせんもち　頁 158.
びたりあ(Vittaria)　頁 47.
ひどらすちす之說　頁 51.
ひなちどり　頁 48.
ひ(批)評英文千島植物論　頁 108.
ひまはり　頁 160.
Hypericum　頁 51.
ひめねさぎりさう　頁 27.
ひめがちまつさう　頁 97.
ひめちやせんしだ　頁 45.
ひめなるこゆり　頁 279.
ひめのやがら　頁 48.
ひめのき　頁 168.
ひめみやますみれ　頁 130.
ひなしやじん　頁 54.
びやくしんのあかきくらげ　頁 249.
びようやなぎ　頁 24.
びろうどしだ　頁 293. 344.
びろうどむらさき　頁 181.
ひろはこんろんさう　頁 100.

ふ　之　部

ふうてふさう　頁 102.
ふく岡縣粕屋郡ニ於テ九月中ニ開花チ目擊シ得ベキ自生ノ植物　頁 420.
ふくじゆそう　頁 197.
ぶ(武)甲山ノ樹　頁 318.
ふ(富)士山植物彙報　頁 21. 89. 135.
ふじ山麓樹木小錄　頁 221.
ふじつゝじ　頁 53.
ふじわちがひ　頁 133.
ふぢ　頁 167.
ふぢ(藤)井氏　頁 306.
ぷちろた(Ptilota)　頁 260.
ふひさらつくか(Phytolacca)　頁 49.
ふひんぶりすちりす(Fimbristylis)　頁 47.
ふやう　頁 165.
ふもとすみれ　頁 129.

ぷるぬす 頁 52. 257.
ぷれくとらんそす(Plectranthus) 頁 54.
ふりつ,みゆーれる 頁 142.
ふんふく 頁 163.

へ之部

べにひば 頁 149.
べにかやらん 頁 48.
へすべりさう 頁 101.
へみのき 頁 160.
Berchemia 頁 51.
へん(變)化ノ原因 頁 352.
へんさう 頁 311.
へん(扁)桃油 頁 349.

ほ之部

ぼあ(Poa) 頁 46.
ぼう(茅)慈姑 頁 399.
ぼう(房)州の海藻ニ就テ 頁 392.
ほうのかはしだ 頁 46.
ほ(補)骨脂 頁 306.
ほざきいちえふらん 頁 48.
ほざきのみゝなぐさ 頁 28.
ほそえかへで 頁 292.
ほそばいぶきしもつけ 頁 348.
ほそばのえんごさく 頁 99.
ほそばのぼたんづる 頁 96.
ほそばやまぶきさう 頁 308.
ほそめ 頁 258.
ほさこ 頁 162.
Polygonum 頁 49. 29.
ほん(本)草字典 頁 374.
ほんめ 頁 258.

ま之部

まこんぶ 頁 259.
まつばさたけ 頁 168.
まつばはこべ 頁 134.
まつらん 頁 48.
まめふぢ 頁 164.
まゆはけすげ 頁 169.
まるばすみれ 頁 30. 134.
まるばぎしぎし 頁 19.
まるみのへびのぼらず 頁 98.
まるみのやまごばう 頁 49.

み之部

みせはやの名語 頁 146.
みづおとぎりさう 頁 25.
みづがらし 頁 100.
みづばごしゆ 頁 157.
みつばてんなんしよう 頁 47.
みづひきぐさ 頁 166.
みつやなぎ 頁 25.
みどりわらび 頁 46.
みゝかきぐさ 頁 28.
みやまいらくさ 頁 109.
みやまおとぎりさう 頁 27.
みやまかうもり 頁 55.
みやまかまつぶし 頁 64.
みやまがんぴ 頁 52.
みやまけまん 頁 99.
みやまみゝなぐさ 頁 32.
みやましゝがしら 頁 45.
みやますみれ 頁 30.
みやまにがうり 頁 54.
みやまひきおこし 頁 180.
みやまふぢき 頁 53.
みやまめぎ 頁 98.
みやまもみぢいちご 頁 53.
みやめぎ 頁 98.

む之部

むかごさんぼ 頁 48.
むかごみどり 頁 48.
むぎがらがやつり 頁 47.
むくみ 頁 164.
むつばあかね 頁 163.
むめ(梅)鉢草ニ於ケル假雄蕊ノ本性ハ如何 頁 29.
むらさきすゝき 頁 109.
むらさきなつふぢ 頁 379.
むらさきまゆみ 頁 179.
むらさきみゝかきぐさ 頁 28.

め之部

めあかんふすま 頁 134.

めだけのあかごろも　頁 34. 211. 261.
めひぢば　頁 169.

も之部

もう(毛)根ノ生長　頁 107.
もう(孟)宗竹　頁 198.
もくたちばな　頁 157.
もくらんノ蕾ニ就キ　頁 240.
もさしろさう　頁 101.
もんぢさう　頁 134.

や之部

やまがんぴよう　頁 167.
やしほ　頁 167.
やく(役)員撰擧當撰者姓名　頁 209.
やぐるまぎく　頁 163.
やはずまんれんぐさ　頁 152.
やふでまり　頁 160.
やまでらぼうず　頁 159.
やぶやなぎ　頁 49.
やまねんごさく　頁 99.
やまおだまき　頁 97.
やまにさきりさう　頁 27.
やまふだう　頁 168.
やまでまり　頁 160.
やまもゝ　頁 161.

ゆ之部

ゆう(有)尾菌(Uromyces)ノ新種　頁 106.
ゆう(有)用植物小記　頁 159.
ゆきみぎく　頁 155.
ゆきわり草ノ花　頁 144.

ら之部

Lactuca　頁 56.
ら(裸)子植物ノ胚囊内ニ於ケル胚乳ノ發生　頁 40.
らん(蘭)山翁の博識　頁 139.

り之部

りいろしあ(Leersia)　頁 48.
りうせん　頁 168.
りく(陸)中ノ海藻ニ就テ　頁 258.
りごすちかむ(Ligosticum)　頁 51.
りばりす　頁 48.
りよう(旅)行談　頁 278.
りよく(綠)藻類　頁 113. 369.

る之部

Rubus　頁 53.

れ之部

れん(蓮)子　頁 260.
れんぷくさう　頁 163.

ろ之部

ろう(老)利兒結兒斯業　頁 28.
ろどでんどろん(Rhododendron)　頁 53.
ろどまりあ(Lomaria)　頁 45.
ろにせら(Lonicera)　頁 55.

わ之部

わかめ　頁 259.
わさびノ病害　頁 266.
わたすげ　頁 169.
わたなへさう　頁 7. 43.
われもかうのトゆすかび日本ニ產ス　頁 106.

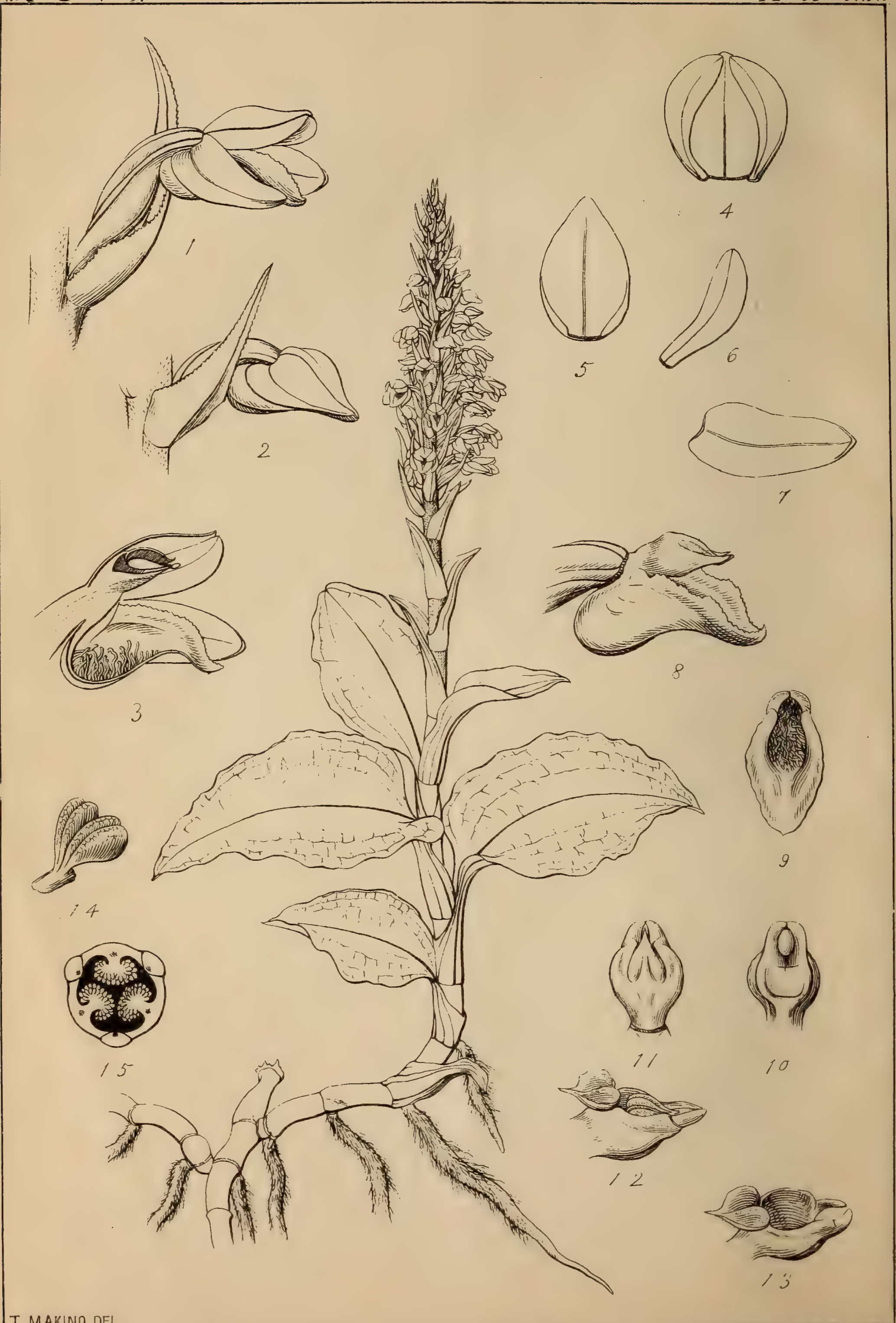
質問應答

頁 110. 145. 146. 205. 207. 208. 250. 251.

寄送書目

頁 110. 147. 209. 251. 278. 375.

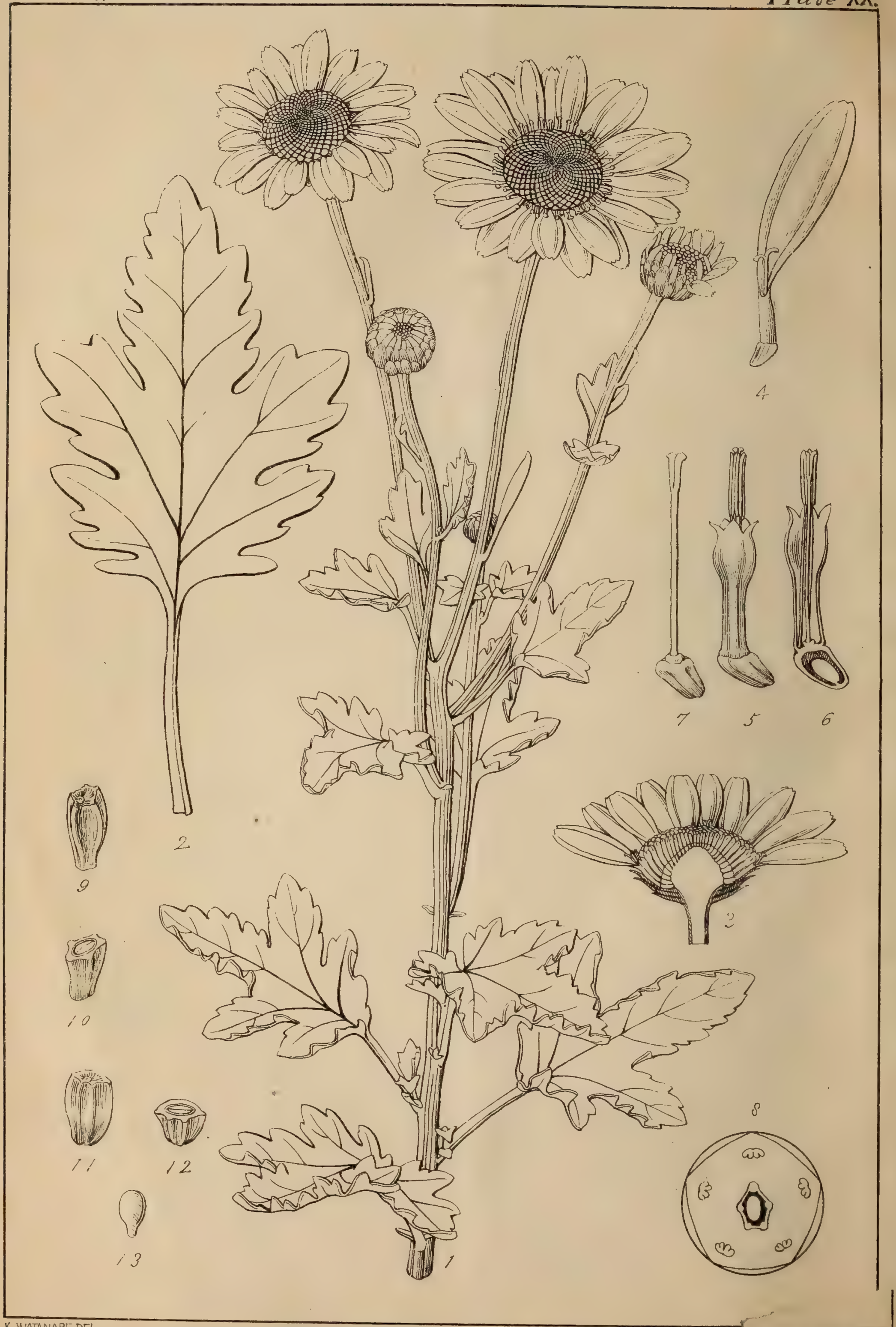
第十九版 Plate XIX.


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

T. MAKINO DEL.

GOODYERA HACHIJOENSIS, SP NOV.

東京日本橋區呉服町東京製版社印行


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

K. WATANABE, DEL.

CHRYSANTHEMUM SINENSE, SABINE,
VAR. SATSUMENSIS

東京日本橋區呉服町東

植物學雜誌第五卷第四十七號
明治廿四年一月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.
[Vol. V. Jan. 10, 1891. No. 47.]

A New Japanese Goodyera.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Goodyera hachijoensis, sp. nov.
Nom. jap. *Hachijō-shusuran.* ハチヂヤウシユスラン
(Plate XIX.)

Stems ascending from a creeping rhizome, pubescent on the upper part, purplish, about 5 inches high including the spike. Leaves ovate, acute, green, wavy at the margins, with more or less silvery longitudinal area on the upper surface, the middle and largest leaves $1\frac{1}{2}$ inches long, 1 inch broad; petioles sheathing at the base, the largest about $\frac{1}{2}$ inch long including the sheath; upper leaves smaller, passing into linear-lanceolate empty bracts. Flowers small, crowded on a rather one-sided spike of about 2 inches; bracts leafy, linear-lanceolate, ciliate at the margins, longer than the ovary and partly enclosing it at the base, 2-4 lines long. Perianth smooth, about $1\frac{1}{2}$ lines long; dorsal sepal and petals connivent, the sepal ovate, greenish on the back, brownish tinged at the apex, inflexed at the basal margins, the petals oblanceolate, nearly white; lateral sepals oblong-ovate, slightly greenish; labellum saccate, the sac pale-yellow, hairy inside, the limb white, spreading, incurved at the margins. Column short; stigma concave; rostellum short, bifid; anthers about as long as the rostellum; pollinia 2, each bipartite. Ovary fusiform, about 2 lines long.—Fl. September-October.

Living specimens of this new *Goodyera* were collected by Mr. Samurō Ōkubo in May, 1887, in woods on Mt. Hachijō-Fuji in the island of Hachijō, south of the province of Izu. They have been since kept in the Botanic Garden of the Imperial University.

Plate XIX. Fig. 1, Flower; 2, flower-bud; 3, vertical section of flower; 4, dorsal sepal and petals; 5, dorsal sepal; 6, dorsal petal; 7, lateral sepal; 8, labellum and column; 9, front view of labellum; 10, front view of column; 11, back view of column; 12, anther opened showing the pollinia; 13, same with pollinia removed; 14, pollinia; 15, transverse section of ovary:—*all enlarged.*

A New Variety of Chrysanthemum Sinense, Sab.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Chrysanthemum sinense, Sab., var. satsumensis.
Nom. jap. Satsuma-nogiku. サツマノギク
(Plate XX.)

Chrysanthemum sinense, Sabine, Trans. Hort. Soc. Lond., vol. iv., p. 330, tab. 14.—Forbes & Hemsley, Journ. Linn. Soc., vol. xxiii., p. 438.—*Pyrethrum sinense*, DeCandolle, Prodr., vol. vi., p. 62.—Maximowicz, Mel. Biol., vol. viii., p. 517.—Franchet et Savatier, Enum. Plant. Jap., vol. i., p. 235. Var. *satsumensis*.

Stem shrubby, 2 feet or more high; branches densely albo-tomentose with appressed hairs. Leaves alternate, petiolate, coriaceous, pale green and pubescent with short erect hairs on the upper, densely albo-tomentose on the lower surface, pinnatifid into 3-5 lobes, the lobes incised or coarsely and unequally dentate, the incisions or teeth obtuse; lower leaves larger, 3 inches long, 2 inches broad, with a petiole 1 inch long; upper leaves smaller, and those on the peduncles often lanceolate or linear. Stipules small, ovate or 2-3-lobed, absent in the upper leaves. Flower-heads terminal and axillary, on long peduncles, 1½-2 inches in diameter. Involucre hemispherical, 5-6 lines across; its bracts imbricate, densely tomentose outside, the outer ones linear, dilated at the base, the inner larger, lanceolate, scarious at the margins. Receptacle conico-hemispherical, without paleæ. Florets without pappus, geniculate at the apex of the ovary. Ray-florets pistillate, in a single series, 15-25 in number, ligulate, white, at length purplish, with a tubular greenish base, entire and obtuse or slightly 3-toothed at the apex, ½-1 inch long, 1½-2½ lines broad. Disk-florets perfect, yellow; corolla tubular, rather abruptly dilated above the middle, 5-toothed, 1½ lines long; anthers obtuse at the base. Branches of the style in both kinds of florets thickened and truncate at the apex; ovary or rather calyx-tube obliquely obconical, 5-ribbed, crowned with a yellow annular disk surrounding the base of the style. Achenia somewhat curved and obconical, about 1 line long; those of the disk 5-angled, somewhat flattened laterally, those of the ray 4-angled, flattened dorsally.—Fl. October—November.

This variety grows wild in the province of Satsuma. It differs from the var. α. *sinense,* Maximowicz (Mél. Biol., vol. viii., p. 517.), the leaves of which are described in the following words:—*densius et argutius submucronato-serratis, inferioribus basi cordatis.* It also differse from the var. β. *japonicum* of the same writer, which Franchet and Savatier, in their *Enumeratio Plantarum,* refer to the figures in the *Honzō Zufu,* vol. xiii , fol. 5, and in the *Sōmoku Zusetsu,* vol. xvii., fol. 19. The latter variety has more slender stems, thinner, smaller, and less tomentose leaves, and usually smaller flower-heads. It is known in Japan under the name of *Ryūnōgiku,* and, as Prof. Maximowicz states, common in the Hakone range and

about Yokohama; but the present variety does not occur in these localities.

Plate XX. Fig. 1, upper portion of the plant with flower-heads; 2, lower leaf; 3, vertical section of flower-head; 4, ray-floret; 5, disk-floret; 6, same cut vertically; 7, same with corolla and stamens removed; 8, floral diagram; 9, 10, achenium of the disk and its cross-section; 11, 12, achenium of the ray and its cross-section; 13, embryo:—*all except 1 and 2 enlarged.*

本雜誌体裁ノ變更ニ就キテ.

現今我邦人ガ修ムル所ノ學問ニシテ,西洋書ヲ參考シ又ハ引用スルノ必要ナキモノアルベケレドモ;理學ノ諸科ニ於テハ此事甚必要ニシテ,一日モ欠ク可ラズ.植物學ノ如キハ殊ニ然リトス. 此雜誌ヲ常ニ讀ム人ノ熟知セラルヽ如ク,一ノ論文中ニテモ數回西洋語ヲ其儘ニ交ルノ必要起ルコト往々之アリ. 故ニ全体ノ文章ヲ竪書ギニスルトキハ,往々紙ヲ横ニシテ書クノ必要アリテ,讀者モ亦時々紙ヲ横ニスルノ不便アリ. 且又近頃ニ至リテハ,世界ノ文明諸國ノ人ヲシテ我雜誌ヲ讀マシメンニハ西洋文ノ論文ヲ掲載スルコト緊要ナルヲ以テ,每號ニ於テ事ノ新規ニ屬スルモノハ英文ヲ以テ記載スルコトニナリタリ. 例ヘバ我邦ニ於キテハ倘新植物ノ記述スベキモノ顯花部ニモ多ク,隱花部ニテハ殊ニ多キモ,之ヲ歐洲ニ通用セザル所ノ我邦文ニテ記述スルハ,殆ド記述セザルニ均シカルベシ. 是レ即チ歐文ヲ用フルノ必要アル所以ナリ. 然レドモ歐文ニテ記述スルナラバ,歐文中最モ廣ク我邦ニ行ハルヽ所ノ英文ヲ以テスルノ我邦人ニ取リテ便利ナルヲ以テ,此文ヲ用ルノコトニセリ. サレド歐文ハ左ヨリ横ニ書キ,邦文ハ右ヨリ竪ニ書クヲ以テ,同一雜誌中ニ兩樣ノ文ヲ揚グルトキハ,種々ノ困難ヲ生ズルガ故ニ,横竪ノ中何レニカ一定セザルヲ得ザルノ場合トナリタルニ依テ,餘儀ナク皆左ヨリ横ニ書クコトニシタリ. 斯クスルコトハ邦文ヲ讀ム爲メニハ稍不便ナルモ,少シク慣ルレバ格別ノ不便ニモ非ルベシト信ズ.

向後ハ英文ノ論文モ,植物學名ノ目錄モ,或ハ邦語ノ羅馬字文モ,皆一樣ニ横書キトナルヲ以テ,雜誌編纂上ニハ甚便利ナリ. 讀者諸君之ヲ讀ムニ慣ルヽ迄少シク忍耐セラレンコトヲ偏ニ希望ス.

日本產櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ス

松　村　任　三

緒　言

櫟槲櫧柯ノ類ハ (1) Fagaceae 山毛欅族ニ屬ス,之ヲ Fageae, Castaneae 山毛欅,栗ノ二亞族ニ分ツ,日本產ニシテ第一亞族ニ屬スルモノ Fagus 山毛欅屬アリ,第二亞族ニ屬スルモノ Castanea 栗屬, Pasania 柯屬, Quercus 槲櫧屬アリ, 山毛欅族ノ Betulaceae 樺木族, Myricaceae 楊梅族, Juglandaceae 胡桃族ト相關係スル所以, Fagus, Pasania, Quercus 諸屬ノ山毛欅族ニ屬スル所以等ハ (2) Prantl 深ク研究シテ既ニ論文アレバ玆ニ贅セス.

余ノ玆ニ論スルモノハ日本ニ產スル槲櫧柯ノ類ニ限リテ山毛欅,栗ノ諸屬ニ及ボサズ,而シテ是等ヲ植物誌体ニ記載スルニアラズ,又新種ノ發見ヲ告クルニアラズ諸原書ニ探リ,衆標品ニ據リテ古來ヨリ紛亂セル諸點ヲ訂正シ,成ルヘク種數ヲ減少シ以テ他日明瞭ニ之ヲ記載セントキノ料ニ供セントス.こならヲみづならトシ,くろがしヲしらがしトシテ一定セザルガ如キハ人々個々勝手ノ稱呼ニ出レバ一ニ圖譜ニ據リテ之ヲ定メ,學名ハ其之ヲ始メテ記載セル原書ニ就テ考フ,其參考書ハ左ノ如シ

重要文書

小野蘭山重訂本草啓蒙卷之二十六.飯沼慾齊著草木圖說後篇木部卷之八寫本,岩崎常正著本草圖譜卷之十六及卷之六十六寫本, Thunberg-Flora Japonica,(1784);Banks-Icones selectæ plantarum, quas in Japonia collegit et deleneavit (1791); Thunberg-

---

(1) Prantl-Fagaceae (Engler-Prantl-Die natür. Pflanzenfam. p. 48-58.)

(2) Prantl-Beiträge zur Kenntnis der Capuliferen. (A. Engler-Botan. Jahrb. für Syestem. VIII. p. 321—336.)

Icones plantarum Japonicarum, quas in insulis Japonicis annis 1775 et 1776 collegit et descripsit (1794); P. F. Siebold et J. G. Zuccarini—Flora Japonica sive plantæ quas in imperio japonico collegit, descripsit, ex parte in ipsis locis pingendas curavit. (1835-1870);—Siebold et Zuccarini—Floræ japonicæ Familiæ naturales.(1845-1846); C. L. Blume-Museum Botanicum Lugduno-Batavum. Tom. I. (1849-1851); F. A. G. Miquel-Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi. Vol. I. (1863-1864); Franchet et Savatier-Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium vol. I. et II. (1875-1879.)

歷史

我邦多ク槲櫟櫧柯ノ類ヲ產スルハ人ノ能ク知ル所ナリ,而シテ始メテ植物家ノ此類ヲ記載セルハ(3)Thunberg ニシテ實ニ千七百八十四年ナリキ,然レ𪜈當時外人ノ內地ニ入リテ採集ニ不自由ナル其種類モ隨テ多カラザルハ勢ノ然ラシムル所ナリ,故ニ其著書ニ載スル品類ハ Quercus glabra, Q. acuta Q. glauca, Q. cuspidata, Q. serrata, Q. dentata（以上ノ和名ハ後ニ出ツ）ノ六種ニ過キス,後八十六年ヲ經テ Siebold ハ大ニ新種ヲ發見スル所アリシト見ヘ(4)其著書天然分科日本植物篇ニ五種ヲ載セテ Ausser dieser kommen in Japan noch mindestens 12 Arten von Eichen vor, welche später beschrieben werder sollen ト附記セルヲ以テ觀レバ當時凡ソ十七種ノ多キニ達セシナラム,然レ𪜈何書ニ十二ノ多種ヲ記載セルヤ余未之ヲ詳ニセズ,盖シ阿蘭陀ノ博物館ニ納附シテ,(5)Blume 之ヲ記載スルニ至リシカ,其著書博物館記ニ載スル所二十三種トハナリヌ,惟フニ摽品ノ不完ナルヨリシテ此ノ夥多ヲ致セルナランカ,已ニ八種ハ疑種ト題スル品類中ニ收メルヲ見テモ明カナリ,(6)Miquel ハ其後ニ出テヽスラ僅ニ十八種ヲ其著書ニ舉ゲタリ,近年ニ至リ(7)Franchet 及 Savatier ハ前二氏ノ如ク蘭國博物館所藏品ヲ撿視セズシテ唯前二氏

---

(3) Fl. Jap, p. 175—177.

(4) Sieb. et Zucc.—Florae Fam. Nat. p. 226.

(5) Bl. Mus. Bot. Ludg-Bot. Tom I p. 288—306.

(6) Miq. Adnotationes de Pupuliferis (Ann. Mus. Bot. Lugd.—Bat. I. p. 102—118.)

(7) Fr. et Sav. Enum.. pl. Jap. I. p. 445-450 et. II. p. 497—501.

ノ記事ヨリ推量考定シ自ラモ一二ノ新種ヲ加ヘテ共著書日本植物總目錄ニ二十二種ヲ掲ゲタリ，本邦素ヨリ槠種ニ富ムト雖氏ノ掲ケタル如ク多カラサルナリ，余モ亦蘭國ノ原品ヲ檢視スル者ニアラザレ𪜈文書ニ據リテ彼此ヲ比較考定スルニ於テハ F. 及 S. 氏ニ及バザルヿナカルベキナリ，况ンヤ余ハ本邦ニ產スル槲櫟柯槠ノ生ケル標品ヲ檢視スルノ便アルニ於テヲヤ.

余ノ見ル所ヲ以テスレバ F. 及 S. 氏ノ二十二種中 (Q. pinnatifida F. S. ハ(8)余嘗テ Q. dentata Th. ノ變種トシタレ𪜈尙ホ) Q. aliena ハ Q. dentata ノ一變種ナルベク，Q. canescens Bl. モ Q. urticaefolia Bl. モ均シク Q. glandulifera ノ一變形ノ物ニ外ナラザルベシ，Q. variabilis Bl. ハ Q. serrata Th. ノ一變種ナルベク，Q. laevigata Bl. ハ Q. acuta Th. ノ大ナル品ニ外ナラザルベシ Q. lacera Bl. ハ Q. glauca Th. ノ栽培變形品ナルベシ，Q. Vibrayeana F. S. ハ Q. glauca Th. ノ一形品ナルベク Q. myrsinaefolia Bl. ハ Q. salicina Bl. ト同物ナルベシ，びはばかし（一名チリメンガシQ.crispa Sieb.ナリF. 及 S. 氏ハ之ヲ知ラズ）ハ Q. phyllereoides A. Gray. ノ一變品ナルベキナリ(9)（是レ余ノ既ニ然カセル所ナリ）然ル𪜈ハ方今櫟槲柯槠ノ本邦ニ知レタル正品ハ僅ニ十二種ニ過ギザルベキナリ，サレド今ハ暫ク舊ニ依リテ存シ置キ，他日ヲ待チテ確定セムトス

各種批評

1. **Quercus dentata** *Thunb.* Fl. Jap. p. 177.—Thunb. Icones pl. jap. decas 5 t. 6.—Blume Mus. Bot. Lugd.Bat. I. p. 297.—Miq. Prol. p. 366.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 445.

か志は（ハヽソ，モチガシハ.）槲 草木圖說後篇木部八ノ十三葉一圖及四圖，本草圖譜十六ノ廿三葉裏.標品目錄 p. 179. 會津ノ產地ハ刪除ス

Foliis supra scabridis subtus stellato-tomentosis, venis 8—11 アレト𪜈常ニ然カラズ

var. Wrightii A. D. C. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 13

れはが志は（オホボウソ）草木圖說八卷十三ノ三圖，本草圖譜六十六ノ廿四葉裏(和名ハ除ク)

Lobis foliorum vix mucronulatis トアリテ正品ト相別ツ，正品ハ foliis lobis obtusis brevisi me mucronatis トアリ

---

(8)｛理科大學標品目錄
(9)｛仝上

var. pinnatifida (Fr. et Sav.) Enum. pl. jap. I p. 445 et II p. 297.

はごろもがえは草木圖說同卷十四葉ノ五圖

Fr. 及 Saw. ハ一種特別トシタレ𪜈飯沼氏ハ花戸ノ傳來ニシテ其自生地ヲ聞カズト記セリ，(草木圖說八ノ十一葉) Fr. 及 Sav. 氏モ之ニ付テ說アラザルニアラザリシナリ，曰ク Malgré son aspect très-different, il se pourrait que le Q. pinnatifida n'en fût qu'une variété due à l'artifice des japonais, trèshabiles, comme on le sait, dans l'art d'obtenir des variations horticoles.

一種ホソバガシハト稱スルアリ，櫟葉ノ如ク細長ナリ，共ニ花戸ノ傳來ナリト云フ(草木圖說八ノ十一葉)　(以下次號)

日本藥局方植物篇　(前號ノ續キ)

會員　澤田駒次郎

第四十五號正誤四〇六ノ下段第十八行三字目〔百〕ハ〔逛〕ノ誤四〇七ノ下段第三行過硫化鐵液ノ下〔八十四分〕ノ四字ヲ脫ス四〇八ノ上段第六行二十五字目〔ジ〕ハ〔逛〕ノ誤

藥品

第一　橙花　Aurantii Flores

日本藥局方ニハ Citrus 屬諸種ノ花ヲ以テ藥用ニ供ス

性質　生鮮ナル花ハ白色ヲ呈スト雖𪜈之ヲ乾燥スルトキハ黃色ニ變ズ

香氣ハ快活芳香性ニシテ生鮮ナルモノハ稍强烈ナリ

成分　主成分ハ揮發油トス

第二　橙皮　Aurantii Dulcis Cortex.

日本藥局方ニハ臭橙ノ實皮ヲ用フト雖𪜈合衆國藥局方ニハ本植物ノ實皮ヲ以テ藥用ニ供ス

性質　快活芳香性ニシテ弱キ苦味ヲ有ス

第三　橙皮油 Oleum Aurantii Corticis.

日本藥局方ニハ臭橙ノ實皮ヨリ得タルモノヲ以テ藥用ニ供スト雖𪜈佛國南部伊國墨西拿等ニ於テハ本植物等ノ實皮ヨリ揮發油ヲ製スルヿ多量ニシテ本植物ノ實皮ヨリ得タルモノハ Essence de Portugal. ト云ヒ Citrus vulgaris ノ實皮ヨリ得タルモノハ Eessence de Bigarade. ト稱シ大イニ貴重スト製藥化學ニ云蜜柑油 (Oleum Auratum dulceum) 一ニ「ポルトガル」油 (Oleum Portugal) ト稱スルモノアリ C. Aurantum ノ實皮ヨリ製出セルモノニシテ淡黃行ノ稀薄液ヲナシ蜜柑ニ類スル香氣ヲ有シ其味燒性ニシテ苦カラズ

本邦ニ於テハ之ヲ七柑油ト稱シテ販賣ス」トアリ

第四　橙花水 Aqua Aurantii Florum.

英國及ビ印度藥局方ニハ本植物及ヒ他ノ種類ノ花ヲ水ト共ニ蒸餾シテ得タルモノヲ以テ藥用ニ供ス

製造法　橙花水ヲ製スルニハ新鮮ナル花ヲ水ト共ニ蒸餾シ得タルモノニシテ揮發油ヲ混淆ス此油ハ Oil of Neroli. ト稱シ其上面ニ浮游ス然ル後油分ヲ除去ス此レ坊間ニ鬻賣スル所ノ橙花水ニシテ之ヲ Aqua Naphæ 或ハ Orange Flower water ト稱ス

本品ハ佛國南部ヨリ專ラ製出スト雖𪜈希臘等ニテモ亦製造ス但シ C. vulgaris ノ花ヨリモ亦良品ノ橙花水ヲ產出ス

性質　橙花水ハ殆ンド淡綠黃色ノ液ニシテ極メテ佳快ノ香氣ヲ有シ其味ハ苦シ

本品ハ鉛製ノ器ヲ用ヒテ蒸餾シ或ハ之ヲ貯藏スルニ金屬性ノ器物ヲ用フルニ因リ間々此等ノ金屬性不潔物ヲ混和スルヿアリ故ニ硫化水素ヲ以テ驗スルモ着色セザルヲ要ス又往々葉ヲ水ト共ニ蒸餾セシモノ或ハ他ノ柑類ノ花ヲ蒸餾セシモノ及ビ Essence de Petit Grain. ト稱スル揮發油ヲ混和スト雖𪜈香氣佳快ナラザルニ因リ之ヲ鑒別シ得ルト云フ製藥化學ニ云又歐洲市場ニ橙花水 Aqua Florum Auranut s, Naphæ. ト稱シテ販賣スルモノアリ伊國ニ於テ上記植物ノ花瓣ニ水ヲ加ヘ蒸餾シ製出シタルモノニシテ其香氣甚ダ美ニシテ其味ハ少シク苦シ花蕚

ヲ去リタル花瓣ヨリ製出シタルモノハ殊ニ美香ヲ有スト云フ藥用ニ供スルコト甚タ稀ニシテ粉粧料トメ應用ス而シテ眞正良好ノ品ハ特異ノ佳香ヲ有シ其味ハ微ニ苦クシテ粘液性ナラズ中性或ハ弱酸性ノ反應ヲ有シ金屬(殊ニ銅)ヲ含有セズ硝酸ニ逢ヘバ赤色ヲ呈ス」トアリ或云本品ハ中性ニシテ酒精ト混和スレバ鮮濃紫色ノ發石彩ヲ呈スト

成分　橙花ノ香氣ハ此揮發油ニ因ルモノトス Soubeiran 氏ノ説ニ據レバ此揮發油類蒸餾ノ際生出スト又此揮發油ヲ蒸餾スレバ極メテ小量ノ樟腦ヲ製出ス之ヲ Neroli camphor ト云フ此レ「ベルガモット」油及ビ橙科植物ノ葉又ハ實皮ヨリ製造シタル揮發油類所謂 Essence de petit Grain 中ニハ含有セスト云フ

製劑ハ之ヲ略ス

醫治効用　橙花水ハ芳香性矯味藥トシ應用ス橙皮モ亦矯味藥トナシ强壯劑又ハ下劑ニ伍用シテ香氣ヲ附與ス

實皮ヨリ得タル揮發油ハ薫物トシ用フ又葉及ヒ嫩芽ヨリ得タル揮發油ハ Essence de Petit Grain 或ハ Oil of Orange leaf ト云フ又未熟ノトキ地ニ墜落シタル果實ハ之ヲ蒐集シテ乾燥ス此レ所謂 Orange berries ニシテ濃緑褐色ヲ呈シ櫻桃大ニシテ佳快ノ香氣ヲ有ス故ニ飲料等ニ混和シテ香氣ヲ附與ス成熟シタル果實ハ食果トシ其液汁ハ清涼劑トシ炎症ノ患者ニ用ヒテ渴ヲ止メ熱ヲ疏解ス

本果ハ「アゾレス」,西班牙,葡萄牙,伊太利,加拿列群島馬里群島等ヨリ產出ス之ヲ輸出スルニハ一顆ヅヽ紙ニテ包ミ籠又ハ箱ニ納メテ運搬スト

十五　クワシイア

羅甸名　Qrassia amara, Linn.

黄楝樹科

西印度等ニ自生スル喬木ニシテ葉ハ奇性翼狀ヲ爲シ互生ス小葉ハ長倒卵形ニシテ鋭尖ヲ有シ表面濃緑總管ハ赤色ヲ是ス葉柄椎ハ其色淡赤兩側ニ狹隘ナル翼ヲ有ス花ハ穗狀ニシテ枝杪ノ末端ニ生ズ蕚五出其截片卵圓形ニシテ外面毛茸ヲ帶フ花瓣五片卵圓形ニシテ其先頂延長シテ開展セズ十雄蘂花狀ニシテ其下部軟毛

ヲ帶ビ葯ハ楕圓ニシテ黄色ヲ呈シ花時縦線ニ因テ分綻シ花粉ヲ吐出ス五雌蘂實礎ハ卵圓形ニシテ一室ヲ有シ一個ノ卵子ヲ有シ花柱ハ互ニ附着シテ一體ト爲リ柱頭僅ニ膨脹ス種子ハ長圓形ニシテ外面網脉ヲ有ス

本植物ハ西印度「アンチルレン」諸島南米北部諸地ニ產ス而シテ之ヲ輸出スルハ南米「グイアナ」ヨリス

薬品　スリナム產括矢亞　Lignum Quassiæ Surinamensis.

日本藥局方ニハ本植物及ヒ Picraema exalsa. ノ幹木及ビ枝木ヲ以テ藥用ニ供ス

性質　生藥學ニ云「スリナム」產括矢亞ニハ幹木及枝木ノ二種アリ共ニ剝離シ易キ皮部ヲ帶ベリ此括失亞ハ小木ニシテ幹木ト雖𪜈通常ハ其直徑一「デチメートル」ニ過キズ枝木ハ往々肉叉狀ニ分岐シ直徑三「センチメートル」ヲ超ヘズ皮部ハ堅脆ニシテ厚サ二「ミリメートル」ニ至リ其外而ノ色澤ハ甚ダ不同ニシテ類黄色褐色又ハ灰色ナルアリ內部ノ組織ハ暗色ヲ帶ブ內面ハ其色鮮淡ニシテ多クハ帶藍黑色ノ斑紋ヲ具フ而シテ皮部ハ其薄キ內皮層ニ於テノミ纖維狀ニ破折ス白色ナル木部ハ輕クシテ斷割シ易ク坊間ノ品ハ多クハ削屑トナシ或ハ剉切シテ小片トナセリ横斷面ニハ脉管其間ニ攙入セル狹キ組織層ニ因テ隔離セラレ略ボ同心性ニ排列セル圏輪ヲナス而シテ此脈管圏輪ハ其色澤ニ於テハ周邊ノ組織ト大差ナシ髓線ハ甚ダ狹小ニシテ之ヲ廓大スルニ非レバ看視シ難シ木部ニモ亦彼ノ帶藍黑色ノ斑紋ヲ見ル是レ發育ノ休止セル菌絲細胞ノ寄生スルニ由ル本部ノ實質ハ主トシテ皮壁ノ厚キ木纖維ヨリ成リ髓線ハ通常一列稀ニハ(二列)ヨリ成ル」トアリ

本品ハ久シク留存スル純苦味ヲ有ス

成分　括矢亞ノ主成分ハ純苦味質ニシテ之ヲ Quassiin. ($C_{31}H_{42}O_9$) ト云フ

本品ハ薄キ矩形板乃至細小稜柱形若クハ絹鍼狀ノ結晶ニシテ味ヒ極メテ苦ク温酒精,哥羅仿謨ニハ容易ク溶解シ依的兒,偏陣ニハ僅カニ溶解シ冷水ニハ徐々ニ溶解ス又酸類鹽類及ビ亞爾加魯乙度ハ水ニ溶解スル性質ヲ增加スト

本品ハ温稀硫酸ニ因テ樹脂及ビ一種ノ抱合物ヲ生ズ此抱合物ハ $C_{31}H_{38}O_9$. ヨリ

成リ硝酸銀ヲ還元シ單寧ニ因テ沈渣ヲ生セスト云フ

括矢亞ハ單寧及ビ收斂性物質ヲ有セズ

贋造及代用品　他樹ノ木片ヲ以テ贋造シ或ハ代用スト雖𪜈眞正ノ括矢亞ハ特異峻烈ノ純苦味ヲ有スルニ因リ之ヲ鑒別ス又他樹ノ浸劑ハ過酸化鐵鹽類ニ因テ黑色若クハ黑藍色ヲ呈スト雖𪜈括矢亞ノ劑浸ハ此反應ヲ呈スルヿ無シ又一千八百七十二年ニ於テ日耳曼藥局方ニハ他ノ括矢亞ヲ用ヒテ禁シタリト

製劑　括矢亞丁幾去兒　Tinctura Quassiæ.

括矢亞丁幾去兒ハ

細剉セル括矢亞	一分
稀酒精	五分

ヲ取リ五日間冷浸シ壓搾シ濾過シ製スベシ

本品ハ澄明淡褐黃色ノ液ナリ　（日本藥局方）（以下次號）

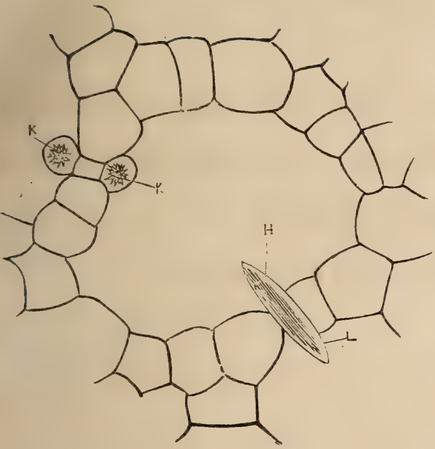
植物解剖學獨案內

第四（前號ノ續キ）

池野成一郎

第四　結晶体（Crystal. Krystall）植物ノ細胞內ニ存在スル結晶体ハ其ノ形種々樣々ニシテ一々之ヲ玆ニ記スル能ハズト雖モ今左ニ其ノ主ナル者テ記スベシ

さといもノ葉柄ノ橫切リヲ造リ之ヲ顯微鏡下ニ撿スルニ大ナル細胞間空隙ノ存スルヲ見ル此ノ空隙ハ甚大ナルガ故ニ肉眼ニテモ認ムルヿヲ得ベシ即いもノ葉柄ヲ折リテ其ノ折リ目ヲ見ルニツノ組織タル決シテかしノ木ヤきりノ木ノ如ケ密ナラズシテ甚空多キ踈ナル組織ナルヿヲ見ルベシ此ノ空ハ即細胞間ノ空隙ナリ斯クノ如ク肉眼ニテスラ其ノ存在ヲ知リ得ベキ程ノ空隙ナレバ顯微鏡ニ之ヲ撿スレバ非常ニ著シクシテ之ヲ見遁スヿハ到底出來ヌ程ノモノナリコノ空隙ノ中ヘ兩高レンス形ノ細胞突出ス（第十一圖1）此細胞ノ內ニハ針ノ如キ体束ヲ



ナシテ存在スルヿヲ見ルベシ(全圖h)コレ一種ノ結晶体ニシテソノ形狀針ノ如クナルヲ以テ之ヲ針結晶体(Raphides. Raphiden.)トイフ此ノ結晶体ハ化學上蓚酸石灰ヨリ成ル針結晶体ヲ含メル細胞ハ啻ニ細胞問ノ空隙ノミナラズ此ノ横切リノ諸方ニ澤山ニ有スルガ故ニ能ク探スベシ他ニモ澤山アルヿヲ認ムルナラン又此ノ切リ口ノ諸方ニ此ノ結晶体ノ束ガ散布シヰルヲ見ルコレハ切リ口ヲ造ルニ當リ小刀ノ爲メニ損ゼラレ細胞外ニ出デタルモノナリ

此ノ切リ口ノ或ル部分ニ於テハ全圖ノKニ記シタルガ如キ結晶体ヲ見ル其ノ形恰モ金米糖ノ粒ノ如ク全体ハ圓クシテ數多ノ角ヲ有ス此ノ結晶体ハ一個ヅヽ一個ノ圓形ノ細胞ノ内ニアリ其ノ化學的性質ハ同ジク蓚酸石灰ナリトス

菩多尼訶經ノ一書榕庵宇田川翁ノ著ニシテ文政五年ノ出版ニ係ル實ニ今ヲ距ル六十九年ナリ而シテ此書世ニ流布スルモ稀ナリ謄寫以テ貴會ニ寄ス又先哲遺書ノ湮滅セザランヲ思フテナリ　岡田信利

菩多尼訶經

江戸　宇田川榕庵榕譯

如是我聞、西方世界、有孔刺需斯（コンラジユ゜ス）、健斯涅律私（ゲンス子リンス）、木里索肉私（モリソニユス）、刺愈斯多兒涅福爾篤（ラユストールネホルト）、歇兒滿（ヘルマン）、葛蘇法兒拔烏非奴私（カスハルバウヒニユス）、馬兒呃及斯（マルビギウス）、花列斯（ハーレス）、律兌弗（リユドイフ）、大學師蒲爾花歇（ブールハヘ）、大學師林娜私（リンナウス）、等、諸大聖、累代出世、各於其國、發大願力、建大道場、設大法會、出大音聲、出眞實言、說無有上、微妙甚深、最勝眞理、敎化諸弟子

爾時大聖、告諸大弟子言、四大洲中、百千萬億、一切衆生、差別二種、人馬獅狗、雞鳳燕雀、鯨蛇蝎龍、蠅蜂龜蟹、性情智能、圓滿具足、靡不步行自在、名曰動物、性情

智能、圓滿具足、有雄有雌、有一體兼男女、有六親眷屬、有壽量、有色相、不能步行、名曰植物、然此二種、本來一理

我說如是、最勝眞理、若汝等不信受、我略說之、亞墨利加洲、有草、號密莫沙（ミモサ）、若有物觸、葉縮而萎、汝等若爲異域遠物、猶作疑惑之念、使汝等現得是眞理、開窓試見、庭前答末林度（タマリンド）樹、其葉晝則伸、夜則眠、有情如是、抽幹高聳、敷地作蔓、樹上寄生、陸上產者、水中生者、其性種々如是、春則勾萌、夏則成長、秋則凋萎、冬則零落、乃至開花結實、有智如是、爲人畜食餌、爲濟生醫藥、爲救荒貯蓄、有能如是、有開心蘂花者、有開鬚蘂花者、有開心鬚兩全花者、有雄有雌、有一體兼男女如是、有類芹者、有像葱者、有似葵者、有六親眷屬如是、有今冬發生、明夏枯者、有春月發生、冬月枯者、有三年而枯者、有十二十、乃至五六百年而枯者、有壽量如是、有全苗赤色者、有脉絡紅色者、有綠色黃色者、花實亦復種々色、有色相如是、一托生處、歷兆億年、不能遷居、不能步行如是、汝等信心隨喜、若不違我、我諦宣說

一切植物、食氣、食水、食火、食土、而化成凝流二體、與動物無差異、根、幹、椏葉、花實、六部、是爲凝體、根幹液、葉液、花液、實種子液、皮液、膜液、六種是爲流體

凝體六部、各箇不一、根有五品、幹有七品、枝有八名、椏有七種、葉有三大別、細分別之、則有二百餘形、花有二十四經、細分別之、則有一百一十餘緯、實有三等、細分別之、則有一十餘品、流體六種、色質香味、各箇不一、亦復如是

我先演說流體、根幹液、乳糜也、葉液、血也、花液、陰器之液也、實種子液、造化成功之液也、皮液養液也、膜液、脂肪也、葉有三種、花液、有三種、皮液、有八種、如是諸液、循環輪轉、終則老廢、自蒸發孔、漏洩而去、以何所爲、如是循環、皆賴大陽溫暖和煦之氣、一紀一歲、一月一日一時、一密徂多（ミニュート）一世紺度（セコンド）之溫氣、悉皆關係

諦聽諦聽、我爲汝等、再說一切凝體、無量無數一切植物、本來一條纖維、錯綜、織成一片薄膜、二品脉管、是膜是管、造作全身、膜卽表被、包絡圍繞、全身衆器、具足恒河沙數、玄孔皺紋、二品脉管一名液管、綜攝動靜二脉、水脉、及乳糜脉而言、二名氣管、通大空氣、扶持諸液循環、是此氣管、諸他衆生、本來不具足、根皮有噏收管孔、有蒸發孔、葉有神、有至微腺、有蒸發孔、輭細毛茸、皆無量無數、至微至細、管孔、口

也、根、胃也、幹莖、腸也、葉、肺也、花、陰處也、粉、男精也笄、輸精管也、葯、精囊也、花柱膣也、柱頭、陰門也、礎、卵巢也、子宮也、胚胎也、花心、胞衣也、種子、卵也、一切種子、圓者扁、長者短者、像腎形者、類蛇頭者、俱有細眼、卽是臍也、若破未成子室、室中種子、皆有細笄、固牢維繫、笄卽臍帶

種子落地、則復甲拆、甲拆下根、根又抽莖、莖又生葉、發露花實、實復藏種子、色香性味、分毫不易、猶如動物生蕃息、生理循環、無有毫髮、止息間斷、汝等信受奉行我所說、於四大洲中、百千萬億、一切植物、得於智眼、大聖說是菩多尼訶微妙經典已、大弟子等、頂載聖足、歡喜踊躍、合掌環繞作禮而去

植物ノ防禦機關ヲ論ス

（第三十六號ノ續キ）

堀正太郎

或植物ニアリテハ酒精中ニ浸漬スルモ樹膠ハ能ク之ヲ除去シ能ハサルナリ此種ノ植物ハ蝸牛能ク之ヲ食スル能ハス菩提樹(Linden)蜀葵(Althea)仙人掌(Cactus)幷ニ樹膠ヲ含蓄スル處ノ根皆其害ヲ受クルヿナシ又植物ニシテ此等樹膠,單寧(タンニン),又ハ嫌惡ス可キ臭氣又ハ毒味ヲ有セサルモノニアリテハ結晶針(ラフイデス)ノ組織中ニ存在セルチ以テヨリ動物ノ害ヲ防禦シ得可シ此種ノ植物ハ天南星(Arum)水仙(Narcissus) Leucojum（石蒜ノ一種）鳳仙花(Balsam, touch-me-not)等是レナリ千五百八十七年ターベルチーモンタナス氏(Tabernæmontanus)實驗上ヨリシテ此種ノ植物ノ葉ハ之ヲ食セハ燃ユル如キ感覺チ來シ食道チ刺擊スルヿ甚タシ是レ其溶解セル物質即チ液汁ノ作用ニ基クニアラスシテ即チ組織中ニ存在セル處ノ結晶針ノ働ナルヿ察知セリ此ノ如キ事實ハ今若シ此種ノ植物葉ヲ取リ壓搾濾過シテ得タル處ノ汁液ヲ味フモ差少ノ感覺ナシト雖𪜈其殘留セル物質幷ニ壓搾碎破セル生葉ヲ嚙マハ一種云フ可カラサル奇妙ノ感ヲ覺ユ可シ今 Arum maculatum チ取リ稀薄ナル鹽酸液中ニ浸セハ組織中ノ結晶針(ラフイデス)ハ盡ク溶解シ去ルカ故ニ動物ハ容易ク之ヲ食スルト雖𪜈其初メ酒精ニ浸漬シ糖液チ以テ甘味ヲ加ヘテ與フルモ彼

決シテ口ヲ開カス綿棗兒（ツルボ）(Squill)ノ外面ノ鱗片ハ蝸牛嫌厭シテ食セスト雖𪜈反テ其內部ハ好ンテ之ヲ食ス是レ外部ノ鱗片ハ夥多ノ結晶針ヲ含蓄スルモ內部ハ其然ラサルヲ以テナリ水仙, 蘭或ハ其他ノ植物ニアリテモ同一ノ例證甚タ多シ斯ノ如ク植物ハ結晶針ノ存在ニヨリテ以テ大ニ動物ノ害惡ヲ防碍シ得ルト雖𪜈動物全体ニ有功ナリト云フ可カラス鳥或ハ反芻（ルミナンツ）動物ハ全ク嫌惡セサルモノヽ如シ而ソ蝸牛モ亦種類ニヨリテ其嫌ノ度ヲ異ニス鳶尾(Iris)ノ一種ニアリテハ結晶針ノ代用タルヘキ「ヲギザリック」酸ノ結晶組織中ニアリテ以テ防禦的機關ヲナス以上陳述セル處ノ防禦機關ハ蝸牛ノ害ヲ防ク爲メヨリモ寧ロ他ノ動物ノ害ヲ防碍スルニ供スルモノタルヘシト雖𪜈此點ニ於テハ未タ研究ノ能ク及ハサル處ナリ

「スタール」氏研究ノ植物防禦的機關ハ或植物ハ只其一ヲ有シ多ノ植物ハ二種或ハ三種ヲ具有スルヲ見ル即チ酢醬草(Oxalis)ハ「ヲギザリック」酸, 單寧, 毛ヲ有シ谷蓼(Circaea)ハ苦味アル液ヲ分泌スル毛, 單寧, 及ヒ結晶針ヲ備ヘ菝葜（サルトイバラ）(Smilax)ハ棘, 結晶針, 及ヒ毒物ヲ有シ龍舌蘭(Aloe)ハ葉齒, 結晶針, 幷ニ苦味物ヲ有シ Pantederia ハ蓚酸石炭ノ結晶物結晶針及ヒ單寧ヲ有スルナリ此ノ如ク植物ハ自身ノ生存上外敵ニ對シテ備フル處ノ防禦機關ハ吾人カ表想ノ外尚其數夥多ナル可ク又吾人カ見テ以テ必用ト信スルヨリモ尚ホ一層ノ必需ナルモノタルヤ知ル可カラス

「エム, スタール」氏ノ研究ノ結果ヲ通看セハ同科ノ植物ハ防禦ノ方法同一ニシテ禾本, 莎草, 木賊ハ硅酸ヲ以テ其表皮ヲ堅硬ニス粗葉ヲ有スル植物ハ毛刺ヲ備ヘ石蒜科天門冬科蘭科柳葉菜科ノ植物ハ結晶針ヲ有シ龍膽 (Gentian) ハ苦味ヲ備ヘ薔薇科, 風露草科, 荳科, 石南科, ノ植物ハ單寧ヲ茄科ハ「アルカロイド」ヲ唇形科ハ揮發油ヲこけ(Mosses)ハ機械的ノぜにごけ (Liverwort) ハ化學的ノ防禦法ヲ備フ

同科ノ植物ニアリテ其屬ヲ異ニスルニ從ヘ其防禦ノ方法又從テ異レリ百合科ニアリテ海葱(Scilla)屬 Ornithogallus 屬ハ結晶針ヲ有シ他屬ハ一種臭氣アル扣質ヲ

有シ,百合,鬱金香,貝母 (Crown imperial) ハ毒物ヲ有ス又同屬中ニアリテモ其種ヲ異ニスル從ヘ防禦機又差異アリ景天屬 (Sedum) 中ノ一種ハ單寧ヲ有シ他ノ一種ハ「アルカロイド」ヲ有ス然シテ同種ノ植物ト雖モ其局部ニ依リテ葉,果實,及ヒ根部ハ又特異ノ防禦法ヲ備フルナリ

「エム,スタール」氏ハ野生ノ顯花植物ハ一トシテ蛞蝓又ハ蝸牛ニ對スル防禦機關ヲ具有セサルモノナキヲ自認セリ然レ𪜈栽培植物ニアリテハ全ク此機關ヲ欠乏ス是レ人間ノ其初メ野生ノ植物ヲ取リ是カ培養ニ注意シ虫害ヲ防禦スルカ故ニ遂ニ栽培植物ハ其元來固有ノ防禦機ノ必用ナキニ至レルモノナリ彼ノ通常食用ニ供スル萵苣 (Lettuce) ハ最モ適切ノ好例ト云フ可シ菜園ニ培養スル處ノ萵苣ハ其葉平滑柔軟,多汁ニシテ一ノ機械的並ニ化學的ノ防禦機關ノアルナシ實ニ蝸牛ノ良好ナル美食ニシテ人爲ニ之カ害ヲ防クニアラサレハ焉ンソ此ノ善良ナル野菜ヲシテ食膳ニ供スルヿヲ得ンヤ野生ノ Lactuca scariola ハ實ニ萵苣ノ祖先ニシテ此植物ハ一種ノ化學的ノ毒物ヲ有シ酒精ニ浸漬スルモ尚ホ其成分ヲ除去シ能ハス總テ蝸牛ハ之ヲ食スルヿナシ今日吾人カ食スル處ノ萵苣ハ此植物ノ培養ニヨリテ變遷セルモノニシテ動物ノ防禦ハ全ク人爲トナリ植物自身ハ全ク之ヲ失フニ至レリ

防禦的ノ機關ハ通常植物ノ外面ニ存シ外敵ノ來ル点ニ於テ最モ然リトナス機械的ノ機關ハ特ニ然リ而ソ化學的ノ機關即チ單寧並ニ特別ノ液汁モ亦然リトス斯ノ如ク植物全体カ種々數多ノ防禦機關ヲ有スルト雖モ一タヒ此等機關ヲシテナカリシメハ其生存ヲ保續スル能ハサルヿ照々タリ是ヲ以テ見レハ是レ一種ノ相互適應タル疑フヘカラサル事實ニシテ决シテ之ヲ一時ノ出來事ニ期スヘカラサルナリ是レ自然撰擇ノ一ニシテ動物モ亦植物ト同シク一種ノ防禦機關ヲ有シ其方法千差萬別盡ク生存ノ目的ヲ達セシヿニ汲々タリ「エムスタール」氏ノ研究ハ其發見ノ區域甚タ小ナリト雖モ亦以テ自然撰擇史上ニ特筆ス可キモノナリト信ス

（完結）

博物學ノ研究ヲ諸君ニ勸ム

理學士　三好學

予先年,夏期,飛驒,美濃地方へ趣キタルトキ,本會々員,岩村學校訓導森貞次郎氏,仝,下村學校訓導飯野盛篤氏等,近校ノ教員諸氏ヲ會シ,岩村學校ニ於テ,予ニ一席ノ演說ヲ乞ハレタリ,本篇ハ即チ其際,講說シタルモノヲ,稍〻校竄シタルナリ,

今諸君ト此講堂ノ外ニ立テ眺望スレバ,西方ニハ武並,田代ノ山々アリ,東方ニハ城山,水晶山,三ツ森ノ諸嶺アリ,其間ニハ丘陵,田圃,起伏黠綴シ,何ヅレモ一樣ニ翠色ヲ呈スルヲ見ル,實ニ茂樹,鬱林ノ勝,綠陰幽草ノ趣,吾人ノ心情ヲ快ナラシムルニ餘アリ,加之ナラズ木々ニ鳴ク蟬アリ,草花ニ戯ルヽ蝶アリ,蜜ヲ求メテ飛ブ蜂,晴ヲ喜デ舞フ蜻蛉,清流ニハ魚介ノ奇アリ,山林ニハ禽鳥ノ異アリ,又種々ノ金石,古代ノ化石等,何ヅレモ此邊ヨリ產出セザルハナシ,盖シ動,植,鑛,三界ノ奇ニ富ム處ナリ,

吾人ハ現ニ此三界ニ住ムモノナリ,此三界ヨリシテ食物ヲ資リ,衣服ヲ爲クリ,家屋ヲ造リ,器具ヲ製シ,藥餌ヲ取リ,其他,日用百般ノ需用一トシテ之ニ仰ガザルハナシ,若シ之ガ供給ナクンバ吾人ハ一日モ生活シ得ザルナリ,此ノ如ク動,植,鑛ノ三界ハ吾人ニ大必用ノモノタルハ論ナク,亦此三界ニ就テ吾人ノ今日知リ得タル說理,事實,即チ博物學ノ智識ハ亦極メテ肝要ノモノナリ,尤モ予ハ玆ニ單ニ博物學ト稱シタレドモ,其實ハ此等ノ研究ハ一々,動物學,植物學,鑛物學,地質學及ビ此等ノ學科ノ諸分派ニ屬スルモノニシテ,復タ彼ノ舊時ニ於ケルガ如ク漠然之ヲ博物學トシテ講究スベキニアラズ,然レ𪜈予ハ今以上ノ三界全体ノ事ニ就テ述ベントト欲スルガ故ニ,姑ク便宜上ヨリシテ此呼稱ヲ用フルヿトセリ,

抑モ何學科ト雖モ,今日ノ發達隆盛ナル狀況ニ達シタルハ固ヨリ一旦偶然ノ出來事ニハアラズ,數十百年ノ間,數多ノ學者ガ各〻該學科ノ一分派ヲ精密ニ專攻研究シタル結果ノ集合ニ他ナラズ,博物學全体ニ於テモ亦然リ,サレバ吾人ハ今日此學ノ全況ヲ見テ其隆盛進步ヲ感讃スルト共ニ,亦此學ガ古代ヨリ今日ニ至レルノ履歷即チ進步ノ順序ヲ知ラザルベカラズ,故ニ今是ヨリ其進步史ノ概略

ヲ述ベ,然ル後,此學研究ノ利益ト快樂トヲ諸君ニ語ラント欲ス,

古代ニ於テノ博物ニ關スル思想ハ殆ンド小說的或ハ寧ロ昔噺風ニシテ,毫モ學問トシテ之ヲ論ズベキモノニアラズ,中古以後稍ク人智ノ開發スルニ從ヒ,隨テ宇宙間ノ萬物ヲ觀察スルニ至リ,動,植,鑛物ノ奇異ナルモノヲ採蒐シテ珍藏スルノ風ヲ生ジ,亦之ガ爲メニ遠隔セル地方ヘ旅行ヲ企テ奇品ノ探索ヲ力メタリ,是レ即チ西曆十六世紀(千五百年代)ノ頃ニシテ所謂ユル採集家,旅行家ノ時代ナリ,此頃已ニ歐洲ニ於テ大學ノ設置アリテ,動植物學研究ノ途ヲ啓キ,次テ又英國ニテハ學士會院（ローヤルソサエチー）ノ創立アリ(千六百六十二年),數年ノ後,佛國ニテモ理科大學ノ建設アリ,此等ノ學會及ビ大學ハ現今マデ皆ナ永續セルモノニシテ,當時(十七世紀)ニアリテノ影響ハ,之ガ爲メニ各地ニ孤立シテ研究セル博物學者ヲ一所ニ集合シ,互ニ其知見ヲ交通シ,以テ學問上ノ一團体ヲ作リタルニアリ,斯クシテ又一方ニ於テハ,採集家及ビ分類家ノ學派ハ漸々進步シ十八世紀ノ「リンネウス」氏ニ至テ殆ンド其頂點ニ達シタリシガ,又他方ニテハ解剖學,比較解剖學ノ學派行ハレ,次第ニ進步ヲナセリ,蓋シ解剖學モ其始メハ唯人体解剖學尤モ盛ニ行ハレシガ,次テ人類ニ最近ノ動物及ビ徐々ニ他ノ動物ヘモ研究ヲ及ボシ,遂ニハ下等ノ種類マデモ相比較シ,現今ノ比較解剖學ノ基礎ヲナスニ至レリ,又當初ニアリテハ解剖ハ唯肉眼的ノミナリシガ,漸々最少ノ部分ヲモ窺ハントシ,隨テ之ヲ廓大スル爲メニ顯微鏡ヲ發明スルヿトナレリ,初メテ顯微鏡ヲ學術上ニ應用シタルハ「ボレリー」氏ニシテ,千六百年ノ初ニアリ,其後,種々ノ學者輩出シテ自ラ之ヲ製造シ,初メハ單鏡ノミナリシモ,遂ニハ複鏡ヲ發明シタリ,千六百二十八年ニ「ウ井リアム,ハーヴェー」氏ハ血液ノ循環ヲ發見シ,千六百六十七年ニ「ロバート,フック」氏ハ始メテ細胞（セル）ヲ發見シ,其他,「マルピギ」,「スワンメルダム」,「リーヴェンヘーク」ノ諸氏ノ如キ,皆ナ顯微鏡ニヨリテ博物學上ノ發見アリキ,然レドモ當時其製造法ノ粗ナルハ固ヨリ言ヲ待タズ,唯現世紀即千八百年代トナリテ始メテ完全ナルニ至レリ,

此十九世紀ハ實ニ博物學ガ頓ニ進步シタルノ時期ト云ハザルヲ得ズ,先ヅ此世

紀ノ初メニ當リテ學術世界ヲ一新シタルハ「テオドル, シュヴハン」氏(千八百十年ニ生レ千八百八十二年ニ沒ス)ノ細胞論ナリ, 氏ハ動物ノ組織ヲ顯微鏡下ニ檢察シテ, 細胞ノ性質, 狀態ヲ明ニシ, 其結果ヲ公ニセリ, 是レ獨リ解剖學上ニ直接ノ利益ヲ與ヘシノミナラズ, 又生物學ノ全觀ニ於テ大ナル進步ヲ爲サシメタリ, 又一方ニテハ有名ナル「カント」,「ラプラス」兩氏ノ霞雲星說（ネビユラハイポセシス）アリ, 蓋シ我ガ大陽系統ハ其原始ハ白熱セル一團ノ霞雲ノ如キ瓦斯体ナリシガ, 後, 分裂シテ幾個ノ團塊トナリ,次第ニ熱ヲ失ヒ,凝リ固マリテ流動体トナリ, 更ニ凝結シテ始メテ固形体トナリ, 吾人ガ現住スル所ノ地球ヲ始メトシテ,諸ノ惑星ヲ爲シ,又其原体ノ大ナル部分ハ吾ガ大陽トナリテ留存スルモノナリト云フニアリ, 是レ固ヨリ一ノ想像說ニハ過ギザレドモ, 全ク架空ノ考ニアラズ,天文學上知リ得ル所ニヨレバ, 現ニ望遠鏡ヲ以テ窺ヒ得ベキ種々ノ星体ノ中ニモ, 種々ノ狀態ニアルモノアリテ或ハ全ク霞雲（ネビユラ）ノ狀ヲナシ, 或ハ多少凝結シタルモ倘ホ未ダ固形体トナラザルアリ, 或ハ已ニ全ク固硬トナルモアリ, 或ハ此狀態スラ已ニ經過シテ, 表面ニハ水分ナク乾枯凍結シ, 恰カモ死期ニ瀕シタルガ如キ星体アリ, 畢竟種々ノ星体ノ中ニハ種々ノ時期ヲ表ハスモノアレバ, 吾ガ地球モ其原始ヨリシテ今日ニ至ルマデニハ此等ノ時期ノ幾分カヲ已ニ經過シ來リタルト信ズルモ, 左マデ妄想ナラザルナリ,此ノ如クシテ「カント」,「ラプラス」兩氏ノ霞雲星說ハ天体(地球モ其一部ナリ)ノ原始ヲ想考シタリシガ, 此說ノ後段即チ地球創成後ヨリシテ幾萬億劫ノ永年月ヲ經テ今日ニ至ルマデノ地皮沿革史ヲ究明シタルハ,「チヤールス, ライエル」氏ノ大功ト云フベシ, 氏ガ地學原論（プリンシプルス オフ ゼオロジー）(二卷)ヲ著ハセシハ千八百三十年ノ一月ニシテ, 地質學ノ原理ヲ始メテ世ニ知ラシメシ以來學術上一般殊ニ博物學上ニ大影響ヲ惹キ起シ, 後年「ダーウヰン」氏ノ所謂ユル進化說ノ原基ヲ作リタリ, (此地學原論ハ近年迄ニ十二版ヲ出スニ至レリ, 氏ノ著ニハ倘ホ地學要義, 人類學等ノ書アリテ, 何ヅレモ世ニ流布シ, 當時ノ學者ヲ導キタリ)又「キユービエ」,「アガシ」ノ兩氏ハ力ヲ古代ノ動植物學ニ用ヒ, 太古ノ地層ヨリ中古,近古ヲ經テ今日ニ至ルマデノ各地層ノ化石ヲ研究シテ, 古昔地上ニ生存シタル生物上

ノ智識ヲ得,以テ今日ノ古生物學ノ基礎ヲ作リタリ,今,上述ノ地皮構成論及ビ古生物論ニ據レバ,地球創成ノ原始ハ猶ホ赤熱流動ノ狀態ニアリシガ,漸々熱氣ノ去ルニ從ヒ,表面ノ部分ハ凝固シテ所謂ユル地皮ヲ形成シ,內部ノミ熱ヲ保ツニ至レリ,斯クシテ成レル地皮ハ初メハ一樣平面ノ泥ノ海ナリシモ徐々ニ地面ニ凹凸ヲ生ジテ,隨テ海陸湖沼ノ區別モ出來,又此中ニハ種々ノ生物ガ蕃生スルヿトナレリ,爾後地熱ノ作用ニヨリテ火山ヲ噴出シ,又地皮局部ノ隆起,陷落ニヨリテ高低ノ差別愈々判然トナリ,又地球ノ容積ノ徐々ニ收縮スルガ爲メニ地面ニ皺ヲ生ジ,山脉トナリ,溪澗トナリ,大陸ヲ成シ,大洋ヲ爲シタリ,斯クシテ星霜ヲ經ルニ從ヒ,地文學上ノ狀態ハ愈々益々著ルシキニ至レリ,之ト同樣ニ生活物ニ於テモ太古紀ニ現出シタル種類ハ中古紀ニ至テハ殆ド全ク其類ヲ絕チテ,新シキ種類ノ爲メニ繼續セラレ,而ノ中古紀ニ出デタルモノモ,亦近古紀ニ至テハ大抵絕滅シテ更ニ新シキ種屬ニ交代セラレタリ,此ノ如ク生物出現ノ順序ヲ各地層ノ化石ニヨリテ探尋スルニ,最初ニ出デタルモノハ最モ構造ノ簡單ナルモノ即チ下等ノ種類多クシテ,後代ニ至ルホド構造ノ複雜ヲ見ルニ至ル,且ツ又此等ノ各時代ノ生物ト生物トハ全ク別種類ノモノナラズシテ,其間ニ多少ノ親緣系統アルヲ見ルベク,畢竟時代ノ變遷ト共ニ地球上ノ狀態(氣候,及ビ地勢等)ニ變換ヲ生ジタレバ,生物モ之ニ隨テ進化シタルモノナラントノ考說ニ歸スルナリ,

斯ノ如ク地質學上ヨリシテ知リ得タル事實ハ,博物學ノ進步ニ關シテ已ニ大基礎ヲ爲シタレドモ,尙ホ之ヲシテ現今ノ狀態ニ至ラシメタルハ,更ニ希世ノ大學者ヲ待テ始メテ能ク爲シ遂グルヲ得タリ,是レ何人モ知ル所ノ「チヤールス,ダーウ井ン」氏其人ナリ,蓋シ氏ノ前,已ニ進化說ノ緒端ヲ啓キタル學者ナキニアラス,十八世紀ノ末ニ英國ニハ「エラスマス.ダーウ井ン」（「チヤールス.ダーウ井ン」氏ノ祖父）氏佛國ニハ「ラマルク」,「ジョフロア.サンチレール」獨逸ニテハ「オーケン」.「ゲーテ」.「トレヴヒラヌス」ノ諸家何ヅレモ多少此點ニ就キテ論述シ,生物ハ皆ナ自然ノ法則ニ從フモノナリトノ說ヲ唱ヘタリシガ,世人未ダ信憑セズシテ氏等ヲ目スルニ理學者（ナツール フヒロソーフエン）ノ名ヲ以テシ,徒ニ一種ノ奇說視スルニ過ギザリシ,是レ一ハ時勢

ノ未ダ早キニ依リ,一ハ氏等ガ立論ノ粗ニシテ證憑ノ乏シキニヨレリ,然ルニ此世紀トナリテ學術研究ノ途頗ル開ケ,一般ノ人智モ漸ク進ムニ際シ,「チヤールス.ダーウヰン」氏（千八百八年ニ生レ千八百八十八年ニ沒ス）ハ當時父祖傳來ノ生物學ヲ熱心研究シテアリシガ恰カモヨシ英國政府ヨリ王艦「ビーグル」號ヲ以テ南洋測量ノ爲メ航海セシムルノ擧アルニ會シ,船中一人ノ博物學者ヲ要スルニヨリ,氏ハ即チ其募ニ應シ乘船シ,千八百三十一年十二月廿七日ニ英國ヲ發シ,世界ヲ一周シテ千八百三十六年十月二十二日ニ歸國セリ,此航海中,南亞米利加,南洋群島,到ルトコロノ地質,地理,氣候,動植物,及ビ人種,風俗等ニ關スル觀察ヲナシ,無數ノ材料,夥多シキ事實ヲ得テ歸レリ,氏ノ航海日記ハ當時已ニ公ニシタリシガ後,更ニ改訂シテ出板セリ,（昨年ニ至リ更ニ圖畫ヲ加ヘ表題ヲ改メ新版トナセリ）氏ハ爾來,航海中觀察シタル地質學或ハ動植物學ニ關シテ時々著述ヲナシタレドモ,尙ホ氏ガ後年大名ヲ博シタル進化說ハ當時未ダ世ニ出ダサズ,孜々トシテ種々ノ實驗ヲ力メ居タリ,而シテ航海歸國後二十三年ノ久キヲ經テ,即チ千八百五十九年ニ至リ始メテ彼ノ種原論（オリジン オフ スペシース）ヲ公ニセリ,此書一タビ世ニ出ヅルヤ忽ニシテ數千萬部ヲ賣リ盡クシ,佛,獨,伊,魯,蘭ノ諸國語ヲ始メトシ其他種々ノ國語ニモテ翻譯セラレ,理學,哲學上ニ一大變動ヲ與ヘタリ,一時ハ氏ノ說ニ反對スルモノ頗ル多ク,劇烈ノ駁撃ヲ蒙リタルヿアリシガ,次第ニ其駁說モ薄ラギテ,遂ニ爭フベカラザルノ確論トハナレリ,是レ第一,氏ノ考證ノ充分ニシテ且ツ正確ナルト,第二ニハ當時有名ノ學者,「ハツクスレー」,「チンダル」,「フッカー」,「ラボック」,「ライエル」（以上英國）「ヘツケル」（獨逸）「グレー」（米國）ノ諸大家皆ナ之ヲ信認シタルニヨルナリ,然ラズンバ何ゾ能ク數百年來信ジ來レル一般ノ成說ヲ破毀シテ,全ク新奇ノ考說ヲ立ツルヿヲ得ンヤ,蓋シ氏ノ說ニヨレバ,生物ノ種類ハ實ニ千狀萬態ナレドモ,元來別々ニ創成セラレタルモノニハアラズシテ,皆ナ古代即チ地質學時代ノ同一ノ祖先ヨリ降リ來リタル者ナリ,而シテ此ノ如ク互ニ相異ナレル種類トナレルハ,外界ノ狀態ニ應ジテ該生物ノ体制上ニ起リタル變化ガ,漸々子孫ニ遺傳シ來リ,爾來益〻該方向ニノミ進化シタルニヨルト云フ,(此ノ如ク生物ノ血統ヲ探索スルノ證憑ハ一ハ古生物學ニ資リ,一ハ各自

生物ノ發生學ノ事實上ニ基クナリ)且又人力ニテ動植物ノ眞種ヲ爲リ得ル(即チ淘汰シ得ル)如ク,自然（ネチユア）ノ間ニモ亦淘汰法行ハレテ適者生存ノ結果トナル,且ツ又此淘汰アルガ爲メニ,實際食物供給ノ量ヨリモ餘計ノ子ヲ生ミ,隨テ其間ニ生存競爭ノ顯象ヲ起ス,玆ニ又外界ノ狀態モ大ナル關係アリ,即チ温度,濕度,地勢,其他ノ事物ハ皆ナ多小,直接或ハ間接ニ生物ニ影響ヲ及ボスモノナレバ,生物ガ能ク生存センニハ此等ノ狀態ニ能ク適應セザルベカラズ,而シテ又此等ノ狀態ニ變化アルトキハ隨テ亦生物ノ体制ニ變態ナカルベカラズ,此變化ニ應ジ得ルモノハ能ク其血統ヲ繼續シ得レドモ,然ラザルモノハ亡滅ヲ免レズ,(今一例ヲ擧ゲンニ富士山,御岳ノ如キ高山ニ上リテ其頂上ニ數多ノ奇草ヲ見タリトセン,吾人ハ之ヲ取リ來リテ此地ヘ移植スルトキハ如何,大抵ハ枯死スベシ,假令枯レザルニモセヨ,花葉ノ狀態自ラ變換スルニ至ラン,是レ高山ト此地トハ自然ノ狀態異ナレバナリ)畢竟,生物進化ノ原理ハ此外界ノ狀態及ビ生存競爭等ニ歸スルモノト稱シテ不可ナカラント云フニアリ,

「ダーウ井ン」氏ハ亦數多ノ事實,証憑ヨリシテ推理學（テレオロジー）上ノ新説ヲ出シテ曰ク,動物及ビ植物体ノ諸機關,及ビ其形色,竝ニ該生物ノ固有ノ性質ハ皆ナ其ノ持主即チ此ノ生物自巳ニ有用ノモノナルカ,或ハ其祖先ニ有用ナリシモノニシテ,決シテ他ノ高等ナル生物(即チ人類)ノ爲メニスルモノニハアラザルナリト,

「ダーウ井ン」氏ハ右種原論ノ著述アリタル以來,沒スル迄ニ數多ノ有益ナル著述アリ,何ヅレドモ進化説ヲ證明スルニ力アルモノナリ,玆ニ又諸々ノ學者ニシテ力ヲ盡シテ氏ノ説ヲ擴張セシモノ少ナカラズ,「ワレース」氏ハ永年間生物分布ノ事ヲ研究シテ,千八百七十六年ニ有名ナル動物分布論(二册)ヲ著ハシ（氏ハ實ハ「ダーウ井ン」氏ト同時ニ別ニ進化ノ理ヲ考説シタル人ナリ,尤モ其些細ノ點ニ至リテハ爾氏ニ於テ差アレドモ其大体ハ異ナルヿナシ.然レドモ「ダーウ井ン」氏種原論一タビ世ニ出デタル以來,「ワレース」氏ガ獨立ニ同説ヲ言ヒ出シタルヿヲ知ル人少シ）又獨逸ノ「ヘッケル」氏ハ創成史(千八百六十八年初版)人類進化論(千八百七十四年初版)等ヲ著ハシ,其ノ他「ラボック」,「ハックスレー」,「スペンサー」ノ諸大家何ヅレモ同説ヲ布及スルニ力アリシ,要スルニ今日ニ至リテハ解剖學,發生學,生理學,古生物學,人類學等ノ諸學科愈々益々進歩シタリシヲ以テ,考證益々精密ニ,事實愈々充分トナリテ,

進化說ノ範圍ニ屬スル種々ノ想說ヲ講明シ得ルニ至レリ,之ヲ家屋ニ譬フレバ,基礎已ニ立チ,柱梁已ニ置カレタリ,是ヨリハ唯屋ヲ葺キ,壁ヲ塗リ,床チ舖キ,窓チ開キ,修飾ノ工チ加ヘ,輪奐ノ美ヲ添フルノミ,是レ一ニ百工各ゝ其職トスル所ヲ力ムルニアリ,博物學一般進步ノ狀況略ゝ此ノ如シ,

以上ハ博物學ガ古來ヨリシテ今日ニ至ルマデノ經歷即チ進步史ニシテ,之チ見レバ獨リ博物學ノミナラズ,凡百ノ學科ニテモ一足飛ビニ隆盛ノ域ニ達セルモノニ非ラザルヲ知ルベシ,又幾多ノ學者ガ貴重ナル歲月チ此等ノ研究ニ費シ,或ハ萬里ノ遠境ニ游歷シ,或ハ荒蕪不毛ノ地チ探リ,或ハ高山ヲ跋跡シ,或ハ遠洋ニ航海シ,數多ノ艱難辛苦チ嘗メ,事實證憑チ得ルニ汲々トシ,其探檢シ得タル結果ハ相集リテ古來未知ノ秘蘊チ開發シ,始メテ自然ノ大則チ悟得シタルチ知ルベシ,故ニ吾人ハ今日此學隆盛ノ際ニ生レ,自ラ勞苦セズシテ數多ノ微妙ノ理,深遠ノ說チ聞クヲ得ルニ付ケテモ此等ノ先輩諸大家ノ功勞チ深謝セズンバアルベカラザルナリ,

予ハ是ヨリ少シク論題チ變ジテ,博物學應用上ノ點ニ移リ略說セント欲ス,元來學問ニハ純正,應用ノ二途アルニアラズ,學問ハ凡ベテ物ノ理チ研究スルヿナレバ,何所マデモ純正ノモノナリ,然レドモ其純正的ニ學ビ得タル理屈チ,亦實地ニ充テヽ吾人社會ノ裨益ヲナスヿ多シ,之ヲ應用ト云フ,例ヘバ蒸氣ノ性質,電氣ノ性質ヲ純正的ニ研究シテ,其性質ノ幾分カヲ實地ニ應用スレバ,以テ彼ノ蒸氣車トモナリ,蒸氣船トモナリ,電氣燈トモナリ,電信機トモナリ,電氣車トモナルガ如シ,博物學ニ於テモ亦然リ,乃チ純正的ニ研究シタルヿハ亦今日實際ニ應用スベキモノ少ナカラズ,即チ農業上ニ應用スベキアリ,藥用上ニ應用スベキアリ,山林上ニ應用スベキアリ,養蠶ニモ,水產ニモ,工業ニモ,技術ニモ,亦醫療上ニモ應用スベキ事實甚ダ多シ,此等ハ例證夥多ニシテ一々引擧スルニ堪ヘズト雖圧,今試ニ菌學(マイコロジー)(菌茸ニ就テ研究スル學チ云フ)ニ就テ言ハヾ,此學ノ開ケタル以來地球上ニ生存スル一般ノ菌茸ノ種類,其性質,造構,及發生ノ狀態等次第ニ明白トナリ來リタレバ,彼ノ穀類,菜類,果樹,林木チ枯害スル病菌,金魚,鱒,蠶兒等ニ寄生シテ害スル病菌,

人体ニ寄生シテ頑癬(タムシ),白癬(シラクモ)等ヲ起ス病菌ノ如キモ,何ヅレモ其發生ノ状態,其造構,性質,其寄生セラルヽ物体トノ關係等ヲ明ニ講究シ得ラルヽニ至リ,隨テ其豫防法,其療法等モ自ラ知リ得ルヿトナレリ,又彼ノ「バクテリア」學ノ近來進歩シタルニヨリテ,傳染病源(痘瘡,窒扶斯,癩病,虎列剌,肺結核等)ヲモ探索スルヿヲ得,又其豫防法,療法如何ニマデ講究スルニ至レリ,尤モ前述ノ例ハ世上ノ物產ヲ減シ,社會ノ不幸ヲ起ス所ノ源由ヲ明ナラシメ,之ニ對スル豫防法,療法如何ノ點ニアレ𪜈,博物學ノ應用ハ決シテ此等數件ニ止マラズシテ,前ニ擧ゲタル如ク種々ノ事物ニ大關係ヲ有スルナリ,乃チ以テ農產物ヲ增殖スベク,以テ水產ノ利ヲ擧グベク,以テ染料,纎維,其他百般ノ所產物ヲ得ベク,以テ山林繁茂ノ計ヲ爲スベシ,畢竟國家ノ富榮ヲ致シ,社會ノ幸福ヲ保ツハ此博物學上ノ應用ヨリ來ルト云フモ過言ニ非ラザラン,

以上博物學全体ノ現況及ビ其應用上ノ利益ヲ述ベ來タリタレバ,諸君ハ博物學研究ノ目的ヲ了解セラレ,此學ハ徒ニ動,植,金石等ノ奇品ヲ玩弄スルガ如キ卑近ノモノニアラズ,亦徒ニ空理ノミヲ喋々スル無用ノ學ニアラザルヿヲ知得セラレタルナラン,勿論此學ヲ研究セントニハ充分ノ時間ト學力トヲ要シ,又一人ニテ此學ノ全部ヲ研究シ得ラルヽモノニアラズ,サレバ予ハ玆ニ博物學ノ研究ヲ諸君ニ勸ムト云フモ,此ノ如キ容易ニ出來ガタキヿヲ望ムニハアラズ,諸君ハ亦敎育ノ大任ヲ負ハルヽノ人ナリ,或ハ他ノ要務ヲ取ラルヽノ人ナリ,亦何ゾ他學,他事ヲ專攻スルノ暇アランヤ,然レドモ諸君ハ已ニ博物學ニ於テ其論理ノ深遠ナルヿ,其研究ノ興味アルヿ,其應用ノ利益アルヿ等ヲ了解セラレシナラバ,予ハ將ニ諸君ニ望マントス………諸君ガ日常逢遇セラルヽ動,植,鑛ノ三界ニ就テ成ルベク精密ノ觀察ヲ爲シ,其部分,其性質,其状態等ヲ實檢シ,或ハ實物ヲ採收シテ品類ヲ集メ,以テ分類比較ノ料ニ供シ,或ハ肉眼的若クハ顯微鏡的ニ解剖シテ其造構ヲ知リ,或ハ胚ヨリシテ成長体ニ至ルマデノ發生ノ状態ヲ順次ニ撿索スル等,適宜ニ研究ノ方法ヲ行ハレンヿヲ,………現時英國ノ博物學大家ノ一人ナル「サー,ジヨン,ラボック」氏ノ如キハ,身ハ國會議員ニ,兼ヌルニ銀行事務ヲ擔當シ頗

ル劇職ニアルニモ拘ハラズ,氏ガ博物學上ノ研究ハ其精細緻密ナルヿ實ニ驚感スルニ餘アリ,博物學專攻ニ身ヲ任カス人ニテモ,恐ラクバ此ノ如キ精密ノ實驗ヲナスヿハ容易ナラザラン,即チ氏ガ數多ノ貴重ナル著書アル中ニモ彼ノ有名ナル「蟻,蜂及ビ細腰蜂」ノ一書ヲ見バ明ナルベシ,蓋シ事物ノ研究ニハ時間ヲ要スルハ勿論ナレドモ,時間アリトテ必ズシモ研究ノ出來ルモノニアラズ,唯熱心其事ニ傾向スルト否トニアルノミ,サレバ予ガ諸君ニ望ムニモ,亦敢テ諸君ガ貴重ノ時間ヲ殊ニ之ニ充テラレンヿヲ欲スルノ意ニアラズ,唯業餘閑暇アルノ折ニ於テハ,成ルベク實物ノ觀察ヲ行ハレ,出來得ルダケノ實驗研究ヲ爲サレンヿヲ望ムニ過ギザルナリ,山ヲ築ヅク一簣ナルモ猶ホ一簣ノ山ヲ爲スベシ,一花一葉ノ小ナルモ,一蟲一鳥ノ少キモ,之ヲ觀察スルニ於テハ猶ホ其物ダケノ觀察ハ爲シタルナリ,片々零碎ノ觀察モ爲シテ止マザレバ,遂ニハ之ヲ總括シテ一ノ新理法則ヲ發見スルニ至ルヿナシトセズ,縱令ヒ能ク此ニ達セザルニモセヨ,實驗シテ知得シタルノ事實ハ深ク腦漿ニ浸染シテ忘ルヿ能ハズ,之ヲ彼ノ徒ニ書上ノ記事ヲ誦讀シテ學ビ得タル事實ニ比スレバ,其正確ノ度,同日ノ論ニ非ラザルナリ,

予ハ茲ニ此点ニ就キテ更ニ喋々セズ,唯吾人ガ博物學ヲ實地ニ講究シテ得ル所ノ利益ト興味トノ要點ヲ左ニ列記セント欲ス,

(一)研究ノ最初ニ於テハ種々ノ奇異,美麗ナル實物標品ヲ採集スルノ興味アルヿ,

(二)是等ノ標品ヲ相互ニ比較シテ,其異同ヲ觀察シ,其造構ヲ檢窺スル𪜈ハ間接ニ比較力,觀察力,記臆力等ヲ養成錬習スルノ益アリ,

(三)觀察ノ工夫ヲ重ネ,實驗ノ功ヲ積ミ,以テ「ダーウヰン」氏ノ所謂ユル生存競爭,適者生存,自然淘汰等ノ理ヲ味ヒ得ルニ至レバ,實ニ此學ノ蘊奧ヲ感得シタルモノナリ,

(四)正確ナル觀察實驗ニヨリテ,古來ノ謬レル觀察(例)(冬蟲夏草,うごんげノ如キ)ヲ矯正シ無稽ノ説ヲ破毀スルヿヲ得,

(五)未ダ世ニ知ラレザル所ノ動,植,鑛物ノ有用ナルモノヲ偶然ニ發見スルヿアルベク,又有毒有害ナルモノヲモ撿出シ實地應用上ノ利益ヲ生ズベシ,

(六)博物學ヲ研究スルニハ概ネ山川ヲ跋跡シ,健歩ノ人タラザルベカラズ,之ガ爲メニ間接ニ受クル利益モ亦决シテ小ナラズ,

(七)自然ノ美ヲ觀察シ,萬象ノ眞ヲ悟得スルニ於テハ,名利ノ場ヲ脫シ,毀譽ノ境ヲ超エ,山間ニ蟄居スルトモ不平ノ情ナク,茅舍ニ偃息スルトモ憤鬱ノ念ナシ,胸襟瀟洒光風霽月ノ如キニ至ルコトナシトセズ,

予ハ此講筵ノ終ニ臨デ,復ビ諸君ト共ニ此講堂ノ外ニ立テバ,眼ニ遮ギルハ唯青山ノミ.草木ノ欣々タル,禽鳥ノ嚶々タル,鑛石ノ稜々タル,皆ナ吾人ノ好材料タラザルハナシ,人烟稠密ノ大都會ト違ヒ,此地方ノ如キハ門外即青山ナレバ,動,植,鑛ノ材料ハ多キニ勝ヘザルノミナラズ,之ヲ得ルヿノ容易ナルハ言ハズシテ明ナリ,是レ予ガ博物學ノ研究ハ,諸君ノ爲メニハ最モ興味アリ,最モ利益アリ,且ツ最モ容易ナリト爲ス所以ナリ,若シ夫レ研究上及ビ材料採集上詳細ノ方法ノ如キハ甚ダ肝要ノモノタレドモ,固ヨリ一席ノ講談ニテ悉クスベキニアラザレバ,予ハ今之ニ渉ルヿ能ハズ,唯茲ニハ博物學現今進歩ノ狀態ヲ述べ,且ツ此學ノ範圍ニ於ケル研究ハ諸君ノ爲メニ最モ有益ナリトノ注意ヲ聊カ諸君ニ向テ惹キタルニ止マルベシ.

日本植物報知(第十)

牧野富太郎

CRUCIFERÆ. 十字花科

(I) **Cardamine hirsuta** Linn. **var. sylvatica** Link. **forma latifolia** Maxim. 水傍ニ生ズ之ヲ田間普通ノたねつけばなニ比スレバ莖葉壯大花モ亦少シク大ナリ　土佐(予)

AMPELIDEÆ. ぶだう科

(2) **Vitis flexuosa** Thunb. さんかくづる 一名ぎようじやのみづ 葉ニ毛ナシ我邦東北ノ地ニ普通ナリ

var. Thomsoniana Planch. けさんかくづる(藤野寄命氏命名) 葉ニ毛アリ 土佐(予)ニ在テ普通ナリ

LEGUMINOSÆ. まめ科

(3) **Desmodium polycarpum** DC. くさはぎ 一名しばはぎ 我邦中部以西ノ地ニ普通ナリ山野向陽ノ地ニ生ズ多年生ナリ 土佐(予)

SAXIFRAGEÆ. ゆきのした科

(4) **Chrysosplenium sphærospermum** Maxim. こがねねこのめさう 小草本ナリ樹下ノ地ニ生ズ花ハ黄色ニ〆花後ハ新枝ヲ傍出シテ繁殖ス 土佐横倉山(予)

RUBIACEÆ. あかねさう科

(5) **Galium Niewerthi** Franch. et Sav. やぶむぐら(新稱) 林藪下ニ生ズ形狀極メテ能クG. asprellum Michx. 即チおほばのやゑむぐらニ類似ス然レ圧彼レガ如ク長大ナラズ莖亦彼レガ如ク鈎刺ナシ故ニ人衣ヲ鈎スルヿナシ莖ノ高サハ二尺許纖長ナリ葉ハ四—六片輪生スレ圧多クハ唯四片ヲ有ス果實ハ決シテ彼レガ如ク毛ヲ有セズ 東京(予)近傍ノ地ニ生ズ多年生ナリ

(6) **Galium brachypodion** Maxim. まるばのよつばむぐら 一尺前後ノ草本ニ〆多數ノ莖ヲ出ス葉ハ四—五片輪生シ多クハ四片ノモノナリ果實ノ小梗ハ極メテ短ク果實ニハ短毛ヲ有ス 土佐波川村並ニ尾川村(予)

COMPOSITÆ. きく科

(7) **Aster trinervius** Roxb. **var. holophyllus** Maxim. 土佐(予)

(8) **Bidens pilosa** Linn. **var. albiflora** Maxim. しろのせんだんぐさ 土佐上分村(予) 同處新莊川ノ河原ニ自生アリ

ERICACEÆ. しやくなん科

(9) **Rhododendron rhombicum** Miq. **fl. albo.** 即チ白花ノモノナリ稀ニ之ヲ見ル 土佐佐川村山地(予)

STYRACACEÆ. えごのき科

(10) **Symplocos caudata** wall. (S. prunifolia Sieb. et Zucc.) くろばい 一名とちしば 即チ本草家ノ所謂山礬ナリ福岡縣下ニ於テハ此葉ノ滲汁ヲ以テ菓子ヲ染ムト云ヘリ土佐ニ於テ Balanophora dioica Brown? つちとりもちノ寄生セルハ即チ此樹根ナリ 土佐(予)

POLYGONACEÆ. たで科

(11) **Polygonum bistorta** Linn. **var. nana** Meisn. はるとらのを 山地ニ生ズ春月花ヲ開ク時ニ葉ハ未ダ幼稚ナリ根莖ハ堅クシテ結節アリ 土佐名野川村北川並ニ鳥形山(予)

THYMELÆACEAE. ちんてうげ科

(12) **Wikstrœmia ellipsocarpa** Maxim. 土佐鍵掛浦ノ海岸山地(予) 是レ頗ル W. japonica Miq. 即チきこがんぴニ類似ス其樹ノ矮形ナル葉ノ對生セル花ノ黃色ナル殆ンド之ト判ツ能ハズ

(13) **Wikstrœmia sikokiana** Franch. et Sav. がんぴ 葉ハ互生シテ毛ヲ有シ花ハ簇集ソ小頭狀ヲナス即チ製紙用ノがんぴ是ナリ 土佐(予)

今日本產ノがんぴ屬諸種ヲ列擧スレバ下ノ如シ

1. W. Ganpi Maxim. こがんぴ
   Var. pauciflora Fr. et Sav.
2. W. sikokiana Fr. et Sav. がんぴ
3. W. japonica Miq. きこがんぴ
4. W. ellipsocarpa Maxim.
5. W. gynopoda Maxim. みやまがんぴ
6. W. retusa A. Gray. あをがんぴ(小笠原島)

AMARYLLIDEÆ. まんじゆしやけ科

(14) **Curculigo ensifolia** R. Br. きんばいざゝ 子房略ゝ無柄上端長ク延ビテ梗狀ヲナス其著シク Hypoxis aurea Lour. (H. minor Don.) 即チこきんばいざゝ

ニ異ナル所ハ此点ニ在リ　土佐(予)

(15) **Lycoris aurea** Herb. しようきらん　日本產ノ本屬ニ四種アリ就中唯花色ノ黃ナルハ此一種ノミ葉ハヤヽ廣クシテ黃綠色光澤アリ　土佐沖島(予)ニ自生ス

(16) **Lycoris squamigera** Maxim. なつずゐせん　花ハ淡紅ニメ大頗ル美觀ナリ葉ハ長クシテ白綠色ナリ日本東北ノ地ニ自生ス　陸中(予)

AROIDEÆ. てんなんしよう科

(17) **Arisæma sikokianum** Franch. et Sav. ゆきもちさう　土佐佐川村(予)

日本植物科屬篇（第三）

牧野富太郎

○いしもちさう科　DROSERACEÆ.
（舊稱 茅膏菜科）

花序ハ種々ニメ往々蠍尾狀ヲナセル拳曲式聚繖花ヲナス。花ハ兩性ニメ正形。蕚ハ四—五片稀ニ八片.深裂.蕚片ハ分立蕾時ハ覆瓦疊,宿存。花瓣ハ四—八數雌蕋下位或ハ雄蕋周位,分生シ或ハ下部合体ス多クハ膜質ニメ蕾時ハ覆瓦五稀ニ疊ナリ宿存。雄蕋ハ四—二十數雌蕋下位或ハ雌蕋周位又時ニ花瓣上位ナリ葯ハ丁字樣或ハ底着.二胞.外向.縱裂或ハ時ニ頂裂ス。花盤ハ缺如シ或ハ唯其痕ヲ止ムルノミ。子房ハ特立シ一—五胞,花柱ハ一—五數ニメ單一ナルア生シテ花柱ナリ或ハ多岐スルアリ柱頭ハ單一或ハ多裂ス珠肧多數稀ニ少數.倒リ兩岐スルア數ニ一致シタル側膜胎座ニ附着ス。蒴果ハ一—五胞.膜質或ハ革質.胞背開裂.二—五殼片ニシテ多種子ヲ含ム。種子ハ細小.肧乳肉質.種殼往々弛寬ス胚ハ腋生或ハ底生.眞直.圓柱形○多年生草本ニメ時ニ矮灌木ノモノアリ而メ螺施紋管ヲ有スル腺毛ヲ備フルモノ多シ。葉ハ根生スルモノハ科生シ莖生スル者ハ互生ス或ハ輪生スルモノアリ嫩葉ハ多クハ拳曲疊ヲナス托葉ハ或ハ之ヲ有シ或ハ缺如ス

大洋洲(Polynesia)外温熱地方ニ散布シ砂地或ハ沼地ニ生ジ或ハ時ニ水中ニ

浮泛スルモノアリ．ゆきのした科ニ類似スル所アリ六屬アリ百十種ヲ包有ス而メ科中ノ代表者ハいしもちさう屬 Drosera ニメ科中ニ在テ顯著ナル一屬ニ係ル其葉上ニ滿布セル腺毛ハ辛辣ノ液ヲ分泌シテ之ニ附着セル小蟲ヲ消化ス其動作ノ如何ニ就テハ嘗テ Darwin 氏ノ詳説アリ就テ見ル可シ我邦ニ在テハ文ア士白井光太郎氏ノもうせんごけ D. rotundifolia Linn. ニ就テ爲シタル論理學リ曾テ之ヲ東洋學藝雜誌上ニ見ル彼ノ捕蟲ニ就テ最モ有名ナル所謂蠅牢草即チ Dionæa muscipula Ell. ハ此科ニ屬シ北米合衆國「カロリナ」及ビ「フロリダ」兩州ノ產ナリ

葉ハ根生ニメ科生シ莖生ニメ互生ス葉上ニハ腺毛ヲ布ク……………一．いしもちさう屬 Drosera.

葉ハ莖上ニ輪生シ腺毛ナクシテ囊アリ水生本ナリ……………二．むじなも屬 Aldrovanda.

○第一　いしもちさう屬 DROSERA Linn.

花ハ總狀，聚繖狀或ハ繖房狀ニメ稀ニ單獨生。蕚ハ四一六或ハ八片深裂．覆瓦襞，凋殘，蕚管ハ短シ。花瓣ハ蕚片ノ數ト等シク雌蕋下位或ハ雌蕋周位ヲナス白色或ハ淡紅色，凋萎シテ存留ス。雄蕋ハ蕚瓣ノ數ト同一ニメ亦雌蕋下位或ハ雌蕋周位ヲナシ葯ハ外向ス。子房ハ特立，卵圓形或ハ球形．一胞．花柱ハ二一五數多クハ三數．分立シ或ハ下部合体ス柱頭ハ小頭狀或ハ裁裂ス胚珠ハ多數或ハ稀ニ少數二一五數ノ側膜胎座ニ附着シテ多列ニ並ベリ。蒴果ハ長楕圓形，二一五殼片。種子ハ細微，種殼ハ弛寬セルヲ常トス胚ハ或ハ大或ハ小ナリ○多年生草本ニシテ腺毛ヲ有ス。葉ハ有莖ノモノハ互生シ無莖ノモノハ科生シ芽中ニ在テハ拳曲式ヲナスヲ常トス托葉ハ膜質ニメ葉柄ニ沿着シ或ハ之ヲ缺如ス。花梗ハ根生(葶)シ或ハ腋生ス

散布ノ狀ハ恰モ此科ニ於ケルガ如ク大洋洲外ノ温熱諸地ニ見ル而メ特ニ「オーストラリア」洲ニ多シ屬中一百種ヲ算ス可シ本邦ニ四種ヲ產ス就中二種

ハ無莖本ニ屬ス もうせんごけ Drosera rotundifolia Linn. こもうせんごけ D. Burmanni Vahl. ト曰フ甲ハ殆ンド全國ニ散布シ葉片圓形ニメ長柄ヲ有シ花ハ白色ナリ乙ハ西南地方ニ產シ葉ハ篦狀楔形ヲナシ腺毛殊ニ赤色ニ染ミ花ハ薔薇色ナリ有莖ノモノ二種,一ヲいしもちさう D. peltata Sm. var. lunata C. B. Clarke. ト云フ半月形ノ葉ヲ有ス花ハ稍大ニメ根ニ塊アリ三河尾張美濃地方ニ多シ一ヲながばのいしもちさう D. indica Linn. ト云フ長線形ノ葉ヲ有シ花ハ總狀ヲナシ葉ニ對メ出ヅ尾張並ニ上總ニ產ス

第二　むじなも屬 ALDROVANDA Linn.

花ハ有梗.腋生.單一.無托葉。 蕚ハ五片.深裂.覆瓦疊.各片長楕圓形.鈍頭。 花瓣ハ五片.雌蕋下位.各片稜合シテ一ノ杯狀ヲナス。 雄蕋五數.雌蕋下位.花絲ハ鍼形.葯ハ廣ク雙生ナリ。 子房ハ球形.一胞.花柱ハ五數.絲狀.開出.內曲.柱頭ハ頂生ニメ分枝ス,胚珠ハ多數ニメ三—五數ノ側膜胎座ニ附着ス。 蒴果ハ球形,膜質,一胞,五殼片。 種子ハ多數.廣濶.長楕圓形.種殼ハ黑色ニメ光澤アリ○纖弱ナル多肉半透明ノ無毛水生浮泛本ナリ。 莖ハ有節ニメ單一或ハ分枝。 葉ハ節上ニ輪生シ葉柄ハ長楕圓狀楔形ニメ頂端ニ針狀ノ長裂片ヲ出セリ葉片ハ匙形ニメ回旋シ囊形ヲナス

屬中唯一種ヲ產ス Aldrovanda vesiculosa Linn. ト云フむじなもハ近日之ニ命ジタル和名ナリト知ル可シ此植物ハ歐洲ノ中部及ビ南部ヨリ東印度「ベンガル」地方ニ散布ス又「オーストラリア」洲ニ產ス從來嘗テ我邦ニ產スルヿヲ知ルモノナシ然レ𪜈本年五月十一日武州伊豫田村近傍ノ採集ハ我邦ノ Flora ニ之ヲ追加スベキ機會ヲ得タリト謂フ可シ是レ同處ノ沼水中ニ多ク之ヲ產スルヲ知リ得タレバナリ其形狀等ノ概略ハ嘗テ先キニ發兌セル本誌中ニ記述シタルヿアレバ就テ見ル可シ而メ此植物ハ彼ノ有名ナル蠅牢草 Dionæa muscipula Ell. ト彼此一致セル點ノ多キハ宜シク注意スベキノ要點ナリト稱ス可シ

雜　錄

ばんじらうノ葉ノストマタノ數,——植物ノ葉ノストマタノ數ヲ計算シタル學者多シト雖モ其ノ內最モ有名ナルハどいつノ人 A. Weiss 氏トス氏ハ百六十種ノ葉ニ於ケルストマタノ數及ビ長サト幅トヲ計算シタリ氏ノ研究ニ因レバ其ノ數ノ最モ多キハBrassica Rapa ト稱スル十字花科植物ノ葉ノ裏面ニシテ其ノ數一□ミリメートルニ付千六百二十五ノ割合ナリトイヘリ

余嘗テ葉ノ解剖ヲ試ミタル際序ニストマタノ數及ビ大サヲ計算シタルヿアリシガ中ニ就キ熱帶あめりか及ビ西いんどノ原產ニシテ當時東京小石川ナル帝國大學植物園ニ栽培セルばんじらう(Psidium Guyava L.)ノ葉ノストマタヲ數ヘタルニ其ノ表面ニ一個ノストマタモ無シ裏面ニハ一□ミリメートルニ付一千二百八十一個ノ大數ニ及ベリ今此ノ植物ノ葉一枚ノ大サヲ計算スルニ長サ平均八十ミリメートル幅平均五十ミリメートルナルガ故ニ其ノ形ヲ楕圓トシπab ノ式ニ因リ其ノ面積ヲ計算スルニ 12560 □ミリメートルトナル故ニ一枚ノ葉ノストマタノ數ハ $12560 \times 1281 = 16089360$ 個トナル其ノ數實ニ洪大ナリト云フベシ

余又ストマタノ長サヲ顯微鏡下ニ測定シタルニ其ノ長サハ平均 $\frac{21}{1000}$ ミリメートルナリキ故ニ一枚ノ葉ノ總ストマタノ長サハ合シテ凡ソ $16089360 \times \frac{21}{1000} = 338$ メートルナリトス今一株ノばんじらうノ葉ヲ千枚トシテ計算スレバストマタノ總數ノ長サ合計ハ338000メートルナリ今一メートルヲ三尺三寸トシテ邦尺ニ改ムルニ 1115400 尺トナル, 京都ト東京トノ里數ハ百五十里ナレバ 1944000 尺ナリ即千枚ノ葉ヲ有スルばんじらう一株ノストマタノ長サ合計ハ京都東京トノ距離ニ殆ト相同シ故ニ若シ一株ノばんじらうノ葉ノストマタヲ一々取リ出シ其ノ長サノ方向ニ一直線ニ列シタランニハ之ヲ通過スルニハ步行ニテ凡ソ全ケ月ヲ要シ汽車ニテモ凡十八時ヲ要スルナラン

毛茸ノ形狀·植物ノ莖葉種子等ニハ絕エテ毛茸ノ無キモノアリ或ハ毛茸アルモノアリ毛茸ヲ有スルモノヽ內ニテモ或ル者ニ於テハ其ノ數甚ダ僅ニシテ肉眼ニテハ之ヲ認メ難キモノアリ我ヘ毛茸非常ニ密生シテ恰モ毛氈ノ如キ觀ヲ呈スルヿアリわたノ種子きりノ木ノ葉ノ裏面ノ如キハ毛茸密生ノ適例ナリ

毛茸ハ肉眼ニテ之ヲ見レバ格別面白キヿ無シト雖モ之ヲ顯微鏡下ニ檢スレバ其ノ形千差萬別或ハ長キアリ或ハ短キアリ或ハ分枝セルアリ或ハ然ラザルアリ或ハ平扁ナルアリ或ハシリンドル形ナルアリ其造構ニ至リテモ或ハ一個ノ細胞ニテ成ルアリ一列ノ細胞ニテ成ルアリ或ハ多列ノ細胞ニテ成ルアリ其ノ形狀ノ奇異ナル其ノ種類ノ夥キ實ニ顯微鏡ノ一大奇觀トス其ノ形狀斯クノ如ク異ナルガ故ニ或ル植物家ハ毛茸ノ形狀ヲ以テ植物分類的標徵ノ一要素トナシタリ

又毛茸ノ種類ニ因リテハ一種ノ液ヲ分泌スルモノアリ斯クノ如キ毛茸ヲ呼ンデ腺毛ト云フたばこノ生葉ヲ手ニ取リテ見ヨ其ノ表面粘バルヿ甚シク恰モ一面ニ砂糖密ヲ塗リタルガ如キヿヲ見ン是葉面ニ密生セル腺毛ガ粘液ヲ分泌スルガ故ナリ又いらくさ俗ニイハユルいたいたぐさノ葉ヲ握リテ見ヨ一種イフベカラザルノ痛苦ヲ感ゼン是葉ニ密生セル毛茸ガ一種ノ辛液(蟻酸?)ヲ分泌シテ手ノ神經ヲ刺激スルニ因ルナリ

毛茸ノ種類多シト雖モ之ヲ大別スレバ左ノ如シ

(一)通常ノ毛茸

　　單細胞ニテ成ルモノ

　　多 〃 〃 〃 〃 ｛一列ノ細胞ニテ成ルモノ
　　　　　　　　　　多 〃 〃 〃 〃 〃

(二)腺毛

　　毛茸ノ頂上ヨリ分泌液ヲ出スモノ
　　〃 基底 〃 〃 〃 〃

Pinguicula ノ新產地. Pinguicula vulgaris L. 即むしとりすみれハ嘗テ信州戶隱山,越後清水峠ニ於テ發見セラレ P. ramosa Migoshi 即かうしんさうハ去年八月野州庚申山ニ於テ發見セラレタリ余ハ去年八月學友牧野富太郎氏ト奥羽地植物採集ノ途次仙臺ニ立倚リタルニ宮城農學校ノ敎員某氏ハ余等ニ示スニ其ノ採集ニカヽル陸中栗駒山產ノ Pinguicula 一種ノ腊葉ヲ以テシタリ某氏ノ話ニ因レバ此ノむしとりちみれハ其ノ花色白シト然レ𪜈腊葉ハ旣ニ變色シテ其花色ヲ辨ズベカラズ因テ余等ハ自ラ同山ニ登リ之ヲ採集セントシタレ𪜈時旣ニ晚クシテ一個ノ花ヲモ得ズ Pinguicula ハ皆悉ク實ヲ結ビタルモノナリキ故ニ其ノ種名ノ如キハ他日再檢ノ上ニ非ザレバ知リ難シト雖モ兎ニ角陸中栗駒山ハ Pinguicula 屬ノ新產地ト稱スベシ　　以上三件　池野成一郎

植物學雜誌

第五卷　第四十八號

明治廿四年二月十日

532111

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 48.

February, 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TOKYO BOTANICAL SOCIETY.
TŌKYŌ, JAPAN.

地學雜誌

第貳拾五卷一月二十五日發兌

定價金拾錢郵税一錢六冊前金郵税共五十四錢十二冊前金一圓八錢

◉論說

●本邦水界の氣象(承前)　水路部長海軍大佐　肝付兼行君

●薩摩國羽島鑛山　地質調査所技師理學士　中島謙造君

●日本群島(承前)　地質調査所技師ドクトル　原田豐吉君

●朝鮮國地質概要　ドクトルゴッチェ君

◉雜錄

●栃木縣產建築石材耐火力試驗成蹟　地質調査所技師工學士　清水鉄吉君

●周防國向峠并葉積原の土性　地質調査所技師試補農學士　東條平二郎君

●中央歐羅巴レェース期の氣候及原因　理科大學生　石井萬次郎君

●石炭の自然發火及爆裂　X.Y.Z.君

●北海道松柏科の分布と地質巡檢者苦樂の關係　理學士　神保小虎君

●地質巡檢規則(第一稿)　仝

◉雜報

●金剛石の價額●太古界の放射蟲●智利硝石●陸前海の腕足貝●久路無鉄鑛分析成蹟●朝鮮の鑛山●プルチェリリスキ氏の傳●琵琶湖と尾濃低地との面積●銀山の發見●流星の墜落●稀有の銀鑛●久路無鉄鑛の發見●地殼中窒素の發見●奥羽の駒ヶ岳と日光の白根山●千島は如何●北海道地質探究の進歩●木村氏の寄贈品●東洋新報の亞細亞東部地圖●日本各州及島嶼周圍面積表

◉質疑　十九件

◉應問●北半球に陸地多き理由Y.K.●大理石及寒水石に付てY.K.●凝質灰岩の英名に付てY.K.●地球を組成する火山脈の大勢如何遠湖漁長●氷の河原因菅谷熊一郎●緯度及其距離に付てY.K.

◉地學會記事●會員の移動●寄贈書目

發行所　神田裏神保町七番地　地學會事務所

賣捌所　東京神田裏神保町　敬業社

同　日本橋通三丁目　丸善書店

第六卷第五十八號

○記事、次會ノ通知

○論說及報告

學士會會員ノ名　理學博士　箕作佳吉

若林勝邦

「コロボックグル」といふ矮人の事を言ひて人類學者坪井正五郎大人に戯ると題する文を讀む　理學士　坪井正五郎

ロンドン通信(圖入)　坪井正五郎

古物圖解(圖入)　神田孝平

東京人類學會雜誌

每月一回月末發兌一冊定價金拾錢郵税壹錢六冊前金郵税共六十壹錢郵券代用ハ壹割增

日向國探古記略(圖入)　三浦敏

但馬ノ古墳(圖入)　下村三四吉

ハワ井通信　岡部政治

○雜報、婚姻風習、月輪中に現はる黒き影に就て、アイヌ人の觀、念アイヌ人の喧嘩、奥羽人類學會記事追加、正誤、

●發行所　東京本郷六丁目　東京人類學會

◉發賣元　東京本郷六丁目　哲學書院

第二十一版 Plate XXI.

NOM. JAP. *OKUBO-SHIDA.* オホクボシダ

植物學雜誌第五卷第四十八號
明治廿四年二月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[**Vol. V.** Feb. 10, 1891. **No. 48.**]

A New Japanese Polypodium.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Polypodium Okuboi, sp. nov.

Nom. Jap. Ōkubo-shida. オホクボシダ

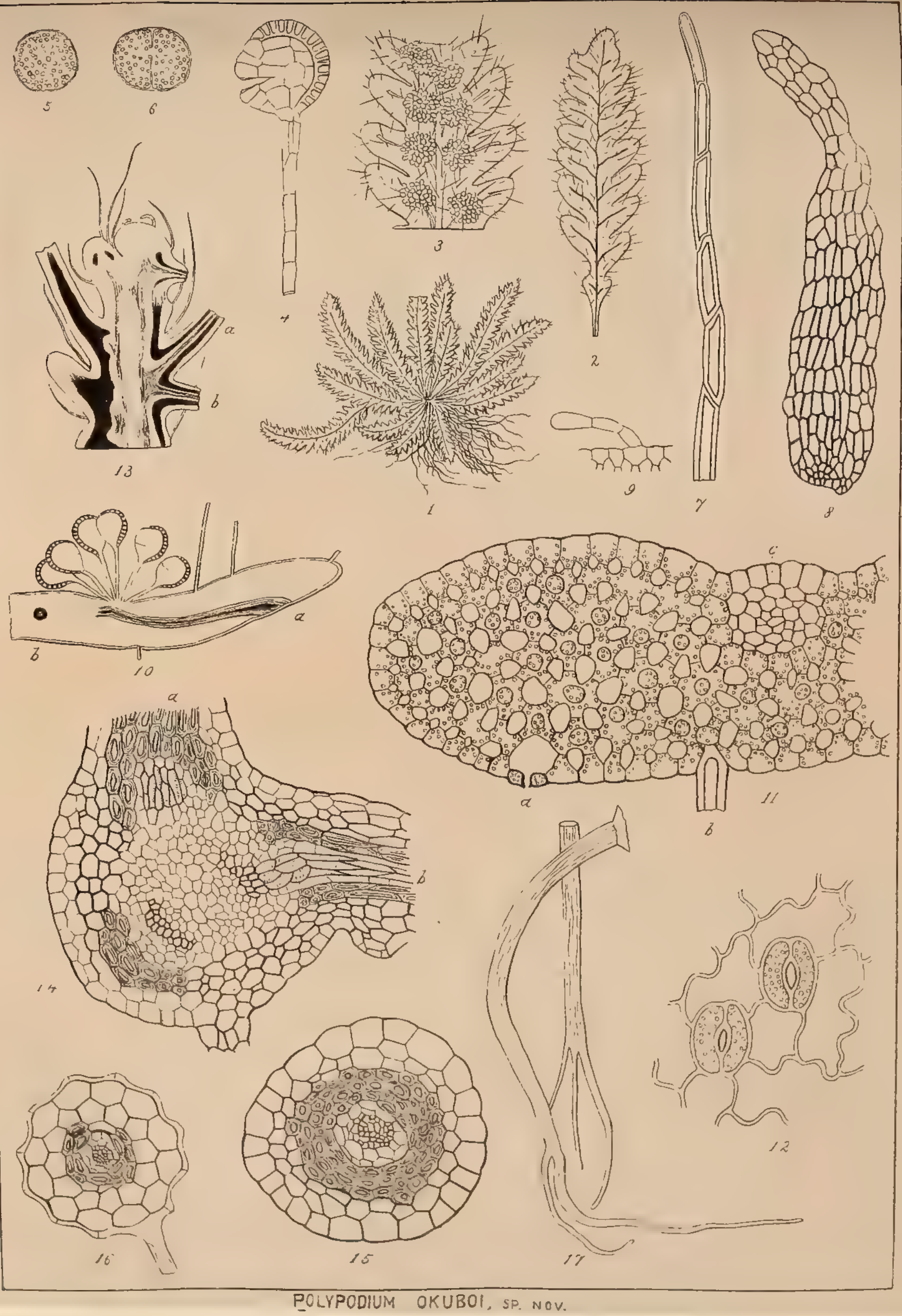
(Plate XXI.)

Rhizome small, erect, 1-2 mm. long, sending out numerous fine branched roots. Fronds rosulate at the apex of the rhizome, perennial, subcoriaceous, pale green, pinnatifid deeper than midway between the margin and costa, oblong-lanceolate, oblong-linear, or linear, tapering at the base into a short stipe, pilose on both surfaces, usually 1-2 cm. long, sometimes 3 cm. long, 3-5 mm. broad. Lobes 4-20 on each side of the costa, oblong or ovate, entire, obtuse, 1-1½ mm. long, ½-1 mm. broad. Veins proceeding from the costa, simple, subclavate at the apex, terminating below the apex of each lobe. Sori on the back of the vein, globose, in 2 series, one at the base of each lobe.

This fern was found by Mr. Samurō Ōkubo at a certain locality near Ashinoyu in the Hakone mountain, and was collected by him at different times, the last in October, 1890. It was found growing on old stone-walls and tombstones in dry situations. The altitude of the locality is about 3000 feet.

The short rhizome is furnished with small scales, which are lanceolate or linear-lanceolate in outline and brown in color; the larger of them are about 1.5

第二十一版 Plate XXI.


5
6
4
3
2
7
8
13
a
b
1
9
10
a
b
c
11
a
b
a
b
14
17
12
16
15

POLYPODIUM OKUBOI, SP. NOV.

mm. long and 0.3 mm. broad. The vertical section of the rhizome shows a sheath of brownish-red sclerenchyma, and, inside of it, bundles of scalariform cells, which anastomose here and there. The transverse section of the rhizome, as figured in the plate, shows three groups of scalariform cells, and outside each of them a group of sclerenchymatous cells. The continuation of the scalariform cells and sclerenchyma into the stipe and root is well seen in the vertical and transverse sections of the rhizome. The young and undeveloped fronds at the apex of the rhizome are invested with minute segmented hairs. The roots are branched and about 0.2 mm. in diameter; their transverse section shows, within a layer of parenchyma two cells thick, a ring of sclerenchyma consisting of one or two layers of cells, interrupted here and there; and in the center is seen a delicate vascular bundle. The epidermal cells of the root are flattened, depressed at the middle, and elevated at the edges. The hairs of the root are unicellular, simple or branched, longitudinally striated, and brown in color. The short stipe is nearly terete and about 0.3 mm. in diameter at the base, but is winged above, the wings passing into the lowest lobes. Its transverse section at the base is similar to that of the root, except that the ring of sclerenchyma is more massively developed and the epidermal cells are not flattened. The veins which proceed from the costa and enter into the lobes of the frond are somewhat geniculate and thickened at the angle, and the sorus is borne on the thickened point. The hairs on the frond are stiff, spreading, and brown in color, consisting of obliquely jointed and thick-walled cells; the larger hairs consist of about 6 cells, and are more than 1 mm. long. On the upper surface of very old fronds hairs are not found. Besides these hairs, there are, on the under surface of the lobe, minute delicate hairs consisting of two or three joints. Stomata are found on the under surface of the lobe, and in greater number towards its apical portion, where there are about 36 in a square mm. They are of ordinary structure and form, and about 0.054 mm. long and 0.045 mm. broad. The cross-section of the lobe shows a layer of subquadrate epidermal cells with moderately thin cuticle, mesophyll of stellate cells, and a single vascular bundle. The naked sorus occupies the whole breadth of the lobe at its base, and consists of numerous sporangia mixed with ordinary hairs of the frond. The sporangia are long-stalked and much bulged out on the side opposite to the annulus; their diameter is about 0.2 mm. The number of segments of the incomplete annulus is about 20. The spores are spherical, green, minutely granular on the surface, and about 0.046 mm. in diameter. They germinate soon often sowing. It is not uncommon to find spores divided into two hemispheres by a wall.

This is a very small species of *Polypodium*, of which I do not find any description either in books and articles on plants of Japan and adjacent countries, or in works on ferns in general and of particular regions. It may be placed near *P. andinum*, Hooker, *P. subpinnatifidum*, Hooker, *P. organense*, Hooker, *P. trichomanoides*, Swartz, and the like. But from all these larger species it differs in various respects, and especially in its veins being simple instead of forked.

Plate XXI. Fig. 1, large specimen of the plant (nat. size); 2, frond (× 3); 3, portion of frond showing the sori (× 5); 4, sporangium (× 88); 5, spore (× 240); 6, spore divided into two hemispheres by a wall (× 240); 7, hair of frond (× 88); 8, scale at the base of stipe (× 53); 9, minute hair on the under surface of lobe (× 88); 10, vertical section of fertile lobe (× 26), *a* termination

of the vein, *b* transverse section of the midrib; 11, transverse section of lobe (×150), *a* stoma, *b* base of hair, *c* vein; 12, stomata seen from above (×240); 13, vertical section of rhizome (× 26), *a* base of stipe, *b* that of root, the dark portion in the figure showing the sclerenchymatous sheath, and the shaded portion the course of scalariform cells; 14, transverse section of rhizome (×88), *a* base of stipe, *b* that of root; 15, transverse section of the base of stipe (×150); 16, transverse section of root (×150); 17, hairs of root (×150).

佐渡植物一班

大久保三郎

此ニ掲載スル處ノ表ハ明治十九年夏期休業中矢田部良吉,柘植千嘉衛,宍戸一郎,染谷德五郎,內山富次郎等諸氏ト共ニ佐渡ニ趣キ兩三日間同地植物ヲ採集セシ時ノ植物錄ナリ元ヨリ僅少ノ日數ノ事ナナルヲ以テ洩ルヽ處多キハ勿論且ツ春秋ノ頃ニ在リテハ如何ナル植物ヲ生ズルヤ知ル能ハズ然レドモ同島ノ植物ハ未ダ世人ノ普ク知ル所ニハ非ザルベキヲ以テ其大略ヲ報ズルハ敢テ無用ニハ非ザル可シ

RANUNCULACEÆ. 毛莨科

Clematis paniculata, *Thunb.* センニンサウ

羽黑山

,, tubulosa, *Turcz.* クサボタン

金北山

Thalictrum tuberiferum, *Maxim.* ミヤマカラマツ

金北山

,, minus, *L.* アキカラマツ

羽黑山,金北山

Ranunculus acris, *L.* キンポウゲ

Glaucidium palmatum, *Sieb.etZucc.* シラネアフヒ

金北山

MENISPERMACEÆ. 防已科

Cocculus Thunbergii. *DC.* アヲツヾラフヂ

金北山

BERBEBIDEÆ. 十大功勞科

Berberis Thunbergii, *DC* var. typica, *Reg.* メギ

金北山,羽黒山

CRUCIFERÆ. 十字科

Arabis Stelleri. *DC.* var. Japonica, *Fr. Schmidt.* ハマハタザホ

海岸

CARYOPHYLLEÆ. 石竹科

Dianthus superbus, *L.* カハラナデシコ

金北山

Silene aprica, Turcz. フシグロ

羽黒山

Cerastium vulgatum, *L.* var. glandulosum, *Koch.* ミヽナグサ

金北山

HYPERICINEÆ 金絲桃科.

Hypericum erectum, *Thunb.* オトギリサウ

羽黒山

„ mutilum, *L.* ヒメオトギリ

羽黒山

TERNSTRÆMIACÆ. 厚皮香科

Eurya Japonica, *Thunb.* ヒサカキ

羽黒山

Stachyurus præcox, *Sieb. et Zucc.* キフジ

羽黒山

Camellia Japonica, *L.* ツパキ

羽黒山

TILIACÆ. 菩提樹科

Tilia cordata, *Mill.* var. Japonica, *Miq.* シナノキ

金北山

GERANIACEÆ. 牻牛兒科

Geranium Nepalense, *Sweet.* フウロサウ

羽黒山,金北山

Oxalis corniculata, *L.* カタバミ

金北山

„ obtriangulata, *Maxim.* オホヤマカタバミ

羽黒山

CELASTRINEÆ. 衛矛科

Euonymus alatus. *Thunb.* var. subtriflora, *Fr. et. Sav.* コマユミ

羽黒山

„ Japonicus, *Thunb.* マサキ

羽黒山

RHAMNEÆ. 鼠季科

Rhamnus Japonicus, *Maxim.* var. genuina, *Maxim.* クロウメモドキ

金北山

AMPELIDEÆ. 葡萄科

Vitis labrusca, L.. ヤマブダウ

金北山

„ heterophylla, *Thunb.* ノブダウ

相川

SAPINDACEÆ. 無患樹科

Acer palmatum, *Thunb.* モミヂ

金北山

ANACARDIACEÆ. 漆樹科

Rhus trichocarpa, *Miq.* ヤマウルシ

金北山

LEGUMINOSÆ. 荳科

Lotus corniculatus, *L.* var. Japonicus, *Reg.* ミヤコグサ

金北山

Indigofera decora, *Lindl.* ニハフヂ

羽黒山

Æschynomene Indica, *L.* クサ子ム

羽黒山

Desmodium podocarpum, *DC,* ヌスビトハギ

羽黒山

Lespedeza bicolor, *Turcz.* var intermedia, *Maxim.* ハギ

金北山

ROSACEÆ. 薔薇科

Rubus parvifolius, *L.* ナハシロイチゴ

金北山

Geum Japonicum, *Thunb.* ダイコンサウ

金北山,羽黒山

Potentilla Pensylvanica, *L.* var. hypoleuca, *Reg.* ヒロハカハラサイゴ

金北山

Agrimonia pilosa, *Ledeb.* キンミズヒキ

金北山

Rosa rugusa, *Thunb.* ハマナス

夷港,羽黒山道

Pyrus aucuparia, *Gærtn.* var. Japonica, *Maxim.*

金北山

SAXIFRAGEÆ. 虎耳草科

Astilbe Thunbergii, *Miq.* トリアシシヨウマ

金北山

Rodgersia podophylla, *A. Gray.* ヤマグルマサウ

金北山

Parnassia palustris, *L.* ウメバチサウ

金北山

Hydrangea paniculata, *Sieb.* ノリウツギ

羽黒山

„ hortensis, *Sm.* var. acuminata, *A. Gray.* ガクバナ

金北山

CRASSULACEÆ. 景天科

Sedum Kamtschaticum, *Fisch. et Mey.* キリンサウ

金北山

„ Japonicum, *Sieb.* メノマンネンサウ

金北山

DROSERACEÆ. 茅膏菜科

Drosera rotundifolia, *L.* モウセンゴケ

金北山

HALORAGEÆ. 蟻塔科

Haloragis micrantha, *R.Br.* アリノタフグサ

金北山

LYTHRARIEÆ. 千屈菜科

Lythrum virgatum, *L.* ミソハギ

羽黒山

ONAGRARIEÆ. 柳葉菜科

Epilobium affine, *Bong.* イハアカバナ

金北山

CUCURBITACEÆ. 葫蘆科

Trichosanthes Japonica, *Reg.* キカラスウリ

相川,羽黒山

UMBELLIFERÆ. 繖形科

Hydrocotyle sibthorpioides, *Lamk.* チドメグサ

金北山

Sanicula Europæa, *L.* ウマノミツバ

羽黒山

Bupleurum Sachalinense, *Fr. Schm.* ホタルサイゴ

金北山

Carum holopetalum, *Maxim.*

金北山

Cryptotænia Canadensis, *DC.* ミツバ

羽黒山

Seseli Libanostis, *Koch.* var. Sibirica, *Dc.*

金北山

Œnanthe stolonifera, *DC.* セリ

山黒羽

Angelica Dahurica, *Benth. et Hook.* ハマウド

羽黑山

Caucalis Japonica, *Houtt.* ヤブジラミ

羽黑山

ARALIACEÆ. 五加科

Panax repens, *Maxim.* トチバニンジン

羽黑山

Acanthopanax aculeatum, Seem. ウコギ

羽黑山

Helwingia Japonica, Dietr. ハナイカダ

羽黑山

CORNACEÆ. 山茱萸科

Aucuba Japonica, Thunb. アヲキ

羽黑山

CAPRIFOLIACEÆ. 忍冬科

Lonicera Morrowii, A Gray キンギンボク

金北山

（以下次號）

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員 澤田駒次郎

第四十六號正誤四六二ノ上段第十八行一字目〔取〕ノ上ニ〔ヲ〕ノ字ヲ脫ス同下段第二行二十三字目〔勢〕ハ〔熱〕ノ誤四六三ノ上段第五行一字目〔葉〕ハ〔藥〕ノ誤同下段第一行三字目〔桑〕ハ〔柔〕ノ誤

醫治効用 括矢亞ハ苦味ノ一良藥トス或云本藥ハ他ノ苦味强壯藥ニ比スレバ稍々强烈ニシテ食ヲ進メ消化ヲ助クト雖𪜈其用ヒヲ持續スルトキハ胃ヲ

擾亂スト Campardon. 氏ノ説ニ據レバ結晶「クワッシイン」及ビ不結晶「クワッシイン」チ適量ニ用フレバ唾液胆汁及ビ尿液ノ分泌ヲ増進シ乳液ノ分泌ヲモ旺盛ナラシムルニ至ルベシト

本藥ハ各分泌器管ヲ刺衝シ其分泌ヲ旺盛ナラシムルモノトス或病症ニ用フレバ身體ヲ強壯ナラシメ食チ増シ腎臟ノ排泄ヲ利シ石痳ヲ疏解ス又工業ニハ人體ニ無害ナル驅繩藥ヲ製シ或ハ浸劑ヲ製シテ植物標品ニ塗抹シ昆蟲ノ蝕害チ防護ス又忽布ニ代生シテ麥酒ニ苦味チ附與ス

十六　ヤマイカ産クワッシイア

羅甸名　Picrasma excelsa, Lindley.

黄楝樹科

牙買加等ニ自生スル喬木ニシテ幹肥大直立高サ五十尺乃至六十尺枝杪チ擴張ス皮部ハ褐灰色ニシテ縐紋チ有シ枝杪ノ頂端ニ矮短ナル軟毛チ帶ビ褐色ヲ呈ス葉ハ奇性翼狀ニシテ互生シ托葉ハ細小ニシテ速落ス小葉四對乃至五對葉柄椎ノ頂端一葉ヲ有ス嫩葉ハ鮮褐色ノ軟毛ヲ有ス葉ハ小其大イサ殆ンド同一ニシテ其柄矮短長サ一寸六七分乃至三寸三四分形チ長卵圓若クハ長楕圓ニシテ鈍尖チ有シ底部稍々狹隘不同ナルヲ通常トス革質平縁平滑ニシテ暗緑色チ呈シ其裏面ハ脉管稍々隆起ス花ハ細小ニシテ花梗チ有シ一株ニ完全花ト雄花チ兼有ス花梗椎ハ緻密ニ分岐シ傘房圓錐形ノ聚傘花チ綴リ之ヲ葉ニ比スレハ稍々矮短ナリ完全花ニ在テハ蕚扁平ニシテ五個ノ齒ヲ有シ鋭尖卵圓細小花後墜落セズ花辨五片蕚ノ齒ト互生シ長卵圓形ニシテ長サ七厘許暗緑黄色チ呈シ芽中ニ在テ鑷合狀チ爲ス五雄蘂花瓣ト互生シ肥大ナル花盤ヨリ生ジ長サ花瓣ニ均シ花絲ハ先頂狹小トナリ其内側ニ毛茸チ帶ビ葯ハ殆ンド球形ニシテ黄色ヲ呈ス雌蘂三個(罕レニハ二個)上立ニシテ花盤ノ中央ヨリ生ズ實礎ハ一室ニシテ外面平滑花柱ハ其下部互ニ附着シ上部ハ三個(罕レニハ二個)ニ分離シ雄蘂チ超ヘテ延長ス雄花ハ花瓣柔軟ニシテ楕圓様披鍼形チナシ正開ス雄蘂ハ花瓣ヨリ長ク雌蘂ハ痕跡チ有セズ果實一個乃至

三個屢〻二個ヨリ成リ互ニ隔離シ大約豌豆大殆ンド球形ニシテ鮮黒色ヲ呈シ硬剛ナル花床ニ附着シ其內側ニ尖點ヲ有ス此レ柱頭ノ痕跡トス果肉ハ些少ニシテ內層ハ薄ク皮質ヲナシ黃色ヲ呈ス種子一個廣濶ナル臍帶ニ因テ果肉內側ノ基部ニ附着ス種子膜ハ薄ク脉管ヲ分岐シ胚子ハ蛋白質ヲ有セズ

本植物ハ牙買加島,三的吉,安地禺亞,「サント,ウインシント」等西印度諸島ニ產シ其樹ノ形狀及ビ性質ハ尋常秦皮ニ似タリ故ニ Bitter ash. ノ名アリ

本植物ハ第十月第十一月ノ頃開花シ第十二月ヨリ第一月ニ至リテ果實稔熟ス。

藥品　牙買加產括矢亞　Lignum Quassiae Jamaicensis.

日本藥局方ニハ「スリナム」產括矢亞ト共ニ本品ヲ以テ藥用ニ供ス

性質　牙買加產括矢亞ハ幹木或ハ巨大ノ枝木ヨリ成リ長サ三尺乃至六尺太サ不同ニシテ屢バ人肢大ノ者アリ皮部ハ平滑濃灰色ニシテ緩ク被包シ內面ハ白色ニシテ纖緯質ヲ有ス坊間ニテ鬻賣スルモノハ通常皮部剝脫シ木部ハ强靱ニシテ暗黃白色ヲ呈ス生藥學ニ云ヤマイカ產括矢亞ハ幹木或ハ巨大ノ枝木ヨリ成リ幹木ハ直徑往々三「デチメートル」ニ至ルモノアリ外皮(皮部)ハ帶褐黑色ヲ有シ厚サ一「センチメートル」ニ至ル其ノ質頗ル柔靱性ニシテ木部ニ固着ス木部ハ概シテ「スリナム」產ト構造ヲ同フスレ𪜈其質緻密ナラズ微ニ黃色ヲ帶ビ同心性ニ排列セル脉管輪帶ハスリナム產ニ比スレバ著シク波濤狀ヲナシ髓線ハ肉眼視スルモ已ニ之ヲ看取スルヲ得ベク屢(三列)ヨリ成ル者アリ然ルニスリナム產ハ决シテ(二列)ニ超ユルヿ無シ又本品即チヤマイカ產括矢亞ニ於テモ屢〻彼ノ帶藍黑色ノ菌絲斑ヲ見ルヿアリ」ト日本藥局方ニ云括矢亞ハ一ハ太サ八「センチメートル」ニ至ル類白色ノ輕キ圓柱形木質ニシテ橫斷面ハ纖細ナル同心性ノ圈線及稍〻蜿蜒セル纖細ノ體線ヲ現ハシ間〻帶白灰色ニシテ厚サ二「ミリメートル」ニ過キサル外皮ノ寬ク之ヲ包被スルモノアリ一ハ太サ三「デシメートル」ニ至ル巨大ノ木片ニシテ稍〻類黃色ヲ帶ビ橫斷面ニハ廣キ同心性ノ圈線ヲ現ハシ外皮ハ褐黑色ニシ

厚サ十「ミリメートル」ニ至リ纖維狀ノ破折面ヲ爲ス

本品ハ其材質割烈シ易ク且久シク留存スル純苦味アリ」トアリ

成分　主成分ハ苦味質ニシテスリナム產括矢亞ニ同シ

製劑法ハ前種ト同一ナルヲ以テ今之ヲ贅セズ

醫治效用　前種ニ同シ

十七　シルラ

羅甸名　Balsamodendrum Myrrha, Nees.

橄欖科

亞弗利加等ニ自生スル灌木ニシテ幹著大高サ八九尺枝ヲ生ズルヿ歪ニシテ莖節ヲ有シ枝杪ヲ繁茂シ先頂尖リテ銳刺ヲ爲ス皮部ハ菲薄平滑ニシテ其質硬剛暗橙褐色ヲ呈シ小片ト爲リテ剝離ス葉ハ發育セサル枝即チ疣形ノ頂端ヨリ二三葉乃至四五葉ヲ生シ把狀ヲ爲ス三集葉ニシテ葉柄椎ハ極メテ矮短小葉ハ柄ヲ有セズ其大イサ著シク差異アリ左右ノ二葉ハ極メテ細小銳尖卵圓形ニシテ平縁宛モ托葉狀ヲ爲ス頂端即チ中央ノ一葉ハ大イニシテ倒卵圓形ヲ爲シ先頂鈍ク邊緣ノ上部ニ於テ歪ナル粗鋸齒ヲ有シ表裏兩面平滑ナリ花部及ビ果實ノ構造等ハ未タ詳カナラス

本植物ハ一千八百二十年及ヒ一千八百二十五年 Hemprich 氏ノ探征ノ時 Ehrenberg 氏ハ北緯十七度亞拉毘亞南部紅海ノ沿岸ギツンニ於テ本植物ヲ採集ス此地ハ氣候炎熱ニシテ水ニ乏シ故ニ草本蕃殖セザル焦土ナリト氏ノ之ヲ採集セシハ第三月ニシテ花ヲ有セズト爾後本植物ヲ採集セシ人絕ヘテ無リシニ一千八百七十三年ニ至リ Hildebrandt. 氏ハ「ソマリ」ニ於テ之ヲ採集セリ氏ハ土人ノ指示ニ因リ其自生ノ景況ヲ目擊スルノミナラス其幹ヨリ護謨樹脂ノ滲出スルヲ撿出スト但シ氏ノ採集セシモ亦第三月ニシテ其標品ハ花ヲ有セスト

本植物ハ山脛斜面ノ熱地殊ニ「ソマリ」ニ遠カラザル「アール」山 (Ahl) 及ビ「セルラット」山 (Serrut) ニ於テハ海面ヲ抽クヿ千五百尺乃至三千尺ノ山嶺

ニ蕃殖スト又一千八百七十八年ニ於テ Wykeham Terry 氏ハソマリニ於テ太キ枝ヲ採集シ併テ其生株ヲ得テ植物園ニ移植スト雖𪜈終ニ枯死スト但シ氏ノ採集セシ枝ハ葉及ビ花ヲ有セズト

Hanbwry. 氏ノ亞拉毘亞密兒拉ト稱シ亞拉毘亞南部ニテ採收スルモノヽ原植物ハ此樹ト同種ナルカ將タ氏ノ想像ノ如ク異種ナルカ今之ヲ確定スヿ能ハズト雖モ密兒拉ヲ滲出スルコト不充分ニシテソマリ產ノ植物ニ比スレバ刺ヲ有スルヿ多カラズト

亞弗利加產密兒拉ヲ產出スル原植物ハ未タ詳明ナラズ本記ノ形狀ハ主モニ Hildebrandt. 氏ノ一個ノ標品ヨリ得タルモノナリ之レト同時ニ Ehrenberg 氏ノ採集セシ標品ヲモ調査スト雖𪜈果シテ Balsamodendrum Myrrha. ナルヤヲ確定スルニハ不充分ナリトス又 Nees 氏ハ銳尖ナル果實ヲ寫生シテ其形狀ヲ顯ハスト雖𪜈 Bentley 氏等ハ Ehrenberg 氏ノ標品ニハ果實ヲ視ルコト無シト云フ但シ Hildelrandt 氏ノ標品ヲ貯藏セシ箱中ヨリ一個ノ果實ヲ檢出ス此レ恐ラクハ此標品ニ屬セシモノナラン其果實ハ Nele 氏ノ圖ニ似テ頂端稍々鈍シト云フ

密兒拉樹ハ極メテ分岐シ其先頂刺ヲ爲スト三集葉ニシテ其柄矮短小葉ハ大イサ同ジカラズ左右ノ二葉ハ極メテ細小頂端ノ一葉ハ大イニシテ邊緣粗鋸齒ヲ有スルヲ以テ特徵トス其他ハ他日完全ナル標品ヲ得ルニ至リ調査スルヲ緊要トス」ト云フ

日光山中ノ地衣植物

三好學

日光山中ハ一般ニ植物ノ種類ニ富メルトコロナルガ,亦尤モ地衣ノ種類ニ富メリ,鉢石（ハチイシ）,權現（ゴンゲン）山,霧降（キリフリ）瀧,裏見（ウラミ）瀧,馬返（ウマガヘ）シ,ヨリシテ華嚴（ケゴン）瀧,中禪寺（チウゼンジ）,歌（ウタ）ケ濱,千手（センジユ）ガ崎,足尾（アシヲ）峠,男体（ナンタイ）山,女寶（ニヨホウ）山,大眼子（オホマナゴ）,小眼子（コマナゴ）,湯本（ユモト）,白根（シラネ）山,金精（コンセイ）峠,蓼（タデ）ノ湖（ウミ）ノ奧ニ至ルマデ,深山,幽溪,茂樹,欝林至ルトコロ地衣ヲ見ザルハナシ,先ツ

山麓ナル鉢石,權現山邊ニハ, Graphis, Opegrapha, Verrucaria, Pyrenula, Lecanora, Lecidea, Placodium, Parmelia, Peltigera, Cladonia. 等ノ種類多ク,漸々上リ來リテ馬返シ,華嚴邊ヘ至レバ, Ramalina, Usnea, Alectoria, Cornicularia, Cladonia, Stereocaulon, Cetraria, Physcia, Sticta, Peltigera, Umbilicaria, Nephroma, Pyxine, Lecanora, Placodium, Lecidea, Thelotrema, Phlyctis, Biatora, Opegrapha, Graphis, Arthonia, Pyrenula, Synechoblastus, Collema, Leptogium, Mallotiun, Ephebe. 等ノ種類ヲ見ル,其レヨリ中禪寺湖邊ニ沿ヒ,菖蒲ヶ崎,地獄茶屋ヲ過ギ,赤沼原ヲ經テ湯本ニ近ヅケバ,岩生地衣次第ニ多ク, Stereocaulon, Bæomyces, Sphyridium, Lecidea, 等ヲ見ル,又前記ノ諸屬モ甚ダ多シ,白根,男体,女寶等ノ諸峯ニ上レバ,峯麓ノ密林ニハ, Usnea longissima, 尤モ能ク發生シ,多ク子器ヲ着ク,又 Alectoria, Bryopogon, Cornicularia, Ramalina, Evernia, Sphærophorus, 等ノ木狀地衣樹膚,樹梢ニ懸着ス,亦 Parmelia, Sticta, Physcia, Cetraria, Pannaria. 等ノ諸屬モ種類頗ル多シ,中腹以上ニ至リ灌木帶ニ達スレバ,右等ノ大葉地衣,樹生木狀地衣ハ漸ク稀疎トナリ,次第ニ岩生或ハ地生ノ木狀地衣及ビ岩生固着地衣多クナル,又 Cetraria islandica, Cladonia rangiferina, Stereocaulon alpinum, Thamnolia vermicularis, Rhizocarpon geographicum, 等ハ高山固有ノ地衣ニシテ,殊ニ白根山ニ於テハ尤モ多ク叢生ス.

以上ハ日光山中一般ノ地衣帶ノ概況ニシテ,局所高低ノ差別ニヨリ,自ラ屬種ノ差別アリ,而シテ一般ニ山奥ハ山麓ヨリモ種類甚ダ多ク,亦盛ニ發達ス,予ハ昨年該地採集中諸所ヲ巡行シタルガ,屬種ノ尤モ多ク,且ツ尤モ能ク發達セル所ハ,何ヅレモ高峯ノ麓下ヨリ山腹マデノ密林中ニアリ,男体山麓ナル中禪寺,華嚴邊ノ密林,白根山,金精峠邊ノ密林,大眼子,女寶山邊ノ密林ノ如キ是ナリ,殊ニ女寶山麓ノ字光德ト云フ邊ニテハ樹梢ニ大葉地衣 Sticta, Peltigera, Parmelia, Nephloma. 屬多ク, Sticta pulmonaria. ノ如キモ異常ノ大ニ達セルアリ

予ハ未ダ日光採集地衣標品ノ研究ヲ了ラズ,故ニ今茲ニハ其目錄及ビ精細ノ屬種數ヲ明言シ難ケレ𪜈,該山中地衣植物ノ總計ハ數百種ニ上ルベク,此中ニハ亦本邦固有ノ(世界ノ地衣學上ニ新シキ)種類ヲ多ク包有スルナルベシ, Sticta, Parmelia, Cetraria, Alectoria 諸屬ノ如キ甚着ナル者スラモ,尙ホ新奇ノ種類ヲ見ルヿ少ナカラズ,サレバ彼ノ固着地衣類ノ微少ナルモノニ至リテハ,其奇ナルモノヲ探出スルヿ亦尤モ多カラン,蓋シ本邦地衣全帶ノ狀態ハ,南,九州,沖繩,小笠原諸島ヨリ北,蝦夷,千島ノ端マデ探檢セズンバ,固ヨリ概論スベカラザレドモ,要スルニ此等ノ熱地,寒地ハ却テ種數僅小ニシテ,中央ノ溫地尤モ多キハ,地衣分布上ニ見ル所ノ通則ナレバ,本邦地衣ノ大半ハ,日光及ビ木曾邊ノ深山中ニ在リト考フルモ,サマデ空想ニハ非ザルベシ,サレバ日光產地衣ノ研究ハ亦本邦地衣帶ノ研究上ニ大ナル基礎ヲ爲スモノト云フベク,亦是レヨリシテ世界一般地衣學上ニ新智識ヲ增加スルモノト云フテ不可ナカラン.

日本植物科屬篇（第四）

牧野富太郎

○ひなのしやくぢやう科　BURMANNIACEÆ.

花ハ正形稀ニ偏形.兩性或ハ極メテ稀ニ雜居花.有苞.　花蓋ハ上生.花瓣狀,宿存.管狀或ハ鐘狀.一般ニ六裂片二列生ニメ外列片ハ鑷合襞或ハ內向鑷合襞ヲナシ時ニ形狀甚ダ長キ者アリ內列生ノ三片ハ多ク細小ニメ或ハ亦缺如スル者アリ。雄蕋ハ三數或ハ六數ニメ花蓋ノ筒上或ハ喉上ニ附着シ花蓋ヨリ短シ.花絲ハ分生シ又ハ單体ヲナス.葯ハ二胞ニメ兩胞離在シ橫裂或ハ縱裂シ而メ內向ス.葯隔ハ開張シ形狀種々ニ相異レリ。子房ハ下生,三胞ニメ中軸胎座ヲナシ或ハ一胞ニメ三側膜胎座ヲナス.花柱ハ單一ニメ子房ノ頂ヨリ出デ三柱頭ヲ有ス.柱頭ハ全邊アリ二耳裂ヲナスアリ或ハ三耳裂ヲナスアリ.肧珠ハ多數ナリ。蒴果ハ凋殘セル花蓋ヲ戴キ圓柱形.三稜形或ハ

三翼ヲ有ス其開裂スルヤ一胞ノモノハ頂部或ハ一側面ヲ開キ三胞ノモノハ稜角間ヲ横開ス。 種子ハ細微.多數.種殼寬裕ニメ胚ハ細小且ツ細胞質ナリ○沮洳ノ地或ハ陰濕ノ地ニ生ズル纖弱ナル一年生或ハ多年生草本ニメ全体綠色,白色.或ハ紅紫色ナリ。 葉ハ一般ニ根生若クハ脚生ニメ或ハ極メテ縮形シ唯單ニ無色ノ小鱗片ヲナスアリ或ハ尙且時ニ之ヲ缺如スルモノアリ。花ハ單生ニメ頂生シ或ハ數個ヲ有スルモノハ二岐若クハ三岐セル頂生聚繖花ヲナシ小花ハ或ハ無梗或ハ小梗ヲ有シ苞ニ對メ花軸ノ一側ニ着生ス而メ花色ハ青色白色或ハ黃褐色ナリ。

熱帶產植物ヨリ成リタル一小科ニメ新舊兩世界ニ普通ノ品ナリ十屬アリ五十五種ヲ含ム就中數種ヲ温帶地ニ見ルアリ而メ該科ハ頗ル蘭科ニ近邇スト雖𪜈其正形花蓋.分生雄蕋.三柱頭雌蕋ハ之ト異ナル標點ナリトス科中無葉ノ品種ニ關シテ舊時ノ植物學者ハ之ヲ他植物ノ生根ニ寄生セルモノナリト想考セシト雖𪜈今ハ既ニ其然ラザルモノタルヿヲ知レリ即チ是レタヾ朽葉枯木等ノ敗腐セル植物質中ニ生ズルニ過ギザルノミ

第一　ひなのしやくちやう屬 **BURMANNIA Linn.**

花蓋ハ上生シ筒部ハ三稜或ハ三翼ヲ有シ內花蓋三片ハ三片ノ外外蓋片ヨリ小形ニメ或ハ全ク缺如シテ見エザル者アリ。雄蕋ハ三數ニメ內列片ノ下花蓋筒上ニ附着シ無柄或ハ略〻無柄ナリ.葯胞ハ短ク廣濶ナル葯隔ヲ以テ之ヲ左右ニ分テリ背ニ兜狀体ヲ具ス而メ横開ス。 子房ハ下生,三翼或ハ三稜,三胞ニメ中軸胎座ヲナシ.花柱ハ花蓋內ニ閉在シ三裂シテ三柱頭ヲナス.胚珠多數. 蒴果ハ宿存セル花蓋ヲ冠シ多少三翼ヲナシ翼間或ハ肋脈間熟時ニ至テ種々ニ開裂ス横開スルモノ等アリ。種子ハ細小.長楕圓形或ハ略〻球形ナリ○一年生ノ小草本ニメ銳尖劍狀ノ根葉或ハ脚葉ヲ有スル者アリ或ハ所謂葉ヲ有セズメ唯縮形セル無色ノ鱗片ノミヲ有スル者アリ或ハ全ク之ヲ缺如スル者アリ。莖ハ單一或ハ分枝. 花ハ青色.白色或ハ稀ニ黃褐色ナリ

本屬ハ該科中ノ首屬ニメ熱帶產植物ヨリ成ルト雖𪜈其數種ハ之ヲ温帶

地方ニ見ル多クハ沼草ニシテ亦樹下ノ陰濕地ニ生ズ二十一種アリ本邦ニ二種ヲ產ス共ニ蕞爾タル無葉ノ品種ニシテ明治年間ノ發見ニ係ルー一ヲひなのしやくぢやう Burmannia japonica Maxim. ト云フ拙著日本植物志圖篇第一卷第六集第三十五版ニ於テ其形狀ヲ詳悉セリ就テ見ル可シ本種ハ頗ル「ボルネオ」產ナル B. tuberosa Becc. ニ類似スト雖モ亦極メテ能ク「セイロン」島產ナル B. Championii Thwaites. ニ酷肖ス.一ヲきりしまさう(伊藤篤太郎氏所命) ト云フ日向國霧島山麓ニ於テ田中芳男氏ノ創見ニ係ル伊藤氏ハ多識會誌第二輯中ニ之レヲ述ベテ曰ク其ノ徵候ノ能ク相符セルヲ以テ考フレバ蓋シ「ベンタム」氏ノ香港植物編ニ揭載セル Gonyanthes Wallichii Mier. ナルガ如シ云云ト然リ而シテ此 G. Wallichii Miers. ハ即チ Burmannia Wallichii Hook.f. ニシテ此他 B. candida Griff. 及ビ B. nepalensis Hook. f. モ亦之ニ類似ノ品種ナリ而シテ予ハ未ダ其標品ヲ精硏セザルヲ以テ今遽ニ其如何ヲ決スル能ハズ

日本植物報知(第十一)

牧野富太郎

日本植物報知(第九)ハ本誌第四十六號ニ出デタリ而シテ表紙上ニ於テ其題目ヲ脫セリ又總目錄中ニモ亦之レガ「ページ」數ヲ脫セリ覽者之ヲ其ノ處ニ記入アランコヲ望ム

CRASSULACEÆ. べんけいさう科

(1) **Sedum alboroseum** Baker. やまべんけいさう 葉ハ對生スルヲ常トス花ハ帶黃綠色ナリ 土佐上分村(予)

(2) **Sedum sordidum** Maxim. ちゝつぱべんけい(新稱) はまべんけいさう(草木圖說) 山地ニ生ズ葉ハ柔軟ニシテ花ハ黃綠色ナリ 土佐(予)上野清水峠(予)

RUBIACEÆ. わかねさう科

(3) **Galium gracile** Bge **var.** (**S. pogonanthum** Franch. et Savat.). やまぐむら(新稱) 葉端ハ尖レリ土佐(予)ニ在テ普通ニ之ヲ樹下ニ見ル

(4) **Damnacanthus major** Sieb. et Zucc. **var. D. macrophyllus** Sieb. おほばじゆずねのき 本草圖譜卷之六,六葉ノ表ニ圖セル者ナリ 土佐(予)

(5) **Lasianthus japonicus** Miq. るりみのき一名るりだまのき 土佐(予)

(6) **Serissa fœtida** Comm. **var. crassiramea** Maxim. たんてうぼく土佐(予)

(7) **Psychotria elliptica** Ker. りうきうあをき 田代安定氏ニ從ヘバ是レ即チ Aucubæphyllum riukiense Ahlburg. ナリ 日本版圖內ニ在テハ琉球ニ產セリ

CHENOPODIACEÆ. あかざ科

(8) **Chenopodium acuminatum** Willd. **var. japenicnm** Fr. et Sav. まるばあかざ(本草圖譜) 土佐幷ニ盤城ノ海岸(予)

(9) **Chenopodium ficifolium** Sm. ? 土佐須崎村海濱(予)

(10) **Chenopodium glaucum** Linn. うらじろあかざ(新稱) 武州川崎ノ海邊幷ニ陸前松島(予)

LAURACEÆ. くすのき科

(11) **Lindera hypoglauca** Maxim. くろもじ 相州箱根(予)

(12) **Lindera membranacea** Maxim. おほばくろもじ 武州高尾山,陸中栗駒山(予)

(13) **Lindera sericea** Bl. けくろもじ(新稱) 葉ハ大ニシ裏面ニ毛ヲ密布ス 土佐(予)ニ在テ普通ナリ

HYDROCHARIDACEÆ. とちかゞみ科

(14) **Ottelia alismoides** Pers. まるばのみづおほばこ 上野屋形原(予)

ORCHIDACEÆ. らん科

(15) **Gastrodia gracilis** Bl. しろてんま　武州野火留ニ產スト本草通串證圖ニ見ユ

日本產櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ス

（前號ノ續）

松村任三

2. Quercus aliena *Bl.* Mus. Bot. Lugd—Bat. I p. 298—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 14.—Miq. Ann. Mus. Lugd.—Bat. 1 p. 104—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 445.

かしはなら（西書中「ナラ」ノ和名アレモ;槲ニ類似スレバ本名ヲ命スル方宜シカラム,標品目錄ナル「カシハ」ノ下ニ會津ノ產地ヲ記シタルモノ卽是レナリ）

Ramulis glabris; foliis supra glabrisindumen to stellato canescente obtectis, venis 10—13　トアリテ別種トス,會津產ノ品ハ果實槲ヨリ稍小ニシテ葉ノ表面稍平滑ナレバ余ハ此ニ當ツ,正種トスベキモノナルカ疑ナキヿ能ハザレバ暫ク舊ニ依ル

3. Quercus crispula *Bl.* Mus. Bat. Lugd—Bat. I P. 298.—DC. Prodr. 16 pars. 2 p. 15—Miq. Ann.Mus. Lugd—Bat. I p. 104.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jop. I p. 446.

おほなら（マナラ,ノイシナラ, 標品目錄 p. 179, ナル紀州高野山,信州戸隱山,北海道札幌ノ產地ハ刪除ス）

Bl. ノ著書中かしはならノ和名ヲ記シ,箱根山ニ產ストアリ,又其葉記中 Foliis *acutis* grosse duplicato-serratis chartaceo-membranaceis subtus glaucinis, venis 9—14. ノ語アリ,然レモ果實ノ記ヲ欠ク

var. grosseserrata(Bl.) *Miq.* Mus. Bot. Lugd—Bat. I p. 306.—DC. Prodr. 16 pars 1 p. 16.—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I.p. 104.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. p. 446. p. 179.

みづなら本草圖譜六十六ノ卄三葉,標品目錄

Bl. ハ共著書中之ヲ未詳種ノ部ニ收ム, Foliis acuminatis incisoserratis membranaceis, nervis 11—17. utrinque subpubescentibus ト葉狀ヲ記シ上ト分チテ一種ノ者トシタレ𪜈 Miq. ハ上條ノ變種トシテ Forma uberior, foliis magis membranaceis ト記セリ,兩種間大差ナシ,葉ノ厚薄,脈ノ多少特ニ兩種ノ辨別ニ苦シム,果實ハかしは,かしはならトハ全ク別ナリ Bl. ハみづならノ和名ヲ附記ス

4. Quercus glandulifera *Bl.* Mus. Bat. Lugd—Bat. I p. 195—DC. Prodr 16 pars 2 p. 40—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I p. 104—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 447

こなら 敎落樹 草木圖說八ノ十六 枹 ゴウボウシバ木草啓蒙二十六,ナラ,ホソ,マキ,本草圖譜六十六ノ廿,廿二,廿二葉,コボウソ草木圖說八ノ十三葉圖二,本草啓蒙二十六植物標品目錄 p. 180

Bl. ハこなら,こぼうそ,ならノ和名ヲ添ヘ且記シテ Foliise basi rotundata v. obtusa rarius acutiuscula ellipticis v. oblongis lanceolatisve acutis v. aciuminatis v. passim obtusiusculis infra medium ad apicem glanduloso—serratis chartaceis, adultis supra glabris subtus glaucis et pube rara sericea obsitis, novellis supra pube sericea appressis subtus canescenti—sericeis; fructibus in rhachi brevi sessilibus spicatis v. solitariis, cupra hemisphaerica squamis appressa nucula ovoidea v. ellipsoidea duplo v. triplo breviore. ト云タレバ余ハ之ヲこならニ當ツルト同時ニ次ノ二種ヲ之ニ合同スルヿヲ躊躇セザルナリ

=Q. canescens *Bl.* Mus. Bat. Lugd—Bat. I p. 296—DC. Prodr. 16 pars 2 p. 15—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I p. 105—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 44.

=Q. urticaefolia *Bl.* p. 296—DC. Prodr. 16 pars. 2 p. 16—Miq. Ann. Mus. L. B. p. 105—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I. p. 445.

Bl. ハ兩種ヲ別ニシテ記スレ𪜈余ハ共こならニ異ナル所アルヲ見ズ, Miq, ハ Q. urticaefolia ヲ Q. canescens ノ變種ト〆曰ク, Foliis majoribus tantum differt トヲ以テ其類似スルヲ見ルベシ,然ルニ Fr. 及 Sav. 氏ノ之ヲ別種トスルハ其意ヲ解セザル所ナリ,兩種トモニ記中こならノ和名ヲ添ヘリ農科大學植物園ニテハ之ヲみつならト稱ス非ナリ

5. **Quercus serrata** *Thunb.* Fl. Jap. p. 176—Sieb. et Zucc. Fl. Jap. Fam. Nat. p. 226—DC. Prodr. vol. 16 par.s 2 p. 50—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. p. 105—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 447.

くぬぎサハグリ,フシクレボク,ドングリ,メクヌギ,ヲクヌギ,ツルバミ,ジンダンボウ,ジダングリ,カタキ,トチマキ,ウツキ,シサイカシ,ウハボウ草木圖說八卷七葉ヨリ十葉ニ至ル,本草圖譜六十六卷十八葉裏圖標品目錄 p. 180

Thunb. ハ Folia oblonga, acuminata, tota acute et aequaliter serrata, supra viridia, subtus pallidiora, parallele nervosa, adultiora tenuissime villosa, juniora sericeo—tomentosa ト記述シ(ハヽソ)(ナラノハ)ノ和名ヲ入レタリ,以テ下ノ(アベマキ)ト異ナルヲ見ルベシ

var. variabilis (Bl) Mus. Bat. Lugd—Bat. I p. 297. DC. Prodr. vol. 16. pars 2 p. 50.

あべまきコルククヌギ,ワタマキ 標品目錄 p. 180.

之ヲ Q. variabilis *Bl.* ニ當テタルハ抑モ余ヲ以テ始メトス,蓋シ Bl. ガ葉狀ノ記事ニ supra lucidis subtus canescenti—tomensasis トアリテ,上ノ Thunberg ガ Q. serrata, ノ記事ト異ナレバナリ, Bl. ト Fr. et Sav. トハ之ヲ別種トスレ𪜈其學名ノ如ク,葉狀變化極リナシ或ルモノハ葉末濶ク,或ルモノハ葉末尖リ,又葉柄ニ長短ノ別アリ,葉背ニ毛茸ノ有無アル等アリテ, Bl. ガ Foliis previter petiolatis トイヘルニ適ハザルアリ左ル故ニ Maximowicz. ノ通信ニハ之ヲ Q. serrata トシテ Q. variabilis ノ名ヲ用ヰズ,一種ふじえぼト稱スルモノハ葉形あべまきニ相異ナシト雖葉背平滑ナリ,小野蘭山翁ガめくぬぎ,をくぬぎノ二別ヲナスモノ,或ハ此中ニ包含セラルヽナランカ,飯沼慾齋翁ノくぬぎ或ハ兩様ヲ混スルカ,其說文中ニ老木ニ在テハ粗皮厚キヿ寸餘,質軟ニシテ韌,以テ栓

塞トナシテ(キユルク)ノ用トストアリ, Bl. モくぬぎノ和名ヲ記入ス.

6. Quercus phyllireoides *A. Gr.* On the Bot. of Jap, p. 406.—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 39.—Miq Ann. Mus. Lugd—Bat. I. p. 104.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 446.

いまめかしウバメガシ草木圖說八ノ三十一圖標品目錄 p. 180.

var. crispa(Sieb.)

ちりめんがしビハバカシ

Sieb. ガ Q. crispa ト記シタル書名ヲ詳ニセス,コハ Maxim. ノ通信ニ據ル,故ニ余ガ標品目錄ヲ著ストキニハ未タ此名ヲ得サリシカバ var. Biwabagashi トハシタリキ

7. Quercus glabra *Thunb.* Fl. Jap. p. 175 et Icones pl. Jap. Decas 4 t. 5. —Sieb. et Zucc. Fl. Jap. I p. 170 t. 89. et Fl. Jap. Fam. Nat. p. 225—Bl. Mus. Bat. Lugd—Bat. 1. p. 288—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I p. 106 —Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I. p. 447　(以下次號)

日本植物家列傳

理科大學簡易科　山本頼輔

第二　貝原益軒傳

貝原篤信,字ハ子誠,小字ハ久兵衞,益軒ト號シ,又損軒ト號ス,筑前ノ人,父ヲ利貞ト云フ,寬永庚午十一月十四日ヲ以テ,福岡城中ニ生マル,幼ニシテ奇敏,好ンテ書ヲ讀ム,中年ニ及ヒテ,京師ニ入リ學ヲ講ズ,都下ノ名士,胥ナ心ヲ傾ケテ之レニ下ダル,遂ニ博聞篤學ヲ以テ其名海內ニ重シ,當時,大宰德夫,儒職ヲ以テ幕府ニ仕ヘ,聲名藉甚,稱シテ儒林ノ宗トナス,然レトモ其益軒ニ於ケル常ニ之レヲ敬畏シ,稱シテ曰ハク博學洽聞海內比ナシト,嘗テ東ニ居リ將サニ西歸セントシ,路ヲ海上ニ取ル,同船數人名姓相知ラズ,雜然相向ヒ,喋々相語タル,中ニ一小年アリ,亢顏經ヲ談ズ,旁ハラ人無キガ如シ.益軒暗トシテ

言ナク,恰モ能ナキ者ノ如シ,既ニシテ船岸ニ達シ,各其姓名鄉里ヲ告グルニ及ビテ,少年始メテ其益軒タルヲ知リ,恧然自カラ容レズ,遂ニ其姓名ヲ語タラズシテ鼠竄セリト云フ,此時ニ當タリ唐宋ノ學,大ニ儒間ニ行ハレ,彫蟲篆刻,巧ミニ長篇大章ヲ作スモノ多シト雖トモ,其事トスル所ロ,大率實用ノ外ニアリテ,徒ラニ言語文字ノ末ニ過ギズ,其當世ニ益アルモノ蓋シ鮮ナシ矣,益軒其間ニ卓然トシテ,特立獨行,毫モ流俗ニ從ハズ,其書ヲ著ハスヤ,極メテ平易,俗ニ通ズルヲ主トシ,敢ヘテ鉛槧估僤ヲ力メズ,時ニ詩ヲ作クルアリト雖ドモ,素ト和歌ヲ好ム,常ニ人ニ語リテ曰ハク,詩ハ實ニ無用ノ閑言語ナリ,本邦ノ風情ニ適スルモノニアラズ,且又其詞韻ノ如キ,國俗ノ言語ニ異ナレバ,何ゾ必シモ心ヲ勞シ氣ヲ役シ以テ之レヲ作クルヲ要センヤト,又甞テ時輩ノ學ヲ評シテ曰ハク,讀書作文ノ事常ニ多ク,德ヲ愼シミ行ヲ力ムルノ功常ニ鮮ナシト,皆以テ益軒ガ實踐躬行ノ主義ニアリシヲ知ルニ足ル,益軒頗ブル著書ヲ好ム,老ニ投シテ矍鑠衰ヘズ,而シテ植物ニ關スル著書ノ如キ,實ニ其高年ノ時ニアリ,大和本草（十九卷）和名本草（二卷）菜譜（三卷）花譜（五卷）農業全書（十一卷）ノ如キ,皆後學ニ有益ナルモノナリ,抑モ益軒ノ此著タルヤ,講學研經ノ緒餘ニ出ヅルト雖ドモ,其事業タル實ニ原能州カ著書アリシヨリ,絶ヘテナクシテ僅カニアル所,爾來學者漸ク起リ,以テ斯學ヲ起スニ至リシモノ,實ニ翁ガ中興ノ功ニ歸セザルヲ得ズ, 正德四年八月二十七日沒ス,年八十五,後儒佐藤一齋,甞テ翁ノ人トナリヲ評シテ曰ハク,自損者能益人,忘譽者遠毀,淺近之言,人不厭其俚,切實之訓,人不謂其鄙,仰藹然之遺影,和而介,温而理,嗟嘘不愧乎有道之士矣ト,能ク其人トナリヲ盡セリト云フベシ,

雜 錄

菌類ニ於て動物を誘導する性質の價直.

(此ニ揭クルモノハ去年十一月六日發兌 Nature ニ載セタル Charles R. Straton 氏ノ投書ノ譯文ナリ.)

有花植物に於て美色,佳香,及び種々の形狀の緊要なるは人の既に知る所なり. 然れども此等性質の菌類に於ける價値は之を研究したる人少なし, 始め之を觀れば菌類の如き花粉注射の作用なき植物に動物の補助を要する理由なきが如し. 如何となれば動物の持ち去るべき花粉なく,其散布すべき種子なければなり. されど色,味,香の如き動物を誘導する性質は菌類に於て顯著なり.

菌類は白より黑に至る迄の各色中殆ど有らざるものなし. 例へば Peziza 盞は燃るが如き赤色を呈し, Amanita muscarius は其蓋白色の斑點あり, Russula emitica ハ紅色なり. Cantharellus cibarius は濃黃色なり, Boletus euridus は之を毀傷すれば藍色に變じ; agaricus laccatus ハ紫石英の如き色を呈し, Lactarius deliciosus は之を損傷すれば暗綠より深黑に至るまでの諸色を呈す. 且又菌類は晝間着しき色を呈するに止らずして, Agaricus olearius の如きは夜間光輝を發す. 熱帶地方に於ては夜間藪中に光輝を放つの種少なからず. 英國に於ても炭坑中の木材に生ずる Polyporus が夜間光輝を放ちて,之が爲めに抗內明かなることあり.

菌類の味も亦種々にして誘導的の性質なり. Agaricus には鮮肉の香味あるもの少からず, Hydnum repandum は牡蠣の香味を帶び; Armillaria mucidus は堅果の香味あり; yellow Chantarelle は杏子の香味を有し;其他菫菜,クルマバサウの如き花の香氣に似たる者あり. 又所謂かびくさき即ち潤濕なる穴の如き蛞蝓の好む所の臭氣なるもの多く; 又 Phallus impudicus の如きは蠅,鴉の好む腐肉の臭氣あり.

此等は皆動物を誘導する性質なること殆ど疑なし. 然らば如何なる場合に於て此等の性質が其用をなすやと問ふものあらん. 此問に答へんが爲めに,斯かる性質を具へたる菌の生育の模樣を此に陳述すべし.

Psalliota campestris 即ち尋常の食用洋菌は牛羊の好みて食する所にして,肥沃の牧野に多く生ず. 其生育の模樣は吾人の未だ知悉せざる所多き

も,其二期に分つべきは明なり. 第一,動物の体中に寄生する期;第二,有機物を含蓄せる適當なる土中に生ずる期是れなり. 故に此菌の無胚子を注意して撒くも,發生することなし;其第一の生育期は動物の体心に於てするものなればなり. 然るに牛馬羊は其香味を嗜むものなれば,此等動物は此菌を食して之を其体中ふ納むるものなり.

此菌の無胚子が一たび動物の体より出でたる後は,菌絲を發生し,之より通常菌と稱するものを生ずるなり. 動物の糞と菌類との關係は昔時の人の既に観察したる所にして,有害の菌は惡魔の尿より生ずるものと信じ,魔糞の名を命じたり.

上の如く菌類の生育に二期あるを以て観れは,其動物誘導的性質の價直は明白なるが如し. 牛,馬,羊,狐,栗鼠,土龍,鳥,蝸牛,節蟲は皆適當なる香,臭,味,色の爲めに誘導せらるゝ者にして,菌の形狀,生地共に此動物を誘導するに最も適したるものなり. 此等植物が孜々して絶えず其の誘導力を逞うするに方りては,如何なる動物にても,之に其誘導力と施す爲めに,大に過ぐるものなく小に過ぐるものなしと云ふも當らざる非るが如し. 故に菌類に於ても,有花植物に於けるが如く,其形の變化と云ひ,香の變化と云ひ,色の變化と云ひ,動物を誘導して之が爲に其種の增殖に裨益ある變化は皆遺傳して益〻上進せしなり.

上に述べたる事項は全世界の諸處に於て各人が觀察せる所を蒐集して愈〻確定をべきものと信ず. 而して觀察する人は其時に於て菌の名と其寄生する所の物とを記し置く事緊要なり. 且又實驗室の便ある生物學者は培養に依て更に深く研究し,菌の寄生する物の体中に起る變化及び有性無性交互の世代を確知せば,其得る所必ず多からん

(此論文中未ダ事實ノ確實ナラサルモノアリ. 例ヘハ牛,馬,羊ガ好ミテ菌蕈ヲ食スト云フガ如キ其一ナリ. 又菌蕈ヲ好ミテ食スル動物ハ牛,馬,羊ノ如キ大ナル者ニ非ズシテ,小ナル節蟲類ニ多ケレドモ,此等ト雖モ蓋ノ

上部ヲ含スルヿ多ク蓋ノ下部即チ無胚子ノアル部分ヲ食スルヿ少ナシト云フ說アリ.　菌蕈ノ香,色,味ハ有花植物ノ香,色,味ノ如ク動物ニ關係アル者ナルヤ否ヤハ,更ニ深ク研究シテ而シテ後ニ確定スルモノナリ.　記者識ス.)

結晶セザル地衣色素

E. Bachmann 氏ノ實驗ニヨレバ氏ガ試驗シタル百二十種ノ地衣体ヨリ,十六種ノ非結晶色素ヲ得タリ,其中五種ハ綠色,一種ハ青色,四種ハ赤色,六種ハ褐色ナリ,此等色素ハ大低,細胞膜內ニ埋存シ,或ハ細胞ノ內部ニ滴狀トナリテ存在セリ,且ツ又其地衣体ニ在ルノ位置ハ自ラ定マレルガ如シ,即チ概ネ表皮層ニ存在シ稀ニハ髓絲層ニモ達スルアリ,然レ𪜈綠顆体層ニアル菌絲ハ決シテ此色素ヲ有スルヿナシ,又子囊層ニ於テハ,線狀体ハ稀ニハ之ニヨリテ着色スルヿアルモ子囊ハ決シテ然ルヿナシ,而シテ此等ノ色素ノ形成ハ或ハ原形質ノ活力ニヨルモノカ,但シハ亦同化ノ作用ニヨリテ細胞膜ヨリ生ゼルモノナルカ,此點ハ未ダ分明ナラス,其地衣体ニアリテノ作用ハ,蓚酸石灰ト共ニ存在シ,以テ蝸牛或ハ昆蟲類ノ爲メニ喰害セラルヽヲ防グナラント云フ.

硅藻ノ防禦機關

Dr. D. Levi-Morenos. 氏ノ說ニヨレバ,硅藻ガ魚類及ビ他ノ海中動物ノ餌食トナルハ,該藻体內原形質ヨリモ,寧ロ外面ヲ圍繞セル粘液ヲ食スルナリ,故ニ衆多ノ硅藻ハ一旦此等ノ動物ノ爲メニ嚥下サルヽモ,死セズシテ其儘消化管ヲ經過シテ体外ヘ出デ去ルヿアリ,是レ一ニハ其形狀ノ多クハ紡錘形若クハ長形ナルニヨル, Cymbella, Synedra, Nitzschia, Navicula, Pinnularia, Pleurosigma. 諸屬中ノ種類ハ皆ナ全上ノ形式ヲ有スルヲ見ル,又大ナル硅藻ノ諸類ニテハ,衆多一處ニ群棲シテ相連接シ或ハ一ノ共同被囊中ニ棲息シ,以テ他動物ノ爲メニ容易ニ嚥下サルヽコトヲ避ク,然レ𪜈此等ノ性質ハ,同似ノ種類中ニテモ一般ノモノニアラザレバ,古代ヨリ存シタルモノニテハナク,恐クハ生存競爭ノ結果ヨリシテ後代ニ至リテ得タル保護機

關ナルベシ,

新刋頁バクテリア學書

G. and R. Canesitrini. 氏ハ昨年, Bakteriologia, (8vo, Milano, 1890, 29 pls.) ヲ著ハシタリ,此書ノ總論ニハ「バクテリア」ノ形態學及ビ生理學ヲ論ジ,又感染ノ狀態ヨリシテ其豫防療法等ニモ論及セリ,且ツ「バクテリア」ノ培養器具實驗方法等モ載セテ漏ラスヿナシ,各論ニ於テハ,人類及ビ他ノ動物ニ病患ヲ生ズル「バクテリア」ノ種類ヲ記載シ頗ル詳悉ナリ,蓋シ此學ニ於テノ近刋頁書ト云フベシ.

(以上三件 *Journal of the Royal Miscroscopical Society. oct. 1890.*)

Eriodendron anfractuosum.

Sebæ 或ハ Silk Cotton tree トモ稱シ,西印度ノ產ナリ,現ニ該地方ノ Nassau, N. P. ト云フ所ニハ巨大ノ一樹アリテ,幹枝ハ總ベテ百七十英尺モ橫ニ擴ガリ,尙ホ次第ニ伸長スルノ勢アリ,根ハ非常ニ大ニシテ,地上四十英尺モ上ノ處ヨリ蟠出シ,介字形ヲ爲シ,其支根ト支根トノ間隙ハ牛馬ヲ隱匿スル程ノ大サアリ,葉ハ春ニ至レバ脫落シ,數日ニシテ頓ニ再生ス, Coonley (T,F.) 氏ト云ヘル人ハ,土曜日ノ晚ニ此樹ニ一葉ダニナキヲ見タルガ,次ノ月曜日ノ朝ニハ,樹上巳ニ蒼々タル新葉ヲ以テ蔽ハレタルヲ發見セリト云フ,此樹ハ春來果實ヨリ銀色纖維ヲ布散スルニヨリ, Silk Cotton tree ノ名ヲ得タルナリト,昨年十二月十三日發兌ノ Scientific American ニ見ヘタリ:

雄蕊及び雌蕊の運動 (1)

ドイツ人アントン,ハンスギルク氏は雌雄蕋の運動に就き大いお研究する所あり氏は花絲の運動法如何により之れを五大別したり

(一) サボテン風の運動法 (Cactaceen-*Typus*)

サボテン類の花絲は前後兩面及び兩側面共に刺激は感應すべき性ありて之に逢へば求心性 (Centripetal) に屈曲す卽花冠の六より柱頭の六に動くこの運動を起す所の收縮パレンキマ組織は唯花絲の下部にあり. Opuntia

屬四種

(二) Cynara 風の運動法 (Cynareen-*Typus*)

此の類ホ於ける雄蕋は五にして合葯且花冠に附着を平常は外部に向て弓形をなすと雖も刺激に縫へば強く收縮して眞直となるその全長すべて刺激に感應すべく收縮パレンキマ組織は花絲全部にあり, 此の類に屬するもの夥多のキク類なりハンスギルク氏は之に屬する植物百四十三種を列擧した (1). Prof. Dr. Anton Hansgirg, Über Die Verbreitung des reizbaren Stanbfäpen und Narben. etc. *Bot. Centralb. Bd. XLIII, 1890, p.* 409. その內にはアザミ屬ヤマボクチ屬ゴバウ屬ツハブキ屬アヅマギク屬等もあり

(三) Cistus 及ヒ Mesembryanthemum 風の運動法 (Cistineen-und Mesembryanthemeen-*Typus*)

此の類に於ける雄蕊は多數にして皆分離し內外面兩側面共に刺激に感應すべき性あれども殊に內面の方感じ易く刺激に逢へば遠心性 (Centrifugal) に屈曲す即子房の方より花冠の方に運動す Helianthemum 屬十二種, Cistus 屬 Mesembryanthemum 屬各々一種

(四) ボタイジュ及スベリヒユ風の運動法 (Tiliaceen-und Portulacaceen-*Typus*)

ボダイジュの花絲は多數相合着して束をなす刺激に感應すべき性は殊に外面に強く側面及び內面には稍弱し刺激に逢へば刺激の方に向て屈曲すスベリヒユ屬の花絲は側面內外面共に感應性あり刺激のありたる方に向ひ屈曲す Sparmannia 屬, スベリヒユ屬, スベリヒユ. マツパボタン

(五) メギ風の運動法 (Berberideen-*Typus*)

花絲は六莖にして分離す只內面のみ感ずべく外面は感應せずその感應すべき部分ハ葯の附着點の近傍にとゞまりて刺激に逢へば內部の方へ刺激の方向に向て屈曲す即花冠の方より柱頭の方へ求心性に屈曲す故に葯は柱

頭の緣邊に觸るに至るメギ屬三 Mahonia 屬三

柱頭の運動はその法大同小異にして別段之を區別するの要なし次に掲ぐる植物はその柱頭の感應性強しその屬する科はゴマノハグサ科オギノツメ科ノウゼンカヅラ科及びフウテウサウ科なりとすその植物は即ちミゾホヽツキ屬十二屬 Diplacus 屬二 Tarenia 屬四 Martynia 屬五 Incarvillea 屬一 Bignonia 屬一 ノウゼンカヅラ屬二キサヽゲ屬一

以上掲げたる植物の外尙は他の植物家が列擧したる植物を合算して考ふれば花絲或は柱頭の感應なる現象は植物界に於ては隨分普通なる現象なるが如とし

植物葉中澱粉の有無撿察法

植物の葉中澱粉が存在するや否や或は若し存在すればその多少如何等を撿するは植物生理學上極めて必要の事たり之を撿するに二法ありて一は肉眼的一は顯微鏡的なり

（一）肉眼的の法,…撿すべき葉を熱湯に浸し暫くして之を六十度程に温めたる強度のアルコールに入れ（ビーケルにアルコール盛りビーケルを熱湯に浸すを便なりとす）葉が白色となるを待て之をヨードの溶液に入るべし暫くして之れに水を盛りたる皿に入れて見れば澱粉のある部分は黑色となるを以て判然區別し得べし澱粉なければ葉は黑色を帶びず澱粉の量少ければ淡黑色.多量なれは濃黑色となるなり

（二）顯微鏡的の法,…撿すべき葉の薄き横切りを造り之を強きアルコールに入れその葉の白色となるに及び之を物載せガラスに載せ之に二百五十%の抱水クロラール一滴を加へそれにヨードの溶液一滴と加へデッキガラスを載せ鏡下に撿すれは澱粉粹は藍色を呈するが故に明に區別そるを得その有無多少を認むるとを得きべなり　以上三件　池野成一郎

伊豆國まて採集せるシダ類の名稱

余等兩人去年十二月廿六日東京を發し本年一月六日迄伊豆國湯ヶ島.

天城.梨本.湯ケ野.河內.下田地方を巡回し產する所の植物を採集せりその內シダ類大部分を占むるを以て今左にその名稱を掲げ伊豆國シダ類フロラの一班を示さんとす

Lygodium japonicum Sw. *Kanikusa.*

Gleichenia longissima Bl. *Urajiro.*

dichotoma Willd. *Koshida.*

Trichomanes parvulum Poir. *Marubahoragoke.*

radicans Sw. *Haihoragoke.*

Hymenophyllum barbatum Bak. *Kōyakokeshinobu.*

Onoclea orientalis Hk. *Inugansoku.*

Davallia hirsuta Sw. *Inushida.*

marginalis Bak. *Fumotoshida.*

tenuifolia Sw. *Horashinobu.*

Adiantum monochlamys D. C. Eat. *Hakonesō.*

Onychium japonicum Kze. *Tachishinobu.*

Pteris cretica L. *Ōbanoinomotosō.*

inaequalis Bak. *Ōbonoamakusashida.*

semipinnata L. *Amakusashida.*

Lomaria Spicant Desv. *Shishigashira.*

euphlebia Kze. *Kijnoo.*

var.?

Woodwardia orientalis Sm. *Komochishida.*

Asplenium Trichmanes L. *Chasenshida.*

Wrightii D. C. Eat. *Kurumashida.*

Wilfordi Mett. *Aoganeshida.*

incisum Thbg. *Toronooshida.*

davallioides Hk. *Kōzakishida.*
nipponicum Mett. *Inuwarabi.*
lanceum Thbg. *Herashida.*
Wichurae Mett. *Nokogirishida.*
Scolopendrium vulgare Sm. *Kotaniwatari.*
Aspidium tsussimense Hk. *Himekanawarabi.*
aculeatum Sw. *Inade.*
tripteron Kze. *Shumokushida.*
varium Sw. *Itachishida.*
aristatum Sw. *Kanawarabi.*
falcatum Sw. *Yabusotetsu.*
var. **caryotideum** Wall. *Oniyabusotetsu.*
hirtipes Bl. *Iwahego.*
sp. *Kiyosumihimewarabi.*
polylepis F. S. *Miyamakumawarabi.*
prolixum Willd. *Ibukishida.*
lacerum Sw. *Kumawarabi.*
erythrsorum D. C. Eat. *Benishida.*
viridescens Miq. *Koganewarabi.*
sophoroides Sw. *Hoshida.*
Polypodium punctatum Thbg. *Iwahimewarabi.*
lingua Sw. *Hitotsuba.*
tricuspe Sw. *Iwaomodaka.*
Burgerianum Miq. *Yanoneshida.*
lineare Thbg. *Nokishinobu.*
ensatum Thbg. *Kuriharan.*

hastatum Thbg. *Mitsudeurboshi.*
Gymnogramme Totta Schlecht. *Mizoshida.*
lanceolata Hk. *Sajiran.*
elliptica Bak. *Iwahitode.*
japanica Desv. *Iwaganesō.*
javanica Bl. *Iwaganezemmai.*
Drymoglosaum carnosum Hk. *Mamezuta.*

H. oy. I.

新刊植物書　植物分科擧要

同書ハ理科大學敎授松村任三氏ノ編著ニシテ東京日本橋區通三丁目丸善商社書店ヨリ發兌セリ定價ハ金七拾錢ナリ

近年植物學大ニ進步シ其專門家ハ年々ニ增加シ從ッテ此ノ學ニ係スル敎科書等ノ出版續々顯出シ其甲乙ハ多少ナキニシモ非サルモ各〻其長ズル處アリ而ノ最初學者ヲ導クニ便利ナルハ齋田氏並ビニ染谷氏合著ノ植物學入門ナリ隱花植物ノ如何ヲ知ラント欲セルニ三好學氏ノ著アリ其他諸氏ノ著述等少ナシトセズ然レ𪜈未ダ自然分類法ニ從ヒ冗長ノ記事ヲ省略シ諸科ノ特徵ヲ簡易ニ解說セシ者アルヲ聞カザリシハ此學ノ爲メ大ニ遺憾ト思フ處ナリシ然ルニ今回松村氏ノ此ノ著アリ豈賀セザルヲ得ンヤ純粹理學的ニ顯花植物ノ關係ヲ知ラント欲スル者ハ此書ヨリ便利ナルハナシ簡易ナルハアラジ此ノ學ヲ學バント欲スル者ハ勿論分類學ヲ講義セント欲スル諸君ヲ裨益スル事鮮少ニ非ザルハ信ジテ疑フ能ハサルナリ吾輩ハ氏ノ此著アルヲ悅ブト共ニ氏ニシテ若シ隱花植物ノ分類法ヲ引續キ著述セラルレバ亦幸ヒナラズヤ乞フ速ニ其ノ勞ヲトラレンヿヲ

本書ノ大略ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一ニ用語圖解ヲ示シ次ハ隱花植物ノ分科擧要ニシテ顯花植物ヲ裸子. 被子ニ分チ之ヲ單子葉. 雙子葉ノ二部ニ分チ且雙子葉ヲ離瓣花. 合瓣花ノ二

類トナシ離瓣花類ヲ葇荑花·中央子·正輪花·正輪花·萼上花ノ五群ニ而シテ合瓣花類ヲ心皮同數·心皮異數ノ二群ニ分チ且心皮異數ヲ再ビ子房上位·子房下位ノ二區ニ分チ被子植物ヲ四十三科二百二十二族トシ裸子植物ヲ三族ニ分類セリ

書中最モ著シキ處ノ者ハ此迄 Ordo ヲ科ト譯シ Ranunculaceæ ヲ毛茛科 Magnoliaceæ ヲ木蘭科ト稱呼シ來リシヲ總テ族トセラレタリ即毛茛族·木蘭族·衞矛族等ノ如シ

會員 大久保三郎

新刊雜誌 藥業雜誌

ト題スル雜誌第一號ハ一月五日神戶精々藥館ニテ發兌シタリ誌內ヲ講義,論說,實驗,記事,時報,製法傳授,批評,雜報,史傳,餘談,法律談,疑問,官令等ニ頒カチ每欄專門ノ人々ノ論說アリ高尙ニ過ギズ卑近ニ失セズ主トシテ藥業上普通必要ノ事項ヲ記報スルヲ力メタレバ此道ノ人々ノ爲メニハ必讀ノ價値アルモノト信ズ唯予輩ガ望ム所ハ誌中ニ生藥學ノ一欄ヲ設ケ藥用植物ヲ圖說シ且ツ之ニ關スル諸般ノ事柄ヲ記センヿヲ欲スルナリ

投 書

山葵ニ關スル說明書

奧田省藏

伊豆國天城山ニ產スル山葵ハ今ヲ去ル凡ソ一百年前僅少ノ苗ヲ他所ヨリ移シ試植セシニ好結果ヲ得ルニ至リ以來漸々開墾シ今ハ天城山根付村落ノ一大生業ト成ルニ至レリ然ルニ兩三年前ヨリ此植物ニ一種ノ腐敗ヲ發シ蔓延スルノ兆候アリ若シ異日山中ノ全田此慘狀ニ陷ルアラバ我カ村落數千ノ民ハ殆ド生計ノ途ヲ杜絕スルニ至ラン今左ニ山葵ノ產地及ビ培養法及腐敗ノ概況ヲ說ク然レ𪜈培養ハ如何ノ學理ニヨリ此結果アルカハ余ノ知ル處ニ非ズ只實業者偶然ノ實驗ニヨルノミ又腐敗モ虫害タルカ將タ水質變換ノ然ラシムル所ナルカモ亦知ルヿ能ハザル處ナリ只其ノ現況ヲ記スルノミ

第一產地　山葵田ハ始終清水ヲ灌漑スルモノナレバ多クハ溪流ノ辺リ嶮岨ノ地ニ構造セリ是ヲ以テ一平坦ノケ所ニシテ一反歩ノ面積アルモノハ最大ノモノナリ而シテ天城山中南面ニハ少ナク北面ニ多シ又其北面中ニテモ深谷水源ノ場所ハ生育特ニ好ク漸ク下流ニ至ルニ隨ヒ漸ク生育劣レリ然レ𪜈下流ニ至ルモ低地ニシテ自然他田溜水ノ流入スルモノハ水源上田ト同等ニ繁生セリ渾テ高地ハ劣田ニシテ低地ハ優田ナリ是低地ハ潜出スル溜水ノ自ラ養料トナルナリ實ニ米田ノ上流ハ用水清冷ニシテ劣作タルモ下流ニ至レバ水中温氣ヲ含ミ好養タルト正反對ノモノナリ

第二澤田ノ構造幷ニ培養法　最初試植ノ當時ハ只水源ノケ所ヘノミ田形ヲ造リ無造作ニ挿苗セシモ水源タルノ故ヲ以テ應分ノ收獲ハ得タルモノナラン然ルニ後世經驗ノ巧ヲ積ミ疊石法ヲ發明シ大ニ收益ヲ得ルニ至レリ其法ハ先ヅ大石ヲ重積シテ略ボ田形トナシ（石ヲ平坦ニ敷クハ惡ロシ可成角立ニナシ空隙アルヲヨロシトス）小石ヲ以テ其上ヲ斜メニ平坦ナラシメ然ル后チ五寸乃至一尺位ノ厚サニ砂礫ヲ撒敷ス此疊石法モ十余年ヲ經過スレバ山葵ノ生力ヲ衰弱スルケ所アリ斯クノ如キ場合ニハ又穿堀シ前法ニヨリ疊ミ直シヲ爲スナリ

沙地ハ簡易法ニヨリ疊石ヲ爲サズ直チニ砂礫ヲ散布スルモノアレ𪜈黑土泥濘ノ地ノ如キハ地下ヲ堀リ泥土ヲ去リ右ノ疊石法ヲ施サヾレバ收獲ヲ得ル少ナシ

澤田ノ四面空虛ニシテ日光ヲ翳陰スル樹木ナキトキハ日蔽木ヲ植ユヘシ此日蔽木ハ落葉樹ヲ宜シトス常綠樹ナレバ酷寒ノ候害アルモノヽ如シ當地ニテハ多ク(はるの木)ヲ用ユ此樹ハ春ハ早ク萠芽シ秋ハ早ク落葉シ又根ノ盤張モ少ナク且ツ澤邊ニテモ好ク生育スルナリ

構造終レバ水ヲ灌キ尖鍬ヲ以テ砂礫ヲ丁寧ニ攪回シ砂中ノ泥濁ヲ洗除シ灌水ノ平均ニ流ルヽ樣ニナシ凡ソ方四五寸大ノ石ヲ方一尺乃至一尺五寸位ツヽ隔テヽ田面ニ据置ク之レヲ植石ト云フ此植石一個ヘ苗貳本ツヽ等大ノモノヲ植ヘテ下流ヘ向ケ挿ム植付ノ后チハ時々灌漑ノ加減ヲ看山葵ノ生

長スルニ隨ヒ增水スルナリ初冬ノ頃ニ至レバ四邊ノ木葉散落シテ水田ノ流通ヲ停滯セシムルヲ以テ能ク之レヲ除去ス右灌漑及ビ柴搔ノ外別段ノ培養スルナク滿二ケ年ヲ經テ採收スルナリ然レドモ深谷ニアルモノト淺谷ニアルモノトハ採收期ニ異同アリ深谷ノモノハ滿二ケ年余ヲ置クベキアリ又淺谷ノモノハ一ケ年半位ニシテ成生スルモノアリ是レ寒暖ノ差異ノ然ラシムル處ナラン乎其成生ニ至リシモノハ上圖ノ如ク根頭ヲ細ク括クル者ナリ

苗ハ種子ヨリ得ルモノニ非ズ採收期ニ至レバ親根ヘ數多ノ苗繞着スルナリ之レヲ分離シテ又植ユルモノナリ上田ハ苗ノ附着スル多ク下田ハ少ナシ故ニ上田ノ餘羸ヲ以テ下田ニ充ツルナリ

一旦採收ノ跡ヘ植付クルニハ尖鍬ニテ以前ノ如ク砂礫ヲ攪回シ泥濁小根等ヲ悉ク流失セシメ且ツ田砂ヲ輕鬆ニシ以前ノ如ク植付クルナリ若シ砂礫ノ缺乏セシ𬼀ハ更ニ增入シ又一層ノ注意ヲナスモノハ採收每ニ入砂スルナリ（砂礫ノ過多ナルモ好カラズ）實ニ山葵ハ他ノ植物ト異リ頗ブル淸淨ヲ好メルモノナリ

第三腐敗　　尋常ノ腐敗　此害ハ往年ヨリアリシモノニテ多クハ根尾ヨリ發シ漸次根頭ニ及ブ其害ノ未ダ甚ダシカラザルモノハ下部ヲ切斷スレバ上部ハ食用タルヿヲ得其ノ罹害ノ原由ハ大略左ノ如シ

一　冬日灌水枯レ氷凍セシモノ

一　非常ノ照年（照年タルモ灌水ノ多量ナルケ所又ハ日蔭木ノ充分アル分ハ其害ヲ免カルヽヲ得）

一　出水等ノ爲メ澤田ヘ泥土ノ流レ込ミタルモノ

今回非常ノ腐敗　去ル明治廿一年秋頃ヨリ淺谷ノケ所ニ發シテ漸々上流ニ波及シ昨廿三年中夏ノ頃ハ其害頗ブル跋扈シ水源ヲ異ニスル深谷ノケ所ニマテ及ベリ

腐敗ノ模樣ハ田面ヲ一觀スレバ依然靑々トシテ其果シテ被害タリヤ否ヲ知ル能ハズ然レ𪜈日光ノ射スル時之レヲ看レバ葉ノ萎凋スルアリ之ヲ堀リ

取レバ根必ズ害ニ罹レリ試ミニ之レヲ折ルニ莖根共甚ダ脆ロクシテ莖筋及根ノ厚皮ト眞心トノ間黑色ヲ現セリ(上圖ノ如シ)是レヨリ日ヲ經レバ根頭(莖附ノ所)ヲ失フアリ或ハ全ク腐爛惡息ヲ發スルアリ然レトモ生育ノ力ナキニ非ザル如シ親根此害ニ斃ルモ其ノ子根(即チ大苗)盛ニ葉ヲ發シ又其子根敗ブルモ孫根(即チ小苗)亦青々ト葉ヲ發セリ

昨二十三年ノ春比收獲ノケ所ニシテ平年ノ數量ヲ得其跡ヘ其ノ苗ヲ植付ケルヤ否ヤ俄然罹害ノ慘狀ヲ招キシモノアリ

此非常害ハ水口若クハ日蔽木ノ充分アルケ所又ハ植付山葵ノ根頭ヘ可成水ノ掛カヽラサル樣及丙洞(此洞ハ次ニ至リ說ク)ノ苗ヲ植ユル等(此腐敗以前ヨリ丙洞ノ苗ヲ移植セバ生長ヨカリシ)ノ注意ヲスルハ幾分カ少害タルカ如シ

產地十數年以來ノ現況　天城山中第一ノ山葵產地ハ大見口ナリ此大見口三大洞ニ分ル今假リニ甲乙丙ノ三洞トナス其ノ間ノ距離ハ十數町ヲ隔テ大山脈ヲ以テ界セリ此中甲洞ハ澤田最モ少ナク乙丙ニテ九分ヲ占メタリ而シテ目下被害ノ甚ダシキハ乙洞トス丙洞ハ未ダ確然其ノ害ヲ看ズ只少シク兆候アルカヲ疑フモノヽ如シ故ニ乙洞ノ實況ニ重キヲ置ク

甲洞(菅引入ト云)ハ去ル明治八年頃海軍省ニテ用材ヲ研伐スルヤ是迄一旦ハ開墾セシモ收支相償ハズ荒壞ニ屬シタル澤田忽然頁好ノ生長ヲ得ルニ至リ爾來七八年間ハ等シク收益アリタリ然ルニ漸々衰退シ殆ド舊狀ニ復セントシ終ニ三四年前ヨリ此非常腐敗ノ害ヲ被レリ

乙洞(地藏堂入ト云フ)ハ去ル明治十年頃甲洞ト同ジク伐木スルヤ一時千余ノ人夫欝葱タル深山ヲ蹂躙シ所ニ依リテハ裸禿ノ觀ヲ呈セリ當時思ヘラク伐木ノ后チハ水源ヲ減シ第一直接ニ山葵ニ影響ヲ及サント然ルニ伐后七八年間ハ一層生育好ク以前ハ假令開拓スルモ到底採收ノ望ミナキ處ニテモ繁茂スルニ至ル爾後末流ノ分ハ漸ク衰替シ殆ド素況ニ復セリ(水源上田ノ分ハ伐木ノ爲メ非常ノ好況モナク又伐後七八年ヲ經過セシモ別段ノ衰況ナ

カリシ）

目下澤田近傍ノ林相ハ如何ト云フニ壯木（十四五年生ノモノ）欝々トシテ密接シ斫伐前喬樹林立ノ時ニ比スレバ頗ブル暖氣ヲ覺フルニ似タリ

此乙洞ニ產スル山葵ハ他ノ甲丙洞ノ產ヨリモ能ク保存ニ耐ヘ且ツ辛味モ一層美ナリ之レヲ以テ同等ノ數量ニテハ幾分カ高値ナリシ特ニ尋常ノ腐敗モ他ニ比シテ寡ナカリシモノナリ然ルニ今回ハ良種ノ此乙洞ニ慘害ヲ逞フシ劣種ノ丙洞ノ如キハ未ダ其害ヲ見ザルハ頗ブル感スベキノ點ナリ

丙洞（筏場入ト云フ）ハ先年同ジク伐木セシモ幸ニ澤田筋ヘハ斧斤ノ入ラザルノ故カ異狀モナカリシニ四五年來新植ノ爲メ盛ンニ伐木セシニ又他同ノ如ク現今非常ノ豐作ニシテケ所ニ依リテハ殆ド倍收アリ此ノ非常ノ豐稔ハ他日非常ノ凶荒ノ前兆ニハアラザルカ若シ一朝甲乙洞ノ慘毒此域ニ發セバ尋常腐敗シ易キノ弱所ニ乘ジ其ノ被害ノ激烈ナル推シテ知ル可シ甲乙二洞ノ既鑑夫レ懼ルベキカナ

附言　說中ノ圖ハ編者ノ都合ニヨリ省略セリ

寄贈書目

擴農會雜誌第十八號	擴農會	（岐阜）
東京醫學會雜誌第四卷十九·二十·廿一·廿二第五卷一·二號	東京醫學會	
牧畜雜誌自第四十二至第四十九	牧畜雜誌社	（東京）
北水協會雜誌第五十七,五十八,五十九號	北水協會	（札幌）
農事新報自第二十五至二十八號	東京有憐堂	
實利第十五,十六,十七號	擴農會	（岐阜）
北海道樹木志料	杉山清利君	
南山農事會雜誌第十九號	南山農事會	（京都）
藥劑誌自第十八號至二十一號	藥劑誌社	
日本蠶業雜誌自第卅四至卅六號	日本蠶業雜誌社	（京東）
日本園藝會雜誌自第十八號至二十號	日本園藝會	（東京）
動物學雜誌自第廿四至廿八號	東京動物學會	
地學雜誌自第廿二至廿五卷	地學會	（東京）
東京人類學會雜誌自第五十六至五十八號	東京人類學會	
大日本山林會報告自第九十八至百號	大日本山林會	（東京）
氣象集誌第九年九,十,十一號	大日本氣象學會	（東京）
わらんべ第十號	同胞舍	（岡山）

植物學雜誌

第五卷　第四十九號

明治廿四年三月十日

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 49.

March, 1891.

Library of Congress
532111
JUL 1
Smithsonian

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

地學雜誌

第貳拾六卷
二月二十五日發兌

定價金拾錢郵稅一錢六册前金郵稅共五十四錢十二册前金一圓八錢

◉論説

●北海道ノ火山　北海道廳技師理學士　神保小虎君
●千島國エトロプ島火山ノ記　北海道廳技手農學士　石川貞治君
●本邦水界ノ氣象（完結）　水路部長海軍大佐　肝付兼行君
●日本群島（承前）　地質調査所技師ドクトル　原田豐吉君
●日本帝國土性概説　地質調査所技師農學士　恒藤規隆君
●地球上氣候ノ變化（承前）　理科大學簡易科第二年生徒　石川一男君

◉雜錄

●日本地圖測量ノ原意ヲ述ヘ併セテ大三角ノ事ニ及フ　地質調査所員　大川通久君
●地名舊稱保存問題　理科大學學生　石井八萬次郎君
●朝鮮國地質概要ヲ讀テ感アリ　たゝな生君
●山口縣下片麻岩、花崗岩並ニ斑岩ノ土壤　地質調査所技師試補農學士　東條平二郎君
●石油ノ原因　理科大學學生　脇水鐵五郎君
●政治地理篇　酒井恒三郎君

◉雜報

●朝鮮國の金鑛●天の青色を呈する理●空氣の熱を吸收する所以●石炭紀の層にも亦氷河の作用あり●石油坑の發見●地盤の運動に就きて●山口縣須々萬に於て石絨の發見●膽振國鵡川白堊系の化石●温度の激變●石狩川上流富士岩の奇出●日本銀行建築用花崗岩の性質●日本銀行建築地の金塊●永田町の地底●天産の明礬●海市唇氣樓●天産肥料●蛋白石●硅土●山下技師の書翰●大臺山の中の瀧●東亞の暴風●地理上の「アイヌ」語●去年旅中に而見し北海道の雪●砂丘に繁殖する植物●硅化木●北海道植物景（質問二〇四參照）●地名の書方に就き人の評に答ふ●懐中時計と大陽の位置に因て粗〻南位を知る法

◉地學會記事

發行所　神田猿樂町七番地　地學會事務所
賣捌所　東京神田裏神保町　敬業社
同　日本橋通三丁目　丸善書店

文科大學教授內藤耻叟君序
農科大學助教授理學士白井光太郎著

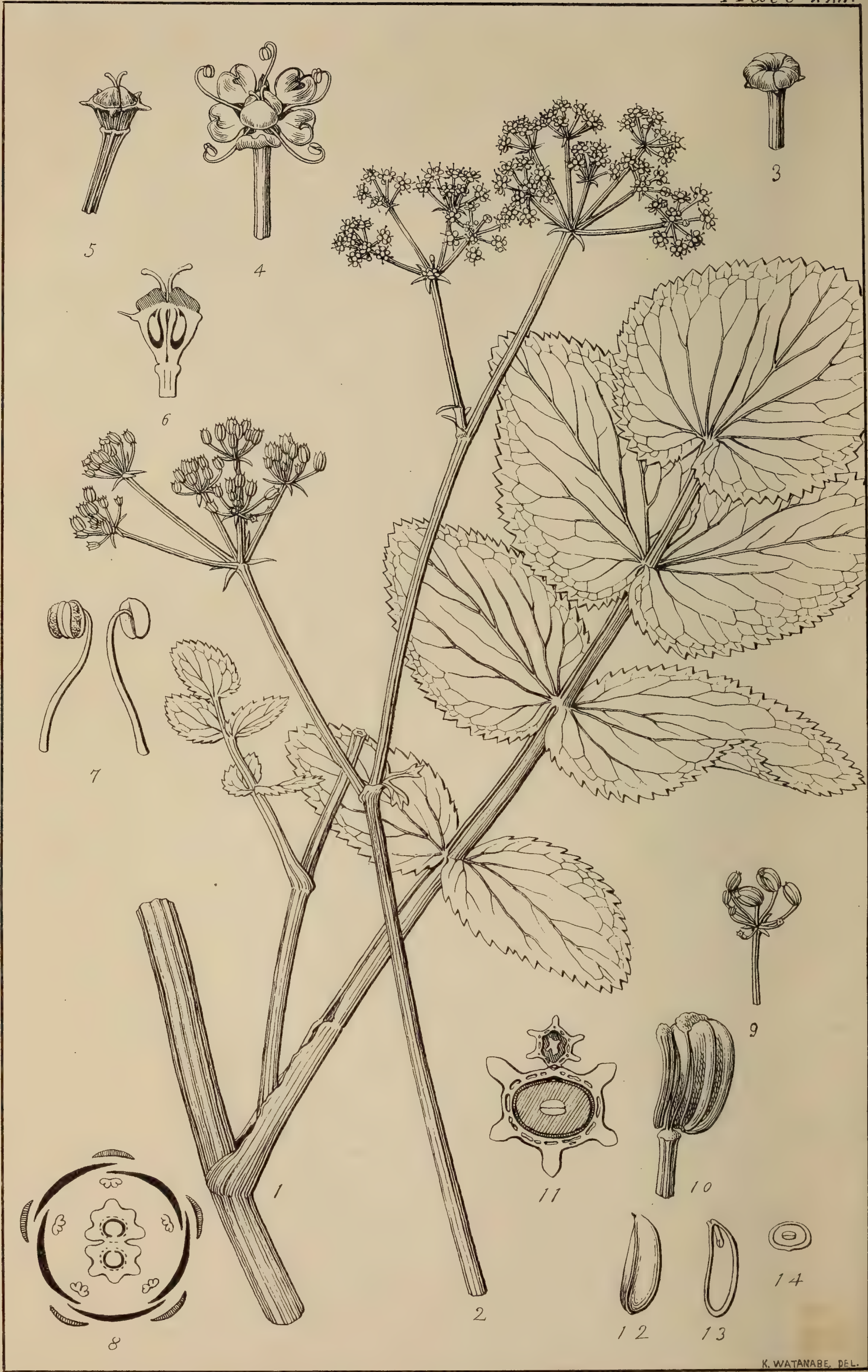
日本博物學年表　全壹册

和製美本紙數九十六枚定價七拾錢

此書ハ我邦博物學本草學、物産學農林學考古學等ニ關スル先輩ノ履歴生歿言行ノ概略著書ノ大意成稿ノ年月日等ヲ蒐録シ之レガ年表ヲ作リ我邦博物學ノ歴史ヲ詳述セルモノナリ叉卷末別ニ千有余部ノ博物書及農林書目ヲ附録ス學者ノ搜索ニ便セリ教師學生ハ勿論實業家ト雖モ必ズ一本ヲ坐右ニ備フヘキ良書ナリ

發兌書肆　丸善書店
賣捌所　敬業社

第二十二版 *Plate XXII.*



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
K. WATANABE, DEL.

SIUM OVATUM, SP. NOV.

NOM. JAP. *HIROHA-NO-NUMAZERI* ヒロハノヌマゼリ

植物學雜誌第五卷第四十九號
明治廿四年三月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. March 10, 1891. No. 49.]

A New Japanese Sium.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Sium ovatum, nov. sp.
Nom. Jap. Hiroha-no-numazeri.
(Plate XXII.)

Rootstock short, stoloniferous, with numerous fibrous roots. Stem glabrous, green, erect, sulcate or angular, branched at the top, 3-4 feet high, ½ inch thick at the base. Leaves glabrous, pinnate. Lower leaves long-stalked, with 3-5 pairs of sessile pinnæ; leaflets ovate or oblong-ovate, sharply serrate, 1-4 inches long; terminal leaflet often broadly ovate or almost orbicular, sometimes deeply cordate at the base. Upper leaves short-stalked with 1-3 pairs of pinnæ, or sometimes simple; leaflets ovate, lanceolate, or linear-oblong, often with acuminate serratures. Umbels at most 10-rayed; rays about 1 inch long including the umbellets; bracts of the involucre about 6, linear or subulate, 2-5 lines long. Umbellets at most 20-flowered; bracteoles of the involucel about 6, subulate, unequal. Flowers white, a little over 1 line across; calyx-teeth dentiform; petals imbricate, obcordate, with an inflected point; stylopod convex. Cremocarp subovoid, curved, one of the mericarps being but little developed, 1½-2 lines long; mericarps with 5 projecting ribs; vittæ unequal, 1-2 in each interval, 1 under each rib. Carpophore 2-partite, the branches very slender. Seeds subterete, somewhat curved. — In ditches and wet places. Fl. August—October.

My specimens of this plant are from Aizu in the province of Iwashiro, and from Ōmiya near Tōkyō.

This species differs chiefly from *S. nipponicum*, Maximowicz (Mél. Biol., vol. ix., p. 17.), 1st., in the leaflets of the lowest leaves not being *oblong and acute at both ends;* 2d., in the calyx-teeth not being *unequal;* 3d., in one of the mericarps being abortive. In the plants kept in the Botanic Garden of the Imperial University and also in those naturally growing at Ōmiya, the last character has been always observed.

Plate XXII. Fig. 1, lower portion of stem with leaves; 2, apical portion of branch with umbels; 3, flower-bud; 4, flower; 5, flower with petals and stamens removed; 6, vertical section of ovary; 7, ventral and dorsal views of stamen; 8, floral diagram; 9, young cremocarps; 10, ripe cremocarp showing the carpophore; 11, transverse section of cremocarp; 12, seed; 13, vertical section of seed; 14, transverse section of seed:—*all except 1, 2, and 9 enlarged.*

日本產櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ズ

（前號ノ續）

松村任三

まてばしひサツマシヒ，タイミンガシ草木圖說八ノ三十七.三十五，

Bl. ハ（ナガシヒ，マテバシヒ，サツマシヒ）ノ和名ヲ記ス

8. **Quercus thalassica** *Hance.* Benth. Fl. Hongk. p. 321—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 84.—Miq. Ann. Mus. Lugd. Bat. I. p. 111—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I. p. 447.

しりふか 草木圖說八ノ三十九愽物舘增補ノ圖

=Q. Sieboldiana Bl. Mus. Bot. Lugd. Bat. p. 290. Foliis acutis v. obtuse—cuspidatis integerrimis v. apicem versus obtuse dentatis coriaceis glabris subtus griseo--lepidotis トアルヲ以テ余ハ豐前產賀來飛霞氏採集ノ品ニ此羅甸名ヲ當タリキ(標品目錄 p. 180.) Bl. ノ著書中(アラカシ,)(シロカシ)ノ和名ヲ記入ス農科大學植物園ニテハ之ヲ(クロガシ)ト稱ス,日向宮崎縣ノ產ナリト云フ,別ニ此名アレバ除クニ若カズ

9. Q. acuta *Thunb.* Fl. Jap. p. 175—Sieb. et Zucc. Fl. Jap. 175—Bl. Mus. Bot. Lugd. Bat. p. 299—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 91.—Miq. Ann. Mus. Lugd. Bat. p. 115—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I. p. 448.

=Q. Buergeri Bl. Mus. Bot. Lugd—Bat. p. 290—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 91.

=Q. marginata Bl. l. c. p. 304—DC. l. c. p. 106.

=Q. laevigata Bl. l. c. p. 304—DC. l. c. p. 106.

あかゞしカシ 血櫧 アラアカ,オホバガシ 草木圖說八ノ十八圖,本草圖譜六十六ノ十六,本草圖譜六十六ノ十六裏圖,草木圖說八ノ二十二

Bl. ノ記事中 Q. Buergeri ノ下ニ(アカヾシ) Q. laevigata ノ下ニ(オホカシ)ノ和名アリ.

Thunb. ノ記事ニハ Folia integra トノミアレ𪜈 Bl. ハ Foliis apicem versus repando—crenatis トシタレバ能ク適合ス, Sieb. et Zucc. モ Folia non semper integra sed apicem versus plerumque crenulata ト言ハレタリ.

Q. Buergeri ト Q. marginata トハ Maxim 既ニ Q. acuta ノ一變種トシテ合同シタレ𪜈余ハ Q. laevigata ヲモ茲ニ包含セシメントス Fr. et. Sav. ハ其著書ニ別種トシテ掲ゲ其註ニ於テ下ノ如ク言ヘリ Le Q. laevigata n'est probablement qu'une forme à grandes feuilles du Q. glabra, l'absence de pubescence sur les rameux ne permettant pas de le rapprocher du Q. acuta.

10. Quercus gilva *Bl.* Mus. Bot. Lugd Bat. p. 306—DC. Prodr. 16 pars 2

p. 105—Miq. Ann. Mus. Lugd. Bat. I p. 104.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. p. 448.

いちゐがし イチヰガシ 石櫧 草木圖說八ノ三十三,本草圖譜六十六ノ十八,標品目錄 p. 180.

Bl. ハ之ヲ未詳種ノ部ニ收メリ,蓋シ其後ノ人ト雖モ果實ヲ見シモノナキガ如シ

11. **Quercus glauca** *Thunb.* Fl. Jap. p. 175.—Banks Icones t. 17—Sieb. et Zucc. Fl. Jap. Fam Nat. p. 226—Bl. Mus. Bot. Lugd. Bat. I p. 302—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 100—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I. p. 115—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p.448.

くろがし 草木圖說八ノ二十九標品目錄ニシラカシトアルハ删除ス,農科大學植物園ニテハナラメガシトイヒ,博物館ニテハアラカシトイフ

Bl. ノ著書中(クロカシ,)(アヲカシ)(カシノキ)ノ和名アリ(クロカシ)ノ名草木圖說ト符合ス

var. lacera (*Bl.*) Mus. Bot. Lugd. Bat. I. p. 306.

ひりうがし 標品目錄 p. 180.

Bl. ハ之ヲ未詳種中ニ收メテ附スルニ(ヒリウガシ)ノ和名ヲ以テス

一種(ヨコメガシ)トイフアリ,間々栽培スルヲ見ル,余ハ曾テ加州金澤ノ公園ニ於テ之ヲ見タリキ,Bl. ノ著書中之ヲ記セズ,蓋シ亦變種ニシテ葉ニ斑紋アリ上ノ如ク鋭尖鋸齒ヲ爲サズト雖モ末端ノ尖レル狀相似タリ,(ヒリウガシ)ハ余ガ曾テ和州春日山ニテ採レル Q. glauca ニ近似ス蓋シ原種ナラン

12. **Quercus Vibrayeana** *Fr. et Sav.* Enum. pl. Jap. I p. 449. et II. p. 498.

しらがし 鉤栗 草木圖說八ノ二十七圖,本草圖譜六十六ノ十五葉標品目錄ニウラジロガシトアルハ删除ス

Folia subtus glaucescentia, lanceolata, e medio ad apicem minute dentata, longe acuminata, basi rotundata vel breviter attenuata 等ノ記事頗ル吻合ス

13. **Quercus myrsinaefolia** *Bl.* Mus. Bot. Lugd—Bat. I p. 305.—DC. Prodr.

16 pars 2 p. 107—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I. p. 117.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 449.

=Q. salicina Bl. l. c. p. 305.—DC. l. c. p. 107. Miq l. c. p. 116—Fr. et Sav. l. c. p. 449.

ほそがばし サヽガシ, ヤナギガシ, ウラジロガシ, 草木圖說八ノ廿圖, 本草圖譜六十六ノ十七裏圖?

Q. myrsinaefolia Bl. ノ記事ニ Foliis basi acuta lanceolatis longe acuminatis infra medium ad apicem glanduloso—serratis chartaceis glabris *subtus glaucinis* &c. トアレバ斷シテ之ニ當ツベキナリ.

Miq. モ Fr. et Sav, モ Q. salicina ヲ別種トスレ𪜈唯細葉ナルノミニシテ其他ノ形狀上ニ異ナルヿナシ, Bl. ノ書中(ホソバガシ)(シロカシ)ノ和名アリ

上種ノ葉ハ廣サ七乃至十二 lin. 下種ノ方ハ廣サ三乃至六 lin. トアレバ狹キニ過グレ𪜈往々此ノ如キモノ一樹中ニ見ルヿナキニアラズ

14. **Quercus cuspidata** *Thunb.* Fl. Jap. p. 176. et Icones pl. Decas 5—Sieb. et Zucc. Fl. Jap. p 8. t 2. Banks Icones t 38—Miq. Ann. Mus. Lugd—Bat. I. p. 117.—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 103—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. p. 449.

えひ 柯樹 草木圖說八ノ四十一, 本草圖譜八十六ノ二葉

Prantl ハ近年ノ研究ニテ之チ別屬ニ收メリ Pasania 是ナリ, 櫧類中其殼斗ノ他ト異ナルハ人ノ知ル所ナルベシ玆ニハ暫ク舊ニ依ル

15. **Quercus sessilifolia** *Bl.* Mus. Bot. I p, 305.—DC. Prodr. vol. 16 pars 2 p. 107.—Miq. Prol. p. 371.—Fr. et Sav. Enum. pl. Jap. I p. 449 et II p. 498. (ヤナギガシ)ノ和名ヲ記シタリ

つくばねがし 草木圖說八ノ二十四圖?二十五博物舘增補圖

Bl. ハ Foliis subsessilis ト記シタレ𪜈余ハ未其葉ノ subsessil ナルヲ見ズ, longe petiolata ナルヿモアリ, 何等ノ據ル所ゾ　(以下次號)

佐渡植物一班 （前號ノ續キ）

大久保三郎

RUBIACEÆ. 茜草科

Paederia tomentosa, *Bl.* ヤヒトバナ

羽黑山

Mitchella undulata, *Sieb. et Zucc.* ツルアリドホシ

金北山

Galium verum, *L.* var leiocarpum, *Fr. et Sav.*

金北山

,, Kamtschaticum, *Steller.* オホバノヨツバムグラ

金北山

VALERIANEÆ. 敗醬科

Patrinia palmata, *Maxim.* キンレイクワ

金北山

DIPSACEÆ. 山蘿蔔科

Scabiosa Japonica, *Miq.* マツムシサウ

金北山

COMPOSITÆ. 菊科

Eupatorium Japonicum, *Thunb.* ヒヨドリバナ

羽黑山

Boltonia Indica, *Benth.*

金北山，羽黑山

Inula salicina, *L.* var. genuina, *Fr. et Sav.*

金北山

Achillea Sibirica, *Ledeb.* ノコギリサウ

金北山

Senecio Zuccarinii, *Maxim.* モミヂカサ

羽黒山

„ sagittatus, Schultz. *Bip.* var. glaber, *Maxim.* ヨブスマサウ

羽黒山

Cnicus Japonicus, *Maxim.* ノアザミ

金北山，羽黒山

Picris hieracioides, *Linn.* カウゾリナ

羽黒山

Lactuca Raddeana, *Maxim.* ヤマニガナ

羽黒山

„ Thunbergiana, *Maxim.* ニガナ

金北山

CAMPANULACEÆ. 桔梗科

Platycodon grandiflorum, *DC.* var. glaucum, *Sieb. et Zucc.* キキヤウ

金北山

Adenophora polymorpha, *Ledeb.* var Lamarckii, *Trautv.* ヒメシヤンジ

金北山

ERICACEÆ. 石南科

Leucothœ Grayana, *Maxim.* ハナヒリノキ

金北山

Elliottia paniculata, *Benth. et Hook.* ホツツジ

金北山

Rhododendron brachycarpum, *Don.* シヤクナゲ

金北山

„ Sinense, *Sweet.* レンゲツヽジ

金北山

Menziesia pentandra, *Maxim.*?

,, ciliicalyx, *Maxim.* ツリガ子ツヽジ

金北山

Pyrola media, *Sw.* マルバノイチヤクサウ

金北山

Clethra canescens, *Reinw.* リヤウブ

金北山

DIAPENSIACEÆ. 岩梅科

Schizocodon soldanelloides, *Sieb. et Zucc.* イハカヾミ

金北山

PRIMULACEÆ. 櫻草科

Lysimachia clethroides, *Duby.* ヲカトラノヲ

金北山

MYRSINEÆ. 紫金牛科

Ardisia Japonica, *Blume.* ヤブカウジ

羽黒山

STYRACACEÆ. 齊墩果科

Symplocos cratægoides, *Ham.* サハフタギ

金北山

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員 澤田駒次郎

第四十七號正誤 9ノ第七行廿一字目〔行〕ハ〔色〕ノ誤同第九行九字目〔七〕ハ〔蜜〕ノ誤10ノ第六行九字目〔此〕ノ字ハ不用 十三字目〔ニ〕ノ字ノ下〔因

ルモノトス〕ノ六字ヲ除キ〔シテ之ヲ Oil of Neroli. ト云フ〕ノ十字ヲ加フ第七行二字目〔類〕ノ字ヲ除キ〔ハ該花中ニ存在スルモノニアラス〕ノ十五字ヲ加フ II ノ第十八行三十二字目〔本〕ハ〔木〕ノ誤

藥品　密兒拉　Myrrha.

密兒拉ハ亞弗利加ノ海岸ソマリ國ニ產スル本植物ヨリ滲出セル護謨樹脂ニシテ日本藥局方ニハ藥用トス歐羅巴諸國ニテ藥用トスルモノハ殆ント其全量ヲ孟買ヨリ輸出ス

性質　密兒拉ハ不整ナル圓形或ハ塊片ヨリ成レル護謨樹脂ニシテ其大サ一ナラズ外部ハ類黃色或ハ帶赤褐色ヲ呈シ其質粗糙其破碎面ハ平坦ナラズシテ光澤ヲ帶ブ又其實質中顆粒ヲ錯在スルヿアリ其粉末ハ黃色ヲ呈シ之ニ水ヲ加ヘ攪和スレバ黃色ノ乳劑ヲ生ズ日本藥局方ニ云蜜兒拉ハ不整類圓形ノ塊片ヨリ成レル護謨樹脂ニシテ其大サ一ナラズ外部ハ類黃色ヨリ帶赤褐色ニ至リ內部ニハ多ク鮮明ノ脈理アリテ通走ス破碎面ハ微ニ光澤アリ香味ハ特異芳香性ニシテ且苦ク苛辣ナリ

本品ニ水ヲ和スレバ過半溶解シテ溷濁液ト爲リ酒精ニハ大約三分ノ一ヲ溶解シ澄明赤黃色ノ液ト爲ル此液ニ硝酸ヲ加フレハ紫菫色ヲ呈スベシ」トアリ

成分　密兒拉ハ護謨,樹脂揮發油ヨリ成リ其一部分ヲ水,酒精,哥囉仿謨ニ溶解ス但シ水ハ主モニ護謨ヲ攝取シ酒精,哥囉仿謨ハ樹脂及ビ揮發油ヲ溶解ス生藥學ニ云主トシテ護謨ヨリ成リ傍ラ大約樹脂二十七〔ペルセント〕ヲ混有ス密兒拉ヲ酒精ニテ浸出シ其浸液ヲ蒸發シテ得タル殘渣ニ水ヲ加ヘテ煮沸スレバ其中ニ無晶形苦味質ヲ溶出ス而ソ右ノ蒸發殘渣ヲ依的兒ニ溶解シ之ニ貌羅謨ヲ加フレバ紫色絮狀ニ沈澱ス新鮮ナル密兒拉中ニハ夥ク揮發油ヲ含有シ乾燥品ニモ尙ホ其二三〔ペルセント〕ヲ含有ス」トアリ或云密兒拉中ニ含有スル護謨ハ其質亞拉毘亞護謨ニ類似シ平均四十乃至五十〔ペルセント〕ヲ有スルヲ通常トシ折ニハ六十〔ペルセント〕ヲ有スルモノアリト

樹脂ハ酒精ニテ濕シ之ニ鹽酸ヲ注ク𪜈ハ紺青色ヲ呈ス又揮發油ハ密兒拉ヲ水ト共ニ蒸餾ソ得タル黃色稍々粘質ノ液ニソ强キ密兒拉臭ヲ有ス其含量ハ〇七三〔ペルセント〕ヨリ三〔ペルセント〕ノ差異アリ Fluckiger. Hanbury兩氏ノ說ニ據レバ其異重ハ〇.九八八トシ Gladstone 氏ハ水ヨリ稍々重シトス

製劑　密兒拉幾丁丢兒　Tinctura Myrrhae.

日本藥局方ニ據レバ其製方左ノ如シ

密兒拉丁幾丢兒ハ

密兒拉細末	一分
酒精	五分

ヲ取リ五日間冷浸シ濾過シテ製スヘシ

本品ハ澄明帶褐赤黃色ノ液ニシテ水ヲ加フレバ乳濁ス

醫治効用　衝動性强壯ノ一藥ニシテ凝體諸器ノ運營機轉衰弱怠慢ニシテ諸液粘稠ナルヨリ發スル諸症ニ効驗アリ又通常鎭痛及ビ調經ノ一藥トシ體質薄弱ニシテ感動シ易キ婦人ノ子官衝逆ニ用ヒテ殊効アリ　曼性氣管技炎,貧血性不消化病,內藏壅塞硬腫,依剝昆垤兒,脾病,萎黃病,喘息等ヲ治ス或ハ鐵又ハ蘆薈ト伍用シ閉徑ノ特効藥トス又子宮諸管纖維ノ弛薄ニシテ血中ノ粘液多キヨリ發スル經閉ヲ通シ殊ニ白帶下ヲ兼ヌル症ニ効驗アリ　此藥內藏虛弱ニシテ壞液鬱滯ノ症ヲ治ス故ニ癆瘵ニ用ヒテ効驗多シ　密兒拉丁幾丢兒ハ衰弱虛羸ノ病ニ用ヒテ精神ヲ爽快ニシ胃ヲ壯健ニシ風氣ヲ驅散スルノ効驗アリ　依剝昆垤兒,脾病,粘液腫,壞液諸病ヲ治シ殊ニ經閉ニ特効アリ　此藥外敷シテ汚穢ノ潰瘍,創傷,鼻口舌斷,咽喉等ノ臭穢潰爛ヲ淨刷シ塞壞疽樣ノ咽喉腐爛ニ漱藥トシ効アリ

十八　ラムヌス

羅甸名　Rhamnus frangula, Linn.

鼠李科

歐羅巴等ニ自生スル落葉灌木ニシテ高サ六七尺乃至十二尺餘皮部平滑ニシ

ヲ帶紫鼠色ヲ呈シ白色ナル斑點即チ稚芽ヲ散布ス嫩芽及ビ葉柄ハ暗黃色ノ短毛ヲ帶ブ葉ハ倒卵圓形ニメ互生シ底部圓ク先頂尖リ平縁ニメ波動ヲ有シ表面平滑其色鮮綠脉管著明裏面ハ稍々稀薄ニシテ脉管隆起シ主脉管ヨリ左右ヘ七個乃至十個ヲ分岐シ微ニ凹陷メ平行狀ヲ爲シ葉ノ長サ一寸二三分乃至二寸餘其柄稍々長シ托葉ハ三角線狀ニシテ極メテ細小直チニ墜落ス夏月ヨリ開花シ秋末ニ至ル花ハ細小ニシテ葉腋ヨリ花梗ヲ抽キ三四花ヲ攢簇ス蕚ハ鐘狀五出下部暗綠色ニシテ上部ハ帶黃白色ヲ呈シ間マ淡紅色ヲ帶ビ外面軟毛ヲ有ス花瓣五片蕚ノ上部ヨリ生ジ其缺刻ト互生シ其截片ヨリ稍々細小箆形ニシテ暗白色ヲ呈シ其邊緣內方ニ屈曲シテ雄蘂ヲ抱擁ス五雄蘂花瓣ノ前面ヨリ生ジ之レト對生シ其一部ハ花瓣ニ覆ハレ花絲矮短其葯圓形ヲ爲シ花時分綻シテ花粉ヲ吐出ス實礎ハ蕚ノ筒中ニ在テ之レト附着セズ球形ニシテ三室ヲ有シ各室一個ノ卵子アリ花柱極メテ矮短厚重柱頭三個ニ缺刻ス果實ハ漿果ニシテ類球形ヲ爲シ其基部筒狀ノ蕚ヲ存シ初メ暗黃色ヲ呈スト雖𪜈稔熟スルニ從ヒ赤色ト爲リ終ニ紫黑色ト變ズ長サ二分餘ノ柄ヲ有ス子殼及ビ果肉ハ菲薄ニシテ肉中水分ヲ有シ石核ハ二個罕レニハ三個腹部扁平ニシテ背部ハ凸圓形ヲ爲シ角質平滑黃色ヲ呈ス種子一個形チ石核ニ似テ皮膜ハ薄ク黃色ヲ呈シ基礎部ノ他ハ石核ニ密着ス而メ種子ノ基礎部ハ硬堅角質ニシテ圓形ヲ爲シ白色ヲ呈ス胚子ハ鮮綠子葉ハ大イニシテ扁平根芽ハ細小微カニ蛋白質ヲ有ス根ハ赤色ヲ呈ス

本植物ハ歐羅巴ノ殆ンド全土ニ自生シ西伯利,高加索部,亞弗利加,地中海沿岸諸國ニ蕃殖シ英倫ニテハ森林,叢藪,及ビ籬笆等ニ蕃殖シ殊ニ粘土質ノ濕地ニ多シト

本植物ハ初夏ニ於テ開花シ第七月ニ至リ其果實稔熟ス

本植物ハ佛國ヨリ種子ヲ購求シテ十九年五月三十一日之ヲ東京衛生試驗所藥草試植園ニ播下セシニ七月中旬ヨリ發生シ漸次ニ成長シ廿一年六月ニ至リ開花ス

藥品　拉謨奴斯　Rhamnus.

拉謨奴斯ハ本植物ノ皮部ニシテ若樹ノ幹及ビ老樹ノ枝杪ヨリ剝取ス日本藥局方及ビ日耳曼藥局方ニハ藥用トス英國印度及ビ合衆國藥局方ニハ用ヒス

採收　拉謨奴斯ハ春月剝取シ注意シテ乾燥シ貯フベシ但シ老樹ノ幹ヨリ剝取セシモノハ醫藥ニ適セザルガ故ニ採收ス可カラス

性質　拉謨奴斯ハ管狀ニ卷曲セル樹皮ニシテ長サ三十〔センチメートル〕厚サ一乃至二〔ミリメートル〕ニ至リ外面ハ灰褐色ニシテ光輝ヲ帶ビ延長セル類白色ノ疣ヲ有シ其表皮ヲ剝脫スレバ赤褐色ヲ呈ス內面ハ暗褐色ニシテ其橫斷面ハ矮短ナル纖維形ヲ顯ハシ類黃色ヲ呈ス生鮮ナルモノハ不快ノ臭氣ヲ有スト雖𪜈乾燥ノモノハ殆ンド無臭ニシテ味ハ微ニ甘シ日本藥局方ニ云拉謨奴斯ハ厚サ一乃至二〔ミリメートル〕ノ卷旋セル皮ニシテ稚幹若クハ大枝ヨリ取リ外面ハ灰色乃至褐色ヲ爲シ橫ニ延長セル抱疣ヲ有ス內面ハ褐赤色ナリ抱層ハ甚ダ薄ク鱗層狀ニ剝離シ易ク其內部ニ洋紅色ヲ呈ス其縱破折面ハ拘櫞樣黃色ノ纖維ヲ現ハス味ハ微甘ニシテ苦ク粘滑ナリ

本品ニ熱湯ヲ注テ得タル液ニ過格魯化鐵ヲ加フレバ溷濁セズシテ深褐色ヲ呈スベシ」トアリ

成分　主成分ハ〔ラムノキサンシイン〕一名〔フラングリン〕(Rhamnoxanthin or frangulin) トス其他二種ノ樹脂,鞣酸,小量ノ越幾斯質ヲ含有ス而シテ樹脂ノ一ハ依的兒ニ溶解シ他ノ一ハ酒精ニ溶解スト雖𪜈依的兒ニハ溶解セズ又拉謨奴斯中ニ含有スル苦味質モ亦樹脂樣ノ物質ト云フ

ラムノキサンシイン」ハ黃色不結晶ノ物質トス Casselmann 氏ノ說ニ據レバ拉謨奴斯ハ黃色不結晶ノ樹脂樣物質ヲ有シ大枝ノ皮部ニハ多量ニ含有シ稚幹ノ皮部ニハ多量ノ樹脂樣物質ヲ有スト Bentley 氏云拉謨奴斯ノ有効成分ハ確言スルヿ能ハズト雖𪜈 Binswanger 氏ノ說ニ從ヘバ其瀉下ノ効驗アルハ樹脂樣苦味質ニ因ルモノトス氏ノ苦味質ト稱セシモノハ恐ラクハ Casselmann 氏ノ黃色不結晶ノ樹脂樣物質ナラント又本藥ハ樹皮ノ老若ニ因リ

其含有スル成分ヲ異ニシ稚幹及ヒ若枝ヨリ得タルモノハ黄色不結晶ノ樹脂樣物質ヲ含ムヿ多量ニシテ其効驗モ亦著シト生藥學ニ云 Frangulin（フラングリン） ($C_{20}H_{20}O_{10}$) ナル配糖躰（グリコシード）ヲ含ム此化合品ハ黄色細微ノ結晶ヲナシ亞爾加里ニハ紫紅色ヲ現ハシテ溶解シ其溶液ヲ煮沸スレバ砂糖ト結晶ヲ有スル〔フラングリ酸(Frangulinsäure $C_{14}H_{10}O_5$)ナル酸トノ二物ニ分裂ス而シテ稀釋酸類モソ亦能ク此分解ヲ誘起スルモノトス有効成分ハ〕フラングラ酸(Frangulasäure)ト稱スル酸ニシテ無結晶ヲ爲シ未ダ其性狀ノ判明ナラザルモノトス」トアリ

醫治効用　拉讀奴斯ハ瀉下ノ一良藥トス日耳曼,和蘭及ビ歐羅巴諸國ニテ久シク之ヲ用フ近來英國ニテモ瀉下藥ト爲シ大イニ之ヲ貴重スト此藥性溫和ニシテ其効驗アルヿ確實ナリ而シテ旃那及ビ他ノ瀉下藥ニ比スレバ其味稍々快活ナルニ因リ小兒ニ用フ習慣性便秘ニ用ヒテ効驗アリ常ニ煎劑又ハ越幾斯篤拉屈篤ト爲シ應用ス

本植物ヲ培養シテ木炭ヲ製シ火藥製造用ニ供ス所謂濶葉鼠李ト稱スルハ本植物ナリ

信州戸隱山植物採集目錄

三　好　學

予昨年夏時信州戸隱山ヘ趣キタリ,該旅行ハ予ガ專攻スル地衣植物研究ノ目的ナリシヲ以テ,山中旅行ノ際モ主トシテ右植物ヲ採集シ,顯花植物及ビ石松,羊齒,蘚,苔等ニ屬スル隱花類ノ採集ハ甚ダ僅々ナリシ,然レドモ尙ホ少シク採集シタルモノアレバ,今茲ニ其目錄ヲ掲出スルヿトナセリ,尤モ地衣ノ分ハ,他日別ニ表記スベシ

LIST OF PLANTS COLLECTED ON Mt. TOGAKUSHI, SHINANO.

(*Exclusive of Lichenes.*)

By **M. MIYOSHI.**

信州戸隱山植物採集目錄（地衣ノ部ヲ除ク）

Trollius japonica, Miq.	キンバイサウ	*Ranunculaceæ.*
Anemone debilis, Fisch.	ヒメイチゲサウ	,,
Aconitum Lycoctonum, L.	レイジンサウ	*Ranunculaceæ.*
Thalictrum Rochebrunianum, Fr. et Sav.	シキンカラマツ	,,
Diphylleia Grayi, Fr. Schmidt.	サンカエフ	*Berberideæ.*
Arabis lyrata, L		*Cruciferæ.*
Arabis sp		,,
Viola sylvestris, Kit, var. grypoceras, Maxim.	タチツボスミレ	*Violarieæ.*
Dianthus superbus, L.	カハラナデシコ	*Caryophylleæ.*
Actinidia polygama, Planch.	マタタビ	*Ternstrœmiaceæ.*
Geranium eriostemon, Fisch.	グンナイフウロ	*Geraniaceæ.*
Hedysarum, esculentum, Led.	イハワウギ	*Leguminosæ.*
Potentilla Dickinsii, Fr. et Sav.	イハキンバイ	*Rosaceæ.*
Filipendula purpurea, Max.	キヤウガノコ	,,
Filipendula kamtschatica, Pall.	シモツケサウ	,,
Pyrus aucuparia, Gærtn, var. japonica, Max.	ミヤマナヽカマド	,,
Astilbe Thunbergii, Miq.	トリアシシヨウマ	*Saxifrageæ.*
Saxifraga lycoctonifolia, Max.	アラシグサ	,,
Saxifraga fusca, Maxim.	クロクモサウ	,,
Saxifraga cortusæfolia, Sieb. et Zucc.	ダイモジサウ	,,
Hydrangea paniculata, Sieb.	ノリノキ	,,
Tiarella polyphylla, Don.	ヅダヤクシユ	,,
Chrysosplenium flagelliferum, Fr. Schmidt.	ツルネコノメサウ	,,
Rodogersia podophylla, A. Gray.	ヤグルマサウ	,,
Sedum japonicum, Sieb. var.	ミヤママンネングサ	*Crassulaceæ.*

Sedum Kamtschaticum, Fisch. et Mey.	キリンサウ	,,
Epilobium Hookeri, C. B. Clark.	アカバナ	*Onagrarieæ.*
Epilobium angustifolium, L.	ヤナギラン	,,
Bupleurum multinerve, DC.	ハクサンサイゴ	*Umbelliferæ.*
Angelica sp.		,,
Galium verum, L. var. leiocarpum.	カハラマツバ	*Rubiaceæ.*
Asperula odorata, L.	クルマバサウ	,,
Patrinia palmata, Max.	キンレイクワ	*Valerianeæ.*
Boltonia sp.	ミヤマヨメナ	*Compositæ.*
Arnica angustifolia, Vahl.	ウサギギク	,,
Artemisia pedunculosa, Miq.	ミヤマオトコヨモギ	,,
Leontopodium japonicum, Miq.	ウスユキサウ	,,
Senecio nikoensis, Miq.	ボロギク	,,
Senecio flammeus, DC.	コウリンクワ	,,
Adenophora coronopifolia, Fisch?	ヒメシヤジン	*Campanulaceæ.*
Vaccinium vitis-idæa, L.	コケモヽ	*Ericaceæ.*
Epigæa asiatica, Max.	イハナシ	,,
Chimaphila japonica, Miq.	ウメガササウ	,,
Schizocodon soldaneloides, Sieb. et Zucc.	イハカヾミ	*Diapensiaceæ.*
Pedicularis resupinata, L.	シホガマギク	*Scrophularineæ.*
Pedicularis chamissonis, Ster. var. japonica, Max.	ヨツバシホガマ	,,
Veronica cana, Wall.	クハガタサウ	,,
Melampyrum laxum, Miq.	ミヤマママヽコナ	,,
Thymus serpyllum, L. var. vulgaris, Benth.	ヒヤクリカウ	*Labiatæ.*
Calamintha umbrosa, Benth.	ミヤマトウバナ	,,
Brunella grandiflora, Mœnch.	タテヤマウツボグサ	,,

Polygonum sufflutum, Max.	クリンユキフデ	*Polygonaceæ.*
Polygonum cuspidatum, Sieb. et Zucc.	イタドリ	”
Polygonum sachalinense, Fr. Schmidt.	オホイタドリ	”
Elastema umbellatum. Blume.	ウハバミサウ	*Urticaceæ.*
Salix Sieboldiana, Bl.	イハヤナギ	*Salicineæ.*
Pinns parviflora, Sieb. et Zucc.	ゴエフマツ	*Coniferæ.*
Orchis aristata, Fisch. var. angustata, Max.	ハクサンチドリ	*Orchideæ.*
Gymnadenia conopsea, R. Br., var. ussuriensis, Regel.	チドリサウ	”
Platanthera hologlotis, Max.	ミヅチドリ	”
Hemelocallis minor, Mill.	キスゲ	*Liliaceæ.*
Maianthemum bifolium, DC.	マヒヅルサウ	”
Juncus sp.	イト井	*Juncaceæ,*
Luzula campestris, DC.	スズメノヒエ	”
Carex podogyna, Fr. et Sav.	タヌキラン	*Cyperaceæ.*
Carex Morrowii, Boott.	カンスゲ	”
Deyeuxia sachalinensis, Fr. Schmidt.	ヒメノガリヤス	*Gramineæ.*
Melica nutans, L.	コメガヤ	”
Brylkinia caudata, Fr. Schmidt.	ホガヘリガヤ	”
Poa sp.		”
Bambusa tessellata, Munro.	クマザヽ	”
Lycopodium serratum, Thunb.	タウゲシバ	*Lycopodiaceæ.*
Lycopodium clavatum, L.	ヒカゲノカヅラ	”
Lycopodium japonicum, Thunb.	マン子ンスギ	”
Asplenium Trichomanes, L.	チヤセンシダ	*Filicineæ.*
Aspidium aculeatum, Sw.	イノデ	”
Aspidium polylepis, Fr. et Sav.	ミヤマクマワラビ	”

Aspidium muticum, Fr, et Sav.	ミヤマカナワラビ	*Filicineæ.*
Aspidium spinulosum, Sw. var. dilatatum, Hook.	シラネワラビ	,,
Aspidium Oreopteris, Sw.	オホバショリマ	,,
Polypodium Phegopteris, L.	ミヤマワラビ	,,

LYCOPODIUM ノ胞子ノ萌發

三好學

該屬植物ノ胞子發芽ノ狀態ニ就テハ,從來,不明瞭ノ點多カリシガ,今日ニテハ,全ク明知スルヲ得ルニ至レリ,今此事ニ就テ研究シタル學者ノ發見ヲ下ニ略記スベシ.

De Bory 氏ハ *Lycopodium inundatum* ノ扁平体（プロサリウム）ノ發生ヲ檢シ,其最初ノ狀態ヲ觀察シタルニ,先ヅ胞子（スポア）ノ外被（エキソスポリウム）ハ,三箇ノ瓣膜ニヨリテ開キ,其中ヨリシテ內被（エンドスポリウム）ヲ出セリ,而シテ其芽莖ハ地平ノ方向ニアル膜隔ニヨリテ上下二箇ノ細胞ニ分割シ,下部ナル基底細胞ハ依然トシテ變ゼザリシガ,上部細胞ハ頂細胞トナリテ發育シ,又更ニ二列ノ區劃ヲ爲スニ至レリト云フ」,次ニFankhauser 氏ハ千八百七十二年,瑞典ニ於テ,*L. annotinnm* ノ扁平体ヲ蘚（コケ）中ニ發見セリ」,又 Bruchmann 氏ハ千八百八十四年八月,「チユリンゲン」ノ林中ニ於テ, *L. annotinum.* ノ三箇ノ扁平体ヲ發見セリ,氏ノ記スル所ニヨレバ,(Bot. Cent., 1885.)氏ガ發見シタル扁平体ハ,前ノ Fankhauser 氏ガ發見シタル同植物ノ扁平体ヨリモ更ニ幼時ノ狀態ニアリシヲ以テ,前學者ノ觀察セル欠點ヲ補フコヲ得タリト云フ.

然レド此點ニ關シテ最重要ナル者ハ,即チTreub 氏ノ實驗觀察ニシテ,(Ann. d. Jard. Bot. d. Buitenzorg. IV. 1884.) 氏ハ「ブイテンツォルグ」ニ於テ, *L. cernuum* ノ胞子ヲ培養シテ之ヲ發生セシメ,且ツ又天然ニ發生セル扁平体ヲ發見シテ觀察シタリ,氏ノ記スル所ニヨレバ,充分發達セル扁平体ハ,長サ$\frac{1}{12}$「インチ」斗ナル圓柱体ニシテ,直立シテ生長シ,其下部ハ黃色,其上部ハ鮮美

ナル綠色ニシテ且ツ數多ノ裂片ヲ有ス,裂片ノ基底ハ根毛ヲ有シ,其中央ニ原初突起(チユバークル)アリ(氏ハ此原初突起ノ細胞ニ一種ノ寄生菌絲ヲ屢〻發見シタリ,氏ノ考ニハ是レ一ノ共生物ナラントテフ又Bruchmann.氏モ*L.annotnium.*ノ扁平体ノ中ニ*Chytridieæ.*ノ游泳胞子ナラント思ハルトモノヲ發見セリ.)此突起ハ頂胞ノ分裂ヨリ生シタルモノナリ,斯クシテ氏ハ該圓柱体ノ周圍ニ在ル裂片ノ下底ニ於テ,雄器(アンセリヂア)及ビ雌器(アーケゴニア)ヲ發見セリ,(此ノ如ク雌雄器共ニ共一ノ扁平体ニ潛在スルヲ以テ,之ヲ一家扁平体ト云ヒ,以テ他ノ *Isoetis, Selaginella* ノ如キ,二家扁平体,即チ雌雄器各〻別々ノ扁平体中ニ潛在スルモノト區別スルナリ,)此雄器ハ前ノ Fankhanser. 氏ガ*L. annotinum* ノ扁平体中ニテ觀察シタルモノニ均シク,又 *Marchantiaceæ*, 及ビ *Ophioglossaceæ*. ノ場合ニ於ケルモノト似タリ.

扨又此雄器ハ扁平体ノ一ノ輪邊細胞ヨリ生スルモノニシテ,後其細胞ガ內外二箇ニ分裂シ,外部細胞(此細胞ハ後ニ二枚ノ縱膜ニヨリテ更ニ三胞トナル)ト,內部細胞トニ分カレ,內部細胞內ニハ雄精ヲ生ズ,雄精ノ形狀ハ未ダ判然タラザレトモ,氏ノ說ニヨレバ,亦彼ノ *Selaginella* ノ雄精ノ如クニ,二箇ノ纖毛ヲ有スルナラントテフ,」又雌器ノ方ハ三重ノ細胞層ヨリ成レル短頸ヲ有シ,而シテ一ノ基底細胞ニ當ルモノハ見得ラレズ,且ツ又卵球(オースフエア)ノ周邊ニ於テ特別ノ被膜ナシ.

斯クシテ雌雄兩器成熟スルニ及デ,雄精ハ卵球ヲ胚胎セシメ卵子(オースポア)トナス,卵子細胞ハ頻リニ分生シテ,一ノ緻密ナル捧狀体ヲ作リ,其下方ハ扁平体ニ接續シ,其上方ニハ又圓柱狀ノ組織アリテ,其頂尖ヨリシテ嫩芽ヲ發生ス,芽ノ後端ハ圓クシテ微毛アリ,而シテ芽体ハ未ダ尙ホ種々ノ部分ニ別カレズ,故ニTreub.氏ハ之ヲ胚突起(エムブリオニツク,チユバークル)ト名ヅケタリ,後,該突起ノ內方ニ於テ始メテ眞ノ側生根ヲ發生ス,故ニ此場合ニ於テハ所謂ユル初生根ナルモノナシ.

(上說ハ先年植物學研究會ニ於テ談話シタル草案ノ一部ナリ)

日本植物家列傳

山本輔頼

第三 小野蘭山傳

小野職博,字ハ以文,蘭山ハ其號ナリ,又衆芳軒朽匏子ト號ス,通稱ハ喜內,京

師ノ人,本ト佐伯氏,父ヲ職茂ト曰フ,從四位下主殿大允兼伊勢守タリ,二子ヲ擧グ,長ハ職考,父ノ任ヲ襲グ,季ハ則チ蘭山ナリ,蘭山幼ニシテ好ンテ書ヲ讀ム,松岡玄達ニ從ツテ植學ヲ學ブ,年二十五意ヲ仕進ニ絕チ,帷ヲ下タシテ學ヲ講ズ,植物ヲ採ルノ外戸外ニ出デス,戌ニシテ寢ネ丑ニシテ起キ,隨テ讀ミ隨ツテ抄ス,數十年猶一日ノ如シ,年老ヒテ志愈篤ツシ,學成リテ名益顯ハレ,植學ヲ修ムルモノ,遠近響至シテ,業ヲ門下ニ受ク,蘭山人トナリ,恬冲垣靜,語言低小,言フ能ハザル者ノ如シ,姓最モ强記,耳目ノ過クル所,終身忘レズ,其植學ヲ講ズルヤ,群藉ヲ徵引シ,參照明白,品物ノ形狀ヨリ,地味ノ良苦ニ至タル迄テ,諄々遺ス所ナシ,其物ヲ辨ヅルヤ,幽谷ヨリ出デ,或ハ殊方ヨリ來レル怪異珍奇,罕ニ觀希レニ有ルノ品ト雖モ,一目シテ其名ヲ指シテ,其產スル所ヲ云フ,聽ク者嘆服セザルナシ,其人ニ接スルヤ賢愚トナク容色必ラズ恭クシ,弟子ヲ敎ユル孜々倦マズ,寬政十一年,蘭山年七十一,幕府ノ辟ニ應シ,江都ニ赴ムキ,擧ケラレテ醫官トナリ,植學ヲ躋壽館ニ講シ,醫官ノ子弟ヲ敎導ス,是レヨリ先キ,蘭山ノ幕府ニ辟サルヽヤ,京尹使ヲ〆命ヲ將スルノ日ヲ剋セシム,期ニ及ビテ蘭山之レヲ忘レ,夙朝門生ト野外ニ採集ス,京尹其不敬ヲ怒リ,其徵命ヲ止ム一年可カリノ後更ラニ此命アリト云フ,初メ蘭山ノ京師ニアルヤ,資力限リアリ,搜索遠キニ及ブ能ハズ,是ニ至リテ意ヲ搜索ニ恣ニスルヲ得,年已ニ老ユルト雖ドモ,猶岩岫ノ間ニ徒步シ,欣然勞ヲ忘ル,其苦志力學壯時ノ如シ,書室ノ內,典籍羅列,珍藥奇品,嚢ニ盛リ笥ニ儲ヘ,碎玉怪石,草木ノ花實根核,羽毛鱗介蟲豸ノ屬,或ハ盆栽ニシテ架上ニ排シ,或ハ乾腊ニシテ壁間ニ揭ケ,或ハ圖シテ卷册トナス,古書畫,古器物,洋舶諸物ノ如キハ,實ニ席上ニ狼藉タリ,蘭山僅カニ身ヲ其間ニ容レ,兀坐披對シ,時ニ或ハ獨酌微醺ニ詩ヲ賦シ,笛ヲ吹キ,怡然自カラ娛シム,督醫學事丹波元簡,一見シテ之レヲ稱シテ曰ハク,眞ニ神仙中ノ人ノ如シト,享和二年壬戌ノ冬,孫子德門人ト本草啓蒙四十卷ヲ筆記シ,蘭山ノ正訂ヲ經テ梓ニ上ボス,蘭山畢生ノ必力,實ニ之レニ寓スト云フ,元簡其書ニ敍シテ曰ハク,啓蒙之書者.疑者決之.

謬者匡之·審辨細釋·鴻纖無遺·抑謂我邦本草之學·至于此·集大成歟·洵醫家必用之偉寶也·則老師國手必不得不藉檢查于此書也·啓蒙云乎哉格物多識·夫子嘗稱之·先賢曰·一物不知君子恥之·則學士大夫必不得不架藏此書也·本草云乎哉·余因窺翁爲人·沈靜古朴·澹然於世味·性最强記·凡人持草木諸物而問之·莫不衡口而答·答必擧數名引數證以告焉·嗚呼殊方絕域·山巓水涯之品·其區而其別·何有所限·而應答能如是·則不知翁之胸中儲畜幾千萬種也ト,文化七年春,黄參說一篇ヲ著ハス,凡ソ二千餘言,將サニ死セントスルノ際ニ及ビ,自カラ筆ヲ執ル能ハズ,子德ヲシテ數字ヲ改竄セシメ,遂ニ逝ク,歲八十二時ニ同年正月二十七日ナリ,蘭山奇行アリ,年十八,家婢ニ通ジテ一子ヲ擧グ,喜ヒテ曰ハク人世ノ通義既ニ終ハルト,因ッテ其婢ヲ出タシ,終身娶ラズ,其子ヲ以テ安倍氏ノ養子トナシ,其家ヲ繼カシム,有義トタ名ツク,幕府ニ仕フ,後子德ヲ生ム,蘭山江都ニ徙ツルニ及ヒ,子德之レニ從フ,遂ニ本姓復シテ,家學ヲ受ク,蘭山著書頗ブル富ム,本草啓蒙,黄參說,草木十品考,本草正僞等,其最モナルモノナリ(皇國名醫傳,事實文編,續諸家人物志,續先哲叢談,學士會院雜誌)

赭鞭生曰ハク化學家ぶんせん氏(Bunsen),嘗テ或女ト婚ヲ約シ,日ヲ剋シ與ニ寺院ニ會スルヲ誓フ,然カルニ期ニ至タリ化學ノ實驗ニ耽ケリ,遂ニ之レヲ忘却シケレバ,其女大ニ怒リ,直ニ其約ヲ解ケリト云フ,今蘭山ノ植物採集ノ爲メニ,幕命ヲ忘却スルモノ,其事異ナリト雖トモ,其趣ハ則チ一ナリトス,理學者ノ世味ニ澹然タル,實ニ想フ可キナリ,夫レ然リ,是レヲ以テ其學該博盡サヾルナグ,今ニ至リ斯學ニ從事スルモノ,爭ッテ其功ヲ稱ス,曷ゾ研精勉勵ノ德ニアラザルナキヲ知ランヤ,佛國ノ植學家さばちゑ氏(Savatier),嘗テ蘭山ヲ稱シテ東洋ノうんねうす(Linnæus)トナス,蓋シ至評ト謂フベキナリ.

植物界之美妙

堀正太郎

植物界之美妙

緒言

宇宙覆載ノ間一種玄妙奇異ノ活力ヲ有シ或ハ動キ或ハ自營シ或ハ生殖シ或ハ智覺シ以テ一己獨立ノ體ヲナスモノ之ヲ生物ト云フ生物ハ區分シテ動物及ヒ植物トナス動物幷ニ植物ノ地球上ニ生活スルヤ自然淘汰採擇ノ爭鬪界ニ處シテ其生ヲ安全ニ保續シ子孫繁營種族永續ニ汲々トシテ一日モ怠ル可カラサルモノナリ生物ノ一箇體ヲナスヤ外界ノ刺擊ハ瞬時間モ猶豫アラサルナリ風雨雪霜ニ遭遇シテ適當ノ防禦手段ナヲザル可カラス外敵ノ襲來之ニ備フルノ具ナカルヘカラス食物ノ進取ニ鋭敏ナラザル可カラス生殖ヲ全フセンカ爲メニハ雌雄撰擇ハ已ムヲ得サルモノナリ夫レ生物學ハ此等凡百ノ事理ヲ講明スルモノニメ普通人ノ見テ以テ美麗トナシ醜惡トナシ奇異トナシ平凡トナスモノ皆悉ク深遠宏大ノ學理ノ存スルアリテ一トシテ之ヲ偶然ニ附ス可カラサルモノナリ莫大ノ美妙玄微ノ事項悉ク其目的ニ依リテ起リ其用途ナクシテ消滅スルモノニシテ决シテ必用ナクシテ存スルモノナシトハ是レ生物實利主義ノ唱フル處ナリ予カ今記述セント欲スル處ノモノハ暫ク植物界ノ範圍ニ止メ勉メテ普通的凡百ノ植物界ニ存スル美妙玄微ノ事實ヲ説明セント欲スルモノナリ

第一　蓮玉

蓮葉のにごりにしまぬ心もて何とて露を玉とあざむく　遍照

蓮葉雨露ヲ受ケテ盡ク珠玉ト變シ白銀ト化シ轉々球滴トナリテ去ル是レ蓮池ニ臨ンテノ一奇觀ナリ水底ニ沈降セル葉ニアリテハ銀葉ノ輝クカ如ク是等ノ奇觀ハ通常平滑ナル葉ヲ有スル植物ニ見ル處ニシテ殊ニ水草ニ多ク然リトナス即チ睡蓮科植物(ひつじぐさ,はす,じゆんさい,かはほね,とちかゞみ)ノ如キ是レナリ此等植物ノ雨露ヲ受ケテ些少モ濕潤スルヿナク直ニ球滴トナリテ飛散シ其痕跡ダモ止メサルモノ特種ノ構造ナクンハ得ス特別ノ必用ナクンハ得サルナリ此奇觀ハ他ノ植物葉ニ多ク見サル處是レ其美妙ノ美妙タル所以ナリ

ソモ植物ノ葉ハ太陽ノ光線ヲ受ケテ大氣中ノ炭酸瓦斯ヲ吸收シ之ヲ分解シ而ソ又葉ニアル處ノ小孔所謂氣孔ヨリソ不絕植物体中ノ水氣ヲ蒸散スルモノナリ此氣孔ハ通常庭園ニ栽培スル處ノ植物ニアリテハ多クハ葉ノ裏面ニアリテ然シテ葉ハ大抵水平ニ展開セルモノナルカ故ニ降雨ノ時ト雖モ裏面ハ遂ニ濕潤スルヿナシ然レ𪜈植物ノ種類ニヨリテ氣孔ハ必スシモ葉ノ裏面ニ限ラス上面ノミニアルアリすもゝ,しうめいぎく,つばき,ゆず,あじさゐ,じやがたらいも,はす,かはほね ノ如キ是レナリ上下兩面ニアリテ下面ノ數多キモノ なづな,とうもろこし其例ナリ上面ノ數多キモノ ともだか,いときんぽうけノ如キ是ナリ又通常直立セル葉ニアリテハ氣孔ハ兩面ニ平等ニ分布セリ凡ソ葉ノ上面ハ常ニ雨露ニヨリテ濕潤スルモノナリ然レ𪜈葉面ノ永ク雨露ニ依リテ濕潤セハ其面ニアル處ノ氣孔ハ其守衛細胞ニ依リテ其口孔ヲ密閉シ緊要ナル瓦斯ノ蒸散ヲ防碍ス是レ大ニ葉ノ生理作用ヲ害スルモノナリ

今蓮葉ヲ取リ之ヲ水中ニ沈メ日光ニ暴露セハ暫時ニシテ微細ノ氣泡水面上ニ上騰スルヲ見ル可シ是レ葉ノ日光ニ依リテ水中猶ホ其生理的作用ヲ爲シテ瓦斯發散ヲナスモノナリト雖𪜈若シ一旦蓮葉面ヲ磨擦シ然シテ再ヒ之ヲ水中ニ沈下セハ遂ニ再ヒ氣泡ノ發散ヲ見サルヘシ

又降雨ノ際牧場ニアツテクローヴァーハ其葉上面ニ雨ヲ受クルト雖𪜈些少モ濕潤スルヿナク反テ其裏面ノ全ク濕氣ヲ帶ブ

葉ノ雨露ニ依リテ濕潤スル時ニ當リテハ瓦斯ノ發散ニ有害ナリ然ルニ其葉ニシテ光線ヲ享クルノ好位置ニ配列セルモノハ又雨露ニ濕潤スルノ好位置ナク一害ノ一利ニ隨伴スル是レ免カル可カラサルノ定數ナリ然ラハ如何ニシテ其害ヲ避ク可キカ雨露ヲ享クル是レ已ムヲ得サルニ出ツ之ヲ享受シテ而シテ濕潤セサラシムルノ方法手段實ニ緊要ナリトス

多クノ葉ハ氣孔其下面ニアリ故ニ自然ニ雨露ノ害ヲ免ルルモノナリ然レ𪜈はすノ如キ水草ニアリハ嫩葉ハ常ニ水中ニアリ長ソ水面上ニアリト雖𪜈常

ニ水ハ葉ノ下面ヲ潤スノ患ナキヲ得ス況ンヤ水面ニ泛フモノヲヤ故ヲ以テ水草ハ氣孔常ニ葉ノ上面ニアルヿ是レ定則ナリ叉ホーンフェルト氏ノ實驗ニ依レハ地下葉ハ其氣孔分布ニ偏頗アルヿナク兩面平等均一ニ散布スルカ或ハ反テ上面ニ數多キヲ見ル是レ全ク氣孔分布ハ濕潤ノ害ニ相關スルモノタルヲ明スルモノナリ其氣孔ノ葉ノ上面ニアリテ常ニ雨露ヲ受クルモノニアリテハ適當ノ防禦的ノ方法アリテ存ス蓮葉ヲ摩擦シ水中ニ沈下セハ瓦斯ノ發散ヲ見サルモノ一ニ其防濕機ヲ消亡シタルニ期ス(クローヴー)ノ上面ニ水ヲ受ケテ下面ノ反テ濕フモノ其下面ニ防濕機ヲ具ヘサルニ依ルノミ然ラハ其防濕機トハ何ンソヤ

凡テ雨露ヲ受ケテ而シテ濕潤セサル葉ニアリテハ蠟質ノ物体葉ノ表面ヲ被包シ水ヲシテ反轉球滴トナリテ飛散ス氣孔ノ上面ニアルモノハ此蠟質ノ物体即チ「ブルーム」之カ防濕機トナリテ保護ス此「ブルーム」ノ存在ト氣孔ノ分布ハ實ニ密接ノ關係ヲ有スルモノニシテ今フランシス,ダ｜井ン氏ノ實驗說ヲ假リテ其理ヲ證明ス可シ

	無 無	無 ブルーム	ブルーム 無	ブルーム ブルーム
氣孔下面ニアルモノ	55%	83%	10	38%
氣孔上面ニアルモノ	54%	17%	100	62%

上ノ表ニヨリテ「ブルーム」ノ存在ハ氣孔散布ト關係アルヿ自ラ明カニシテ一種ノ防濕具タルヿ疑フベクモアラス此「ブルーム」ナルモノハ樹蠟ノ細分子ヨリナリ葉面ノ「キユテイクル」ヲ覆フモノナリデバークー氏之ヲ四種ニ區別セリ通常「ブルーム」ト稱シ指頭ニヨリテ容易ニ脫落スルモノ二種ヨリナル(一)微細ノ針狀ナルモノ即チ(ユーカリプタス),(アケシア)及ヒ禾木ニ見ル處ノ白粉是レナリ叉粒狀ニシテ數層ヲナシ表皮ヲ覆フモノとうでま其適例

ナリ(二)球粒ニシテ平等ニ撒布セル單層ヨリナルモノ彼ノ球葱はぼたん等ニ見ル處ニシテ最モ普通ノモノナリ(三)細長ナル捧状ヨナリ皮上ニ駢列シ其ノ上端卷縮セルモノ甘蔗ニ見ル(四)集合被覆体ニシテすべりひゆニ見ルモノ是レナリ

又林檎,葡萄等ノ熟果ノ表皮ハ白色ノ粉末ヲ以テ覆ヘルヿ皆人ノ知ル處ニシテ彼ノ蓮葉面ニ氣孔ヲ保護スル處ノモノト其性質ヲ同フシ其目的ヲ等フスルモノナリ

植物解剖學獨案內第五

細胞の形状細胞膜

細胞の形状は種々樣々にして或は球形なるものあり或は多角形なるものあり或は星芒状をなすものありテーブル形をなすものあり或は短きあり或は長きありて一樣ならず獨案內第五に於ては此等形状の異なりたる細胞の重なるものを鏡下に檢するを以て業となすべし

之を檢するに當り先づ初にジュシヤルトル(Duchartre, Eléments de botanique)氏が細胞の形状の分類表を揭げて以て讀者の一閲を煩はすべし

細胞形状の分類表

細胞短し

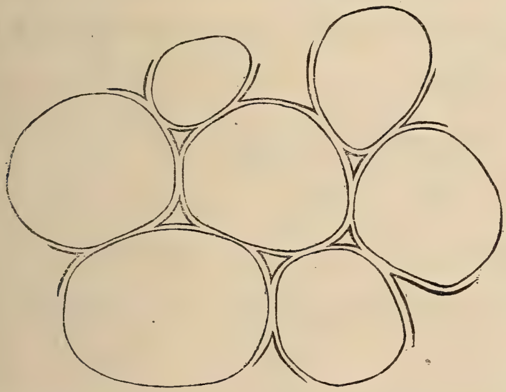
- 突起樣のものなし
  - 細胞球形或は卵形切り口は圓形或は卵形 (一)
  - 細胞ハ多角形 (二)
  - 細胞は平行方体切り口は長方形 (三)
  - 細胞はテーブル形切り口は長き長方形 (四)
- 突起樣のものあり
  - 細胞には短き不規則の突起あり (五)
  - 細胞は星芒状突起は長く規則正し (六)

細胞長し

細胞はシリンドル形其端は軸に直角或は僅に傾く (七)
細胞は柱形其端は軸に直角或は僅に傾く (八)
細胞は紡綞形其端は斜にして尖る (九)

第一に球形の細胞を檢すべし之を撿するには種子の子葉尤も適當す今次にはエンドウマメの種子を用ふれども決して之に限るに非ずソラマメなれ或は何なれ便宜の者を用ゐて可なり先づ種子の皮を剝ぎ去りて之を見るに二枚の子葉と一本の子葉下軸 (Hypocotyledonary portion 或は分類上の語にてRadicle といふ)とあり今この子葉の薄き切り口をこの軸と直角の方向に切りて撿するに第十二圖の如き狀を呈す細胞は澱粉蛋白質その他の物を含有すれどもこゝには之を無きものと見做し單に細胞の輪廓のみを檢すべし扨之を見るに細胞は皆その切り口圓形或は卵形なり細胞と細胞との間には三角形の空隙ありそれには空氣充滿するが故に暗黒色を呈す

第十二圖



この度は向きを更へて子葉を軸と平行に且子葉の平面に直角に切るべしこれ又第十二圖の如き狀を呈す又再び向きを更へて軸に直角に子葉の平面に平行に切るも亦同し

以上の如く三方に切るも細胞は常に卵形或は圓形の切り口を有すされば この細胞の眞の即固形的の形狀は如何我々の鏡下に撿ずる所は唯細胞を平面として見たる形狀のみ之を固形体として見ず之を固形体として見るには前の如く三方に切りて之を自身の腦中にて組み合せ如何なる形狀なるやを考ふるにあり此の場合に於てはその形狀は極めて簡單にして細胞は三方共

に圓形或は卵形なるが故に球形或は卵形体と考ふべし故に此の子葉の組織は卵形或は球形の小石の固着したるが如きものなり即ちジュシャルトル氏分類表の(一)に相當するものと知るべし

雜錄

菌類の誘導的性質

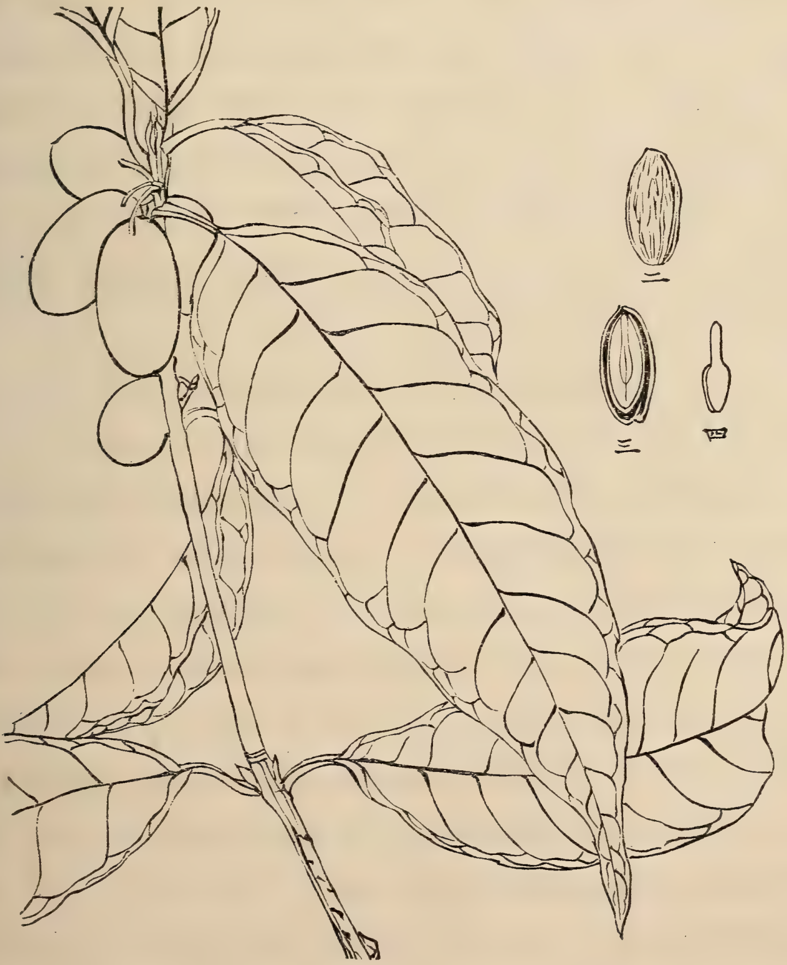
我輩は前號の雜誌に Charles R. Straton 氏が Nature 雜誌に掲げたる論文を轉載し,且つ我輩の説をも少しく附加したり. 然るに其後 M. C. Cooke氏 W. G. Smith 氏等は此説に反對したる論文を同雜誌に掲載して,菌類の香色の動物に關係あるや否やは未だ明瞭ならざる旨を述べ,且つ Agaricus (Psalliota) campestris は Straton 氏の説に依れば動物の体中に寄生するの期あるが如くなれども,決してさる事はなしと Smith 氏は斷言せり. 兎に角此問題は更に深く研究すべきものなり.

もくせい(巖桂)結實ノ説 附圖

藤野寄命記

もくせいハOleaceæ即阿利襪樹科ニ屬スル恒翠喬木ニメ羅甸名ヲ Osmanthus fragrans, Lour. 漢名ヲ巖桂又木樨ト云其花香芳烈ナルヨリ天闕清香,九里香,仙客等副名多シ花ニ白色(微ニ黄色暉アレ𪜈)ナルト赤黄色ナルトノ二品アリ其白色ナル者ヲぎんもくせいト云群芳譜所謂銀桂是也其赤黄色ナル者ヲきんもくせいト云群芳譜所謂金桂,英華韻府歷階ニ Olea fragrans, var. Eubura. 丹桂花トアル是也又葉邊尖鋸齒アツテ猫頭刺（ヒラギ）葉ニ似タル者アリひらぎもくせいト云(本草圖譜喬木部四十三卷廿九葉ウラ)又花戶盆栽ニハ一年ニ數度開花スル者アリ所謂四季桂是也金桂銀桂俱ニ大樹アレ𪜈實ヲ結ブヿハ和漢共ニ稀ナリト見ヘ漢籍ニハ(楓窓小牘ト覺ユ)實ヲ結バズト云說アルニ至ル植物名實圖考卅三ノ十葉入種書譜四ノ卅二葉等圖アレ𪜈實ヲ載セズ又我邦著書ニテハ本草圖譜四十三卷廿七葉及廿九葉ニ圖アレ𪜈實ヲ載セズ飯沼慾齋翁遺稿草木圖說木部第一卷二

綱二目ニ該樹ノ圖説アレ𪜈實ノ圖説ハ缺乏（其有之モノハ予カ曾テ該書ヲ校セシ𪜀補添セシモノニ係ル）其他木犀ノヿヲ記スル書尠カラザレ𪜈實ノ形状ヲ解釋セシモノアルヲ未タ見聞セズ閩部疏ニ凡桂四季者有子唐詩所云桂子月中落此眞桂也トアレ𪜈其下條ニ江南桂八九月盛開無子此木犀也ト云句アレバ有子ト云桂ハ他品ナル知ルベク又汝南圃史桂花説中ニ有結子者ノ一句アレ𪜈形状ナキ而已ナラズ此句ハ却テ木犀ニ結實者稀少ナルヲ證スルニ足ル然ルニ予明治廿一年五月十六日



きんもくせい

一ハ全形　二ハ實ノ皮肉ヲ除タル核　三ハ核ノ縱斷　四ハ胚（凡テ自然大）

東京牛込區北町內海鉄氏底內ニテ銀桂（ギンモクセイ）ノ結實ヲ見ヲ得タリ因テ其概略ヲ記述ス其樹ハ高サ僅ニ七八尺ニメ幹ハ地上ヨリ一尺許ニメ數本ニ分ル完熟ノ實ヲ着クル數十顆而其着實多クハ枝梢對葉間ニ在リテ他ノ葉腋ニアルハ極メテ少ナシ全形 Olea americana ノ實ニ似長サ六分許圍リ一寸三四分許（曲尺ナリ）粉紫黑色外皮軟ニシテ薄ク肉ハ綠色ニメ甘臭アル液汁アリ內ニ一核アリ形チ圖ノ如ク核上陷道數條アリ蓋シ脉胳膜ノ迹ナルベシ核內ニ白色ノ仁アリ仁中ニ薏アリ當時內海氏ノ談話ニ一昨年ハ熟實少ナク昨年ハ熟實ヲ見ズ今年ハ熟實多シト然レバ該樹ノ結實ハ隔年カ或ハ一年ハ多ク一年ハ寡キヿ栗柹等ニ於ケルガ如クナランか以上記スルガ如ク銀桂ノ結實ハ已ニ之ヲ目擊ス金桂, ヒラギモクセイ, 等モ亦同ク完全ノ結實アルヤ否他日ノ撿索ヲ期ス

(本文引用スル本草圖譜ハ博物舘藏書ニテ他ニアル同書トハ卷數異ナリ看者諒之)

Woodsia insularis, Hance (こお絲しだ)今尙箱根ニ産ス

會員 大久保三郎

此ノ一羊齒ハ明治十九年本會々員牧野富太郎氏始メテ箱根ノ麓湯本ニ近キ風祭村ニテ發見セラレタリ其後余モ同植物ヲ採集セント欲シ同地ニ至リ搜索シタルモ當時コレヲ見出スヿ能ハザリシ其後牧野氏モ再ヒ箱根ニ此羊齒ヲ求メラレシニ前氏ノ採集セラレシ場處ハ道路ヲ修繕セシ時其生ゼシ處ヲ切リ開キタレバ今ハ一本モアラザリシト爾來屢々同地方ヘ至ル者アルモ再ヒ採集セシヿアルヲ聞カズ道路修理ハ以テ箱根ノ Woodsia insularis ヲ根絕セシセシニ至リシカ, 此ノ植物ハ牧野氏ノ爲メニ發見セラレタルヲ始ノ終リトナリシカト大ニ殘念ニ思ヒタリ, 然ルニ昨年十月圖ラズモ此ノ羊齒ヲ塔ノ澤近傍ニ於テ採集セリ故ニ現時尙同地ニ存在スルヿヲ記シ以テ同地ニ採集セント欲スル諸氏ニ告ゲントス.

本植物ノ形狀ハ大略下ノ如シ

根莖ハ短.鱗片ハ一分五厘前後.長楕圓狀披針形ニシテ淡赤色. 葉柄ハ三分以上一寸五六分アリテ葉ニ近キ處ニ節ヲ有ス.葉ノ輪廓ノ形狀ハ長楕

圓狀披針形ナリ長サ凡一半乃至三寸.二回羽狀鈍裂.六乃至八對ノ小葉ニ分裂ス.葉質薄弱ナラズ.葉ノ兩面ニ毛ヲ生ス而ノ上面ノ方最モ多シ.　芽胞房叢ハ緣邊ニ近ヅキテ各小葉每ニ一乃至四群ヲナス.總苞大ニシテ宿存シ.膜質.緣邊裂ケテ細毛狀ヲ呈ス

本植物ハ相州ノ外ニテハ土州ニ產アリ（本誌第三卷第二十四號六十五葉）其他ニテハ未タ產所ヲ聞カズ

れまく

大久保三郎

れにくハ昔時ハ菌類ノ一種ノ如ク思タリ.彼有名ナル菌譜ノ著者坂本浩然氏ハ其菌譜第二卷第九葉芝類中ニ圖說ヲ出セリ.又日光山志第四卷四十一葉ニ好圖ヲ載セ.金精峠ノ條中ニ“玆の山中に肉蓯蓉多ク生ズ其くさむらの名をもきむら茸ト呼リ此蕈ハ藥品ニシテ能腎經ヲ補助ス”云々トアリ.

然レ𪜈此植物ハ菌類ニモ非ラズ又他ノ隱花部內ノ植物ニモ非ラザルハ現時ハ少シク植物學ニ志ザス者ノ一目スレバ之レヲ知ルニカタカラス.坂本氏ハ“盖シ天麻ノ屬カ”ト記ルセリ然シ天麻和名れにのやがらハ蘭科ニ屬スル植物ナリ而シテ本植物ハ蘭科ニハアラズ.れにく一名きむられけ(日光ノ方言)ハはまうつぼ.なんばんきせる等ト科ヲ同フスル植物ニシテ即列當科(Orbanchaceæ)中ノ一植物ナリ. C.A. Meyer 氏ハ *Boschniakia glabra* ナル學名ヲ命ゼリ其形狀ハ次ノ如シ

れふくハ多肉ナル塊莖ヨリ莖ヲ抽シヿ數寸.大ナルハ尺餘ニ達ス地上莖ハ多肉淡肉色.嫩莖ハ淡黃色ノ鱗片ヲ以テ全莖ヲ覆フ.　鱗片ハ脚部多肉心臟形ニシテ先端銳形ヲナス.　花序ハ夥多ノ花ヲ有スル穗狀花狀ノ總狀ナリ.　蕚ハコップ狀ニシテ三鋸齒アリテ花冠ノ筒ヨリ短シ.　花冠ハ托上ニ生シ其筒脹起ス,上唇ハ全邊ニメ長ク下唇ハ短クシテ僅カニ三裂ス.　雄蘂ハ四個アリテ內二蕊ハ他二個ヨリ長シ共ニ花冠ノ筒ヨリ生ズ.　葯二室.柱頭二分ス.心皮略傾斜形ニシテ雙面凸圓形ヲナス.一室內ニ夥多ノ種子ヲ

有ス

此ノ植物ハ一ノ寄生物ナリ余ハ昨年八月日光白根山ニ至リ同山中ノ植物ヲ採集シ前白根ノ頂上近キ處ニテ登リ道ヨリスレバ右側ノ林中ニ數多ノおにくノ發生セルヲ見出セリ.依リテ如何ナル物ヨリ生ズルヤト早速堀リ始メ寄家ヲ搜子シニ杉箸程ノ太サノ根ヨリ生ジ居タリ.故此寄家ハ何者ニヤト漸次土ヲ除ケ行キシニ一二間程横ニ或ハ深ク或ハ淺ク堀リ行キテ終ニ此根ハ横行スル處ノ太キ根アリテサグル能ハザリシ然レ𪜈此横行セル大根ヨリ出セル數多ノ枝根ニハ幾個モおにくノ小ナルモノ寄生シ居タリ.仰デ其何樹ナルヤヲ見ルニ此樹ハみやまはんのきニテアリシ前ニサグリタル根モ此ノ樹ノ枝根ナルベシト信ゼリ

苔の莖に對する光と重力の作用

重力が顯花植物の莖に對し著しき作用あることは人のよく知る所なれども苔の莖には如何なる作用あるや未だ明ならずフランスの人ウージェーヌバスチー (Eugène Bastit) 氏ハ苔の莖と光及び重力との關係を研究せんとて之を水中と空氣中とに培養し此の研究を一昨年の五月より昨年の五月迄滿一年間行ひたりその研究の基く所次の四ケ條にあり

(一) 植物を暗所に培養すれば光の關係なく重力單獨の作用を知ることを得べし

(二) 上部のみより光線の來る器中に植物を培養すれば此の方向に來る光と重力との合併作用の結果を知ることを得べし

(三) 下部のみより光線の來る器中に培養すれば此の方向に來る光線と重力との合併作用の結果を知ることを得べし

(四) 通常の如く光線の來る所に培養すれば果して如何

此の四ケ條に因り培養法と行ひたるにその成蹟左のごとし

(一) 空氣中或は水中にても光の作用は重力の作用に勝る

(二) 莖は光源の位置如何に替ハらず常に光のある方に向く(Revue scientifique, Tome 46.)

エンゴサク科の乳管

エンゴサク科(ヤブケマン.キケマン等を入るベンザム及びフッケル氏は之をケシ科に合す)には乳管その他乳を含む機關なく之をその近きケシ科より區別するには乳管の無きをその一標徵たりしが近來レジェール (L. F. Léger) 氏の硏究する所によればエンゴサク科にも亦乳管ありその含有する乳は澄淸にして粒球なくその色はリベスの如き赤色を帶び Fumaria capreolata 及び F. speciosa に於て後に黃變す且又澄淸にして赤色なる乳を有するは獨りエンゴサク科に限らず又ケシ科にもあり即 Eschscholtzia californica 及び E. tenuifolia, Hypecoum procumbens の如き即これなり (Revue scientifique, Tome 46.)　　池野成一郎

新刊書

日本博物學年表.　理學士白井光太郎編.

白井光太郎氏ハ近頃此ニ記スル書ヲ著ハサレタリ. 白井氏ハ此書ニ於テ本朝博物學ノ歷史ヲ三期ニ分チ, 其第一期ヲ本草學時代トナシ, 上古ヨリ德川氏ニ至ル; 其第二期ヲ博物學時代トナシ, 德川氏ヨリ明治ノ始ニ至ル; 其第三期ヲ生物及地學時代トナシ, 明治ノ初ヨリ今日ニ至ル. 而シテ氏ハ此各期ノ博物學ノ性質ヲ辨明シ, 有名ナル博物家ノ事績ヲモ略述シタリ. 且ツ第二期博物家ニ至リテハ其傳統圖ヲ揭ゲテ學問傳來ノ摸樣ヲ明ニシタリ. 又氏ハ西洋人ニシテ本邦ノ博物學ニ功績アリタル人ノ履歷ヲモ略述シタリ. 此書ノ主タル部分ヲ占ムル者ハ第二期博物學時代治革表ニシテ慶長十五年ヨリ慶應ノ末年ニ至ルマテノ博物學ニ關係アル事績ヲ列記シタリ. 卷末ニハ書目ヲ揭ゲタリ; 之ヲ大別スレハ本草書六十一部, 博物書百七十七部, 藥物書三十九部, 救荒本草書二十五部, 食品書二十一部, 植物學書三十四部, 植物園譜及園藝書百六十九部, 動物書六十三部, 鳥類書三十部, 魚介類書六十四部, 蟲類書二十四部, 金石地文書四十六部, 物品目錄書六十一部, 農書

百四十九部,蠶桑書四十四部,山林書三十一部ナリ. 此書ノ如キハ,之ヲ編輯スルニ當リ數多ノ書ヲ參見セザル可カラザルモノナレバ,其勞力實ニ思フベシ;而シテ本邦ニ於テ博物學ノ進步ノ狀況ヲ知ラント欲スル者ニハ必要缺ク可ラザルモノナリ.

近百年間植物學の進步

> 次に掲ぐるものはベルリンの化學者ホフマン (Hofmann) 氏が去年のドイツ國博物家集會の席に於て演說したる“千八百二十二年より千八百九十年ふ至る理學の進步”中の一節を摘譯したるものなり (Revue scientifique, Tome 46, no. 22より)

千八百二十二年より千八百九十年に至る間の時代に於て諸學皆大に進步したりと雖も就中植物學及び動物學の如きその進步殊に著しく之を進步といはんより寧ろ變化といふべきものなり此の兩學科は此の時代に於てその目的並に研究の方法を全く一變したり蓋顯微鏡學の地學に必要なるは前段(譯者曰演者は植物學の前に地學の進步を演じたり)述ぶるがごとしと雖も植物學及び動物學に於てはその必要更に大いゐして實に顯微鏡なければ此兩學科なき程の有樣なり故に此の百年間の時代を稱して動植物學の顯微鏡時代といふも不可なし乞ふ先づ植物學の進步を演ぜん抑植物組織の理論を一新したるは顯微鏡なり隱花植物世界の秘を發きたるも顯微鏡なり植物學上新奇なる學科殊ふ發育學を創立したるも顯微鏡なり

顯花植物を明了ならしめたるものは顯微鏡なりその起原.葉及び花の發育.受精を說明したるは顯微鏡なり夫れ今日ふ於てい吾人は植物及び動物共にその生命上種々類似の點多く同一源より發したるとを知るこの同一源說は實に理學上偉大の理論にして主として細胞論ふ基ゐす而して細胞論は主としてドイツ國の學者の手に成り顯微鏡的研究の一大美蹟なりとす此の理論は動植兩學に關係し植物學に在つてはシユライデン (Schleiden) 動物學に在つてはシユヴアン (Schwann) その發起者たり後プリングスハイム

(Pringsheim) 氏出で Grundlinien einer Theorie der vegetabilischen Zelle に於て此の理論を尚一層擴張したり蓋植物解剖學上の研究たるや久しき以前より行はれ啻に細胞論の出でざりし前のみならず未だアクロマチツク.レンズのあらざりし前より行はれたれども惜哉今日の如く植物形成上に最も必要なる原器明かならず顯微鏡精好あらざるが故に良好なる成果を得る能はざりき然れども今や博物學者は精密なる細胞論を案内となし近代光學の奇怪ふ助けられうの眼力を植物の最も深奥なる部分に迄及ぼしその秘を發見するに至れり今日に於ては吾人は植物の原器たる細胞い如何にして擴大し如何にして增加するか又組織は如何なる定則によりて發育し如何にして成長し如何にしてその造構と形狀とを變じ更に高等なる組織を成し植物体を組成するかを知る又解剖家は此の植物体の建築法を初より終り迄一々會得しその建築を說明するを恰も棟梁が自ら手を下して建てたる家の建築を說明するがごとし然れども今や植物解剖學は形狀學上の問題を解釋するを以て足れりと爲さず進んで組織の生理をも研究するに至れり而して此の研究たるや近來の理化學を應用し既に收め得たる成蹟少なしとせず組織の含有物造構及びその配置はその機關固有の生理的作用を說明するに至れり植物解剖學の領分は今日は當初の目的以外に超出したれば今日の有樣を以てその初め十七世期に於てマルピギー,グリュウ二氏が創立したる時の有樣に比するにその差異果して如何ぞや又玆ふ最大必要なる成蹟ありてこれ又細胞論に根基するものなりこれ即植物細胞のプロトプラズムとインフゾリア虫の收縮的物質と同一なる證これなり此の兩物質たるや二つ乍ら生活作用の器械なればその同一なるとは動植物同一源說の確證となるべきものなり

顯微鏡的研究が大いに隱花植物の秘を發きたるは既に前に演述したるごとし而してその秘を發かんとて博物家の嘗めたる困苦辛勞は一方ならず且又その發見に因て植物解剖學形狀學に及ぼしたる影響極めて大いなれ

ば今又再びこれに付演說する決して無用に非ざるべし扨それお就きては第一にプリングスハイム氏が藻類受精の研究あり此の研究たるや從來學者の有したりし思想を讃めたり否全く一新したり從來顯花植物のみ有性物と信じ隱花植物を無性物と信じたればその間實に大いなる境界ありしがプリングスハイム氏の此の研究は此の境界を取拂ひ生物は皆有性にして有性は生物全界の欠くべからざる基本の性質なるとを知らしめたり顯微鏡は最下等動物の有性なるとを證し又此の生殖の原素は動植物共に同一なるとを證明したり今日にお於ては吾人は生殖の兩元素たる卵及び精虫は動植物界共に同樣にして上は高等なる動物より下は劣等なる植物に至るまで同一なるとを知るされば隱花植物の研究は造化の全領内に於ける生殖法の歸一(La concordance sexuelle dans toute l'étendue de la création)を示し動植物の同一源より發したるを確定するに與て大に力ありといふべし

隱花植物に於ける他の研究も又同一の成蹟を來せりホフマイステル(Holmeister)氏が苔とシダとの世代變換の發見.此の發見に附隨せる裸子植物發育上の觀察デバリー(de Bary)及びシュヴエンデチル(Schwendener)氏が地衣のシンビオーシスの發見その外藻類植物の生活作用を學ばんとて學者の心を苦しめ思を焦して爲したる實驗は植物組織の發育を明にし動植物の相近きとを愈〻明瞭ならしめたり

此の時代に於ては植物分類學又大に進歩したり植物新種の發見日に月に盛にして一國として採集者の至らざる所なく一個の山一個の谷採集せられざる所あきに至れり此等新植物の多數は獨り植物家にのみ新奇にして面白く普通の人にハ關係なきものなれどもその內或る者はうの形の大いなるその葉の美なる等により大いに公衆の注意を喚起したり即ちエウロッパに於て Wellingtonia と稱するカリフォルニアの松(譯者曰く Sequoia gigantea の事)Victoria regia と稱する美しきハス Rafflesia Arnoldi と稱する大なる花を開く熱帶地方の寄生植物, Welwitschia mirabilis 等これなり

分類法も又解剖生理學發達の影響以外ふ出る能はず從來植物の分類法は唯外部の形狀のみを以てその標徵と爲せしが今やその發育史解剖的性質ビオロギー的性質等何事にまれ凡そ吾人の觀得べきとは分類的標徵と爲るに至れり故に一見毫も似るとなきものにして實は相類似せるあり外面上似たるがごとくして實ハ大に異るものあるに至れり

以上論する所に因て之と觀れば此の著しき進步は皆顯微鏡的の硏究に基くものなり此の硏究や獨り植物學諸科に大影響を及ぼしたるのみならずダルウヰン氏の偉大なる進化論の基となりたり而してダルウヰン氏の理論たるや恰も河漲れて沿岸地方の田地を肥すがごとく流れて理學諸科を肥したり (…… qui, tel un fleuve fertilisant, sont venues féconder toés les domaines des sciences naturelles.)

動植物類似の發見植物組織及び隱花植物の發育史は實に動植物同一源說の確證にして動植物變化の不完全なる實驗. 淘汰に於ける未定の議論中間動植物化石の發見等よりは之を證するに與て大に優れりといふべし

池野成一郎

日本博物學年表

我邦現時ノ博物學ハ, 皆ナ維新前後泰西ヨリ傳來セルモノナレ𪜈, サリトテ亦我邦ニ於テ, 此學ノ範圍ニ屬スルモノヽ存在セザリシニハアラズ, 蓋古來支那ヨリシテ本草ノ傳來セシヨリ, 朝野共ニ之ニ注意シ, 此道ニ精シキ學者ノ出デシヿ尠ナカラズ, 斯クシテ醫藥物產ノ硏究モ盛ニナリタレバ, 此點ニ於テハ頗ル發達シタリト云フベシ, 尤モ今日ノ所謂ユル生物（ビオロギー）學ノ如キハ, 近代泰西ニ於テ發達シタル一派哲學的硏究ニシテ, 前ノ應用的分派トハ全ク其考究ノ方法（メトーデ）ヲ異ニセルモノナレハ, 此一派ハ固ヨリ我邦ニハ發達セザリシナリ

玆ニ泰西博物學ノ沿革ニ就テハ, 彼國諸大家ノ著書アルヲ以テ, 我輩之ニ依リテ其進步ノ兩觀ヲ知ルノ便アリ, 我邦本草, 博物學ノ沿革ノ如キモ, 從

來前輩ノ著作ナキニアラズ,中ニハ隨分精密ノ記事モアリテ,參考ノ價値尠ナカラズト雖𪜈,其記說多クハ僅ノ時代,一二ノ箇所ニ偏シ,之ヲ通觀セルモノ稀ナリ,是レ予輩ガ常ニ遺憾トセル所ナリ,今ヤ理學士白井光太郎氏日本博物學年表ノ著アリ予,受ケテ之ヲ覽ルニ,引用該博ニシテ事實精覈ナリ,而シテ亦簡明括約,能ク二千有余年來我邦博物學ノ沿革ヲ表述シテ,之ヲ小册子中ニ編次セリ,世ノ博物家,好古家此書ニ依リテ裨益ヲ受ヲクル決シテ小少ナラザルベシ,我輩豈ニ氏ニ其勞ヲ謝シ,又汎ク同好ノ士ニ示サヾランヤ.

M. M.

植物學雜誌

第五卷　第五十號

明治廿四年四月十日

THE
BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V. No. 50.

April, 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

地學雜誌

每月一回廿五日發兌

第廿七卷目次

◉地質調查所錄事
●明治廿三年十二月十二日調查丹波國黑見鑛山概況　地質調查所技師理學士　巨智部忠承君
◉論說
●石見國那賀郡長濱村採集海砂試驗附海藻の分析　地質調查所技師農學士　東條平二郎君
●東亞氣候一斑　理學士　金田楢太郎君
●地球上氣候の變化　理科大學簡易科二年生　石川一男君
◉雜錄
●膽振國鵡川巡見摘要　理科大學　淺井郁太郎君
●石油の原因（承前）　理科大學生　脇水鐵五郎君
●日本地圖測量の原委を述へ併せて
大三角の事に及ぶ（承前）　地質調查所員　大川通久君
●東北二縣紀行　旅行者の一人　脇水鐵五郎君
●鑛床の分類　理科大學生　石井八萬次郎君
●政治地理篇（第四回）　在三河　酒井恒三郎君
●「マルカム」氏演述北極遠征（千八百七十五年より七十六年）　理科大學生　石井八萬次郎君
●往古に於ける信濃北部　北信の一獵夫君
◉雜報
●五島の石筆石●一夜の島●安質母尼鑛山の發見●褐鐵鑛の發見●ジェームスクロール君死す●阿武隈山の鑛物分析●輕氣球ふて氣象の觀測●地震の原因に就きて●對馬島の方鉛鑛●日本の Physical Atlas.●東京產石炭●明治廿三年中播磨國多可郡鑛山產出表●北海道の面積●地學會記事●會員の移動●寄贈書目

發行所　神田裏神保町七番地　地學會事務所
賣捌所　東京神田裏神保町　敬業社
同　日本橋通三丁目　丸善書店

第六卷第六十號

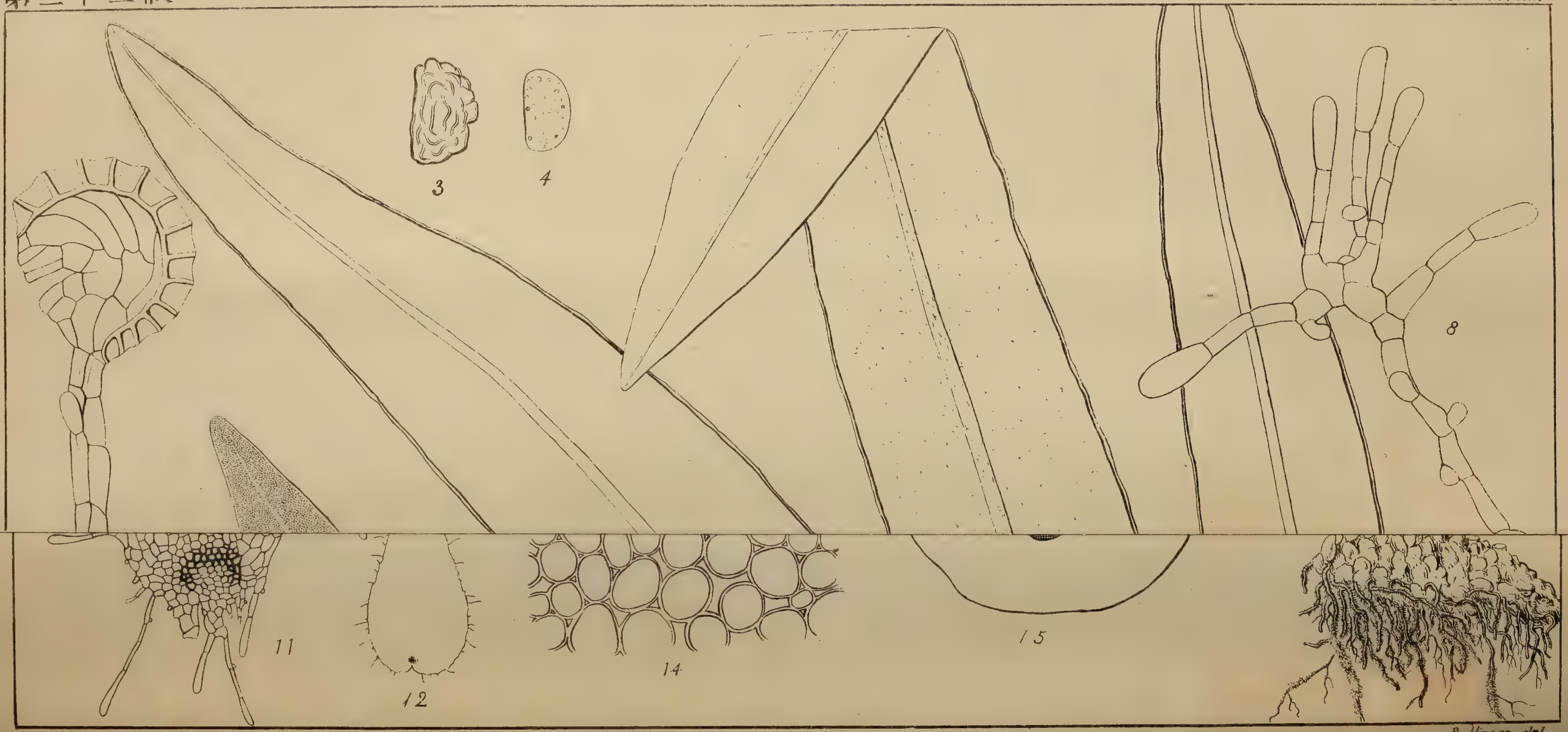
●記事○論說及報告
日本人ノ身長ト躰重ニ差アルハ
生活法如何ニ由ル說　醫學士三輪德寬
薩南諸島ノ風俗餘事ニ就テ（圖入）　田代安定
遺風研究の中正月十四日十五日の
風習儀式（圖入）　鈴木券太郎
自然ニ於ケル人類ノ地位（圖入）　理學士石川千代松

東京人類學會雜誌

每月一回月末發兌　一冊定價金拾錢郵稅壹錢　六冊前金郵稅共六拾壹錢　郵券代用ハ壹割增

アイヌ「イナウ」ノ聞書並「トラパ」ハ
ア三易ノ原始ト謂テ可ナランカ　永田方正
●雜報、津輕花卷村發見大甕續並圖、服部ニ小孔
リ土器ニ就テ阿波ノ削掛奧羽人類學會記事、
●發行所　東京本鄉六丁目　東京人類學會
●發賣元　東京本鄉六丁目　哲學書院

第二十三版 Plate XXIII.


3
4
8
11
12
14
15

S. Hirase, del.

ACROSTICHUM YOSHINAGÆ, NOV. SP.

NOM. JAP. ATSUITA アツイタ

植物學雜誌第五卷第五十號
明治廿四年四月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.
[Vol. V. April 10, 1891. No. 49.]

A New Japanese Acrostichum.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Acrostichum Yoshinagaæ, nov. sp.

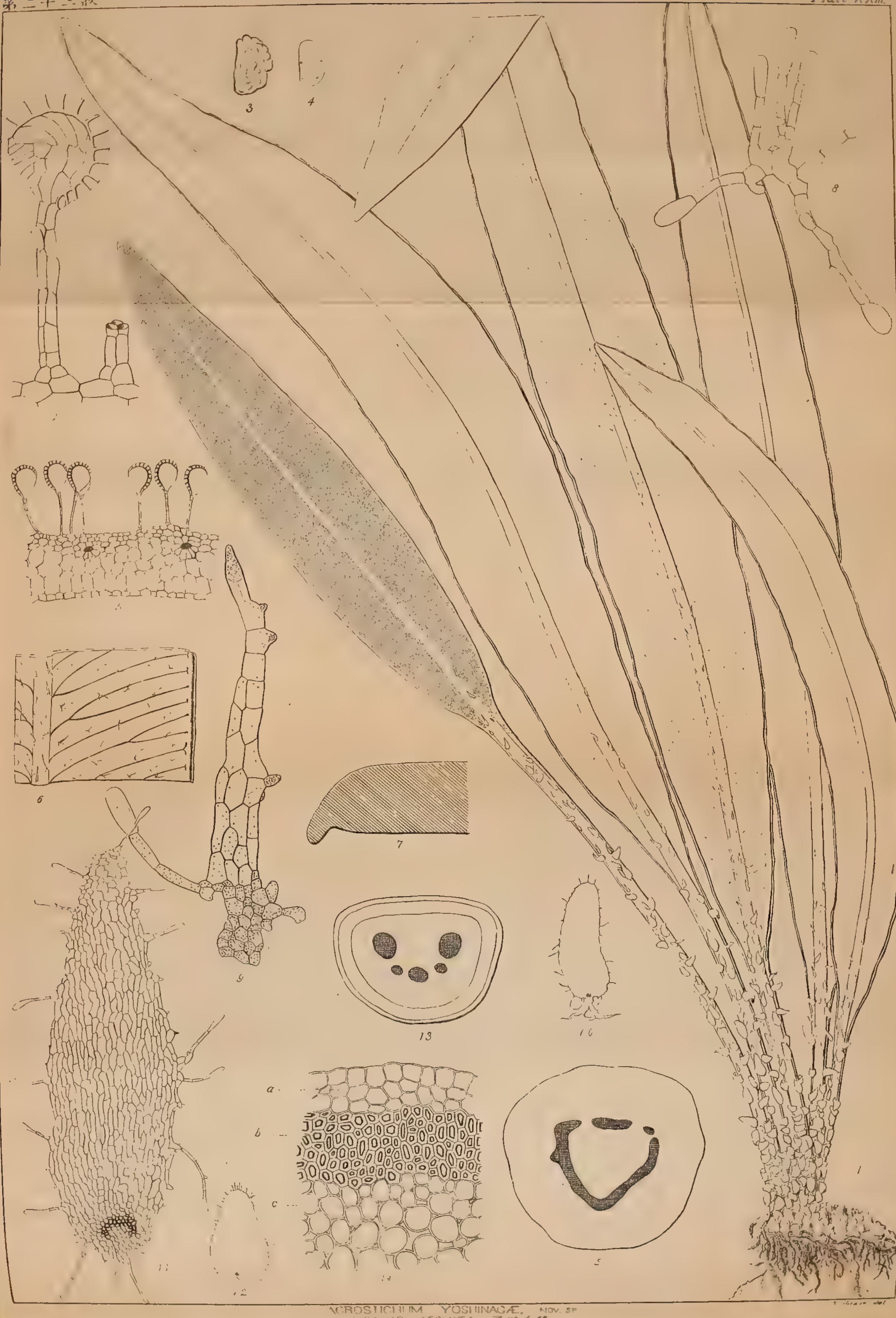
Nom. jap. Atsuita. アツイタ

(Plate XXIII).

Rhizome short, creeping, at most 4 cm. long, with branched wiry roots, densely clothed with ovate brown scales. Stipes clustered, scaly, canaliculate in front, winged above, 4-8 cm. long in the sterile, often as much as 14 cm. long in the fertile fronds. Sterile fronds perennial, coriaceous, deep-green on the upper, pale on the under surface, narrowly lanceolate, subacute at the apex, gradually narrowed and decurrent at the base, entire or slightly sinuate, with the margin recurved and diaphanous, 15-28 cm. long, 2-3.5 cm. broad; veins rather obscure, diverging from the thick costa at an angle of 60-70 degrees, about 2 mm. apart at the base, forked or simple, subparallel, terminating below the margin of the frond in a thickened and simple or forked apex. Fertile fronds lanceolate, smaller and with closer veins than the sterile, about 15 cm. long, 2.5 cm. broad; sori covering the whole under surface except the costa.

This fern grows on rocks and rarely on trunks of trees, along mountain streams. It was first collected by Mr. E. Yoshinaga in August, 1887, at Hōnokawa-yama in the province of Tosa. My specimens are mostly those sent by him.

第二十三版 Plate XXIII.


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
a
b
c

ACROSTICHUM YOSHINAGÆ, NOV. SP.
NOM. JAP. ATSUITA アツイタ.

The rhizome is woody and furnished with branched roots which are tomentose with dark-brown hairs. Its transverse section shows a few narrow and curved vascular bundles, often forming a nearly complete ring by the union of their edges. The thickest rhizomes in my collection are 5 to 8 mm. in diameter; but the rest are more slender. The scales which clothe the rhizome as well as the base of the stipe are ovate, brown, and ciliate at the margin; they are 4 or 5 mm. long and 2 or 3 mm. broad. The stipes are clustered towards the apex of the rhizome, rather stout, and comparatively short in the sterile and long in the fertile fronds. In their upper part they are flattened, winged, and canaliculate in front. They are densely covered with deciduous scales at the base, but more sparingly so above, the scales also becoming narrower as the decurrent margins of the frond become broader. The transverse section of the stipe towards the base shows a somewhat semicircular outline with the rounded part at the back, a thick ring of sclerenchyma within the cortical parenchyma, and, within the sclerenchymatous layer, five oval sections of vascular bundles arranged in a semicircle in the medullary parenchyma, two of which placed between the other three are considerably smaller. In small specimens the two small vascular bundles are wanting. The cortical parenchyma consists of two or three layers of compact cells in stipes of ordinary size, but of one layer in small stipes. In the medullary parenchyma the cells are larger and more loosely put together than in the cortical, and with rather large interstices. The sterile fronds are much more numerous than the fertile; each stock seems to have but one of the latter. The sterile fronds are about 0.6 mm. thick, minutely punctato-squamulose on the surface under the lens, scattered with appressed and irregularly branched hairs or narrow scales especially on the back towards the base. On the back of the costa are scales, which are, in its lower part, large and ovate like those of the stipe, but become, in its upper part, gradually smaller and narrower, and finally disappear. The frond becomes rather abruptly thin at the margin which is recurved and diaphanous. The young and small fronds are, unlike the mature ones, spathulate with a rounded apex and a very narrow tapering base. The fertile fronds are similar to the sterile except in their longer stipe, smaller size, lanceolate form, and closer veins. The sori which densely cover the under surface of the frond continue even to its decurrent base. The section of the fertile frond shows that the sporangia arise at any place on the under surface, and the cells of the parenchyma are smaller towards that surface. The sporangia are dark-brown, round and compressed, and about 0.31 mm. in diameter; the number of the segments of the incomplete annulus is 13 to 15; the stalk consists of three rows of cells, and is about 0.5 mm. long. The spores are subovoid or subreniform, and with a brown and irregularly wrinkled exospore; they are 0.046 to 0.065 mm. long and 0.028 to 0.04 mm. broad.

Dr. W. J. Hooker in his *Species Filicum* (*vide* vol. v., p. 198.) unites in *Acrostichuu conforme*, Swartz, a number of distinct species of other writers and of his own, such as *A. angulatum* and *A. gorgoneum* of Blume, *A. glandulosum* and *Vittaria acrostichoides* of Hooker and Greville, &c., which are more or less distinct from each other. My plant may be included in this variable species. But as Dr. Hooker's description of the species does not agree with my plant, I have ventured to make it a distinct species. The plant described some time ago by Messrs. E. Yoshinaga and S. Ōkubo as a species of *Acrostichum* in this magazine (*vide* vol. ii, p. 138, t. 10.), is the same as my plant.

Plate XXIII. Fig. 1, whole plant (nat. size); 2, sporangium and basal portion of its stalk (× 88); 3, spore (× 240); 4, spore with its exospore removed (× 240); 5, longitudinal section of fertile frond (× 26); 6, portion of sterile frond showing the venation (magn.); 7, transverse section of sterile frond showing the recurved margin (× 26); 8, branched hair from the under surface of sterile frond (× 88); 9, scale from the same (× 88); 10, scale from stipe (× 7); 11, small scale from the same (× 26); 12, scale from the base of stipe (× 4); 13, transvers section of the basal portion of stipe (magn.); 14, transverse section of the outer portion of stipe (× 88), *a* cortical parenchyma, *b* sclerenchyma, *c* medullary parenchyma; 15, transverse section of rhizome (magn.).

佐渡植物一班

（前號ノ續キ）

大久保三郎

SCROPHULARINEÆ. 玄參科

Veronica Virginica, *L.* クガイサウ

金北山

Euphrasia officinalis, *L.* コマメグサ

金北山

VERBENACAÆ. 馬鞭草科

Phryma Leplostachya, *L.* ハヘドクサウ

羽黒山

Callicarpa Japonica, *Thunb.* ムラサキシキブ

羽黒山

Clerodendron trichotomum, *Thunb.* クサギ

羽黒山

LABIATÆ. 唇形科

Thymus Serphyllum, *L. var.* vulgaris, *Benth.* ヒヤクリカウ

金北山

Calamintha Chinensis, *Benth.* クルマバナ

羽黒山

Calamintha umberosa, *Benth.* ミヤマタフバナ

金北山

Salvia Japonica, *Thunb. var.* ternata, *Fr. et Sav.* ミツバアキノタムラサウ

金北山

Brunella vulgaris, *L.* ウツボグサ

金北山

Teucrium stoloniferum, *Ham. et Benth. var.* Miquelianum, *Maxim.*

羽黒山

PLANTAGINEÆ. 車前科

Plantago Kamtschatica, *Cham.* エゾオホバコ

金北山

PHYTOLACACEÆ. 商陸科

Phytolacca acinosa, *Roxb. var.* esculenta, *Maxim.* ヤマゴバウ

羽黒山

POLYGONACEÆ. 蓼科

Polygonum aviculare, *L.* ニハヤナギ

羽黒山

Rumex Japonicus, *Meisn.* ギシギシ

羽黒山

PIPERACEÆ. 胡椒科

Houttuynia cordata, *Thunb.* ドクダミ

CHLORANTHACEÆ. 金粟蘭科

Chloranthus Japonicus, *Sieb.* ヒトリシヅカ

羽黒山

（以下次號）

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員　澤田駒次郎

第四十八號正誤(45)ノ第七行十二字目生ハ用ノ誤全第十四行二十五字目葉ハ小ハ小葉ハノ誤(46)ノ第二十三行二十一字目綿ハ線ノ誤(47)ノ第六行三字目シハミノ誤(48)ノ第四行一字目 Hanbwry ハ Hanbery ノ誤

十九　アマキ

羅甸名　Glycyrrhiza glabra, Linn.

荳科

地中海沿岸ノ諸國ニ自生スル宿根草ニシテ莖直立硬剛高サ三四尺縱線ヲ有シ短毛ヲ帶ブ葉ハ奇性翼狀ニシテ互生シ葉柄椎ノ基礎部ニ細小速落ノ托葉ヲ有ス小葉ハ四對ヨリ七對ニ至ル其形チ卵圓若クハ長卵圓平縁ニシテ先頂鈍ク表裏兩面平滑而シテ先頂ノ一小葉ハ其柄稍々矮短ナリ夏月莖上數梗ヲ分チ其葉腋ヨリ花梗ヲ抽キ緩弛直立ノ總狀花ヲ綴ル其長サ八分四五厘乃至二寸五六分抱花小葉ハ褐色線狀ニシテ尖頂ヲ有ス蕚ハ筒狀ニシテ綠色ヲ呈シ五個ニ缺刻シ其截片不同下部ノ一片ハ長ク上部ノモノハ其下部附着シ其外面毛茸ヲ帶ビ腺點ヲ散布ス花辨ハ蛾形ニシテ暗淡紫色ヲ呈シ旗瓣ハ長卵圓形ヲ爲シ鈍頂ヲ有ス翼瓣ハ長圓形ニシテ彎曲斜立シ旗瓣ヨリ稍々矮短其色稍々濃厚小舟瓣ハ細小ニシテ旗翼兩瓣中ニ被覆セラル十雄蘂ニ束ヲ爲シ其一個ハ分離シ他ノ九個ハ花絲ノ下部互ニ附着シテ鞘狀ヲ爲シ頂端葯ヲ有シ花時分綻シテ花粉ヲ吐出ス一雌蘂實礎ハ數個ノ卵子ヲ有シ柱頭微カニ膨脹ス花後莢果ヲ結ブ扁平長圓長サ八分五厘許平滑ニシテ暗褐色ヲ呈シ

二個乃至五個ノ種子ヲ有ス而シテ各種子ノ間隔稍々凹陷狀ヲ爲シ狹隘ト爲ル種子ハ方圓形ニシテ扁平其幅一分强種子膜ハ厚ク平滑ニシテ濃褐色ヲ呈シ蛋白質ヲ有セズ根ハ圓柱形ニシテ直徑四分强外面赤褐色若クハ橙褐色ニシテ其內面暗黃色ヲ呈シ微カニ分岐ス地下莖ハ橫走シテ隨所ニ苗ヲ生ズ

本植物ハ亞弗利加北土,西斑牙,伊太利,希臘,達爾馬西亞,西里亞,及ビ地中海沿岸ノ諸國ニ產シ多惱河岸ノ諸國ニ蕃殖ス又本植物ヲ栽培シ其根ヲ採リ藥用ニ供スルハ伊太利,西斑牙,小亞細亞等ニシテ最良ノ品ハ西斑牙ノ登留登佐府 (Tortosa) ヨリ輸出ス故ニ登留登佐產甘草 (Tortosa Liquorice root) ノ名アリ英國ニテ之ヲ栽培スト雖𪜈種子ノ稔熟宜シカラズト或云英國ニ移植セシハ第十六世紀ノ中頃ニシテ現今約爾克近邊ニ於テ之ヲ栽培スト又 G. glandulifera. ト稱シ果實ノ莢ニ腺狀ノ刺ヲ有スルモノアリ又匈牙利,露西亞南部小亞細亞ニ產スル G. echinata, Linn. ト稱シ其莢果細小ニシテ長キ刺ヲ有スト和產甘草ト稱スルモノヽ原植物ハ未ダ詳カナラズ

藥品　甘草　Glycyrrhiza

最良ノ甘草ハ西斑牙カタロニヤ洲ノ登留登佐府ヨリ輸出シ多クハ本植物ノ走根ヨリ成ルモノナリ英國及ビ印度藥局方ニハ本植物ノ生鮮或ハ乾燥ノ根及ビ地下莖ヲ以テ藥用ニ供ス日本藥局方ニハ G. glabra, L. var. glandulifera. ノ根ヲ以テ藥用ニ供ス

英國ニテハ自國ニ產スル甘草ノ他日耳曼,露西亞,西班牙ヨリ輸出スルモノヲ用ヒ合衆國ニテハ日耳曼,伊太利,西治里ヨリ輸出スルモノヲ用フト

性質　西班牙登留登佐府ヨリ輸出スル最良品ハ多クハ走根ヨリ成リ其長サ「一メートル」餘太サ五「ミリメートル」ヨリ二十「ミリメートル」ニ至リ外部ハ灰色ニシテ光輝アリテ皺紋ヲ有シ裂口及ビ細小ナル芽ヲ有ス他ノ西班牙產甘草ハ稍々太キ圓柱形ノ直根ニシテ多ク木樣ノ根ヲ混合シ外部ハ帶赤褐色ニシテ皺紋ヲ有シ內部ハ黃色ヲ呈シ皮部及ビ木部ノ破碎面ハ纖維樣

ヲ現ハシ其質强靱ニシテ殆ンド角質ヲナス生藥學ニ云甘草ノ横斷面ハ放線狀ノ薄キ皮ヲ被リ其被部ハ暗色ノ新生組織輪ニ由テ黄色放線狀ノ木心ト分劃セラル而ソ木心ハ根ニ在テハ髓ヲ闕如シ走根ニ在テハ圓形，三角形或ハ五角形ノ髓ヲ圍擁ス木部ニハ狹キ髓線ヲ現ハシ皮部ニハ顯著ナル內皮楔ヲ見ル而シテ此內皮楔ハ結晶(蓚酸加爾曳謨)ヲ包藏セル細胞ヨリ圍繞セラルヽ纖維束及ビ萎縮セル篩脉管ヨリ成ル，木部ニモ亦太キ脉管ノ傍ラ夥ク細胞細織中ニ簇在セル纖維束ヲ見ル甘草ノ横斷面ヲ沃度溶液ニテ潤シ顯鏡微ニテ檢視スル𪜈ハ前述ノ諸組織ヲ明別シ及澱粉ヲ認ムルヲ得ベシ

甘草ニ固有スル味ハ之ヲ乾燥スルノ際漸ク增强シ其臭氣ハ却テ減少スルモノトス」トアリ

英國產甘草ハ生鮮或ハ乾燥ノ根ニシテ其生鮮ナルモノハ長キ圓柱形ノ截切ヲ爲シ之ヲ洗淨スレバ鮮黄色ヲ呈シ極メテ柔軟ニシテ挫切スルヿ容易ナリ內部ハ黄色多汁其周邊厚キ皮部ヨリ成リ中心ニ木纖維ヲ現ハシ甘味ニシテ强キ土臭ヲ帶ヒ乾燥ノモノハ長サ二寸五六分乃至三寸三四分小指大ニシテ其外部ニ褐色ノ薄皮ヲ存シ甘味ニシテ弱キ收斂性ヲ有シ稍々苛烈ナリ之レ皮部ニ存在スル小量ノ鞣酸ニ基因ス又皮部ヲ剝除セシモノアリ之ヲ無皮甘草ト稱シ其外部黄色ヲ呈ス

成分　主成分ハ Glycirrhizin 及ビ葡萄糖トス其他澱粉, 樹脂, 樣油質, 物アスパラギン, 及ビ小量ノ鞣酸等ヲ含有ス Robiquet. 氏ノ說ニ據レバ甘草ニ稍々苛烈ノ味アルハ樹脂樣油質物ノ存在スルニ基因スト

Glycyrrhizin ハ一名 glycion ト稱シ一千八百七十五年ニ於テ Roussin 氏安母尼亞ト抱含シテ存在スルヲ發見シ其冷浸劑ニ熱度ヲ加ヘテ蛋白質ヲ除キ硫酸ヲ以テ沈澱セシメ此沈澱物ヲ水ニテ善ク洗ヒ之ヲ酒精ニ溶解シ依的兒ヲ注ゲバ暗黑色ノ沈澱ヲ生ズ而シテ其上澄ヲ取リ安母尼亞酒精溶液ノ小量ヲ加ヘ混合スレバ黄色ノ沈澱ヲ生ズ其溶液ヲ冷却シテ舍利別稠ト爲シ之ヲ蒸發シテ純良ノモノヲ得タリト

本品ハ半透明疎脆ノ剝片ニシテ鮮黃色ヲ呈ス一千八百六十一年Gorup-Besanez 氏ノ說ニ據レバ本品ハ $C_{24}H_{36}O_9$ ヨリ成リ酒精，依的兒及ビ沸湯ニ溶解ス又本品ニ稀薄酸類ヲ加ヘ沸騰スレバ Glucose ト苦味樹脂樣ノ Glycyrretin ニ分解スト一千八百八十年 Habermann 氏ノ說ニ據レバ Glycyrrhizin ハ $C_{44}H_{63}NO_{18}$ ヨリ成リ稀硫酸ヲ加ヘテ煑沸スレバ Glycyrretin ト Parasaccharic acid ニ分解ス Parasaccharic acid ハ $C_6H_{10}O_8$ ヨリ成リ亞爾加魯乙度ト抱合シテ不結晶性ノ鹽類ヲ生ズ

Glycyrretin ハ $C_{32}H_{47}NO_4$ ヨリ白色結晶ノ細粉ニシテ水，加爾加魯乙度，依的兒ニ溶解セスト雖𪜈酒精，氷醋酸，强硫酸ニハ隨意ニ溶解シ設氏二百度ニ熱スレバ熔融ス但シ加里ト共ニ熔融スルモ「パラヲキシシ」安息香酸ヲ生スルヿ無シ

Glycyrrhizin ハ安母尼亞ノ作用ニ因テ苦味不結晶ノ Glycyramarin ト一種ノ樹脂ヲ生ズ Glycyramarin ($C_{36}H_{57}NO_{13}$) ハ依的兒ト酒精ノ混合液ニ溶解シ樹脂ハ氷醋酸ニ溶解ス又加里ト共ニ熔融スレバ「パラヲキシン」安息香酸ヲ生ズト生藥學ニ云甘草ノ味ハ Glycirrhizin 及ビ葡萄糖ニ係ル而ソ「グリチルリチン」ハ即チ「グリチルリチン」酸安母紐謨(Glycirrhinsänres Ammonium) ニシテ「グリチルリチン」酸ハ配糖質ニ屬ス其他甘草中ニハ Asparagin 二乃至三〔ペルセント〕ヲ含有ス」トアリ

製劑

第一　甘草越幾斯篤拉屈篤 Extractum glycyrrhizae.

日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

甘草越幾斯篤拉屈篤ハ

剉截セル甘草	一分

ヲ取リ

常水	五分

ヲ注キ四十八時間冷浸シ壓漉シ又其殘滓ニ

常水　　　　　五分

ヲ注キ十二時間冷浸シ壓漉シ漉液ヲ合シ煑沸シ其沈定スルヲ待テ上液ヲ傾取シ，蒸發シテ稠厚越幾斯篤拉屈篤ト爲シ製スベシ

本品ハ褐色ノ越幾斯篤拉屈篤ニシテ水ニハ澄明ニ溶解ス」トアリ

第二　尋常甘草越幾斯篤拉屈篤　甘草羔

Extractum glycyrrhizæ Venale.　Sucus Liquiritiæ.

日本藥局方ニ云尋常甘草越幾斯篤拉屈篤ハ坊間ニ販賣スル甘草羔ニシテ黑色ヲ有シ光澤ヲ帶ビ長サ大約一,五「デシメートル」太サ三「センチメートル」ニ至ル圓柱形ヲ爲シ破碎面ハ鋭尖貝殼樣ナリ味甚ダ甘シ其百分ニ付少ナクモ六十分ハ冷水ニ溶解スベシ，顯微鏡ヲ以テ檢視スルモ澱粉粒ヲ見ル可カラス」トアリ或云甘草越幾斯篤拉屈篤ニ二種アリ一ハ柔軟圓柱形ニシテ之ヲ尋常甘草越幾斯篤拉屈篤又甘草羔ト云ヒ一ハ流動物ニシテ之ヲ流動甘草越幾斯篤拉屈篤ト云フ印度藥局方ニハ圓柱形ノモノ即チ甘草羔ヲ以テ藥用トシ合衆國藥局方ニハ甘草羔ヲ以テ藥用ニ供シ流動甘草越幾斯篤拉屈篤ヲ以テ製藥ノ資料トス

甘草越幾斯篤拉屈篤ハ伊太利，西班牙，佛蘭西，小亞細亞等ヨリ產出ス故ニ各〻其產地ヲ以テ之ヲ區別ス例ヘバ Italian Extract of Liquorice or Italian juice 或ハ Spanish juice 等ノ如シ又カラブリア (Calabria) ヨリ產出スルモノハ品質極メテ善良ニシテ之ヲ Solazzi juice ト云フ

坊間ニ販賣スル甘草越斯幾篤拉屈篤ハ往々其質不良ニシテ藥用ニ適セサルモノアリ故ニ其純不純ヲ試驗シ藥用ニ供スヘシ

圓柱形甘草羔中製造者ノ奸猾ニシテ澱粉，砂，炭酸抱合物ヲ混和シ稀レニハ小量ノ銅粉ヲ混和スルコトアリ注意スレハ肉眼ヲ以テ之ヲ檢出スルヲ得是レ恐ラクハ製造ニ用ヒタル器械ヨリ來ルモノトス又一種塊形ヲナスモノアリ之ヲ Liquorice paste ト云フ

醫治効用　緩和ノ一良藥ニシテ咳嗽ヲ息メ加答兒ヲ治シ尿管等粘液膜

ノ惏衝ニ用ヒテ効驗アリ或ハ對症ノ藥劑ニ多ク甘草ヲ加ヘテ殊効アリ又甘草羔ハ根ト其ノ用ヒヲ均フス又甘草越幾篤斯拉屈篤ハ主モニ丸劑ヲ形成スルニ用ヒ甘草末ハ或ハ丸劑ノ衣トナシ或ハ嫌惡ノ藥品ニ伍用シテ香味ヲ附與ス

其他圓柱形甘草羔ハ糖菓ヲ製シ塊狀甘草羔ハ烟草ノ製造ニ用フト云フ

露國甘草 (Radix Liquiritiæ russicæ) ハ烘不爾厄 (Hamburg) ヨリ輸出ス本品ハ匈葛利.露西亞南部等ニ產スル Glycyrrhiza glabra, var. glandulifera, ト稱スル植物ニ基因ス生藥學ニ云露國甘草ハ主トシテ主根ヨリ成リ同國〔ウオルガ〕河ノ下域ニ於テ採堀ス此甘草ハ多クハ單根ヲナシ西班牙產ニ比スレバ遙ニ長大ニシテ長サ往々四「デチメートル」太サ一「デチメートル」ニ至リ根頭ヲ戴キ多數ノ殘莖ヲ附着ス其外部ハ西班牙甘草ト同一ノ色澤ヲ現ハシ木心ハ厚サ往々皮部ニ十倍シ皮部ノ厚サハ四「ミリメートル」ニ過ギズ皮部ニハ內皮線アリテ輕嫩ナル外邊ノ組織ニ錯入ス而シテ木心ニ於ケル髓線モ亦鬆疎ナルヲ以テ木心ヲ分割シテ單一ノ板片トナスコトヲ得是故ニ露國產甘草ハ西班牙產ニ比スレハ輕鬆ニシテ纎維性ヲ呈シ柔靱角實樸ヲ爲サズ藥種商ニ於テ外皮ヲ剝除シテ販賣スルヲ慣習トナセルガ故ニ愛スベキ外觀ヲ有ス露國產甘草ハ西斑牙產甘草トハ唯其質ノ輕嫩ナルノ差ヒアルノミニシテ諸組織ノ構造,化學的成分等ニ至リテハ異ナルコトナシ」トアリ

支那甘草ハ從來專ラ藥用ニ供スト雖𪜈其ノ原植物ヲ詳カニセズ生藥學ニ云此甘草ハ〔フリユッキーゲル〕(Flückiger) 氏ニ據レハ亦 Glycyrrhiza glabra, var. glandulifera ニ基原シ本邦ニ於テハ古來ヨリ之ヲ藥用ニ供ス而シテ日本藥局方ニ規定セル甘草ハ亦此品ヲ指稱セシナルベシト雖𪜈其記載支那產甘草ニ適合セズ支那產甘草ハ走根ニ非ラス又主根ニ非ラズ恐クハ莖幹ニ屬ス長サ一「メートル」太サ二「センチメートル」ニ超エ多クハ分岐セス外部ハ赤褐色ニシテ皺紋ヲ有シ甚ダ著大ナル裂口ヲ有シ稚莖ニ在テハ

處々ニ稚芽ヲ着ク橫折面ハ長纖維形ヲ爲シ汚黃色ヲ現ハシ皮部ノ厚サハ木心ノ大約四分一ニ居リ暗色ノ新生組織ニ因テ木心ト區劃セラル木心ハ比較的ニ著大ナル圓形ノ髓ヲ圍繞シ髓心ヨリ起リテ皮部ニ連ナレル放線狀ノ缺裂ヲ現ハス是レ其髓線組織ノ頗ル菲薄ニシテ破壞シ易キニ由ルモノナリ支那產甘草ハ最モ露國甘草ニ類スレ𪜈其質遙ニ輕鬆ニシテ殊ニ之ヲ濕潤スルトキハ容易ク壓縮スルヲ得ベシ然レトモ其諸組織ノ搆造ハ概シテ露國產ト異ナルコト無ク唯稍々薄弱ナルノ差ヒアルノミ支那產甘草ハ未タ化學的ノ檢査ヲ經ザレ𪜈其成分ハ西班牙產ト異ナルナカルヘシ」トアリ

本邦產甘草ノ濫觴ハ詳カナラスト雖𪜈和名抄「アマキ」ト訓シ延喜式ニ常陸陸奧出羽三國獻之トアリ或云甲斐國ニ栽植スルモノハ漢土ヨリ移植スト物類品隲ニ云甲斐產苗ノ長二三尺葉ハ紫藤葉ニ似テ稍小ニシテ微毛アリ根皮紫赤色肉黃色ニシテ味甘シ此ノ物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衛同郡下石盛村與兵衛園中ニアリ其始メ所出未タ詳或云甲斐深山中ヨリ出ツ或云武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ今尙ホ存スト其何レカ是ナルヲ知ラズ享保中阿部將翁軒

合命ヲ奉シテ甲斐國ニ至テ是ヲ得タリ今東都及ヒ駿府官園ニアルモノ是レナリ駿府ニテハ甚繁茂ス東都ニテハ繁茂セス戶田先生非藥選ニ云ク一種稱南京樣者御園之種而人間幾希ト今官園ニ此ノ種ナシ叉タ甘草苗漢土ニ徵スコトヲ聞カズ」トアリ先年大坂衞生試驗所ヨリ東京衞生試驗所藥草試植園ニ移植シ昨二十三年三月帝國大學植物園ニ移植セシモノハGlycyrrhiza屬ナルヘシト雖𪜈未ダ開花結實セザルニ因リ其種名ヲ確定スルコト能ハズ

(以下次號)

日本産櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ズ

（前號ノ續）

松村任三

名彙

Quercus dentata *Th.*

Kashiwa 本草家ノ漢名 槲 俗用漢字 柏

副名 *Hahaso.*

Mochigashiwa.

var. **Wrightii** *DC.*

Ō-gashiwa.

副名 *Ō-bōso.*

var. **pinnatifida** (*F.S.*)

Hagoromo-gashiwa.

Quercus aiena *Bl.*

Kashiwa-nara.

Quercus crispula *Bl.*

Ō-nara.

副名 *Ma-nara.*

No-ishi-nara.

var. **grosseserrata** (*Bl.*)

Mizu-nara.

Quercus glandulifera *Bl.*

syn. Q. canescens Bl.

Q. urticæfolia Bl.

Ko-nara. 本草家ノ漢名 教落樹 抱 俗用漢字 小楢 楢 柞

副名 *Gōbō*-shiba.

Nara.

Hoso.

Maki.

Ko-bōso.

Quercus serrata *Th.*

Kunugi. 本草家ノ漢名 櫟 俗用漢字 椚 槶

副名 *Sawa-guri.*

Fushikure-boku.

Don-guri.

Me-kunugi.

O-kunugi.

Tsurubami.

Jindanhō.

Jidan-guri.

Kataki.

Tochi-maki.

Utsugi.

Shisai-gashi.

Uwabō.

var. **variabilis** *Bl.*

Abe-maki.

副名 *Kork-kunugi.*

Wata-maki.

Quercus phyllireoides *A. Gr.*

Imame-gashi. 俗用漢字 姥芽櫧

副名 *Ubame-gashi.*

Bame-gashi.

Bame.

Uba-shiba.

var. **crispa** *Sieb.*

Chirimen-gashi.

副名 *Biwaba-gashi.*

Quercus glabra *Th.*

Mateba-shii.

副名 *Satsuma-shii.*

Taimin-gashi.

Naga-shii.

Quercus thalassica *Hce.*

Syn. Q. Sieboldiana Bl.

Shirifuka.

Quercus acuta *Th.*

Syn. Q. Buergeri Bl.

Q. marginata Bl.

Q. laevigata Bl.

Aka-gashi. 本草家ノ漢名 血櫧 俗用漢字 橿 樫

副名 *Kashi.*

Ara-aka.

Ōba-gashi.

Ō-kashi.

Quercus gilva *Bl.*

Ichi-gashi. 本草家ノ漢名 石櫧

副名 *Ichii-gashi.*

Quercus glauca *Th.*

Kuro-gashi. 椆〔植物名實圖考三十七卷ノ一〕

副名 *Naraba-gashi.*

Ara-kashi.

var. **lacera** *Bl.*

Hiryū-gashi.

Quercus Vibrayeana *F. S.*

Shira-gashi. 本草家ノ漢名 鉤栗

Quercus myrsinaefolia *Bl.*

Syn. Q. salicina Bl.

Hosoba-gashi.

副名 *Sasa-gashi.*

Yanagi-gashi.

Urajiro-gashi.

Quercus cuspidata *Th.*

Shii. 本草家ノ漢名 柯樹 俗用漢字 椎

Quercus sessilifoia *Bl.*

Tsukubane-gashi.

副名 *Mengashi.*

（未完）

日本植物報知（第十二）

牧野富太郎

ROSACEÆ. いばら科

(1) **Prunus Amygdalus** Baill. (= Amygdalus communis L.) あめんど

う又からもゝト云フ即チ所謂壽星桃ナリ諸所ニ培養ス元來我邦ノ產ニアラズ

SAXIFRAGACEÆ. ゆきのした科

(2) **Saxifraga sendaica** Maxim. せんだいさう 土佐(予)

(3) **Saxifraga lycoctonifolia** Maxim. わらしぐさ 信州加州ノ高山ニ產スルコハ能ク人ノ知ル處ナリ而シテ予ハ之ヲ上州清水峠一ノ倉ニ得タリ同所ニハ雪塊ノ近傍ニ多ク之ヲ生セリ

(4) **Hydrangea sikokiana** Maxim. やわずあぢさゐ又おほあぢさゐト云フ紀州ニ產ス又四國ニ產スト云ヘリ

CORNACEÆ. みづき科

(5) **Cornus ignorata** C. Kock. くまのみづき共 葉對生スルニ由テ之ヲみづき (C. macrophylla Wall.) ト別ツコ容易ナリ 土佐幷ニ武州高尾山(予)

ASCLEPIADACEÆ. すゞめのおでけ科

(6) **Vincefoxicum nikoense** Fr. et Sav. こかもめづる 葉ハ披針狀ニメ花ハ小ナリ 土佐, 武州戸田原(幷ニ予)

BORAGINACEÆ. むらさき科

(7) **Bothriospermum tenellum** Fisch. et Mey 土佐(予) 琉球(田代氏)

β. **asperugoides** (S. et Z.) Maxim. はないばな たびらこ即チ Eritrichium pedunculare A. DC. ニ類似スルヲ以テ往々之ト混視スルヲ免カレズ採集者ハ宜シク注意スベキナリ而メ Bothriospermum 屬ニハ無托葉ノ總狀花ヲナスコナク各花皆腋生スルニ由テ之ヲ別ツニ苦ムコナシ下總眞間村近傍(予)

SCROPHULARIACEÆ. ごまのはぐさ科

(8) **Mazus rugosus** Lour. **var.** *γ*. **rotundifolia** Fr. et Sav. 土佐佐川村(予)

ORCHIDACEÆ. らん科

(9) **Liparis nervosa** Lindl. さゝばらん 葉ハ卵狀披針形ニシテ二片ヨリ三片或ハ冗ニ四片チ有ス鈍尖頭ナリ 土佐(予)

(10) **Liparis auriculata** Miq. くもきりさう 葉ハ鋭頭ナラズ卵圓形ニシテ常ニ二葉ナリ而シテ葉柄アリ 土佐,武州秩父,高尾山(予)

LILIACEÆ. ゆり科

(11) **Lilium elegans** Thunb. そかしゆり 普通ニ之ヲ培養セリ然レ𪜈磐城ノ海岸ニ自生アリ(予)

(12) **Heloniopsis breviscapa** Maxim. (H. grandiflora Fr. et Sav.?) しようじようばかま 花色淡紅紫ニシテ雄蕋ハ少シク花蓋ヨリ超出ス 土佐(予)周防(岡田信利氏)

(13) **Heloniopsis japonica** Maxim. しろばなしようじようばかま(新稱) 花色殆ンド白シ又少シク紫色ヲ帶ブルアリハ蕋ハ著シク花蓋ヨリ超出ス 土佐ノ北地(予)房州(池野成一郎氏)豐後(岡田信利氏)

ARACEÆ. てんなんしよう科

(14 **Colocasia indica** Engl. (=Leucocasia gigantea Schott.) はすいも 葉柄チ食用ニ供センガ爲メニ諸所ニ之チ培養セリ寒氣ヲ恐ルヽニ由テ北地ニ之ヲ見ズ 土佐

(15) **Alocasia macrorhiza** Schott. まんしゆういも土佐足摺岬ニ自生ス(予)方言之チくはずいもト云フ

(16) **Acorus gramineus** Ait. **var.** *β*. **pusillus** Sieb. からいぜきしよ 形狀小ナリ予ハ未ダ之レガ自生ヲ見ズ

本草綱目ニ所謂波羅蜜トハ何ゾヤ

松村任三

明ノ 1)李時珍曰ク,波羅蜜梵語也,因此果味甘,故借名之安南人名曩伽

---

1) 本草綱目卷三十一夷果類

結,波斯人名婆那娑,皆一物也,生交趾南番諸國,今嶺南濵南亦有之,樹高五六丈,樹類冬青 (Ilex) 而黑潤倍之,葉極光淨,冬夏不凋,(evergreen) 樹至斗大,方結實,不花而實出於枝間,多者十數枚,少者五六枚,大如冬瓜,(Cucumis) 外有厚皮,裹之若栗毬,上有軟刺礧砢,(muricaied) 五六月熟時,果重五六斤,剝去外皮,殼內肉層疊如橘囊 (pulp of an orange) 食之味至甜美如蜜,香氣滿室,一實凡數百核,核大如棗,(Jujube) 其中仁如栗黃,煑炒食之甚佳,果中之大者,惟此與椰子 (Coconut) 而已

コレ奇樹ナリ,珍果ナリ,往時我邦ノ本草家ハ之ヲ以テ何トカセル,[2]小野蘭山翁ノ博覽多識ト雖𪜈,其本邦ニ產ナク,又曾テ舶載ナキヲ以テ,如何トモスルヿ能ハザリシト見エ,惟廣東新語トイフ書ヲ引證シテ之ヲ説キ,花暦百詠トイフ書ニ基キテ,梵語謂至甘,爲波羅蜜ト論シテ已ミシノミ

[3]岩崎灌園翁其後ニ出テ,頗ル該博ヲ以テ聞ユシト雖𪜈僅ニ廣東新語,臺灣府志ノ兩書ヲ引證シ,我カ南海諸島ニ產スル露兜樹 (Screw Pine) ヲ以テ之ニ當テ,鳳梨(Pine-apple)ト相混同セシニ過ギザルノミ,鳳梨,露兜樹,兩ナガラ其果ノ巨大ナルヨリ,鑑定ノコヽニ出デシナルベケレド,植物所屬ノ相違セル霄壤モ啻ナラザルヲ奈何セン,鳳梨ノ露兜樹トハ單子葉類ナレ𪜈,波羅蜜ハ雙子葉類ナリ,臺灣釆風圖ニ黃梨葉似蒲而短濶,兩旁如鋸齒ト,黃梨ハ鳳梨ナリ,何ノ冬青ニ類スル所ゾ又赤嵌筆談ニ奧西,以波羅蜜爲天波羅,黃梨爲地波羅,以テ兩種ノ相混同スベカラザルヲ知ルニ足ル,余ハ此樹ヲ以テ Jack-tree トナシ,其果ヲ Jack-fruit トナス,非カ.

續脩臺灣府志ニ詳說アリ,波羅蜜,一名優鉢曇,廣東志,南海廟中,舊有東西二株,高三四丈,葉如蘋婆 (Sterculia nobilis) 而光潤,蕭梁時,西域達奚司空所植,他所有皆從此分種,生五六年,至徑尺,削去其抄,以銀鍼釘腰,即結實,成實乃花,然常不作花,故佛氏以優鉢曇花爲難得,每樹多至數十實,自根而幹

---

2) 本草啓蒙卷二十七
3) 本草圖譜卷六十八
4) Colonel H. Drury.—the useful Plants of India.

而枝條, (The situation of the fruit varies with the age of the tree, being first borne cn the branches, then on the trunk, and in very old trees on the roots.) 皆有實纍々疣贅, 若不實, 則以刀斫樹皮, 有白乳 (milky juice) 湧出, 凝而不流則實, 一斫一實, 十斫十實, 故一名刀生果, 熟以盛夏, 大如斗, 重至三四十斤, [5] (It sometimes weighs as much as eighty pouuds) 皮厚有軟刺, 礧砢如佛頭, 旋螺, 肉含絶瓤間疊如橘柚囊, 氣甚芳郁, 有乾濕苞之分, 乾苞者液不濡膩, 味尤甜, [6](There are several varieties, but what is called the honey jack is by far the sweetest and best.) 每實有核數百枚, 大如棗, 仁如栗黃, 煨熟可食 [7] (The seeds when roasted are also much prized as a diet among the poorer classes.) 其他 [8]諸書ニ散見スレ𪜈皆大同小異ナリ, 獨植物名實圖考ニ圖アリ, 稍參考トナスニ足ル [9]〔スミス〕亦說アリ, 是レ余ガ波羅蜜ヲ Artocarpus integrifolius トスルニ躊躇セザル所以ナリ. Artocarpus integrifolius ハ Jack-tree ノ學名ナリ, 無花果 (Fig) ト同類ニシテ Artocarpeæ ニ屬ス有白乳ノ一語顯著ナル標徵ト謂ベシ, 優鉢曇ノ一名アルモ宜ナル哉

[10] 交趾植物志ヲ按スルニ波羅蜜ハ其固有產ニアラザルヿ Habitat frequentissime culta in tota Cochinchina: raro in China トアルヲ以テ明ナリ, 臺灣府志ニハ荷蘭國移來者トアリ, 亦其固有產ニ非ザルヲ知ルベシ, 其本國ハ實ニ印度ノ一地方ニ在リテ, 種蒔培壤諸國ニ播布スルニ至レリ, [11] (A native of the region being at the foot of the western mountains of the Indian Peninsula.)

本草綱目ニ波羅蜜 [12] (Po-lo-mih) ハ梵語ナリト, イヘルモ蓋シ由來ヲ

---

5) Alphonse De Candolle—Origin of cultivated Plants.
6) Colonel H. Drury l. c.
7) Colonel H. Drury l. c.
8) 嶺南雜記下卷, 臺灣縣志, 秘傳花鏡卷四, 廣群芳譜卷六十六, 酉陽雜俎等
9) F. P. Smith-Contributions towards the Materia Medica and Natural History of China.
10) Lonreiro-Flora cochinchinensis.
11) Aphonse De Candolle l. c.
12) F. P, Smith l. c.

知ルニ足ラン,交趾植物志ニ[13] Po-la-mat ト土名ヲ記入シタルガ如キ, Tamil ノ語ニ[14] Pila トイヒ, Malayalam ノ語ニ[15]Pilavoo トイフモ恐ラクハ語源ヲ同フシテ皆訛誤ニ出タルナラン

曩伽結ハ tsjaka, jaca, jack ニシテ[16]A corruption from the Sanscrit word "Tchackka," which means the fruit of the tree ナルベシ,而シテ交趾植物志ニ又 Ya xu ト記シタルガ如キ殆ト其讀方ニ苦シムト雖𪜈亦上ノ訛誤ニ外ナラザルヲ知ルナリ, サレバ〔ローレーロー〕ハ同書ニ於テ波羅蜜ニ Polyphema Jaca, ノ學名ヲ下シタリ

終ニ婆那娑ハ[18]Teloogoo ノ語ニ Panasa トイヒ,[19]Duk 語ニ Phunus トイヒ,或人ハ[20]Phunusa ト記シテ梵語トナスガ如キ,亦往々訛傳ヲ免レサレ𪜈波羅蜜モ曩伽結モ婆那物モ一物ニシテ印度ノ Jack-fruit タルコヲ知ルニ足ルナリ

回顧スレバ明治十九年一月十日ノコナリキ,余錫蘭島〔コロンボー〕ニ上陸シ將ニ桂園,釋迦寺等ヲ遊覽セントシ馬車ヲ驅リ,汚穢倭屋ノ村落ヲ過キリシ𬼂,奇樹亭々人家ニ接近シテ樹チ,樹身ハ頭大ノ果實ヲ掛懸スルヲ見タリキ,因テ其名ヲ御者ニ問ヒシニ Jack-fruit ナリト答ヒキ,余其後獨乙ニ在リシ日, 伯林府シヨインベルグ植物園陳列館ニ於テ一大奇果ノ酒精中ニアルヲ見タリ,標記シテ Jack-fruit トス,於是乎余ガ曩ニ黑奴ニ語ラレタルノ虚ナラザルヲ知レリ, 印度洋ヲ經テ歐洲ニ往來セム人亦コヽニ此樹ヲ見ルコアルベシ,實ニ東洋ノ一奇樹ナリ,支那人詩アリ

波羅門下樹亭々,香蜜成房子更馨,解是西來眞嘉果,十方供奉佛頭青　孫元衡
清果菩提繞室馨,金色柑橘麗繁星,更憐斗大波羅蜜,礧砢眞同佛髻青　張鷺洲

---

13) Loureiro l. c.
14) Henry Trimen-A systematic catalog. of the Flowerin. Plants. and Ferns.
15) Colonel Drury l. c.
16) ,, ,, ,, ,,
17) Loureiro l. c.
18) Colonel Drury l. c.
19) ,, ,, ,, ,,
20) Candolle l. c.

花の色香

堀正太郎

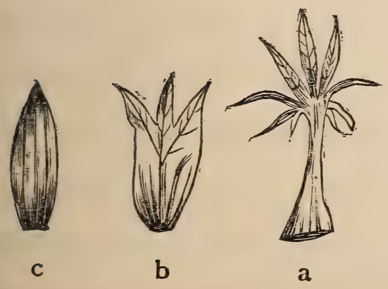
第三章　花辦原論

花の各機關其由來起原を論するもの三あり(一)は尋常の莖葉を以て起原となし花の各機關は皆此莖葉より變形せるものとし雌雄蕋と謂ひ花冠と謂ふ皆其莖葉の異變せる目的に應し其用途に接して原形を變更し色澤を更異したるものなりと此説を號して原葉論と謂ふ(二)は雄蕋を基礎とし立論せるものにして花瓣或は蕚の如き花の保護機關にして生殖に直接に必用なき部分は皆雄蕋の變態して成れるものなりと抑も此説ハ只植物生殖機關の一局部即ち花被（フラワーエンゼローブ）の起原を莖葉に基せすして雄蕋に基するものなり而して雌雄即ち貴要機關は前説と同しく之を莖葉の變化に基す故に間接的に花瓣も亦葉の變形たらさるべからす此説を名けて原蕋論と謂ふ（三）は維管束を以て基礎とし植物は細胞より成り相接合して維管束となる植物の莖は實に維管束及ひ種々の細胞組織よりなるものにして附屬機關即ち葉と謂ひ花瓣或は雌雄蕋の如き中軸に附着せる機關ハ皆維管束を基礎として起るものなりと此説を稱して束管基本論と謂ふなり

原葉論　抑花の各部は皆莖葉の變形せる者なりとの理論は既に千七百五十一年博物大家林娜氏(Linnæus-Philosophia Botanica. p. 301, 1751)の胸中に其萠芽を發せし者の如くカスパー，フリドリヒヴヲルフ氏(Caspar Friederich Wolff-Theoria Generationis. 1759)始めて大に此説を世間に唱道したりと雖とも益々之をして世人の注意を引き其後三十年千七百九十年彼の有名なる詩家ゲーテ氏(Johann Wolf gang Göthe-Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären. 1790)其人にして氏の著書植物變遷論に依りて獨立に此説を唱えたり其後二十三年を經て千八百十三年ド，カンドール氏亦單獨に之を唱道せり(A. P. De Candolle-Théorie Êlémentaire de Botanique. 1813.)

夫れ花の各機關は其雌雄蕋たると花被たるとを問はす皆“葉”の變態せるものなり葉と其性質を同ふするものなりそも葉は植物の類化作用を營む爲に其形狀其組織其色澤盡く是の目的に一致せざるへからず其用途に相應せさるべからず而して花は營養を司るものにあらそ瓦斯の發散と目的とするものにあらずば是れ生殖を主宰する處の機關にして其變化の狀態は必す目的用途に隨伴せざるへからす花の各機關をして葉より變形せるものとせば彼の雌雄蕋及び花被は即ち莖軸に附着せる葉片と見做そ事を得へく故に各機關は時に或は其本形（オルジナルフオーム）を變化し得へきは理論の將に許す處なり今各機關に付て詳細に其葉の性質を帶ひ葉より變態せるものたる事之を事實に徵して歸納的に論すべし

苞 (bracts)　苞は明に葉の形狀色澤幷に構造を有するもの甚た多く其莖葉と異なる處は只形の小なるにありて實に葉の花被に變化する階段の初步と謂ふへし然れとも其形狀大且綠色を呈するものにありてハ莖葉と判別し難く只其腋間よりして花芽を發生するを以て其葉にあらさるを知るのみヤナギラン，シヤクヤクは實に其適例にして莖葉より苞に變遷するの狀態を知るに易くして其性質を同ふすること疑ふへからさるなり

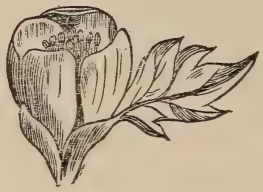


第三圖.—Helleborus viridis ノ葉 a,b, ヨリ苞 c, ニ變遷ノ狀ヲ示ス(Henslow)

若し苞にして葉綠色にあらすして他色彩を有する時に當りてハ已に生殖機關たるの實を顯はすものにして花の妍色を增すにありゴゼンタチバナ又ハヤコボランの如き花にありては苞ハ全く花瓣の用をなし其色美にして其形や大なり此苞の綠色を捨てゝ鮮美なる色彩を備ふるに垂れるもの則ち花瓣と同しく“昆虫誘引”に基つくものにして其直接の原因は昆虫の屢々來りて密液又は花粉を掠食するの都度苞に刺擊を與へて過剩の營養液玆に流動して其變

形を來せしものなり自然の撰擇に依り適者の生存せるものなり其他苞の階謔的に雄蕊の形狀を呈し又ハ雌蕊の狀態をなすもの其例乏しからず

蕚 (Calyx)　蕚の莖葉と其性質を同ふすること又其外觀及び組織に依りて自ら明かなり蕚片 (Sepals) の直接に莖葉の形狀をゑせるもの多くハ階謔的の花にありて見る所にして彼の薔薇花苜蓿又は櫻草等の其例乏しからず



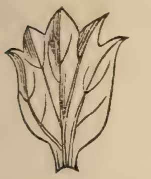
第四圖—.きんぽうげ花ノ葉狀チナセル蕚片(Henslow)

蕚と苞とは多くの場合にありて分明識別し難く互に相類似せること屢々なり前條苞は葉の變形たる事を說けり而して蕚と苞とは殆んと判別し難きの點より推究せは蕚は葉の變形たること自ら明かなり且つや事實に於て然る所以のもの甚た多し今日我々の庭園に栽培せる處のツバキ,サヾンクワ,の如き花にありては苞と蕚の境界判然せす其孰の部分の苞にして孰れの部分よりして蕚の始まるかは植物學者も之を斷言し能はさるなり又クサイチゴ (Straw berry) の如き花にありては五ケの蕚片五ケの苞と交互に配列し其外觀毫末も異なることなく故に解剖上植物學者に依りて或は之を盡く蕚片となし又ハ蕚片及ひ苞に區別するものあり

蕚片の瓣 (Petals) の觀を呈せるものは最も普通の事實にして誰れしも多瓣花に見る處なり毛茛科の諸屬に多し又階謔的に瓣樣に粉裝するものは單瓣花に多し雄蕊又は雌蕊を有そる天花は豌豆,菫花,等にありては此等は皆進歩的變化（プログレツシーヴメタモーホーシス）と謂ふべし

花冠 (Coralla)　花瓣ハ通常美麗なる色彩を具有せる者なり是れ直に生植機關の附屬物として昆虫の誘引を司とるものにして花の美觀を呈するは全く此の部分なり故に其目的已に是にあれは之に應する構造外觀を具備せさるへからそ然れとも原來其葉たるの性質は其扁平にして葉狀なる事時として數多の氣孔 (Stomata) を有する事（當時滿開なる沈丁花の花瓣を取り其

表面を剝脫して顯微鏡下に窺ひば葉面にある處の氣孔と全形同大のもの數多あるを見るへし三月十六日實驗）又葉と同しく維管束を有そる事或は又青色薔薇花にありては其花瓣殆んと全く葉狀を呈せり

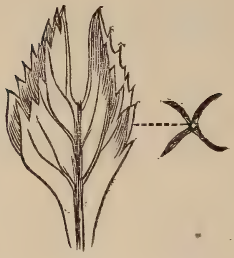


第五圖.—野生くさいちごの葉狀花瓣(Le Maout et Decaisne)

蕚より花瓣を經て雄蕋に進步的變遷は其順序歷然として薔薇花又は白色水百合の花に見る處にして普通植物學緒書に常に其圖解を見さるなし此等の花にありては何處より蕚の花瓣に移つるかを判別し難く且つ花瓣より雄蕋に移つるの點に於ても亦然り雄蕋は其初め花瓣の邊緣に不完全なる胞狀を生し漸次完全なる雄蕋の葯となり花瓣は其儘狹長となりて花糸をなし終に完全なる進步的變遷に依りて雄蕋に至るの順序を見る

雄蕋(Stamen)雄蕋は其外觀尤も葉と異なりと雖も然れとも其搆造を細密に驗究せは其葉たるの性質を帶ふるを發見し難きにあらす白色水百合花にありては花瓣雄蕋に進步的變化の順序は已に前條之を論したる如く花辨の內側例は漸々狹長となりて其尖端に返り或は尖端に小なる二ヶの胞狀の突起を生し其花瓣の內側に進むに從へ瓣は益々狹小となり胞は漸々大となりて遂に完全の雄蕋の狀を呈す此の事實よりして雄蕋は實に花瓣より變遷せるなり然して花瓣は旣に葉より變したるものとせは雄蕋も又葉より變化せるものと論定せさる可からす此の如き變遷はシキミ，重瓣芍藥，又は重瓣欝金香等に其例多しとなす又花戶栽培せる重瓣薔薇花（八重咲）の如きにありては雄蕋の或一部分は全く花瓣に退化せるものにして花瓣の數多ければ從て雄蕋の數少し是れ全く培養上よりして雄蕋の退步的變遷をなしたるものなり高山に生育する處のクサイチゴ又ハ青色薔薇にありては花瓣雄蕋幷に雌蕋も屢ゝ葉狀に退化せるものありて雌蕋の葯ハ恰も葉の邊緣に附屬せる如き觀を呈せり

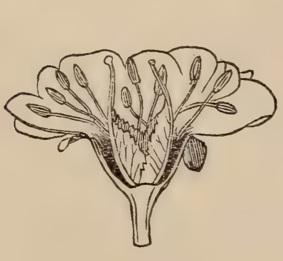
雄蕋の葯ハ葉面の卷轉して胞をなせるものにして而して花絲は即ち葉



第六圖.—Jatropha Pohliana ノ葉狀雄蕋(Masters).

柄と一致せる者なり葯の內縫は葉緣の接合せる處にして外縫ハ即ち葉の中心葉脉なり斯の如く雄蕋は葉より變化せる者たるは明なりと雖とも其一ケの雄蕋は一葉よりなれるか將二ケよりなれるかの點に於て植物學者又各說ある者の如くヴオルフ氏(Wolff)エンドリヘル氏(Endlicher)アガード氏(Agardh)の如きは二葉論者にしてミルベル氏(Mirbel)及びシユライデン氏(Schreiden)の如きハ則ち一葉論を主張するものなり而して現今此議論ハ全一葉論の勝利たるものゝ如し

雌蕋(Pistil) 雌蕋の葉狀を呈せるの事實甚た多し第一初歩の變化は即ち實礎の展開して胚子を露出するにあり然れとも蕋柱は猶蕋頭を存して通常の形狀を存せるものなり余は菜畝に栽培せる豌豆の莢開放して種子を露出し莢ハ全く葉狀を呈せるものを實見せり是れ退化的變遷の例證にして雌蕋も又雄蕋と同しく葉の巻轉して成れるものなり胚子は則ち胚盤上の隆起として發生し實礎の內面は則ち葉の表面にして外部は則ち裏面なり



第七圖.—八重咲櫻ノ葉狀雌蕋 (Le Maout et Decaisne)

以上各生殖機關の變遷を論述せりと雖とも之を摠括して花の各機關全体の配列は又葉と全しく配例せるものなり花芽は其發生の始めに當りて葉芽と認別し難く其位置又推側の二樣ありて芽は枝の短縮せるものなり故に花は則ち一ケの枝梢にして其伸長の少きもの花の中軸は枝にして各機關は則ち之に附着せる葉なりと謂ふ可し

（以下次號）

雜 錄

めだけノ赤衣

めだけノ莖ニ杏色ナル革皮樣ノ物体ヲ以テ被覆サルヽモノアリ是レ Puccinia corticioides, *Berk.* et *Br.* ト稱スル害菌ノ寄生ヨリ生スルモノニシテ千八百七十五年五月二十八日ボルケリー氏 (Berkeley) 彼ノ有名ナルチヤレンジヤ號遠征ノ途次日本帝國神戸ニ於テ始メテ採集シタルモノニシテ其細密ナル圖解説明ハ載セテ Berkeleys. Fungi of the Challenger Expedition. p. 52 Pl II. fig 7, 8. 及ヒ Saccardo, Sylloge Fungorum vol VII. Part. 2. p. 731 ニアリ予ハ之ヲ明治二十四年三月九日東京市本所區綠町某氏ノ庭園ニ於テ採集セリ　　堀 正太郎

◆

先ニ松村任三氏ハ英和對譯植物俗名ヲ本誌ニ連載セラレ英語ヲ解スル人々ヲ裨益セラレタル事鮮少ナラス然ルニ英語ニ次キ本邦ニ大ニ行ナハルヽ所ノ外國語ハ獨逸語ナリ而ソ其植物俗名ヲ譯サント欲スル者ニシテ適當ナル者ノナキハ又英語ニ同シ是吾輩ノ遺憾トスル所ナリ故ニ氏ニ乞フテ號ヲ追ヒ本誌ニ獨和對譯植物名ヲ載セ今後同語植物名ヲ譯サント欲スル人ノ一助ニ供ス　　編者 誌ス

獨和對譯植物名彙

松村任三

A.

Afrikane. *Kōōsō; Kujakusō.*

Agrume. *Zabon.*

Ahle. *Kapp-Zakura.*

Ahorn. *Momiji; kaede.*

Akelei. *Odamakisō.*

Alant. *Ō-guruma.*

Weiden Alant. *Kasensō.*

Wiesen Alant. *Oguruma.*

Alber. *Hako-yanagi.*

Alpranke. *Marubanohoroshi.*

Amarant. *Hiyu.*

Ampfer. *Suiba; sukampo.*

Kleiner Ampfer. *Hime-suiba.*

Sauer Ampfer. *Suiba.*

Wasser Ampfer. *Ma-daiō.*

Amstel. *Karamatsusō.*

Akelei Amstel. *Karamatsusō.*

Kleine Amstel. *Aki-karamatsu.*

Trauben Amstel. *No-karamatsu.*

Angelikabaum. *Taranoki.*

Anke. *Mushitori-sumire.*

Antoniblüh. *Satsuma-utsugi.*

Apfel. *Ringo.*

Aprikose. *Anzu.*

Aschitze. *Miyama-nanakamado.*

Aster. *Kiku.*

Garten Aster. *Ezo-giku.*

Strand Aster. *Ura-giku.*

Attich. *Kusa-niwatoko.*

Augentrost. *Kogome-gusa.*

B.

Badian. *Shikimi.*

Bajonettblume. *Itoran.*

Baldrian. *Kanokosō.*

Banane. *Banana.*

Bandgras. *Kusa-yoshi.*

Rohr Bandgras. *Kusa-yoshi.*

Baniane. *Yōju.*

Barbarakraut. *Yama-garashi.*

Bärenklau. *Hana-udo.*

Barille. *Okahijiki; Miruna.*

Bartgras. *O-garukaya.*

Bartsch. *Hana-udo.*

Batate. *Satsuma-imo.*

Batunge. *Kwakkō-chorogi.*

Bauernrose. *Botan; Shakuyaku.*

Becher. *Namban-hakobe.*

Becherfarn. *Horagoke.*

Beifuss. *Yomogi.*

Berberize. *Hebinoborazu.*

Bergamotten. *Bushukan.*

Bernitze. *Kuro-ichigo.*

Berufkraut. *Hime-mukashiyomogi.*

Besenstrauch. *Enishida.*

Betelnüss. *Binrōji.*

Bettstroh, Franen. *Kawara-matsuba.*

Beutling. *Oni-kasamochi.*

Bibernell. *Mitsuba-gusa.*

Biberbaum. *Mokuren.*

Bienenheide. *Isotsutsuji.*

Bigarrado. *Daidai.*

Bilsenkrant. *Hiyosu.*

Bingelkraut. *Yama-ai.*

Binse. *Ukiyagara.*

Meer Binse. *Mikuri.*

Nadel Binse. *Matsuba-i.*

Teich Binse. *Sankaku-suge.*

Birke. *Kamba.*

Birne. *Nashi.*

Birnkraut. *Ichiyakusō.*

Bitterich. *Kōzori-na.*

Bitterklee. *Mitsugashiwa.*

Bitterlinge. *Kakinohagusa.*

Bittersüss. *Maruba-no-horoshi.*

Biss. *Tochi-kagami.*

Blasenstrauch. *Bōkō-mame.*

Blaugummibaum. *Yūkari.*

Blutkraut. *Mizo-hagi.*

Blutfennich. *Mehishiba.*

Bocksbart. *Baramonjin.*

Bockshorn. *Koroha.*

Bögge. *Shusu-ran.*

Bohne. *Ingen-mame.*

Bolle. *Natsu-negi.*

Borretsch. *Ruri-jïsa.*

Borrich. *Ruri-jïsa.*

Bratenkraut. *Tachijakōsō.*

Bräunenblume. *Utsubogusa.*

Braunelle. *Utsubo-gusa.*

Braunholz. *Suō.*

Braunkohle. *Kuro-habotan.*

Braunwurz. *Hina-no-usutsubo.*

Brechnuss. *Machin.*

Brennbohne. *Hasshō-mame; Osharakumame.*

Brimm. *Enishida.*

Brombeere. *Ki-ichigo.*

Brustbeere. *Natsume.*

Brustwurz. *Ashitaba.*

Buche. *Buna.*

Buchsbaum. *Tsuge.*

Bügelholz. *Tsuru-umemodoki.*

Buchweizen. *Soba.*

Bufbohne. *Soramame.*

Bunge. *Kuwagatasō.*

Büngel. *Awa-goke.*

Bungen. *Hai-hamabossu.*

Butterblume. *Enkōsō; kobano-kimpōge; kimpōge.*

Butterwurz. *Mushitori-sumire.*

C.

Canariengras. *Kanariisādo.*

Centifolie. *Niwa-ibara.*

Champignon. *Haratake.*

Chinaäppel. *Mikan.*

Chinagras. *Mao.*

Chinarinde. *Kina.*

Chinarose. *Bussōge.*

Chokoladenbohne. *Kakao.*

Christophskraut. *Ruiyō-shōma.*

Christuspalme. *Tōgoma.*

Chichorie. *Kikujisa.*

Citrone. *Bushikan.*

Coca. *Koka.*

Cornelkirsche. *Sanshiyu.*

Cypergras. *Sumotorigusa.*

D.

Darrgras. *Kōbō; shirage-gaya.*

Dattelpalme. *Natsumejuro.*

Dattelpflaume. *Kokutan.*

Denkmein. *Rurisō.*

Dill. *Inondo.*

Diptam. *Hakusen.*

Distel. *Hire-azami.*

Dochan. *Tōjinkibi.*

Dohr. *Tampopo.*

Donse. *Gama.*

Dornkirsche. *Natsuume.*

Dotter. *Tama-nazuna.*

Dotterblume. *Enkōsō.*

Drabe. *Hishi.*

Drehte. *Neji-bana.*

Dreifaltigkeitsblume. *Tsumatorisō.*

Drehähre. *Nejibana.*

Drosselbeere. *Miyama-nanakamado.*

Drosswurz. *Hinanousutsubo.*

Drunt. *Unran.*

Durchwachs. *Hotarusaigo.*

Dürlitze. *Sanshiyu.*

Dürman. *Mandarage.*

Duchn. *Tōjinkibi.*

E.

Ebenholz, schwarz. *Kokutan.*

Eberesche. *Miyama-nanakamado.*

Eberich. *Aka-bana.*

Edeltanne. *Momi.*

Ehrenpreis. *Kuwagatasō.*

Eibe. *Ichii.*

Eibisch. *Tachi-aoi.*

Eiche. *Kashiwa.*

Eierfrucht-pflanze. *Nasubi.*

Einbeere. *Tsukubanesō.*

Einblatt. *Umebachisō.*

Eisenhart. *Kuma-tsuzura*

Eisenholz. *Tagayasan.*

Eisern. *Kumatsuzura.*

Elephantenbaum. *Tsurukamesō.*

Eller. *Hannoki.*

Enfer. *Shōga.*

Engelwurz. *Shishiudo.*

Enzian. *Rindō.*

Epheu. *Tsuta, fuyuzuta.*

Eppich. *Uikyō.*

Erbse. *Endō.*

Saat Erbse. *Endō.*

Erbsenstrauch. *Mure-suzume.*

Erdbeere. *Oranda-ichigo.*

Erdbirne. *Kikuimo.*

Erdeichel. *Rakkashō; Nankim-mame.*

Erdmäuse. *Nankim-mame.*

Erdnuss. *Nankim-mame.*

Erle. *Han-no-ki.*

Erne. *Hana-aoi.*

Escariol. *Kikujisha.*

Esche. *Toneriko.*

Espe. *Hako-yanagi.*

F.

Fadenseide. *Nenashi-kazura.*

Färbender Maulbeerbaum. *Ōsēji-orenji.*

Färber Maulbeerbaum. *Ōseji-orenji.*

Faseln. *Ingem-mame.*

Fassholz. *Hakama-kazura.*

Faulbaum. *Kuro-umemodoki.*

Feigbohne. (1) *Hauchiwa-mame.* (2) *Sendaihagi.*

Feigwurz. *Kobano-kimpōge.*

Feinstrahl. *Hime-joon.*

Felbrich. *Numa-torano-o.*

Feldsalat. *Nojisa.*

Fennich. *Enokoro-gusa.*

Fettbaum. *Nankin-haze.*

Fetthenne. *Benkeisō; mannen-gusa.*

Fettkraut. *Mushitori-sumire.*

Feste. *Oni-tabirako.*

Feuerblume. *Hina-geshi.*

Fichte. *Tōhi.*

Fieberbaum. *Yūkari.*

Fieberrinde. *Kina.*

Fingerkraut. *Kiji-kakushi*

Firnissumach. *Urushi.*

Flachs. *Ama; nume-goma.*

Flachslilie. *Ama-yuri.*

Flieder. *Murasaki-hashidoi.*

Fliegenfalle. *Mushitori-gusa; Mushitori-uchiwa.*

Fliegenpilz. *Haetori-dake.*

Flittergras. *Kaze-kusa.*

Flott. *Uki-kusa.*

Flughafer. *Karasu-mugi.*

Föhre. *Matsu.*

Franzosenkraut. *Hime-mukashi-yomogi.*

Frauenhaar. *Hōrai-shida.*

Frausenstroh. *Kawara-matsuba.*

Freisamkraut. *Sansiki-sumire.*

Friedlos. *Kusaredama.*

Froshlattich. *Hirumushiro.*

Froschlöffel. *Omodaka.*

Fuchshirse. *Awa.*

Fuchsschwanz. *Senninkoku.*

Fustik Maulbeerbaum. *Ōsēgi-orenji.*

G.

Gagel. *Ezo-yamamomo.*

Gamander. *Niga-kusa.*

Gänsefuss. *Akaza.*

Garbe. *Nokogirisō.*

Gaspeldorn. *Hari-enishida.*

Gauchheil. *Ruri-hakobe.*

Gauklerblume. *Mizo-hōzuki.*

Geisklee. *Kingusari.*

Gelster. *Torikabuto.*

Gensing. *Tsuru-kimbai.*

Georgine. *Tenjiku-botan.*

Germer. *Shurosō.*

Gerste. *Mugi.*

Früh Gerste. *Ō-mugi.*

Gerstel. *Kibana-no-amana.*

Gessel. *Koba-no-ryūkinkwa.*

Giftbeere. *Ō-sennari.*

Gletsch. *Mamakona.*

Glinze. *Kimpōge.*

Glŏckchen. *Yuki-no-hana.*

Glocke. *Hotaru-bukuro.*

Garten Glocke. *Fūrinsō.*

Gnadenkraut. *Sawa-tōgarashi.*

Goldregen. *Kingusari.*

Goldstern. *Kibana-no-amana.*

Gomuti Palme. *Tsugu.*

Gonne. *Hatazao.*

Gōsche. *Akaza.*

Gränke. *Yōraku-tsutsuji.*

Polei Gränke. *Nikkō-shakunage.*

Greusel. *Numa-hakobe.*

Grindkraut. *Matsumushisō.*

Grünkohl. *Ao-kōrabe.*

Gundermann. *Kakidōshi.*

Gundram. *Kakidōshi.*

Günsel. *Jūnihitoe.*

Gurke. *Ki-uri.*

H.

Haargras. *Hama-ninniku.*

Haarstrang. *Botan-ninjin.*

Habichtskraut. *Yanagi-tampopo.*

Hafer. *Ma-garasu-mugi.*

Hagen. *Sanzashi.*

Hahnenfuss. *Uma-no-ashigata.*

Händelwurz. *Chidorisō.*

Hanf. *Asa.*

Harakeke. *Amayuri.*

Hartheu. *Otogirisō.*

Hasel. *Hashibami.*

Haselwurz. *Saishin; kamo-aoi.*

Hasenbrod. *Suzume-no-hie.*

Hasenohr. *Mishima-saigo.*

Hecksame. *Hari-enishida.*

Heidich. *Hama-daikon.*

Heister. *Shide; soro.*

Helmkraut. *Namikisō.*

Herliz. *Sanshiyu.*

Hermel. *Kamitsure.*

Herzblatt. *Umebachisō.*

Hexenkraut. *Tani-tade.*

Himbeere. *Kuro-ichigo.*

Hirschwurz. *Ibuki-bōfū.*

Hirse. *Kibi.*

Holm. *Satsuma-utsugi.*

Holunder. *Niwatoko.*

Honiggras. *Shirage-gaya.*

Hopfen. *Karahanasō.*

Hornbaum. *Shide; soro.*

Hornklee. *Miyako-gusa.*

Hornkraut. *Mimina-gusa.*

Hornstrauch. *Sanshiyu.*

Hucke. *Ōba-takeshima-ran.*

Hühnerbiss. *Namban-hakobe.*

Hülsen. *Hiragi-soyogo.*

Hundszahn. *Gyōgi-shiba.*

Hungerblümchen. *Inu-nazuna.*

Hyazinthe. *Hiyashinto.*

I.

Igellock. *Kingyomo.*

Igelskolben. *Mikuri.*

Italienisches Rohr. *Danchiku.*

J.

Japanische Ceder. *Sugi.*

Jerichorose. *Eruko; anzanju; ansanshi.*

Johannisbeere. *Suguri.*

Judenkirsche. *Hōzuki.*

K.

Kalmus. *Oni-zekishō.*

Kamille. *Kamitsure.*

Kandel. *Hitsuji-gusa.*

Kapuzinerkresse. *Nōzen-haren.*

Karade. *Nabe-na.*

Kartoffel. *Jagatara-imo.*

Kastanie. *Kuri.*

(*Ika-jigō.*)

植物學雜誌

第五卷　第五十一號

明治廿四年五月十日

THE BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 51.

May.　1891.

明治學院
MEIJI GAKUIN
LIBRARY

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

地學雜誌

第貳拾八卷
四月二十五日發兌

定價金拾錢郵税一錢六册前金郵税共五十四錢十二册前金一圓八錢

◉地質調査所錄事

●天然セメントノ試驗成績　地質調査所技師工學士F.C.S.清水鉄吉君

◉論説

●日本群島（承前）　地質調査所技師ドクトル原田豐吉君

●但馬名所玄武洞ノ記　理學士巨智部忠承君

●釧路國マシウ岳ノ植物帶　理學士神保小虎君

●長崎縣内第三紀層略説　理學士奈佐忠行君

◉雜錄

●黄河及楊子江ノ偉觀　理學士金田楢太郎君

●地質巡撿規則一班（第二稿）　理學士神保小虎君

●地圖ノ種類ト其來歷　理學士金田楢太郎君

●本邦石綿產地及應用　理學士奈佐忠行君

●石油ノ源因（承前）　理科大學地質學生脇水鉄五郎君

◉雜報

●大陸ノ名●水ノ循環●氣候ノ巡環●硅灰石●羽後ノ燒山●磐城褐炭風化ニ付テ●常陸ノ泥灰石●宮城縣ノ間歇泉●牛ニ似タル石●壹岐ノ玄武岩●肥前ノ水銀●萬國地學士總會●次回ノ地質要報●亞細亞小地理書ノ新著

◉地學談話會記事

◉地學會記事

發行所　神田裏神保町七番地　地學會事務所
賣捌所　東京神田裏神保町　敬業社
同　日本橋通三丁目　丸善書店

第六卷第六十一號

東京人類學會雜誌

毎月一回末發兌一册定價金拾錢郵税壹錢六册前金郵税共六拾一錢郵券代用ハ壹割増

○記事、次會ノ通知
○論説及報告
●小金井博士の貝塚人骨論を讀む　理學士坪井正五郎
●佐藤重紀氏の竪穴及チャシコツの記を讀む　坪井正五郎
●武藤留之助氏の北海道石器の報に就きて思ふ所を述ぶ　坪井正五郎
●貝塚土偶ニ就テ（圖入）　若林勝邦
●沖縄縣諸島結繩記標考　田代安定
●飛彈國石器時代遺跡の發見（圖入）　田中正太郎
○雜報、越前竹田正月ノ風俗、石鍋（圖入）、奥羽人類學會第六回記事、阿波徳島人類學取調仲間記事

●發賣元　東京本郷六丁目　哲學書院

ACROSTICHUM TOSAENSE, SP. NOV.
NOM. JAP. *HIROBA-ATSUITA.* ヒロバアツイタ.

植物學雜誌第五卷第五十一號
明治廿四年五月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[**Vol. V.** May 10, 1891. **No. 51.**]

MEIJI GAKUIN
LIBRARY

A New Japanese Acrostichum.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Acrostichum tosaense, sp. nov.

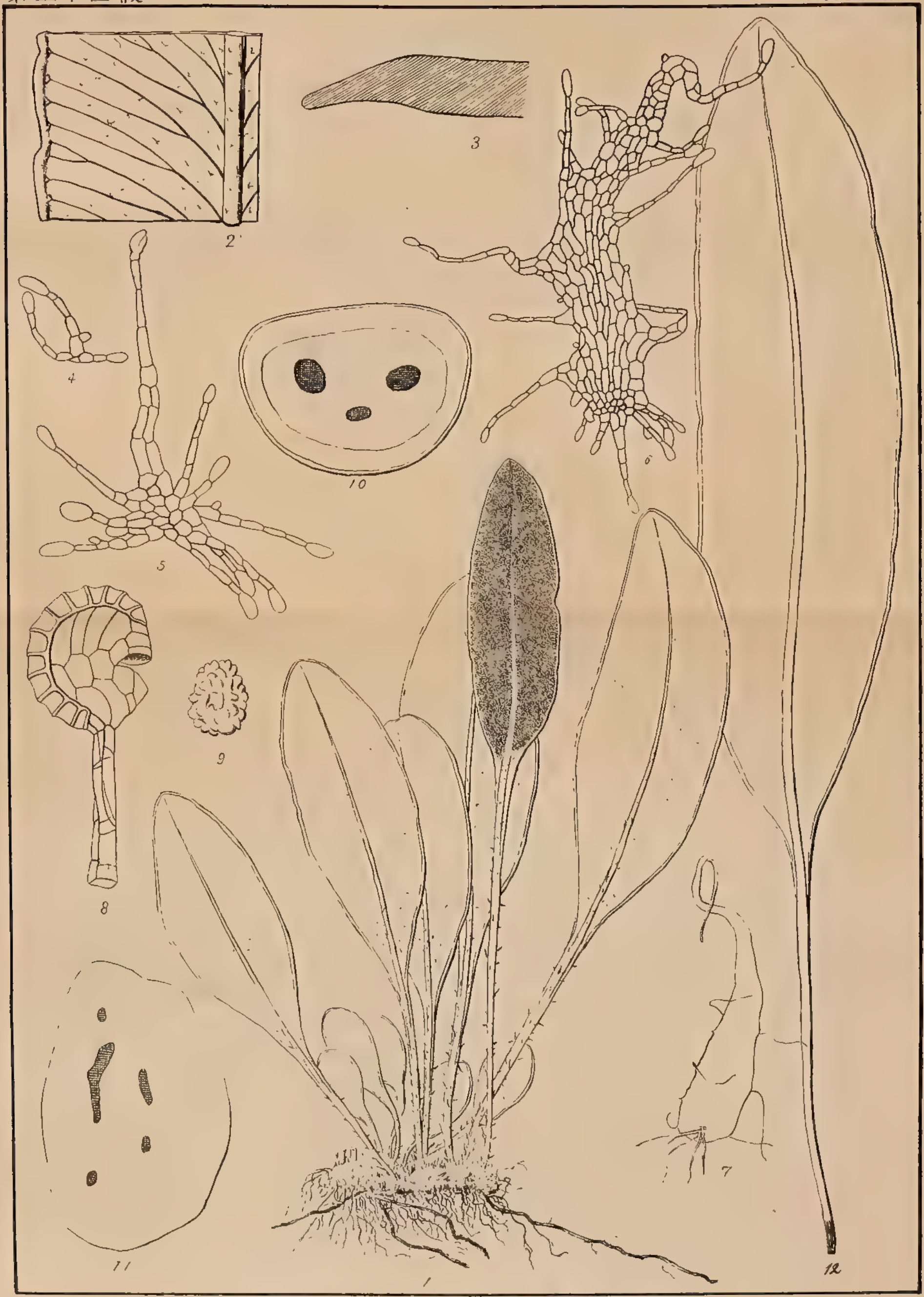
Nom. jap. Hiroba-atsuita. ヒロバアツイタ

(Plate XXIV.)

Rhizome creeping, several cm. long, with long branched roots, densely clothed with brown linear-lanceolate or lanceolate and very slender-pointed scales. Stipes approximate, with scales like those of the rhizome, usually 3-4 cm. long in the sterile fronds, in large specimens as much as 7 cm. long, longer in the fertile fronds and usually about 7 cm. long. Sterile fronds perennial, subcoriaceous, deep-green on the upper, pale on the under surface, oblong-oval entire or slightly sinuate, with a distinct and diaphanous margin, obtuse at the apex, tapering and decurrent at the base, scattered with appressed branched hairs on both surfaces, usually 6-12 cm. long and 2-3 cm. broad, in large specimens sometimes 15 cm. long and 4 cm. broad; veins rather obscure, somewhat recurved, diverging at first from the thick costa at an angle of 30-40 degrees then of 60-70 degrees, about 2 mm. apart at the base, mostly forked, subparallel, terminating below the margin of the frond in a thickened forked apex. Fertile fronds similar to the sterile, smaller, about 5 cm. long and 1.5 cm. broad; sori clothing the whole under surface except the costa.

This fern grows on rocks, sometimes on trees, along streams in mountain woods. It was first collected by Mr. E. Yoshinaga in August, 1887, at

第二十四版 Plate XXIV.


2
3
4
10
6
5
8
9
11
1
7
12

ACROSTICHUM TOSAENSE, SP. NOV

NOM. JAP. *HIROBA-ATSUITA.* ヒロバアツイタ.

Hōnokawa-yama in the province of Tosa. My specimens are from the above locality and also from Nanokawa-mura in the same province.

The creeping rhizome is 3 to 4 mm. thick, and often 15 to 20 cm. long, with long branched roots which are tomentose with dark-brown hairs. Its cross-section shows five or six sections of vascular bundles arranged more or less in the form of a circle, one or two of which are elongated and curved, the rest are small and oval. The scales which densely clothe the rhizome and the base of the stipe are lanceolate, linear-lanceolate, or even linear, fringed with a few long hairs at the margin, and attenuated into a long slender filament at the apex; they are often 5 or 6 mm. long and 0.5 to 1 mm. broad. The stipes are winged and canaliculate in front, their deciduous scales diminishing in size and number towards the upper part, where they are much laciniated. The stipes are 1 to 1.5 mm. in diameter at the base. Their transverse section near the base presents a somewhat semicircular outline, a thick ring of sclerenchyma inside the epidermal layer, and usually three sometimes five oval sections of the vascular bundles in the medullary parenchyma. The sterile fronds are much more numerous than the fertile; their surface is very minutely punctato-squamulose under the lens. Minute branched hairs or scales with a swollen cell at the apex of the branches are found on both surfaces, but more abundantly on the under. The frond is about 0.4 mm. thick. Its transverse section towards the edge shows that its thickness decreases at the diaphanous margin which is slightly or not all recurved. The young and small fronds are spathulate with a round apex and a tapering base. The fertile fronds are similar to the sterile except in their smaller size, longer stipe, and rather closer veins. There seems to be but one of them in each stock. The sporangia are dark-brown, round and compressed, about 0.3 mm. in diameter; the number of the segments of the incomplete annulus is 12 to 14. The spores are subovoid or subreniform, with a brown irregularly wrinkled exospore. They are 0.05 to 0.06 mm. long and 0.035 to 0.04 mm. broad.

For the reasons stated under *Acrostichum Yoshinagæ* in the last number of this magazine (*vide* vol. v., p. 111.), the present species may be also included in *A. conforme* of Swartz. But I have ventured to make it a distinct species, as I did in the case of *A. Yoshinagæ*. This species chiefly differs from *A. Yoshinagæ* in the following respects:—The rhizome of the former is elongated, often 15 to 20 cm. long; while that of the latter is short, at most 4 cm. long according to Mr. Yoshinaga. The sterile frond of the former is oblong-oval, about 0.4 mm. thick, and gradually thin at the margin; while that of the latter is narrowly lanceolate, about 0.6 mm. thick, and abruptly thin at the margin. The scales on the rhizome and the base of the stipe in the former are lanceolate, linear-lanceolate, or even linear, and attenuated at the apex; while those of the latter are ovate and obtuse at the apex. The veins of the former are more recurved than those of the latter. The vascular bundles of the rhizome of the former form a less complete circle than those of the latter.

Plate XXIV. Fig. 1, whole plant (nat. size); 2, portion of sterile frond (× 2); 3, cross-section of the same (× 26); 4, 5, branched hairs from the surface of sterile frond (× 53); 6, scale from stipe (× 33); 7, scale from the base of stipe (× 11); 8, sporangium (× 88); 9, spore (× 240); 10, transverse section of the basal portion of stipe (× 26); 11, transverse section of rhizome (× 13); 12, large specimen of sterile frond (nat. size).

Eine Essbare Japanische Flechte.

VON

M. Miyoshi.

Alectoria sulcata, Nyl.

Nom. jap. Bandai-no-Kinori. バンタイノキノリ

Lager strauchig, starr, hornartig, hartnäckig, glatt, glänzend, leicht braun bis schwarzbraun, aufrecht, 4-6 cm hoch, 1-2.5 mm breit, sehr verzweigt, durch Scheiben befestigt. Aesten rundlich—zusammengedrückt, mehr oder weniger rinnenförmig, auf einer Seite vertieft. Aestchen faserig, nach den Spitzen zu allmählig schwarz gefärbt. Früchte fast endständig, 5-7 mm diam. Scheibe flach, braun, mit dünnem, ungezähntem Rande. Schläuche cylindrisch, achtsporig. Sporen einzelling, oder quer zweiteilig, farblos, nach der Reife braun gefärbt und geschrümpft, 22-30 μ lg., 8-10 μ br. Paraphysen verzweigt.

An Bäumen in Hochgebirgswäldern in ganz Japan, sehr häufig in Nikko und Kiso.

Der Bau des Thallus ist dem des *Bryopogon* sehr ähnlich; aber die Gonidienschicht unserer Art ist getrennt und liegt an der Grenze zwischen Rinden= und Markschicht. In Uebereinstimmung mit der obengenannten Gattung aber besteht das Epithallus aus einer äusseren körnigen Schicht von undeutlicher Struktur, und aus einer eigentlichen Rinde des dicht verfilzten schmalen Hyphen. In den obengenannten Eigenschaften, ebenso auf in den verzweigten Paraphysen und dem gallertartig erscheinenden Hypothecium, stimmt unsere Flechte mit *Cornicularia* überein, von welcher sie sich aber durch quergeschnitte Sporen, die beim Reifen braun werden, unterscheidet.

Unsere Flechte wird von den in der Umgebung der Bandai-Berges ansässigen Bewohnern gegessen, und wird von ihnen Kinori genannt. Sie enthält

eine Substanz von bitterem Geschmack, der nur durch langes Kochen beseitigt werden kann.

Chemische Reaction:—Thallus K+C— , Medulla K—C—.

* * *

(A Botanical Tour to *Chichibu* and Mt. *Tsukuba*.)

秩父諸峯及ビ筑波山植物採集略記（圖入）

三　好　學

秩父諸峯

（地理）秩父郡ハ武藏ノ東北隅ニシテ,北,上野ニ接シ,西,信濃ニ隣リ,西南,甲斐ニ連ル,地勢高峻,四圍皆ナ山ナリ.

郡內ノ高峯ハ兩神山（一七五四米突）,武甲山（一三一〇米突）,三峯山（一〇一六米突）,大日向山等ニシテ,山脉蜿々,峯嶺重疊ス,澗水ノ諸谿谷ヨリ出ヅルモノ,集リテ荒川ノ源ヲ爲ス,斷岸數百尺,屈曲迂回シテ郡內ヲ貫流シ,東北ニ向ヒ,又轉シテ南流ス.

大宮鄕ハ郡ノ東方ニアリテ郡中ノ都會タリ.

（里程）本庄停車場ヨリ大宮マデ九里.

大宮ヨリ三峯マデ六里.
三峯ヨリ大日向山マデ一里.
大宮ヨリ武甲山頂マデ二里.（登路二三アリ,茲ニハ尤モ近キモノヲ載ス.）

予ガ今回ノ採集ハ,三峯,武甲ノ連峯中ニシテ,宛カモ三四月ノ交ヒナルヲ以テ,氣節猶早ク,三峯ノ頂嶺ニハ猶ホ殘雪アリ,故ニ開花セル植物ハ甚ダ少ナシ,唯「ゑぞすみれ,かたくり,きくざきいちりんさう,わださう,いはうちは,かてんさう,しろばなのねこのめさう」ノ諸種ノミ花候ノ正ニ到レルヲ見タリ,又「すはまさう,ふくじゆさう,をはやまかたばみ」ノ類

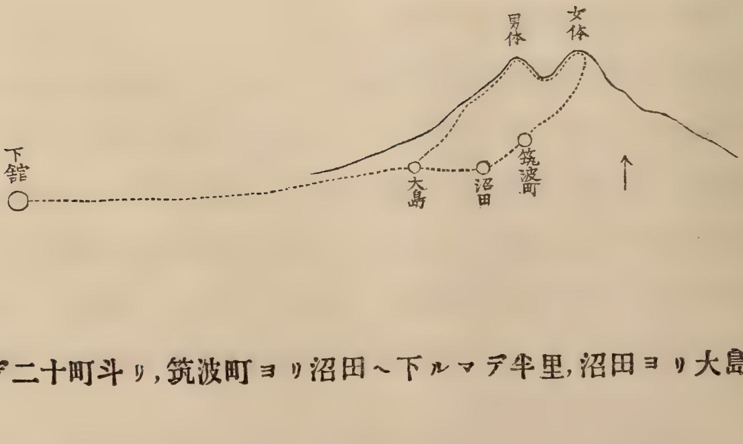
モ,此地方ニ產スルモノニシテ,當時開花スルモノナレドモ,今回ハ採集スルヲ得ザリシ.

三峯,大日向ノ連峯ハ樹林深奥ニシテ陰濕ナルガ故ニ,前記ノ顯花植物ヲ見レドモ,武甲山ハ一座ノ岩山 (Quarzite ト Limestone トニテ成ル) ニシテ,樹木ニ乏シケレバ此等ノ植物ヲ多ク見ズ,唯地衣ノ類ノミ多シ,殊ニ山頂ニハ「ぶな」ノ疎林アリテ,樹梢,樹膚ニハ木狀,葉狀,固着地衣多ク,略ぼ日光,木曾諸山ノ喬木帶及ビ灌木帶ノ地衣分布ノ狀況ニ類セリ,叉岩生固着類モ少ナカラズ,然レ𪜈山ノ高度未ダ十分ナラザルヲ以テ,草本帶以上ノ地衣ヲ見ルヿナシ.

筑 波 山

(地理)常陸國中央部ノ北境ヨリシテ南方ヘ支出スル小山脉アリ,脉中ノ最高峯ヲ筑波山トナス,高サ僅ニ八七八米突ニシテ,固ヨリ高山トナスニ足ラザレドモ,武總ニ連ナル平原ノ東端ニ突立スルヲ以テ,望觀頗ル著大ナルヲ覺フ.

(順路里程)下館停車場ヨリ筑波町大字大島マデ四里.



大島ヨリ筑波山男体(山頂ノ西峯)マデ一里,ソレヨリ女体(東峯)ヘ廻リ筑波町ヘ下ルマデ二十町斗リ,筑波町ヨリ沼田ヘ下ルマデ半里,沼田ヨリ大島ヲ經テ下館マ

デ四里半.

氣候猶ホ早ク，開花セルモノ甚ダ少ク，唯山麓ニ「あづまぎく，つぼすみれ」ノ類多ク花ヲ着ケタルヲ見，又山腹ノ樹陰ニハ「いちりんさう，くりんゆきふで，いはたがらし，はしりどころ，せんとうさう，かたくり」ノ類ノ花ヲ見タリ，山頂ニハ「ぶな，なら」等簇生シ，固着地衣諸種ヲ採取セリ，又岩石(Diorite) ニアル固着類數十種ヲ獲タリ，山中ハ一般ニ樹木ニ乏シク，唯南方ノ山腹ニ小シク松杉ノ密林アルノミ，(筑波山地質學上ノ探撿ハ，地學雜誌第三集第二十七卷ニ載スル脇水鉄五郎氏ノ東北二縣紀行ニ詳ナリ.)

因ニ云フ，筑波山ハ登降尤モ容易ニ，且ツ頗ル便宜アリ，山上嵒石ノ奇ナル，眺觀ノ壯ナル，宛ナガラ天造ノ公園ニシテ，實ニ一座ノ好山ナリ，今ヤ滊車ノ便アレバ，東京ヨリシテ該山ヘ採集ニ趣クモ亦僅々ノ時間ニシテ往復シ得ベシ，往復二日ヲ費セバ充分ナレドモ，一日ニテモ敢テ爲シ難キニアラズ，今左ニ順路時間ト，費用トヲ記シテ同好諸氏ノ便ニ供スベシ.

(時　間)

(發)		(着)	
六時卅五分	上野發一番滊車……………………	九時五十八分	下館着
十時十分	下館發人力車…………………………	十二時	大島着（是ヨリ直ニ人力車ヲ沼田マデ廻シ置クベシ.）
十二時十分	大島發，筑波山男体ニ上ル ………	一時	男体着
一時十分	男体發.女体ヲ經，筑波町ヘ下リソレヨリ沼田ヘ至ル……………………………………	三時半	沼田着
三時三十五分	沼田發(人力車)，大島ヲ經テ下館ニ歸ル…………………………………………	六時	下館着
六時四十三分	下館發最終滊車…… ………………	九時四十分	上野着

(費　用)

金壹圓貳錢	上野ヨリ下館マデ往復下等滊車賃

五拾五錢　　人力車一日分傭ヒ賃錢(晝辨當トモ)

貳拾五錢　　山案內人足一人賃錢

總計金壹圓八拾貳錢(外ニ食料若干)

秩父及ビ筑波山採集植物目錄 (地衣ノ部ヲ除ク)

(此ニ載スル顯花植物ハ何ヅレモ花ヲ有スルモノノミヲ採リタルナリ)

LIST OF PLANTS COLLECTED DURING A TOUR TO CHICHIBU AND TSUKUBA. (*Exclusive of Lichenes.*)

By M. MIYOSHI.

(*Chichibu.*)

Anemone cernua, *Thunb.* オキナグサ—*Ranunculaceæ.*…………武甲山

Anemone nikoensis, *Max.* イチリンサウ…………三峯山

Anemone Raddeana, *Regel.* キクザキイチゲサウ…………仝上

Ranunculus acris, *L.* キンポウゲ…………仝上

Eupteläea polyandra, *Sieb. et Zucc.* フサザクラ—*Magnoliaceæ.*…………仝上

Corydalis pallida, *Pers.* ホソバノミヤマキケマン—*Papaveraceæ.*…………秩父大宮

Capsella Bursa-pastris, *Mænch.* ナヅナ—*Cruciferæ.*…………仝上

Viola pinnata, *L.* var. chærophylloides, *Regel.* エゾスミレ——*Violarieæ.*

三峯山

Viola verecunda. *A. Gray.* ツボスミレ…………仝上

Kracheninikowia rupestris, *Turcz.* ワダサウ—*Caryophylleæ.*…………仝上

Stachyurus præcox, *Sieb. et Zucc.* キブシ—*Ternstræmiaceæ*…………仝上

Saxifraga samentosa, *L.* ユキノシタ—*Saxifrageæ.*…………仝上

Chrysosplenium macrostemon, *Max.* 子コノメサウ…………仝上

Chrysosplenium album, *Max.* シロ子コノメサウ…………仝上

Petasites japonicus, *Miq.* フキ—*Compositæ.*…………秩父大宮

Gerbera anandria, *Sch. Bip.* センボンヤリ…………三峯

Andromeda japonica, *Thunb.* アセビ—*Ericaceæ.*……全 上

Shortia uniflora, *Max.* イハウチハ—*Diapensiaceæ.*……武甲山

Scopolia japonica, *Max.* ハシリドコロ—*Solanaceæ.*……全 上

Ajuga decumbens, *Thunb.* var. sinuata, *Fr. et Sav.* キランサウ—*Labiatæ.*
三峯山

Ajuga decumbens, *Thunb.* var. typica, *Fr. et Sav.* ジフニヒトヘ……全 上

Nepeta Glechoma, *Benth.* カキドホシ……全 上

Lindera triloba, *Bl.* シロモジ—*Laurineæ.*……全 山

Nanocnide japonica, *Bl.* カテンサウ—*Urticaceæ.*……全 上

Thuya obtusa, *Sieb. et Zucc.* ヒノキ—*Coniferæ.*……全 上

Cephalotaxus drupacea, *Sieb. et Zucc.* イヌガヤ……全 上

Cymbidium virens, *Lindl.* ホクロ—*Orchideæ.*……武甲山

Tulipa edulis, *Baker.* アマナ—*Liliaceæ.*……三峯山

Erythromium dens-canis, *L.* カタクリ……三峯山 / 武甲山

Carex Thunbergii, *Steud.* アゼスゲ—*Cyperaceæ.*……三峯山

Carex Morrowii, *Boot.* カンスゲ……全 上

Lycopodium serratum, *Thunb.* タウゲシバ—*Lycopodiaceæ.*……全 上

Adiantum monochlamys, *DC. Eat.* ハコ子サウ—*Filicineæ.*……全 上

Asplenium varians, *Hook. et Grev.* イハトラノオ……全 上

Aspidium craspedosorum, *Max.* ツルデンダ……全 上

Polypodium linearifolium, *Hook.* ビロウドシダ……全 上

Polypodium lineare, *Thunb.* ノキシノブ……全 上

Polypodium Onœi, *Fr. et Sav.* ミヤマイツマデグサ……全 上

(*On Mt Tsukuba.*)

Anemone cernua, *Thunb.* オキナグサ—*Ranunculaceæ.*

Anemone nikoensis, *Max.* イチリンサウ……………………

Cardamine Tanakæ, *Fr. et Sav.* イハタガラシ—*Cruciferæ.*

Viola verecunda, *A. Gray.* ツボスミレ—*Violarieæ.*

Chamæle tenera. *Miq.* セントウサウ—*Umbelliferæ.*

Skimmia japonica, *Thunb.* ミヤマシキミ—*Rutaceæ.*

Erigeron Thunbergii, *A. Gray.* アヅマギク—*Compositæ.*

Scopolia, japonica, *Max.* ハシリドコロ—*Solanaceæ.*

Polygonum suffultum, *Max.* クリンユキフデ—*Polygonaceæ.*

Salix Sieboldiana, *Bl.* イハヤナギ—*Salicineæ.*

Selaginella involvens, *Spring.* イハヒバ—*Lycopodiaceæ.*

Hymenophyllum Wrightii, *V.D. Bosch.* ノキシノブ—*Filicineæ.*

Polypodium lineare, *Thunb.* ノキシノブ……………………

Climacium Americanum, *Brid.*—*Muscineæ.*

(*The Phanerogams enumerated above were all in blossoms at the time of collection.*)

日本産櫟槲植柯ノ諸種ヲ論ス

（前號ノ續）

松村任三

産地分布

Quercus dentata *Th.*

和名 *Kashiwa.* 産地,＿北海道, 本州＿分布 支那, 朝鮮

Quercus aliena *Bl.*

和名 *Kashiwa-nara.* 産地＿九州, 本州＿分布 支那

Quercus crispula *Bl.*

和名 *Ō-nara.* 產地—北海道, 本州山地

var. **Grosseserrata** (*Bl.*)

和名 *Mizu-nara.* 產地—北海道, 本州, 九州

Quercus glandulifera *Bl.*

和名 *Ko-nara.* 產地—北海道, 本州, 九州—分布 支那, 朝鮮

Quercus serrata *Th.*

和名 *Kunugi.* 產地—本州, 九州—分布 支那, 朝鮮, 緬甸, 印度東部

var. **variabilis** (*Bl.*)

和名 *Abe-maki.* 產地—本州西南, 四國, 九州

Quercus phyllireoides *A. Gr.*

和名 *Imame-gashi.* 產地—本州暖地海邊, 九州

Quercus glabra *Th.*

和名 *Mateba-shii.* 產地—九州, 沖繩島

Quercus thalassica *Hce.*

和名 *Shirifuka.* 產地九州—,分布— 支那

Quercus acuta *Th.*

和名 *Aka-gashi.* 產地—本州, 九州

Quercus gilva *Bl.*

和名 *Ichi-gashi.* 產地—本州暖地, 九州,分布— 支那

Quercus glauca *Th.*

和名 *Kuro-gashi.* 產地—本州暖地, 四國, 九州, 分布— 沖繩島, 支那, 印度北部

Quercus Vibrayeana *F. S.*

和名 *Shira-gashi.* 產地—本州,分布 支那

Quercus myrsinaefolia *Bl.*

和名 *Hosoba-gashi.* 產地—本州暖地, 九州

Quercus cuspidata *Th.*

和名 *Shii.* 產地—本州, 九州, 分布— 沖繩, 朝鮮

Quercus sessilifolia *Bl.*

和名 *Tsukubane-gashi.* 產地—本州暖地

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員 澤田駒次郎

第五十號正誤(116)ノ第二行十字目被ハ皮ノ誤同第十八行十九字目ヨリ同第十九行一字目ニ至ル樹脂,樣油質,物トアルハ樹脂樣油質物,ナリ(117)ノ第八行十九字目加ハ亞ノ誤

二十 アストラガルス

羅甸名 Astragalus gummifer, Labill.

荳科

小灌木ニシテ高サ二三尺枝杪ヲ繁茂ス皮部ハ其質粗糙赤灰色ヲ呈シ葉痕ヲ有ス嫩枝ハ白色ノ軟毛ヲ帶ブ葉ハ偶性翼狀ニシテ密生シ葉柄椎ハ極メテ硬固平滑ニシテ黄色ヲ呈シ先頂尖リテ刺狀ヲ爲シ數年間附着ス而シテ其基部ニ大ナル托葉ヲ有ス膜質ニシテ廣濶鋭尖平滑褐色幹ヲ抱擁ス小葉四對乃至六對殆ンド無柄ニシテ對生若クハ互生シ長サ一分強形ヲ倒卵圓若クハ長圓尖頭ヲ有シ平縁ニシテ表裏兩面平滑其色灰綠脉胳鮮明發生後直チニ墜落ス花ハ細小ニシテ葉腋ニ二三花ヲ簇生シ花梗ヲ有セズ各花脉質卵圓形ノ抱花小葉ヲ有ス長サ殆ンド蕚ト同一ニシテ鋭尖ヲ有シ其中央ニ膜管アリ蕚ハ五裂シ其裂片狹小ニシテ鋭尖ヲ有シ其色雪白外面絹糸樣ノ長毛ヲ密生ス花冠ハ蛾形ニシテ暗黄色ヲ呈シ蕚ト殆ンド其長サヲ均フシ旗瓣ハ長圓形ニシテ鈍雙頂ヲ有シ其基部擴張卷曲シテ筒狀ヲ爲ス翼瓣ハ稍々矮短ニシテ其下部延長シテ爪ヲ有シ線狀ヲ爲ス小舟瓣ハ翼瓣ト殆ンド其長サヲ均フシ互

ニ附着シテ舟脊狀ヲナス十雄蘂二束ヲナシ上部ノ一個ハ游離シ他ノ九個ハ花絲互ニ附着シテ筒狀ヲナシ其下部花冠ニ附着ス實礎ハ毛茸ヲ密生シ花柱平滑絲狀ニシテ柱頭細小ナリ花後莢果ヲ結フ細小ニシテ形チ長圓外面白毛ヲ帶ヒ一個ノ種子ヲ有ス腎臟形ニシテ平滑暗褐色ヲ呈ス

達剌侃篤護謨ノ原植物ハ小亞細亞ニ產スル多刺ノ植物トス然レ𪜈數百年間其植物ノ種類ヲ知ルヿ能ハザリキ一千七百九十年ニ佛國植物學士 *Labillardiere* 氏ハ黎巴嫩(Lebanon)山脉ニ於テ本植物ヲ採集スト云フ

本植物ハエルモン山, 小亞細亞, 亞爾美尼亞, 古爾的斯丹北部ニ自生ス又此等ノ山中ニハ其ノ他ノ種類モ亦產スト云フ *Hunbery* 氏ノ說ニ據レバ A. eriostylus, Boiss. & Haussk. A. adscendens, Boiss. & Hanssk A. Microcephalus, Willd (A. eriocanlus, D. C.) A. brachycalyx, Fisch. A. pycnoclados, Boiss, & Heldz A. Stromatodes, Bunge. A. Kurdicus, Boiss. A. Cylleneus, Boiss. & Heldr. トス此等ノ種類ハ東洋諸國ノ高嶺小亞細亞, 亞爾美尼亞, 古爾的斯丹, 波斯, 西里亞, 希臘等ニ產ス其形狀及ビ產地ハ *Boiss* 氏東洋植物書(Flora Orientalis)ニ詳カナリ又 A. Verus, Olivior. ハ波斯ニ產スルヲ發見シ當時之ヲ A. Tragacantha. トスト又 A. Creticus, Lam. ハ希臘及ヒクレート(Crete) ニ自生シ小量ノ護謨ヲ滲出スト

A. Tragacantha, L. ハ歐羅巴南部ニ產スト雖𪜈東部ニハ自生セズ或云護謨ヲ滲出セズト

此ノ屬ノ植物ハ東洋諸國ニ其種類數多アリ東洋植物書ニ記載セシモノ百五十六種アリテ其亞屬ヲ Tragacantha トス

藥品　達剌侃篤護謨　Tragacantha.

日本藥局方ニハ小亞細亞及ビ前亞細亞ニ產スル Astragalus 屬ノ諸種ヨリ得タルモノヲ以テ藥用ニ供ス印度藥局方ニハ本植物ノ幹ヨリ滲出シタル護謨ヲ用ヒ英國及ビ合衆國藥局方ニハ A. verus 及ビ其他 Astragalus 種類ノ幹ヨリ滲出セシ護謨ヲ以テ藥用トス英國藥局方發布後 *Haussknecht* 氏等

ノ調査ニ據レバ坊間ニテ販賣スルモノハ「アストラガルス」屬諸種ノ幹ヨリ得タルモノナリト

達剌伲篤護謨ハ其植物ノ幹中ニ存在シ滲出シテ大氣ニ觸レテ乾固セシモノニアラス髓細胞組織及ヒ髓線ノ多少粘液質ニ變化セシモノトス此變化ヲ始メテ詳明セシハ *Nohl* 氏ニシテ爾後 *Wigand* 氏モ亦屢バ之ヲ說明セリ此變化ハ或ハ顯微鏡下ニ照シ或ハ事實ニ徵シテ著明ナリト或云達剌伲篤護謨ハ嫩枝ノ髓部及ビ髓線中ニ存在スルヿナク幹ノ髓細胞組織中ニノミ存在スルヲ檢出ス故ニ此護謨ヲ英語ニテ Degradation-product ト云フト然レ𪜈 *Hanbury* 氏ノ說ニ據レバ本植植ハ幹ノ內部ニ於テ此特異ノ變化ヲ生スル作用ヲ有スルヿ著明ニシテ一千八百六十年ニ黎巴嫩山中ニテ之ヲ熟視スルノ好機會ヲ得テ指大ノ枝ヲ截切セシニ其中心ヨリ直ニ柔軟ニシテ稍々凝結シタル護謨ヲ滲出ス其狀宛モ蟲類ノ匍匐スルニ似テ長サ六分餘三分時間ヲ繼續ス又厚キ皮部ヲ有セシ幹ノ髓線ヨリモ亦護謨ヲ滲出ス此等ノ形狀ハ英國製藥會社參考室ノ陳列品即チ *Hanbury* 氏採集ノ本植物標本ニ因テ著明ナリ又本品ニ種々ノ形狀アルハ之ヲ滲出スル部分ノ圍繞スル組織ノ壓力ニ基因スト

本品ハ小亞細亞, 西里亞, 亞爾美尼亞, 古爾的斯丹, 波斯ノ各部ヨリ產出スト

採收　達剌伲篤護謨ハ「アストラガルス」屬諸種ノ灌木ヨリ自然ニ滲出シ或ハ獸類ノ觸ルヽニ因リ損傷部ヨリ滲出凝固セルモノヲ採收ス然レ𪜈白片(White flaliy)ト稱スルモノハ樹幹ニ搔裂ヲ施シ其滲出凝固シタルモノヲ採收ス故ニ其質善良ナリ其方法ハ *Maltass* 氏ノ說ニ據レバ第七八月ノ頃本植物ノ下部ヨリ土ヲ除キテ清淨トナシ小刀ヲ以テ幹ニ數條ノ搔裂ヲ施ス𪜃ハ其搔口ヨリ護謨ヲ滲出シ凝固シテ薄片ノ層ヲナスヲ通常トス搔裂後大約二三日間ヲ經テ之ヲ採收ス又或ル地方ニテハ銳尖ノ小刀ヲ以テ樹皮ヲ穿透シテ護謨ヲ採收ス氣候溫和清朗ニシテ大氣乾燥ノ日ニ滲出セシモノハ清潔

ニシテ白色チ呈シ炎熱濕潤ノ日ニ滲出シ乾固スルニ時間チ要シタルモノハ黃色若クハ褐色ヲ呈ス此等ノ法ヲ以テ護謨ヲ採收スルニ際シ自然ニ滲出シ凝固セシモノヲモ採收スト Haussknocat 氏ノ說ニ據レバ波斯, 古爾的斯丹ヨリ產出スルモノハ自然ニ滲出シテ凝固セシモノトス

達剌侃篤護謨チ產出スルハ主モニ士麥拿ニシテ仲買商ハ內地ノ製造人ヨリ買集シテ士麥拿市場ヘ運搬シ之ヲ選分ケテ各種トナシ歐羅巴市場ノ需用ニ應シテ輸出ス此等ノ護謨ハ Flaky or Leaf gum, Vermicolli, Common or Sorts 等ノ名ニ因テ區別ス通常士麥拿達剌侃篤護謨ト稱スルモノヽ中ニ君士但丁ヨリ輸出スルモノアリ又「バグダット」(Bagdat) 及ビ波斯ヨリ輸出スルモノハ古爾的斯丹ノ產ナレドモ市場ニテハ士麥拿產護謨ト稱ス」ト

(以下次號)

佐渡植物一班

(前號ノ續キ)

大久保三郎

LAURINEÆ. 樟科

Litsea glauca, *Sieb.* しろだも

羽黒山

Lindera sericea, *Blume.* くろもじ

金北山

THYMELÆACEÆ. 瑞香科

Daphne Kiusiana. *Miq.* こせうのき

金北山

SANTALACEÆ. 檀香科

Thesium decurrens, *Blume.* かなびきさう

金北山

EUPHORBIACEÆ. 大戟科

Pachysandra terminalis, *Sieb. et Zucc.* ふつきさう

金北山，羽黒山

Daphniphyllum macropodium, *Miq.* ゆづはり

金北山

URTICACEÆ. 蕁麻科

Ficus Nipponica, *Fr. et Sav.* いたびかづら

羽黒山

CUPULIFERÆ. 殼斗科

Corylus rostrata, *Ait. var.* Sieboldiana, *Max.* つのはしばみ

羽黒山

Quercus glandulifera, *Bl.* こなら

羽黒山

Castanea vulgaris, *Lamk. var.* Japonica, *DC.* くり

羽黒山

CONIFERÆ. 松柏科

Cephalotaxus drupacea, *Sieb.et Zucc.* いねがや

羽黒山

Torreya nucifera, *Sieb. et zucc.* かや

羽黒山，金北山

ORCHIDEÆ. 蘭科

Spiranthes australis, *Lindl.* ねぢばな

金北山

Habenaria (Gymnadenia) rupestris, *Miq.* うちやうらん

金北山

Habenaria (Platanthera) tipuloides, *Lindl. var* Ussuriensis, *Reg.et Maack.*

おほやまさぎさう

羽黒山, 金北山

Habenaria Japonica, *A. Gray*. おほばとんぼさう

金北山

LILIACEÆ. 百合科

Smilax China, *L.* サルトリイバラ

羽黒山

Hemerocallis fulva, *L.* やぶくわんざう

羽黒山

Lilium avenaceum, *Fisch.* くるまゆり

金北山

Disporum smilacinum, *A. Gray*. ちごゆり

羽黒山, 金北山

（以下次號）

日本植物報知 (第十三)

牧野富太郎

MAGNOLIACEÆ. もくれん科

(1) **Magnolia conspicua** Salisb. var. **purpurascens** Maxim. さらされんげ　蕚片ハ花瓣ト同狀ニシテ且ツ同色ナリ即チはくもくれんノ變種ニ係ル

(2) **Schizandra chinensis** Baillon. てうせんごみし　是レ即チ Maximowiczia chinensis Rupr. トシ Maxim. Prim. fl. Amur. 31, tab. 1. ニ出セルモノニシテ漿果ハ熟シテ赤色ナリ此種駿州ニ自生アリト云フ

(3) **Schizandra nigra** Maxim. まつぶさ　又うしぶだう等ノ別名アリ莖葉ノ狀極メテ能ク前種ニ類似ス然レ𪜈漿果ハ熟シテ黑色ナリ諸國ニ多シ土佐(マア)　岩代(池野氏並ニ予)

LEGUMINOSÆ. まめ科

(4) **Medicago minima** Desr.　こうまごやし(新稱)　多莖一根ヨリ叢生シテ平布セリ葉ハ小形ニシ莖ト共ニ柔毛ヲ蒙リ莢ハ四五回回旋シテ球狀ヲ成シ二行ニ生ゼル刺毛ハ其尖端鉤狀ヲナス岡田，池野兩氏ト共ニ之ヲ相州鎌倉七里ヶ濱ノ海濱山足ノ地ニ得タリ Savatier 氏ノ No. 3430 ノ標品モ亦曾テ鎌倉ニ於テ採集セルモノニ係ル盖シ共ニ同處ニ於テセシナラン

(5) **Dunbaria subrhombea** Hemsl.　(=Atylosia subrhombea Miq.　のあづき　ひめくず　土佐(予)

(6) **Sophora flavescens** Ait. var. **galegoides** Hemsl. (=S. angustifaolia Sieb. et Zucc.)　くらゝ　武州伊豫田村(予)

ROSACEÆ.　いばら科

(7) **Rubus Lambertianus** Ser. var. **glaber** Homsl.　(=R. hakonensis Fr. et Sav.)　みやまふゆいちご　武州高尾山山腹(予)

(8) **Waldsteinia sibirica** Tratt.　こきんばい　武州秩父山間樹下ノ地(予)

(9) **Agrimonia Eupatoria** Linn.　えぞきんみづひき　きんみづひき即チ A. pilosa Ledeb. (=A. viscidula Bunge) ニ酷似ス然レドモ莖葉之ニ比スレバ毛多ク蕚管面ニハ刺毛ヲ布ケリ Hemsley 氏ハ此兩種ヲ合一シテ一トナシ以テ A. Eupatoria L. トナセリ　磐城(予)

ERICACEÆ.　しやくなん科

(10) **Leucothoe Tschonoskii** Maxim.　はなひりのきノ一品ニシ葉ハ披針形鋭尖頭ナリ　陸中栗駒山(予)

POLYGONACEÆ.　たで科

(11) **Rumex nipponicus** Fr. et Sav.　こぎしぎし(新稱)莖直立スルヿ一尺五寸前后ナリ葉ハ鈍頭ナル長楕圓狀披針形ヲナシ上部ノモノハ披針形或ハ狹披針形ヲナス果實ヲ成セル內列蕚ハ邊緣ニ二三若クハ四個ノ鍼狀尖齒片ヲ有ス此種ハ頗ル R. pulcher L. ニ類似セリ○此種亦之ヲ池野岡田兩氏ト

共ニ相州鎌倉ノ田間ニ採集セリ Savatier 氏亦曾テ之ヲ同地ニ採集シ Franchet 氏ト共ニ始メテ R. nipponicus ノ名ヲ公ニセシナリ Sav. 氏ノ標品 No. 1012 ハ即チ是ナリ

ARISTOLOCHIACEÆ. うまのすゞくさ科

(12) **Asarum parviflorum** Hook. (sub) (Heterotropa.) 上州, 相州江ノ島(並ニ予, 共ニ栽植品)

EUPHORBIACEÆ. たかとうだい科

(13) **Buxus japonica** Muell. Arg. あさまつげ 幹ハ直上ス即チ首トシ印材ニ用ヒ又櫛ヲ製スルニ用ウ諸所ニ自生ス

(14) **Buxus sempervirens** Linn. var. **microphylla** Hook. fil. (=R. japonica var. microphylla Muell. Arg.) ひめつげ 矮灌木ニシ常ニ之ヲ庭前ニ栽ウルヲ見ルノミ

URTICACEÆ. いらくさ科

(15) **Morus indica** Linn. (=M. alba L. var. indica Bureau) 花柱ノ下部ハ合体ス M. alba L. ハ然ラズシテ花柱分生ス東京(予, 栽植品)

(16) **Ficus erecta** Thunb. var. **Sieboldi** King =F. Sieboldi Miq. ほそばいぬびは 葉ハ狹長ナリ 土佐(予)

日本植物家列傳

山本顯輔

第四　稻生若水傳

稻生義字ハ宣義一ニ彰信ト曰フ若水ハ其號ナリ父ヲ恒軒ト云フ大阪ノ人本姓ハ波々泊氏出テ、外祖母ノ家ヲ繼キ因ッテ稻生氏ヲ冒カス其祖父重信豐關白ニ仕ヘ兵馬ノ間ニ功アリ恒軒壯ナルニ及ヒ家貧シ因ッテ醫ヲ古林見誼ニ學ブ其名京阪ノ間ニ高シ二子ヲ擧ゲ長ハ則チ宣義ナリ宣義生レテ穎悟幼時家學ヲ受ケテ以テ醫ヲ學バントト欲ス恒軒之ヲ許ルサズシテ曰ハク吾

幼ニ〆家貧シク親ヲ養フ能ハズ止ムヲ得ズ以テ醫ヲ業トス幸ヒニ病機ヲ察シ藥性ヲ暗ンズ世ノ信ズル所トナリテ家人ニ給養スルヿヲ得是レ親ニ仕フルノ誠アルヲ以テナリ醫ヲ學ヒテ誠ナラザレバ適以テ人ヲ害スルニ足ル況ンヤ經術ノ以テ遠キヲ致ス者アルヲヤ何ゾ小枝ヲ以テセント乃チ木下順庵ヲ師トシ儒學ヲ受ク學概ニ成リ金澤侯ニ仕フ初メ長崎ノ入蘆草碩本草ヲ講究シ藥性集要ヲ作クリ同邑福山德潤（潤一ニ順ニ作クル）ニ授ク德潤大阪ニ往キテ其學ヲ唱フ宣義從ツテ之ヲ受ク頗ブル鑒別ニ長ズ古今ヲ總括シ庶物類聚ヲ著ハス嘗テ人ニ語ツテ曰ハク吾ヲシテ天下ノ事ヲ整理セシムルモ亦此草木ノ如クセント書成ル正副二本ヲ寫シ正本ハ之レヲ幕府ニ献シ副本ハ藩府ニ收ム其友新井白石之レヲ稱シテ曰ハク年未ダ五十ニ滿タズシテ千卷ノ著アリ古今ノ稀レニ見ル所ナリト後世本草ヲ謂フモノ率ネ若水及ヒ阿部將翁ヲ祖トス又藩府ニ建議シテ萬曆版ノ二十一史ヲ翻刻セントス國讀ヲ其全部ニ施ス宋史ニ至タリ未タ完備ニ至ラズシテ平安北小路家ニ殁ス時ニ正德五年七月五日ナリ年六十一庶物類纂ノ外ニ植學ニ關スルノ著書ハ本草圖翼本草別集物產目錄我土產目錄採藥獨斷皇和物產品目本草綱目指南食物本草等其他數十種アリ松岡玄達丹羽貞機野呂實夫等皆宣義ノ門ヨリ出ヅ（先哲叢談續編,皇朝名醫傳,燕臺風雅,近代名家著述目錄）

第五　大村孔恭傳

木村孔恭,字ハ世肅,又巽齋ト云フ,小字ハ吉太郎,通稱ハ吉右衛門,大坂ノ人ナリ,其初メ堀江ニ住シ,酒釀ヲ業トス,嘗テ井ヲ庭中ニ穿チ,一大蘆根ヲ得タリ,是レ豈古ノ難波蘆ニアラズヤト,因リテ號シテ蒹葭堂ト云フ,孔恭生レテ羸弱,三歲ニテ猶立ツ能ハズ,父母之レヲ憂ヒ,長ズルニ及ビテ專パラ草木花樹ヲ植ユルコトヲ勸ム,蓋シ悠々其生ヲ養ハシメント欲シテナリ,孔恭亦能ク是レヲ好ミ,常ニ泉石ヲ疊ミ,花木ヲ樹ヘ,以テ自カラ娛シム,其他日大ニ植學ヲ愛スルニ至リシモノ,其緒既ニ此時ニ開ラク,時ニ親族藥物ヲ業トスルモノアリ,屢々來リテ植學ノ世ニ禆益アルヲ說ク,孔恭之レヲ聞

テ頗ブル悟トル所アリ,是時ニ當タリ,松岡玄達ナルモノ,植學ヲ以テ世ニ著ヘル,四方ノ士人,斯學ヲ講セント欲スル者,爭ツテ其門ニ踵マリ,聲名藉甚,稱シテ斯學ノ巨擘トナス,孔恭是ニ於テ慨然トシテ大ニ植學ヲ講セントスルノ意アリ,年十二,父ニ從ツテ京師ニ遊ビ,將サニ學ブ所アラントス,時ニ玄達既ニ沒シ,門人津島彭水ナル者,代リテ敎授ス,孔恭即チ父ニ請ヒテ贄ヲ津島氏ノ門ニ執ル,未タ幾ナラズ,父ノ喪ニ遭ヒ,止メテ大坂ニ歸ヘル,越一年,母ニ從ツテ再タヒ京師ニ入リ,復津島氏ノ門ニ入ル,爾來吃々斯學ヲ講シ,老ニ至リテ衰ヘズ,其京師ヲ去ルヤ,屢書ヲ津島氏ニ寄セテ,以テ其疑問ヲ質シ,又其考案ヲ通ズ,是レヲ以テ身帷外ニアリト雖𪜈,常ニ其左右ニ侍スル者ノ如シ,彭水亦其篤志ニ感シ,蘊ヲ盡シテ之レニ授ク,是時ニ當リテ,彭水及ヒ諸ロノ斯學ヲ講ズル者,屢本草會ヲ大坂ニ催ス,孔恭每ニ是レニ參シ,奇品ヲ列シ奇說ヲ吐キ,常ニ會員ノ耳目ヲ聳動ス,既ニシテ彭水ノ沒スルニ及ビ,更ラニ交リヲ戶田旭山,田村藍水,直海玄同ノ諸名家ニ求メ,互ニ慇懃ヲ通シ,以テ益々斯學ヲ講ズ,末年ニ及ビ,復贄ヲ小野蘭山ノ門ニ執ル,是レヲ以テ學術日ニ進ミ,聲名月ニ加ハリ,遠近ノ士人,爭ツテ謁ヲ求ムルモノ常ニ門下ニ塡咽ス,孔恭能ク之レヲ遇シ,未ダ嘗テ甸界ヲ胸中ニ設ケズ,蓋シ孔恭ノ志,交リヲ廣ク天下ニ求メ,以テ講學ニ資セントスルナリ,是故ニ互ニ慇懃ヲ通ジ,交道漸ク熟スルニ及ビテ,乃チ托スルニ標品採集ノ事ヲ以テス,是ニ於テカ,平生孔恭ノ值遇ニ感ズル者,爭ツテ其依囑ニ應シ,各自國ノ物產ヲ採集シテ,便宜孔恭ニ供スルニ至ル,是レヲ以テ未タ數年ヲ出デスシテ,草木珠玉禽獸魚介,苟シクモ本邦ニ產スルモノ,大率之レヲ網羅シテ,孔恭ノ家ハ,累々トシテ是等標品ヲ充タス所トナル,其機敏アル大率斯類ナリ,孔恭又幼ヨリ畫事ヲ解ス,時ニ大岡春卜ナル者アリ,狩野派ノ畫ヲ能クスルヲ以テ,其名畿甸ノ間ニ顯ハル,孔恭又從ツテ畫ヲ學ブ,春卜嘗テ芥子園ノ畫本ニ倣ラヒ,明人ノ畫ヲ摸寫ス,名ツケテ明朝紫硯ト曰フ,筆力勇健意匠峻拔,夐カニ邦畫ニ勝サル所アリ,孔恭是レヲ見テ是レヨリ唐畫

ヲ學ブノ意アリ,會マ家君ノ友人群山ニ家居スルモノアリ,其鄕ニ唐畫ヲ能クスルモノアリ,柳澤淇園ト曰フ,孔恭之レヲ聞キ,就テ學バント欲ス,然レトモ事アリテ果サズ,孔恭即チ其友人ヲ介シ,請フテ其粉本ヲ得,是レヨリ唐畫ヲ事トス,其後長崎ノ人,僧鶴亭ナル者,大坂ニ至タル,鶴亭嘗テ神代繡江ニ從ツテ學ブ,沉南蘋ノ畫ヲ能クスルヲ以テ名アリ,孔恭大ニ喜ビ,直ニ其門ニ入リ,專パラ花鳥ヲ學ブ,蓋シ植學ニ資スルアランヿスルナリ,其後再タヒ京師ニ赴ムキ,更ラニ畫ヲ池野秋平ニ從ツテ學ブ,是レヲ以テ繪畫ノ術亦頗ブル巧沙ヲ極ハムニ至レリ,是レヨリ先キ,親姻兒玉某ナル者,經術ヲ片山明霞ニ學ブ,明霞ハ一世ノ儒伯ナリ,某又弘恭ニ勸メテ就テ學バシム,明霞孔恭ヲ一見シ,其人ナリヲ奇トシ,稱シテ曰ハク,秀才子其視瞻凡ニ異ナル,我其他日必ス燕雀ニ伍セザルヲ知ルナリ,因リテ名ヲ命シテ,鵠ト云ヒ,字ヲ千里ト稱ス,孔恭是レヨリ又經術ヲ學ブ,未タ數年ヲ經ズシテ,四書百家ノ語,悉ク通曉セザルハナシ,孔恭博覽多識,其著書頗ブル世ニ行ハル,然レトモ植學ニ關スルノ著書ハ,僅ニ名物獨斷一卷アルノミ,然レトモ其後祝融ノ災ニ罹リテ,其稿烏有ニ歸シ,遂ニ亦世ニ傳ハラズ,後學ノ爲メ實ニ惜ムベキトナス,唯雞鳴舍晴湖ノ編次ニ係ル,蒹葭堂雜錄ハ,翁ノ遺稿中ヨリ拔萃セルモノナリト雖トモ,其植學ニ關スル說ノ如キハ,僅カニ數件ノミ,享保二年正月二十五日沒ス,六十七,孔恭人トナリ,温厚篤實,嘗テ人ニ語リテ曰ハク,余商家ニ生マルヽト雖モ,不幸ニシテ天資羸弱,實業ニ從事スル能ハズ,幸ヒニ祖先ノ餘惠ニヨリテ,以テ文字ヲ學ブヲ得ルニ至リシモノ實ニ昇平ノ賜ト謂ハザルベカラズ,然カルニ世上放蕩ノ徒文字ニ托シ徒ラニ祖先傳來ノ產業ヲ舍テヽ,悠々不斷一世ヲ吟咏ノ間ニ終ハルモノ,蓋シ鮮シトセズ,是レ甚ダ余ガ耻ヅル所ナリ,余ヤ平生身ヲ閑散ニ置クト若モ,常ニ植學ヲ講シテ未タ嘗テ一日ヲ怠ラズ,苟シクモ發明スル所アレバ,庶幾ハ世ニ補益スル所アランヿスト,嗚呼以テ孔恭ガ人トナリヲ知ルベシ(蒹葭堂雜錄,名家略傳.巽齋翁自筆傳記)

雜　錄

總房地方植物採集

余は本年三月下旬より四月上旬に至る間凡十日間學友白井光太郎及藤井健二郎兩氏と共に總房地方を巡回し同地方の植物を採集したり今次に重なる巡回地の植物の摸樣を記す余等が京を發したるは三月廿九日にして靈巖島より小蒸汽船に搭し先づ房州保田に上陸す保田は同地方有名の山岳鋸山の南麓なりこゝにはスヰセンの自生多く諸所に藪林をなす保田の海岸にはハマエンドウ紫花を開きキケマンは黃花を開く鋸山に方言ナンジヤモンジヤと稱する木あり白井氏曰くこれバクチノキ (Prunus macrophylla S. Z.) なりと鋸山にはオリヅルシダ多し此の植物はその葉尖より長き蔓を生じ此の蔓地に着きて芽を生じ新植物を形成すこれオリヅルシダの名稱の起る所以なり鋸山は植物の種類に乏しく植物採集にハ適當ならずそれより陸行七里にして北條に至る北條の西沖中に二小島あり一を沖の島といひ一を高の島といふ余等は和船に乘じて此の島に至れり高の島は北條の海岸を去るヿ凡一里周圍五六丁の小島にして島中にはイヌグス(方言タマグス)多く又ハマオモト(方言シマオモト)多し沖の島は北條を去るヿ凡そ二里その大さもその植物の摸樣も高の島に異ならず此の兩島にて花ありし植物ハツルナ,トベラ,ウラシマサウ,キケマン,モチノキ,コウボウムギ,イヌビハ,ハマエンドウ等なり此兩島の採集を終りたる後余等は西行天津に至る天津は清澄山の麓なり清澄山は房州の東北部にある山にて左のみ植物の種類に富むにはあらざれども東京近傍にしては山だけに植物の種類多し同山中には木に附着したるラン類多く即ヤウラクラン,カヤラン,マメラン,セキコク,ムギラン,マツラン等あり余等が採集の際には Rhododendron rhombicum 及ビ dilatatum 紅花を開き Rh. Keiskei 又花あり草にてはミスミサウ (Anemone Hepatica) 花あり色白きものと少く紅色を帶びたるものとあり當時花ありし植

物を擧ぐればミスミサウ，シキミ，コブシ，アケビ，ミツバアケビ，タチツボスミレ，スミレ，ヒサカキ，キフヂ，ミヤマシキミ，ドクウツギ，サクラ，ヒメウツギ，アヲキ，ツルカノコサウ，ヒカゲツヽジ，ミツバツヽジ，コバノミツバツヽジ，アセビ，コケリンドウ，ハルリンドウ，ヤマルリサウ，カンアフヒ，イヌグス，オニシバリ，コセウノギ，Salix 數種，イヌガヤ，シユンラン，マツラン，サルトリイバラ，シロノシヤウシヤウバカマ(Heloniopsis japonica)テンナンセウ，セキシヤウ，カンスゲ等なり清澄山より上總藏玉村に出る道にはシヤコンサウ (Ophiorhiza japonica) ありその花白きを雪の如し又同所に於てシヽランを得たりこれ木に着生するシダにして葉細くして長し余等は藏玉村より久留里を經て木更津に着し木更津より滊船に搭し四月八日歸京したりこれを此の採集の景況大略とす

鎌倉及び江の島近傍の植物

去月廿二三日の頃同所に遊びし人の話に因れば同所由井ヶ濱にてはハマエンドウ，ハマハタザホ，ハマイテウ，カウボウムギ，カウボウシバ，七里ケ濱にてハハマヒルガホ，ホタルカヅラ，江ノ島にてはキケマン，エノキ，カヂイチゴ等既に花ありたりとのを

植物嗜好品の顯微鏡的化學

コヒー　コヒーの含有するカフエインを檢するに二法あり第一の法ハコヒー豆の切り口を强鹽酸にて處分し一分時を經て之に三%の鹽化金の溶液一滴を加ふれば此の一滴の緣邊に黃色にして束をなしたる長き放射針を生ずこれ鹽酸鹽化カフエーン (Chlorwasserstoffsaures Kaffein-Goldchlorid) なり第二法は切り口を水に入れ之を溫めて沸騰に至らしめ然る後徐に蒸發せしめ一滴のベンゾールを加ふればベンゾールはカフエンを取るが故に之を蒸發すれば無色の針を沈澱す此の反應は兩つながら如何なるコヒー豆の小片を用ゐるも成就すべきものなり

茶　茶葉のアルカロイドの檢定はヒコーの檢定と同一の法を用ふカフ

エンは唯新鮮なる若き葉にありて老いたるものにはなし又茶葉にハフロヽグルチンありその證據には茶葉のリグニン化したる細胞膜は强鹽酸にて處分すれば赤色となる

唐辛子　タウガラシの果實の隔壁ハカプサイチン (Capsaicin) のある所なり即隔壁のエピデルマには腺ありて之を分泌しエピデルマとクチクラとの間の空間に之を貯ふるなり果實の壁にはカプサイチン無し

(以上 Hans Molisch, Grundriss einer Histochemie der pflanzlichen Genussmittel より)　　以上三件　X　投

うちハところの産地

牧野氏ノ圖篇ニ於テ新和名うちはどころ新學名 Dioscorea nipponica. ナル名稱ヲ下サレシ植物ハ上野(?)清水峠,武州秩父,信州輕井澤ノ三産所ヲ載出セリ,而本品ハ單ニ以上三所ノミニアラズ余ハ現ニ日光ニテ昨年採集セリ又陸中駒栗山信州和田峠仝戶隱山ニ所生アリ　（オ．サ.）

日向國都農産の海苔　(れ．き).

先頃帝國大學植物學教室職員渡邊協氏が大學の命を奉じ九州へ植物採集に赴かれし途次日向國都ッ農ノ驛にて海藻を數種採集せられ土產として余に贈られたりしが中に方言海草なるものあり東京のあさくさのりの如く堅九寸橫一尺二寸許薄く抄きて一枚となしたるものにして價一枚一錢なりと云ふ之を用ゆる前湯若くは水に浸し酢を加へ又は魚軒のつまなどにして生食すると味は格別にもあらねど齒切れ能くぷつぷつと音しと恰も堅ききざみこぶを食するが如し此海藻ハ乾藻　に暗褐色を帶び細く分岐したるものにして學名を Gloeopeltis と稱す多分 G. Capillaris Sur ならん即ちふのりの一種にて細き類なり余は甞よりふのりの若き者を他地方にても食するとを聞き居りしが此も亦其一なるべし

又都農の名產とせる海苔はあさくさのりにして製造も大森製に傚ひ堅八寸五分橫一尺五分程に薄く抄きたるを一枚とせり價一枚一錢なりと云ふ

品質は東京にて一帖三四錢のものと同じ程なれば隨分高價のものと云ふべし

すみれノ香氣

にほひすみれニ一種ノ香氣アルハ著シケレドモ,他ニ尙ホすみれノ種類ニシテ,香氣ヲ有スルモノアリ,ゑぞすみれノ如キ是ナリ,又つぼすみれニモ時トシテ香氣アルモノアリ,凡ベテ此等ノ香氣ハ彼ノじやかうさう,みぞほうづきナドニ於ケルト同ジク,麝香ニ類スルモノナリ.

白花ノさくらさう

此ノ頃武州戸田原ニ於テ野生セルヲ見タリ,花葉ノ形狀,常種ニ異ナルコトナシ.　(M. M.)

ぼうらん並ニなんかくらんの產地

會員　渡邊協

予ハ本年二月官命ニ依リ植物採集ノ爲九州地方ヘ出張セシ折大隅國南贈唹郡牛根鄕(鹿兒島灣沿岸ノ地)ニ於テ數里ノ間ニ栽培セル數千株ノはぜのきRhus succedanea, L. ニぼうらんLuisia teres, Blume. ノ生ゼザルハ一トシテ殆ドナカリキ而シテ亦日向國北諸縣郡山ノ口村ヨリ都城ニ到ル途中くろまつノ並樹ニモ往々生ズルアリ

なんかくらんLycopodium aloifolium, Wall. 此稀有ナル種モ又日向國東岳（ヒガシ）(山ノ口村ニ屬ス)ノ山中樹幹ニ生ズル所ニシテ全屬中ひもらんノ長一メートルニモ及ブモノアリ

因ニ云フ抑モ此東岳ハ東西數里ニ亘ル鬱然タル大山ニシテ宮崎ヨリ都城ニ出ル舊道ニ屬スル山中ニハおほみつでAspidium Sieboldi, Van Houtte. いはひとでGymnogramme elliptica, Baker. 等ノ奇品尙多シ山中ノ樹木ハ主ニいちゐがしQuercus gilva, Blume. 等アリ林中鬱葱トシテ晝猶ホ暗キガ如ク植物採集ニハ最モ頁好ナル地也

獨和對譯植物名彙

（前號ノ續キ）

松村任三

Kelke. *Iwa-shōbu.*

Kellerhals. *Onishibari.*

Kerbel. *Shaku.*

Kiefer. *Matsu.*

Kirsche. *Sakura; mi-zakura.*

Klappernuss. *Mitusba-utsugi.*

Klasper. *Gumbai-uchiwa.*

Klebe. *Ō-hireazami.*

Klebreis. *Mochigome.*

Klee. *Tsumekusa; shajukusō.*

Klette. *Gobō.*

Klisse. *O-namomi.*

Knäuelgras. *Kamo-gaya.*

Knebel. *Tsume-kusa.*

Knieholz. *Matsu.*

Knopf. *Higotai.*

Knöterich. *Tade.*

Kohl. *Habotan.*

Kohlrabi. *Kōlrabe.*

Kohlrübe. *Kabura.*

Kolbel. *Waremokō.*

Kolbenhirse. *Awa; Koawa.*

Kolmar. *Ruri-hakobe.*

Kölme. *Kuruma-bana.*

Kölpe. *Hama-utsubo.*

Königskerze. *Kuwagatasō.*

Kopfkohl. *Habotan.*

Koriander. *Koendoro.*

Kornblume. *Yaguruma-giku.*

Krapp. *Akane.*

Kresse. *Tagarashi.*

Kresse. *Koshōsō.*

Kreuzblümchen. *Hime-hagi.*

Kreuzdorn. *Kuro-umemodoki.*

Kreuzkraut. *Noboro-giku.*

Krone. *Baimo.*

Kuckuksblume. *Hakusan-chidori.*

Kuhkraut. *Dōkwansō.*

Kürbis. *Tō-nasu.*

L.

Labkraut. *Yaemugura.*

Laichkraut. *Hirumushiro.*

Lambertsnuss. *Hashibami.*

Lärche. *Fuji-matsu; rakuyō-shō.*

Lattich. *Chisa.*

- Garten Lattich. *Chisa; kaki-jisa.*

Lauch. *Negi.*

- Borree Lauch. *Tama-buki.*
- Gras Lauch. *Ninniku; hiru.*

Hohl Lauch. *Negi; nebuka.*

Schnitt Lauch. *Ezo-negi.*

Zwiebel Lauch. *Horo.*

Lavendel. *Lavender.*

Lebensbaum. *Konote-gashiwa.*

Asiatischer Lebensbaum. *Konotegashiwa.*

Leberblümchen. *Suwamasō; misumisō.*

Leimkraut. *Biranji.*

Fränkisches Leimkraut. *Mantema.*

Garten Leimkraut. *Mushitori-nadeshiko.*

Lein. *Ama.*

Spinn Lein. *Ama.*

Leiter. *Hana-shinobu.*

Lerchensporn. *Engosaku.*

Leusche. *Mikuri.*

Levkoje. *Araseitō.*

Lichtnelke. *Fushiguro.*

Liene. *Botan-zuru.*

Lieschgras. *Awagaeri.*

Lieschkolben. *Gama.*

Liguster. *Ibota.*

Lilie. *Yuri.*

Linde. *Shina-no-ki.*

Winter Linde. *Shina-no-ki.*

Linse. *Goishi-mame.*

Löffel. *Omodaka.*

Frosch Löffel. *Omodaka.*

Löwenmaul. *Kingyosō.*

Löwenzahn. *Tampopo.*

Lupine. *Hauchiwa-mame.*

Luzei. *Uma-no-suzugusa.*

Luzerne. *Murasaki-umagoyashi.*

M.

Mais. *Tō-morokoshi.*

Mairan. *Mayora.*

Maisch. *Gorin-bana; Rempukusō.*

Malch. *Baramonjin.*

Malve. *Zeni-aoi.*

Nördliche Malve. *Hai-aoi.*

Mandel. *Amendō.*

Mangold. *Tō-jisa; fudansō.*

Rüben Mangold. *Tō-jisa.*

Marbel. *Suzume-no-hie.*

Maulbeere. *Kuwa.*

Meerbohne. *Modama.*

Mehlbeere. *Urajiro-no-ki.*

Meier. *Koba-no-tsumekusa.*

Meister. *Kurumabasō.*

Melde. *Hama-akaza.*

Melisse. *Melis.*

Mennig. *Kin-mizuhiki.*

Merk. *Sawa-zeri.*

Meter. *Melis.*

Miere. *Koba-no-tsumekusa.*

Miere. *Hakobe.*

  Hain Miere. *Miyama-hakobe.*

  Sumpf Miere. *Nomi-no-fusuma.*

  Vogel Miere. *Hakobe.*

Milche. *Yabu-tabirako.*

Milchkraut. *Umi-midori.*

Millgras. *Ibuki-nukabo.*

Milzkraut. *Nekonomesō.*

Minze. *Hakuka.*

Misse. *Enkōsō.*

Mistel. *Yadorigi.*

Mohn. *Keshi.*

  Feuer Mohn. *Hina-geshi.*

  Garten Mohn. *Keshi.*

Möhre. *Ninjin.*

Mummel. *Kawa-hone.*

Musk. *Tō-zuisen.*

N.

Nabel. *Chidome-gusa.*

Nachtkerze. *Matsuyoigusa.*

Nachtshatten. *Inu-hōzuki.*

Nadelhölzer. *Shin-yōju.*

Narzisse. *Suisen.*

Nectarinen Pfirsich. *Zubaimomo.*

Negerhirse. *Tōjinkibi.*
Nelke. *Nadeshiko; sekichiku.*
Nepte. *Chikuma-hakuka.*
Nessel. *Irakusa.*
Neuseeländischer Flachs. *Amayuri.*
Nissel. *No-jisa.*
Nixkraut. *Ibara-mo.*
Nusser. *Kurumi.*

O.

Ohnblatt. *Shakujō-bana.*
Oleaster. *Gumi.*
Orant. *Kin-ran.*
Orche. *Hakusan-chidori.*
Ottig. *Fujibakama.*

P.

Paeonie. *Shakuyaku.*
Pappel. *Zeni-aoi.*
Pappel. *Hako-yanagi.*
Balsam Pappel. *Dero.*
Pastinak. *Amerika-bōfū.*
Perlgras. *Kome-gaya.*
Pestwurz. *Fuki.*
Petersilie. *Oranda-zeri*
Pfaffenhütchen. *Mayumi.*
Pfefferkraut. *Kidachi-hakuka.*
Pfeifenstrauch. *Satsuma-utsugi.*

Pfeilkraut. *Kuwai.*

Pferdekümmel. *Shaku.*

Pfingstrose. *Shakuyaku.*

Pfirsich. *Momo.*

Pflaume. *Sumomo.*

Pfriemgras. *Hane-gaya.*

Pimpernuss. *Mitsuba-utsugi.*

Platane. *Botan-no-ki.*

Platterbse. *Renrisō.*

Breitblättrige Platterbse. *Hiroba-no-renrisō.*

Strand Platterbse. *Hama-endō.*

Sumpf Platterbse. *Renrisō.*

Wiesen Platterbse. *Kibana-no-renrisō.*

Porselein. *Hama-hakobe.*

Porst. *Iso-tsutsuji.*

Portulak. *Suberi-hiyu.*

Preissel. *Koke-momo.*

Granten Preissel. *Kokemomo.*

Moos Priessel. *Tsuru-kokemomo.*

Sumpf Preissel. *Kuromame-no-ki.*

Preisselbeere. *Koke-momo.*

Primel. *Sakurasō.*

Mehliges Primel. *Yukiwarisō.*

Pulverholz. *Kuro-umemodoki.*

Q.

Quantel. *Zaifuri-boku.*

Quendel. *Tachi-jakōsō.*

Quellgras. *Hiroba-no-dojōtsunagi.*

Quitte. *Marumero.*

R.

Rade. *Mugi-nadeshiko.*

Rdieschen. *Aka-daikon.*

Raffel. *Daikonsō.*

Rainfahn. *Yomogi-giku.*

Ramsel. *Hime-hagi.*

Raps. *Abura-na.*

Rapunzel. *Shide-shajin.*

Rauke. *Kujira-gusa.*

Rausch. *Gankōran.*

Raute. *Henrūda.*

Rebe. *Budō.*

Rebendolde. *Seri.*

Rebling. *Amerika-chikin.*

Reiherschnabel. *Oranda-fūro.*

Reis. *Kome; ine.*

Reithgras. *Yama-awa.*

  Hain Reithgras. *Iwa-gariyasu.*

  Land Reithgras. *Yama-awa.*

Resede. *Reseda.*

Rettich. *Daikon.*

Rietgras. *Suge.*

Riegel. *Ibota.*

Riesenhülse.	*Modama.*
Ringelblume.	*Kinsenkwa.*
Rispengras.	*Ichigotsunagi.*
Ritschgras.	*Minoboro.*

Carl Johann Maximowicr.

Maximowicr 氏ハ去ル二月十六日僅ニ數日ノ病後 St. Petersburg ニ於テ死去セリ, 氏ハ 1827年ニ Tula ニ於テ生レタル人ナリ. 其弱年ノ時 St. Petersburg ニ行キ有名ナル Lutheran 派ノ學校 St. Aunenschule ニ於テ敎育ヲ受ケ1844年ニ露都ヲ去リテ Dorpat ノ大學ニ入リタリ. 卒業ノ後 Dorpat 植物園長ノ補助トナリ. 1852年ニ至リ St. Petersburg ノ帝國植物園ノ管理官トナレリ. 其翌年世界週遊ノ爲メ Diana 艦ニ乘リ込ミタリ, 其主タル目的ハ露都植物園ノ爲メニ生植物標品ヲ得ルニアリ. Diana 艦ハ Rio Janeiro, Valparaiso, 及ヒ Honolulu ニ寄港セリ. 然レ𪜈歐洲諸大國ト露國ト開戰ノ時ニ當リタレハ, Diana 艦ハ其航路最モ近キ露領ノ一港ナル De Castries ニ入ラザルヲ得ザリキ. 此港ハ滿州ノ海濱ニアリテ, 當時最モ幼稚ニシテ未ダ殆ト齊頓セサル植民地ナリキ. Maximowicr 氏ハ艦ヲ辭シテ直チニ Amur 河ヲ上リ, 其兩岸ト近傍地方トノ探究ニ從事シタリ. 此地方ハ此時未ダ殆ド人ノ知ラザル所ニシテ, M.氏ハ其旅裝モ充分ナラザリシカド, 名狀ス可カラサ困難ヲ忍ビテ其目的ヲ達シタリ. 1857年ニハ路ヲ Siberia ニ取リテ露京ニ歸リ, 其後二年間ハ專ラ Primitiæ Floræ Amurensis ト云フ書ノ著述ニ從事シタリ. 此書ハ大部ノ卷ニテ 1859 年ニ出版シ, 氏ガ採集セル植物ノ記述ヲ載セ, 氏ガ旅行セル地方ノ景狀ヲ記スルコト最モ明瞭精密ニシテ, 殊ニ植物地理學ニ關スル事項ヲ詳說セリ. 氏ハ此ノ著明ナル書ヲ著シタルガ爲メニ Demidoff 賞ヲ得タリ. 此時氏ハ又東方地方ニ旅行スルヿヲ命ゼラレ, 1859 及ビ 1860 年ニハ滿州ニ 1861 年ニハ北海道ニ, 1862 年ニハ日本本島ニ, 1863 年ニハ九州ニ遊ビタリ. 1864 年ニハ海路ニ依リテ歐洲ニ歸リ,

其時初メテ英國ニ過ギレリ. 此時ニ方リ氏ノ身体大ニ健全ヲ欠ケリ, 是レ氏ガ日本ニ於テ熱病ニ侵サレタルガ爲メニシテ, 生涯其餘症ノ爲メニ惱ミタリ. 1869年ニ氏ハ露都帝立植物園ノ第一植物學士(Botanicus Primarius)ヲ命ゼラレ, 1864年ヨリ帝立學士會院ノ會員トナレリ. 其後學士會院ノ植物品彙ヲ管理シ, 1866年以後同院ノ Mémoires 及ビ Bulletins ニ於テ東方亞細亞ノ植物ニ就キテ著述セシコト多ク, 就中東方亞細亞石南屬編, Diagnoses breves Plantarum Novarum Japoniæ et Mandshuriæ, Dec. i.—xx. 及ビ Diagnoses Plantarum Novarum Asiaticarum, i.—vii. 等ノ如キハ最モ要用ナルモノナリ. 右ノ中第三ノ著述中ニハ Prjevalsky, Potaniu 氏等ガ中央亞細亞ニテ採集セル夥多ニシテ極メテ必要ナル標品ノ記述ヲ載セテ未ダ終ラズ. 氏ノ著述ハ極メテ精密ナルノミナラズ他ノ職務ノ繁多ナルガ爲メニ 1889年ノ末ニ於テ始メテ上ニ云フ所ノ必要ナル著述ノ初部ヲ出版スルニ至レリ. 此著述ハ則チ Flora Tangntica 及ビ Enumeratio Plantarum hucusque in Mongolia. &c, Lectarum ニシテ, 各々 Thalamifloræ 類ト Discifloræ類トヲ出版セルノミニテ未ダ其他ニ及バス. 然レドモ Prjavalsky 氏及ビ他ノ露國探究者ノ採集セル標品ヲ基礎トシテ M. 氏ガ著述シタル中央亞細亞ノ植物地理學概論ハ 1884年ニ露都ニ於テ開キタル植物學及園藝學會議ニ呈出セラレ, 其文体ノ單明ナルト叙次ノ宜シキヲ得タルトハ後學ノ龜鑑トナス可シ. M. 氏ガ著述中ナリシ上ノ二書ハ未ダ刊行セザル部分モ既ニ出版ノ準備稍整ヒ美麗ナル圖モ多ク成リテ居レドモ, 恐クハ此事業ハ廢止ニ至ルナラン. 露國ニ於テ之チ繼續スルニ適セル人ナキヲ如何セン. 露國ハ既ニ其有名ナル探究者ヲ失ヒ, 又其有名ナル著述家ヲ失フニ至リタルハ不幸ト云フヘシ. M. 氏ガ其事業ヲ了ラズシテ没セシハ遺憾極リナリト雖モ, 氏ガ既ニ成シタル事業ハ必ズ永久ニ傳フベシ. 氏ハ性質高尚ニシテ, 學識博ク實ニ直正ノ君子ナリキ.—此一篇ハ Otto Stapf 氏ガ Nature (vol. 43, p. 449.) ニ載セタルモノノ抄譯ナリ.

新刊植物書

日本植物志圖篇

牧野富太郎氏著日本植物誌圖編第一巻第七集ハ四月六日ニ敬業社ヨリ發兌セリ

本編ニハ左ノ六種ヲ掲ケリ　(1)　むかでらん　(2)　やうらくらん　(3)　みやまむぎらん(新稱)　(4)　こほろぎらん(新稱)　(5)　すゞめのたうがらし(新稱)　(6)　うちはどころ(新稱)ナリ　右ノ內第六うちはどころニハ Dioscorea nipponica ナル新學名ヲ下セリ, 又第壹巻所載ノたかねまんねんぐさニハ Sedum tricarpum かしのきらんニハ Saccolabium japonicum. ながどころニハ Dioscorea Tokoro 等ノ新學名ヲ附セラレタリ

本編ニ英文ヲ以テ所載植物ノ形狀產地或ハ產地ノミヲ記載セラレタリ

本編第八集並ビニ第九集ニハ各六種ヲ圖シ兩集トモニ新學名ヲ附スルモノ四種ヲ掲出スル由且集ヲ追フテ續々新種ヲ載スルトノ豫告アリ

日本ノ地衣ヲ記載セル最近著述

(1)　**W. Nylander.**—*Lichenes Japoniæ.* (Paris, 1890.) 此書ハ植物學者 Almquist 氏ガ千八百七十九年ノ九月,有名ナル瑞典ノ Vega 號(Nordenskjold 氏ノ一行)ニテ我邦ニ來リ採集セル材料ヲ佛蘭西ニテ著名ノ地衣學者 Nylander 氏ガ研究シタル結果トナリテ世ニ出デタルモノナリ, Almquist 氏ガ我邦ニテ採收セル地衣ハ三百八十二種ニシテ, 其中, 百余種ハ新種ニ屬セリ, 其他ニ他ノ地衣學者ガ已ニ日本ノ地衣ヲ記セルモノ五十余種アリ, (此分ハ Nylander 氏ノ該著中ニハ載セズ)サレバ日本地衣ニシテ方今歐洲ニ知ラレタルモノハ, 凡ソ四百四十種斗リモアルヘシト云フ, 予輩未ダ此書ヲ得ザレバ, 其詳評ハ後日ニ至テ爲ス所アルヘシ.

(2)　**J. Muller.**—*Lichenes Miyoshiani in Japonia a cl. Miyoshi lecti et a cl professore Yatabe communicati.* [Nuove Giornale Batanico Italiano.

中ニハ同化作用ヲ經タル物質モ, 經ザル物質モ共ニ混在スルナリ

vol. XXIII. Nr. 1. 1891.]

此編ハ昨年矢田部敎授ヨリ, 三好學氏採集ノ本邦地衣ヲ, 瑞西「ゼチヴア」ノJ. Müller 氏ヘ送リタルモノヲ, 同氏ガ研究シテ出板セルモノナリ, 同氏ヨリ矢田部敎授ヘノ報ニヨレハ該寄送標品中ニハ數十種ノ新種アリト云フ, 其中ノ若干種ハ已ニ氏ノ *Lichenologische. Beiträge* [Flora, Heft. I. 1891] ニ出テタリ.

質　　問

三好氏中等敎育植物學敎科書ニ植物ノ土壤ヨリ養液ヲ吸收スルハ若キ根ノ細胞中ノ細胞液ト土壤ノ養液ト交流作用起ルニ因ルヿヲ說カレタリ若シ其細胞液一度土壤ノ養液ノ爲メニ稀薄トナリテ共ニ昇流スルモ倘其細胞ニシテ土壤ト養液ト交流作用ノ中絕スルヿナキヤ御說明ヲ乞フ

植物ノ柔組織ヲ徐行スル養液ハ類化作用ヲ經タル有機質物ノ養液ノミナラス根ノ吸收セシ儘ノ未タ類化作用ヲ受ケザル養液モ混合シテ共ニ徐行スル者ニ有之ヤ御說明ヲ乞フ

細胞液ハ類化作用ヲ經タル養液ナルヤ御說明ヲ乞フ

陸奥國　熊谷重藏

右　　答

細胞液ガ一度, 土壤中ノ溶液ノ爲メニ稍〻稀薄トナルモ, 猶ホ後者ノ液ニ比スレバ濃厚ナリ, 加之ナラズ, 他細胞ヨリシテ更ニ濃厚ナル細胞液ガ順次ニ移リ來ルヲ以テ, 苟クモ此等ノ細胞液濃厚ノ度ガ, 土壤溶液ニ於ケルヨリモ減小スルニ非ザレバ, 決シテ交流作用ノ絕ユルヿナシ.

柔組織ノ在ル場所ニヨリテ, 或ハ主トシテ同化溶液ヲ運移スルモアリ. 又主トシテ無機物質ノ溶液ヲ通ズルモアリ, 或ハ兩者ノ混液ヲ含ムモアリテ一概ニ言ヒガタシ.

細胞液トハ細胞內ニアル水樣ノ液体ヲ一般ニ稱スルモノニシテ, 此液

植物學雜誌

第五卷　第五十二號

明治廿四年六月十日

532111
JUL 16
Smithsonian

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V. No. 52.

June. 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

新刊廣告

牧野富太郎君

日本植物志圖篇 第九集

（毎月五日發行）

毎冊正價金貳拾錢郵稅貳錢
第一集第二集品切
第三集ヨリ第九集迄取揃可申候

發兌書肆　東京神田裏神保町　敬業社

東洋學藝雜誌　第百十六號

○論說
●化學の効能（圖入）　工學士細木松之介君
●生死の話（前號の續）　醫科大學敎授博士大澤謙二君
●本邦產牛乳の効用に就て　醫科大學敎授丹波敬三君
●歐洲哲學ノ近況　文科大學敎授井上哲次郎君
●經濟ノ近況ト講談社會黨　法科大學敎授金井延君
●雜報　十三件
●批評　新着數學書略評
●學會記事　○東京醫學會　○東京動物學會
○東京地學協會　○東京人類學會　○地學談話會　○國家學會　○工學會　○史學會
●明治二十四年五月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十二頁木版插圖二個
●定價壹冊金拾錢○六冊前金（郵稅共）金五拾四錢○拾貳冊前金（郵稅共）金壹圓○八錢

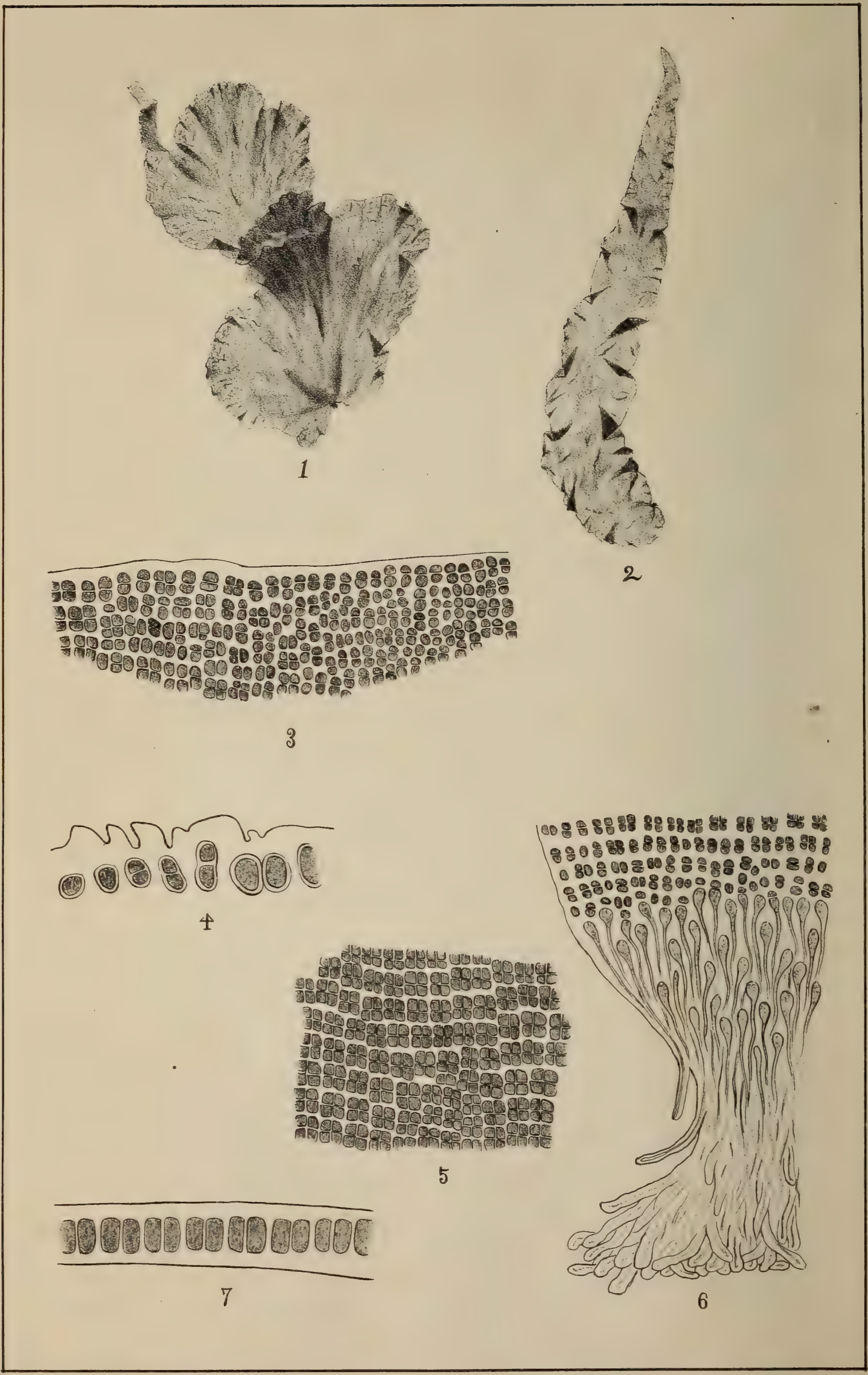
發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

動物學雜誌

第參拾壹號◉明治貳拾四年五月十五日發行◉壹册金拾錢郵稅壹錢六册前金郵稅共金六拾六錢

◉目錄●日本鳥類ノ分布ニ付キ（承前）　飯島　魁君●動物解剖手引草（鳥類ノ部）（承前）　岩川友太郎君●三月下旬高知近傍ニ於テ採集セシ蝶類　吉永　虎馬君●遺傳（承前）　石川千代松君譯述●本邦產ノ蝸牛科（Hyalina）第七版　飯島　魁君●普通動物學講義貳拾參　箕作　佳吉君◉寄書●甕牖雜記ひきノ燐光　上田　英吉君◉雜報●ぺりかん鳥を獲たり●たちのうを族に就て●鰶を用て絛蟲の驅蟲劑となす●カマキリの孵化●正雪とんぼ●靜岡縣下ノ蝶類●帝國大學紀要理科第四册第一號●うみやなぎ●てながざる●蟻敵の觸角の用に就て●ダーウヰン氏ノ自傳（大尾）●東京動物學會記事●Nippon no Tori Mokuroku By DR. Ijima Isao.

發行所　東京神田裏神保町　敬業社



PRASIOLA JAPONICA, SP. NOV.
NOM. JAP. *KAWA-NORI.* カハノリ.

植物學雜誌第五卷第五十二號
明治廿四年六月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.
[Vol. V. June 10, 1891. No. 52.]

A New Japanese Prasiola.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Prasiola japonica, nov. sp.

Nom. jap. Kawa-nori. カハノリ。

ULVACEÆ.

(Plate XXV.)

Thallus expanded, delicately membranaceous, ovate, oblong, linear-oblong, lanceolate, or irregularly lobed, crispate at the margin, bright green, 1-20 cm. long, 0.5-4 cm. broad. Cells subquadrate, about 7 μ. in diameter, arranged in fours.—Attached to rocks in clear rapid stream.

In small specimens the thallus is mostly ovate or oblong, but in larger ones often variously lobed and plicately crispate. It is attached to the surface of rocks by a minute point. The surface view of the thallus under the microscope shows that the cells are generally arranged in fours and about 7 μ. in diameter. Its margin is generally slightly undulate, but in some cases irregularly notched. Its transverse section shows that it consists of one layer of cells which are twice as long as broad. Towards the point of attachment of the thallus the cells become elongated downwards into slender colorless fibres, and at that point the thallus is attached by means of entangled fibres more or less thickened at the lower ends.

From the diagnoses of De-Toni* and Wolle† it seems that this species is nearly allied to *P. mexicana*, Liebm.

This alga grows in rapid streams in mountainous parts of the country. My specimens are from Nikkō (province of Shimotsuke), Kiriu (Kōzuke), Shibakawa (Suruga), and Ōimura (Mino). The ravine known as the Daiyagawa, at Nikkō, is well known as one of the localities where this alga grows abundantly. The specimens figured are two of those kindly collected for me by Mr. I. Ogasawara. He sent to me early in March, 1891, a stone about 30 cm. in diameter, on which was growing a number of this alga. The stone was taken from the Kiriu-gawa, a rapid stream near the town of Kiriu.

In the districts where this alga grows people collect it in large quantities especially in autumn, press and dry it into the form of quadrangular sheets, and sell them as an article of food under the names different in various localities, such as *Kawa-nori*, *Shibakawa-nori*, *Daiyagawa-nori*, &c. They are eaten either slightly broiled or vinegared after putting them in water. The sheets sent from Kiriu are 32 cm. long and 26 cm. broad; those from Shibakawa, 48 cm. long and 28 cm. broad; those from Nikkō, 48 cm. long 34 cm. broad. They are not so commonly sold at shops as the sheets similarly prepared from *Porphyra* and *Enteromorpha*, common forms of alga in the shallow sea.

According to Mr. I. Ogasawara who has written to me in regard to this alga, it is generally about 10 cm. long, but larger specimens are 20 cm. or more long. It can be collected from the time of the year when the frost first

---

* De-Toni, Sylloge Algarum, vol. i., p. 143.
† Wolle, Fresh-Water Algæ, p. 107, t. 91.

disappears till the time when it again forms. But the specimens collected in spring and summer cannot be so well preserved for use as those collected in autumn, which can be preserved for a long time and have a more agreeable odor. The quantity gathered at the locality where Mr. Ogasawara resides is small, amounting in value only to about $ 140 to $ 150 in a year.

Plate XXV. Fig. 1, 2, whole plant (nat. size); 3-6, surface views of different parts of thallus; 3, margin (×420); 4, same (×560); 5, middle portion (×420); 6, base (×240); 7, transverse section of thallus (×420).

日本藥局方植物篇

(前號の續き)

會員　澤田駒次郎

第五十一號正誤 (162) ノ第十五行廿一字目ノハヲノ誤同第二十行十二字目リノ下「生シタル」ノ四字ヲ脫ス同第二十一行五字目種ハ稱ノ誤

性質　達剌侃蔑護謨ハ白片ト稱シ樹幹ニ搔裂ヲ施シ其傷口ヨリ滲出凝固セシモノヲ收メテ乾固セシモノハ其質善良ニシテ形チ長圓若クハ扁平長サ一二「インチ」乃至三「インチ」餘一「インチ」四分一乃至一「インチ」許ニシテ白色黃色若クハ褐色ノモノアリ又土耳格ヨリ產出スルモノハ稍〻大イナリ英國製藥會社列品ノ標本中ニ長サ數「インチ」幅サ二「インチ」厚サ一「インチ」ノ殆ント十分一ニシテ其重量三弖弱ニ至ルモノアリト

本品ハ表面隆起シテ數層ヲ爲ス是レ柔軟ナル護謨ノ漸次ニ凝固シタル徵候トス又西里亞產達剌侃蔑護謨ト稱スルモノハ其實波斯，古爾的斯丹ヨリ產シ澄明ニシテ黃色ヲ呈ス故ニ士麥拿產ヨリ容易ク之ヲ區別ス又自カラ滲出シテ凝固セシモノハ豌豆大ノ扁片ヲ爲シ褐色，黃色或ハ暗色ヲ呈シ

其質蠟ニ類似ス或ハ葡萄實狀ヲ爲スモノアリ此等ノ種類ハ市場ニ於テ常ニ目擊スル所ナリ或ハ厚サ不同ニシテ多少屈曲シテ蟲狀ヲ爲スモノアリ之ヲ蟲狀護謨ト云フ或云人工ヲ以テ製造スト

上等ノ護謨及ビ蟲狀護謨ハ暗白色半透明ニシテ角質粘硬強靭ニシテ粉末ト爲シ難シ然レトモ華氏百二十度ノ温ヲ用ヒテ乾燥シ水分ヲ蒸發スレハ容易ク粉末ト爲リ得ルナリ但シ下等ノ護謨ハ多少彩色ヲ帶ヒ樹皮及ビ土類等ヲ含有ス

本品ハ無味無臭ニシテ酒精依的兒ニハ溶解セズ水ノ五十分ニ因テ濃稠凍狀ノ粘液物ヲ生ズ之ニ多量ノ水ヲ加ヘテ稀釋スレバ粘液ト爲ル之ヲ濾過シテ不溶解物ヲ去リ其濾液ニ沃度水溶液ヲ加フレハ藍色ヲ呈ス是レ澱粉ノ存在スルニ因ルナリ又此粘液ニ苛性曹達ヲ注クトキハ黄色ヲ呈ス又本品溶液ハ硼砂, 鹽化鐵等ト澄明ナル混合液ヲ爲シ之ニ酒精ヲ注クトキハ沈澱ヲ生シ冷醋酸鉛, 次醋酸鉛ニ因テ粘漿ト爲リ熱スレバ沈澱ヲ生ズ日本藥局法ニ云達刺俔篤護謨ハ本植物ノ小幹ヨリ出ツル粘液ノ乾涸セルモノニシテ帶狀ノ小片ヲ爲シ或ハ弧狀ノ紋理ヲ有スル鎌狀ノ小板片ヲ爲ス

本品ハ柔靭角質様半透映ノ物質ニシテ粉碎シ難ク水中ニハ大ニ膨起ス其粉末ヲ五十分ノ水ニ和スレバ溷濁淡味ノ粘漿ヲ爲スヘシ」トアリ

混合物　白片及ビ他ノ種類ト雖モ其板片ノモノハ他物ヲ以テ混和シ難シ然レドモ細片及ビ蟲狀護謨其他下等ノ種類ハ間マ他ノ護謨ヲ以テ混和ス *Maltass* 氏ノ說ニ據レバ士麥拿ニテハ加剌麻尼亞及ビ亞爾美尼亞ヨリ產出スル二種ノ護謨ヲ混和物ト爲ス此等ノ護謨ハ加剌麻尼亞產護謨「マヲスヽユル」產護謨ト稱シ區別ス *Hunbury* 氏云「マナスヽユル」產護謨ハ極メテ下品ナリト

加剌麻尼亞產護謨ノ原植物ハ未ダ詳ナラズ或云扁桃其他桃李種類ノ樹ヨリ滲出スルモノト或云其一部分ハ Kuteera gum ト稱シ Sterculia urens ヨリ滲出スト

加刺麻尼亞產護謨ハ暗褐色ノ塊ニシテ大小不同ノ有角性板片ニ破碎ス而シテ達刺侃篤護謨ト同一ノ大イサト爲シテ混和シ或ハ粉末ト爲シ炭酸鉛ニ混和スト雖モ試藥ニ因テ容易ク之ヲ檢出シ得ルナリ

成分　達刺侃篤護謨ノ主成分ハ二種ノ物質ヨリ成リ其一ハ Bassorin ト稱シ不溶解性粘液ニシテ其一ハ亞拉毘謨 (Arabin) ト稱シ溶解性ノ護謨トス其他 Traganthin, 澱粉ヲ含有スト又 *Girard* 氏ノ說ニ據レハ達刺侃篤護謨ハ其全量ノ半ハ不溶解性膠質物ナリト生藥學ニ云達拉侃篤ハ主シテ不溶解性粘液(Bassrorin)ヨリ成リ傍ラ大約八「ペルセント」ノ溶解性護謨(Arabin)其他二,三「ペルセント」ノ粉澱ヲ含ム燃燒スレハ灰分三乃至四「ペルセント」ヲ留ム」トアリ

醫治効用　達刺侃篤護謨ハ粘漿ト爲シ緩和包攝ノ一藥トシ內用ニ供シ或ハ火傷ニ外敷シ或ハ錠劑,乳劑等ノ佐使藥トス

達利侃篤護謨ハ工業上ノ用途汎大ニシテ之ヲ消費スルノ量モ亦過多ナリト云フ

廿一　カラバルト

羅甸名　Physostigma Venenosum, Balfour.

荳　科

亞弗利加ニ自生スル宿根蔓草ニシテ下部木幹狀ヲ爲シ直徑一寸五六分平滑圓柱纖長シテ五十尺餘ニ蔓延スルモノアリ葉ハ奇性翼狀ニシテ三小葉ヲ有シ其ノ柄硬固下部膨起其基礎部ニ三角形ノ托葉ヲ有ス小葉ハ卵圓形ニシテ長サ二寸五分乃至五寸餘其柄矮短ニシテ膨起シ先項ノ葉ハ廣濶兩側ノ葉ハ底部不整葉脉著明ニシテ平滑ナリ葉腋ヨリ花梗椎ヲ下垂シ結節ヲ有シ各節二個乃至三個ノ花梗ヲ抽キ梗頂一花ヲ著ク萼ハ肉質杯形ニシテ平滑先頂膨起シテ五個ニ缺刻シ上部ノ二片ハ剪頭狀ヲ爲ス花冠ハ蛾形ニシテ旗瓣ハ之ヲ開展スレハ卵圓形ヲ爲スト雖𪜈常ニ重疊屈曲シテ環狀ヲ爲シ脉胳細微ニシテ淡紅紫色ヲ呈シ頗ル美麗ナリ翼瓣ハ殆ント旗瓣ニ因テ被包セラレ

倒卵三角形ニシテ上方ニ彎曲シ下部耳形ヲ爲シ長柄ヲ有ス小舟瓣ハ螺旋狀ニ交糾（マヂレル）屈曲シ其半ハ旗瓣中ニ蔽藏ス十雄蕊二束ヲ爲シ上部ノ一條ハ游離シ他ノ九條ハ花絲半ハ附着シテ鞘狀ヲ爲シ雌蕊ヲ擁抱ス葯ハ細小ニシテ均一ナリ一雌蘂實礎ハ凸圓形ニシテ柄ヲ有シ花盤ニ因テ被覆セラル花柱糸狀ニシテ長サ一寸二三分小舟瓣ト共ニ交糾嘴狀ニ捩轉シ稍々膨起シテ鐶狀ヲ爲シ上部ノ內面ニ脆弱ノ毛茸ヲ密生ス而シテ其頂端更ニ外方ニ彎曲シテ三角嘴狀ヲ爲シ肉質ニシテ硬固ナリ花後莢果ヲ結フ其柄短ク莢ノ長サ三寸三四分乃至五六寸角質扁平銳尖ヲ有シ其色暗褐網脈橫起內面白色莢中二個乃至三個ノ種子ヲ有ス長圓形ニシテ稍々腎臟形ニ彎曲シ長サ一寸强幅五分二三厘厚サ四分强背部扁平腹部兩側兩端圓ク種子膜ハ硬固ニシテ濃褐色ヲ呈シ微ニ光澤ヲ帶ヒ其凸出シタル邊緣ニハ全長徑ニ亘リテ深キ溝狀ノ臍痕ヲ有ス此臍痕ノ一端ハ一小帽ヲ以テ終リ茲ニ卵門ヲ認ム子葉ハ卵圓形ニシテ類白色ヲ呈ス乾燥種子ノ橫斷面ハ半圓形ヲ爲シ中間ニ空虛ヲ認ム根芽ハ細小ナリ

本植物ハ亞弗利加西土及ヒ幾內亞海灣尼日爾沿岸等熱帶諸地ニ產ト雖𪜈往時ハ政府ノ命令ニ因リ法官ノ罪ノ有無ヲ決定スルニ供スルノ他ハ悉ク之ヲ拔鏟セシメタルニ因リ此等ノ諸國ニ於テモ其自生ヲ撿出スルヿ少レナリ又巴西等ニ移植セシモノハ善ク蕃殖スト治明二十年ノ春東京衞生試驗所構內ニ播種ノモノハ發生後苗ノ生育宜シク第十月ニ至リ數多ノ花ヲ著クト雖𪜈氣候寒冷且風雨ノ害ヲ受ケ開花セスシテ凋萎ス

本植物ハ其形狀極メテ藥豆ニ類似スト雖𪜈種子ノ臍痕著大ナルト柱頭ノ附着物ハ此屬ノ著シキ徵候トス *Hanbury* 氏ノ說ニ據レハ此附着物ハ實質ナリト

藥品　加刺拔兒豆 Physostigma (Calabar.)

日本藥局方ニハ種子ヲ以テ藥用ニ供ス

性質　生藥學ニ云加刺拔兒豆ハ其形狀尋常ノ大豆ニ類シ長サ三,五「ミ

リメートル」幅二,五「セシチメートル」厚サ一,五「センチメートル」ニ至リ一個ノ重量平均四,一「グラム」子殼ハ堅脆ニシテ帶色類赤色ヲ有シ其穹窿セル一側ニハ廣クシテ且ツ深キ臍溝アリ加剌抜兒豆ヲ破壞スレバ其白色ナル子葉ハ子殼ト固着シ子葉ノ符合面ニ巨大ナル空洞ヲ現ハシ基礎部ニ長サ二「ミリメートル」ニ過キサル所ノ小根ヲ包藏スルヲ見ル子殼ハ種々ノ細胞層ヨリ成リ其最外部ノ皮層ハ緻密ニ連接セル圓筒形ノ細胞ヨリ構成セラル子葉ノ組織ハ薄壁細胞ヨリ構成セラレ蛋白顆粒及ヒ澱粉ヲ籍在シ沃度溶液ヲ加フレハ褐色ヲ呈シ澱粉ハ藍色ヲ呈ス而シテ其澱粉ハ頗ル著大ニ〆蝴蝶科澱粉ニ特異ナル形狀即チ橢圓形ヲ有ス加剌抜兒豆ハ毒性アルニモ拘ラス其味尋常ノ大豆ニ異ナルヿナシ又之ニ熱湯ヲ注ケハ尋常ノ大豆ニ於ケル如ク一種ノ臭氣(豆臭)ヲ發生ス」トアリ

加剌抜兒豆ハ其形狀著明ナルニ因リ他ノ種子ト混淆スルモ之ヲ鑑別スルヿ容易ナリ歐羅巴ニテハ「ムクナ」種子中ニ混淆スルヿアリト但シ歐羅巴ヘ輸入スルモノハ亞弗利加西土ヨリス

本品ノ有効成分ハ酒精ニ容易ク浸出シ水ニハ極メテ微ニ浸出ス

（以下次號）

こんぶの蕃殖ふ就て　（石版圖入）

理學士　岡村金太郎述

左の一編ハ余が去る四月廿六日大日本水產會第九回大集會ふ於て爲したる演說の草稿なり

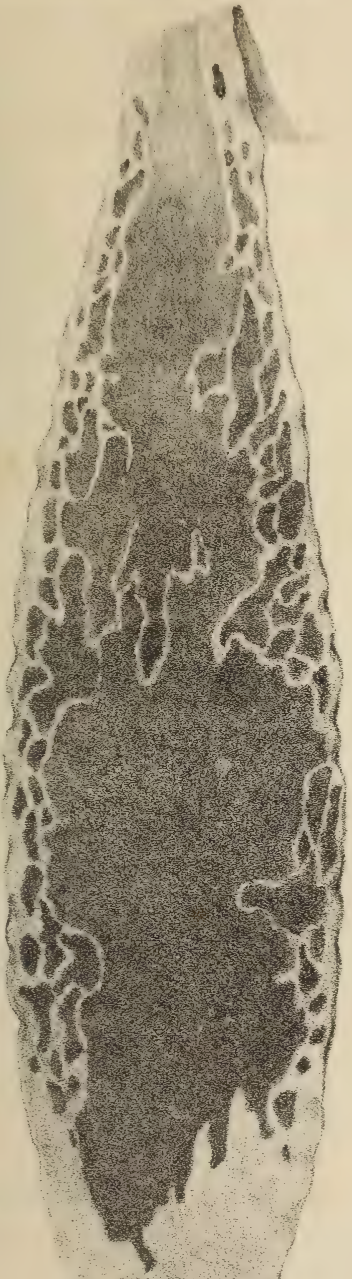
余は水產會よりの依賴に由り今玆に余が曾てコンブに就て研究したる一般の性質より蕃殖の方法を述べ次で採集移殖の事に及ばんとす元來コンブの如きハ海藻中尤も重要の者なる故其蕃殖の方法結實の季節等は農商務省に於て旣に取調へたるをなるへしと思ひ水產會報告第一號より順次にコンブに關する論說質疑應答等を閱したるに其間二三の說なきにあらざる

も皆以て充分となすべきものなし是れ余の玆に此を説く所以なり，其説少く長きに亙るの恐あれども暫く清聽を煩はさんことを請ふ諒せよ

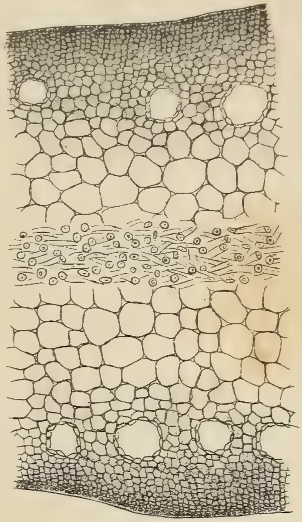
先づコンブの形狀より說かん,コンブには根,莖及び葉と稱すへき部分あれども其根は陸上植物の如く地中より滋養分を吸收するものに非ず唯許多分岐して岩礁に固着し本体の流失せざらん事を務むるのみ，故に尋常植物を移植する如く只根のみを移植するも決して新芽を生じ一個の植物となることなし，莖は概ね短かく稍扁圓にして頗る固く上部扁く擴かりて帶の如き部分を爲す通常之を葉と稱す，葉は類に依り甚だ長く且つ巾廣く時に或は三四丈の長きものあり中央部稍厚く兩緣に薄くして波狀に皺をなす，根は上の如く滋養分を吸收せざれども葉にて總ての官能を營む故根は只岩石に附着するの用あるのみ

コンブには類ゐ因り粘液の多寡あり,抑も粘液は体を構成せる細胞と稱する小き囊の如き者の外膜より變成する所ゐれども其多量なるハ体中別に之を蓄ふる所あるに由るなり,今此の如きコンブを薄く切り顯微鏡下に照せば(第三圖ア)皮部の下に大なる空道一列に並べるを見る,是即ち粘液の貯所にして此空道多き者は粘液多しと雖も陸奥產のボンメの如きは此等の構造少しも存せざるを以て粘液少く只僅に細胞膜の粘液に化せるあるのみ

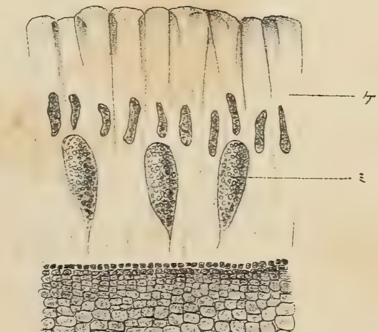
次に生長の模樣を說かん，凡そ海藻類は陸上植物と同じく体の先端より漸次に生長すること猶ほ陸上植物の枝端に芽を生じて延長するが如し，然れどもコンブ類は先端より成長することなく却て葉の基部即ち葉と莖と接する部分より成長す，故に葉の先端は既に舊き部分にして葉の下部ほど新たなるなり，之を以て葉の先端ハ激浪の爲に流失するも基部より漸次成長して其缺を補ふなり，斯の如くなるを以て根さへ固く岩礁に附着すれば時に或は葉を全く流失するも莖の頂點より又新に新葉を生ずべし，故に其生存は多年にして往々新葉の先きに舊葉の殘片を附するものありとす，去夏北海道廳水產技師伊藤一隆氏の話しにコンブの中に時として葉の先が一段く



I



III



II

びれて細くなり又廣がれるものありと，之れ即ち新葉の舊葉を存する者に外ならず，根室邊にて水こんぶと稱するもの果して之なる歟否や（水產會報告第七十一號）

さて之より實の事に移らん，余は曾てよりコンブの結實の樣子を知らんと欲し既に一昨年の夏此目的を以て北海道に旅行し函館より小樽邊迄採集せり，余の函館に着したるは七月下旬にして盛に大森濱にてコンブを刈居たりしが不幸にして遂に實の如き者あるを見得ざりし故已を得ず博物館の職員及シリサハベ，山脊泊の漁民等に就き種々コンブに關する質問を爲し他の海藻を採集して八月下旬歸京せしが，爾來常に心を玆に留め機を待て之を研究せんと思ひたりしが此頃水產傳習所理事竹中邦香氏の周旋を以て大日本水產會所藏のコンブの標品を借覽し，中に就て彼是探索せしに果して實の熟したる者あるを見たり，余の悅玆に於てか知るべきなり，此標品は厚岸獺沼の產にして大葉コンブなる附箋あり，思ふにマコンブ即ち Laminaria Japonica と同種ならん，只少しく葉の薄きと緣邊の皺縮の多きのみ

今此標品を見るに（第一圖）葉の全面に痣の如き班點を見るべし，之即ち實の群集せる所にして葉の中央部に先づ生じ次第に左右即ち緣邊の方に廣がるものゝ如し，而して緣邊の實群を見るに或は圓く或は長くして一定の形なく所々に散在せり尤も緣邊に少く中央部に多く密集し又兩面共に之を生ず，然れども兩面共同班狀を爲すにあらず全く別々に生ずるなり

此班點の部を薄く切り顯微鏡下に檢するに葉の表面に無數の毛狀体叢生し其內長短二類あるを見るへし（第二圖）其長き者は稍契形（ケ）にして基部細く先端少しく廣がりて頗る粘液に富めり之れをパラフヒシスと云ふ，其掌る所の官能の如きい學者間種々の說ありて未だ詳ならずと雖も多分生殖の用に關かる者ならん，而して短きもの（ミ）は其形棍棒狀にして膜薄く內に無數の粒狀体を含めり，此粒狀体は囊中の物質より無性的に變成したる者にして即ちコンブの實に外ならず，故にコンブの生殖は雌雄の交接に

因らさるなり，斯くて此粒状体充分に熟するに到れば囊の先端破れて外界に脱出し体の前後に存する二條の纖毛と稱する毛を以て水中を游泳す其運動實に活潑なりと云ふ可し，之に因て斯の如き實を游走子と稱す即ち水中を泳ぎ走る胞子（隱花植物の種子と胞子と云ふ）と稱する義なり，斯くして暫く水中を游泳したる後纖毛は自ら消失して運動力を失ひ体の外面に膜を生じ次第に分裂して成長し其一端より指の如く分岐せる枝を生じて根となり以て岩石に固着し上端は愈々成長して莖を生じ葉を生ぞるなり

以上說く所の游走子及び其萌發の狀況は元より余の實見せる所にあらず，余ハ水產會所藏の乾燥せる標品に就て研究したるなるを以て斯くの如きは能く見得べきに非ず，然れども斯く說を爲したるは游走子の一般の性質なればなり

今此標品を見て思ひ合す事は一昨年余の函館に到りし時シリサハベの漁夫に種々コンブの事に就き質問せしに漁夫の云ふ，八月の末採集せるコンブの中往々葉色を變じ痣の如き班點のある者あり，漁民は之をサメの小便と唱へサメがコンブに小便を懸けたる者となすと，當時心竊かに思へらく是或ハ實には非ざるかと，其果して然りしは今に到て初て知るを得たり

結實の期節は惜哉此標品に採集年月なきを以て充分に知る由なしと雖も漁夫等の言と云ひ彼是八月より九月の間にあらん，尤も北海全道にては所に因り多少差あるべしと雖も抑も海水の温度の最高度は八月なるを以て大抵其頃に外ならざるべし，又實の萌發の期節は九月の末頃即ち氣候の漸く冷に成り潮温の稍低度なる頃にあるならん

次に本邦沿岸に於るコンブの產地を見るにコンブは北海に尤も多くして三陸地方之に次ぐ然れども未だ必しも此等の地方のみに限れるにあらず，種ハ或は異なるべしと雖も豆總の海岸亦之なしとせず土州對州亦之を產す，然れども温帶地の者は小にして葉肉薄く色も稍綠色を帶び北海產のものに劣ること遠し，之に因て考ふるに北海產のコンブを温帶地に移植せば

决して繁殖せざるの恐なかるべきも其决果は必ず小にして葉質薄きものを產出するなるへし

又移植に就て從來水產會報告上移殖の質問に對する諸氏の應答を見るに說く所皆大抵同一にして十一月頃生株を石附の儘多數移植すると云ふにある如し，然れども余を以て考るに生株を移植して繁殖を計るよりは寧ろ胞子の熟したる者を石附の儘移植する方宜しからん，勿論一株に生ずる胞子の數は無算なれども皆悉く成長する能はさるや必せり，胞子の數の多きは其生存の困難多きが爲めなればなり故に胞子全數は萌發成長する能はざるも其內幾分か萌發成長すへきなり，然れば一地方の生株を移植して其內に種々の關係ふ依りて枯死するものを生ずるよりは胞子の時より新地方に生出して其地に慣れしむる方却て安全の策ならん

又採集に就て一言卑說を述べんに北海道に於ける當今の收獲季節は七月の末より八月中若くは九月上旬迄にあるものゝ如し，然れば往ゝ胞子の熟したる者を採集するとあるへきも此等の株は勉めて採集せざらん樣爲す方宜しからん又誤て採集するも再び海中に投棄する樣爲したきものなり

以上を以てコンブの說を終る，今此說を終るに當て大日本水產會に此大切なる標品を貸與せられたるを謝し旁せて理事竹中氏に周施の勞を謝すと云爾

New Japanese Lichens.

新稱日本地衣

三好　學

昨年三月矢田部敎授ヨリ理科大學所藏日本產地衣標品中，百六十三包ヲ，瑞西國「ゼチヴア」ノ Dr. Johann Müller 氏ノ許ヘ送リ，其撿定ヲ乞ヒ且ツ歐洲產ノ地衣トノ交換ヲ求メタリ，該標品ハ四國，中國，木曾，富士，日光，奧羽地方ノ產ニシテ，就中予ガ信州御岳，丹波三岳，土佐矢筈山，伊豫石槌山，

駿河富士山等ニテ採集セル者ヲ多シトス, Müller 氏ハ仝年十一月書ヲ同教授ノ許ヘ致シ, 該標品ノ撿閲ヲ了レル旨ヲ報シ, 本年四月右撿定目錄ヲ寄送セリ該目錄ハ氏ガ"*Lichenes Miyoshiani in Japonia a cl. Miyoshi lecti et a cl. Professore Yatabe communicati.*" ト題シ, Nuovo Giornale Botanico Italiano, Vol. XXIII, N. I, Gennaio 1891. ニ掲載シタルモノニシテ, 該標品ヲ分類シ, 一々原番號ヲ附シ, 且ツ新種ハ之ニ記說ヲ附加セリ, 尤モ氏ハ是ヨリ先, 氏ノ "*Lichenologische Beitrage*" [Flora, Heft. I. 1891.] 中 No. 1585 ヨリ 1606 マデニ, 該標品中ノ新種若干ヲ記著シタレバ此分ハ右目錄中ニハ省略シタリ.

氏ノ報ズル所ニヨレバ寄送標品百六十三包中, 十八包ハ胞子ノ未熟ナルカ若クハ標品ノ少許ナルヨリシテ判定シ難ク, 殘リ百四十五包ハ悉ク撿定シタリ, 此中ニハ百十八種ト, 若干數ノ變種及ビ重複セル標品ナリ, 右ノ中, 新種ハ二十八種アリテ, 此他ニ又若干ノ新變種アリタリ.

氏ハ該標品ノ寄送ヲ悅ビ, 新種中殊ニ *Sticta Yatabeana.* 及ビ *Sticta Miyoshiana.* ノ二新名ヲ命ジ. 下ノ如ク記說セリ.

Sticta Miyoshiana Müll. Arg.; thallus glauco-pallens, habitu omnino ut in *Sticta herbacea* Ach. et *St. sinuosa* v. *macrophylla* Müll. Arg., supra tamen circa margines levissime pulveraceo-subtomentellus, subtus fuscus et tomentellus, crebre thelotremoideo-cyphellatus, demum ibidem subglaber et cyphellis explanatis ornatus; spermogonia paullo prominentia, apothecia sparsa, sat numerosa, laxe sessilia, 2—5 mm lata, turbinato-cupularia, ore conniventia, et crenulata et subpulveraceo-tomentella; discus fuscus; sporæ 75—85 μ longæ, 5 μ latæ, 2—4-loculares.——Prope *Stictam Wrightii* Tuck. locanda est a qua indumento partium et sporis elongatis multo tenuioribus differt.——Corticola ad Uzen Japoniæ, ubi leg. cl. Miyoshi, qui numerosos alios insignes Lichenes in Japonia recenter collegit.

Sticta Yatabeana. Müll, Arg.; similis *St. Miyoshianæ*, et indumento, laciniis thalli, apotheciis et sporis bene cum ea conveniens, subtus autem statim in eo diversa quod cyphellæ omnino desunt. Indumentum paginæ inferioris fusco-nigricans, copiosum, versus extremitatem laciniarum saepe per spatiola varia, orbicularia, elliptica, et irregularia deficiens et fere pseudocyphellas simulans.—Juxta *Stictam patiniformem* Müll. Arg., s. *Parmeliam patiniformen* Tayl., s. *Ricasoliam sublaevem* Nyl. locanda est.—In montanis Ontake Japoniæ: Miyoshi (a cl. Prof. Yatabe mecum communicata).

次ニ列記セル地衣ハ今回新稱ヲ得タル新種及ビ新變種ナリ.

Stereocaulon subramulosum **Müll. Arg.** L. B. n. 1585.

— — *β* humile Müll. Arg. L.

Stereocaulon uvuliferum **Müll. Arg.** L. B. n. 1586.

Stereocaulon octomerum **Müll. Arg.** L. B. n. 1587.

Usnea articulata v. asperula **Müll. Arg.** L. B. n. 1591.

Evernia mesomorpha **Nyl.** *f.* esorediosa **Müll. Arg.** L. B. n. 1593.

Cetraria ornata **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 42.

Sticta Yatabeana. **Müll. Arg.** L. B. n. 1597.

Sticta Miyoshiana **Müll. Arg.** L. B. n. 1596.

Anzia hypoleucoides **Müll. Arg.** L. B. n. 1598.

Anzia Opuntiella **Müll. Arg.** L. B. n. 1599.

Pyxine limbulata **Müll. Arg.** L. B. n. 1600.

Lecanora pulverulenta **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 80.

Lecanora (S. Hæmatomma) brunnea **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 82.

Pertusaria glauconitens **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 89.

Pertusaria deplanata **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 90.

— — *f.* ferruginea. l. c.

Lecidea (s. Lecidella) adpressula **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 93.

Patellaria (s. Bombyliospora) granularis **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 99.

Lopadium ferrugineum **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 100.

Mycoblastus japonicus **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 101.

Buellia extenuata **Müll. Arg.** Lich Miy. n. 103.

Thelotrema umbonatum **Müll. Arg.** L. B n. 1602.

Thelotrema microstomum **Müll. Arg.** L. B. n. 1603.

Thelotrema cinereum **Müll. Arg.** L. B. n. 1601.

Thelotrema cinerellum **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 109.

Thelotrema foveolare **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 110.

Thelotrema porinaceum **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 111.

Graphis (s. Phanerographa) aperiens **Müll. Arg.** L. B. n. 1604.

Graphina (s. Platygrammopsis) japonica **Müll. Arg.** L. B. n. 1605.

Pyrenula impressa **Müll. Arg.** L. B. n. 1606.

Anthracothecium laevigatum **Müll. Arg.** Lich. Miy. n. 118.

植物生理學輓近の一大問題

池野成一郎

總論

植物は空氣中の遊離窒素を類化するの力ありや植物体を構成する蛋白質等は單に硝酸鹽類及びアンモニアより成りて大氣中の窒素は之を成すに與らざるやこれ植物生理學上の一疑問たり此の疑問を初めて解釋したるはフランス有名の農業化學者ブッサンゴー氏とす氏は實驗を施行して植物は

遊離窒素を類化するの力なきことを證せり(1)次いでイギリスに於てロース,ギルベルト, ピューの三氏再び廣大なる實驗を行ひてブ氏の說を確めたり(2)然るに近來ドイツ國に於てヘルリーゲル及びヰルフアルトの二氏大いに實驗を施し荳科植物は遊離窒素を類化するの力あることを說明し併せてその力の因て起る所以を說きブ氏の說には誤謬なきことを論じたり(3)然るに此の二氏と同時に同樣の實驗に從事したるはベルリン高等農業學校敎授フランク氏とす氏は諸種の實驗を施して遂に窒素類化は荳科植物に限らず苟くもクロヽフヰルを有する植物は悉く皆此の力あることを論ぜりこの說たる植物學上未だ確定せるものに非ざるが故に遽に信ずべからずと雖も若し果してその說にして信ならしめば植物生理學中榮養論の一大變革といふべし余が植物生理學輓近の一大問題と題してこゝに論ぜんとするものは即ちヘルリーゲル及びフランク二氏の說の大略を記述し以て讀者をして此の大問題の一班を知らしめんと欲するにあるなり

第一　ブッサンゴー氏の實驗

ブッサンゴー氏の實驗は一千八百六十年に世に公にせられたるものなるがゆゑに人の能く知る所なれども尙は讀者中これを知らざる人もあらんかと思ひその大略を記すその試驗裝置の如きは他に讓りその試驗の方法を記せんに赤熱に熱したる土中に種子を播き之を鐘ガラスを以て蓋ひ之に硫酸を通過したるが爲アンモニア分を失ひたる空氣を通じたりその種子の發芽して生長したる後之を分析したるにその窒素の量は元來種子中にありし量より多きことなし今氏が試驗の成蹟一條を擧ぐれば Dwarf runner といへる植物を植ゑたるに次の結果を生じたり

---

(1) Boussingault, Agronomie, Chimie agricole et Physiologie, 1860.

(2) Lawes, Gilbert, Pugh; Phil. Trans., 1860.

(3) Hellriegel u. Wilfarth, Üb. d. Stickstoffnahrung der Gramineen u. Leguminosen, 1888. etc.

試驗後	植物中の窒素	0,0290	グラム
	土中の窒素	0,0033	グラム
	植木鉢中の窒素	0,0017	グラム
	合計	0,0340	グラム
試驗前	種子中の窒素	0,0349	グラム
	差	—0,0009	グラム

即ち 0,0009 グラムの損失あり若し植物が大氣中の窒素を類化するの力あらばこの損失はあらざるならんブ氏は此の類の試驗を幾度も施行して植物は遊離窒素を類化する能はずと斷定したり

第二　ヘルリーゲル氏の實驗

ブツサンゴー氏說の一と度出でしより人その眞理たることを信ぜり然れども農業家は早く既にその栽培の經驗上荳科植物のみは此の理に外るゝをなきかを疑へり何となれば(4)ルーピン豆の如き者は不饒の地に於て之を培養し窒素を含める肥料を少しも與へずして單に他種の榮養分を給すると雖も數年間毫もその生產力を減ぜず或は又穀類, アカダイコン, ジヤガタライモ等を培養するもその收獲のよからざる地に先づルーピンを植ゑて然る後に此等の植物を培養すれば恰も含窒素肥料を施したるごとく收獲饒多なり此くの如き理由なるによりルーピツツの農家シユルツ氏(Schultz-Lupitz)は或る植物は大氣中の窒素を用ふるの力あることをいひ之に Stickstoffsammler 即ち窒素聚集者の名を命じたり

ドイツ國ベルンベルクのヘルリーゲル, ヰルファルトの二氏十數年前より再び窒素の源に就き研究する所あり一千八百八十六年その說を世に公にし(5)一千八百八十八年再び之を詳述したり(6)兩氏は主として禾本類及び荳

---

(4) Frank, Über die Quellen der Stickstoffnahrung der Pflanzen; *Ber. d. deuts. Bot. Ges. Bd. IV. 1886.*

(5) Hellriegel, Welche Stickstoffsquellen stehen der Pflanze zu Gebote? *Zeitsft. d. Ver. d. Rübenzuckerindustrie d. Deuts. Reiches*, 1886.

(6) Hellriegel u. Wilfarth, Über d. Stickstoffnahrung der Gramineen u.

類を栽培して之を研究せり今次にその實驗の大略を掲載す

禾本類を純粹なる石英砂土内に培養し之に窒素肥料を與へず單に他の有要なる鑛物鹽類を與へて栽培するに初め僅の間は能く成育すれども暫時にして急にその摸樣を變じ僅にいぢけたる葉枝を生じその乾燥目方は唯僅の增加あるのみ而して窒素は毫も增加することなし然れども急にその摸樣を變じたる際直に之に硝酸鹽類を加ふれば植物は再び强壯となり常の如く成育するに至る然るにエンドウを同樣の地に栽培して同樣の肥料を給するに能く繁茂して多量の收穫あり即ちたとへば高さ廿サンチの器に四キロの砂を盛りて栽培したる次の成果あり

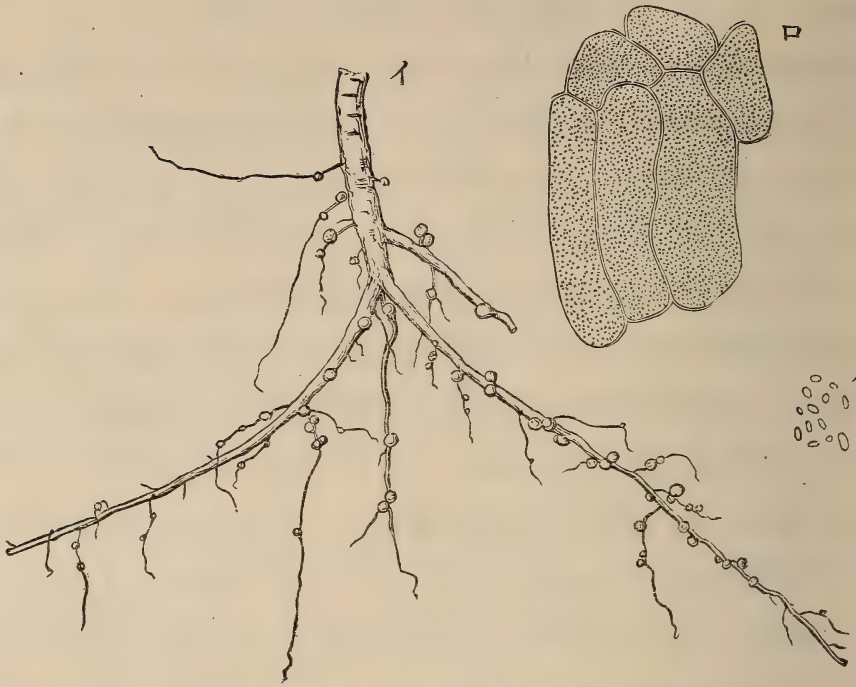
試驗年號	エンドウ(乾燥目方)	地上の收獲(乾燥目方)
一八八四年	13,947　グラム	28,483　グラム
一八八五 „	11,710　„	27,816　„
一八八五 „	12,426　„	33,147　„
一八八六 „	8,956　„	20,372　„

ヘルリーゲル氏此等の成蹟を推して論究して曰く禾本類はその窒素を主として地中の硝酸鹽類に仰ぐと雖も荳科植物はその窒素をたゞに硝酸鹽類に仰ぐのみならず大氣中の窒素にも仰ぐものなるや明なりと

以上の如く荳科植物は遊離窒素を吸收類化するの作用ありこれ果して何の故ぞやブッサンゴー氏がいへる植物は遊離窒素を類化するの力なしといへる說は誤れるかヘルリーゲル氏は次の如き說を設け以て之を說明しブ氏の說の誤なきことを證したり

凡そ荳科植物はその根に必ず數多の塊（いはゆる Knöllchen, Nodule, Tubercule.）を有すその形狀にも色々あれどもこゝに圖を以て示すものはミヤコグサの根の塊とす（圖中イ）今之を切て顯微鏡下に見るに（ロ）に示す如き組織あり此の細胞組織は小有機物を以て充滿す（ハ）に示すものは小有機

Leguminosen. *Beilageheft zu do.* 1888.



物なり此等の有機物はその形狀能くバクテリアに類似す故にヘルリーゲル氏は之をバクテリアと呼べり然れどもその後學者の研究によりバクテリアと少しく異るを以て之をバクテリアの類似物即ちバクテロイドと呼びなすに至れりヘルリーゲル氏論じて曰く荳科植物自身には窒素類化の力なし(ブ氏の說のごとく)然れども此の根塊中のバクテロイドは此の力あり故に荳科植物が窒素を類化するが如き成蹟を得るはこれ唯外觀にしてその實は此の塊內のバクテロイドが之を吸收類化するなりと(7)凡そエンドウ,ルーピン,セラデラの如き荳科植物は sterilise したる砂土に硝酸鹽類を加へて栽培そるに能く繁茂するヿあれども或は繁茂せざるヿあり硝酸鹽類を加へざれば全く成長せず然れども若し是等の地に栽培の行屆きたる田圃の土のエキスを取て加ふれば荳科植物は能く繁茂すヘルリーゲル氏論じて曰く凡そ土壤中にはこれらのバクテロイドあり而してエンドウ等のそのエキスを

---

(7) Hellriegel u. Wilfarth, l. c.

加へて能く繁茂するは蓋そのエキス中のバクテロイドが遊離窒素を類化して之を之に給するに因るならんと氏ハ尚ほ一層之を明にせんため百度に熱したるエキスを用ゐたるにエンドウをして繁茂せしむるの力なし氏おもへらくこれ熱に因てそのバクテロイドを撲滅せるに因るなりと

第三 フランク氏の試驗

フランク氏も又一千八百八十三年頃より植物窒素の源に就き研究する所あり氏の研究事項はヘルリーゲル氏と同一なれどもその研究の方法は大いに異りヘルリーゲル氏は收獲を分拆してその說を立てたれどもフランク氏ハ尚ほその植物を栽培せる土の窒素を試驗の前後に檢定し以て土地がその栽培の爲め窒素を增加するや否やをも試驗せり氏曰く (8) „Eine Reihe von Versuchen habe ich bis jetzt ausgeführt, bei welchen die Fragestellung die war, ob der Erdboden unter den gewöhnlichen natürlichen Verhältnissen an der freien Luft allein dadurch, dass auf ihm Pflanzen der von den Landwirthen als stickstoffsammelnd bezeichneten Gattung wachsen, eine Veränderung seines Gehaltes an Stickstoffverbindungen im Sinne einer Bereicherung erfährt gegenüber dem nämlichen Boden unter der gleichen Umständen während der nämlichen Zeit unter Ausschluss von Vegetation, selbstverständlich unter Abrechnung des mit den ausgesaëten Samen eingeführten Quantums von Stickstoff………“ とこれ氏の研究法がヘルリーゲル氏の法と異る所とす

次の試驗ハ千八百八十五年に施行したるものにして深さ八十サンチ幅17,5及び十一サンチのシリンドルに砂を盛り幅狹き器には一個廣きものには數個のルーピンの種子を播き又之に蒸餾水のみを與へて春より秋迄おき試驗の終りたる後得たる收獲試驗前の種子植物を植ゑたる土壤及び植ゑざ

---

(8) Frank, Ueber die Quellen der Stickstoffnahrung der Pflanzen. *Ber. d. deuts Bot. Ges. Bd. IV, 1886.*

るもの等の窒素分を定めたるに次の如き成蹟あり

	試驗日數	用ヰタル土壤の乾燥目方（グラム）	試驗前土壤及び種子の窒素量（グラム）	收獲		土壤の窒素量 %		土壤の硝酸（N_2O_5）量（%）		試驗後土壤及び植物の窒素（グラム）	窒素の損益 %
				分量及び性質	窒素量（グラム）	試驗前	試驗後	試驗前	試驗後		
1. 植物なき者（陶器のシリンドルを用ふ）	174	21500	20,5755	—	—	0,0957	0,0907	0,00037	0,00048	19,5112	−5,1
2. ルーピン三粒を播きたるもの（陶器のシリンドルを用ふ）	132	21450	20,5547	植物の目方83,7グラムにして果實は半熟なり	0,8208	0,0957	0,1065	0,00037	0,000072	23,6758	+15,2
3. ルーピン一粒を播きたるもの（ガラスのシリンドルを用ふ）	174	9435	9,0373	植物の目方22,5グラム．高さ95サンチ．果實二個．種子は半熟なり	0,1138	0,0957	9,09920	0,00037	0,0023	8,4781	+4,87

以上の表に因て是を見ればフランク氏の試驗も同じく荳科植物に窒素類化の力あるヿを證明したり然れども窒素類化の手段に就きては兩氏の說同じからずヘルリーゲル氏は荳科植物の塊內のバクテロイドを以て窒素類化の力あるものとなし植物自身には此の力なしと斷定したれどもフランク氏は此の說に同意せず氏はその硏究の成蹟より推して植物自身に類化の力あるものとし且その力は荳科に限らず凡そクロヽフヰルを有する植物の通性たるヿを論じたり氏が此の說を主張するに至りたるは主として次の試驗ふあるがごとし(9)　（以下次號）

花の色香

第三章　花瓣原論

---

(9) Frank, Ueber den experimentellen Nachweis der Assimilation freien Stickstoffs durch erdbewohnenden Algen. *Ber. d. deuts. Bot. Ges., Bd. VII, 1889.*

二 原蕊論

堀正太郎

花瓣は原來雄蕊より變化せる者にして直接に葉より變化したる者にあらすとはグラント,アルレン氏の熱心に唱道せし處にして其論據とする處は專らこれを植物の地球上に現出せる地學的の歷史を基礎として立論せる者なり夫れ顯花植物の初めて地球上に現出したる者は即ち裸子植物（ジムノスペルム）(松柏の類)にしてこの種の植物にありては其花とし呼ふ處の者は只裸出せる雌蕊と一叢の雄蕊とに過きすして彼の雙子葉幷ひに單子葉植物に見る處の花瓣或は萼片と稱すへき者あるなし所謂花なる者は只貴要機關のみを具有して他の保護機關を有せさる者なり裸子植物は全顯花植物中尤も古代の者にして花冠（フラワアーエンヴエロープ）の存在せるものは皆近代の植物に限れり古代植物は葉と雌雄蕊のみを有して近時の顯花植物ハ是等に加ふるに花冠を以てせは其の花瓣の現出は實に近時の者たること疑ふへくもあらす古代植物に於ても其雌雄蕊の基原は即ち葉より變化したる者となすと雖も花冠にありては直接に葉の變態せる者と云ふへからす花冠は即ち間接的に葉の變遷せる者にして即ち直接に外列の雄蕊より變化したる者なり(原葉論の所謂雄蕊の退化なり)葉の進んて花冠を經雄蕊に進化するにあらすして葉の一旦雄蕊に進化したる者再ひ莖葉の方向に退化せる者なり花瓣は實に其薄軟柔弱海綿狀の組織を有し常に鮮姸たる色素を以て裝飾せるを以て其莖葉と異なるの要點となす薔薇又は白水百合花は實にこの退化を示せる適例となす人若し問ん是等薔薇花又は白水百合花の例を以てするも其進化的變遷にあらすして退化なりとは如何にこれを證明し得へきか何を根據として其變遷の方向を確定すへきかをこれが說明誠に易々のみ夫れウォルフ氏幷ひにゲーテ氏の所說(原葉論)は實に進化論の定則に違反せる者なり抑も花瓣萼片の如きは花これを欠くと雖も生存し得へくして生殖に直接の必要を見す其扁平にして美麗の構造を有する者只昆虫誘引の爲に過きすしてこれを決して花の貴要部と

なすへからす花の目的種子の生出にあり生殖の機は只雄蕋あり雄蕋なくして焉んそ種子を生出するを得んや花粉なくして生殖を全ふするを得んや今動物の例證を以て益々其理を明にすへし群棲蜂に三種あり雌蜂, 雄蜂, 勞働蜂是なり勞働蜂は即ち雌蜂の女性を失ふたるものにして蜂群の爲めに生殖外の勞働を爲す者なり植物の花にありて花瓣の貴要機關に於けるも又同し花瓣雄蕋より變化して以て昆虫の誘引を司り内部貴要機關の保護を司り毫も生殖に直接の關係を有せさる者なり然して今雄蕋及ひ花瓣の何れか先きに生したるかを問ふは實に愚の至りにして生殖に直接の關係を有する者の初めに起り然して後其附屬物の生するは理の當然なり白水百合其變化の状態焉んそこれを花瓣より漸々雄蕋に進化せる者と爲すを得んやこの花にありては雄蕋は漸々其性質を失ひ扁平となり葯は同時に萎縮微小となり遂に其用を失ひたること自ら明なりと雖もこれに反して花瓣より進みて不完全なる生殖の用に適せさる葯を生し漸々完全の雄蕋を生したる者と考察すること甚た難し其他毛莨科瞿麥科木蘭科錦葵科薔薇科等に見る處の花瓣の變遷は皆雄蕋より退化せること明なり

今花色を觀察するに尤も下等單簡の花にありては其色黃なり（花色論の詳細は後章之を論すへし）而して雄蕊の花粉は十中八九又黃色なり花冠を欠く古代植物即ち裸子植物にありては花粉の黃色なること皆世人の知る所なり雙子葉單子葉植物花に至りて初めて雄蕋より變化し花冠を發生せる者なりとせは其尤も單簡にして進化の度尤も少き花にありては理論上黃色ならさるへからす而して事實上花の始原色は黃なること其雄蕋の花瓣に變遷せる證にして其原來の色を保存せる者なる事を示すものなり然とも花の進化するに從ひ其色を變すること是疑ふへからす若し原葉論者の云ふか如く花冠の莖葉より直接に變遷せる者とせは其始原色は葉の色即ち綠色を有せさるへからす然るに事實上綠色の花瓣は甚た稀れにして短簡なる花の色は黃色なるを是れ原蕋論の依りて以て論據とする處なり　（未完）

雜　　錄

雌雄異株植物の雌雄數の比例

ハイエル(Heyer)氏は雌雄異株植物に生ずる雌雄植物の比較數は生長地の如何により異るや否やを檢せり氏がヤマア井にて實驗する所に因るに雌植物と雄植物との割合は如何なる場所如何なる場合にても同一なりと即ち二萬一千の植物にてその雄と雌の比例は 105,86 : 100 なるを發見したり又アサを多年培養したるにその成蹟次のごとし

雄本	雌本
100	109,85
,,	115,21
,,	114,30

是に因て之を觀れば雄本を生じ或は雌本の生ずるは決して偶然に非ず一植物につき一定せる法則ありて然るや明なり

(Deutsche Land wirtschaftliche Presse, Jahrg. XIII, Nr. 25).

Lomaria Spicant, Desv. var.?
きればしゝがしら

(假新稱)

吉永悅卿

予今年福井縣ニ寓ス頃日高山積雪未ダ全ク融ケズ春風猶寒ク今猶寒國ノ狀態ヲ顯シ居レリ然レ𪜈四方八方ノ原野ハ草木漸ク發芽シ從テ花開キ黃白點綴シ植物採集ノ意氣勃然トシテ動キケレバ北越產植物ノ吾海南ト異ナルハ予ヲメ一驚ヲ喫セシムルナラントヽ頃ハ三月三十日坂井郡ナル瓜生村へ採集ヲ企テタリキ折節瓜生保ガ城趾ノ麓ヲ過リケレバ延元ノ昔ヲ追懷シ坐ロニ感念ヲ起セシニ忽チ予ヲシテ一時懷古ノ念ヲ絕タシメシ者アルハ何ゾ

ヤ是レ予ガ無二ノ友垣ナル羊齒科 Filices. ニ屬スル一植物ニ邂逅セシ事ニゾアルナリ予ハ取敢ヘズ之ヲ觀察スルニ下ニ記スルガ如キ狀態ナレハ素ヨリしゝがしらLomaria Spicant, Desv.ト別種トスルノ價値ナキハ萬々ナレ𪜈下ノ如クしゝがしらト著シク異ナルアルヲ可惜之レト同種トスルハ予ノ好マザル所ナレハ予淺劣ヲ顧ミズ敢テ之ヲ變種トナシ假ニ上ノ和名ヲ下シ置ケリ而メ其學名ハ今俄ニ之ヲ知ル能ハザル以テ暫ク之ヲ後日ニ讓ル其和名ノ當否ト學名ノ詳ナルトハ予ガ他日編纂スル所ノ越前產羊齒科植物目錄ニ就テ見ルベシ

次ニしゝがしらト異ナル所如左

羽片ニ著シク裂片ヲ有ス其數八ニ十二中央ノ四ニ五ハ缺刻深ク羽片ノ中央脈ト縁邊トノ半ニ至リ片末鋭頭ヲ有ス而シテ羽片ノ本末ニ至ルニ從ヒ缺刻漸ク淺ク殊ニ末端ハ流レテ長キ鋭頭トナル葉脈ハ裂片ニテ細ク分岐シ裂片ノ狀殆ンド小羽片ノ如シ

產地ハ越前國坂井郡瓜生村ナリ

獨和對譯植物名彙

（前號ノ續キ）

松村任三

Rittersporn.	*Hiensō.*
Robinie.	*Hari-enju.*
Rodel.	*Shiogama-giku.*
Rohr.	*Yoshi; ashi.*
Röhrlein.	*Tampopo.*
Röhrenlauch.	*Negi, nebuka.*
Rose.	*Bara; ibara.*
Rosskastanie.	*Tochi.*
Röthe.	*Akane.*

Rüben Kohl. *Shira-kukina.*

Rübsen. *Shira-kukina.*

Ruchgras. *Haru-gaya.*

Ruhrkraut. *Hahako-gusa.*

Runkelrübe. *Satō-daikon.*

Rüster. *Nire.*

Ruthe. *Aki-no-kirinsō.*

S.

Sachs. *Kinkōkwa.*

Sadebaum. *Toshō, Sabina.*

Saflor. *Beni-bana.*

Safran. *Safuran.*

Sagopalme. *Saigobei.*

Salat. *Chisa; kaki-jisa.*

Salbei. *Saruhiya.*

Salde. *Kawa-tsurumo.*

Salzkraut. *Oka-hijiki; miru-na.*

Saudkraut. *Nomi-no-tsuzuri.*

Sauikel. *Uma-no-mitsuba.*

Sauerklee. *Katabami, suimono-gusa.*

  Gehörnter Sauerklee. *Katabami.*

  Hain Sauerklee. *Miyama-katabami.*

Sang. *Odorikosō.*

  Rienen Saug. *Odorikosō.*

  Klammer Saug. *Hotoke-no-za.*

  Weisser Saug. *Odorikosō.*

Saurach. *Hebinoborazu.*

Schafschwingel. *Ushinokegusa.*

Schalotte. *Wakegi.*

Scharbockskraut. *Koba-no-ryūkinkwa.*

Scharte. *Tamurasō; tamabōki.*

Schaumkraut. *Tanetsuke-bana.*

Rauhes Schaumkraut. *Tanetsuke-bana.*

Spring Schaumkraut. *Ja-ninjin.*

Schelle. *Okina-gusa.*

Schilfflachs. *Amayuri.*

Schilfrohr. *Yoshi, ashi.*

Schierling. *Doku-ninjin.*

Schirm. *Tsumatorisō.*

Schirmtanne. *Kōyamaki.*

Schlangenwurz. *Mizu-imo.*

Schlutte. *Hōzuki.*

Schmiele. *Kome-susuki.*

Bogen Schmiele. *Kome-susuki.*

Rasen Schmiele. *Miyama-komesusuki.*

Schminke. *Murasaki.*

Bauern Schminke. *Inu-murasaki.*

Schmirgel. *Enkōsō.*

Schneckenklee. *Murasaki-umagoyashi.*

Schneeball. *Yae-no-kamboku.*

Schneide. *Hitomoto-susuki.*

Schnittlauch. *Asatsuki.*

Schöllkraut. *Kusano-ō.*

Schönchen. *Emmei-giku; hina-giku.*

Schöne. *Wasure-gusa.*

Schwaden. *Dojotsunagi.*

Schwalbenwurz. *Kusa-tachibana.*

Schwarzdorn. *Ko-sumomo.*

Schwarzkümmel. *Kurotanesō.*

Commercial Botany of the Nineteenth Century.

By J. R. Jackson, Als [Cassal & Co. 1890]

此書ハ現今貿易品ニ供セラルヽ有用植物ノ事ヲ記載セルモノニシテ首章ニハ種々ノ有用植物ガ世間ヘ知ラルヽニ至リタル年代ヲ列記シ次章ヨリ「ゴム」,「グツタペルカ」, 食用植物, 飲料植物, 藥用植物, 脂油, 蠟, 樹膠, 樹脂, 染料, 製紙料, 纎緯, 牧草, 木材等トナル種々ノ植物ヲ圖說シタルモノニシテ應用植物學家及ビ實業家ハ正ニ一讀ヲ要スルノ書ナリ

日本植物志圖篇

牧野富太郎著日本植物志圖篇第一巻第八集ハ前月五發兌セリ

本編ニハきばなのせきこく (Dendrobium tosaense, Makino). こくらん (Liparis cornicaulis, Makino). のぢきく, ちやぼつめれんげ (Cotyledon Sikokiana, Makino). たいとごめ (Sedum oryzifolium, Makino). めのまんねしぐさノ六種揭出セリ

地衣体ノ分裂

U. Martelli氏ハ近頃 decandra subjusca ノ一變種ガ自然ノ狀態ニ於テ,水藻ト菌絲トニ分離シタル實例ヲ記セリ,此地衣ハ古キ壁ノ面ニ着生シタルモノナルガ,其地衣体ノ中央部ハ濃綠色ヲ呈シ,外緣部ハ殆ド無色ナリシ,コレ中央部ニハ Protococcus viridis (水藻ノ一種)ガ群集シ,外緣部ハ唯菌絲ノミニテ成レルニヨルナリ,此ノ如ク地衣体ガ菌藻兩部ニ分離シタルハ過分

ノ濕氣アリシガ爲メニシテ,之ニヨリテ菌絲ガ最早水藻ヲ捕獲スルヲ得ザルニ至リタルモノナラント云フ, [Nuov. Giorn. Bot. Ital. XXII. (1890) pp.450—1].

巴里理科大學の懸賞問題

巴里理科大學ハ千八百九十一年より同九十五年に至る懸賞問題を出せりその問題次のごとし

ボルダン (Bordin) 賞—顯花植物受精内部の作用を調査し殊に細胞核の分裂及び轉移を研究するを要す又此の現象に關して植物界と動物界との關係を研究するを要す(賞金三千フラン一千八百九十一年六月一日)

バルビエー (Barbier) 賞一,外科,内科,製藥及び醫術に關係ある植物學上の有要なる發見(二千フラン,同六月一日)

テマジエール (Desmaziéres) 賞,—隱花植物全部或は一部に關係せる最優等の研究(千六百フラン,同六月一日)

ツ,ラ,フオン,メコック (de la Fons Melicocq) 賞—佛國北部即ちノール (Nord) パー,ド,カレー (Pas de Calais) アルダンヌ (Ardennes) ソンム (Somme) オワーヌ (Oisne) 及びエーヌ (Aisne) 地方の植物書の最優等なるもの(九百フラン,一千八百九十二年六月一日)

トール (Telle) 賞,—歐州の細胞隱花植物或は昆虫一種の生活法或は解剖上の最優等なる研究(二百フラン,千八百九十一年六月一日)

寄生隱花植物

ドクトル,ヨホー氏は寄生隱花植物を分類して四となせりその第一は通常の陸生植物より發達せるものにて之を Euphytoid と稱すヤドリキ,カナビキサウ,ハマウツボ等の科に屬する植物はこれに入る第二は攀緣植物より發達せるものにて之を Lianoid といふチナシカヅラ,マメダホシの如きこれに入る第三はその有樣空氣植物に類す故に之を Epiphytoid と稱すヤドリギの如きこれに入る第四は通常の植物に類似する點更になし故に之

を Fungoid といふラフレシア,ツチトリモチのごときこれに入る世界中に知られたる種類はその數一千に超ゆその內半はヤドリキ科に屬す

此等の植物が因て以て滋養分を吸收する所の寄主に就きては或る植物ハ一種に限りて寄生し或る植物は一屬內のものなれば何種にても寄生し或るものは同科のものなれば何屬何種にも寄生す又或ものは斯くの如き制限のなきもあり又土地の異るにより異りたる植物に寄生するものありヤドリギのごときは或地にては常にリンゴの木に寄ると雖も或る他の地にては常にマツの木に寄るがごとし寄生植物が寄生するはその植物の一定部に限るを多し例へばヤドリキハ常に枝に寄生しツチトリモ子は根に寄生し養分を吸收するには特別にハウストリアと稱する機關發達すこれ根に相當するものなり

Acer platanoides の異狀發芽

佛人レジエールル氏は Acer platanoides と號するモシヂの種子を播きてその發芽の摸樣を窺ひしに百回の內四回はその發芽異狀を呈するをを見たりその異狀とは第一子葉二枚の內一枚が多少二裂するを第二子葉三枚なるを第三子葉二枚にして二枚共その長さの三分一程裂けたるを第四子葉四枚なるをこれなり

Puccinia corticioides, Berk. et Br. ノ焦燥胞子（ソレドースポア）

前號の紙上ニめだけノ赤衣ニ付キ單簡ナル記事ヲ掲載シタル事ハ讀者正ニ記臆ニ存ス可シ予カ本年三月九日採集ノ節ニアリテハ焦燥胞子ノミニシテ一ノ終局胞子（テリユートスポア）ヲ發見セサリキ然ルニめだけノ莖ヲ圍繞セル處ノ焦燥胞子ハ四月下旬ヨリ五月上旬ニ至リ漸々萎縮皺面トナリ遂ニ五月下旬ニ至リテ自然ニ剝離シテ地上ニ墮ツ余ハ五月二十七日相州大磯ニ於テ此ノ變化ヲ目擊シ精密ニ研究シタル處全ク焦燥胞子ノ發生ニ依リテ自ラ終局胞子ノ脫落ヲ基因シタルヿ明ナリ焦燥胞子ハ其色赤褐色ニシテ形狀圓形若クハ楕圓形 20ミクミ＝29ミクミ—20ミクミ ニ至ルノ大ヲ有ス採集シタル處ノ焦燥

胞子ハ自然的ニ發芽シタルモノ多ク尚ホ其變化ノ模樣ハ漸々研究ヲ待テ報スルヿアルベシ

堀正太郎

植物學雜誌

第五卷　第五十三號

明治廿四年七月十日

Library of Congress
JUL 10 1910
Smithsonian Deposit

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V. No. 53.

July. 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

○動物學雜誌　明治廿四年六月十五日發兌定價金拾錢

第三十二號目錄

○日本產蝶類第三版クロアゲハノ圖
○對馬採集日記　波江元吉君　土田兎四三君
○動物解剖手引草（鳥類ノ部）（承前）　岩川友太郎君
○鳥雜記（一）　飯島魁君
○かぶとがにノ位置　岸上鎌吉君
○理科大學標本日本頭脚類目錄（第六回）　池田作次郎君
○蟬の採集法　名和靖君
○島根縣下鳥類目錄第一回報告　渡邊盈作君
○靜岡縣ニ發見スル鳥類目錄　丹羽甲子郎君
○普通動物學講義第貳拾四　箕作佳吉君
○雜報
●鳥信リ●叉鳥●川越ノ蝶類●靜岡縣下蝶類●ヒオドシノ發生●桃酸漿●ビュチュリー氏ノバクテリヤ及ビ是ニ類似シタル生物ノ構造ニ就キテノ研究●地方諸君ニ望ム○東京動物學會記事

Nippon no Tori Mokuroku By Dr. Ijima Isao.（承前）

發行所　東京市神田區裏神保町一番地　敬業社

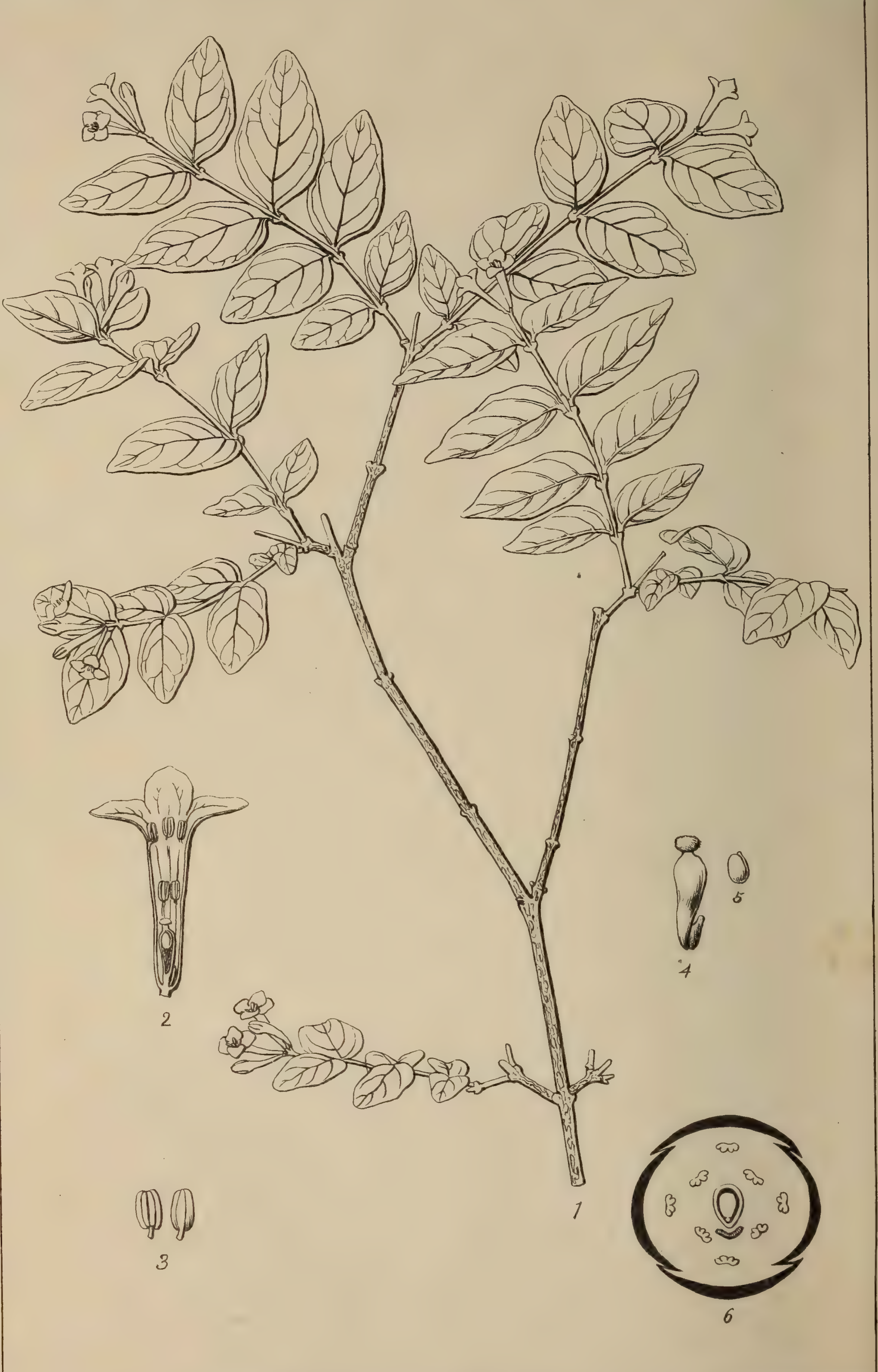
○東洋學藝雜誌　第百拾七號

●論說
○本邦產牛乳の効用に就て（前號の續）　醫科大學教授　丹波敬三君
○法律沿革ノ研究ニ就テ　法科大學教授　宮崎道三郎君
○比較土俗學　理學士　坪井正五郎君
○歐洲哲學ノ近況（前號ノ續）　文科大學教授　井上哲次郎君
●雜報　○中村敬宇翁の逸事井上哲次郎君○鯙ニテ陶器ヲ釣ル話末松謙澄君○迷へり母外山正一君●寄書○磐梯山今日ノ概況小林榮君●雜報十二件●學會記事八件●明治二十四年六月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十四頁木版挿圖二個
●定價壹冊金拾錢六冊前金（郵稅共）五拾四錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

牧野富太郎君著
日本植物志圖篇
每月五日發行
壹册定價金貳拾錢郵稅貳錢
第十集七月五日發行
第一集七月二日再版

發兌書肆　東京神田裏神保町　敬業社



日本橋區呉服町東京刷版社印行

WIKSTROEMIA ALBIFLORA, SP. NOV.
NOM. JAP. *HIŌ.* ヒオウ.

植物學雜誌第五卷第五十三號
明治廿四年七月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. July 10, 1891. **No. 53.]**

A New Japanese Wikstroemia.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Wikstrœmia albiflora, nov. sp.

Nom. jap. *Hiō.* ヒオウ.

(Plate XXVI.)

A shrub 2—5 feet high; young branches brown, old branches grey. Leaves opposite, glabrous, ovate or broadly ovate-lanceolate, entire, pale or glaucescent and with 3—5 rather prominent pinnate veins on the under surface, $\frac{1}{2}$—1 inch long, 3—6 lines broad; petioles short, $\frac{1}{2}$ line long. Flowers white, subsessile, 3 or 4 together, capitate, terminating the branches. Perianth-tube smooth, slender, slightly dilated towards the apex, 3 lines long; its limb 4-parted; the lobes patent, broadly ovate, obtuse, about 1 line long, imbricate in the bud. Stamens 8 in 2 series, those opposite the lobes of perianth inserted in the throat, the alternate ones in the middle portion of the tube; filaments short; anthers oblong, obtuse, adnate, orange in color. Hypogynous scale small, 1 or wanting. Ovary clavate, with the base stalk-like, slightly curved, 1-celled, about 1 line long; style very short; stigma capitate, hispidulous under the lens. Ovules solitary, anatropous, pendulous.—Fl. May.

Living specimens of this plant were collected by Mr. K. Watanabe, at Nanokawa-mura, in the province of Tosa, in March 1891, and are now kept in the Botanic Garden of the Imperial University. Its near relative is *W.*

japonica, Miq. The latter can be readily distinguished by its inflorescence, which, though short and contracted, is racemose and not truly capitate. Moreover it is not only terminal, but also axillary, which latter is not the case with the present species.

Plate XXVI. Fig. 1, branch with flowers; 2, flower cut vertically; 3, ventral and dorsal views of stamen; 4, pistil with a scale at the base; 5, ovule; 6, floral diagram:—*all except 1 enlarged.*

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員　澤田駒次郎

第五十二號正誤(189)ノ第十七行十二字目餘ノ下幅ノ字ヲ脫ス同第十九行二十一字目幅ノ下ニ在ルサノ字ハ不用(190)ノ第十三行三十二字目法ハ方ノ誤(191)ノ第九行十一字目粉澱ハ澱粉ノ誤ノ(192)第二行二字目ノ茭紏ノ上「マヂレル」トアルハ「ヨヂレル」ノ誤仝第十五行二十九字目產ノ下スノ字ヲ脫ス仝十八行二十字目治明ハ明治ノ誤(193)ノ第二行二十一字目色ハ褐ノ誤

成分　加剌拔兒豆ノ主成分ハ有毒性亞爾加魯乙度ニシテ一千八百六十四年ニ於テ Jobst, Hesse ノ兩氏之ヲ發見シテ Physostigma ト命名セリ爾後一千八百六十七年ニ至リ Hesse 氏ハ原素分析ニ因リ其集成ヲ確定シ $C_{15}H_{21}N_3O_2$ ヨリナルモノトセリ

Physostigma ハ一名 Physostigmin ト稱シ褐色不晶形ノ塊ニシテ設氏四十度(華氏百四度)ノ熱度ニ因テ軟化シ設氏四十五度(華氏百十三度)ノ熱度ニ逢フテ熔融ス酒精，依的兒，扁陣，硫化炭素，哥囉仿謨ニハ隨意ニ溶解シ水ニハ微ニ溶解ス又酸類ヲ中性ト爲シ鹽化鐵ノ溶液ヨリ含水酸化鐵ヲ沈澱ス

本品及ビ其他ノ鹽類ハ味ヲ有セス此等ノ溶液ニ Meyer 氏ノ試藥ヲ注

クトキハ白色ノ沈澱ヲ生ズ此沈澱ハ酒精及ビ依的兒ニハ随意ニ溶解シ其酒精溶液ヨリ稜柱狀ノ結晶ヲ析出ス

本品ハ格魯爾石灰ニ因テ赤色ヲ呈スト雖トモ過量ニ注クトキハ其彩色消滅シテ再ヒ無色ト爲ル又硝酸ハ此亞爾加魯乙度ヲ溶解シテ黃色ヲ呈シ硫酸ハ初メ黃色ヲ呈シ後チ橄欖綠色ニ變ス

本品鹽類ノ溶液ニ過量ノ暗母尼亞ヲ加ヘ重湯煎ニ上セ熱スルトキハ赤色ヲ呈シ橙赤色ト爲リ黃色綠色藍色ト漸次ニ變色スト

本品溶液ニ苛性亞爾加里ヲ注クトキハ赤色ヲ呈シ又依的兒ヲ加ヘテ振盪スレハ藍色ヲ呈シ稀硫酸ニ因テ赤色ト爲ル此等ノ變色ハ亞爾加魯乙度ノ分解ノ度ニ因ルモノトス或云本品水溶液ハ亞爾加魯乙度ノ返應ヲ呈シ大氣ニ觸ルヽトキハ直チニ赤色若クハ藍色ニ變ズ是レ亞爾加魯乙度ノ一部分ノ分解ニ因ルモノトス Hesse 氏ハ屢バ無色無味ノ亞爾加魯乙度ヲ得テ華氏二百十二度ノ熱度ニ曝露セシニ赤色ヲ呈スト一千八百六十五年ニ於テ Vée, Seven. 兩氏ハ Hesse 氏ト同一ノ法ニ因リ無色長斜方管狀ノ結晶ヲ得タリ此亞爾加魯乙度ハ「フ井ソスチグミーン」ニ似テ味ヒ苦シ故ニ之ヲ別種ト爲シ「エセリン」(eserin) ノ名ヲ命セリ Tison 氏ノ説ニ據レバ「エセリン」ハ一名「エセリア」(eseria) ト稱シ純粹ノ「フ井ソスチグミーン」トス或云フ「フー井ツスチグミーン」ト「エセリン」ノ作用ハ同一ニシテ千分中一分ヲ含有スル溶液ノ一滴ヲ眼瞼中ニ注入スレバ久時瞳孔ヲ收斂ス Vée 氏云本品ノ特性ハ其水溶液ニ剝篤亞斯, 曹達, 或ハ石灰ノ小量ヲ注クトキハ赤色ヲ呈シ直チニ濃厚ト爲リ漸次ニ黃色終ニ藍色ニ變ズ又酒精越幾斯ノ性質モ亦之ニ同ジト云フ生藥學ニ云加剌拔兒豆ハ猛毒性ヲ有ス其有毒成分即チ瞳孔ヲ收縮スル成分ハ「フ井ソスチグミーン」Physostigmin($C_{15}H_{21}N_3O_2$)一ニ「エセリン」(Eserin) ト稱スル亞爾加魯乙度ニシテ無晶形樹脂樣ノ塊ヲナシ味ヲ有セズ又「カラバリン」(Calabarin) ナル無晶形ノ亞爾加魯乙度ヲ含有ス此亞爾加魯乙度ハ其生理的作用寧ロ亞篤魯必涅ニ類ストアリ

「カラバリン」ハ一千八百七十六年ニ於テ Harnack, Witkowski ノ兩氏ニ因テ發見セラレ冷血動物ニハ強直症ヲ發シ酒精及ヒ水ニハ溶解スト雖𪜈依的兒ニハ溶解セス又此沃度汞複鹽ハ水及ヒ酒精ニ溶解セス一千八百八十年ニ兩氏ハ「フヰソスチグミーン」ノ溶液中ニ本品ノ存在スルヲ確定スト

其他「ルブレスリン」(Rubresrine) 澱粉四八%窒素三,六五%蛋白質二三%灰三%燐酸剝篤亞斯,脂肪·粘液質,砂糖ヲ含有ス但シ「ルブレスリン」ハ哥囉仿謨ノ溶液中ヨリ結晶ス Harnack, Witkowski 兩氏ノ說ニ據レバ依的兒ニハ溶解セスト

加剌拔兒豆有効成分ハ主トシテ核中ニ含有ス Fraser 氏ノ說ニ據レバ子皮中ニモ含有スト

製劑　加剌拔兒豆越幾斯 Extractum Physostigmatis. 改正日本藥局方ニ據レバ其製法左ノ如シ

加剌拔兒豆越幾斯ハ

加剌拔兒豆粗末	十分

ヲ取リ

酒精	二十四分
常水	十六分

ヲ注キ一日間温浸シ壓漉シ又其殘滓ニ

酒精	二十四分
常水	十六分

ヲ注キ一日間温浸シ漉液ヲ合シテ濾過シ蒸發シテ其容量三分一トナルニ至リ冷處ニ靜置シテ其沈定スルヲ俟チ再ビ濾過シ蒸發シテ稠厚越幾斯トナシ製スベシ

本品ハ褐色ニシテ水ニハ溷濁シテ溶解ス

最モ注意シテ貯フベシ」トアリ

生理的作用

動物

加剌拔兒豆小量ヲ投シ中毒病ヲ發スルモノハ體ノ後部ヨリ微弱ナル震慄ヲ發シ前部ニ波及シ麻痺モ亦後部ヨリシ內臟空虐,瞳孔收縮,呼吸緩慢不整,輕症ノ轉筋ヲ起シ反射機能及ヒ痛覺ハ消滅スト雖𪜈觸感及ヒ筋ノ感覺ハ減少セズ心摶ハ減少スレ𪜈其收縮力ハ死期ニ至ルマテ增進スト大量ニ與ルトキハ呼吸筋等痿痺肺臟充血シテ終ニ斃ル死後瞳孔ハ直チニ散大シ筋ノ緊脹性ハ久時繼續シ心臟ハ一時間餘蠕動シ腦及ヒ胸部ノ靜脉ハ膨脹スト雖𪜈脊髓脉管系統ハ異狀ナキガ如シ大量ヲ與ヘテ中毒症ヲ發スルモノハ左右ノ心臟,動脉,靜脉變色スト

「エセリン」五分一瓦ヲ取リ狗ニ皮下セシニ體ノ後部ヨリ震慄シ痙攣顯著ニシテ全身ニ波及シ流涎,泡唊,嘔吐,放尿,下利,頻數ニシテ後チ水瀉ス又運動機關ニ注射スレバ麻痺ヲ生ス腦ニ在テハ變狀ナシト雖𪜈脊髓ニ施ストキハ始メ四肢僅ニ轉筋シ次クニ麻痺ヲ以テス神經幹ニ注射スレハ輸入組織ヲ麻痺シ後チ輸出組織ニ波及シ心臟ニ在テハ其作用ヲ停止シ毛細血管ニ施ストキハ膨脹スト Hiller 氏ノ說ニ據レハ加剌拔兒豆ノ顯著ナル作用ハ內臟ニ强直性收縮ヲ生シ其蠕動ヲ減シ後チ停止シ組織ハ青白ト爲リ直腸ハ屎ヲ以テ充塞スルニアラサレバ排泄スルヿナシト云フ

健體

加剌拔兒豆ニ因テ中毒症ヲ發スルモ死ニ至ラザルモノハ皮膚蒼白ヲ呈シ眩暈ヲ發シ衰弱シ視力昏朦,瞳孔收縮,惡心嘔吐,唾液充積,心摶弱疾錯亂,隨意筋ノ作用消滅シテ轉筋スト雖𪜈疼痛ノ徵候ナク括約筋收縮シテ閉尿ス又稀レニハ次ノ症候ヲ顯ハシ斃ルル者アリ其症狀ハ諸筋緩弛衰弱スルヿ甚シク流涎,惡心,嘔吐,脉摶遲緩ニシテ軟弱,沈衰,四肢及ヒ皮膚厥冷而シテ皮膚發汗ス或ハ初發ニ疝痛スルアリト雖𪜈通常ハ胸部不心ノ佗疼痛ノ徵ナク瞳孔收縮,吐瀉劇甚,顏面蒼白,知覺擾亂スルヿ無ク又苦悶セズシテ斃ル其死體ヲ解剖シ撿スレハ心臟充血シテ膨脹シ諸筋軟弱ト爲ルノ佗ハ顯著ナ

ル障害ヲ檢出スルコトナシ時トシテハ胃ノ粘液膜ニ少シク充血ス此等ノ屍体ヨリ考フルモ局所ニ施シ其成蹟ヨリ想像スルモ本藥ハ脊髓中樞ヲ刺衝スルヿ無クシテ其分布スル所ノ諸筋及ヒ神經枝ヲ刺衝スルモノヽ如シト云フ

加剌拔兒豆ハ極メテ小量ニ因テ中毒症ヲ發スルヿ有リ Hiller 氏ノ說ニ據レバ尿液蓄積便通增進，瞳孔收縮，眼球緊張，頭腦鬱憂スルヲ通常トスト

體質虛弱ニシテ貧血性ノ婦人ニ加剌拔兒豆越幾斯四十分ノ一瓦ヲ二日間ニ投シ劇シキ中毒症ヲ發シ心臟壓迫皷動劇甚，上腹困難，脉搏不整疾速，呼吸哮喘，顏面土色ニシテ稍々蒼白ヲ呈スト

本藥製劑ヲ眼球ニ用フレハ瞳孔ノ收縮甚シクシテ十二時間乃至十四時間繼續爾後視力缺乏スルヿ數日間ニシテ朦瞑症ヲ續發ス又其刺衝ハ局部ニ止マリ他ニ波及スルヿ無シ例ヘハ左眼ニ投スレバ左眼ノミヲ刺衝シ對偶眼瞼ニ施セバ上下ノ眼瞼ヲ麻痺スト雖𪜈眼球ニ及フヿナシト

加剌拔兒豆ノ瞳孔ヲ收縮スルハ虹彩ノ血管膨脹スルニ基因ス但シ亞篤魯比涅ノ瞳孔ヲ散大スルハ該血管ノ收縮ニ因ル者トスFalck氏云「フヰソスチグミン」ハ虹彩ノ括約筋ニ衝動藥トシ効驗アルハ實驗上ヨリ著明ナリト

醫治効用 Fraser 氏ノ經驗ニ據レバ加剌拔兒豆ハ鎭靜藥ト爲シ脊髓ニ用ヒテ殊効アリ然レドモ大量ニ用フレバ劇シキ麻痺ヲ發シ過量ニ投ズレバ心臟痿痺シ終ニ斃死ス○點眼ノ一良藥トシ虹彩環狀筋纖維ノ軟弱及ヒ麻痺或ハ縱筋纖維ノ刺衝ニ因テ瞳孔散大スルモノ，外科術ヲ施スニ當テ一時開瞳法ヲ行ヒ施術終テ久シク故位ニ復セザル者等ニ偉効アリ或ハ傷麻窒斯及ヒ諸熱病ニ因リ毛狀筋ノ麻痺スルカ爲メ節度力ヲ失ヒ視力ヲ妨ル症ニ効驗アリ又强直症，虎列剌，癲癇，耽飮譫妄，痿痺，神經痛ニ小量ヲ用ヒテ殊効アリ

番木鼈中毒症別剌敦那中毒症ニ解毒藥ト爲シ殊効アリ故ニ本品中毒症ニハ別剌敦那ヲ與ヘテ解毒ノ効アリト云フ

（以下次號）

日本植物家列傳

山本頼輔

第六　曾盤傳

盤字ハ士考又煥鄉ト云フ通稱ハ占春其先ヲ彥ト云フ明人ナリ嘗テ我國ニ投化シ醫ヲ以テ崎陽ニ居ル庸山ト稱セリ子孫家業ヲ受ケ兼テ通辨ヲ事トス父昌啓始メテ庄內侯ニ仕フ盤職ヲ繼キ雅ト本草ヲ好ム嘗テ贄ヲ平賀源內ニ執リ硏究甚タ到タル後祿ヲ辭シテ徒ヲ聚メテ講授ス會鹿兒島侯成形圖說ヲ編ス盤ヲ聘シ任スルニ總裁ヲ以テス盤同學白尾國柱等ト力ヲ戮セ成形圖說一百卷ヲ成ス天明中幕府醫學藥品會ヲ創ム審定官ヲ設ケテ物品ノ監定ヲ掌トラシム幕府薩藩ニ諭シ盤ヲシテ其事ニ參セシム歲以テ常トナス其著ス皇和蕈譜本草綱目纂疏國史昆虫草木考神農本草會識占春齊魚品介誌百馬皮相考藥圖擷餘等ノ書アリ或云フ質問本草ノ琉球吳繼志ハ假名ニシテ眞ニ其人アルニ非ラス其草木質問ノ說ノ如キハ多ク曾氏ニ手ニ成ルト蓋シ或ハ然ラン天保五年病沒ス年七十有七(諸家人物誌學士會院雜誌)

第七　飯沼慾齋傳

飯沼長順字ハ龍夫小字ハ本平後專吾ト改ム慾齋ハ其號ナリ本姓ハ西村父ヲ新左エ門ト曰フ天明三年六月十日ヲ以テ伊勢國龜山ノ邑ニ生マル穎悟兒タリシ乍嬉戲自カラ群童ニ異ナリ七八歲ノ比ヒ乳媼ニ從ヒ田間ニ徜徉ス從容トシテ是レニ語リテ曰ハク大丈夫苟シクモ爲スアル者曷ゾ寒鄉僻地ニ埋沒シテ碌々瓦礫ト朽死センヤ冀クハ都門ニ遊ビ以テ大名ヲ天下ニ成サント欲ス汝幸ヒニ我ガ爲メニ歸リテ之ヲ父母ニ告ケヨ乳媼深ク其言ヲ奇トシ具サニ之レヲ父母ニ告グ父母笑ッテ省ミズ長順亦更ラニ之レヲ父母ニ請フ父母年少ヲ以テ許サス是ニ於テ遂ニ意ヲ決シテ單身家ヲ出デ美濃(大垣)ニ赴ムキ其叔爺飯沼長意ノ家ニ投シ告クルニ其意ヲ以テシ厚ク自カラ托ス時ニ年甫メテ十二長意是ヲ聞テ其志ヲ壯トシ之レヲ其族飯沼長顯ニ議カリ竟ニ之レニ衣食セシム長順大ニ喜ヒ是ヨリ節ヲ折リテ書ヲ讀ミ專パラ文學ヲ講

ズ比年ニシテ其學大ニ進ム寛政年間植物家小野蘭山幕命ヲ奉シテ藥物ヲ諸洲ニ採集スルヤ途次美濃ニ至タル長順大ニ之レヲ喜ビ蘭山ニ請ヒテ直ニ其門ニ入ル是レヨリ大ニ植物學ヲ修メ常ニ蘭山ニ從ヒテ諸洲ヲ巡行ス是ニ於テ此學俄カニ進ム蘭山甚タ之ヲ嘉賞シ特ニ擧ケテ入幕ノ弟子トナス其後又贄ヲ水谷豐文ノ門ニ執ル發明スル所頗ル多シ弱冠京師ニ遊ビ朝醫福井某ノ門ニ入ル未タ幾ナラズシテ國ニ歸リ長顯ノ女ト婚シ其箕裘ヲ繼キ始メテ名ヲ龍夫ト改ム是ニ於テ醫名俄カニ遠近ニ馳セ患者ノ治ヲ請フ者絡繹門ニ滿ツ時ニ其友吉安三榮ナル者アリ城西垂井驛ニ居ル嘗テ贄ヲ蘭醫江馬蘭齋ノ門ニ執リ亦其術ニ精ハシ三榮龍夫ト友トシ善シ日夕常ニ相往來ス一日三榮龍夫ニ語リテ曰ヘク泰西ノ醫術夐カニ漢家ニ勝サル足下ニシテ苟クモ之レヲ學バヽ其造詣スル所測ルベカラズト龍夫之レヲ聽キテ大ニ悟トル所アリ因ッテ更ラニ蘭法ヲ學バント欲シ妻子ヲ近親ニ托シ家財ヲ鬻キテ其學資ニ充テ飄然笈ヲ負フテ東都ニ出ツ時ニ年二十八贄ヲ津山ノ藩醫宇田川榛齋ノ門ニ執ル榛齋其篤志ニ感ジ更ニ其高第藤井芳亭ニ就キ學バシム芳亭ノ家ハ下谷ニアリテ榛齋ノ家ハ鍛冶橋ニアリ兩家相隔ツル里餘龍夫日夕其間ニ往來シ未タ嘗テ一日ヲ怠ラズ是ヲ以テ修學日淺シト雖トモ學術既ニ其餘蘊ヲ究ム是ニ於テ再タビ國ニ歸ヘリ更ラニ蘭法ヲ唱フ聲名益四境ニ馳ヒ笈ヲ負ヒテ來學スルモノ頗ル多ク從ッテ病客層集亦前日ノ比ニアラス然リ而メ勉學益々篤ク未タ嘗テ手卷ヲ釋テズ年五十家ヲ義弟健介ニ讓ツリ自カラ號シテ慾齋ト云ヒ別業ヲ長松ノ里ニ營ミ居ヲ茲ニ移ッシ泉石ヲ疊ミ花木ヲ植ヘ日ニ其間ニ逍遙シ悠遊自適ス嘗テ西說植學ヲ講シ草木圖說二十卷ヲ著ハシ安政二年始メテ之レヲ世ニ公ニス其書一ニ西說ニ基ツキ花蕋ヲ解剖シLinneus 氏ノ綱目規則ニ從ヒ之レヲ分類ス我邦舊來ノ植物書中最モ完全ナル者ニシテ今ニ至タリ學者猶之レヲ便トス後學伊藤圭介翁嘗テ龍夫ノ事業ヲ評シテ曰ハク夫レ和漢ノ諸說ニ就テ名實ヲ確定シ世ニ偉功アルハ小野蘭山ナリ是ニ繼テ洋說ノ法則ニ基ツキ草木圖說ヲ編輯シ後學ノ指南ニ供セシ

ハ飯沼慾齋ナリ此二人ヤ實ニ我國植學ノ二傑ト稱スベシト蓋シ至評ト云フベシ後年ニ及ヒ幕府翁ノ偉名ヲ聞キ將サニ採用スル所アラントス會々蘭人Sebord氏モ亦幕命ヲ奉シテ江戸ニ至タルニ會ス慾齋大ニ喜ビ與ニ斯學ニ關シ更ニ大ニ研究スル所アラント欲ス會家累ノ關スル所トナリテ果サス爾來ハ靜養心ヲ世外ニ放マニシ未タ曾テ人事ニ關セス慶應元年閏五月五日沒ス歳八十四(宇田川興齋の筆に係かゝる慾齋翁傳記學士會院雜誌)

植物生理學輓近の一大問題

(前號の續)

池野成一郎

ブッサンゴー氏は一器に黒き砂土を盛り毎日アンモニア無き水を注ぎたりしが三ヶ月を經て之を撿するに元來この土壤の窒素の量は百分中0,3132グラムなりしに增して0,3222グラムとはなりぬブ氏之を說明して曰くこれ大氣中の窒素が徐に燃燒して硝酸と爲るに因る(10)と然れども氏はその詳說を出さずその後ベルテロー氏も再び試驗を行ひたるに同じく窒素の增加を明知したり然れども sterilise 乄たる土を用ふれば窒素の增加なく又冬ハ殆んど此の增加を見ず而して窒素の增加はアンモニア或は硝酸鹽類にあらずして有機抱合物にありベルテロー氏謂へらくこれ地中の顯微鏡的菌類の所爲なり(11)とフランク氏も千八百八十九年同一の實驗に從事乄同一の成蹟を得たり(12)

フランク氏は此の理由を明にせん爲め此の砂を顯微鏡下に窺ひたるにその表面には灰白綠色の塊ありて皮を爲せり此の塊は纖維狀の藻より成り

---

(10) Boussingault, l. c.

(11) Berthelot, Fixation directe d'azote atmosphérique libre par certains terrains argileux. *Compt. rend., 1885.*

12) Frank, l. c.

その主なるものは Oscillaria, Ulothrix, Pleurococcus, Chlorococcus にして苔のプロトテマもあり而して試驗前の砂を鏡下に窺ふに此等のものあるをなし是に因て之を觀れば砂土の窒素分の增加せるは正に此の原形質に富める藻類細胞の蛋白質に因るなりベルテロー氏の試驗に於て窒素分の增加したるも之に仝じく元來砂土中にありし萌芽が時を得て發芽しその蛋白質を此の土に給せしに因るなり決してベ氏の云ふ如く地中の顯微鏡的菌類の所爲には非るなり然り而して此の實驗に於て水には窒素分なく土壤にも殆んど無し然るに斯く萌芽が發芽して藻と爲るに至れるは——即ち斯く窒素分の增加あるは——空氣中の遊離窒素を類化したるの外他にその源因あるべくもあらず是に因て之を觀れば遊離窒素を類化したるは藻類の生活せる細胞の所爲なり(13)

フランク氏は尙ほ一層之を明にせん爲植物の痕跡なき砂百八十グラム宛を數多のガラス器に盛り之に蒸餾水を注ぎその口を綿にて密閉し以て有機体の萌芽の入るを防ぐその器の內二個は南向きの窓におき日光に當らしめ一個は黑き紙にて包み以て日光の入るを防ぎ同一の場所に置く一個は蒸氣にて六時間蒸熱し同所に置く此の試驗は四月十五日より八月十八日迄施行す五月一日之を見るに第一第二の器內の砂は諸所に綠色を生じ次の週には綠色の場所增加し又從來の綠色はその大さと色の濃さとを增加したりその藻を撿するに青綠色の Oscillaria, 青綠色の Nostoc, 黃綠色の Nostoc,黃綠色乃至純綠色の Microcystis, Glœocapsa 等なり第三の器即ち黑き紙にて包みたるものには毫も綠色を生ぜず顯微鏡にて窺ふに藻類もバクテリアも無し盖此の器に於て藻類の生ぜざるは光線に當らざるが故なり藻は光線なくんば類化も成長もなし能はざればなり第四の器即ち sterilise したるものには生物の痕跡も見へず扨この器を水を以て洗滌し而してその含有物と

---

(13) Frank, l. c.

洗水とを共に湯煎鍋にて乾燥し之を丁寧に細碎したれば藻の物質と砂とはホモゲンに混交したりその分析的結果左のごとし

試驗前の土は平均百分中 0,0045 の窒素を含めり
第一,第二 „ „ „ 0,0082 „ „
第三 „ „ „ 0,0027 „ „
第四 „ „ „ 0,0037 „ „

是に因て之を觀れば藻類の生じたるものには窒素分增加し然らざるものには是の增加を見ず窒素類化は藻類の所爲たや明々たり

然れども或は云はんこの試驗に於て窒素分の增加せるは藻が大氣中のアンモニアを吸收類化せるに因るならんと然れども此の實驗に於けるがごとき狹隘なる場所には吸收類化せらるゝ程多量のアンモニアあるべき筈なし然れども強いて之を疑ふものあらば次の試驗はその疑團を氷解するに足るこの試驗はブッサンゴー氏の試驗(第一を參觀せよ)と同樣にして即密閉したる場所にアンモニア分無き空氣を通じ之に藻を繁殖せしめ試驗の前後にその土壤を分析し以て窒素の增減を檢するにあり此の試驗は五月廿一日より向ふ百八十日間施行したるが六月十五日には既に砂土に綠色を生じ遂に器の底及び側邊に迄及びぬ而してその分析的結果次のごとし

第一の器の窒素は百分中 0,0059 なり
第二 „ „ „ 0,0065 „
試驗前 „ „ „ 0,0045 „

故にブッサンゴー氏或はベルテロー氏の云へるごとく土地自身には大氣中の窒素を窒素抱合体と爲すの力なし若し外見上斯くのごとく見ゆるものあるもこれたゞ器中に發芽せる下等の藻類が遊離窒素を吸收類化したる結果なり(14)

---

(14) Frank, l. c.
Frank, Ueber die Pilzsymbiose der Leguminosen. *S.-A. aus den Landw. Jahrb., 1890. p. 65.*

フランク氏は尙ほ次のごとき試驗を施行せり幅四十サンチのガラス皿に八千八百グラムの土を盛り甲の皿にはマカヲスムギの種子廿粒乙の器にはダイコンの種子四十粒を播き雨露を防ぐ爲ガラスの屋根を裝置し毎日蒸餾水のみを注ぐ

第一,マカラスムギ　試驗時日百廿日十九株は能く繁茂し五百卅粒の種子を生ずその乾燥目方は 32,52 グラムなり

	土地の窒素分	種子の窒素分
試驗前	0,118%	0,0142 グラム
,,後	0,131%	0,487 ,,

第二,ダイコン　試驗時日百六日廿四株は能く繁茂し廿乃至六十四サンチの高さに達す二百五十四個の長角を生じ乾燥目方は 30,18 グラムなり

	土地の窒素分	種子の窒素分
試驗前	0,118%	0,0033
,,後	0,125%	0,377

是に因て之を觀れば遊離窒素を吸收類化するは啻に荳科植物に限らず禾本科植物及びその他も此の力あり唯それのみならず最下等の藻類すら此の力ありされば**遊離窒素類化は下は下等の藻類より上は高等の植物ょ至るまで凡ろクロヽフヰルを有する植物の有する所ならん**——,,...dass die Assimilation elementaren Stickstoffs über die ganze mit Chlorophyll begabte Pflanzenwelt verbreitet ist...“(15)

窒素類化は植物の種類によりその度を異にすると炭酸瓦斯分解力と同じ盖し炭酸瓦斯を分解し以て澱粉を生ずる作用は植物に因て或はその力の大なるものあり或は小なるものありて决して一定せず窒素類化も又此の理

---

(15) Frank l. c. p. 65.
Frank, Ueber den gegenwärtigen Stand unserer Kenntnisse der Assimilation elementaren Stickstoffs durch die Pflanzen. *Ber. d. deuts. bot. Ges.* 1889.

に外れずその力は總て植物の有する所なれども荳科植物は特に此の力に富む世人の此の力を荳科に限るがごとく唱ふるものは蓋しその力の大いなるに誤られたるならんか

果して然らばブッサンゴー氏の試驗は如何フランク曰くブ氏の試驗に於ては狹き場所に大きくなるべき植物を培養したればその植物は充分に生育せず僅にいぢけたる機關を生ぜるのみ玆に於てか植物は充分その力を伸ばす能はずブ氏の試驗に於て非窒素類化の成蹟を得たるは蓋此の理由に因るならん(16)と

窒素類化が植物体の有する力たるや明なり果して然らば植物の如何なる機關が此の類化を爲すや炭酸分解は主として葉の行ふ所なり窒素の類化は如何とこれ必ず起るべき問題なりとす是に就てはその事未だ充分明ならずと雖も高等植物に於ては蓋し空氣中にある機關殊に綠葉こそ此作用あるものならんフランク氏之を證するに葉に多量のアスパラギンあるをを以てせり(17)千八百九十年フランク氏がオットー氏と協同して爲せる試驗の如きは愈々以て氏の說の當を得たるを證するに足る(18)是等の試驗ハ文章余り煩冗に亘るの恐れあるを以て此に贅せず

今次にフランク氏がヘルリーゲル氏に對する論鋒二ヶ條を摘出して以て此の說を終らんとす

第一　ヘ氏は殆んど窒素無き砂にオホムギ及びマカラスムギを栽培して之に含窒素肥料を與へず或は然らずして硝酸石灰を加へたり然して試驗の終りたる後收獲を分拆したるにその窒素の量は試驗前土壤中にありし窒素及び與へたる窒素量より多きをなくこれより小なりき故にその窒素は空

---

(16) Frank, l.c.

(17) Frank, Ueber die Pilzsymbiose der Leguminosen. p. 81.

(18) — u. Otto, Untersgn. üb. Stickstoff-Assimilation in der Pflanze. *Ber. d. deuts. bot. Ges.* *Bd. VIII.* 1890

氣中より來るべからず土壤中より來りたるに相違なしとこれヘ氏の斷定なり然れども氏は試驗後土壤中の窒素量を檢定せず故に植物が土壤中の硝酸鹽類幾何をこれに仰ぎ幾何を之に殘留したるや不明なり果して然らば如何して氏は植物が試驗後に有する窒素は悉皆土壤の硝酸鹽類より來りたるとを知りたるや又如何にして氏はその窒素の一部ハ大氣中の窒素より來るをなきを證するや(19)

第二　窒素僅に 0,00962% の土壤を sterilise して之に黃色ルーピン六株を植ゑ之を五月一日より八月廿八日迄栽培したるに次の成蹟あり

莖の平均の高さ	莢の數	熟したる種子の數	收獲		種子中の窒素	土地の窒素	
			乾燥目方	窒素		試驗前	試驗後
23,7サンチ	6	2	11,455 グラム	0,114 グラム	0,042 グラム	0,00962 %	0,01808 %

此の試驗に於ては土壤を sterilise したるが故に根に塊を生ぜず (sterilise したる土壤に於て塊の生ぜざるはヘルリーゲル氏之を證せり(20)) 然るに土地の窒素も植物の窒素も增加せるを前表のごとし而して此の窒素分は大氣中より來りたるや明なり即ち根に塊なきも遊離窒素は吸收類化せられたりヘルリーゲル氏曰く荳科の根塊内のバクテリアが此の力ありと然らば根塊なきに此の作用あるは如何(21)

結論

ヘルリーグル氏フランク氏の說の大略は余旣に之を陳べたり尙ほその詳細を知らんとする人は宜しくそれぞれの原書に就て攷究すべし以上云ふごとく兩氏の說ハ大いに異りて未だ孰れか是か孰れが非か定むべからず唯

---

(19) Frank, Ueb. d. gegenwärtigen Stand etc., 1889.

(20) Hellriegel u. Willfarth, l.c.

(21) Frank, Ueb. d. Pilzsymbiose etc., 1890.　p. 62.

余輩は後來の研究が之を明に決斷するの時を待つのみ

又荳科植物の根塊內の有機物に就きてはフランク氏別に說あり詳細を千八百九十年世に公にしたり(22)その所論は又時を得ば本誌に記することあらん

終りに臨んで一言す某學士曰くフランク氏の說は非なりフランク氏は植物家なり化學家に非ず然るに斯く化學上の事に容喙す故に不當なり故にその說非なりとこれ古今の名論なり便利なる論法なり余は直ちにその論法を借用ゑて將にいはんとす曰くヘルリーゲル氏は農學者なり化學者なり然るに植物家の領分たるバクテリアの事に容喙す故に不當なり故にその說非なりと呵々　(終)

雜　錄

獨和對譯植物名彙

(前號ノ續キ)

松村任三

Schwarzwurz.	*Kibana-no-baramonjin.*
Schwelch.	*Gamazumi.*
Schwertel.	*Skōbu; Ayame.*
Schwingel.	*Ushi-no-kegusa.*
Schuh.	*Atsumorisō.*
Schuppenwurz.	*Yama-utsubo.*
Seegras.	*Amamo; moshio-gusa.*
Seifunkraut.	*Sabonsō.*
Sellerie.	*Oranda-mitsuba.*

---

(22) Frank, l.c.

Seide. *Nenashi-kazura.*

Seidenpflanze. *Tō-wata.*

Semde. *Mikazuki-gusa.*

Braune Semde. *Inu-no-hanahige.*

Weisse Semde. *Mikazuki-gusa.*

Senf. *Karashi.*

Senwurz. *Sawa-oguruma.*

Feld Senwurz. *Sawa-oguruma*

Serge. *Kidachi-hakuka.*

Sermel. *Umi-midori.*

Sevenbaum. *Sabina.*

Siebenstern. *Tsumatorisō.*

Siegwurz. *Nāgāru-burūmu Tō-shōbu.*

Silling. *Keibiran.*

Simse. *I; tōshingusa.*

Sinngrün. *Nichi-nichikwa.*

Sitter. *Suzuran, kakiran.*

Sockenblume. *Ikarisō.*

Sode. *Matsuna.*

Sommerwurz. *Hama-utsubo.*

Sonche. *No-geshi.*

Sonnenblume. *Himawari.*

Sonnenthau. *Mōsen-goke.*

Spanische Rohre. *Tō*

Spargel. *Oranda-kijikakushi.*

Spark. *Ōtsumekusa.*

Spattel. *Mantema.*

Spelle. *Ōyama-fusuma.*

Spike. *Lavandel.*

Spierling. *Ko-sumomo.*

Spierstaude. *Kogome-bana.*

Spinat. *Hōrensō.*

Spindelbaum. *Mayumi.*

Spinnling. *Horisō.*

Spleisse. *Sawagikyō.*

Springkraut. *Kitsurifune.*

Stachelbeere. *Suguri.*

Ständling. *Kumokirisō.*

Stechapfel. *Mandarage.*

Stechpalme. *Hiragi-soyogo.*

Steinbrech. *Yukinoshita.*

Steinklee. *Shinagawa-hagi.*

Steinnüsse. *Zōge-juro.*

Steinsame. *Inu-murasaki.*

Stiebmütterchen. *Sanshiki-sumire.*

Storchschnabel. *Fūrosō.*

Strausgras. *Konuka-gusa.*

Streubel. *Yama-utsubo.*

Stuhr. *Hiyu.*

Sturmhut. *Torikabuto.*

Sumach. *Nurude.*

Gift Sumach. *Tsuta-urushi.*

T.

Tabak. *Tabako.*

Tanne. *Momi.*

Tännel. *Mizu-hakobe.*

Tappe. *Kisewata.*

Täschel. *Nazuna.*

Taubnessel. *Hotoke-no-za; odorikosō.*

Tauche. *Asaza.*

Tausendblatt. *Kitsuneran; fusa-mo.*

Thymian. *Hyakurikō.*

Thränengras. *Tō-mugi; hato-mugi.*

Tollkirsche. *Beladona.*

Tapinambur. *Kiku-imo.*

Traganth. *Genge.*

Trapp. *Shirone.*

Trehm. *Mizu-chidori.*

Tremse. *Yaguruma-giku.*

Trespe. *Suzume-no-chahiki.*

Tröpfchen. *Fukujusō.*

Trolblume. *Kimbaisō.*

Tulpe. *Tulip.*

U.

Ulme. *Nire.*

V.

Vegetabilische Elfenbein. *Zōge-juro.*

Veilchen. *Sumire.*

Vermainkraut. *Kanabikisō.*

Vogelbeere. *Miyama-nanakamado.*

W.

Wachholder. *Byakushin.*

Wachtelweizen. *Mamako-na.*

Waid. *Taisei.*

Waldrebe. *Botanzuru.*

Warte. *Kiku-jisa.*

Wasserlinse. *Uki-kusa.*

Wassernuss. *Hishi.*

Wasserschierling. *Doku-zeri.*

Wasserschlauch. *Tanuki-mo.*

Wau. *Reseda.*

Wedel. *Sugina-mo.*

Wegerich. *Ōbako.*

Weichling. *Ushi-hakobe.*

Weide. *Yanagi*

Trauer Weide. *Shidare-yanagi.*

Purpur Weide. *Kawa-yanagi.*

Korb Weide. *Kinu-yanagi.*

Weidenröschen. *Yanagi-ran.*

Weiderich. *Mizo-hagi.*

Wein, wilder. *Amerika-chikin.*

Weissdorn. *Sanzashi.*

Weisswurz. *Amadokoro.*

Weizen. *Ko-mugi.*

Saat Weizen. *Komugi.*

Turkischer Weizen. *Tō-morokoshi.*

Wermuth. *Niga-yomogi.*

Wicke. *Karasu-no-endō.*

Wielandskraut. *Karamatsusō.*

Wier. *Moshiogusa.*

Wiesenknopf. *Waremokō.*

Wiesen-Rispengras. *Nagaha-gusa.*

Winde. *Hirugao.*

Windhalm. *Konuka-gusa.*

Windröschen. *Gajōsō.*

Winke. *Nichi-nichikwa.*

Winterzwiebel. *Negi; Nebuka.*

Wohlverleih. *Kin-kuruma.*

Wolfsmilch. *Tōdai-gusa.*

Wollgras. *Mayuhagi-gusa.*

Wucherblume. *Kiku.*

Weisse Wucherblume. *Furansu-giku.*

Würger. *Funabarasō.*

Wüthrich. *Doku-zeri.*

Y.

Ysop. *Isoppu.*

Z.

Zack. *Misakisō.*

Zanke. *Suzuran.*

Zäunling. *Suikazura.*

Zeiland. *Onishibari.*

Ziest. *Inu-goma.*

Zinken. *Kingyo-mo.*

Zittergras. *Suzugaya.*

Zottel. *Mitsugashiwa.*

Zuckerrohr. *Satō-kibi.*

Zuckerpalme. *Tsugu.*

Zwenke. *Natsu-no-chahikigusa.*

Zweiblatt. *Futaba-ran.*

Zweizahn. *Ta-ukogi.*

Zwirn. *Kuko.*

スモヽノ説

李樹ハ本邦諸國之ヲ栽植シ其果實ヲ採收シテ生食スルハ普ネク世人ノ知ル所ナリ今ヤ果實稔熟シテ或ハ紫赤色ヲ呈シ或ハ黃色ノモノ等アリテ洋食卓上ニ在テハ枇杷實等ト並列シテ食後ノ一菓トナリ或ハ桃實梅實等ト雜居シテ水菓子店頭ニ客ヲ招クト雖𪜈其味ヒ桃實枇杷實ニ劣リ又之ヲ鹽藏シテ食用トスルモ亦梅實ニ劣レリ偶マ夏期惡疫ノ流行スルアレバ李實ヲ顧ル者ナキニ至ル此レ其果實ヲ生食スルニ止マリ其乾燥法ヲ試ミザルニ因ルナルベシ聞ク所ニ據レバ佛蘭西等ニテハ該果實ヲ乾燥シテ年々之レヲ輸出スト

李ハ羅甸名ヲPrunus domestica, L.ト稱シ薔薇科ニ屬スル落葉木ニシテ高サ十五尺乃至二十尺ニ達シ枝杪ヲ繁茂シ刺ヲ有セス若枝ハ其皮部平滑葉ハ卵圓形ニシテ互生シ長サ一寸五六分兩端尖リ邊緣鋸齒ヲ具ヘ表面平滑裏面ハ多少毛茸ヲ帶ビ其柄長ク芽中ニ在テ卷疊ス托葉ハ線狀ニシテ邊毛ヲ有シ速カニ墜落ス春時葉ニ先タチ花ヲ開ク花梗纖長直立毛茸ヲ帶ビ前年ノ枝

頂端ニ一對ヲ生スルヲ通常トス萼ハ杯形ニシテ五裂其截片鈍頂ヲ有シ內面凹陷ス花瓣五片純白圈狀其脚部狹小萼ノ管緣ヨリ生シ展開シ直チニ墜落シ芽中屋瓦狀ヲ爲ス雄蘂二十個餘花瓣ノ內側杯形ナル萼ノ口部ヨリ生シ花絲糸狀ニシテ硬固長サ殆ンド花瓣ニ同ジ葯ハ細小二房ヲ有シ黃色ヲ呈ス實礎ハ細小無柄ニシテ單房ヲ有シ二個ノ卵子ヲ懸生シ上部狹小ト爲リテ花柱ヲ爲シ柱頭屈曲ス果實ハ石果ニシテ形チ卵圓若クハ長圓平滑長サ八分四五厘乃至一寸餘皮部柔軟其色濃紫赤果肉ハ硬固多汁ニシテ其色類綠酸味ヲ有シ稔熟スレバ柔軟甘酸ト爲ル石核ハ卵圓形ニシテ稍々廣濶扁平兩端及ヒ邊緣尖リ平滑硬固果肉ト分離スルヿ容易ナリ種子一個根芽ハ細小ニシテ蛋白質ヲ有セス

本植物ハ變種極メテ多シ Hanbury 氏ノ說ニ據レバ佛國羅亞爾 (Loire) ノ山間殊ニ不爾日爾 (Bourgneil) ニテ大イニ栽培シ果實ヲ產出ス又亞細亞西部山中ニ產スルモノハ P. insititia トス

本植物ヲ歐羅巴ヘ始メテ移植セシハ羅馬人ナリト云フ Pliny 氏ハ當時數種ノ變種アルヿヲ記載セリ又一種 Damascina ト稱スルモノハ「ダマスカス」(Damascus) ヨリ移植ス又日耳曼李ト稱スルモノハP. Oeconomica, Bork. ヨリ變種セシモノニシテ日耳曼ニテ大イニ栽植ス此樹ノ果實ハ佛蘭西種ニ比スレバ稍々大イニシテ皮部厚ク狹長扁平ノ石核ヲ有スト

本邦ニ栽植スル種類モ亦極メテ多ク果實稔熟シテ紫赤色或ハ黃色ヲ呈スルモノアリテ其形狀及ビ大小等ハ枚擧スルニ暇アラズ

乾燥ノ果實ハ Prunus ト稱シ英國印度合衆國藥局方ニハ藥用トス

本品ハ種類多ク坊間ニテ Saint Catherine 及ビ Grengage ト稱スルモノハ上品ニシテ專ラ食料トス藥用ニハ埵甘度兒厲氏ノ Juliana ト稱スル P. domestica ノ變種ヨリ製造ス又佛蘭西ニテ Prunede St. Jutien ト稱シ英國及ヒ合衆國ヘ輸入スルモノハ上等品ニシテ同國南部ニテ製造シ波耳多 (Bordeaux) ヨリ輸出スト

法製造果實ヲ乾固スルニハ交互ニ日光ト熱度ヲ用フ之ヲ大氣中ニ曝露スルニハ籠中ニ撒布シテ日光ヲ受ケシメ火熱ヲ用フルハ竈ニ於テス

下等品ハ佛蘭西ヨリ些少ニシテ日耳曼ヨリ多量ニ產出ス日耳曼ハ Quetschen 或ハ Zwetschen ト稱シ P. domestica, var. prunealina, De Candolle; P. Oeconomica, Borkhausen. ノ果實ヨリ製造スト

性質乾固シタル果實ハ黑色類卵圓形ニシテ長サ八分五厘許皺紋ヲ有シ之ヲ溫湯ニ浸セハ其原形ニ復常ス

本品ハ味ヒ甘酸ニシテ稍々粘液質ヲ有シ微ニ香氣帶ヲヒ其果肉ハ稍々硬固ニシテ褐色ヲ呈ス此果肉ヲ以テ糖果殊ニ緩和性甜藥即チ藥用旃那糖果ヲ製スト

成分　本品ノ主成分ハ未ダ詳明ナラズト雖𪜈他ノ分析上ヨリ考フレバ糖分林檎酸植物膠質蛋白質等ヲ含有スト但シ藥用トシ効驗アル原質ハ未ダ詳ナラズ

醫治効用　強壯,輕瀉,緩和ノ一藥トス然レドモ治療家ハ之ヲ用フルヿ罕レナリ民間ニテハ習慣性便秘ノ一頁藥トシ或ハ小兒炎症等ニ緩下劑ニスレドモ過量ニ用フレバ風氣ヲ釀生シテ腹痛スト

此藥旃那ニ伍用シテ瀉利ノ効アリ故ニ浸劑トシテ用フト

本品ハ生果ニ比スレバ消化シ易シ

上等ノ果實ハ食後ニ其生果ヲ食シ下等ノモノハ醋ヲ製スベシ但シ未熟ノ果實ハ消化シ難シ故ニ之ヲ食ス可カラス　澤田

きばなのせきこくノ產地

牧野氏植物志圖篇第一卷第八集ニ於テ Dendrobium tosaense ナル新學名ヲ命ゼラレタル處ノきばなのせきこくハ土佐國高知ノ產トアリ余ハ同品ヲ伊豆ノ八丈島巡回中同地ノ八丈富士ニ於テ採集セリ　オ．サ．

針ノ生出ハ大氣ノ乾濕ニ係ス

M. A. Lothelier 氏ハへびのぼらず及ビ Cratægus oxyacantha (さんざしノ類) ノ二種植物ニツキ其針ノ生出ヲ早ムルト否ラザルトハ大氣中ノ乾濕ニヨリテ遲速アルヿヲ發見セリ氏ノ研究ニ依レバ以上植物トモニ大氣乾燥ナルトキハ其發生ヲ早メ濕氣多ケレバ發生ヲ遲ム而シテ其內部ノ造構ニ於テモ又異同アリ即チ濕氣大氣中ニ多ケレバ針ノ木質部中ノ導管ノ數少ナシ而メ周環ハ木質ニ變化セズ之ニ反シテ大氣乾燥ナル中ニアリシモノハ木質部ハ連結セル圈ヲナシ周環モ又木質ニ變化セリ

右 Bull. Soc. Bot. France, xxvii, pp. 176—8.

顯微鏡的標品調製用溶藥

顯微鏡用標品ヲ透明トナシ又保存センガ爲メニ用フル處ノ藥品夥多アリ其透明藥ノ普通ナルモノ數個ヲ擧グレバ「オードジヤベル」,「アルコール」「アンモニア」加里溶液水等ナリ又保存藥 (即顯微鏡的標品ヲ永久ニ存スル爲メ玻璃板ニ細微標品若ハ切斷シタルモノヲ藥溶中ニ置キ蓋玻璃ヲ以テ覆ヒ保存セントスル時ニ用フル藥) モ又數多アリ「グリスリン」(俗ニ「リスリン」ト稱ス)「グリスリンジェリー」海藻類ヲ保存ナスニハ明礬粉(六十二.二グレイン)昇汞(〇.二五八グレイン)ヲ純粹海水(二.二七一ニ溶解シ濾シタルモノ即キング氏海藻保存溶藥.カナダバルサム等アリ而メ通常多ク用フル處ノ保存藥ハグリスリン並ニカナダバルサムナリ然レ𪜈カナダバルサム中ニ保存セシニハ丁字油並ニ無水アルコール等ヲ要シ時間ノカヽルノミアラ隨分手數ナリ何ントカ便利ナルモハナキヤト常々心掛ケ居リシニ本年四月發刊ノ Journal of the Royal Microscopical Society ページ 290-291 ニ Cajeput 油ヲ丁字油ニ代用スルノ便利ナルヿヲ說ケリ依テ左ニ譯出シテ參考ニ供ス

ドクトル A. C. Stokes 氏報シテ曰ク近刊ノ Malphighia ニ M. Aser Poli

氏ハ「カナダハルサム」中ニ顯微的標品ヲ透明ニシ且保存スル前ニ丁字油ニ浸スル代用トシテ Cajeput 油ヲ使用スルノ勝レル事ヲ注意セリ　此油ハ稀薄アルコールニ溶スルヲ以テ標品ヲ直チニ移スヿヲ得故ニ無水アルコールヲ用フルヿヲ要セズ氏ハ此油ヲ試ミシニ好結果ヲ得タリ海藻ノ如キ柔軟ナル品モ收縮スルヿ殆トナク充分滿足スルヿヲ得タリ

顯微鏡用標品ヲ製セントシテ未ダ此業ニ熟セザル者少ニテモ手間ヲ省カント望ム者ノ大ニ喜ブ處ナリ即チ「カジエプト」油ヲ使用セバ無水アルコールヲ用フルヿナシ隨テ時間並ビニ入費ヲモ減スベシ此迄ノ如ク標品ヲ丁字油ニ浸セバ「バルサム」ニ移ス前必ズ無水アルコールニ一度ハ移サヾルヲ得ザルノ不便アリ而シテ無水アルコールハ蒸發速ニ且水氣ヲ吸收スルヲ以テ格段ニ製造セル處ノ壜ヲ要ス如此キ不便ヲ去ルハ實ニ快事ナラズヤ

カジプト油ニ浸セシ後ハ直チニ通常ノ「バルサム」又ハ「ベンゾ｜ルバルサム」若クハ「クロヽホームバルサム」ニ移スヿヲ得

ストークス氏ハ以上ポリ氏ノ記載ヲ讀數個此油ニ付キ試驗ヲナセリ氏ハ單ニ數個ノ試驗ヲナセシノミナリ故ニ氏ハ他人ノ充分ニ試驗ヲナシテ其結果ヲ報告セラレンヿヲ望メリソモ此「カジエプト」ナル油ハ芳香ヲ有シ薄綠色ナリ硝子板上置クニ漸次蒸發シ終ニ全ク痕跡ヲ止メザルニ至ル又此油ハ石炭酸ニ熔解ス．古クナリタル「ベンゾールバルサム」ハ硬ク成リテ殆ト壜中ニ乾燥シ使用甚不便ナルモ一度此油ヲ交フレバ柔軟ニナリ使用自在ナリ．稀薄アルコールニ溶解スル事ハポリ氏ノ說ク處ノ如ク甚容易ナリ

通常「カナダバルサム」ヲ用フルニハ「カナダバルサム」ヲ蒸發シ硝子ノ如ク硬クナスニアリ而シテ「ストークス」氏ハ「ガジエプト」油ニ「カナダバルサム」ヲ溶解セシメ其結果ヲ試セシニ大ニ便利ナリシ「バルサム」ノ柔硬ハ使用者ノ適宜ニ製スルヿヲ得レバナリ其ノ乾キ方モ「ベンゾールバルサム」ト同樣速カナリシ

右「カジエプトバルサム」ニ保存セント欲スル標品ハ最始ニ稀薄アルコ

ール ニ適宜ノ間浸シ後「カジエプト」油ニ移シ使用者適宜ノ時間入レ置キテ「カジエプトバルサム」ニ保存スベシ

此油ヲ標品保存ニ用フルハ「ポリ」氏ノ發見ニハアラズ其前ニモ他人ノ書中等ニアリト雖モ一般ニ使用セザリシハ欠典ナリシナリ

附言　カジエプト油（加耶布的油）Oleum cajuput又ハ Oil of Cajeput ハ桃金孃科ニ屬スル Melaleuca Cajuputi ノ葉中ニ含有スル揮發油ナリ

此植物ハ印度ノ或部分，フヒリピン並ニオーストラリア等ニ產スル小樹ニシ披針狀全邊葉ヲ有シ頂生穗狀ノ白花ヲ有シ雄蕊花外ニ出顯ス

「ブランシエー」氏ハ加耶布的油ヲ分析セシニ $C_{10}H_{16}H_2O$ ヨリ成レルヿヲ定メリ

カジエプトハ「マレイ」名 Cayuputi (白樹ノ義) ヨリ出ズ

きばなのあまな

在山形本會員安藤喜一郎氏ヨリ其近傍ニテ採集セラレタル Gagea 屬ノ一種ヲ送ラレ且同氏ハ G. lutea ナランカト思フ由テ附記セラレタリ之レヲ大學所藏ノ標品ニ點校スルニ全ク同氏ノ考ヘラレタル所ニ違ハズ元來此植物ハ是迄本邦ニテ北海道ノミニ產スル樣ニ思ハレタレ𪜈（東京府下戶田原ニ產スル一種ハ果シテ同種ナリヤ未ダ檢セズ）今回同氏ノ探究ニ由リ山形ニモ產スルヿ明トナレリ因テ同氏ニ答フル旁同好ノ諸君ニ報道ス　X

新 刊 書 類

日本植物志圖篇

牧野富太郎氏著日本植物志圖篇第一卷第九集ハ前月五日敬業社ヨリ發兌セリ今回ノ集ニハ左ノ六種ヲ擧ゲリ

1. てばこまんてま (Silene Yancœi) 和名學名トニモ新稱　2. いひぬまむかで) Habenaria Iinumæ) 和名學名トモ新稱　3. みづひきも (Potamogeton

Miduhikimo) 和學兩名トモ新稱　4.「こばのひるむしろ　5. さゝえびも (Potamogeton nipponicus) 和名學名トモニ新稱　6. ひろはのえびも

植物學字彙

題名ノ字彙ハ大久保三郎齋田功太郎及ビ染谷德五郎三氏ノ編纂ニ係ル同書ハ植物學々語及ビ學語ノ略字,附號,西洋植物學家ノ人名ノ略解等ニシテ卷尾四百三十七個ノ圖ヲ付ス

同字彙ハ日本橋區通三丁目丸善商社ヨリ發兌ス定價ハ金貳圓也

實驗植物學入門

本書ハ理科大學敎授松村任三氏ノ著ナリ金港堂ヨリ發兌ス定價金貳拾五錢ナリ

本書ハ論ズル處多カラズ少カラズ植物學ヲ學バント欲スル初學者ハ易論初學者ヲ敎授セント欲スル者ノ必讀スベキ良書ナリ

矢田部氏新著植物書

矢田部良吉氏ガ多年著述ノ計畫アリタル植物書三種アリ. 其第一即チ日本植物圖解ハ頗ル大部ノ書ニシテ,數年ノ後ヲ期シテ成業スル目的ナレドモ,第一册第一號ハ目下印刷中ニテ,本月中ニハ丸善商社ニテ出版スルニ至ルベシ. 此書ハ本邦產ノ諸植物ニ付英和兩文ノ解說ト其精圖トヲ載スルモノニシテ,圖ハ畫工渡邊鍬太郎氏ノ手ニ成ルモノナリ. 第二即チ日本植物編其一部ノ英文草稿既ニ成リ居レドモ,暫ク之ヲ出版セズシテ別ニ簡略ニ邦文ニテ過般來著述中ナルガ,其初部ハ既ニ脫稿シタレバ,近日出版ノ運ビニ至ルベシ. 此書ハ本邦產植物ニシテ是マデ學者ノ知リタルモノハ盡ク網羅シテ遺サヾレバ,如何ナル植物ト雖モ之ニ依テ其名稱及ビ分類上ノ位

置ヲ知ルヲ得ベシ. 學校敎科書及ビ參考書トシテハ一日モ欠ク可ラザル書ナリ. 第三即チ日本羊齒編ハ英文ノ書ニシテ, 精細ニ羊齒類ヲ記述シタルモノナレドモ, 其出版ハ暫ク見合ストノヿナリ

植物學雜誌

第五卷　第五十四號

明治廿四年八月十日

Library of Congress
JUL 1 [illegible]
Smithsonian Dep.

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 54.

August.　1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

生義今般獨逸國ヘ留學被命候ニ付來ル十九日午後四時四十五分新橋發ノ滊車ニテ出發仕候此段知己諸君ヘ告別仕候也

三好學

牧野富太郎君著

日本植物志圖篇

每月五日出版
第十集出版
每集定價金貳拾錢
郵稅貳錢
第一集再版出來（第二集不日再版）以下完備致候

發兌書肆　東京神田裏神保町　敬業社

東洋學藝雜誌　第百十八號

●論說
○血ノ出ル時　醫學士　桂秀馬君
○忠義武道播磨石　文學博士　重野安繹君
○法醫ノ心　醫科大學教授　片山國嘉君
○會社法ノ話　法科大學教授　梅謙次郎君
●雜錄
○中村敬宇翁の逸事（前號の續）　文科大學教授　井上哲次郎君
○郭公　文科大學教授博士　外山正一君
○桶峽懷古　中邨秋香君
●寄書　兩頭蛇に就て　名和靖君●雜報十四件●學會記事六件●質問十件●應問　キンセンクツノ學名　松村任三君○日月ノ引力重力影響スルコニ就テ　で、ま、君○海中植物
●總目錄（第一號全第九十九號）ハ第百號ニアリ
●明治二十四年七月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十二頁木版挿圖數個
●定價　壹册金拾錢　六册前金（郵稅共）五拾四錢　拾貳册前金（郵稅共）壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

動物學雜誌

第三十三號明治廿四年七月十五日發兌

一册金拾錢郵稅金一錢六册前金郵稅共金六十六錢

●蜒蚰ノ解剖　松井敬勝君●鳥雜記（二）　飯島魁君●動物解剖手引草（承前）　岩川友太郎君●對島採集日記（承前）　波江元吉君土田兎四三君●みづくらげ　岸上鎌吉君●理科大學標本日本歌脚類目錄（第七回）　池田作次郎君●遺傳（承前）　石川千代松君◉雜報●島根縣松江市近傍に於て採集せし蝶類●鳥取縣下ノ大山椒魚●北海道鰊漁場ノ概況●飛魚ニ就テ●Limnaea Pervia ニ就テ●東京動物學會記事

發行所　東京神田區裏神保町一番地　敬業社

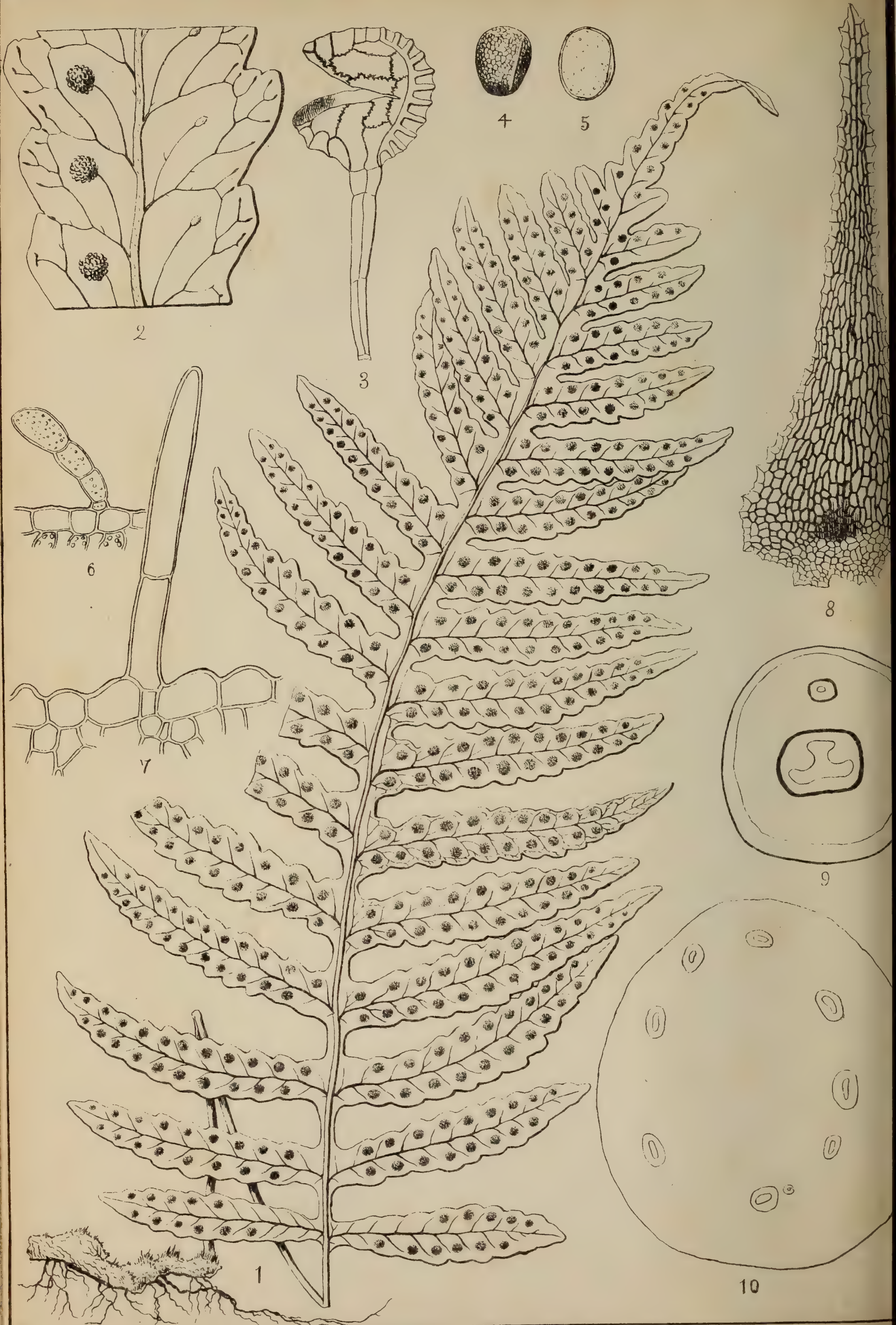
每月一回（十一日）發行

（速記彙報）

正價一册八錢
十二册前金九拾錢
全國無遞送料

速記彙報第卅二册には
筆非世界ノ大勢
各府縣速記術近況一斑
二期帝國議會速記
者採用法、度量衡記號
中村敬宇翁
の逸事、大津餘聞具
他速記事を詳
社會の珍異聞を掲す
◉第一册より缺本なし

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所


2
3
4
5
6
7
8
9
1
10

POLYPODIUM SOMEYÆ, NOV. SP.

植物學雜誌第五卷第五十四號
明治廿四年八月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. August 10, 1891. **No. 54.]**

Ferns of Japan.

No. 4.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Polypodium Someyæ, nov. sp.

Nom. jap. *Myōgi-shida.* メウギシダ

(Plate XXVII.)

Rhizome creeping, clothed with dark-brown scales. Stipes scattered, articulated at the base, naked, slender, about 10 cm. long. Fronds annual, herbaceous, slightly hairy, broadly lanceolate, accuminate, pinnatifid nearly to the rachis, usually 20-25 cm. long, 10-12 cm. broad. Segments usually 15-20 on each side of the rachis, spreading, linear-lanceolate, crenate-serrate, acute, separated by rounded sinuses. Veins proceeding from the base of the midveins of the segments forming a series of narrow areolæ along each side of the rachis; those of the segments forming ample polygonal areolæ on both sides of the midvein, each with a single distinct free included veinlet; ultimate veinlets terminating in somewhat clavate apices near the margins of the segment. Sori globose, in a single series on each side of the midvein, terminal on the included veinlets, about midway between the midvein and margin of the segments.

Specimens of this fern were first collected by Mr. T. Someya in September, 1887, on Mt. Myōgi in the province of Kōzuke. I have not yet seen specimens from any other locality.

The creeping rhizome is 3 to 4 mm. in diameter, densely clothed with somewhat subulate and slender-pointed, dark-brown scales, the largest of which are about 3 mm. long. The roots are tomentose with dark-brown hairs. The transverse section of the rhizome shows oval vascular bundles, about eight in number, arranged in the form of a circle. The stipes are slender, glossy, canaliculate in front, and stramineous when dry; they are about 1.5 mm. in diameter. Their cross-section shows a large vascular bundle in the center and a small one by its side; the large bundle has a group of scalariform vessels in the center in the form of the letter T. The fronds are usually 20 or more cm. long; but small ones are only about 10 cm. long and 5 cm. broad, with about 10 pairs of segments. There are minute jointed hairs on both surfaces of the frond, and those on the upper surface have fewer but longer joints. The segments of the frond are nearly of the same shape and mostly somewhat curved upward, but the upper ones are gradually smaller and pass into the taper-pointed terminal segment. The largest segments, which are below the middle of the frond, are about 7 cm. long and 1.5 cm. broad, The lower segments are separated from each other by a sinus 5 to 10 mm. wide, but the upper ones are close together. The segments are all connected by the base which widens into a wing on each side of the rachis. The free included veinlets, on the apices of which the sori are produced, are formed by the branching near the base and on the anterior side of the alternate veins proceeding from the midvein of the segment. The sori are very regularly arranged and 2 to 4 mm. apart from each other; they are 1.5 to 2 mm. in diameter. The sporangia have rather long pedicels; they are about 0.3 mm. in diameter; the number of the segments of the incomplete annulus is about 10. The spores are subovoid or subellipsoidal, almost transparent, minutely reticulate on the surface, and with a longitudinal band or vitta on the somewhat flattened side. They are about 0.05 mm. long and 0.04 mm. broad.

This species belongs to the section *Goniophlebium*, Blume. Its near relative among Japanese species of *Polypodium* is *P. nipponicum*, Miq., which has densely pubescent fronds. The specimen figured under *Polypodium sp.* in Plate XXV., vol. I., of this magazine is of this species.

Plate XXVII. Fig. 1, whole plant (nat. size.); 2, portion of segment showing the venation and the position of sori (× 3), 3, sporangium (× 88); 4, spore (× 240); 5, optical section of spore (× 240); 6, hair on the midvein of the under surface (× 240); 8, scale from rhizome (× 33); 9, cross-section of the basal portion of stipe (× 26); 10, cross-section of rhizome (× 26).

佐渡植物一班

（五十一號ノ續キ）

大久保三郎

COMMELINACEÆ. 鴨跖草科

Commelina communis *L.*

つゆくさ　羽黒山

JUNCACEÆ. 燈心草科

Juncus communis, *E. Mey. var.* Japonica, *Miq.*

羽黒山

,, Leschenaultii, *J. Gray.* かうがいぜきしやう

羽黒山

Luzula campestris, *DC. var.* capitata, *Miq.* すゞめのひゑ

金北山

CYPERACEÆ. 莎草科

Cyperus pauciformis, *Fr. et Sav.* こゞめがやつり

羽黒山

Carex Thunbergii Steud. あぜすげ

金北山

GRAMINEÆ. 禾本科

Isachne australis, *R. Br.* ちござゝ

羽黒山

Panicum crus-galli, *L.* のびえ

羽黒山

Setaria viridis, *Beauv.* ゑのころぐさ

羽黒山

Spodiopogon Sibiricus, *Trin.* おほあぶらすゝき

金北山

Calamagrostis Sachalinensis, *Fr. Schmidt. var.* しろのがやつり

金北山

" Nipponica, *Fr. et Sav.*

金北山

Melica nutans, *L.* こめがや

金北山

Festuca remotiflora, Steud. きつねがや

羽黒山

LYCOPODIACEÆ. 石松科

Lycopodium clavatum, *L.* ひかげのかづら

金北山

,, Japonicum, *Thunb.* まんねんすぎ

金北山

Selaginella Kraussiana, *A. Br.* くらまごけ

羽黒山

,, Savatieri, *Baker.* たちくらまごけ

金北山

EQUISETACEÆ. 木賊科

Equisetum ramosissimum, *Desf.* いぬどくさ

羽黒山

FILICES. 羊齒科

Adiantum pedatum, *L.* くじやくしだ

羽黒山

Lomaria Nipponica, *Kunze.*

金北山

Asplenium incisum, *Thunb.* とらのをしだ

金北山・羽黒山

,, Nipponicum, *Mett.* いぬわらび

羽黒山

,, Aspidium aculeatum, *Sw.* いので

羽黒山

,, falcatum, *Sw.* やぶそてつ

金北山

,, Oreopteris, *Sw.* おほばしよりま

金北山

,, lacerum, *Sw.* くまわらび

羽黒山

,, erythrosorum, *Eat.* べにしだ

金北山

,, uliginosum, *Kunze.* ひめひらび

羽黒山

Polypodium punctatum, *Thunb.* いはひめわらび

羽黒山

（終リ）

日本藥局方植物篇

（前號之續キ）

會員 澤田駒次郎

第五十三號正誤 (219) ノ第二十一行十四字目綠ノ下色ノ字ヲ脫ス (221) ノ第一行十三字目病ハ疵ノ誤同第二十四行十三字目白ノ下ヲ呈スト雖モノ六字ヲ脫ス

廿二 キノ

羅甸名 Pterocarpus Marsupium, *Roxburgh.*

荳科

印度ニ自生スル落葉喬木ニシテ幹直立其周圍六尺乃至八尺ニ至リ枝杪ヲ繁茂シ皮部ハ褐灰色ニシテ扁片ナル樹痂ト爲リ剝離シ亞皮ハ纖維質ニシテ赤色ヲ呈ス葉ハ奇性翼狀ニシテ互生シ托葉ヲ有セズ葉柄椎ハ纖長圓柱形ニシテ其基部微ニ膨起ス小葉五個乃至七個互生シ其柄矮短厚重葉面卵圓若クハ長卵圓長サ一寸六七分乃至三寸餘鈍頂或ハ凹頂平縁ニシテ平滑其質柔軟其色鮮綠脉管無數横走シテ網脉ト結合ス枝杪ノ頂端及ビ葉腋ヨリ矮短ナル花梗椎ヲ抽キ細小ナル花ヲ著キ緩弛ナル穗狀繖總狀花ヲ綴ル花梗椎及ビ花梗ハ軟毛ヲ帶ビ抱花小葉ハ速落ス蕚ハ鐘狀ニシテ先頂五個ニ缺刻シ其截片鈍頂ヲ有シ外面短毛ヲ帶ブ花冠ハ蛾形ニシテ瓣脚狹小長柄ヲ爲シ邊緣波

動アリテ暗黄色ヲ呈ス旗瓣ハ狹隘ニシテ上方ニ返卷ス翼瓣ハ下方ニ返卷シ小舟瓣ハ其先頂互ニ附着シテ內方ニ彎曲ス十雄蕊互ニ連接シテ一束ヲ爲シ其花絲附着シテ殆ンド半バニ至リ通常筒狀ヲ爲スト雖𪜈間マ二束ヲ爲シ各々五個ノ雄蕊ヨリ成リ葯ハ細小ナリ雌蕊一個細小ニシテ柄ヲ有シ外面毛茸ヲ帶ヒ花柱銳尖花後莢果ヲ結フ球狀ニシテ極メテ扁平柄ヲ有シ幅八分四五厘乃至一寸二三分彎曲シ革質ニシテ硬固軟毛ヲ帶ビ廣濶ナル羊皮紙樣ノ翼ヲ有シ脉胳鮮明ニシテ縐紋アリテ稔熟スルモ分開セズ種子一個腎臟形ニシテ蛋白質ヲ有セズ

本植物ハ往時印度南部及ヒ中部ノ森林中ニ多ク產スト雖𪜈過多ニ之ヲ伐截セシニ因リ現今大樹ヲ目擊スルコト少レナリ又本植物ハ錫蘭ニ自生シ第五六月ノ頃開花スト

藥品　吉納　Kino.

吉納ハ本植物ノ幹ヨリ滲出シテ乾涸セル樹脂ニシテ日本藥局方ニハ藥用トス但シ合衆國藥局方ニハ本植物及ビ他ノ種類ノ樹脂ヲ以テ藥用ニ供ス

吉納ハ本植物屬諸種ノ樹幹ヨリ滲出乾涸セシ樹脂ノ總稱ニシテ其種類多シ故ニ歐米諸國及ビ印度ニテハ通常次ノ名稱ニ因テ區別ス

第一　麻拉拔爾產吉納　Malabar Kino.

本品ハ本植物ノ幹ヨリ滲出乾涸セシ樹脂ニシテ一名東印度產吉納(East Indian Kino) ト稱ス

第二　亞弗利加產吉納　African Kino.

本品ハ一名岡比亞產吉納(Gambia Kino) ト稱シ Pterocarpus erinaceus, Poiret. ノ幹ヨリ滲出乾涸セシモノトス

第三　孟加拉產吉納　Bengal Kino.

本品ハ Butea frondoso, Roxb. 其他部低亞種類ヨリ產出ス故ニ之ヲ部低亞吉納 (Butea Kino) 又部低亞護謨 (Butea gum) ト云フ

第四　濠洲產吉納　Australian Kino.

本品ハ有加利樹ノ種類ヨリ產出ス故ニ之ヲ有加利吉納 (Eucalyptus Kino) ト云フ有加利樹ノ下ニ詳明スベシ

第五　西印度產吉納　West Indian Kino.

本品ハ一名牙買加產吉納 (Jamaica Kino) ト稱シ Coccoloba uvifera, Linn. ヨリ產出スト

第六　南亞米利加產吉納　South American Kino.

本品ハ一名加拉架吉納 (Caracas Kino) ト稱シ其原植物ハ未ダ詳カナラズ Wood, Bache兩氏ノ說ニ據レバ西印度產吉納ト同一ノ植物ヨリ製造スト或云本品ハ Guibourt 氏ノ可侖比亞產吉納ト同物ナリト

此等ノ種類中幹ヨリ滲出乾涸セシ形狀ヨリハ寧ロ越幾斯稠ノモノアリ或ル種類ハ各自殆ンド同一ノ形狀ヲ有ス其醫治効用及ビ化學的作用ハ殆ント同一ナリト云フ然レドモ日本藥局方英國藥局方ニハ麻拉巴爾產吉納ヲ以テ藥用トシ他ノ種類ヲ用ヒス印度藥局方ニテハ部低亞納ヲ以テ藥用ニ供ス

採收　吉納ハ麻拉巴爾森林ヨリ產出ス其採收者ハ些少ノ稅金ヲ納メ政府ノ許可ヲ得テ採收ニ着手ス其方法ハ左ノ如シ

森林中ニ產スル本植物ノ幹ニ截口ヲ施シ其截口ヨリ滲出セル赤色ノ液汁ヲ受器ニ納メ凝固セシメ之ヲ日光ニ曝露シテ乾涸シ然ル後木製ノ器ニ收メテ貯藏ス但シ麻拉巴爾ヨリ產出スル量ハ年々二噸ニ過ギズト

性質　改正日本藥局方ニ云吉納ハ本植物ノ津液ヲ乾涸セルモノニシテ暗赤色不整ノ紛碎シ易キ塊片ヨリ成リ強キ收斂味ヲ有シ其薄片ハ深紅色ヲ呈シ光澤ヲ帶ブ

本品ハ酒精ニハ全ク水ニハ僅ニ溶解ス溫湯ニ溶解スレバ血赤色溷濁ノ液ヲナシ依的兒ニハ溶解セス其水溶液ハ過格魯兒鐵ニ由テ暗綠色ヲ呈ストアリ生藥學ニ云吉納ハ暗褐赤色乃至黑色ノ塊ヲナシ其質堅脆ニシテ破壞シ

易シ其碎片ノ邊緣ハ赤色ニ透映シ摩擦スレバ赤色ノ粉末トナル冷水ニハ僅ニ溶解シ其溶液ハ酸性ヲ呈シ收歛性ノ味ヲ有シ重金屬ノ鹽類格魯謨酸鹽類礦酸類ニ由テ沈澱セラル其新生ノ水溶液ニ硫酸鐵(酸化鐵ヲ含マザル)ノ一小粒ヲ投スルニ初メハ殆ンド染色セサレ𪜈暫時ニシテ綠色ヲ呈ス而シテ其水溶液ニ硫酸鐵ト炭酸加爾叟謨ヲ加フレハ紫色ヲ呈シ直チニ綠色ニ變ス過格魯兒鐵ハ綠色ノ沈澱ヲ呈セシム．吉納ハ酒精ニハ著シク溶解ス依的兒ニ溶解セズ臭氣ナク收歛性ノ味ヲ有ス」トアリ

成分　吉納ノ化學的作用ハ阿仙藥，亞加失亞阿仙藥ニ似テ其主成分ハ「ピロカテシン」(Pyrocatechin)トス其他吉納鞣酸及ヒ吉納赤色素ヲ含有スト

「ピロカテシン」ハ一千八百五十四年 Eissfeldt 氏ハ依的兒ノ作用ニ因テ小量ヲ得タリ又吉納ヲ乾餾スレバ稍々多量ヲ生ス之ヲ安息香酸中ニテ上昇スレバ純粹ノ「ピロカテシン」ヲ得ルナリ

吉納鞣酸 (Kino-tannic acid) ハ一種ノ鞣酸ニシテ阿仙藥鞣酸ト殆ンド均シキ化學的關係ヲ有ス其之ヲ產出スル原因ハ分解ニ因ルモノトス而シテ吉納鞣酸ハ一種分離シ易カラザル混和物ヲ有スルニ因ル未ダ曾テ純粹ノモノヲ得シヿ無シ此混和物ハ吉納紅色素トス一千八百五十三年 Hennig 氏ハ植物膠質抱合物トス

吉納鞣酸水溶液ハ純製亞酸化鐵鹽類ヲ以テ注意シテ中性ニスレバ紺青色ヲ呈シ酸化鐵鹽類ニ因テ濃綠色ト爲リ礦物酸金屬鹽類ヲ以テ沈澱ヲ生ズ

吉納鞣酸溶液ハ亞爾加里ニ因テ暗黑色ヲ呈シ苛性加里ト共ニ熔融スレバ分解シテ Protocatechuic acicl ト「フロヽグルチン」ヲ生スト生藥學ニ云吉納鞣酸 (Kinogerbsäure)ナル一種ノ鞣酸ヲ含有ス此鞣酸ハ苛性加里ト共ニ熔融スレハ「フロヽグルチン」(Phloroglucin $C_6H_3(OH)_3$) ヲ生ス而ノ右ノ諸反應ハ此鞣酸ニ因由スル者トス水ト共ニ永ク煑沸スレハ漸々不溶解性ノ吉納紅色素トナル」トアリ或云吉納水溶液ヲ大氣ニ曝露スレバ赤色ノ沈澱ヲ

生ス但シ常温ニテハ徐々ナリト雖𪜈温度ヲ與フルトキハ速カニ沈澱ス之ヲ吉納紅色素トス」ト

吉納紅色素 ($C_{28}H_{22}O_{11}$) ハ無味不結晶ノ塊ニシテ其酒精溶液ハ弱キ酸性ノ反應ヲ呈ス又「キノウイン」ヲ設氏百三十度(華氏二百六十六度)ニ熱スレバ本品チ生ズト生藥學ニ云又吉納ハ少量ノ焦性阿仙藥 (Brenzcatechin $C_6H_4(OH)_2$) 吉納紅色素 (Kinoroth) 及ヒ「キノウイン」(Kinoïn)チ含有ス而メ吉納ハ諸多ノ關係ニ於テ阿仙藥ニ類スル生藥ナレ𪜈阿仙藥素 (Catechin) ヲ欠如ス」トアリ又一千八百七十九年Etti氏ハ稀鹽酸ト共ニ吉納チ煮沸シ其清澄ノ液チ取リ依的兒ヲ加ヘ振盪スレハ白色ノ結晶ヲ生ス其水溶液ハ鹽化鐵ニ因テ赤色チ呈ス

其他一．三%ノ灰分ヲ生ズ

醫治効用　收歛ノ一藥ニシテ下痢,虚脱ノ失血,婦人崩漏,白帶下チ治シ咽喉緩弛ニ含嗽藥トシ白帶下ニ洗藥トシ効驗アリ又蔓性潰瘍,柔軟性潰瘍等ニハ其局部ニ用ヒテ効アリ或云吉納ハ其性質阿仙藥ニ似テ微ニ收歛性ナリ故ニ其効驗モ亦阿仙藥ニ劣ルト

吉納ハ廉價ニテ購求スルヿチ得バ鞣皮料及ヒ染料トスルニ至ルベシ

廿三　シタン

羅甸名　Pterocarpus Santalinus, *Linn.*

荳　科

印度ニ自生スル喬木ニシテ高サ二十尺乃至二十五尺老樹ハ其幹周圍四尺五寸餘ニ至リ其半バ巧腐シテ空洞チ爲スモノアリ葉ハ奇性翼狀ニシテ互生シ托葉チ有セズ葉柄椎ハ圓柱形ニシテ軟毛チ帶ヒ三個ノ小葉チ有ス下部ノ一對ハ其柄矮短或ハ互生シ或ハ對生狀チ爲ス其葉面ハ廣濶長卵圓形若クハ圈狀チ爲シ底部圓ク先頂凹陷シ長サ一寸五分餘乃至五寸餘革質ニシテ裏面ハ微毛チ帶ビ脉胳微細隆起セズ花ハ吉納ニ似テ細小花冠ハ微ニ捲縮シテ

黄色ヲ呈ス雄蕊十個二束ヲ爲シ各々五個ヨリ成リ花後莢果ヲ結フ形チ吉納實ニ似テ其柄長ク軟毛ヲ帶ビ其翼微ニ皺紋ヲ有シ莢中一個乃至二個ノ種子ヲ有ス

本植物ハ印度南部殊ニ麻打拉薩 (Madlas) 等ノ地ニ產シ廣濶ナル小葉三片ヲ有スルニ因リ吉納ヨリ之ヲ區別スルヿ容易ナリ近來印度南部ニテハ大イニ之ヲ栽植スト

藥品　紫檀　Lignum Santali rubrum.

紫檀ハ本植物ノ幹木ニシテ日本藥局方ニハ藥用トス

性質　紫檀ハ本植物ノ幹及ヒ根ノ木片ニシテ皮部ヲ有セス形チ不整ニシテ或ハ圓ク或ハ稍々三角形ヲ爲シ長サ三尺乃至五尺ノ膚木ニシテ間マ人股大ノモノアリト雖𪜈通常目擊スル所ノモノハ其質緻密ニシテ重堅外面濃赤褐色若クハ黑褐色之ヲ橫斷スレハ其內面濃赤色ヲ呈シ稍々稀薄ナル赤色ノ木理アリ但シ坊間ニテ販賣スルモノハ剉切ノ木片若クハ粗末ニシテ濃赤色ヲ呈ス改正日本藥局方ニ云「紫檀ハ其質緻密堅硬ニシテ暗赤褐色ヲ有シ殆ト臭味ナク水中ニ沈ミテ其ノ水ヲ赤色ニ染メス酒精ニハ樹脂性ノ赤色素ヲ溶出ス」トアリ生藥學ニ云紫檀ハ幹木ニシテ皮及ビ膚木ヲ除去シテ市場ニ出タス. 本品ハ鮮赤色ヲ有シ永ク大氣ニ接觸スルトキハ暗色ヲ呈シ綠色ノ光澤ヲ帶ブルニ至ル其ノ質重ク緻密ナレ𪜈斷割シ易シ其研磨セル橫斷面ヲ見レハ多數ノ脈管アリテ稍々鮮明ナル層ト暗色ノ層ヲ爲シテ交互ニ排列シ其脈管ハ淡色細微ナル波濤樣ノ橫線ニ因テ連結セラル此本來同心姓ナラザル不整ノ輪線ハ甚タ狹キ距離ヲナシテ半徑ノ方向ニ排列シ皮壁ノ著シク厚化セザル木細胞ヨリ成ル. 而シテ紫檀ノ實質ハ兩端尖銳ナル木纖維ヨリ編成セラレ甚タ狹キ髓線中及ヒ木細胞中ニハ著大ナル蓚酸加爾曳謨ノ結晶ヲ猫在シ其結晶ハ「ルーペ」ヲ用ヒサルモ已ニ之ヲ認視スルヿヲ得. 紫檀ト之ニ類似セル木類例之ハ「ロクウード」蘇黃等ト相異ナル點ハ紫檀ニ水ヲ加ヘ煮沸スルモ其水ヲ着色セザルニ在リ

紫檀ハ味及ヒ臭氣ヲ有セズ」トアリ但シ紫檀ハ Red Sandal wood, Red Sanders, Saunders wood ト稱シ錫蘭ヨリ輸出スト

成分　紫檀ハ樹脂樣赤色素ヲ含有ス之ヲ紫檀酸(Santalic acid)ト云ヒ水的列並的底油及ヒ阿利布等ノ脂肪油ニハ溶解セザレ𪜈依的児，酒精，强醋酸亞爾加里ノ水溶液ニハ溶解シ刺賢垤爾油，迷迭香油，丁子油，揮發苦扁桃油ニハ其一部分ヲ溶解ス

紫檀酸ハ華氏二百二度ノ熱度ニ因テ熔融シ亞爾加魯乙度ト抱合シテ不晶形ノ鹽類ヲ生ズ Weidel 氏ハ無色無味ノ結晶物小量ヲ得テ之ニ「サンタール」(Santal)ノ名ヲ附與スト其他單寧ヲ含有ス是レ或ハ吉納鞣酸ト同物ナラント

醫治効用　收歛，止血ノ一藥トシ或ハ下利，血痢等ニ內服幷ニ外敷ス印度ニテハ大イニ之ヲ貴重シ多量ニ用フ又丁幾劑等ノ染色ニ用ヒ日本藥局方ニハ複方刺賢垤爾丁幾ヲ製スルニ用フ

紫檀ハ印度ニテ專ラ染料トシ蘇木ト共ニ絹糸，綿花等ヲ染色シ又其材ハ工匠ノ頗ル貴重スルモノニシテ諸種ノ什器ヲ製造ス(以下次號)

蕎 麥 史

野村彥太郎

蕎麥は植物學上より論するときは蓼科 Polygonaceaeに屬する一年草にして現今本邦に培養するものは其學名を Fagopyrum esculentum と云其葉は長き葉柄を帶ふる槍形或は箭形に近き三角心臟形にして葉鞘は半圓筒形に花は白く恰も花房花に似たる圓錐花なり八個の雄蕊中に腺ありて蜜を蓄へ且つ三個の花柱あり此種の特異なる處ハ胚乳(蛋白体)の中部に胚ありて寬濶なる葉形の子葉によりて兩分し子殼は三角形にして蕚より長きを以てしるしと云へり此れによりて考ふれば本邦にて和名そばと云へるも子殼の

三角なるより導びきしものにやあらん成形圖說卷十七に曾婆とは此實の三稜あるをもていふ也

本草綱目蕎麥の條に結實纍々如羊蹄實有三稜老則烏黑色とあり和名抄に柧稜和名曾婆乃木（說文云柧稜也徐柧曰字書三稜爲稜、又通俗文云四方爲稜八稜爲柧又廣雅云廉柧也、又唐韻云柧稜木也又四方木也又兩都賦觚稜殿角也之を曾婆くくさ讀るが如し）通證に工匠材稜を削去を曾婆を取といふ嶮岨を曾婆と云も此義なりといへり獨逸語にて蕎麥を Buchweizen といへるも此義を採り用ひたるものにして英語の Buckwheat といへるを此義に因れりとあり抑獨逸語にて Buch ョといへるは山毛欅の義にして蕎麥の子殼の褐色なると三角なるは恰も山毛欅の子殼に似たれば斯は名けたるものなりといへり又其語尾に Weizen (獨逸語) 或は wheat (英語)などゝ小麥の義を採り用ゆるは其麪粉の小麥に似よりたると其利用の之に均しきが故なりともあり且つ此の學名に Fagopyrum の希臘語を用ゆるも亦山毛欅と小麥との兩種の字義に基けり漢土にても亦此說なり天工開物に蕎麥實非麥類然以其爲粉療饑傳名爲麥則麥之而已とあり又和名抄に蕎麥和名曾婆牟岐一に云久呂無木とあり古今著聞集などにも「そまむぎ」或は「そば」ともあれば本邦にても當初は「そばむぎ」或は「そまむぎ」などゝ麥の語を呼びしをしるし

抑蕎麥の歐州に入りしは十字軍の後にありと云へり佛蘭西國にては蕎麥を Blé sarrasin といへるは(サラセン)地方より輸出したるが故なりとなり或は又(サラセン)人の始て是班牙國に齎來したる後ち歐州一般に蔓延したるものなりともいへり予は右兩說の如何を判定し難しと雖とも兎まれ角まれ(サラセン)地方よりの傳來に係るをしるし漢土にては何の時代に始まりしか定かには云ひ難しと雖蓋し唐以來の物にやあらん（隨意錄(塚田虎著)食蕎麥不知創於何世蓋唐以來歟白樂天詩云蕎麥、鋪花白本草云蕎麥磨麪如麥然史傳未有所見焉明李如水南翰云蕎麥字韻書無之道藏中藥石爾雅唐元和間梅彪所集諸藥隱名以栗黍蕎麥豆爲五弟）本邦にて蕎麥の人皇紀に見ゆしは續日本書紀を以て始めとすべし同紀に(元正天皇)養老六年七月戊子詔曰今夏無雨稻稼不登宜令天下國司勸課百姓種樹晩禾蕎麥及大小麥藏置儲積以備年荒とあり又續日本後紀に(仁明天皇)承和六年正月七日

令畿內國司勸種蕎麥以其所生土地不論沃瘠收穫只在秋中稻粱之外足爲食也ともあり古今著聞集卷十八に道命阿闍利修行しありきけるにやまうどの物をくはせけるにこれはなにものぞと問ければかしこにひたはへて侍るそまむきこれなりといふをよみ侍る

ひたはへてとりだにすへぬそまむきにしらつきぬべきこゝちこそすれ

此れ等を考ひ合せば當初蕎麥は貴顯の食ふべき物にもあらさるも土地の沃瘠を論ぜず一候七十五日にて實のり凶荒の備には最も便宜なるの故をもて培養したりしものにやあらん（近くは賀來飛霞翁が救荒本草略說（凡例に嘉永三年西國飢饉の時藩命をうけて編纂したる由見ゆ）蕎麥の條に（救飢）苗葉を煠き熟し油鹽に調へ食ふ多く食へば微瀉す其麥は蒸して氣をして餾せしめ烈日中に於て晒し口をして開かしめ舂取り入煮て飯と作し食ひ或は磨して麪となし餅に作り蒸し食ふ皆可なりとあり）其頃は今の蕎麥切やうのものはなかりしにや鹽尻にそば切は諸州にて天目山へ參詣多かりし時所の民參詣の諸人に食を賣けるに米麥すくなかりしゆへそばを煉てはたごとせし其後うどんを學びて今のそば切とはなりしとあるを見れば當初は蕎麥搔などに製して食せしにやあらん夷曲集に蕎麥搔餅出せる座にて玄旨法印薄墨にてつくれる眉のそばかきをよくゝゝみれば三稜となりけりとなり伊勢守貞陸記にもそばのかゆうすゝみともあれば薄墨は蕎麥粥（蕎麥搔或は蕎麥搔餅ともいふ）の別名なるへし王禎が農政全書の蕎麥の條に北方山後諸郡多種治去皮殼磨爲麪焦作煎餅配蒜而食或作湯餅謂之河漏（朝川鼎が善庵隨筆に焦作煎餅配蒜食之はこれ蕎麥燒餅なり或作湯餅謂之河漏はこれ湯餅にならひて湯に入てこれを煮るものにして即蕎麥きりなりとあるは少しく疑はし）成形圖說に大和本草に河漏をもて蕎麥切なりといへるものは誤なり西土にては蕎麥粉も溫飩のごとく湯麪にして卵豕など配劑て喰ふ斯方の蒸蕎麥なしと沖繩人語れり然らば河漏も湯麪なるを知るべし和漢三才圖繪に用蕎麥麪煉熟爲餅以醬油汁食之呼曰蕎麥粥（或云蕎麥粥餅）此所謂河漏是乎ともあり本朝食鑑に用麪入沸湯緩火煉熟如飴和汁食此號蕎搔而劣似蕎麪李時珍所謂作湯餅謂之河漏亦此類乎ともありされば蕎麥搔（蕎麥粥）といひ或は蕎麥搔餅（蕎麥粥餅）といへるももと同一物にして漢土の河漏の類にやあらん扨蕎麥には生と曝の二品あり生蕎麥は今も田舍にありて十分中八九分の蕎麥粉と一二分の溫飩粉とを混合せ

て製するものなり所によりては純粋なる蕎麥粉に雞卵或は薯蕷汁を以てツナギとなし少しも温飩粉をまぜざる地方もありといへり東京などには蕎麥屋の行灯に生蕎麥とはしるしあるも多くは騾蕎麥にて過分の温飩粉と少許の蕎麥粉とを混合せて製さるものなれば蕎麥の滋味なきも其汁の風味殊更宜ければ人々の口に適ふなるべし

先哲叢談に林春勝（林恕一名春勝字子和羅山第三子）が煙草を惡むに答ふる文に近年多嗜蕎麥麵者盛器成堆放飯流歠張口張瞼擁喉更十餘椀果然不厭非消麵蟲則不及此乎蓋是田夫野人之食侯伯之席文雅之筵往々以是爲頓黜流俗之化無奈何之煙酒（タバコ）（本朝食鑑曰韓客呼多波古稱煙酒言吸煙則面熱眼眩如眠酒也）之行既五十餘年蕎麵之行殊三十年共是雖無益於人亦無害者必矣（貝原益軒大和本草曰煙草慶長十年得種於蕃舶）とあり落穗集追加和漢三才圖繪などには煙草は既に天正年中世に弘まりしといへり蓋し原念齋（先哲叢談の著者）が意にて大和本草を引用したりしかはしらねども煙草をもて慶長十年得種於蕃舶をもて始とするやうに記したるは疑はしとまれかくまれ玆には慶長十年を煙草の起りとなすときは全体の文意に叶ふやうに覺ゆこれより推すときは林春勝が此文を草したるは明歷初年の頃なるべしされば此頃にはそば切も盛に行はれしものならん歟談海に明暦三年正月十八九日大火の時深川かし藏に有之買置之米穀其他色々主なし分

一　米十五萬七千貳百三十貳俵

一　大豆一萬八千五十四俵

一　大麥一萬貳千俵

一　小麥一萬五千俵

中略

一　蕎麥千六百八十俵

以下略

右の文などを思ひ合せば蕎麥は五穀の如くには需用なかりしもの此頃世間には多少其需用ありしを推知すべし　(以下次號)

雜錄

本朝三木ノ一ナル御賀玉の木ニ就テ

P. P. 生

昔時盲啞學校ノ設ケナキ頃左モ物知リ顏ニ辻褄ノ合ザル指出口ヲ爲セシ盲人アリ或日日出ノ色ハ美麗ナルモ盲人ニハ視ルヿ能ハザルト云ヒシニ彼盲人答ヘテ云ワレ能ク之ヲ知レリ其色ハ宛モ喇叭ノ音ニ均シト是レ盲人ハ耳ニ聞クモ眼ニ視ルヿノ叶ハザルニ因リカヽル誤謬ノ想像ヲ爲セシナリ

我邦中古ヨリ敷島ノ道ニ志セシ人只其「てにをは」ト口調ニ拘泥シテ其實物ニ心ヲ止メザル人アリシ因リ其弊次第ニ增長シ現今ニ至リ其物ヲ識ラズシテ之ヲ歌ニ詠ズル者アリト何ヲ以テ天神ヲ動カシ鬼神ヲ感セシムルヤ

本朝三木三鳥ハ和歌ノ秘說ト爲シ終ニ何ナル木ヲ指シテ三木トシ何ナル鳥ヲ三鳥ト云フヤ知ルニ由シナカラシム今試ミニ本朝三木ノ一ナルをがたまノ木ニ就キテ諸說ヲ列記シテ參考ニ供ス

茅窓漫錄に云古今集物名に出でたる,「をがたま」の木は,古今傳授にて往古より秘說とせり,傳授に御賀玉木と唱へ來れり,それには譯のある事なり,をがたまの木は榊なりといふより御賀玉と書き傳へり,是は度會社家の據とする神名帳秘書に,興玉社无寶殿以賢木爲神殿也といひ,對馬の藤齋延が說に,諸神本懷といふ書を引きて,八神殿不安御體,唯用賢木也いふにより,御賀玉興玉とおなじ假名に用ひ來れり,興玉社は,伊勢にて猿田彥太神を祭るといへど,社壇のみにて社はなし,二見浦立石の邊に興玉石といふもあり,されどもをがたま御賀玉の假名相違へり,御は大,御など略して於と書くときは,御の假名にて「をがたま」と書くときは,御の假字にあらす,故に御賀玉興玉より牽强して,榊なりといふも妄說なり,一說をがたまは招魂（タマチキ）の義にて,伊勢神宮の禰宜の寶物ををがたまといふ,（キタノ反カ）此等は似よりたる說にて,招は古事記に,遠岐日本紀に,招禱とよ

みて，「をがみ」，なり因りて考ふるに，をがたまの木は，をがみたまの木なり，天武紀に招魂みたまふりとよめり，神を祭る時，御魂をがむ木なり，日本紀に設齋二字叉齋字をがみとよめり，齋むとき用ふる木ハ，玉柏なり，日本紀竟宴の歌に

玉柏をがたまの木の鏡葉に，神のひもろぎそなへつるかな

此歌「をがたま」の明證にて，延喜天慶の頃まで傳へ來りし事と見ゆ，此邦上古は，凡べて飮饌の類皆柏葉を以て器とす，柏を「かしは」と訓するは，堅葉の義にあらず食舗葉（ケシキバ）の省言なり，萬葉集第二

家にあれは笥に盛る飯を草枕，旅にしあれば椎の葉にもる

柏葉のみならず，凡べて本葉を「かしは」といふ，仁徳紀分注に，葉此云箇始婆とあり，鏡葉（カミバ）は神代紀岩窟章の故事をとれり，柏葉にひもろぎを盛りて，神を祝ひをがむなり

萬葉第十一に「神並にひもろぎたてゝ齋へとも，人の心は守りあへぬも，同十二に「たふり等がいたふ三諸の十寸鏡かけてずしのぶ見る人なしに

此玉柏の木，即ち神の御魂を祭りをがむ木なり，顯昭曰，祭神時以柏葉，爲葉盤盛飯菜，（按ずるに，今人酒肴を臺に盛るに，青き木葉などを舗くも，神代よりの遺風なり）共柏葉を後世葉守の神といふは，盛と守と同訓なる故なり，大和物語に

柏木に葉守神ののましけるを，しらでぞ折りし崇りなさるな（此歌，清正集にも載せたり，後撰集には，上句ならの葉の葉守の神さあり）

新古今に．藤原基俊

玉柏しげりにけりな五月雨に，葉守の神のしめはふるまで

枕草紙（木さいへる部）柏木いとをかし，葉守の神のますらむとかしこしと書けり，此事漢土にも聞ゆると見ねて，北史倭國傳に，俗無盤俎，藉以槲葉（槲葉はかしの葉なり）叉此柏葉より事起りて，神武紀の葉盤（ヒラデ）八枚，仁徳紀の御綱葉（ミツナカシハ），持統紀の拍手及び拍八開手打天枚手，大嘗會柏殿も皆ゝゝ此より出つるな

り,（大嘗會柏殿は,兼良公の大嘗會和字抄に委しく見ゆ）坂井兼政が著はせる三貫柏(二卷)に,御綱柏,又三葉柏,又三角柏,俗に御祭葉又俗に葉盛葉.木は桐に似て枝多し,莖赤くして又芽赤し,故に赤芽柏ともいふ,藻鹽草に,伊勢の御裳川の岸に生ふる柏なり.是をとりて神供をもそなへ,又占をもするなり

占をする事.是も神名帳秘書に出てゝ,年の豐凶をしるよし,夫木集の歌祭主輔親の歌,禰宜氏良,寂阿小侍從,神祇伯資茂俊頼などの詠,諸書に多く載せたれども,是にあづからざれば載せず

古事記に.大后爲將豐樂而於採御綱柏,幸行木國といひ,應神紀に聞看豐明之日,於髮長比賣令握大御酒柏とあるも,皆此柏にて,承和大嘗會悠紀方歌に「蓑山に繁に生ひたる玉柏豐の明に逢ふがたのしきとよめるもおなじ,本草綱目（喬木類）に載せたる梓是なり.此木冬は葉落ちて,春新葉を生ず大三四寸,形三尖にして,細鋸齒あり,嫩葉は全く赤くして藜に似たり,長して青色に變ず,故に赤芽柏の名あり,夏の頃枝の末毎に花を發く,黃白色叢生して傘を張る,花後小實を結ぶ,大さ南天燭子のごとく,軟刺あり,初青く後茶褐色にして枯る,其實熟すれば,四つに發けて,中の子椒目のごとく色黑し,西國にては,今も此葉を採りて,御祭葉と名づけ,神供を盛るなり,されども,此「をがたまの木」は,古今傳授といふ事になりて,種々の說あり,一決せず,一說には門松の下に立つる木を「をがたまの」木といふもあり,又岡靈の木といふもあり定家卿の說に,鳥柴をいふともあり貞德自筆の和歌寶樹には 宗祇の切紙を難じて,三箇ならで古今集の奧儀は,歌序の中に多き事なりといへり,又後奈良院享祿元年十一月十六日,古今御傳授,逍遙院申さるゝと,御湯殿の記に見えたり,又外に一種日向國小戶窟の邊より出だす「をがたまの」木あり,是は通雅に見えたる楊桐の種類にて,神代に用ひたる「かしは」とは,大に異なるやうに覺ゆ,先年日向より予が門に來りし書生,一枝を贈る,寫眞しおけり」とあり（但し圖は略す）

古今和歌集切紙之傳三ヶ濃大事御賀玉の木の條にみよしのゝ瀧にう

かひ出るあはをか玉の消と見ゆらんこのをがたまの木といふめる事定家卿のいはく家々にまちゝゝに説を申待れども或人の曰帝王御即位の時三笠山の松の枝を取て長さ三寸ばかりにけつりて御守を朱をもて書て御かしらに掛させまいらせ御即位はてゝ後其御守に種々の御寶のすくれたるをそへて帝の御生年の方にうつめるこれをそいふめるといへり當家の口傳に曰片野の御狩の時鳥を射て奉る鳥柴といふ木をいふめるわきてもみぢの色ある木なりとなり堯孝なともこの説をなん申あへる鳥を射る木なれは魂を置といふ心にもならんかし（私曰是迄二條家の説）今は二條家にもひしうしなひていふ説おほかり然るを東の野州家に殘りて之を相傳す抑岡玉の木とは神明の靈魂を懸奉るといふの儀なりこれを三種の神器に表して大事を傳ふか故秘する事となれり神代のむかし天照大神すさのをの尊の悪行により天の岩戸にこもらせ玉ふ時諸神集まらせ玉ひて榊の上つ枝に玉をかけ中つ枝に鏡をかけ下つ枝にと木綿（日本記には木綿舊事記には劔）かけて神明出給はん事を祈禱して終に大神岩戸を開出玉ひぬ其時神器を懸たる榊の事を御賀玉の木と申なめりいふ心は神明の德にひとしき魂を置といふ儀なり秘すへし抑歌の心は神靈は常住不滅の躰にしあれともまよへる人は瀧の水泡の消るをくそ人の見るらんかく見る人は久方の大神になかく捨られあらかねの黄泉にひたふるにさまよはん事を歎くよめる爰に表裏の説あり歌の表は元躰無明のなす處の煩惱は瀧水の泡のをく生滅をなせとも裏の心には自姓の神魂の常躰不滅なる物そと敎へてよめるなるべし」とあり

以上ノ諸説ニ因レバをがたまの木ハ往古ヨリ秘説トナシ其原植物ハ確乎タル定説ナク諸家想像ヲ以テ假定セリ度會社家ハ神名帳秘書ニ據リ賢木ヲ以テをがたまの木ニ充テリ此賢木ハ所謂榮樹ニテ楊桐ヲ指スニアラズ樒ヲ花榮樹ト云ヒ柃ヲ實榮樹ト稱シ總テ常綠樹ヲ云ヒシモノナリ或云をがたまハ招魂ノ義ニテ伊勢神宮ノ禰宜ノ寶物ヲをがまトイフ此等ハ似ヨリタル説ニテ招ハ古事記ニ遠岐日本紀ニ招禱トヨミテをがみナリ云々或ハ柏葉ニ

ひもろぎヲ盛リテ神チ祝ヒヲガムナリ云々或ハ柏チ「かしは」ト訓スルハ食舗葉ノ省言ナリトアリ叉三貫柏ニ云御綱柏叉三葉柏叉三角柏俗ニ御祭葉叉俗ニ葉盛葉木ハ桐ニ似テ枝多シ莖赤クシテ叉芽赤シ故ニ赤芽柏トモイフトアレハ「アカメガシハ」ヲ以テ「をがたまの」木トセシナリ叉一説ニハ門松ノ下ニ立ツル木ヲ「をがたまの」木トイフトアリ或ハ帝王御即位ノ時三笠山ノ松ノ枝ヲ取テ長サ三寸許ニケヅリテ御守チ朱ヲ以テ書テ御カシラニ掛サセマイラセ御即位ハテヽ後其御守ニ種々ノ御寶ノスグレタルチツヘテ帝ノ御生年ノ方ニウツメルコレチゾイフメルトイヘリ叉二條家ノ口傳ニ曰片野ノ御狩ノ時鳥チ付テ奉チ鳥柴トイフ木チハイフメルワキテ紅葉ノ色アル木ナリトナリ」トアレドモ此鳥柴ノ木ハ何ナル樹ナルヤ知ルニ由ナカラシム或ハ一種日向ノ小戸窟ノ邊ヨリ出ダスをがたまの木アリト此レ黄心樹ナリ然レトモ本植物ハ果シテ往時ノ「をがたまの」木ナルヤ否ヤ今之チ確言スルヿ能ハズ故ニ余ハ本朝三木ノ一ナル「チガタマ」ノ木ハ諸家想像上ノ物ニシテ確乎タル植物チ云フニ非ラストス

漢　防　已

帝國大學植物園ニ漢防已ト稱スル蔓莖植物ヲ長ク栽培ス．大學植物目錄幷ニ植物園目錄ニハ Cocculus diversifolius, *Miq.* トシテ記載シアレドモ，此種ニハ非ルナリ．漢防已ナルモノハ支那及ビ臺灣ニ自生スル植物ニシテ，Stephania tetrandra, *S.* Moore ナリ· C. diversifolius ハ日本本島及ビ九州ニ生ズル種ニシテ，余ハ之ニながはのあをつゞらふぢナル名ヲ命ジテ，尋常ノあをつゞらふぢト區別セリ．　矢田部

むじなも等ノ花候ニ就テ

去月十九日下總ノ眞間邊ヘ採集ニ行キタル人ノ話ニ據レバ該地方ニテ有名ナルむじなも (Aldrovanda vesiculosa, *L.*) ハ夥多アリタレドモ蕾叉ハ實

ヲ有スルモノハ僅ニ二三ヲ得タルノミナリト云フ之ニ因テ見レバ該植物ノ花候ハ多分七八月頃ナルベシ該地ノ沼ニ生ズルひしもどき (Trapella Sinensis, Oliv.) ハ方ニ開花シ居タル由其他あさざ, たぬきも等モ開花シ居タリシト云フ亦國府臺ニテハりようりゆりノ花ヲモ視タリシト云フ　M. W.

蘇鐵ノ花

下總行德ニ住スル人ヨリノ信書中ニ同所ノ中村某ノ園中ニアル蘇鐵ハ去月中旬ヨリ開花シ頗ル壯觀ナリ云々トアリ東京近傍ニテ蘇鉄ノ開花スルハ先ヅ珍ラシキ方ナルベシ

花粉粒ノ數

本年七月發兌ノ Popular Science Monthly 中ニ某氏ノ花粉ニ關スル論文アリ其中花粉粒ノ數ヲ記シタル項ハ面白ク覺ヘタレバ下ニ抄出スヘシ

芍藥 (Paeonia) ニテハ一個ノ花ニ有スル花粉粒ハ三百五十萬個蒲公英 (Dandelion) ニテハ同ク二十五萬個ナリ藤 (Chinese Wistaria) ニテハ胚珠一個ニ對シ七千個ノ花粉粒ヲ生ズル割合ナリト云フ實ニ夥多ナリト謂フベシ又松柏類ノ如キ所謂風媒植物ニアリテハ花粉粒空中ニ散飛シテ彼ノ硫黃雨ヲナスヿハ人ノ能ク知ル所ナリ（昨年上州邊ニテモ桑葉等ノ上ニ硫黃末ノ如キモノ降リ積リタルガ爲ニ人々大ニ心配シタリトノヿヲ其頃ノ新聞紙ニ載セタルヿアリ）Blackley 氏ノ試驗ニテハ地上五百乃至千呎ノ高サニ於テ載物硝子板 (Slide) ノ面ニ千二百個ノ花粉粒ノ附著シタルヿヲ證セリ此試驗ハ其面ヲ被ヒタル硝子板ヲ紙鳶ノ方便ニテ空中ニ送リ高處ニ達シタル時ニ之ヲ露出セシムル如キ方法ヲ用ヒタリト云フ上述ノ諸植物ニ反シ極メテ少量ノ花粉粒ヲ生ズル場合アリ之レハ彼ノ閉鎖花(Cleistogamous flowers) ニハ見ル所ニシテ此等ノ花ハ種々ノ科ニ屬スル六十有餘ノ屬ニ存スルヿ現今知ラレ居ルナリ而シテミヤマカタバミ (Oxalis acetocella) ノ一個ノ閉鎖花中ニ

四百個ノ花粉粒ヲ有シ鳳仙花類ニハ二百五十個ヲ有シ數種ノ菫菜類ニテハ僅ニ一百個ヲ有スルノミナリト云フ此等ノ花ニ於テハ花粉ハ葯中ニ存スル間ニ已ニ花粉管ヲ生ジ以テ雌蕋ニ入リ込マントスルモノナリ云々

ユヅリハノ木髓

ユヅリハノ小枝ヲ縱截スルトキハ其木隨ガ連續シ居ラズ恰モ竹筍ヲ縱テ割リニナシタルトキニ見ル如ク許多ノ地平ノ隔障(Horizontal septa)ヲ形成スルヲ見ルベシサレ𪜈其枝ノ頂端ニ接近セル部ニテハ木髓ハ一体ヲナシテ分離シ居ルヿナシ此ノ如キ隔障ノ狀ヲ木髓ガ呈スルハ主トシテ其周圍ニ存スル組織ノ生長ニ追伴スル能ハズシテ分裂ヲ生ズルニ因ルナルベシ此ノ如キ狀態ハ他ノ植物ニモ多ク存スルナランサレ𪜈余ハユヅリハニ於テ之ヲ見ル折ヲ得タルナリ（勿論竹筍ニ見ル隔障ハユヅリハニ形狀ハ似タルモ其性質ハ異ナリトス

ムラサキツユクサ

ムラサキツユクサ(Tradescantia Virginica)ハ原形質ノ流動及細胞分裂ヲ實驗スルニ好材料ヲ與フルヲ以テ吾人ニ調寶ナル植物ナルガ余ハ去ル五月ノ二十日頃ニ之レガ腊葉ヲ造ラン爲ニ可ナリノ壓力ヲ加ヘ置キタルニ同時ニ壓ヲ加ヘタル他ノ植物ハ乾キ上ガルモ此植物ノミハ容易ニ乾カズ而ノ或ル多肉植物ニ見ル如ク其一節ヨリ芽ヲ發セリ而シテ七月初旬ニ至リタルニ他ノ部分ハヤヽ乾キタルモ芽ヲ發シタ一節間ノミハ依然トシテ生活シ且其芽ハ二寸餘ノ長サニ達シタルモ全ク白色ナリキ因テ此一節間ヲ切リ取リ之ヲ土中ニ移シ芽ノミヲ外ニ出シ置キタルニ漸々變色シ二日ヲ經タル後ニハ全ク緑色ヲ呈シ三寸近クノ長サトナレリサレ𪜈一節間ニ存スル養料ハ固リ限リアルガ故ニ地ニ移シタル後十日程ヲ經テ此植物ハ枯死シタリ余ハ之レニ因テ偶然ニ植物ハ暗處ニ於テハ葉緑素ヲ造ル力ナキヿヲ實驗スルヲ得タ

リ又同時ニ此植物ノ生活力ハ頗ル强キヿチモ知ルナ得タリ

ヤドリキ類ノ寄主 (Host)

ヤドリキ類ノ寄主ハ種々樣々ニシテ一定ノモノナキニ似タリ先ヅ通例ノヤドリキ(Viscum album)ハエノキニ寄生スルヿ最モ多ク又櫻(大學構內ニモアリ)ニモ寄生シ居レリ其他木瓜, 海棠, 梅ニモ寄生シタルモノヲ見タレ圧此三者ヘハ園丁ガ人爲ニ寄生セシメタルモノナリトノヿナリ又昨年大久保三郎君ハ日光霧降ノ瀧ノ近邊ノ原野ニテ栗ニ寄生スルモノチ採集サレタリト云フ次ニヒノキバヤドリキ (V. articulatum)ハイヌツゲ, ツバキ, アセビ, ヒサカキ, サカキ, 等ニ寄生スルヲ見タリ是レハ駿州靜岡近在羽鳥村邊ノ農民ガヒノキニバケタル木ト稱シテ賣リニ來タリタルモノニテ寄主ハ何レモ三四尺ノ高サノ幼樹ナリキ該村ニ赴ムカバ定メテ種々ノ樹木ニ寄生シ居ルヲ知ルヲ得タルナランガ行クヿチ果サザリシ東京ノ上野公園ニモツバキ, サカキ, モチニ寄生シ居レリ又大學標品ニハイヌグスニ著キ居ルモノモアリタル樣ニ覺ヘリ上述ノ如ク此二種ノヤドリキハ其寄主チ撰ムヿナキガ如クナレ圧通例ノヤドリキノ方ハ余ノ閲見スル所ニテハ落葉樹チ撰ブモノヽ如ク殊ニ薔薇科ノ植物ニ寄生シ易キニ似タリ又ヒノキバヤドリキノ方ハ一般ニ常綠樹ヲ撰デ寄生セル如シ又マツグミ (Loranthus Kaempferi) ハ松及樅ニ寄生スルチ見タルノミ此他オホバヤドリキノ寄主ハ如何アランカ余ハ未ダ目擊セズ

以上六件 S. M. 報ズ

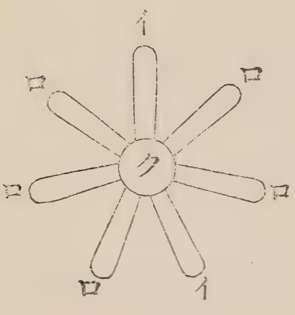
裸子植物

裸子植物即ちソテツの類マツスギの類等は單雙子葉植物とシダ群即ち植物家がいはゆる Pteridophyta (シダ, スギナ, カタヒバの類)との間に位するものなり古流の分類法に因れば植物界を大別して顯花隱花の二部となし雙單子葉植物を顯花部に入れ雙子葉植物の內へ裸子植物を入れたり然れ

ども今はこの分類法漸く癈れ先づ植物界を六群に大別し裸子植物はその一にして之をプテリドフヰタ群と單子葉群との間におくこれ裸子に植物はその中間に位するが故なりその中間に位するとは主として生殖の法にあり而してその事たる顯微鏡的にしてしかも極めて隱微なる事なればこゝに陳ぶる能はずと雖も一寸考へてもさもありさうに見ゆる事なきにしもあらず例へば彼のスギナの實莖たるツクシとマツの雄花とを比較し見よ一見してもその一体の有樣といひ造構といひ實に似寄りたるに非ずや且又ツクシは當時に於てこそ微細なる草なれども古地質學時代に於てはカラシテスなんど呼べるウドの大木ならでツクシの大木もありたれば愈々以てツクシとマツの類似せるを知るべきなり

ヤヘムグラの葉は輪出か將た對生か？

ヤヘムグラその他の Galium はその莖の節々より少くも四枚或は八九枚の葉狀体を生す圖中クは莖なりイロは葉狀体なり或る植物家（即ちグレーベンサム, フッケル）はこのイロを皆葉なりと唱へ之を輪生葉と稱す即同一の節より數多の葉生じて一輪に列するの意なり然れども之を輪生葉と稱するは誤解なり此の圖中二枚即ち例へはイイと記したるもののみが眞の葉にして他は葉の形狀を有する托葉なり故に此の屬の葉は輪生に非ず互生なり圖中イイは葉なりロロは托葉なり右の方は二裂せる托葉左の方は三裂せる托葉なり何故にイイのみが葉にして他は托葉なるかと云ふに凡そ枝は葉の腋より生じ托葉の腋より生せずこれ植物學上の原理なり今ヤヘムグラを能く觀察するに對生せる二枚の葉例へばイイのみの腋には枝を生ずれども他には決して生するとなし故にその二枚のみが葉にして他は葉に非ず托葉なり故に Galium 屬は對生葉を著す或は之を僞輪



生といふ外見上輪生なるが如くしてその實輪生に非さるをいふなり

花序中の花數

アザミのごときヒマワリのごときは素人は之を一個の花なりと心得にて疑はず閑人固より植物學などいへる西洋流の學問を修めたるヿなければ之を知らず或る日知已の植物家と園庭を散步しける際ヒマワリの花の美事に咲けるを見て嗚呼大いなる花かな一花にして斯く數多の瓣あるは實に美しゝと植物家めかして云ひたるに知己の植物家は大に笑て君は未だあれを一の花と思ひ玉ふかあれハ一の花にあらで幾百といふ花の集合せるものなりと云ひ且ヒマワリの花に就き長々しき諸釋をされたりこれにて閑人初めてその理を悟りさればアザミのごときオホバコのごときも一の花にあらず數多の花の集合なるヿを悟りにきそこで閑人植物家に一本きめこめられたる口惜さに貴君はヒマワリは數百の花の集合なりと云はるゝが幾百幾十幾個の集合なりと聞きたれば知已の植物家はそれは知らずと答へたり閑人家に歸り早速ヒマワリ，アザミ等を取り來り元の一花序中の花數を數へたるに左のごとし勿論花の大小により數の多少ありと雖も次の數は當らずと雖も遠からず幾分か近寄たる數なるべし

第一	ヒマワリ		
	舌狀花冠花		44
	管狀花冠花		827
		計	871
第二	ノアザミ		122
第三	アヂサヰ		255
第四	ドクダミ		56
第五	オホバコ		215
第六	フカツメクサ		106

閑人投寄

愛氏隱花植物分類表

隱花植物ノ分類表ニテ現今最モ廣ク我邦ニ知ラレタルハGoebel氏ノ定

メタルモノナルベシト思ハル何トナレバ是レバ先年三好學氏ガ植物自然分科一覽表ニ載セラレタルモノナレバ也此他隱花植物ノ類ヲ示セル著述ナキニ非ルモ多クハ大綱目ヲ擧ルニ止マリ細目ヲ示スモノ稀ナルハ頗ル遺憾ナリトス頃日 Eichler 氏著ノ Syllabus der Vorlesungen über Specielle und Medicinisch pharmaceutische Botanik（昨年發兌第五版）ニ就テ隱花植物ノ一種ノ分類ヲ窺フヲ得タレバ其項目チ本誌ニ掲載スルヿトセリ同書ニハ勿論顯花植物ノ分類チモ示シアレ𪜈是レハ松村敎授ノ著ニ係ル植物分科擧要ニ示スモノニ其体裁チ齊シクスル故ニ之ヲ略ス左ニ掲グル項目中 Reiche チ科ニ當テ其下ニ位スル項(即通常ノ數字ニテ示セルモノ)ヲ族ニ當ツル𪜈ハ略ボ分科擧要ノ綱目ト對比スルヲ得ベシ又各族ノ下ニ記セル屬名ハ其族中ノ諸屬ヲ盡ク擧ゲタリトモ限ラズ

I. Abth. Thallophyta

I. Classe. Algæ.

I. Grappe. Cyanophyceæ.

1. Chroococcaceæ.—Chroococcus, Gloeocapsa, Merismopoedia.

2. Oscillariaceæ.—Oscillaria, Phormidium.

3. Nostocaceæ.—Nostoc, Anabaena, Rivularia, Scytonema, Sirosiphon.

II. Gruppe. Diatomeæ. Melosira, Campdylodiscus, Eunotra, Cymbela Surirella, Cocconeis, Navicula, Pleurosigma.

III. Gruppe. Chlorophyceæ.

I. Reihe: Conjugatæ.

1. Zygnemaceæ.

a) Zygnemaceæ.—Zygogonium, Zygnema, Spirogyra.

b) Mesocarpeæ.—Mesocarpus, Staurospermum.

2. Desmidiaceæ.—Closterium, Tememorus, Cosmarium,

Euastrum, Micrasterius.

II. Reihe: Zoosporeæ.

1. Palmellaceæ.

   a) Pandrineæ.—Chlamydomonas, Gonium, Pandorina, Volvox.

   b) Protococceæ —Characium, Chlorochytrium, Pediastrum, Hydrodictyon.

   c) Pleurococceæ.—Pleuroccus, Gloeoçystis, Palmella, Tetraspora, Hydrurus.

2. Confervacceæ.

   a) Confervoideæ.—Ulothrix, Cladophora, Chætophora, Chroolepus.

   b) Ulvoides.—Ulva, Entomorpha.

3. Siphonaceæ.

   a) Gamosporeæ.–Botrydium, Caulerpa, Bryopsis, Codium, Acetabalaria.

   b) Oosporeæ.—Vaucheria.

4. Oedogoniaceæ.

   a) Sphaeropleeæ.—Sphaeroplea.

   b) Oedogonilæ.—Oedogonium, Bulbochæte.

   c) Coleochaeteæ.—Coleochaete.

III. Reihe: Characeæ—Chara, Nitella.

IV. Gruppe. Phæophyceæ.

1. Phæosporaceæ.

   a) Ectocarpeæ.—Ectocarpus, Pleurocladia.

   b) Sphacelarieæ—Sphacelaria, Cladostephus.

c) Cutlerieæ.—Cutleria, Zonaria.

d) Laminarieæ.—Chorda, Laminaria, Nereocystis, Macrocystis.

2. Fucaceæ.—Fucus, Ozothallia, Himanthalia, Halidrys, Sargassum.

V. Gruppe. Rhodophyceæ.

a. Gymnosporeæ.—Bangia, Lemanea, Batrachospermum, Ceramium, Ptilota.

b. Angiosporeæ.—Furcellaria, Chondrus, Plocamium, Sphærococcus, Delesseria, Corallia, Melobesia.

II. Classe. Fungi.

I. Gruppe. Schizomycetes (Bacterien)

1. Coccaceæ.

2. Bacteriaceæ.

3. Leptotricheæ.

4. Cladotricheæ.

(愛氏附記シテ曰クMyxomycetenハ此邊ニ置クベキモノナレ𪜈現今ハMycetozoaノ名ヲ附シ動物ニ屬スルヲ妥當トス云々)

II. Gruppe. Eumycetes.

I. Reihe: Phycomycetes.

A. Zygosporeæ.

1. Mucoraceæ.—Chætocladium, Piptocephalis, Mortierella.

2. Chytridiaceæ.—Chytridium, Rhizidium, Polyphagus, Zygochytrium, Synchytrium.

3. Entomophthoreæ.—Empusa, Entomophthora.

B. Oosporeæ.

- 4. Peronosporeæ.—Pythium, Cystopus, Peronospora, Phythophthora.
- 5. Saprolegniaceæ.—Saprolegnia, Achlya.

II. Reihe: Ustilagineæ.—Ustilago, Urocystis, Tilletia.

III. Reihe: Aecidiomycetes.—Puccinia, Gymnosporangium, Phragmidium, Melampsora, Cæoma, Peridermium, Aecidium, Endophyllum.

IV. Reihe: Ascomycetes.

- 1. Saccharomycetes.—Saccharomyces.
- 2. Gymnoasci.—Exoascus, Gymnoascus.
- 3. Perispariaceæ.
  - *a*) Erysipheæ.—Erisyphe, Eurotium.
  - *b*) Tuberaceæ.—Penicillium, Tuber, Choiromyces, Elaphomyces.
- 4. Pyrenomycetes.—Sphæria, Xylaria, Claviceps, Cordyces, Valsa, Nectria.
- 5. Discomycetes.—Rhytisma, Hysterium, Ascobolus, Peziza, Geoglossum, Helvella, Morchella.

V. Reihe: Basidiomycetes.

- 1. Tremellineæ.—Tremella, Hirneola.
- 2. Hymenomycetes—Thelephora, Clavaria, Hydnum, Polyporus, Boletus, Marulius; Cantharellus; Agaricus, Coprinus, Russula, Lactarius.
- 3. Gastromycetes.—Scleroderma, Lycoperdon, Geaster, Phallus, Clathrus, Crucibulum, Sphærobolus.

- III. Gruppe. Lichenes.
  - I. Ascolichenes.
    - A. Homoeomerci.
      - 1. Byssacei.—Ephebe.
      - 2. Gelatinosi.
        - *a*) Angiocarpi.—Lichina.
        - *b*) Gymnocarpi.—Collema, Leptogium.
    - B. Heteromerci.
      - 3. Kryoblasti.
        - *a*) Angiocarpi.—Verrucaria, Pertusaria.
        - *b*) Gymnocarpi.—Lecanora, Lecidea, Bæomyces, Graphis.
      - 4. Phylloblasti.
        - *a*) Angiocarpi.—Endocarpon.
        - *b*) Gymnocarpi.—Peltigera, Sticta, Parmelia, Umbilicaria.
      - 5. Thamnoblasti.
        - *a*) Angiocarpi.—Sphærophorus.
        - *b*) Gymnocarpi.—Usnea, Cladonia, Rocella, Ramalina, Cetralia.
  - II. Basidiolichenes.—Cora.
- II. Abth. Bryophyta.
  - I. Gruppe. Hepaticæ.
    - 1. Marchantiaceæ.
      - *a*) Riccieæ.—Riccia.
      - *b*) Marchantieæ.—Marchantia, Fegatella, Lunularia.

2. Anthocerotaceæ.—Anthoceros.
3. Jungermaniaceæ.—Metzgeria, Aneura, Blasia, Frullania, Radula, Trichocolea, Mastigobryum, Jungermannia, Plagiochila, Alicularia.

II. Gruppe. Musci.

1. Sphagnaceæ.—Sphagnum.
2. Andreæace.—Andreæa.
3. Phascaceæ.—Ephemerum, Archidium, Pleuridium, Phascum.
4. Bryaceæ.
    - *a*) Acrocarpi.—Bryum, Mnium, Funaria, Dicranum, Polytrichum, Orthotrichnm, Barbula, Fissidens, Splachnum, Buxaumia.
    - *b*) Pleurocarpi.—Hypnum, Neckera, Thuidium, Fontinalis.

III. Abth. Pteridophyta.

I. Classe. Equisetinæ.

1. Equisetaceæ.—Equisetum.

II. Classe. Lycopodinæ.

1. Lycopodieceæ.—Lycopodium.
2. Psilotaceæ.—Psilotum, Tmesipteris.
3. Selaginellaceæ.—Selaginella.
4. Isoëtaceæ.—Isoëtes.

III. Classe.—Filicinæ.

1. Filices.
    - A. Leptosporangiatæ.
        - *a*) Hymenophyllaceæ.—Hymenophyllum, Trichomanes.
        - *b*) Polypodiaceæ.—Struthiopteris, Pteris, Adiantum, Blechnum, Scolopendrium, Asplenium, Aspidium, Polypodium,

Acrostichum.

c) Cyatheaceæ.—Cyathea, Alscphila.

d) Gleicheniaeæ.—Gleichenia, Mertensia.

e) Schizæa, Aneimia, Lygodium.

f) Osmundaceae.—Osmunda, Todea.

B. Eusporangiatae.

g) Marattiaceae.—Marattia, Angiopteris.

h) Ophioglossaceae.—Ophioglossum, Botrychium.

2. Rhizocarpeae.

a) Marsiliaceae.—Marsilia, Pilularia.

b) Salviniaceae.—Salvinia, Azolla.

Biology といふ語の眞義

Biology は英語にして獨, 佛語の Biologie に相當す本邦にては之を生物學と譯す盖 bio は生 logy は學なるに因る然るに本邦人は biology とは動植物學の總稱なるがごとく心得動物學者植物學者を目して彼は biologistなりといふ謬れりといふべしされば我が帝國大學に於ても數年前迄は動物學植物學を生物學と稱されたるの當時は之を動植物學科と改正せられたり biology といふ語は決して動物學植物學の總稱に非ずして却てその一分科たり動物學には動物的 biology あり植物學には植物的 biology あり盖 biology は生理學の一部とも謂つべくその原因の化學的若しくは物理學的に明解すべからざる生理的現象を論ずる學科なり例へば植物体中に水の運動する所以ネムリグサの眠むる所以等は物理學的に説明すべく植物の類化呼吸等は化學的に説明すべし故にこれ生理學に屬すべくして biology に屬せず然れども花の美なる所以種子の羽毛を具ふる所以等のごときは理學的に化學的にも說明すべからず他の說明法を用ゐざるべからず故に生理學に屬

せずして biology に屬すれば biology と生理學との區別は極めて人爲的なりとす biology の眞義以上のごとし世人乞ふ誤る勿れ

プラントル氏の植物教科書

獨乙ブレスラウ大學教授兼同植物園管理ドクトル, カー, プラントル氏が著にかゝる植物學教科書 Lehrbuch der Botanik は僅か三百五十ページに足らざる書にてはあれど植物形狀學, 解剖學, 生理學, 分類學の梗概を叙述したれば彼の國の高等中學校に於て大に用ゐらるゝとか聞けりさればその初版は一千八百七十四年にありてその後二年を經て即同七十六年之を改正再版しその後三版四版と再版に再版を重ね同八十八年には實にその第七版を出版するに至れり而してその用ゐるゝは啻に氏が本國に限らず外國に於ても之を稱揚すると見えヴァインス氏は之を英語に譯しクポニー氏は之を伊語に譯しデリナーレス氏ハ之をイスパニア語に譯しパーテルベラ及びラスヰムの二氏は之をホンガリア語に譯し齊田染谷の二氏はその生理學の部を皇國語に譯せり實に盛なりといふべし本邦學者の著したる植物教科書多しと雖も果してプラントル氏の書に匹敵する否その百分一だにも相當する良書之ありや否や

ボタニッシェ. セントラルブラット

獨乙國に於て出版する植物雜誌多きその內に Botanische Centralblatt と呼べる雜誌ありこれは每週一回の出版なりこの雜誌は世界各國に於て出版になる植物學上の新書新論文等を批評し或ハその出版を公にするを以て主意となす我が植物學雜誌の論說も右雜誌には時々見ゆ然るに彼の國學術の盛なる此の一雜誌にては到底新書新論を網羅するに足らざるにや右の雜誌社にては本年より別に稍厚き雜誌を一年七回出版し以てその欠を補はんとするに至れり右の雜誌は一册の價二マルクなり

獨乙國書林の植物書目錄

獨乙國ベルリンのフリードレンデル書店は獨,佛,英,伊その他の歐羅巴各國は勿論世界中の新古書籍を賣捌くその書店にては天然理學及び數學の新書目錄を每月十四日目每に出版しその定價をも附記しその目錄の書は何なりともその價にて賣捌くその目錄にも英佛獨語の三種ありその獨乙語のものは各十六ページなり又此の書店にて每年出版する古本目錄その數多き內に植物書目錄のみにても八册ありその目錄の第一は植物學史書　植物學雜書,植物分類書等,第二は植物圖,第三は植物解剖學及ひ生理學書,第四は顯花植物書,第五は隱花植物雜書,隱花植物フロラ,管束隱花植物,苔類,第六は菌類,第七は地衣,藻,輪藻,デスミッド,ジアトム第八は植物地理學及ひフロラなりその目錄には世界各國古今の書を網羅し賣捌代價を附記す目錄第三(去年の分)のみにてもページの數八十二,一ページの行數六十二,文字は極めて細微なればその目錄の書のみにてもその數一千五六百册となるべしこれは第三の目錄の話しその他第一,二,四,五,六,七の目錄も又皆斯くのごとしさればこの書店にては植物書のみにても幾萬といふ數なり之を本邦第一の書店丸善が每月薄き月報を出版し植物なれ動物なれ,文學なれリードルなれ森羅萬象を網羅したる百ページ內外の英書目錄を每年一回出版するに比すれば果して如何

新　刊　書

牧野富太郎氏著日本植物志圖篇第一卷第十集ハ七月十三日ニ發行セリ本篇ハ前篇ト同ジク六種ヲ出セリ而〆新學名ヲ下セシモノ二品アリ一ハ江さきさいぜり Apodicarpum Ikenoi トイヒ 一ハ こもちまんねんぐさ Sedum bulbiferum トイフ

質　問

問 Tree primrose ト申ス植物ハ如何ナルモノニヤ且功用アラバ雜誌ニテ御答下サレタシ　さ，き，

答 Tree primrose 一名 Evening primrose 又 German rampion ハ和名ヲまつよひぐさトイフ柳葉菜科ニ屬スル二年生草本ナリ此草本ハ元來外國産ナリ然レ𪜈今ハ固有植物ノ如ク處々ノ河原ニ生ズ其充分ニ生育セシモノハ高サ三四尺ニ達ス葉ハ卵形披針狀ニシテ莖ハ有毛ナリ，花大ニシテ黃色無柄，香氣アリ，果實ハ長橢圓ニシテ四角ナリ

功用　根ハ食用トナスヲ得ル由洋書ニ載セリ其食用トナス根ヲ作ルニハ四月ニ種子ヲ肥ヘタル陰地ニ蒔クベシ九月ニ至レバ食用ニ供スルヲ得充分生長セシモノハ一尺內外ニ達ス其肉白色ナリ　お，さ，

植物學雜誌

第五卷　第五十五號

明治廿四年九月十日

JUL 16 1919
532111

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V. No. 55.

September. 1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

東京人類學會雜誌

●本誌定價一冊金拾錢、郵稅一錢
六冊前金五十五錢、郵稅六錢

明治二十四年七月
第六卷
第六十四號

目錄

◎記事

○論說及報告

支那の横穴住居（圖入）　理學士坪井正五郎君
沖繩縣諸島結繩記標考（續キ）（圖入）　田代安定君
ロンドン通信（圖入）　理學士坪井正五郎君
我が書棚　坪井正五郎君
羽後國飽海郡田澤村高畑石世遺跡（圖入）　羽柴雄輔君
鼻飲ノ風習　羽柴雄輔君
陸奥國東津輕郡石器時代の遺跡（圖入）　角田猛彥君
北海道美國に古き跡尋るの記（圖入）　吉田東伍君
耳のある古墳土器（圖入）　小川敬養君
坪井 羽柴兩氏の參考に供す（圖入）　新國西賞君

○雜報 東京駿河臺鈴木町の貝塚、土佐國安喜郡の銅鐸、同國吾川郡の銅鉾、阿波の輪拔、萬國東洋學會、正誤

發賣元 東京市本郷六丁目 **哲學書院**

植物腊葉

但標品一個代價金拾錢宛遞送料ハ別ニ申受ク

右植物標品腊葉ハ完全無缺ニシテ奇品多シ望ノ御方ハ熟覽ノ上御求メアレ目錄ヲ望ル、方ハ郵券二錢御投ジアラバ呈スベシ

東京市本郷區眞砂町
三十番地佐藤俊方
大倉幸太郎

毎月一回（十一日）發行

速記彙報

正價一冊八錢
十二冊前金九拾錢
全國無遞送料

◎貴衆兩院ノ記事多シ◎

帝國議會速記者採用法如何ハ目下速記社會ノ一大問題タリ速記彙報ハ九月十一日發行第三十四冊ニ採用法ニ關スル論說其他批評雜錄新報等ヲ掲グ八篇

◎初冊ヨリ缺本ナシ◎

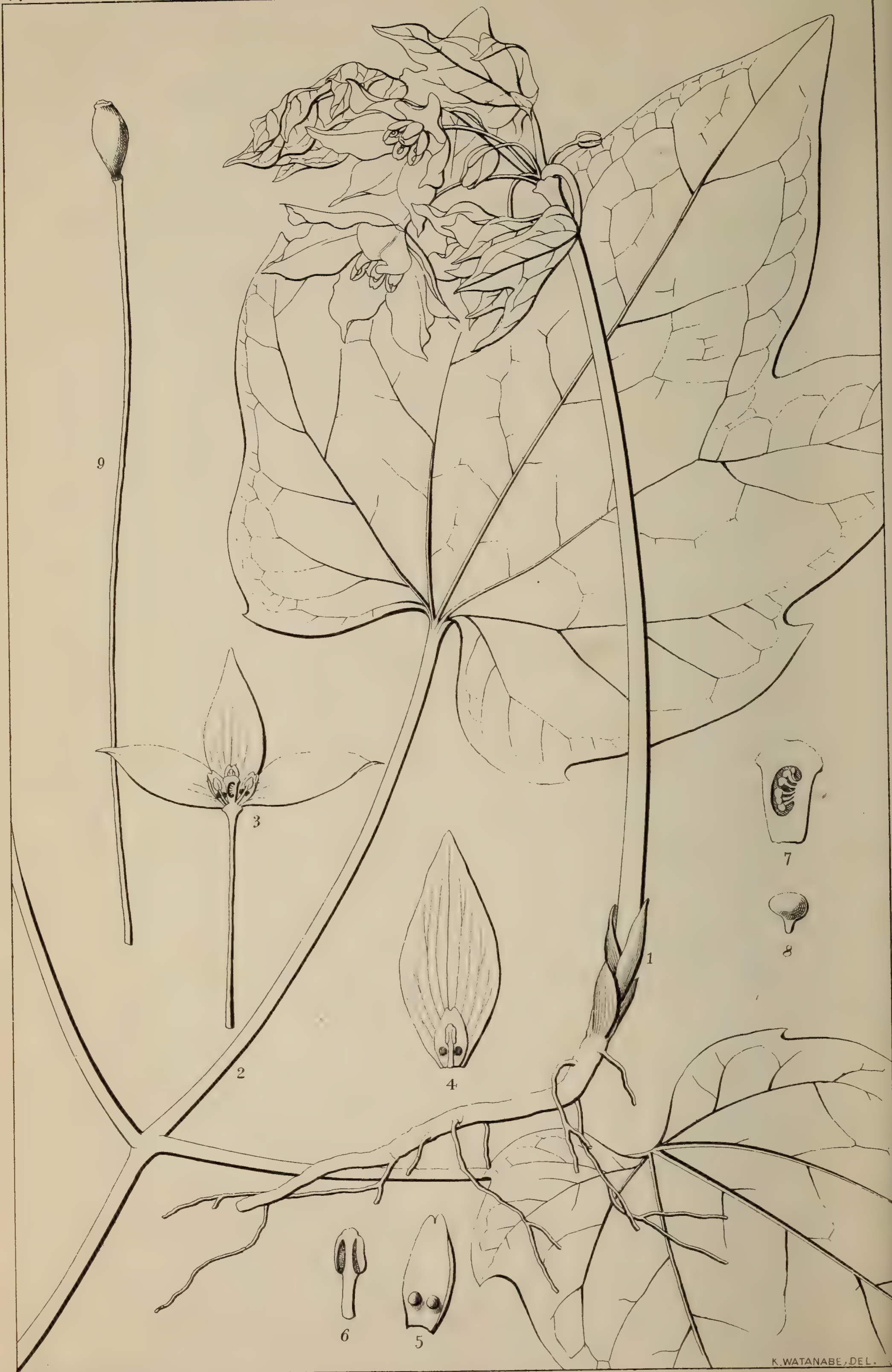
東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

動物學雜誌

第三拾四號明治廿四年八月十五日發兌
壹冊十錢郵稅一錢六冊前金郵稅共六十六錢

●論說○相州三浦三崎近傍に於て獲たるHydroidea.（承前）稻葉昌丸君○鳥雜記（三）（承前）飯島魁君○東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ（承前）波江元吉君○動物解剖手引草（鳥類ノ部）（承前）岩川友太郎君○理科大學標本日本頭脚類目錄（第八回）池田作二郎君●雜錄○明治二十四年夏期三崎帝國大學臨海實驗場ニ在リテ研究セル模樣ヲ報シ併セテ地方ノ同好諸君ニ一言ス○相州三浦三崎採集動物○北海道沿海產板鰓類○北海道ニ新種ノ蝶○おひるトかもノ躰重ト腦量トノ割○動物の群体○とんぼトか○Hydroxylamin收縮組織ニ對スル麻痺力ニ就キ○遺傳（承前）

發行所 東京神田裏神保町 **敬業社**


9
3
1
7
8
2
4
6
5
K.WATANABE, DEL.

東京日本橋區呉服町東京刷版社印行

YATABEA JAPONICA, MAXIM.
TOGAKUSHI—SHŌMA. トガクシシヨウマ.

植物學雜誌第五卷第五十五號
明治廿四年九月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. September 10, 1891. No. 55.]

New or Little Known Plants of Japan.

No. 10.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Yatabea japonica, Maxim.

Berberideæ.

(Plate XXVIII.)

Yatabea, Maxim.

Flower-bud with 3, small, green, caducous bractlets. Sepals 6 in 2 rows, petaloid, oblong-lanceolate or ovate-lanceolate, acute or acuminate. Petals 6, imbricate, small, oblong, concave, emarginate, biglandulose near the base. Stamens 6, free, opposite the petals; anthers oblong, opening by 2 valves hinged at the top. Qvary 1, somewhat obconical, 1-celled; stigma sessile, peltate, convex; ovules numerous in several series, attached to a thick parietal placenta, amphitropous. Berry ovoid; seeds numerous, oblong.—A Perennial herb with creeping rhizomes. Stem 2--leaved. Leaves ternate, with long petioles; leaflets palmately veined, lobed. Flowers on terminal peduncles, nodding, pale-lilac.

Yatabea Japonica, Maxim.

Nom. jap. *Togakushi shōma.* トガクシショウマ.

Yatabea japonica, Miximowicz, in litt, Mar. 8, 1888.—*Podophyllum* *japonicum*, Ito, in Mél. Biol., vol. xii., P. 417.—*Ranzania japonica*, Ito, in Journ. Bot., vol. xvii., P. 302.

Rhizome long-creeping. Stem smooth, about 1 foot high, with a few ovate scales at the base. Leaves usually 2, at the extremity of the stem, sometimes with a third simple leaf between; petioles 3-6 inches long; partial petioles 2-4 inches long; leaflets 3, suborbicular or broadly ovate, acutely 2-5-lobed, entire, smooth, green above, glaucescent below, cordate at the base, the central one symmetrical, the lateral oblique, 4-6 inches long and broad. Flowers appearing with the leaves, long-peduncled, 3-6, from the top of the stem and between the leaves, 1-1½ inches across; peduncles ½-2 inches long. Sepals pale-lilac, about ½ inch long. Petals slightly greenish, 3 times shorter than the sepals; the glands at the base of each petal round, orange-colored. Stamens shorter than the petals; filaments thick, about as long as the anthers, orange-colored; anthers somewhat apiculate. Ovules long-stalked. Berries about ½ inch long; peduncles often as much as 6 inches long.—Fr. July.

I collected this plant in fruit in July, 1884, in the Togakushi mountain in the province of Shinano. It has been since kept in the Botanic Garden of the Imperial University. It may flower in May or June in its natural habitat, though it flowers in April in the Botanic Garden at Tōkyō.

Specimens of this plant were sent to M. Maximowicz from the Imperial University in July, 1887, together with colored figures of the different parts of the plant, especially of the floral organs, and with a note and description by Mr. Ōkubo. His note was substantially as follows:—"The plant called

Podophyllum japonicum by Mr. Itō is not, I believe, a *Podophyllum*, but a new genus of the *Berberideæ*. It differs from *Podophyllum* in the leaves not being peltate; in having two large glands at the base of each petal; in the dehiscence of the anthers, which unlike *Podophyllum*, discharge pollen by the valves opening from below upward; and in having very long peduncles. The plant was collected for the first time by Prof. Yatabe many years ago in some part of the province of Shinano. It was again collected by him in the Togakushi mountain, Shinano, on July 11, 1884. The living specimens collected at these two different times did not have flowers, but flowered after being planted in the Botanic Garden of the Imperial University." M. Maximowicz gave the plant the present name, and the specimens in the herbarium of the Imperial University were labeled accordingly.

M. Maximowicz says in his letter that the present genus is to be placed between *Caulophyllum* and *Diphylleia*.

Plate XXVIII. Fig. 1, Plant in flower; 2, portion of full-grown leaf; 3, vertical section of flower; 4, sepal, petal and stamen; 5, petal with two globose glands; 6, ventral view of stamen; 7, vertical section of ovary; 8, ovule; 9, fruit with long peduncle:—*all except 1, 2 and 9 enlarged.*

No. 11.

Berberis sikokiana, nov. sp.

Nom. jap. *Shikoku-megi.* シコクメギ.

The Japanese species of Berberis already known are four in all; namely, B. Thunbergii, DC. (Megi); B. Tschonoskiana, Regel (Miyama-megi); B. vulgaris, L. (Hebinoborazu); B. Sieboldi, Miq. (Marumi-no-hebinoborazu).

Besides these, B. nepalensis, Spreng. (Hiragi-nanten), and B. Fortunei, Lindl. (Hosoba-hiragi-nanten) are seen in gardens; but they are Chinese species and not indigenous to Japan. The specimens I collected on Mt. Yahazu in the province of Tosa, on August 8, 1888, are different from all those mentioned above. As the specimens have fruit only and no flowers, it is impossible to determine accurately their characters; but they are, I think, of a new species. They are allied to B. Thunbergii; but the branches of the latter have prominent ridges, while those of the present species are terete. The leaves of the latter are also much smaller. The terete branches are like those of B. Tschonoskiana, but the latter has no spines, which is not the case with the present species. I have, however, not yet seen specimens of B. Tschonoskiana. The following is a brief and very incomplete description of the present species:—

Branches terete. Leaves broadly ovate or obovate, entire, obtuse at the apex, narrowed at the base into winged petioles, smooth, pale on the under surface, 1-3 inches long including the petiole, 4 lines to 1 inch broad; petioles in large leaves about ½ inch long, in small leaves scarcely 1 line long. Spines simple, 3-6 lines long. Racemes several-flowered. Berries oblong-obovate, 3 lines long; pedicels 6-10 lines long.

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員　澤田駒次郎

第五十四號正誤(251)ノ第廿五行五字目 frondoso ハ frondosa ノ誤(252)ノ第十四行二十七字目亞ノ字ノ下吉ノ字ヲ脫ス (256) ノ第八行九字目ハ Weidel ナリ (256) ノ第十五行三字目匹ハ匠ノ誤

廿四 トルイフエラ

羅甸名 Toluifera Pereiræ, Paill.

荳科

亞米利加ニ自生スル喬木ニシテ高サ五十尺其幹地ヲ抽クヿ六尺乃至丈餘ニ至リ枝杪ヲ生ズ若枝ノ皮部ハ平滑ニシテ紫灰色ヲ呈シ白色ノ斑點ヲ帶ブ葉ハ奇性翼狀ニシテ互生シ托葉ヲ有セス長リ五六寸小葉六片乃至十片其柄短ク互生シ其長サ一寸六七分乃至二寸三分餘幅八分強乃至一寸四五分形ヲ長卵圓若クハ類倒卵圓ニシテ底部圓ク先頂尖リ微ニ糾交屈曲シ平縁ニシテ襞積ヲ有シ革質ニシテ脉管微細主脉隆起シ球形若クハ長圓形ノ腺點ヲ散布ス該葉ヲ日光ニ對照シ撿スレハ容易ク之ヲ認メ得ルナリ葉柄矮短褐色ノ毛茸ヲ密生シ殊ニ嫩葉ニ多シ枝杪ノ頂端ヨリ花梗椎ヲ抽クヿ五六寸直立シ數花聚集シテ緩弛ナル總狀花ヲ綴ル花梗ハ纖小ニシテ長サ三分餘基部ニ抱花小葉ヲ有シ花梗椎花梗及ヒ抱花小葉ハ軟毛ヲ密生ス萼ハ杯形ニシテ廣濶先頂五個ノ鈍齒ヲ有シ外面軟毛ヲ帶ブ花瓣五片萼ノ殆ンド脚部ヨリ生シ類白色ヲ呈ス旗瓣ハ三角狀ニ突起直立シ上端圓ク脉胳鮮明其下部狹隘柄狀ヲ爲ス翼瓣及ビ小舟瓣ハ線樣披鍼形ニシテ先頂尖リ皺紋ヲ有ス雄蕊十個萼ノ脚部ヨリ生シ花絲纖長其葯長圓形ニシテ二房ヲ有シ殆ンド花絲ト其長サヲ均フシテ內向ス而シテ花絲ノ先頂鋭尖ニシテ葯ヲ超過ス雌蕊一個實礎ハ扁平平滑ニシテ矮短一個或ハ二個ノ卵子ヲ有シ花柱彎曲シテ柱頭尖レリ果實ハ長サ二寸四分餘乃至三寸七分餘其末端ニ於テ一個ノ種子房ヲ有シ稔熟スルモ分裂セズ而シテ此果實大約四分餘ハ圓筒形ニシテ上下兩端ハ其側方扁平ト爲リ其腹部ニ於テ厚重紙質ノ翼ヲ有シ扁平硬固ニシテ末端ニ至リ狹隘ド爲リ種子房ヲ圍繞シ花柱ノ部位ニ至ル莢ノ外線ハ多少彎曲シ暗橙褐色ヲ呈ス子殼ハ緩弛海綿質ニシテ外面皺紋ヲ有シ種子房ノ兩側ニ於テ各一個ノ大イナル貯藏窩(reservoirs)ヲ具ヘ液体ノ樹脂ヲ貯蓄ス種子ハ腎臟形ニシテ細小ナル根芽ト大イナル平滑凸圓形ノ子葉ヲ具ヘ蛋白質ヲ有セス

本植物ハ桑薩爾瓦多耳ノ薩爾曾奈登沿岸森林中ニ自生ス此等ノ土地ニ於テ本植物ヨリ百露拔爾撒謨ヲ採集ス英國博物館貯藏ノ標品ニシテ Hanbury氏ニ因テ Myroxylon Pereiræ ノ名稱ヲ附與セシモノハ哥爾多瓦,墨西哥近傍ニ產シ一千八百六十五年ニ Finck 氏之ヲ採集ス但シ果實ヲ有セズト又英國植物園ニ栽植スト雖𪜈未ダ開花セズト

藥品　百露拔爾撒謨　Balsamum Peruvianum. 日本藥局方ニハ本植物ノ幹ヨリ滲出スルモノヲ以テ藥用ニ供ス

採收　百露拔爾撒謨ノ採收ニ付テハ薩爾瓦多耳國サンソナ,ト博士故Charles Dorat氏ヨリ合衆國教授Carson氏英國Daniel Hanbury氏ニ通信セリ英國及ビ亞米利加藥學雜誌ハ當時之ヲ揭載ス其大略左ノ如シ

百露拔爾撒謨ヲ採集スルニハ第十一月第十二月ノ頃降雨ノ後斧或ハ鎚類ヲ以テ該樹幹ノ四面ヲ敲打シテ皮部ヲ放寬ナラシメ直チニ條片ト爲リテ剝離ス然ルトキハ木質ノ表面ヨリ芳香性樹脂ノ小量ヲ滲出シ該樹皮ヲ粘稠ナラシムト雖𪜈之ヲ採集スルニハ猶ホ小量ナリ故ニ其滲出ヲ旺盛ナラシムル爲メ一ノ慣習法アリテ其皮部ヲ敲打セシ後五六日間炬火ニテ烘焦ス爾後七八日間ヲ經レバ皮部ハ悉ク剝離シ多量ノ拔爾撒謨ヲ滲出ス若シ猶ホ皮部ノ殘存スルモノアレバ之ヲ剝除ス但シ皮部敲打ノ際幹ノ周圍ニ四條ノ皮部ヲ殘シテ敲打セズ此レ該植物ノ凋萎枯死セザル樣豫防スルニ在リサテ拔爾撒謨ヲ採集スルニハ樹皮剝離烘焦シタル部位ヲ爛布ニテ覆ヒ茲ニ滲出スル拔爾撒謨ヲ吸收シテ淡黃色ヲ呈ス然ル後此爛布ヲ陶製ノ煑沸器ニ移シ其器ノ四分三ハ水ヲ盛リ時々攪拌シ文火ヲ以テ煑沸シ殆ンド之ヲ溶出セシムルトキハ重量濃色ノ百露拔爾撒謨ハ器底ニ沈下ス這樣ニ取扱フヿ數時間ニシテ爛布ハ煑沸器ヨリ除去シ新タナル爛布ヲ投入ス但シ溶出セシ爛布ハ壓搾器ヲ用ヒテ絞搾シ猶ホ多量ノ拔爾撒謨ヲ得ルナリ

壓搾器ハ綱製ノ小袋ニシテ長サ大約尺餘中部縫合セズ其兩端ニ於テ二個ノ棒ヲ受クベキ乳ヲ有ス其壓搾スヘキ爛布ヲ此袋ニ納レ兩端ノ棒ニ因テ

交糾スレハ該布中ニ浸潤セシ拔爾撒謨ヲ漸次ニ搾出ス之ニ從事スルハ多クハ婦女トス斯ノ如ク絞出シ得タル拔爾撒謨ハ前ニ得タルモノト混合ス

煑沸器ヲ靜置シ其冷却スルニ及ンテ水分ヲ傾瀉シ大小不同ノ葫蘆類ニ收メテ市場ニ運搬ス或ハ數日間靜置シテ泡沫ヲ去リ清淨ナラシムルノ後前ノ如キ器ニ收メテ運搬スルモノアリ

翌年ニ至リ前年敲打セザル部位ヨリ前法ヲ以テ拔爾撒謨ヲ採收ス

本植物ハ二ケ年ヲ經レバ其傷痕全ク癒合スルニ因リ數十年間年々拔爾撒謨ヲ產出ス但シ二十年間ニ五回若クハ六回之ヲ採集セサルヿアリト

百露拔爾撒謨ハ大平洋沿岸「アカジユトラ」ヲ經テ主モニ輸出スト雖𪜈其一部分ハ「ベリザ」及ヒ亞米利加中部大西洋沿岸ノ諸國ヲ經テ歐羅巴ニ輸入スト

本品ハ亞米利加中部薩爾瓦多耳ヨリ主モニ產出スト雖𪜈往時之ヲ百露國ノ產ト誤信シ百露拔爾撒謨ト命名セリ是レ當時百露ヲ經テ歐羅巴ヘ輸入セシニ基因セリ

本品ハ從來甕ニ盛リ乾芻ヲ以テ之ヲ被包シ其口部ヲ皮ニテ包ミ輸出セシト雖𪜈近來ニ至リ錫葉製ノ小匣ニ盛リ輸出スルヲ通常トス故ニ運搬中破碎スルノ憂ヒヲ減少スト云フ

性質　生藥學ニ云百露拔爾撒謨ハ稍〻稀薄液ヲナシ帶褐赤色乃至暗褐色ヲ有シ粘着性ヲ有セス比重一,一三五乃至一,一四五ナリ薄層ヲナストキハ透映シ永ク放置スルモ結晶ヲ析出セス温水ト共ニ振盪スレハ少量ノ桂枝酸ヲ溶出ス純酒精或ハ哥囉仿謨ニハ澄明ニ混和ス百露拔爾搬撒謨二「グラム」ニ消石灰「一グラム」及ヒ酒精二滴ヲ攪伴セルモノハ寒冷ニ在テハ柔軟ノ狀ヲ保持ス

甚タ佳快ナル芳香ヲ有ス味ハ苛辣ニシテ少シク苦シ」トアリ又改正日本藥局方ニ云百露拔爾撒謨ハ黑褐色舍利別稠ノ樹脂液ニシテ其層薄ケレハ赤褐色透明ナリ香氣ハ佳快芳香𪜈味ハ稍〻苦ク後苛辣ニシテ等分ノ酒精ニ

澄明ニ混和ス比重一,一三五乃至一,一五〇ナリ

本品十滴ニ硫酸二十滴ヲ加ヘテ研和スレハ粘稠ナル帶紫赤色ノ混和物ヲ生ジ水ヲ以テ之ヲ洗ヘハ冷後破碎シ易キ物質ヲ殘留ス

本品大約一「グラム」ヲ石油偏陣大約五「グラム」ニ和シテ强ク振盪スレバ其多分ハ溶解セス少時之ヲ靜置スルノ後石油偏陣層ハ微ニ類黃色ヲ呈スルニ止マルヘシ此石油偏陣ヲ小瓷皿ニ瀉取シ自然ニ蒸散セシムレハ酒精ニ溶解シ易ク佳快ノ香氣アル類黃色稀薄ノ油狀物ヲ殘留シ之ニ微溫ヲ與フルモ的列並底流動蘇合香,骨湃波抜爾撒謨或ハ「グルジユン」抜爾撒謨ノ香氣ヲ放ツ可カラス

本品三分ニ硫化炭素一分ヲ加フレハ溷濁セスシテ混和シ更ニ硫化炭素大約八分ヲ加フレバ黑褐色樹脂樣ノ物質ヲ分離スヘシ其液分ヲ瀉取スレハ澄明ニシテ微ニ淡褐色ヲ呈スルニ止マリ螢石彩ヲ現ハスコトアルモ僅微ニ過ク可カラス

本品五滴ニ安母尼亞三立方「センチ,メートル」ヲ加ヘテ劇シク振盪スルニ泡沫ヲ生スルモ少許ニシテ速ニ消散シ二十四時ヲ經ルモ凝固ス可ラス

本品二「グラム」ヲ取リ重湯煎上ニ於テ水化石灰一「グラム」ニ攪和スルニ其混和物ハ固結セス又脂肪ノ臭氣ヲ放ツ可カラス」トアリ

成分　主成分ハ黑色不結晶ノ樹脂ニシテ無味無臭其質脆ク三十八「ペルセント」ヲ有シ酒精及ヒ苛性亞爾加里溶液ニ溶解ス又乾餾スレハ安息香酸スチロル(Styrol)トルヲル(Toluol)聖那蜜涅ヲ生スト

聖那蜜涅 (Benzylic Cinnamate or Cinnamein) ハ大約六十「ペルセント」ヲ有シ其純粹ナルモノハ無色油質ノ液ニシテ微ニ佳香ヲ帶ヒ味ヒ芳香性ニシテ苛辣ナリ比重大約一,〇九五設氏三百度（華氏五百七十二度）ニ於テ沸騰シ濃稠苛性亞爾加魯乙度ニ因テ桂枝酸ト酒精安息香ニ分解スト

酒精安息香(Benzolalcohol C_7HSO)ハ無色ノ油ニシテ微ニ佳香ヲ帶ヒ水ヨリハ稍ヽ重ク設氏二百四度（華氏三百九十度ニ）ニ於テ沸騰シ酸化藥

ニ因テ始メ苦扁桃油トナリ後チ安息香酸ニ變ス

其他 Benzylic benzoate($C_7H_5(C_7H_7)O_2$)Stilbene($C_{14}H_{12}$) 等ヲ含有ス甲ハ無色ノ油ニシテ温度減退スレバ結晶シ設氏三百四度(華氏六百七十四度)ニ於テ沸騰シ乙ハ稜柱狀ノ結晶ニシテ無色無臭設氏二百九十度 (華氏五百五十四度)ニ於テ熔融シテ沸騰スト又 Attfield氏ハ自然ニ滲出セシ樹脂ヲ調査シテ一種ノ樹脂七七,四「ペルセント」ヲ得タリ此樹脂ハ佳香ヲ有セス桂枝酸ヲ生スルヿ無シ故ニ別種トストヌ生藥學ニ云主成分ハ桂枝酸〔ベンツオイール〕依的兒 (Benzoyl-Cinnamate—ニCinnamein ト名ク $C_8H_7—COOC_7H_7$)ニシテ其含量六十〔ペルセント〕ニ超ユルヿアリ其他又〔ベンツ〕亞爾箇保爾(Benzalkohol $C_6H_5-CH_2(OH)$)樹脂又恐クハ桂枝酸〔チシナミール, エステル〕〔スチラチン〕(蘇合香ノ條ヲ見ヨ)ヲ含ム」トアリ

百露拔爾撒謨ハ其產額詳カナラスト雖𪜈年々大約貳萬五千磅許トス其供給需用ニ足ラサルカ故ニ價ヒ極メテ高貴ナルニ因リ蘇合香,的列並底,古魯仿紐謨,骨湃波拔爾撒謨,倔兒雲拔爾撒謨,安息香,萞麻子油等ヲ以テ贋造スルヿアリ其驗查法ハ生藥學ニ詳カナリ(以下次號)

富士山植物彙報

會員　渡邊　協

仝　松田定久

矢田部松村外山高嶺後藤等ノ諸君ガ富士山ニ植物採集ヲ試ミラレタルハ今ヲ距ルヿ實ニ十年ノ前ニアリ其後六年ヲ經テ三好學氏モ同山ニ登ラレタリ而ソ今年ニ至リ更ニ同地ニ採集ヲ試ミルモノ數名アリ蓋十有餘年ノ久シキ此山ニ登リテ採集スル者此ノ如ク小數ニ止マラザルベシト雖不幸ニシテ余等ハ夫等ノ人ヲ知リ其採集ノ狀況等ヲ詳悉スルヲ得ズ頗ル遺憾ト謂フベシ當今理科大學ニ藏スル標品ニシテ富士山產ノモノハ主トシテ十年前ノ採集ニ係レリ其內ニハ三好氏ノ採集セラレタルモノモ多少雜ハリ居ルナラ

ン又同氏ノ富士山記行ハ載セテ本雜誌第二卷第二十號ニアリ採集ノ狀況植物配布ノ模樣登山者ノ注意スベキ件等ヲ詳記シ併セテ其採集セル植物ノ名稱ヲモ記シアレバ讀者ノ參照アランヿヲ望ム

抑“富士山ヘ上ルニハ今ハ五道アリ駿州大宮ヨリ上ルヲ表口ト云フ嶮ニシテ遠シ三島沼津邊ヨリ上ルヲ須山口ト云ヒ須走ヨリ上ルヲ須走口ト云フ是ノ路ハ頗容易ニシテ且ツ近シ甲州吉田ヨリ上ルヲ北口ト云フ近頃又御殿場ノ邊ヨリ直チニ上ル新道ヲ開ケリ之レヲ東表口ト云フ最容易ニシテ最モ近シ”矢田部君等ノ一行ハ須走口ヨリ上リ大宮口ニ下ラレタリト聞ク三好氏ハ同一ノ路ヲ取ラレタレトモ大宮ヨリシテ上リ須走ヲ下ラレタルナリ而シテ余等ハ成ルベク別路ヲ取ル方却テ同山ノ植物ヲ學ブ爲ニハ面白カルベシト思ヒタルヲ以テ東表口ヨリ登山スルコトニ定メ去ル七月二十八日早朝滊車ニテ東京ヲ發シテ御殿場ニ到リテ下車シ之レヨリ採集ヲ始メ其ノ日ハ馬返ニ至リテ宿セリ馬返ノ名ヲ附シタル場所ハ何レノ道ヨリ登山スルモ必ズアリ此ニ云フ馬返ハ東表口ニ屬スルモノナリ翌日ハ採集ニ時間ヲ費シタルヲ以テ僅ニ六合目ニ達シタル𪜈ハ已ニ日暮トナレリ此東表口ノ路ハ甚ダ嶮ナラズ里程モ短キ故ニ一般ノ登山者ニハ至極便利ナルモ植物採集者ニ取リテハ餘リ面白カラズ何トナレハ其路ハ平野ヲ通過スルヿ多ク森林ヲ穿ツヿ少ナクタマタマ森林ヲ經ルモ深欝ノ境ニ乏シキヲ以テナリ三十日ニハ頂上ニ上リ所謂御鉢廻ヲ爲タル後下山ノ途ニ就ケリ此際ハ細砂ノ上ヲ走リ下ルヲ以テ暫時ニシテ三合目ニ達セリ其速ニシテ且容易ナルヿ登陟スル𪜈ノ比ニ非ズ上ルハ則チ易カラズ下ルハ則チ易シ人事總テ此ノ如クナラザルハナシ豈特ニ富士山ノミナランヤ三合目ヨリ右折シテ須山口ノ道ヲ取レリ蓋此道ト東表口ノ道トハ此處ニ至リテ相合シ一條ヲナスナリ此夜ハ須山口ノ一合目ニ投宿セリ富士山ノ高處ニハ樹木ナキヲ以テ旅人ノ宿泊スル小屋中ニテ用ヰル薪材ハ皆遠ク下方ヨリ負擔シ上ルナリ此ノ如ク焚キ物ニ乏シキヲ以テ前夜宿セシ六合目ノ如キ場處ニテ若シ壓搾紙ノ濕リタルモノヲ烘リ

乾カスノ必要起リナハ大ニ困却セシナランガ幸ニ此夕宿シタル一合目ノ小屋ハ森林中ニアルヲ以テ薪材ニ乏シカラズ我々採集者ニ取リテハ安心スルヲ得タルナリ翌三十一日ハ馬返(須山口ニアルモノ)ヲ過グル後左折シテ支路ニ入ルヲ以テ須山ノ民家アル地ニ出デズ印野村ヲ經テ夕刻御殿場ニ着シ即夜歸京セリ須山口ノ二合目邊ヨリ印野村ニ至ル迄ノ間ハ茂林密樹ノ中ヲ通過スル所多ク採集ノ爲ニハ實ニ屈竟ノ場所ニシテ此點ヨリ云フ所ハ東表口ニ勝ルヿ數等ナリ

余等ガ三四日間ニ採集シタル植物ハ顯花類ト高等隱花類トヲ併セテ一百七八十種ニ過ギズ又別段ニ奇品ナシト雖之レヲ以前ニ採集セラレタルモノニ合スル所ハ頗ル多數トナルヲ以テ其目錄ヲ本誌ニ掲グル所ハ或ハ今後同山ニ採集スル人ノ爲ニ幾分カ便利トナルヿモアランカト考ヘテ之レニ著手スルヿトセリ其名稱ヲ記スルニ當リ大學貯藏ノ標品中ニ存スルモノハ後ノ採集者カ同種ヲ採リタルト否トヲ問ハズ(大)ノ符ヲ下セリ而ソ大學標品ニナク三好氏ノ記行中ニ見ユルモノハ其後ノ採集者ガ採タルト否トニ關セズ(三)ノ符ヲ記セリ此等ノ符ナキモノハ余等ノ今回採集セルモノニシテ前兩度ノ採集品中ニ存セザルモノナリ

歸京ノ後數日ヲ經テ會員矢野勢吉郎氏モ七月末ヲ以テ富士山ニ採集セラレ大宮口ヨリ上リ須走口ニ下ラレタルヿヲ聞キ又余等ニ後ルヽヿ二十餘日大島武比古氏モ須走ヨリ上リ東表口ニ下ラレタルヿヲ知リ得タリ因テ兩氏ニ乞ヒ其採集セラレタル植物ヲ一覧セシニ余等ノ採集シ得ザリシモノ數多ヲ見ルヲ得タリ因テ兩氏ノ採集ニ係リ他ノ採集者(余等ヲ含ム)ノ得ザリシモノヲモ併セ錄シ且此等ノ品ハ(矢)或(島)ノ符ヲ用ヰテ區別セントス蓋各自ノ採集品中互ニ有無アルハ登山ノ路ノ異同ニモ因ルベク又採集ノ時日ニモ關スベク或ハ甲者ノ得タルモノニシテ乙者ノ之レヲ採リ居ラザルモ全ク之レヲ目ニ觸レザリシトモ斷定ス可ラズタマタマ其植物ガ花實等ヲ具ヘザルヲ以テ一擧手ノ勞ヲ惜ミタルヿモアラン故ニ今符號ヲ施シテ採集者ヲ

區別スルモ眞ニ大概ヲ示スニ止マルノミ

且叉廣ク諸書ヲ捜索セバ完全ナル富士山目錄ヲ作リ得ベシト雖此ハ余等ノ能スル所ニアラズ今ハ余等ガ實物ヲ目擊スルヲ得タルモノヽミノ名稱ニ止メタリ單ニ富士山ト云フモ其區域頗ル漠然タルヲ免レズ今此ニ錄スル植物ハ山上ハ勿論其裾野ニテ採集シタルモノモ叉御殿場近傍ニテ得タルモノ迄モ含ミ居ルト知ラルベシ此邊ノ地モ方今ハ頗ル人家稠密ノ場所トナリタレ𪜈少シク古昔ニ泝リテ其荒漠タルトキノ有樣ヲ想像セバ之ヲ裾野ノ續キ地ト看做スモ餘リ無理ニハアラザルベシ

Ranunculaceae. 毛茛科

Clematis apiifolia, *D.C.*

ボタンヅル

,, tubulosa, *Turcz.*

クサボタン

,, japonica, *Thunb.*

ハンショウヅル

,, alpina, *Mill.*

ミヤマハンショウヅル

,, paniculata, *Thunb.*

センニンサウ （三）

Thalictrum aquilegifolium, *L.*

カラマツサウ （三）

Ranunculus aquatilis, *L. var.*

Drouetii, *Schultz.*

ウメバチモ

Tachiroei, *Fr. et Sav.* （三）

チトコゼリ

,, acris, *L.*

キンポウゲ

Isopyrum stoloniferum, *Miq.*

シロガ子サウ （大）

Aquilegia Buergeriana, Fisch.

ヤマヲダマキ （大）

Aconitum Fischeri, *Reich.*

トリカブト （三）

Actaea spicata, *L.*

ルヰエフショウマ

Magnoliaceæ. 木蘭科

Cercidiphyllum japonicum, *S. et Z.*

カツラ

Schizandra nigra, *Max.*

テウセンコミシ

Magnolia Kobus, *D. C.*

コブシ

Merispermaceæ. 防已科

Cocculus Thunbergii, *D.C.*

アヲツヅラフヂ

Berberideæ. 目木科

Berberis Thunbergii, *D.C.*

メギ （大）

Akebia quinata, Decne.

アケビ

,, lobata, *Decne.*

ミツバアケビ

Papaveraceæ. 罌粟科

Bocconia cordata, *Willd.*

タケニグサ （三）

Cruciferæ. 十字科

Arabis serrata, *Fr. et Sav.*

フジハダザホ （大）

lyrata, *L.*

ミヤマハタザホ （大）

sagittata, *D.C.*

ヤマハタザホ

Violaceæ. 菫菜科

Viola pinnata, *L. var.*

Chærophylloides, *Regel.*

エゾスミレ

Patrinii, *D.C. var.*

chinensis, *Ging.*

スミレ

sylvestris, *Kit. var. Grypoceras, A. Gray.*

タチツボスミレ

Polygaleæ. 遠志科

Polygala Sibirica, *L.*

ヒメハギ （三）

Tatarinowii, *Regel.*

ヒナノキンチヤク

Caryophylleæ. 石竹科

Dianthus Superbus, *L.*

カハラナデシコ (三)

Lychnis Miqueliana, *Rohrb.*

フシグロセンノウ (三)

Melandryum firmum, *Rohrb.*

フシグロ

Stellaria florida, *Fisch. var. angustifolia, Max.*

イハツメクサ (大)

Hypericaceæ. 金絲桃科

Hypericum erectum, *Thunb.*

オトギリサウ (大)

,, *Ascyron, L.*

トモヱサウ

Ternstroemiaceæ. 厚皮香科

Actinidia arguta, *Planch.*

サルナシ

,, polygama, *Planch.*

マタタビ

Stuartia Pseudo-Camelia, *Max.*

ナツツバキ (大)

花の色香

第三章花瓣原論

三原基論

堀正太郎

樞軸(axis)　附贅機關(appendage)ハ其原基(unit)ヲ同フス是レ本論ノ依テ以テ根據トスル處ナリ總シテ植物機關ハ其何タルヲ問ハス皆惟一ノ維管束(vascular cord)ヲ原基トシテナルモノニシテ此維管束ハ反覆分岐數多同一ノ機關ヲ生出スルノミナラス全ク異リタル種類ノ機關ヲモ生スルモノナリ彼ノ綿葵科植物ハ數多ノ雄蕋ヲ有ス其起原ハ如何ニ重瓣八重咲ノ花葩ニアリテハ如何ニ是等ヲ解剖的ニ穿究セハ維管束ノ配置集散離合ノ點ヲ明解シ得ヘシ則チ是等維管束ハ皆一ノ花梗(penduncle)又ハ花軸 flower axis)ニ集合シテ一ケノ維管束トナルモノナリ之ヲ葉ニ徵スルモ亦然リ故ヲ以テ各附屬機關ハ皆盡ク樞軸ノ原基維管束ノ分數多岐シテ其基礎ヲ形チ作リタルモノナリ

予ハ植物生活ノ美妙(arcana)ニ侵入シ如何ナル怪力ノ在テ各機關ヲ模型的ニ生出スルカヲ明言シ能ハスト雖𪜈暫ク生理的ニ解剖的ニ是カ研究ヲ下セハ維管束ナルモノ實ニ花ノ原基ニシテ而ソ樞軸幷ニ他ノ附屬機關ト異ナル處アルナシ花梗中ノ管束ハ數多ニ分枝シテ一種ノ機關中（則チ瓣或ハ蕋ノ如キ）ニ入ル然シテ彼決シテ其造構形質ヲ變サルヲ認ム可シ是ニ於テ吾人ハ各種機關中ノ維管束ハ皆共同ノ本源(common unit)ヲ有スモノタルヲ知ル左レハ花瓣ハ美麗ノ色彩ヲ有シ薄弱ノ形質ヲ以テナルト雖𪜈其本源ニ逆リテ見レハ葉ト同一ナリ莖ト同一ナリ外觀內質ニ少差アリト雖𪜈其ノ發生ノ初ハ皆之ヲ維管束ニ基スルモノナリ故ヲ以テ葉ハ其初メヨリ葉ニ發生ス可キ一個單獨ノ特性(individuality)ヲ享有スルモノトスルモ花ノ各機關ハ亦其初メヨリ各其特性ノ個体ニ發育ス可キモノトスルモ進化論ノ原理ニ基キ吾人ハ一機關ノ他機關ニ擬裝スルノ理由ヲ說明スルニ難カラサルナリ今各種機關中ニアル處ノ維管束ハ各其基源ヲ同一ニスルカ故ニ一種ノ機關ニ固ニ有特占ノ如ク見ユル處ノ性質ガ其限界ニ顯ハルヽトセズ則チ葉ノ

花瓣狀ヲ呈スル又ハ花瓣ノ葉狀ヲナス或ハ雄蕋ノ花瓣形ナル又ハ花瓣ノ雄蕋ニ變スル是レ皆一機關ニ特有ノ性質ヲ他機關ニ波及スル者ナリ葉ト花瓣或ハ花瓣ト蕋ノ中間犯ス可カラサルノ鐵壁アルニアラサルナリ而ソ常ニ其順序形態ヲ亂ス事少キ所以ハ之ヲ生物ノ美妙ト謂フ可クシテ偶々其順序ヲ混亂スル場合ハ是レ決シテ怪ムニ足ラス各機關中ノ維管束ハ實ニ其分岐ノ起點ニ於テ同一ナレハ一機關ノ性質ヲ他機關ニ傳搬セスト斷定シ能ハサルナリ

原葉論幷ニ原蕋論ニ云フ如ク花瓣ハ原來其葉或ハ雄蕋ニナルヘキノ或必用ニ遭遇シテ其形質ヲ變也花瓣トナリタルモノナリトセリ然ラハ其原葉論ニ依テ立論スル時ニ當テハ葉ナルモノハ顯花植物ニ片時モ欠ク可カラサルモノニシテ已ニ顯花植物トシ謂ヘハ葉之ニ從フモノトセサル可カラス原蕋論モ是ノ理ニ外ナラス然ルニ今一步ヲ進メ考一考植物界ニ眼ヲ放テ看察ヲ下セバ大ニ其然ラサル事實ヲ發見スルナルヘシ

植物ハ葉ナルモノヽ必用ヲ要セサルナリ葉ハ類化作用 (assimilation) 幷ニ水氣ノ蒸散 (transpiration) ヲナス爲ノ點ニシテ一朝植物ノ外界ニ變動ヲ來ス時ニ當リテハ未タ必スシモ是等ノ作用ハ扁平ナル葉ノ必要ヲ俟サルナリ彼ノ (Cactus) ノ諸種ニアリテハ通常人ノ是ヲ葉ト稱ス可キ者アルナリ外界ノ狀態自己ノ生存上扁平ノ葉ハ全ク必用ヲ失フ否寧ロ葉ハ同植物ニ有害ナリ自身滅亡ノ具タルヲ免カレス然リト雖𪜈全植物ハ能ク熱帶沙漠ノ地ニ生育シ繁殖シ得ル所以ノモノ何ソヤ全植物ハ葉ヲ有セサルモ能ク葉ノ"治用"ヲナスカ故ナリ莖ノ外表ハ葉綠素ヲ備ヘテ莖葉共同ノ働ヲナス

此ノ事實ヲ以テ此ノ理由ヲ以テ見レハ葉ハ決シテ欠ク可カラサルノ必具ニアラサルヲ知ル斯ノ如キ機關ヲ以テ論據トスル處ノ原葉論幷ニ全一ノ理由ニ基ケル原蕊論皆其本ヲ捨テヽ末ヲ論スルモノナリ原基論ヲ前二說ニ比スレハ遙ニ進步的ノ處說ト云フ可シ予ハ本章ニ於テ花瓣ノ起原ヲ論シ三派ノ學說ヲ記述シタリ次章ニ於テハ進ンテ花ノ始原色 (Primitive Color)

ヲ說キ漸次花色ノ進化ニ論及ス可シ　(未完)

蕎　麥　史

（前號ノ續キ）

野村彥太郎

昔々物語に寛文辰年（四年）(明暦三年より八年目に當れり)けんどん蕎麥切といふ物出來て下々買食ふ貴人には喰ものなし是も近年歷々の衆も喰ふ結構なる座敷へ上るとて大名けんどんといふて拵出す用捨箱に昔溫飩行はれて溫飩の傍に蕎麥切を賣る今は蕎麥切盛になりて其傍に溫飩を賣るけんどん屋といふは寛文中よりあれども蕎麥屋といふは近く享保の頃までなしといへり嬉遊笑覽にむかし蕎麥に限らずなべて麪類は蒸したるものなり故に職人盡歌合に索麵賣の歌にてふさいのこしきのうへのわつきものむしあげの月わたるみゆとあり（和訓栞にてふさいは饅頭なとを賣る者をまかいへり調菜の音なるべし味を調ふるによりいへる也庭訓にも見ゆ）貞德文集に點心は饅頭羊肝蒸麥とあり蕎麥切はさらなり寛永料理集に見へ候ていかきにすくひぬる湯の中へ入れさらりと洗ひさていかきに入れにへゆをかけふたをしてさめぬやうに又水けのなきやうにして出してよしともあり又溫飩,切麥,蕎麥麵是謂之打以棒打成爲片細截之謂也と雍州府に見えたり

還魂紙料に寛文八年の頃江戶の流行物を集めし短歌を載ては文もりのけんどんや」輕口男（貞享元年印本にて寛文八年より十七年目に當れり）に淺艸旅籠町の處弓手も馬手もそば切屋一杯六文かけねなしむしそばの根本と聲々に呼」鹿の子ばなしに（元祿三年印本にて貞享元年より七年目に當れり）諏訪町わたりな蒸籠むしそば切一膳七文とよびけるを見れば此頃の蕎麥の價は高下定めなかりしなるべし善庵隨筆（嘉永三年印本）に當今二八蕎麥と云て蕎麥粉二分溫飩粉八分八分と二分との調合よするは溫飩粉を多くして切れさるやうにせしにやあらん今の人二八といふは價のをにて今蕎麥一膳を十六文に賣るゆへに二八十六文の義と心得るは誤なり其頃は諸品下直ゆへ蕎麥の價も十六文にてはあるましといへりされとも衣食住記に正德

享保の半頃神田邊に二八即坐けんどんといふ看板を出すといへりかゝれば二八蕎麥といへるも此時に始まりたるにやあらん扨此頃の物價高下定まりなきをは右の通にて且元祿三年を去るを廿四五年ともなれば其價十六文ならんも知り難し」衣食住記に享保の頃温飩蕎麥切菓子屋へ誂へ船切にしてとりよせたり其後麴町うたんやなどいふけんどんや出來蕎麥ゆでゝ紅からの塗の桶に入汁を德利に入て添へ來るとあり善庵隨筆に温飩蕎麥切ももと菓子に屬して菓子屋にては船切重詰にして賣りし故に菓子屋の杜氏は必らず蕎麥を打つ筈のものなり今にこれをもて杜氏の巧拙を試るは昔の餘風の存せるよし聞及べり寛文の頃けんどん盛に行はれしゆへ蕎麥も温飩にならひてケンドンにせしなりケンドンは俗に生質温和にして財利にこせつかさる者をオントウといふオントウハウンドン音の相近きをもて此ウンドンならでケンドンなりといふ意にて一杯盛切にしてかはりを出さず給使もせさるよりケンドンといひしこれを便利なりとす賞玩し下々の者とりはやし盛に行はれしより温飩屋蕎麥屋ゐといふもの逐々出來ぬといへり和訓栞にけんどんは儉飩なりといへり嬉遊笑覽に慳貪は唯俗に覺ねたるやさしき意にて一椀ヅヽ盛たるを食ふ人の心にまかせて勸もせざるゆへなり（呉服屋の現金安賣始りて何くれの物みな其定になれり大かた同時なるべし）其呼聲にも一杯六文かけねなし現金かけねなしといふを其頃のはやりなり別に持運ふに膳を入る箱はけんどん箱なるをやがてけんとんとばかりいひ其箱の蓋のごときをけんどんぶたといふ」大名けんどんといふは一代男に女郞ども食好する處なた貝のふくらいつ川口屋の帆かけ舟の重箱に一杯と思ひ々々に好まるゝこそをかしけれ帆かけ舟は諸大名の舟を五色の漆にて繪にかきたるなり（西國の大名難波にて艤して出たつ故其舟とも相印を見習へり）大名けんとんの名はこゝに起る今も此器殘れるもの有て好事のもの茶箱に用ふ小く長き形の筥なり蒔繪は帆かけ舟のみにあらず種々の摸樣なり又一種の箱あり大にして四角なり内にへだて有て幅の狹き方に汁つぎの箱辛み色

々入」江戸鹿の子に見頓屋堺町市川屋中橋大が町同提重とあるはこれらをいふ後に忍ひけんどんともいへり此の筥もとはうどんをも入たりうどんは桶にて持運びしか後には件の箱になりたれとも猶桶をも用ひしにや俳諧三疋猿にこれほどの廣き住居に樽のかけとちへもつかずうどん一桶温故集來山が句に春雨やもらぬ家にもうどん桶なとゝもあり江戸町中喰物重寶記（天明七年印本）其頃の江戸町中の蕎麥屋五六十軒ばかりの名を載せたる處に「小舟五枚入四匁より」大舟十枚入七匁五分より「折詰一匁五分よりなとゝもあり此の小舟,大舟といへるも帆かけ舟の重箱なとの類なるへし

風俗文選に雲鈴が蕎麥切を頌ていふ伊吹蕎麥天下にかくれなければからみ大根又此山を極上とさだむ云々近頃は慳貪屋の手に落て所化寮の餓客に青貝の手桶荷ひこみ比丘尼宿の大よせに錫の鉢をすゑならふ夫蕎麥大根は君臣佐使の付合なるを越路に胡椒の折形を備へ都の方には山葵薑にてやらるゝこそ本意なけれ深艸の元政が草山集（寛文壬寅(二年)の序あり）に膽吹蘿蔔をよみ込たる狂詩に

膽吹蘿蔔膽吹艾.蘿蔔太辛艾太烈.不辛不足解麪毒不烈不足醒病骨.既辛既烈復何加.時用時置在得節.昨日槻村越人舎.三年艾今十一穴.嚴乎如逢屈突蓋火勢入腸釋千結.今日草山老母堂.老母却爲甘旨設.潘滓如乳麪如絲.蕎麥由來風味別.體枯色麗味外味.何須重羅白似雪膽吹蘿蔔膽吹艾.病身不嫌辛且熱.不緣解毒與醒病.何由今日得一啜.

宋周密癸辛雜識云今成都麪店中呼蘿蔔爲葖子爾雅曰葖蘆萉一名蘆菔今人謂之蘿蔔是也とありされば漢土にても麪類を食さる時は蘿蔔を添ゆる者にやあらん諸家の本草なとにも蘿蔔は食を消し麪毒を解するよし見ゆ理齋隨筆に蕎麥に蘿蔔汁を用るは膈中にこらぬ爲なりとあり（南嶺子に中柴なる老人の話を載せていふ蕎麥麪を饗さんとて客をうけ既に糸の如く是を釜に入てゆでさするに一すぢものこらず湯とゝけて形なしこはいかにと驚き水をかへて又ゆでさするにそば湯とゝけしゆへ是非なく客方へことはりをたて飯を出し翌日よくあらたむるに其朝荒海布を多くたきたる鍋なりと予此話を耳にたもち其後六條の人したゝかそばきりを過食して腹こはくいたみ甚し予醫人ならずといへ共其席にて見るに忍びず荒海布を煎じさせて用ければ腹痛たちまちに治したり古人のはしめて藥の能毒をしるもかゝる事なるべし荒海布そばを消すの能は諸の本草に見えずといへり）本朝食鑑（元祿八年印本）に古來

未聞賞蕎麥者近來製之今擧世上下美賞之東北之人專造之競誇西南之人造之不佳唯京師造之稍美然麪不好蘿蔔不辣故不似江東之盛美也（雍州府志に京師の温飩の條に所々在之其内中御門通り丸屋幷に長濱屋一條虎屋二口屋之所造爲宜蕎麥麪亦然）とあり東風流の序にも桃青（芭蕉翁）いへるを有り萬國に遊歷して俳と蕎麥は關東に止れりと見えたり風流徒然草に京町の三浦屋に几張とてやんをなき全盛の女郎有けりそば切を好みて多く喰けり客よりの付とゞけは小袖の外は皆そば切となりそれのみか甘汁は愚癡なりと江戶汁のみ好み其外人集めしてくはせける程に出る時は半分はすみのつるがやの拂となりけりこのまねをして今も二三人そばきりずきの女郎ありけるとぞ云々洞房語園に媉飩は寬文二年寅秋中より吉原に初て出來たる名なり江戶町二丁目に仁右衞門といふもの饂飩そば商ひしが一人前の辨當を拵へそば切を仕込て銀目五匁にて賣る端傾城の下直なるになぞらへてけんどんそばと名付しより世間に廣るといへるはうけがたし端女郎を呼しは蕎麥のかたより准へたるなり女郎のみにあらず都風俗鑑に慳貪野郞と云もありと嬉遊笑覽に見えたりまた同書に草子賢女心粧にしだらく女をいふ處集せんたし廿四文のそば切小半酒を小宿のかゝましりに呑てしまひ醉にまかせてうどんやのけんどん箱を枕にして晝寐これにても其價知るべしともいへり

(以下次號)

雜　錄

池野氏よりの來信

當夏季休業中紀州地方へ植物採集の爲め赴かれたる池野成一郎氏より會員某氏へ送られたる書信中の數節を拔抄して次に擧ぐ

小生は當休業中紀州地方に植物を採集し歸途大阪に出でそれより京都に來り數日間滯在致候に付近傍の山々を跋涉し植物採集に從事致候小生が登りたる山の景況大略を次に申陳候若し植物學雜誌材料の一部分共相成候

ば幸甚

山城は御存知の如く南面を除くの外は悉く皆山なれどその山と申すものは信州甲州邊のごとき高き山に無之候然し乍らその內尤も高きは比叡，愛宕，鷲峯の三山に有之候その內比叡，愛宕の二山は小生旣に登り候

比叡山は山城の東北に聳立し江州に跨る高さ八百二十メートルなり（農商務省出版日本帝國全圖に因る）白川村より登る道尤も平易なりといふ登り凡そ五十丁に過ぎず小生は山を越ゑて江州阪本村に出で候山中植物の種類に乏しく採集品皆平凡にして之を記するの價値少しと申せども今その二三を掲ぐればアヲツヾラフヂ，センニンサウ，カヾイモ，クラヽ，イヌザンセウ，イハタバコ，クサアヂサ井，アカソ，イハナシ，マツノキハダ，キツカウハグマ，イタドリ，ミヅタマサウ，ミヤマホトヽギス，クジヤクシダ，ウチハゴケ等に御座候同山中にはカキノハグサ (Polygala Reinii) 多しとの由なれども小生は不幸にして之を採らず候江州阪本邊には紅花のゲンノショウコ多く却て東京に普通なる白花のものを見ず候（小生一昨年一寸京都へまゐりたる節北野天滿宮近傍を散步したるに同じく紅花のもの多く白花のものを稀に見受け候又本年紀州高野山へ登り候節も紅花のものは多く見受け候共白花のものは稀に有之候）阪本より唐崎邊の田畔にはヒナギヽヤウ多く自生致し候是は東京近傍には無之事と存候

愛宕山は山城の西北にあり高さ九百八十メートルと云（引書比叡山に同じ）嵯峨より登る道尤も險なれ共登り凡五十丁程に過ぎず極低き山に御座候小生は山を越ゑて丹波に出で候此の邊にも江州邊と同じくヒナギキヤウ多く自生致候此の山中も植物乏しく實に共種類を紀すへき價値殆んと無之候共先づ山の景况一斑を御知らせ申さん爲其二三を記すればバイケイサウ，ママコナ，マアヂサ井，ツガイサウ，アセビ，リヤウブ，ナンバンギセル，オニヤブマヲ，アリノタフグサ，ヒアフギ，キジノヲ，シヽガシラ等に有之候

小生の參りたる山は先づ是丈に候が明日頃は鞍馬，貴船の方へ採集に

參る積に有之候

伏見の東南數丁にして一大池有之候之を小倉(オグラ)の大池と申し周回四里と申し候此の池は紀伊, 久世兩郡に亘り淀川と相通ずる池に御座候此の池は奈良街道之を橫切り候故二つの池に相分れその一は小にして周回凡そ一里半許に候小生は時間に乏しく兩池共に採集する能はずと雖も小池の方丈は船を浮べて採集候所池中にはオニバス多く隨分その葉の巨大なるものも有之候全体京都近傍にはオニバス多しと相見え小生大阪より京都に到る滊車中にて注意致せし所水ある所には多くオニバスを見受候尤小生は御存知の如く近眼にて五度にも相成る事故間違かも知不申と雖も多分見誤りには非ざるべしと相信申候此の池のオニバスにはその葉の隨分巨大なるものを見受候又カミブタ (Limnanthemum indicum) も甚多く誠に美麗なる花を開き實に美事に有之候その外ヒシ, ヒメビシ, カハホネ, ヒツジグサ, ホザキノフサモ, タヌキモ, キンギヨモ, クロモ, セキシヤウモ, ミヅアフヒ, アカウキクサ等有之その狀恰も東京近傍の眞間村の池に彷彿致居候大池の方をも探し候はんにはヒシモドキのごとき, ムジナものごときその他奇品も有之候はんなれども之を採集するの暇無之實以て遺憾の至りに御坐候いづれ再び京都に參りたる節は日々此の池に採集を試み度存居候

因でに一言申候和州奈良なる春日山にはナギ (Podocarpus Nageia) 甚だ多く案內者は之を自生と申候ども小生は甚だ疑はしく存じ候

紀州邊は諸先生度々採集に參られたれば小生蛇足を添ふるに及はずと存じ別段申上げず候

八月廿七日

京都にて

會員　池野成一郎

龍腦 (一名片腦又羯婆羅香)

大久保三郎

某氏アリ一日余ニ語ツ申ス樣 "聞ク龍腦ナルモノハ樟腦ヨリ製スト故ニ余之レヲ製サント欲シ色々工夫ヲ凝シテ見タレ𪜈結果更ニ面白カラス，如何ニシテ之レヲ製スルヤ君若知ラバ其製法ヲ示セ，又右ニ係スル洋書アラバ承知致シタシ" 余答ヘテ申ス樣 人造龍腦ナルモノハ纈草油ヨリ製スル由ハ或ル書ニ記載シアルヲ知ル然シナガラ未ダ樟腦ヨリ龍腦ヲ製スルヿヲ記載セル洋書アリヤ否ヤ承知仕ラズ兎ニ角龍腦ハ龍腦ヲ生スル一種ノ植物アリ，龍腦香樹是レナリ，樟腦ハ樟腦ヲ生ズル喬木即樟樹アリト答ヘタリ，元モ時珍ハ本草綱目樟腦ノ條中樟腦ヲ錬ル法ヲ載セテ云フ "銅盆ヲ用ヒテ陳壁土ヲ以テ粉ト爲シ之ヲ糝シ却テ樟腦ヲ糝スルヿ一重又壁土ヲ糝シ此ノ如クスルヿ四五重薄荷ヲ以テ土上ニ安ジ再ビ一盆ヲ用ヒテ之ヲ覆ヒ黃泥ニテ封固シ火上ニ於テ欵欵ニ之ヲ灸ス須ク意ヲ以テ之ヲ度ス大過及サ不ル可カラズ氣ヲ走ラ令ルヿ勿レ冷ヲ俟テ取リ出ストキハ則チ腦皆上盆ニ升ル此ノ如ク升ヿ兩三次片腦ニ充ツ可シ" 榛齋ガ遠西名物考羯布羅ノ條ニ云フ藥舖ニテ白樣(シロデ)龍腦ト呼ブ者ナリ瑩白透亮ニメ云々白樣ハ碎ケ難シ是レ漢土ニテ樟腦ヲ再煉シ造ル者云々又同書ニ時珍カ樟腦再鍊ヲ引且又物理小識ヲ引キ "世多升打樟腦 作氷片" 此說ニ據レバ漢土亦樟腦ヲ再煉メ龍腦ニ充ツ即チ白樣龍腦モ此類ナリトアリ

以上ノ談話ハ數年前ノヿナリシ，諸學科大ニ開ケ，植物學モ亦大ニ進步セシ今日ニ於テハ龍腦ハ如何ナル植物ヨリ生ズルヤ，其植物ハ如何ナルモノナルヤ大概世人ノ知ル處ナルベシ，然リト雖モ樟樹ト異ナリ此植物ハ本邦ニ所產ナキモノナレバ或ハ未知ノ人ナキニモ非ザルベシ依リテ下ニ其形狀等ヲ聊カ陳述セント欲スルハ敢ヘテ無用ノ事ニハアラジ

龍腦ヲ生ズル植物ハ渤泥及ビ蘇門答剌ニ產スル喬木ニシテ學名ヲ Dryobalanops Camphora, Colebr. トイフ又一名ヲ Dryobalanops aromatica, Gærtn. 又 Roxburgh 氏ハ其著印度植物書ニ Shorea camphorifera ノ名ヲ以テセリ其他或ハ Dipterocarpus Dryobalanops 或ハ Dipterocarpus teres 或ハ Camphora Sumatrensis ト稱スルモ皆異名同物ナリ, 此樹ノ屬スル科ヲ Dipterocarpæ. トイフ

龍腦香樹ハ前ニモイフ如ク喬木ナリ樹皮平滑高サ九十呎或云百三十尺ニ達スト,其葉互生,卵形,漸尖頭,全邊,極メテ平滑,革質ナリ,葉柄一,二,セメ長,葉片六,七,セ,メ,長,托葉線狀披針形ニシテ早落ス,花ハ枝端或ハ枝端ニ近キ葉腋生ニシテ聚繖花狀總狀花ナリ,各二小包ヲ有ス,蕚ハ不等ノ五片ヨリ成リ,覆瓦樣ニ排置ス,花後ニハ蕚片増大シ翼狀ヲナス,花冠白色,五花瓣ヨリ成リ蕚片ト互生ス,雄蕊夥多數層ニ列シ,短花絲ヲ有ス,葯ハ線狀ニシテ二室,內向ス,葯隔ハ葯房ノ上端ニ突出ス,子房三室,每室二個ノ胚脒ヲ納ム,花柱一個,絲狀,柱頭一,果實ハ蒴略木質ニシテ花後増大セル蕚ノ基脚ニ半包括セラル,實熟スルニ及ビテ頂端ヨリ三個ニ裂開ス,種子一個罕ニ二個アリ,種子ハ往々果皮內ニ在リテ發芽セルヿアリトイフ,子葉多肉,大小アリテ大ナルハ小ナルヲ包括ス,胚乳ヲ有セズ

龍腦ヲ採ルニハ樹ヲ伐リ縱ニ割ルニ內ニ帶黃白色透明ニ凝結セルモノアリ即チ龍腦ナリ,而シテ一樹ヨリ得ル處ノ量ハ樹ノ老若ニヨリテ異ナリ,樹ニヨリ十乃至十二ポンドヲ得ルトイフ,本樹ハ龍腦ノ他ニ龍腦油ヲ生ズ,此油ハ樹ノ切口ニ竹筒ヲサシ少量ヅヽ集メ濾過シテ而シテ後壜ニ貯フ

附言　本樹ハ其材緻密ニシテ堅ク舟板ヲ製スルニ最良ナリトイフ

再ビヤドリノ寄主ニ就テ

前號雜錄中ヤドリキノ寄主ノ項中ニヒノキバヤドリキガイヌグスニ寄生スルトアリシハヤブニクケイノ類ニ寄生スルト改ム又會員牧野氏ノ話ニ此植物ハソヨゴ及アカツツジニモ寄生スルモノヲ見タリトノヿ也

再ヒ蘇鐵ノ花ニ就テ

前號ニ記シタル行德ノ小川氏(中村氏ト記シタルハ誤)方ニ開キタルモノハ雄花ナリシ(蘇鉄ハ元來雌雄其株ヲ異ニスルモノ也ト云)此花ハ圓錐狀ヲナシテ二尺程ノ長サアリ其有樣ハ松毬ノ如クニシテ黄色ヲ呈シ夥多ノ鱗片ヨリ成リ各片ノ下面ニハ花粉附着セリ其樹ハ今ヨリ三代前ニ植タルモノニシテ今年ニ至リ始メテ開花シタリト云フ又東京本鄉龍岡町某牛肉舖ノ園中ニモ開花セシカ之レモ雄花ナリ又下總ノ國八幡村邊ニテモ開花シタル者アリト云其形狀ヲ聞クニ亦雄花ナルガ如シ小石川植物園ニテハ其門ヲ入リテ少シク進ミタル所ニ數株ノ蘇鉄ヲ植エアルガ折々花ヲ著クルヿアリトノヿ也先日會員澤田氏ヨリ今年モ花ヲ着ケタル如シトノ話ヲ聞キタル故ニ往テ之ヲ見ルニ花ヲ開キタル者二株アリ何レモ雌花ニシテ其狀ハ莖ノ頂端ニ葉ノ不完全ナル如キモノヲ叢生シ其面ハ褐色ノ毛ヲ以テ密ニ被ハレタリ而シテ此不完全ナル葉狀ノモノノ中ニ就テ其柄ニ當ル部ニ子實ヲ附著シ居ルモノアリ通例一柄ニ四個アリ是レ他日成熟スルトキハ美紅色ヲ呈シ栗子大トナルモノ也此柄ヲ折ルトキハ無色透明ニシテ極メテ粘濃ナル液ノ流出スルヲ見ル之レハ「ゴム」ノ類ナリヤ否ヤ余ハ之ヲ詳ニセズ職ヲ同園ニ奉ズル內山氏ノ話ニ先年橫濱ヨリ購求セシ蘇鉄ニ實ヲ結ビタルヿアリ之ヲ播種セシニ發生セザリシト云フ之レハ其種子ガ不完全ナリシニ因ルナランカ本年モ雌花ハ開キタルモ近傍ニ雄花ヲ見ズ完全ノ種子ヲ得ルハ或ハ覺束ナキヿナラン過般來吾人ハ偶然ニモ蘇鉄ニ注意スルニ至リタル故ニ屢其開花ノ報ニ接スルモ或ハ本年ハ東京近傍ノ氣候ガ特ニ蘇鉄ノ開花ニ適セルモノナルカ記シテ以テ讀者諸君ノ敎ヲ乞フ

ミヅアフヒノ根

蓮ノ葉ガ同ジ莖ヨリ發シタル花蕾ノ爲ニ衝キ透サレテ居ルヿハ蓮花ヲ賞シニ行キタル人ノ目ニ屢ハ觸ルヽ所ナルガミヅアフヒノ根モ之レニ似タル所アリ此植物ニテハ幾多ノ根ガ遠慮會釋モナク自分ノ葉柄ノ基部ヲ貫キ居ルヲ見ル也此等ノ塲合ニテハ其植物ノ自身ノ体ノ一部ガ盛ニ發育スル爲

ニ他ノ部ヲ器械的ニ傷害スルニ至リタルモノ也

アサガホノ花冠

サンシキスミレノ花冠ノ或ル一部ニハ各細胞ヨリ一個々ノ突起ヲ外面ニ向ツテ挺出シ居ルヿハ Bessey 氏ノ書カ何カニテ見タルガ此頃アサガホノ花冠ノ表面又ハ裏面ヲ檢セシニ恰モワサビオロシノ如ク猫ノ舌ノ表面ノ如ク無數ノ突起ヲ並列シ頗ル美觀ヲ呈スルヲ見ル此花冠ニ水ヲ注グ𪜈ハ荷葉ノ面ニ於ケル如ク水珠ノ跳ルヲ見ルハ此突起アルガ爲ニ然ルナルベシ蓋シアサガホニテモ花冠ノ外面ヲ造成スル各細胞ヨリ一個々ノ突起ヲ挺出シ居ルモノナラン尙精シク檢査セシ折モアラバ再報スベシ

以上四件　S. M. 生　報

日本ニ產スル高等生物ノ種數

曾テ松村博士ノ編セラレタル日本植物名彙ニ就テ吾人ノ通常稱スル高等植物即顯花植物ノ種數ヲ算スルニ雙子葉類一千七百二十餘種單子葉類五百十餘種裸子類四十餘種通計二千二百七十餘種ヲ得タリ勿論同書ニハ外國產ニテモ日本ニテ能ク知ラレタル植物例之バ紫檀ノ如キモノモ載セアルガ故ニ純粹ノ本邦植物ノ種數ハヤヤ前述ノ數ヨリ減ズベシト雖同書ノ刋行以來已ニ數年ヲ經タレバ之レニ加フベキ本邦產ノ種類モ數多發見セラレシナラン又當時已ニ發見サレ居リシモ確乎タル學名ヲ有セザリシガ爲ニ同書ニ漏レタルモアラン故ニ差引スル𪜈ハ日本高等植物ノ種數ハ現今知ラレ居ル所ニテハ先ヅ前述ノ數ニ多クハ超過セザルベシト思ハル却說吾人ノ通例稱スル高等動物即有脊椎動物ノ種數ヲ以テ高等植物ノ種數ニ比較セバ如何ナル割合トナルカト尋思スレ𪜈久シク之ヲ計算スル方便ヲ得ザリシニ幸ニ近頃發兌ニナリタル岡田信利君ノ編纂ニ係ル日本動物目錄ヲ得ルニ因リ之ニ就テ計算スルニ哺乳類八十餘種鳥類三百九十餘種爬虫類三十餘種兩栖類二十餘種魚類六百餘種通計一千一百餘種ヲ得タリ因テ兩者ノ種數ヲ比較スル

ニ植物ノ方ハ動物ニ殆ト一倍セリ回顧スルニ吾人ノ祖先ハ少クトモ二千五百有餘年間此生物ニ富ミタル國土ニ住居シ殊ニ高等ノ動植物ヨリハ種々ノ利益ヲ享受シ居リタリト雖其種數ニ就キテハ實ニ概略ノ觀念ヲモ得ルヿ能ハズ漫ニモモチドリトカ千紫萬紅トカ稱シテ詩人風歌人樣ノ思想ヲ有シテ滿足シ居タリシモ今ヤ兩君ノ編纂アルカ爲ニ吾人ハ容易ニ其概數ヲ比較スルヿヲ得實ニ我邦動植物學進步ノ一徵トモ稱スベシ勿論兩君ノ編纂以前ニモ動植物ノ名稱ヲ列記セルモノナキニ非ルベシト雖內外ノ諸書ヲ參酌シテ學名ヲ考定シ集メテ大成スルノ勞ヲ取ラレタルニ至リテハ吾人ノ深ク謝スベキ所ナリ然リト雖吾人ノ希望ハ此ニ止マラズ本年本月ヲ以テ吾人ハ日本高等生物ノ種數ヲ比較スルヲ得タリ下等生物ノ概略ノ種數ヲ比較シ得ルハ果シテ何レノ時ニカアラン明治四十年カ將タ五十年カ思フテ此ニ至レバ黯然トシテ筆ヲ擲タザルヲ得ザル也　　ア．キ．生

とろゝあふひの花の色

瓣の色は元と黄色なるを本分とし紅紫青等は皆其黄色より漸く進み變れるなり而して其變遷せる順序を尋ぬるに黄より白若くは薄紅を常とし夫より紅紫となり終に青となれるなりとアレン氏の花色論に見へたり又瓣の內底若くは全面に黄の外なる色あるは媒虫の眼に就き易き爲にして此等の色は概ね斑點若くは線條をなせり誰人も知る如く彼の樺色なるおにゆりの瓣に褐色紫色の斑點ある如きは實に媒虫の眼を誘ふものより外は考ふる能はず色條ある時は概ね瓣の先端より內底に向て走れり之れ花蜜の位置を媒虫に知らしむる爲めの導標なり」扨てとろゝあふひの花は淡色大輪にして頗る清麗宛も俗塵を脫して世を幽邃閑雅の地に避くるものゝ如く其內底に濃き褐紫色を存し以て花蜜の所在を示せり而して雌雄兩蕊は花の中央に直立して柱狀をなし雄蕊は雌蕊を繞圍して黄粉を吐き雌蕊よりは先きに成熟す而して雌蕊の柱頭は五裂にして瓣の內底と同一なる濃き褐紫色をなせり

前に引きたるおにゆりの雌蕊も頗る長くして柱頭は瓣の斑點と同じく褐紫色なり斯く柱頭に色ある所以を考ふるに蓋し雌蕊の柱此二種ともに隨分長き故に蝶虫飛來りて花蜜の在る所に頭を突入るとも或は柱頭に觸れざるの虞あるを以て先づ蝶虫の眼を誘ふ導標と同一の色を以てして虫をして之に向て來らしむる爲ならん

偶ま余の小圃に栽培せるものに就き心附きたる儘を記し聊か理屈を附けて雜報の種子とせり右の外數多の植物に就き注察せば又同一樣なる類あらん暫く記して世の識者に質す　岡村

まめ類の葉

なたまめ, おはまめ, あづき等の葉は共に三小葉より成り側生の二小葉は短き小葉柄を具し, 頂生の第三小葉は長き小葉柄を有し, 何れも葉と葉柄と接する所に關節をなし, 之に因て此等三小葉の起伏運動を生ず赫々たる炎天には頂生の小葉漸く起立して莖の方に向ひ, 其小葉柄と殆ど直角を爲すに到り, 側生の小葉も亦起立して稍相閉合する傾あり, 然し頂生のもの程には著しからず, かくて日漸く傾き若くは影となる時は又漸次元に復して充分に展開せり, 之に因て考ふるに, 日中炎熱の盛なる時は小葉起立して幾分か光熱を避くるには非るか

此運動は唯日中のみにはあらすして夜間は全く反對の運動をなせり, 日既に落ち暮色四合するに到れば各小葉開きたるまゝにて漸く下垂し夜更るに隨て殆ど總葉睡眠す, 余之を實驗せんとし去る廿六日の夕より深夜まで時々注意せしに, 二時頃にもなれば庭の草木も皆打濕りて, あさがほの葉なども垂れ, 何となく蕭然たる樣子なりしより, 實に草木も眠ると云へる語も思ひ出でられて共儘眠に就きたり, 斯く葉の垂れて眠るは夜間蒸發を防ぐ爲にして, ねむりぐさ, かたばみなどの眠ると同一なり

此等の事は既に大方の君達の知る所ならんと思へども余の注察したる儘を報ずるになむ　岡村

不忍池の蓮

おのれ先月の末根岸なる友がり行きける歸るさ，不忍池のほとり七軒町を通りたるに，池の中央に男女あまた立集いて何にやら頻りに俯きて物見る樣子なりしが，又〻辨天の裏手より一二艘の小舟に許多の人〻を載せて其處に漕ぎ來り入更り立更りて人〻の來ける故何事にやと傍へなる人に問ひたるに，さればとよ，あれは先頃此池にいと大きなる蓮の葉生ひ出でしが其大きさは直徑八尺もありて所々一面に刺を生じ花は紫色なり，何にしても見馴れさるものなればこそ斯くは觧代二錢づ〻にて見するなり，見て來たる人の話には八尺程とは云へど夫程にもあらず彼是雨傘位はあるべし，然し蓮の葉とも云へぬものよ，一日に四五十圓の收入はあり最早や先達てより彼是四五百圓にはなりたるならんと聞きもせぬをまで自分の慾につまされて語りたるもおかし，おのれ此話によりて考ふるにさてはオニバスにもやあらん，嘗て此池にオニバスありとは聞かされど元とよりありしにや，或は或他より種子の來りしにや，さても東京は物見高き事よ，池の中の蓮迄も少し變れりと云へば知るも知らぬも一樣に船賃出して見物するとは實に目明き千人盲千人の世の中，はて何ぞ金儲けがあらん瓜の蔓に茄子もがなと慾の皮を張るものは X. Y. Z.

こうしんさうノ採集記

野州庚申山上奇草アリ新稱ヲ庚申草 (Pinguicula ramosa Miyoshi) ト謂フ明治二十三年八月四日三好學氏ノ發見採集ニカヽル惜哉其當時花既ニ辭シ果結フノ候充分形態學上ノ詳細ヲ知ルニ難カリシ本年其開花期ヲ俟テ是カ採集ヲ企圖ス然ルニ齋田功太郎氏三十有餘名ノ高等師範學生ヲ引率シ隊伍整々肅々七月二十二日黎明庚申山ノ先登第一著ノ功名ヲ博ス全山ノ草木ニ靡然トシテ降服シ生擒無算盡ク花筒ニ收メテ歸ル後レカケニ予ハ仝月二十八日登山ス至ル處一ノ植物ナシ伯樂一タヒ庚申ノ嶺山ヲ過キテ山中草木

ナシ草ナキハ草ナキニアラサルナリ良草ナキノ謂ナリ庚申山大ナリト雖𪜈庚申草ノ生育區域甚タ小而メ植物ノ伯樂其人ニシテ然モ數十名ノ小伯樂ヲ引具シ山中ヲ蹂躙ス如何ソツ一ノ遺類アランヤ如何ソツ一ノ生存アランヤ遂ニ空シク一ノ開花セルモノヲ得スシテ歸ル

庚申草ノ花色

庚申草ハ六月下旬ヨリ七月中旬ニ開花スルモノヽ如ク其色淡紫色ニシテ距部 (Spur) ニ於テ黄色ノ斑點アリ又花ノ白色ナルモノアリ

Pinguicula ト庚申山

去歲八月三好學氏一タヒ庚申山ニ採藥シ山上ノ巖石陰濕ノ處一種ノむしとりすみれ生育スルヲ發見シテ以來特ニ其世界ニ新種ナルヲ以テ植物家幷ニ植物嗜好家間ニハ大ニ其名ヲ知ラレタリ山僧爲ニ得色アリ常ニ登山ノ人ニ吹聽シテ曰ク本山奇草アリむしとりすみれト謂フ匙狀ノ小葉叢生シテ白紫ノ花ヲ咲ク其葉邊緣卷テ小蟲ヲ補獲ス他處之ヲ產セス庚申山ノ聖靈ナル所以ト是ヨリ該山益々登山者ヲ增スナル可シ一擧ノ發見其力又大ナリト云フ可シ

如峯ノ匍松

日光ニ高山五アリ男体,大眞名子,小眞名子,如峯,赤薙ト謂フ男体最モ高峻高サ六千五百尺如峯之ニ次ク嶷々トシテ地上ヲ匍匐シ山巓五鬚松 (Pinus parvifolia) 多ク幹莖ノ大サ直經三四寸ニ過キズ頂巓全ク此樹ヲ以テ覆ハル日光山誌著者ハ曰ク如峯ノ匍松本幹ノ所在ヲ知ラス枝稍嶷々トシテ山頂ヲ覆フト予ハ此ノ記事ヲ信セサリシ雖𪜈男体山ノ四邊庚申山,白根山·太郎山,等一モ五鬚松ヲ見ス然シテ如峯之レヲ生ス其分布ノ奇ニシテ一見ノ價値アルモノト思ヒ八月十五日登山實見シ初メテ知ル山誌著者ノ過大ノ妄言ナルヲ

赤名古ノ槭樹

日光ヲ去ル里半泣蟲山中赤名古村ノ林中一大老槭樹 (Acer pictum ?) ア

リ幹ノ大サ連抱屈曲凸凹贅塊無數地ヲ去ル數尺分レテ三枝トナリ各面分岐シ枝稍四方ニ垂レテ形狀天蓋ノ如シ樹下數十人ヲ入ル可ク密葉日光ヲ遮リ雨露ヲ漏サス眞ニ名木ト云フ可シ名ヲ聞キ尋ネ至ルモノ多シ然レ𪜈逆路多クシテ容易ニ至リ難ク空シク歸ルモノ多シ

Viscum album ノ寄主

北海道札幌ニアツテハ主トシテ楡 (Alnus campestris, Sm. var. vulgaris, Planch.) ノ枝上ニ寄生ス特ニ其溪流ニ沿フテ生育スル處ノ樹ニアリテハ最モ多ク之ヲ見ルほやノ寄生セル楡ハ殆ンド溪流叉ハ沼池ニ臨ムノ事實ハ大ニ學術上ノ Interest ヲ有スル事ト信ス如何ントナレハほやノ種子ハ常ニ鳥ノ媒助ヲ待テ撒布スルモノナルカ故ニ今水邊ノ楡ニほやノ寄生多キ事實ハ或ハ一種ノ水邊ニ棲息スル鳥ノ爲メニ斯ノ如キ奇異ノ分布ヲナスモノナルカ或ハ寄主叉ハ外界ノ生理的ニ基クモノナルカ

（以上六件　堀　正太郎報）

へちまノ氣根

平瀨作五郎氏ノ邸內ニ栽培ノへちまハ本年盛ニ氣根ヲ出セリト而シテ其最モ長キハ四尺餘アリト氏ノ觀察ニヨレバ氣根ヲ最モ多ク生ズルハ橫行セル莖枝即チ地面ニ平行セルモノヨリス斜上ナルモノニハ生シ方少シ而シテ上昇セルモノニハ土ギハノ處ニ一二本生ズルモアレド大概ハ更ニナキ由ナリ右氣根ノ地上ニ達セシ時地面ニ濕氣多ケレバ直チニ地中ニ入リ根毛ヲ生シ枝ヲ出ス然レドモ地面乾燥ナレハ地中ニ入ラズ地上ヲ匍匐シ終ニ枯死ス若シ此ノ如キ場合ニ於テ其達セシ根ニ土ヲ覆フヘバ根毛ヲ生ジ枝出スルヿ前者ト同シナリトイフ

新刊植物書

日本植物圖解第一册第一號　此ノ書ハ理學博士矢田部良吉氏ノ著ナリ本書ハ目下氏ガ著述中ナル日本植物編ヲ說明スルノ用ニ供センガ爲メニ著ハサレシモノナリ本號ニ載スル處モノノハ十字花科ノはまはたざを，虎耳

草科ニテきれんげしようま，だいもんじさうノ變形五個，茜草科ニテしてうげ，はくてうげ，だんてうけ，菊科ニテさつまのぎく，櫻草科ニテとさゞくち，ひなざくら，水蓑衣科ニテいせはなび，唇形科ニテあきゞり馬兜鈴科ニテかんあふひ，蘭科ニテがんぜきらん，びらうどらん，はちぢやうしゆすらん，百合科ニテいはしやうぶナリ而シテ各鮮明ナル圖並ニ英文和文ノ詳細ナル解説ヲ附セリ苟モ植物學ニ志ザス者ハ必ズ座有ニ備フベキ一大頁書ナリ

◆

植物學雜誌

第五卷　第五十六號

明治廿四年十月十日

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 56.

October.　1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

動物學雜誌

第參拾五號目錄
明治廿四年九月十五日發兌

○三崎ノ櫛水母　中西準太郎君
○鳥雜記（四）　飯島魁君
○うみがめノ產卵ニ就キテ　箕作佳吉君
○動物解剖手引草（承前）　岩川友太郎君
○寄書
●動物聲音考第十六　野村彦太郎君
●眞珠の說　二宮生
○雜錄
●臨汀採集者ニ寄語ス●あさけとんぼ●蛙が蛙を呑む●福島近傍產蝶目錄ノ正誤●相州三崎帝國大學臨海實驗所概況●實驗所室內ノ水族館●ウエスト氏ノ厚情●ぺんたくらいなす採集法●いとひきぱて●くらげノ子供●いぼくらげ●脚氣病人日記拔萃●三崎ニ於テ獲タル外部寄生吸蟲●新刊書●日本動物總目錄●遺傳（承前）
○東京動物學會記事

定價　壹部　金拾錢

發行所　東京神田區裏神保町一番地　敬業社

牧野富太郎君著

日本植物志圖篇

每月壹回發行

第十一集　本月九日出版　第一集再版出來
（第二集不日再版）一册正價二十錢郵稅貳錢

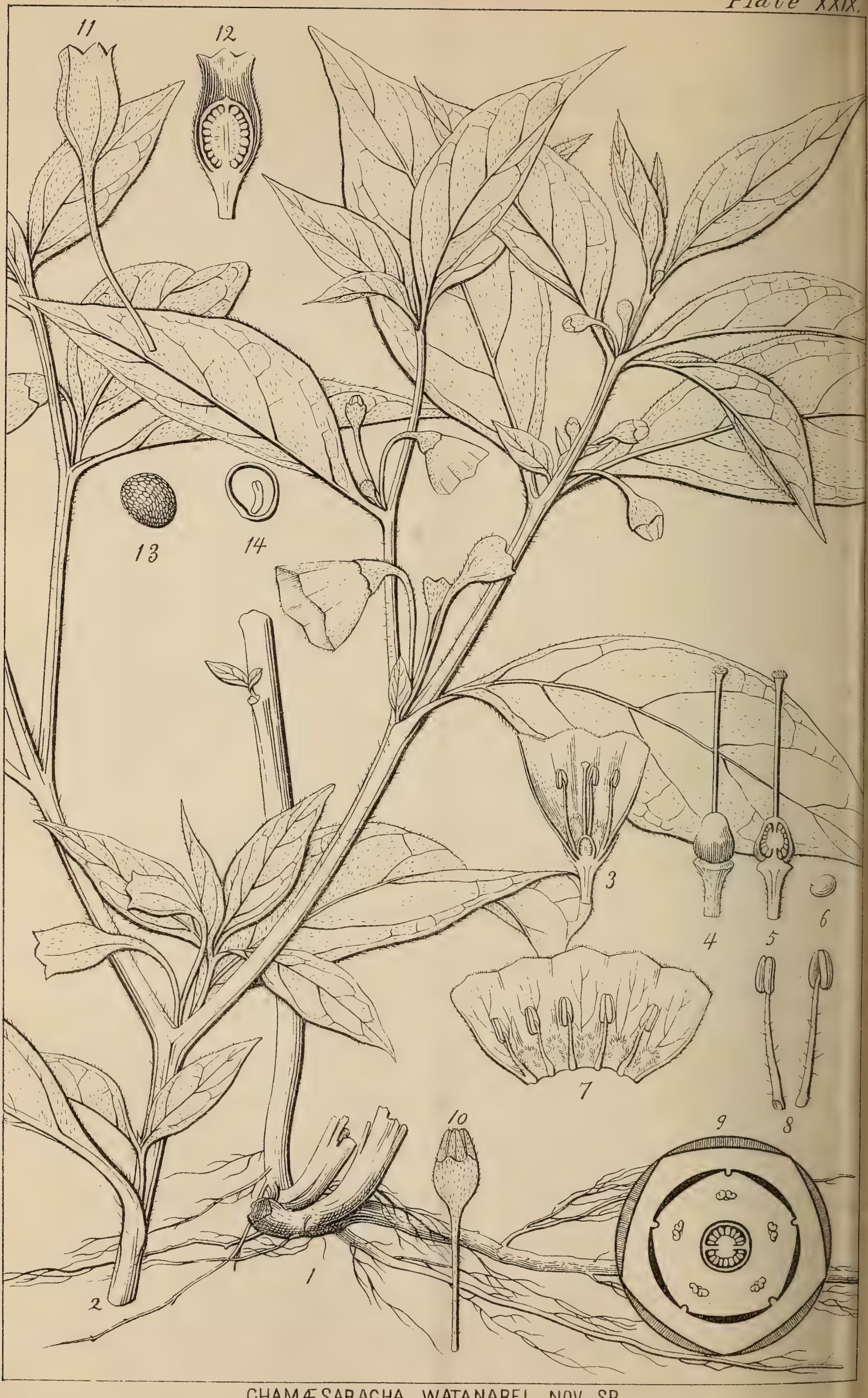
發兌書肆　東京神田區裏神保町　敬業社

地學雜誌

第三十三卷　九月廿五日發兌
定價一册金十錢郵稅金一錢六册前金郵稅共五十四錢十二册前金一圓八錢

◉論說
●日本群島（承前）　理學博士ドクトル　原田豐吉君述　理科大學々生　脇水鉄五郎君譯
●日本植物帶　ドクトル　マキス、フェスカ君
●土性編　農學士　恒藤規隆君
●河流の說（承前）　理學士　奈佐忠行君
◉雜錄
●鹽灰の分析試驗　農商務技師試補　東條平二郎君
●本邦土性の要領　仝
●すゞみ臺（第二十四卷續）　大川通久君
●長崎縣の地貌　理學士　奈佐忠行君
◉雜報
●原田氏の書簡●新刊地理學書●歐洲の人口統計●千八百九十年印度の石炭採掘高●列國地理學會議●ヴヰクトリア州黃金產出高●世界開明諸國の資本と其投入地との關係●炭坑の爆發●北海道地質雜報●訃音●山上氏よりの來狀●中亞細亞鐵道敷設の計畫●メートル法度量衡の新文字●霧島嶽の噴火●六分間震ひ續けし長地震●海底の遺利●水路告示第四百九十五號●荒川の埋木
◉質疑　二件
◉應問　二件
◉地學會記事
●會員の移動●寄贈書目

發行所　地學會事務所
賣捌所　東京神田區裏神保町　敬業社
同　同日本橋區通三丁目　丸善書店


11
12
13
14
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2

CHAMÆSARACHA WATANABEI, NOV. SP.
FUJI–HOZUKI. フジホヽヅキ

植物學雜誌第五卷第五十六號
明治廿四年十月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. October 10, 1891. No. 56.]

New or Little Known Plants of Japan.

No. 12.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

MEIJI GAKUIN
LIBRARY

Chamæsaracha Watanabei, nov. sp.

Nom. jap. Fuji-hōzuki. フジホヽヅキ.

Solanaceæ.

(Plate XXIX.)

Chamæsaracha japonica, Franchet et Savatier, Enum. Plant. Jap., vol. ii., p. 455, pro parte.

A perennial herb. Rootstock short, with thick roots. Stem angular, slightly hairy, 1—2 feet high; branches subdichotomous, divaricate. Leaves exstipulate, alternate, often 2 or 3 together and unequal in size, ovate-lanceolate, tapering at the apex, narrowed into winged petioles at the base, entire or slightly repand, minutely ciliate at the margins, scattered with appressed jointed hairs on the upper surface, less hairy on the under surface, minutely scaly under the lens on both surfaces; large leaves 5 inches long, 2 inches broad; ordinary ones 2—3 inches long, 1—1½ inches broad; petioles usually 3—4 lines long, long ones about 1 inch long. Flowers about ½ inch across, solitary or 2—3 together, axillary, nodding, on slender pedicels of ½—¾ inch. Calyx crateriform, broadly 5-toothed, minutely pubescent, ciliate at the rim. Corolla open-campanulate, obscurely 5-lobed, minutely pubescent on the outside, minutely ciliate at the rim, densely hairy inside towards the base, plicate in bud. Stamens 5, alternate with the lobes of the corolla; filaments much longer than the anthers, subulate, hairy, attached near the base of the corolla; anthers versatile, oblong, extrorse, 2-celled, dehiscing longitudinally, about 1 line long. Ovary ovoid, 2-celled, about 1 line long; style filiform, 3 lines long; stigma capitate; ovules numerous on thick axile placentæ, anatropous. Berry pendulous, ovoid, 5—6 lines long, 3—4 lines broad, closely but incompletely invested with the accrescent membranaceous calyx, the apex of which projects beyond the berry. Seeds numerous, subreniform, compressed, $\frac{3}{4}$ line long; testa dark, concentrically favoso-rugose, albumen copious; embryo excentric, somewhat curved; cotyledons short, semiterete; radicle next the hilum.—Fl. July. Hab. Shady woods in mountains.

Specimens of this plant were collected by Mr. Kanō Watanabe on July 11, 1888, in the Tsue mountain in the province of Tosa. They were again collected by him and Mr. Sadahisa Matsuda on July 30, 1891, on Mt. Fuji. Besides these I have specimens with fruit only collected at Nikkō on October 5, 1879.

There are two different forms of *Chamæsaracha* in Japan; both are perennial herbs. One is the present species, and the other is known as *Iga-hōzuki*. Franchet and Savatier in their *Enumeratio Plantarum Japonicarum* seem to have united these two forms under the name of *C. japonica*. The present species has ovate-lanceolate leaves, much larger flowers, and ovoid fruit enclosed in the membranaceous calyx projecting considerably beyond the berry. The other, which I shall distinguish as *C. echinata*, has broadly ovate leaves, much smaller flowers, and globose fruit enclosed in the leathery calyx which is prickly and does not project beyond the berry. These two forms are very distinct, and may be regarded as different species. The former corresponds to the plant Franchet and Savatier obtained from Nikkō. These authors say: "La plante de Nikô appartient à la forme glabrescente et ses feuilles sont en même temps plus étroites, ses pédoncules solitaires." The latter, which is more common, corresponds to the plants these authors obtained from Japanese botanists. They say: "Les formes reçues des botanistes japonais......sont beaucoup plus robustes, un peu velues; les feuilles sont plus larges, obtuses; les pédoncules réunis au nombre de 2-5; le calice est couvert de poils crustacés, crépus;............"

The present species chiefly differs from *Chamæsaracha? heterophylla*, Hemsl. (Journ. Linn. Soc., vol. xxvi., p. 174.) in the calyx not being scurfy and in fruit not entirely enclosing the berry, and in the seeds not being pale. It also differs from *C. sinensis*, Hemsl. (loc. cit.) in the leaves not having very long petioles, the calyx not entirely enclosing the berry, and the seeds not being pale and obscurely reticulate.

Plate XXIX. Fig. 1, lower part of plant with bases of old stems; 2, upper part of plant; 3, flower cut vertically; 4, ovary and style; 5, vertical section of ovary showing the attachment of ovules, 6, ovule; 7, corolla laid open showing the stamens; 8, dorsal and ventral views of stamen; 9, floral diagram; 10, flower-bud; 11, fruit; 12, vertical section of fruit; 13, seed; 14, vertical section of seed showing the embryo:—*all except 1,2 and 11 enlarged.*

No. 13.

Viola deltoidea, nov. sp.

Nom. jap. *Tachi-sumire.* タチスミレ.

Rootstock short. Stem smooth, more than a foot high. Cauline leaves erect, smooth, oblong-deltoid or lanceolate-deltoid, acuminate, truncate or somewhat cordate at the base, entire or minutely and remotely serrate, 1½—2½ inches long, 6—10 lines broad; petioles winged above, 1—2 inches long. Stipules free, herbaceous, linear, acute, entire or with a few teeth, ½—1½ inches long, 1—2 lines broad. Peduncles axillary, slender, shorter than or equal to the leaves, bracteate above the middle, bracts subulate, 1½ lines long. Flowers small, 3 lines long. Sepals lanceolate, acute, about 2 lines long; the appendages at the base short, obtuse. Petals oblong, white with purple streaks, 3 lines long, the lateral ones beardless; spur very short. Stigma capitate — Fl. June.

Specimens of this plant were collected by Mr. S. Ikeno on June 24, 1888, at a marshy place known as Toda-no-hara near Tōkyō.

As I have only two specimens, one with a few flowers and the other without any, I cannot minutely examine the characters of the flower. This species is related to *V. Thibaudieri* of Franchet and Savatier,* but these authors state that the leaves of the latter are attenuated into short winged petioles and exceedingly acuminate at the apex, and their form is elliptical according to Maximowicz.† The stipules of the latter are also stated to be ciliato-pectinate, and the petals bearded.

---

* **Franchet et Savatier, Enum. Plant. Jap., vol. ii., p. 290.**

The Plant figured in the *Sōmoku Zusetsu* (vol. xvii , fol. 60.) under the name of *Tachi-sumire* seems to be the same as the present plant.

No. 14.

Viola vaginata, Maxim., var. angustifolia.

Nom. jap. *Nagaba-no-sumiresaishin.* ナガバノスミレサイシン.

Acaulescent. Rhizome thick, articulated, emitting thick roots. Stipules free, brownish, ovate-lanceolate, acuminate, ciliate at the margins, 3—6 lines long. Leaves smooth, somewhat sagittate, acuminate, cordate at the base, crenate-serrate, 1—3 inches long, $\frac{1}{2}$—1 inch broad; petioles thickened towards the base, 1—4 inches long. Peduncles with brown streaks, about as long as the petioles. Bracts above or below the middle of the peduncles, subulate, acuminate, 2—4 lines long. Flowers large, 8—10 lines long. Sepals lanceolate, rather obtuse, 3—4 lines long, 1—1$\frac{1}{2}$ lines broad, the appendages at the base irregularly toothed, about 1 line long and broad. Petals beardless, obovate, pale-violet, striped with deeper-colored veins; spur scrotiform, shorter than the sepals. Ovary ovoid, acute, about 1 line long; stigma marginate — Fl. April.

---

† Maximowicz, in Mél. Biol., vol. ix., p. 756.

My specimens of this plant are from the Amagi mountain in the province of Izu and Nanokawa-mura in the province of Tosa.

This variety differs from the type chiefly in the form of the leaves; those of the latter being deeply and broadly cordate, and abruptly acuminate.

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員 澤田駒次郎

第五十五號正誤 (286) ノ第八行廿五字目子,ハチ,ノ誤仝第廿二行五字目量ノ下ナルノ二字ヲ脱ス(288) ノ第十四行十五字目チ,ノ, ハ不用仝第廿五行七字目C_7HSOハC_7H_8Oノ誤

醫治効用　衝動,袪痰ノ一頁藥トシ慢性氣管枝炎,僂痲窒斯,喘息ヲ治シ傷冷毒ヨリ發スル頑固ノ袪痰,肺管ノ痙攣ヨリ起ル欬ニ効アル又勞瘵羸痩病,久欬喘息,淋疾後尿道ノ諸器弛緩虚衰シテ淋瀝休マス或ハ白液ノミ漏泄シテ治セサル症等ニ用ヒテ効驗アルハ骨湃波抜爾撒謨ニ同シ

百露抜爾撒謨ハ專ラ石鹼製造用トス柔軟乳酥様ノ泡沫ヲ以テ洗淨スルニハ此石鹼ヲ用ヒ又冬月手足ノ胼胝（アカギレ）ヲ洗ヒテ効アリ

薩爾瓦多耳ヨリ一種ノ抜爾撒謨ヲ產出ス之ヲ百露白抜爾撒謨 (Balsamo blanco) ト名ク此レ皮部ヲ剝除シタル子實ヲ壓搾シテ得タルモノナリ

本品ハ最初黄色ノ半流動體ニシテ粒狀ヲ爲シ之ヲ放置スレバ白色不透明ノ樹脂ヲ結晶シ其上層ニ澄明ノ液ヲ有シ香氣稍々草零陵香ニ似テ佳快ナラス間マ篤留抜爾撒謨ニ混和ストナ雖𪜈之ヲ鑒別スルコト容易ナリ *Stenhouse* 氏ノ調査ニ據レハ百露白抜爾撒謨ハ中性ノ樹脂ニシテ之ヲ Myroxocarpin ト稱シ無色無臭ノ結晶ニシテ扁平稜柱狀ヲ爲シ其長サ八分五厘許溫酒精,依的兒ニハ溶解スト雖𪜈水ニハ溶解セス但シ百露白抜爾撒謨ハ高價ニシテ賣品ニハ少レナリト又子實ヲ砂糖水及ヒ酒精中ニ浸出スルトキハ設里酒色ノ

液ヲ得ウ之ヲ Balsamito ト云フ

本品ハ衝動,利水,驅蟲ノ一藥ニシテ疝痛,子宮衝逆,歇私的利亞等ニ內服シ壞疽等ニ外敷シ顏面ノ斑點ニ洗藥トス

廿五　トルイフエラ,バルサミユム

羅甸名　Toluifera Balsamum. *Linn.*

荳科

南亞米利加ニ自生スル喬木ニシテ幹直立伸長高サ八十尺許皮部平滑黃灰色若クハ褐色ヲ呈シ無數ノ白斑ヲ散布シ間々地上ヨリ五十尺許ノ間枝杪ヲ有セサルモノアリ葉ハ奇性翼狀ニシテ百露拔爾撒謨樹葉ニ似テ稍々矮短小葉四片乃至七片細小ニシテ底部ヨリ先頂ニ彎曲シ邊緣皺紋ヲ有セス嫩葉ノ他ハ腺點著明ナラス葉柄椎及ヒ葉柄ハ毛茸ヲ有セス枝杪ノ上端ヨリ花梗椎ヲ抽クコト三四寸ニシテ總狀花ヲ綴ル花梗ハ長サ四分餘蕚ハ筒狀ニシテ廣濶長サ二分强斜メニ附着シ外面粗毛ヲ帶ヒ平行脉絡ヲ有シ底部厚重先頂剪頭狀ヲ爲シ通常三個ニ缺刻シ上部ノ二片ハ廣濶三角形ニシテ稍々側方ニ在リ下部ノ一片ハ正面ニ在リ此レ三片ノ互ニ附着セシモノトス花瓣ハ百露拔爾撒謨樹ニ似テ旗瓣ノ下部ハ線狀ヲ爲シ翼瓣及ヒ小舟瓣ハ皺紋ヲ有セス花絲ハ蕚ニ因テ覆ハレ其葯背部ニ因テ花絲ノ頂端ニ附着ス子實ハ大ィニシテ稍々眞直長サ三四寸其柄矮短長圓形ニシテ翼ヲ有シ其幅殆ンド均等ニシテ中部微ニ膨脹ス種子ハ腎臟形ニシテ略ホ百露拔爾撒謨樹ニ同シ

本植物ハ委內瑞辣 (Venezuela) 新加拉那大 (New Granada) ニ自生ス *Linden Goering* 等ノ諸氏ハ加拉架(Caracas)近傍ニテ之ヲ採集シ *Seemann* 氏ハチユキユヨ河岸(Tucuyo River)ニ於テ蕃殖スルヲ目擊スト又 *Houston* 氏ハ十八世紀ノ始メニ於テ之ヲカルサジナ近傍ニテ採集シ *Weir* 氏ハ近來馬加他(Rio Madalena)沿岸巴拉多(Plato)ヨリ此標品ヲ携歸ス氏ノ說ニ據レバ鬱蒼タル林相ヲ爲セリト又 *Morales* 氏ハ古巴ニテ本植物ヲ檢出ス氏ノ說ニ從ヘバ往時移植セシモノナラント

藥品 篤留拔爾撒謨 Balsamum tolutanum. 日本藥局方ニハ本植物ノ幹ヨリ滲出セシモノヲ以テ藥用ニ供ス

採收 篤留拔爾撒謨ノ採收ニ就テハ一千八百六十三年ニ於テ Weir氏ハ龍動園藝教會ノ委囑ニ因リ植物採集トシテ新加拉那大ニ至リ「プラト」港（馬加他ノ右岸）ヨリ大約二十英里ヲ隔リタル森林中ニテ目擊セシ景況ヲ報告セリ其概略ハ左ノ如シ

篤留拔爾撒謨ヲ採收スルニハ樹幹ニ二條ノ搔裂ヲ施シ其深サハ皮部ヨリ木部ニ達スルヲ度トシ二線ノ距離ハ上部廣クシテ下部漸次ニ狹隘ト爲シ終ニ兩線互ニ接着ス其形ヲ宛モV字ニ似タリ斯ノ如ク搔裂ヲ施ストキハ其下部ニ於テ皮部ト木部ノ間ニ淺キ凹陷ヲ生シテ拔爾撒謨ヲ滲出ス之ニ葫蘆實ノ器ヲ架附ス斯クスルコト數個互ノ距離ハ僅カノ隔タリヲナシテ一幹同時ニ二十個餘ノ受器ヲ架附ス其高サハ人手ノ達スル所ヲ度トス，然レ𪜈幹ノ下部搔裂ノ傷痕許多ニシテ新タニ施スヘキ部分ヲ有セザルトキハ粗ナル足代ヲ設ケテ幹ノ上部ニ數列ノ搔裂ヲ施シ拔爾撒謨ヲ採收ス而シテ採收者ハ革製壜狀ノ囊一對ヲ驢ノ脊ニ負ハセ時々來リテ受器中ニ瀦溜セルモノヲ納メ再ヒ受器ヲ架附シ此所彼所ト採收ス這樣ニシテ得タル拔爾撒謨ハ船ニテ市場ヘ出タシ鐵葉（ブリキ）製圓壔ノ鑵ニ納メテ歐羅巴ヘ輸出ス此採收ノ時期ハ八個月間ニシテ第七月ヨリ施行ス其滲出旺盛ナルトキハ一個月ニシテ受器ヲ充塞スト云フ又或地ニ於テハ葫蘆類ノ葉ヲ以テ受器ヲ製シ滲出ノ拔爾撒謨ヲ瀦溜セシムル慣習アリト

本品ハ「プラ｜ト」馬加他等ニテ大イニ採收ス故ハンブリ｜氏ノ說ニ據レハ「シニユ」(Sinu)ノ幽谷「コーカ」(Cauca)沿岸ノ森林ヨリ產出スト

新加拉那大ヨリ輸出スルモノハ一鑵大約十磅ヲ通常トスレトモ中ニハ二十五磅餘ヲ有スルモノアリ往時之ヲ葫蘆類ニ盛リ歐羅巴等ヘ輸出セリ生藥學ニ云篤留拔撒謨ハ南米ノ北部殊ニ「マクダレナ」河下流地方及ヒ篤留府ノ近傍ニ產スル Tcluifera Balsamum, *L.* Myroxylon Toluifera, Hamboldtd

Bonpland et Kunth. ナル蛾蝶科 (Papilionaceæ) 屬ノ植物ヨリ採集セル拔爾撒謨ニシテ單ニ該樹幹ノ下部ニ淺穴ヲ穿チ下端相接合シテ銳角ヲ爲セル樣斜メニ二個ノ截溝ヲ附シ其下部ニ淺キ陷窪ヲ設ケ之レニ胡蘆科植物ノ果實(瓜ノ類)ノ果肉ヲ除去シ空洞ナラシメテ裝成セル器或ハ適當ナル器ヲ架附シテ拔爾撒謨ヲ潴溜セシム已ニシテ樹幹ノ下部拔爾撒謨ヲ生セザルニ至レバ漸次疵傷ヲ上部ニ及ホシ一ケ年中八ケ月間拔爾撒謨ノ採集ニ從事ス其拔爾撒謨ヲ皮囊ニ充テ「マクダレナ」ニ位スル一小港ニ輸致シ更ニ鐵葉製ノ鑵ニ詰換シテ各所ニ輸出ス」トアリ

性質　篤留拔爾撒謨ハ柔軟ニシテ凝固スト雖𪜈氣候ノ寒暖ニ因リ其形狀ニ差異アリ又之ヲ貯藏スレハ漸次ニ硬固ト爲リ寒冷ニ逢ヘハ疏脆ナル樹脂ニ變シ久シク時日ヲ經レバ其破碎面ハ結晶狀ヲ顯ハスト雖𪜈之ヲ掌中ニテ暖ムレバ容易ク軟化ス其薄片ハ透明ニ〆テ黃褐色若クハ赤褐色ヲ呈シ强キ芳香ヲ有ス殊ニ溫度ヲ加フルトキハ著シク味ハ快活芳香性ニシテ甘ク之ニ熱度ヲ加フレハ溶融シ强熱スレバ佳香ヲ蒸散ス

本品ハ酒精,哥囉仿謨,剝篤亞斯溶液ニハ容易ク溶解シ依的兒,揮發油類ニハ僅カニ溶解ス

生藥學ニ云篤留拔爾撒謨ハ帶褐黃色柔靱性ノ粘稠液ヲナシ初メハ透映ナレ𪜈時日ヲ經ルニ從ヒ固結シテ帶褐赤色粉碎シ易キ塊トナル其粉末ハ黃色ヲ有ス酒精及ヒ哥囉仿謨ニ溶解スレ𪜈石油的依兒及ヒ硫化炭素ニ溶解セス氣味ハ「百露拔爾撒謨ヨリ佳快ナリ」トアリ　(以下次號)

富士山植物彙報

(前號ノツヾキ)

會員　渡邊　協
同　松田定久

Geraniaceæ. 牻牛兒科

Geranium nepalense, *Sweet.*

ゲンノシヨウコ (三)

,, Sieboldi, *Max.*

タチフウロ (大)

,, eriostemon, *Fisch.*

グンナイフウロ (大)

Oxalis obtriangulata, *Max.*

オホヤマカタバミ (三)

Rutaceæ 芸香科

Bœninghausenia albiflora, *Reichenb.*

マツカゼサウ (三)

Zanthoxylum piperitum, *D.C.*

サンセウ

Orixa Japonica, *Thunb*

コクサギ

Celastrineæ. 衛矛科

Euonymus alatus, *Thunb.*

var. ciliato-dentata, *Fr. et Sav.*

ホソバコマユミ (大)

,, melananthus, *Fr. et Sav.*

サハダツ (大)

,, oxyphyllus, *Miq.*

ツリバナ (三)

Celastrus articulatus, *Thunb.*

ツルウメモドキ

Rhamneæ, 鼠李科

Berchemia racemosa, *S. et Z.*

クマヤナギ

Rhamnus Japonicus, *Max.*

var. decipiens, *Max.*

コバノクロウメモドキ

Ampelideæ. 葡萄科

Vitis coignetiæ, *Pulliat.*

ヤマブダウ

,, heterophylla, *Thunb.*

ノブダウ

Sapindaceæ. 無患樹科

Acer cratægifolium *S. et Z.*

ウリカヘデ (大)

,, rufinerve, *S. et Z.*

ウリハダカヘデ (大)

,, pictum, *Thunb.*

トキハカヘデ

Staphylea bumalda, *S. et Z.*

ミツバウツギ

Anacardiaceæ. 漆樹科

Rhus trichocarpa, *Miq.*

ヤマウルシ (大)

,, Toxicodendron, *L.*,

var. radicans, *Miq.*

ツタウルシ

Coriarieæ. 木本鉤吻科

Coriaria Japonica, *A. Gray.*

ドクウツギ （三）

Leguminosæ. 荳科

Lotus corinculatus, *L.*

var. Japonicus, *Regel.*

ミヤコグサ （三）

Indigofera tinctoria, *L.*

コマツナギ （三）（白花ノモノヲ見タリ）

Astragalus adsurgens, *Pall.*

ムラサキモメンヅル （大）

,, reflexistipulus, *Miq.*

ワウギ （三）

Hedysaram esculentum *Ledeb.*

イハワウギ （大）

Desmodium podocarpum, *D.C.*

ヌスビトハギ （三）

,, Oldhami *Oliv.*

フヂカンザウ

Lespedeza bicolor, *Turcz.*

var. intermedia, *Max.*

ハギ （三）

,, sericea, *Miq.*

メドハギ （三）

,, striata, Hook. *et Arn.*

ヤハズハギ

Vicia unijuga, *Al. Br.*

タニワタシ (三)

,, cracea, *L.*

var. Japonica, *Miq.*

クサフヂ (三)

Pueraria Thunbergiana, *Benth.*

クズ

Cassia mimosoides, *L.*

カハラケツメイ (三)

Albizzia julibrissin, *Durazz.*

ネムノキ

Rosaceæ. 薔薇科

Prunus incisa, *Thunb.*

マメザクラ (大)

,, Maximowiczii, *Rupr.*

ミヤマザクラ

Spiraea Aruncus, *L.*

ヤマブキショウマ (大)

,, Nipponica, *Max.*

イハシモツケ (大)

,, Japonica, *L.*

シモツケ (大)

Rubus triflorus, *Rich.*

var. Japonicus, *Max.*

ゴエフイチゴ (大)

,, rosæfolius, *Sm.*

バライチゴ (大)

" parvifolius, *L.*

ナハシロイチゴ

Geum strictum, *Ait.*

オホダイコンサウ

" Japonicum, *Thunb.*

ダイコンサウ （三）

Fragaria elatior, *Ehrh.*

シロバナヘビイチゴ （大）

Potentilla Pensylvanica, *L.*

var. hypoleuca, *Regel.*

ヒロハカハラサイコ

" cryptotæniæ, *Max.*

ミツモトサウ （矢野）

Poterium officinale, *L.*

ワレモカウ （大島）

Rosa multiflora, *Thunb.*

var. genuina, *Fr. et Sav.*

ノイバラ （三）

" luciæ, *Fr. et Roch.*

var. poteriifolia, *Fr. et Sav.*

テリハノイバラ

" microphylla, *Roxb.*

サンセウバラ

" acicularis. *Lindl.*

var. glauca, *Regel.*

タカ子バラ （大）

Pyrus Japonica, *Thunb.*

var. pygmæa, *Max.*

シサボケ (三)

„ Toringo, *Sieb.*

var. incisa, *Fr. et Sav.*

ズミ (矢野)

„ gracilis, *S. et Z.*

ナンキンナヽカマド (大島)

„ aucuparia, *Gœrtn.*

ミヤマナヽカマド (大)

Photinia villosa, *D.C.*

カマツカ (未完)

日本植物報知 (第十四)

牧野富太郎

MAGNOLIACEÆ. もくれん科

(1) **Magnolia Watsoni** Hook. fil. うけざきおほやまれんげ 我邦ノ書ニテハ伊藤圭介翁著小石川植物園草木圖說ニ出ヅ我邦西南山地ノ產ナラン

BERBERIDACEÆ. めぎ科

(2) **Akebia lobata** Decne. **var.** *β*. **pentaphylla** Makino. ごえふあけび(新稱) Leaflets 5. 每ニ小葉ハ五數ナリ故ニ變種トシ本種ニ分ツ 相州箱根, 土佐吾井鄉(幷ニ予)

ARALIACEÆ. うど科

(3) **Aralia spinosa** Linn. *α*. **glabrescens** Franch. et Sav. たらのき葉ニ刺ヲ有ス 土佐(予)

β. **canescens** Franch. et. Sav. (=A. canescens Sieb. et Zucc.) めだ

ら 葉ニ刺ナク葉裏白毛密布ス 武州道灌山,土佐佐川村(幷ニ予)

COMPOSITÆ. きく科

(4) **Lactuca brevirostris** Champ. (=L. squarrosa Miq.) おきののげし 東京根岸(予)

ERICACEÆ. しやくなん科

(5) **Rhododendron sublanceolatum** Miq. とうつゝじ 葉ハ革質花ハ大ニシテ赤色ナリ此種ハ頗ル Rh. ledifolium Don. ニ類似ス武州横濱(cult.)(予)

POLYGONACEÆ. たで科

(6) **Rumex crispus** Linn ながばぎしぎし(新稱)東京(予)

CYPERACEÆ. かやつりぐさ科

(7) **Carex filipes** Fr. et Sav. たまつりすげ(新稱)果實球々トシ絲ノ如ク毛ノ如キ纎細ナル梗上ニ着ク 武州王子,道灌山,土佐鳥形山,横倉山,佐川村(幷ニ予)

花の色香

(前號ノ續)

堀 正太郎

第四章 花色原論

予ハ第二章ニ於テ花ノ始原ヲ論シ植物ノ構造組織受精ノ方法幷ニ地質時代ニアリテ化石トシテ現出セル幾多ノ事實ヨリ歸納シテ花ノ始原祖先ハ裸子植物ノ花ニアリテ其造構ハ種子ノ生出ニ直接ニ必需ナル處ノ貴要機關(雌雄蕋)アルニ過キスシテ今日通常人ノ眼目ニ觸ルヽ處ノ花卉ノ如キ美麗ノ花辨ヲ有セス素ヨリ風力ニ依リテ受精シ昆虫ノ媒助ヲ籍ラサリシモノナラント結論セリ

夫レ實ニ然リ松柏ノ花ハ單一簡略ナルモノニシテ此ノ如キ花ヨリシテ

變態シ現世ノ雙單子葉植物ノ花ニ進化シ來リタルモノトセハ其原彩始色ハ如何ナルモノナルカヲ考究セサル可カラス原花 (primitive flower) ニアリテハ花被ナク只雌雄蕋ト時ニ微細ナル鱗片アルニ過キズ夫レ花被ノ起原ハ第三章ニ論シタル如ク三派ノ學說アリト雖𪜈花辨ノ發生ヲ促シタルモノハ一ハ貴要機關ノ保護ニシテ一ハ受精ノ方法ヲ全フセンカ爲メニ外ナラス原ヨリ一朝一夕ニ花辨ハ發生シタルモノニアラス裸子植物花ノ如キ簡單ナルモノヽ一タヒ風媒ヨリ虫媒ニ進ムニ從ヒ適者生存ノ理ニ由リ遺傳ノ法ニ基キ進化變遷シタルモノヽ如シ既ニ風媒ヨリ虫媒ニ變遷セントスルヤ植物生存上ニ偉大ノ利益ヲ得ルモノニシテ益々此傾向ニ進化ス可シ予按スルニ花辨ノ起原ハ昆虫ノ花粉ヲ掠食センガ爲ニ飛ヒ來リテ屢々刺擊ヲ與フルニ依リ益膨大腫起 (atrophy) シテ花辨トナリタルモノナリ已ニ始原花被ノ生シ初メタレハ必ス色彩ナカル可カラズ其初メヨリ存スル處ノ鱗片ノ如キモ益增大シテ一種ノ色彩ヲ享受ス原蕋論ノ主張スル處ニ依レハ彼ノ玉拍（マンネンスギ）ノ花粉并ニ花粉房松柏ノ雄蕋皆黃色ナリ而メ今双單子葉植物ノ花粉ハ總シテ黃色ナラサルナク間々赤色(もうずいくわ)青色(あま・やなぎらん)或ハ黑色(うつにんかう)ノ如キ例外ナキニアラズト雖𪜈花粉ハ黃色ヲ以テ通例トス花瓣ハ此ノ雄蕋ヨリ直接ニ變遷シタルモノナレハ花被ノ色即チ黃色ハ其初原色ナラザル可カラストス然リト雖𪜈是レ甚タ淺薄ノ論據タラサルヲ得ス其原体ノ色ハ必ス其出來シタル子体ニ受ケサル可カラスト確定セルモノニアラズ今原蕋論ニ謂フ如ク花ノ始原色カ雄蕋ノ色即チ黃色ナラサル可カラストセバ原葉論ニ在テハ始原色ハ綠色ナラサル可カラズ而メ雌雄蕋ト雖𪜈其初ヤ葉ノ變化セルモノナリトアルレン氏自ラモ之ヲ謂ヘリ然レハ花粉ノ色モ亦其初ヤ綠色ナラサル可カラズ是レ大ニ疑ヒナキ能ハズ原蕋論者ノ謂フ如ク花ノ始原色ハ黃色ナル可シトハ大ニ事實ニ於テ眞ニ然ル可シト雖𪜈立論ノ根據ニ於テ甚タ批難ス可キモノナリ葉ノ色巳ニ何故ニ其綠色ナルヤヲ說明シ難シト雖𪜈類化作用ヲナスニ當リ綠色ハ他色ニ勝ルノ事實ハ明ニシテ即

ヲ實用ニ相適セルモノナリ此ノ如キ實例之ヲ動物特ニ鳥ノ生產季 (breeding season) ニアリテ其羽毛ノ光澤ヲ變化スルヿ最モ其實用ニ適應スルノ好例ニシテ花色ノ變化亦此ノ理ニ外ナラズザックス氏曰ク花ノ赤色又ハ黃色ナルハ尙秋霜綠葉ヲ紅色或ハ黃色ニ變スルト同シク葉綠素ノ酸化ニヨルモノニシテ果實ノ生熟シテ黃色或ハ紅色トナルモ亦同一理ナリトサレハ自然ノ力ニ依リ綠色ヨリ變化ス可キ處ノ色ハ順序トシテ黃色ナラサル可カラス自然ノ色彩配合ノ順序トシテ綠色ヨリ萌黃ニ移リ純然タル黃色ニ至ルハ正ニ然ル可キノ道理ナリ然リト雖モ其何故ニ綠色ヨリ黃色ニ變シタルカハ素ヨリ自然ノ妙得テ吾人カ端睨ス可カラスト雖モ已ニ謂フ如ク實用ノ變化 (change of function) ニ因ルモノト謂フ可シ昆虫ノ花粉奪掠ノ爲メ飛ヒ來リ植物初メテ風媒ヨリ虫媒ニ變セハ綠色ト相比對立スル處ノ色彩最モ昆虫ノ視神ヲ誘引ス故ニ其昆虫ヲ誘引スルノ力多ケレハ多々益植物ノ利益ニシテ子孫ノ繁榮ヲ來シ適者生存シテ相互適合 (coadaptation) ノ妙ヲ得ルモノナリ之ヲ以テ見レハ原花瓣 (primitive petals) ハ遇然なつとうだい,ねこのめさう花ノ如キ黃綠色ノ現出シタルモノト假定セヨ之カ爲ニ大ニ昆虫ノ集來ヲ促シ益々刺擊ヲ與ヘテ終ニ相互ノ選擇ニ依リ花辨ハ膨大トナリ色彩ハ益黃色トナリシモノナラン“始原色彩ノ黃色ナル可シトハ雄蕋ヨリ變化シ即チ遺傳ニ基因スルニアラスシテ色彩配合ノ自然ノ順序ヲ踏ンテ變遷シタルモノナリ綠色ト相比對立シテ昆虫ノ視神ヲ誘引スル實用ノ變化ニ適合セル者ナリ”顯花植物ノ最モ簡單ナル變遷ノ度少キモノニアリテハ大率其色黃色ニシテ最モ高等ニ進化變態セル花ニアリテハ其色紫或ハ碧色ナリ故ニ黃色ヲ以テ花ノ始原色トナス最モ眞ニ邇カヽラン而シテ諸植物學者ノ見解亦同一轍ニ出ツルモノヽ如シ次章ニ於テハ花色進化論ヲ詳說ス

（以下次號）

北海道產ノ海藻ニ就テ

岡村金太郎

下ノ一篇ハ余ガ去ル九月廿六日大日本水產會第九十一回月次小集會ニテ演說シタルモノヽ原稿ナリ圖ハ都合ニヨリ本雜誌ニハ載セザレ𪜈大日本水產會報告第百十四號ニアリ

先頃農商務屬下啓助氏ガ北水協會ニテ開設シタル水產奬勵會ニ列スル爲メ田中芳男氏ト共ニ小樽ニ赴キタル序ヲ以テ用果タル後獨リ東海岸ヲ根室ニ向ハレタル途次所々ニテ海藻ヲ採集シ土產トシテ携歸ラレ其調査ヲ余ニ依托セラレタリ, 其種類僅ニ十一種ニシテ內八種ハこんぶ科ニ屬シ三種ハ紅藻類ノモノナリ左ニ順ヲ追ヒ之ガ報告ヲ爲サントス

Constantinea sitchensis Post. et Rupr.? ハ九月三日厚岸灣口仙鳳路ノ採集ニ係ル處ナリ標品唯一個ニシ然モ甚ダ不完全ナルヲ以テ充分ニ其種ヲ確定スル能ハザレ𪜈多分此種ナラントト鑑定ス元來此屬ニ屬スルモノハ只三種ニシテ內一種ハアドリアチック海及ビ地中海ニ產シ一ハカムサッカ地方ニアリ一ハ北亞米利加ノ北部アラスカ半島ノ邊ナルシッチヤ島(Sitcha)ニテ發見スル所ニシテ本品ハ即チ此地ノ產ト同種ナランカ或ハカムサッカノモノト同ジキカ詳ナラズ兎ニ角本品ハ未ダ嘗テ採集セザル處ナレバ甚ダ貴重スル所ナリ

Ptilota asplenoides Kg. ハ九月一日釧路國昆布森ニテ採集スル處ナリ本品ハ專ラ北洋ニ產スルモノニシテベーリング海峽, カムサッカ及ビグリーンランド邊ニモアリ本品モ未ダ嘗テ採集セザル所ニシテ且ツ實ヲ結ビ居タレバ其結實季節モ知ルヿヲ得頗ル貴重ナリトス

Delesseria crassifolia Rupr. 九月三日厚岸ニテ採集スル所ナリ此種ハカムサッカ地方ニ產ス其確實ナル標品ナキヲ以テ比ブルニ由ナケレ𪜈此種ナルヿ疑ナシ此モ亦未ダ採集セザル所ニシテ今回ヲ以テ始トス惜カナ實ナキヲ以テ其結實季節ヲ知ル能ハズ

以上三種ハ紅藻類ニ屬ス以下皆こんぶ科ノモノナリ

ざるめ　ハ學名ヲ Agarum Turneri Post. et Rupr. ト稱シ北海全道廣ク之ヲ產シ又北亞米利加ノ北部,北大西洋及ビ北氷洋ニモ產ス本品ハ九月一日昆布森ニテ採集スル所ナリ形軍配扇ノ如クシテ短莖アリ葉ニ大小無數ノ孔ヲ存ス方言ざるめノ名アル所以ナリ故ニ一見能ク忘ルヽコナシ青森ニモ亦產スト言フ果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラズ

じやらめ　ハ學名ヲ Costaria Turneri Grev. ト稱シ前種ト同ジク北海全道ニ普シ又北亞米利加ノ北部ニモ產ス長莖アリ扁平ニシテ數條ノ脈アリ莖ノ先端展開シ線狀ノ葉ヲナス基部卵門縱脉アリ三條ヨリ五條ニ至ル葉緣波狀ニ皺ミ脉間楕圓狀ノ窪ミヲナス其排列稍整然タリ實ハ八月ヨリ九月ノ間ニアリ此種及ビざるめハ余モ一昨年函館ニテ採集セリ青森ニモ產スト云フ果シテ信カ

あいのわかめ　ハ九月一日釧路ノ產ニ係ル總長一メートル四十五センチメートル許ニシテ圓莖アリ長サ七「セ.メ」許上部細長キ薄葉ニ延ビ縱脉之ヲ貫通ス巾九「セ.メ」長サ百三十八「セ.メ」許葉ノ基部別ニ扁長鈍頭ナル小葉アリ短柄ヲ以テ莖ノ左右ニ生ズ長サ十七「セ.メ」巾一.半ヨリ二「セ.メ」ニ至ル此葉ノ全面ニ實ヲ熟セリ此種ハ Alaria crassifolia Kjellm.（水產會報告 第百六號 第二版二圖）ト同一種ナルヤ否ヤ少シク疑シ又頗ル歐洲產ノ A. esculenta Grev. ニ類スル所アレ𪜈果シテ同一ナルヤ尙ホ研究スベキモノトス

えながこんぶ(新稱)　此種ハ九月八日厚岸ニテ採ル處ニシテ莖頗ル長ク稍圓クシテ實質上部扁ク長サ二十五ヨリ三十「セ.メ」徑八「ミ.メ」程葉ハ披針狀ニ〆兩緣少シク皺アリ基部圓潤肉薄ク長サ九十一「セ.メ」巾十八「セ.メ」許內部ニ粘液腔ナク葉面實ヲ結ベリ又某漁家ニ蓄ヘタルモノニシテ此種ノ稍大ナルモノヲ見ルニ形狀頗ルまこんぶニ類スレ𪜈莖長ク五十「セ.メ」許扁圓ニシテ上部扁ク葉肉厚ク基部卵圓形ナリ長サ丈余モア

ランガ先端缺損セルヲ以テ詳ナラズ巾四十「セ.メ」程ニシテ莖葉トモニ粘液腔ナク縁邊宿皺アリ然レ𪜈此標品ニハ實ナシ盖シ場所ノ異ナルト採集季節ノ異ナルニ因テ然ルナラント思フニ此種ハ北氷洋北大西洋等ニ產スル L. saccharina Lamour. ナランカ然レ𪜈其種ノ大ナル標品ヲ見ザルヲ以テ斷定スル能ハザレ𪜈多分誤ラザルベシ

ちゞみこんぶ　此種ハ九月一日昆布森ニテ採ル莖細ク圓柱狀ニシテ長サ六「セ.メ」許上部楔形ニシテ葉細ク長サ二メートルヨリ五メートル余ニ至ル巾六ヨリ八「セ.メ」ニシテ中心ニ一道アリ基部ヨリ先端ニ走ル然レ𪜈わかめノ縱脉ノ如ク著シカラズ恰モ一本獨鈷ノ帶ノ如シ縁邊殆ト波狀ナク全面宿皺アレ𪜈他ノ標品ニハ之ナキモアリ實群ハ中條ノ左右ニ線狀ニ生ジ又縁邊ニ沿フテ所々班點ヲナシ葉ノ下部ニ近ヅクニ至レハ葉ノ一面ニ生ズ而シテ專ラ一方ノ面ニアレ𪜈亦他面ニモ少シクアリ莖葉トモ內部ニ粘液腔ナケレ𪜈質頗ル粘液ニ富メリ學名ヲ Laminaria angusta Kjellm. ト云フ此種ハ中央ニ一道アルヲ以テ目徵トナス故ニ和名ヲちゞみこんぶトセズ他ノ名ニ改ムル方至當ナラン然レ𪜈玆ニハ暫ク舊名ニ依ル（陶山淸猷氏有用藻譜第四番）

ねこあしこんぶ又みゝこんぶ　ハ九月一日昆布森ニテ採ル處ナリ學名詳ナラス短莖アリ扁圓莖ノ兩側ヨリ根ヲ出ス根ハ分岐シテ先端扁平恰モ猫ノ指ノ如シ葉細長ニシテ肉稍厚ク長サ百五十「セ.メ」余巾三「セ.メ」許ナリ葉ノ下部即チ葉ト莖ト相接スル部分ノ兩端ニ小突起アリ耳形ヲナス次年此處ヨリ新葉ヲ出シテ舊部ハ枯死スト云フ

ながこんぶ　九月四日落石ニテ採ル長サ十四メートル余巾六「セ.メ」許ニシテ線狀,中心ニ道ナシ學名詳ナラズ又此種ノ水こんぶナルモノアリ此ハ氷害ノ爲ニ本体ノ流失シタル跡ニ生ジタルモノト云フ長サ一メートル許

おにこんぶ?　九月一日昆布森ニテ採ル長サ二メートル余巾六「セ.メ」許

ニシテ莖六ヨリ九「セ.メ」圓形ナリ葉ノ基脚稍卵圓形ニシテ肉厚ク緣邊殆ド皺ナクシテ內部ニ粘液腔アリ學名詳ナラザレ𪜈或ハまこんぶ即チ Laminaria Japonica Aresch. ノ細長ナルモノナランカ

以上ハ種類ノ大略ナル記載ナリ實ニ下氏ノ今回ノ土產ノ如キハ余ニ取リ尤モ貴重ナルモノナリ尙ホ地方有志ノ士便宜ノ得ルアル每ニ其ノ地方ノ海藻ヲ採集シテ余ニ送ラレンコトヲ切ニ請フテ止マザルナリ聊カ說ヲナスコト爾リ

雜 錄

鯀條書屋植物雜記 (其一)

牧野富太郎

おほばやどりぎノ寄主

植物學雜誌第五十四號ノ雜錄中ニ松田定久君ハやどりぎ類ノ寄主ヲ擧ゲラル就中おほばやどりぎ (Loranthus Yadoriki) ノ寄主ヲ缺ケリ故ニ之ヲ補フ, おほばやどりぎノ寄主ハやぶにくけい, つくばねがし, 其他ノ 樹木亦之レガ寄主トナリ居ルモノアランモ今不幸ニシテ其樹名記臆セズ.

むじなも幷ニひしもどきノ花

むじなも (Aldrovanda vesiculosa L.) ニ花アリト學友松田定久君ノ報ニ接シ其產處ナル武州伊豫田村ニ行キテ之ヲ採集シ始メテ其果實ヲ詳悉スルヲ得タリ予ハ先キニ始メテ之ヲ我邦ニ得ルヤ直ニ之ヲ露國ノ植物家「マキシモヰッチ」氏ニ送リテ日本ノ「フロラ」ニモ亦斯ノ如キモノアルヲ示シタリ同氏ノ返書ニ此植物ハ歐洲ニテハ花ヲ開クヿ少シ日本產ノモノハ如何トアリタルヲ以テ日本產ノモノモ恐クハ花ヲ出スヿ少ナカラント豫想セシガ其花ヲ得シトノ學友ノ報ニ接シ期會失フベカラズト思ヒ直ニ產地ニ到リシニ此沼ノ者ハ頻々花ヲ着ケ居ルモ彼ノ沼ノモノハ一向ニ之ヲ見ザル有樣ナリキ

花ハ一日花ニシテ且ツ日中ニ開クナリ葉腋ヨリ出デタル花梗ハ直立シ花ヲ水面ノ上ニ擡ゲタリ五片ノ淡綠色花瓣ハ半開シテ歐洲產ノモノヽ如ク瓣頂湊合(コンナイベント)シテ帽狀ヲナスニ似ズ而シテ花閉ヅルヤ次日ハ已ニ其花梗下曲シテ以テ果實成熟ノ期ニ至ル種子ハ每果必ズ十顆ヲ容レ二顆ツヽ五個ノ側膜胎座ニ着ク梗下ノ葉ニハ每ニ必ラズ捕蟲囊ヲ缺如ス花候ハ七月ナリ

ひしもどき(Trapella sinensis Oliver)亦花アリト聞キ其產處ナル眞間村ニ行キテ之ヲ尋ヌレバ果シテ花アリ葉腋ヨリ長梗ヲ抽キ上端ニ一花ヲ着ク漏斗狀盆形ヲナシ筒部ハ黃色ニシテ紅線縱通シ內面ニハ毛ヲ有ス舷部ハ五裂シ水紅色ナリ少シク側ニ向ヒテ開ケリ雄蕋四條ナレ𪜈二個ノミ能ク發育シ葯隔ハ楯形ナリ子房ハ元來二胞ナレ𪜈一胞ハ壓迫セラレテ狹窄シ且ツ一個ダモ胚珠ヲ有セズ胚珠ハ二個アリテ一胞ノ頂邊ニ懸垂シ花ノ受精後其一個ノミ直ニ發育シテ他ノ一個ハ此ニ壓滅セラレ以テ遂ニ消失ス其發育セルモノ遂ニ種子トナリ果實ノ胞室ニ充塞ス此ひしもどき幷ニ前品むじなもニ就テノ詳細ハ日本植物志圖篇第十一集ニ之ヲ出ス就テ見ル可シ

おにばす初期ノ葉狀

植物ヲ眞間村ニ探グルモノハ必ズおにばす(Euryale ferox Salisb.)ノ其處ニ在ルニ逢着セン其三尺徑モアルベキ葉ノ陸離トシテ相依リ以テ池沼ノ面ニ平布スルノ狀ヲ目擊スルモノハ彼ノ南米ニ有名ナル壯嚴偉大ノ Euryale amazonica Poepp. 否ナ Victoria regia Lindley ヲ推想セズンバアラズ，おにばすノ葉ハ楯形ナリ嘗テ聞ク其種子ヨリ生ジタル嫩本ノ葉ハ楯形ナラズシテ一方ニ裂目アルヿ宛モひつじぐさノ葉ノ如シト，然リ此傳說ハ眞ニ實事ナリ虛說ニ非ラズ予ハ鄕國ノ學友矢野勢吉郎君ト植物採集ノ爲メニ同處ニ到リシ際恰モ善シ二三ノ嫩本此ノ如キ葉ヲ着ケ居リシヲ以テ敢テ特ニ種子ヲ播スルヲ須ヒズ容易ニ之ヲ天然場裏ニ親檢スルヲ得タリ加之ナラズ之ヨリ進ンデ老成ノ葉形ニ至ル程度ノ狀モ亦之ヲ知ルヲ得タリ即チ此ノ如キ葉

ハ形狀圓ヨリ小ニ〆且ツ稍圓形ヲナシ葉邊一方ノ一缺ハ其植物ノ漸次ニ生長スルニ伴フテ漸次ニ發生スル葉ニ漸次ニ減少スルト同時ニ葉形モ亦漸次ニ圓形ト成リ葉体モ亦漸次ニ大ト成ルナリ

木曾河口ニすぎなもアリ

すぎなも (Hippris vulgaris *L.*) ハ我邦ニ在テハ北海道ニテ知ラレタルありのとう科ノ一濕草ナリ木曾河口ハ尾張伊勢兩國ノ間ニ當レリ此草此河口邊ニ見ル乃チ分布ノ上ニ就テ之ヲ世人ニ報道スルヿ未ダ全ク贅事ニ非ラズ之ヲ同處ニ採集セラレタルハ吾人ノ常ニ敬仰スル田中芳男先生ニ〆先生ハ予ニ其標品ヲ惠投セラレタリ

せんにんも幷ニりうのひげも

せんにんもトハ即チ Potamogeton serrulatus Regel et Macck. ナリ之レガ產地ハ從來山上ノ湖水ナル日光湯湖幷ニ箱根蘆湖ノ兩所ノミ知ラレ, りうのひげもトハ即チ Potamogeton pectinatus *L.* ナリ之レガ產地ハタヾ土佐高知附近ノ地ノミ吾人ニ知ラレタリシカ此兩種ハ亦共ニ近日田中芳男先生ノ採集ニ依テ木曾河口亦之レガ產處ナルヿヲ確認スルニ至レリ.

種 樹 祝 日 (Arbor day)

北米合衆國ニ遊ビテ歸リタル人ノ話ニ同盟諸州中多クハ一年ニ一回種樹祝日ナルモノヲ設ク此日ニハ諸學校皆休業シテ種樹ノ典ヲ擧ク其典トハ敎員生徒其他學校ニ關係アル人々相會シテ適宜ノ草木ヲ種ヘ付ケルナリ其目的ハ或ハ學校ノ風致ヲ增シ或ハ森林ヲ保護スルノ旨ニカナヒ其他生徒ヲシテ自身ガ種ヘダル植物ガ學校內ニ存スルガ爲メ其校ヲ去ル後ト雖長ク其所ヲ忘ルヽ能ハズ併セテ敎師友生ヲモ久シク記臆ニ存セシムベク叉ハ生徒ヲシテ植物ノ種ヘ付ケ其培養方等ヲ習熟セシメテ多少實業的ノ敎育ヲ補フニ足ルベク殊ニ植物學ノ敎授上ニハ大ナル便宜ヲ與フルヿハ疑ヲ容レズ云

々トアリ其典ノ詳細ハ余之ヲ知ラズト雖此ノ如キ祝日ノ設ケアルハ我々植物學者ノ大ニ贊成スル所ナリ我邦ノ小學校ノ如キハ其構內ニ植物僅少ニシテ梅ノ花ヲ示サンニモなづなノ實ヲ見セシメンニモ手近ニ之ヲ得ル能ハズ敎師ヲ苦マシムルガ如キヿ往々之アリト聞ク種樹祝日ヲ設ケテ休業日トナスハ植物學者モ敎員モ生徒モ皆同意スル所ナルベシ

種樹送別會

前項ノ種樹祝日トハ其名ヲ異ニスレ𪜈其實ヲ同フスル事ハ我邦ニモ之ヲ行フ所ナキニアラズ聞ク東北地方ノ某尋常師範學校ニテハ或ル級ノ生徒ガ卒業スルノ際敎員生徒草木ヲ校內ニ種ヘテ送別ノ意ヲ表ス而〆其目的トスル所ハ米國ノ祝日ニ爲ス所ノモノニ彷彿タリト云フ之ヲ名ケテ種樹送別會ト稱スルモ蓋シ不可ナカルベシ柳ヲ折リテ別ヲ送ルハ昔時ノ詩人者流之ヲ爲スト聞ク今時ノ送別會ハ撮影ノ會トナリ飲食ノ會トナリ一轉シテ頌德ノ演說會トナルモノ往々之アリ之ヲ某地ニ行ハルヽ種樹送別會ニ比スレバ其得失容易ニ判シ易カラザルモノアラン

將軍ノ記念樹

樹ヲ種ヘテ別ヲ送ルハ其目的甚ダ好シ樹木ヲ留メテ紀念トナスモ亦甚ダ宜シ彼ノ大樹思馮異, 甘棠憶召公ト咏ジタルモ其樹ニ因リテ其人ヲ追慕スルノ一例ト稱スベキ歟東京ノ上野公園ニ入リテ行クコト兩三町家康將軍廟ノ華表前ヲ過ギテ更ニ進ムコト數步左側ニ石ヲ疊ンテ築キタル小臺ヲ見ル其臺ノ背後ニ圓形ノ鐵柵兩個ヲ設ク右方ノ柵內ニハひのきノ一種(Thuya sp.)ヲ種ウ蓋シ洋種ニシテ余ハ其種名ヲ詳ニセズ是レ所謂グラントひのきニシテ彼高名ナルグラント將軍ノ手栽スル者ナリト云フ左方ノ柵內ニハたいさんぼく (Magnolia grandiflora) アリ是レハ同時ニグラント夫人ノ栽ウル所ナリト云フ聞ク將軍ノ日本ニ遊ビタルハ明治十二年ニアリ其歸リ去ルニ臨ミ記念ト〆此二樹ヲ留ムト今ヤ將軍ノ世ヲ去ルヨリ已ニ數年而〆遺愛ノ樹ハ丈餘ニ達シ欝然繁茂ス之ニ對スルモノ誰カ今昔ノ感ナキヲ得ンヤ

帝國大學植物園內ノ貴樹

此園ニ入リ分科花壇ノアル邊ヲ過ギ去リ喬木灌木ノ植ヘ込ミニ移ランソトスル所ニ當リ右側ニ十數坪ノ地ヲ方形ニ劃シアルヲ見ルベシ繞ラスニ竹柵ヲ以テシテ人ノ闌入ヲ許サズ柵內ハ能ク洒掃シテ一莖ノ雜草ヲモ留メズ僅ニ青苔ノ斑々タルヲ見ルノミ此內ニ五株ノ樹ヲ栽ウ中央ニアルモノハあかまつ(Pinus densiflora)ナリ此樹ノ前面ニアリテ右隅ヲ占ムルモノハにはひとば(Thuya occidentalis) 左隅ヲ占ムルハこうやまき(Sciadopitys verticillata) ナリあかまつノ背面ニアリテ左隅ニアルモノハいてう(Gingko triloba) 右隅ニアルモノハゆりのき(Liriodendron Tulipifera) ナリゆりのきハ木蘭科ニ屬スル喬木ニシテ米洲ノ產ナリト聞ク他ノ四株ハ皆松柏科ニ屬セリ柵內ニ建ツルニ榜ヲ以テス記シテ曰ク

明治二十四年十一月三十日

皇太子殿下御親栽　　五株

(以上四件 ア. キ. 生報)

きばなのあまなニ就テ

前々號雜錄きばなのあまなノ條ニ元來此植物ハ是迄本邦ニテハ北海道ノミニ產スル樣ニ思ハレタレ𪜈云云トノ說明ヲ載錄セラレタルガ頃日蘭山翁ノ著日光採品錄ヲ閲スルニ一種山慈姑ト題スル項中左ノ所說アリ「中禪寺湖上ニアリ葉ヲ抽クコト六七寸三葉ホド互生シ上ニ小枝ヲ分チ枝上各一花アリ花大サ五分許白ノ內ニ青筋アリ黃花ノ者ト其形狀全ク同シ黃花ノ山慈姑ハ和州播州及武州戶田等ニアリ莖上十餘花ヲ着ク花外綠花內黃ナリ蘂モ黃ナリ松前蝦夷ニモアリ夷人其根ヲ食糧トス方言イトラプト云」又同翁ノ本草啓蒙ヲ按ズルニ黃花山慈姑和州下市ニアリト記セリ之レニ由リテ見レバ此種ハ本草家者流ノ夙ニ注意セル植物ナルガ如シ聊カ所見ヲ記シテ大

方ノ教示ヲ乞フ

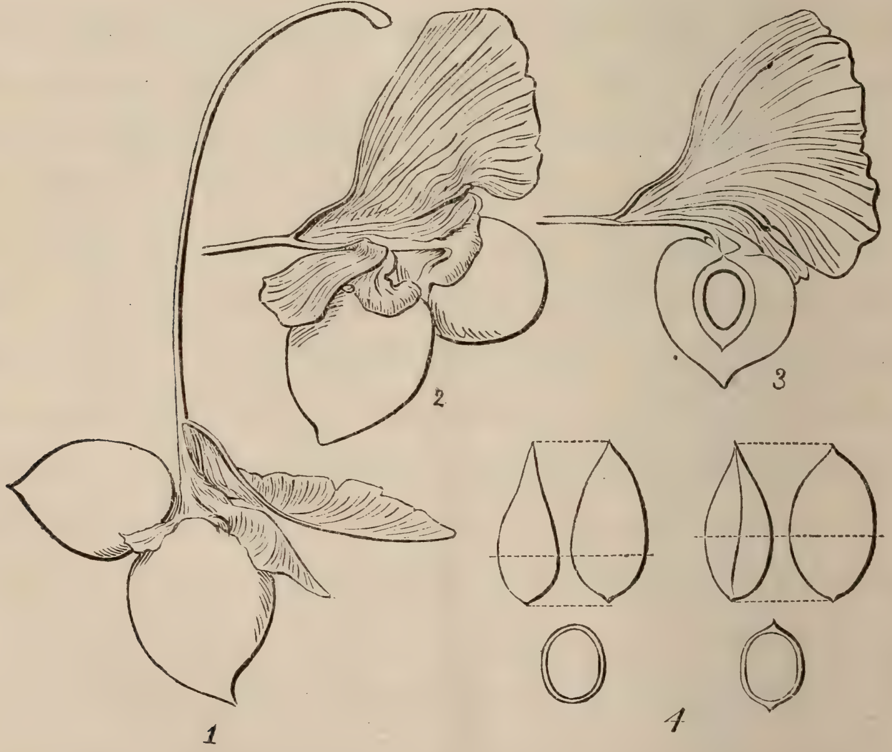
甲州葡萄ノ病菌

數年前農科大學生上田正懿氏來リテ甲州葡萄病害ノ實況ヲ語ラル爾來實地ニ就テ其ノ原因ヲ探究セント欲スルヤ久シ而シテ未ダ其ノ機會ヲ得ザルナリ本年七月十日遂ニ意ヲ決シ上途シ勝沼驛ニ至リ研究ニ從事シ稍々得ルトコロアリ被害ノ葡萄實ヲ取リ之レヲ審査スルニ當時蕃殖セル種類ハ Oidium Tuckeri ト稱スル菌ナリ土人ハ之ヲ葡萄ノえぶト稱ス此えぶ多量ニ附着スル𪜊ハ果實萎縮シ成熟ニ至ラズシテ落ツ天氣濕リ勝ナル年ニハ此菌非常ニ蕃殖シ大害ヲナスコト甚シ然レ𪜈未ダ豫防ノ良法ヲ發明セザルヲ以テ之ヲ如何トモスルヿアタハズ空敷手ヲ束ネテ之ヲ傍觀スルニスギズト云フ因ニ云フ玆ニ一奇トスベキハ本邦ノ葡萄ニ寄生スル Oidium 菌ニモ嘗テ彼邦ニ於テデバリ氏ノ發見セル Cicinnobolus Cesatii ノ寄生ヲ見ルノ事ナリ滯在三日ノ後此處ヲ去リ甲府ヲ經テ歸京セリ後九月八日再ビ勝沼ニ至リ前ノ病樹ヲ見ルニ幸哉本年ハ氣候ノ適順ナルト培養法ノ周到ナリシ爲果實ノ熟スルニ從ヒ病菌減縮シ遂ニ其跡ヲ止メザルニ至リ葡萄ハ充分ノ豐熟トナレリ倘樹下ニ就キ其枯葉及半死ノ枯葉ヲ採收シ歸京ノ後之ヲ撿スルニ其葉裡ニ Peronospora viticola ノ多ク附着スルヲ發見セリ按スルニ此二種ハ共ニ歐洲ニ於テ大害ヲ爲スノ菌ナリ其豫防ノ方法ノ如キハ彼邦ノ書ニ種々記載セリ本邦ノ栽培家又彼邦ノ所法ニ傚ヒ之ヲ試驗セバ必ズヤ得ル所アラン又按ズルニ此えぶ病ハ近時ニ至リ流行ヲ見ルト云フニ因リ考フルニ洋種葡萄ト共ニ外國ヨリ新ニ輸入セル者ナルハ疑ナキガ如シ

銀杏ノ奇樹

本年七月山梨縣下甲府ニ旅行セシ𪜊來訪セシ同縣人青木氏ノ話ニ同縣下巨摩郡下山村ナル上澤寺トイフニ日蓮上人ノ杖ノ生長シテ大樹トナリシ逆銀杏（サカサイテフ）樹トイフアリ此樹ハ通例ノ銀杏ニ異ナリ常ノ實ノ外ニ葉面ニモ實ヲ生ズルコトアリ寺僧熟實ノ秋ニ至リ落タルヲ貯置キ解毒ノ効アリトシ參詣

ニ賣ルナリトテ其實ヲ出シ示サル之ヲ見ルニ實說ノ如ク葉面ニ實ヲ結ブコノ諸人ト或ハ一顆或ハ二顆アリ實ニ奇ト稱スルニ堪タリ七月十九日歸京ノ途次身延山ヨリ廻リテ此村ニ出テ此樹ヲ實見スルニ高サ五六丈大サ直徑三尺ニ余リタレモ枝低ク傘ノ柄ニテ引寄スルコト難カラズ且樹ノ本ヲ繞リテ高サ十二尺幅一間四方許ノ壇ヲ築キタレバ此ニ上リ手ヲ伸レバ直ニ枝ヲ撥クコトヲ得ルナリ恰モ結實ノ時節ナリシヲ以テ果實枝ニ滿チ常實ト畸形實トハ其數恰ンド相匹敵セリ余ハ始テ斯ル木ヲ見タルコトナレバ珍敷キ思ヲナシタリ精敷研究セバ面白キ結果アランカ寺僧ニ請ヒ採收セル標本ハ下圖ノ如シ



圖解　第一葉裏ヨリ見タル圖　第二葉ノ表面ヨリ見タル圖　第三切斷面　第四種子核

をどれノ木

一名ナンジヤノ木ハ甲州鰍澤ヨリ舟ニテ富士川ヲ下ルコト二里余ノ右岸ノ高處ニアリ嘗テ一官人アリ舟ニテ此處ヲ過キ此木ヲ指シテ其名ヲ問フ舟行箭ノ如ク舟夫其指頭ノ向フ處ヲ的認スルアタワズ依テ其何レノ樹ヲ指スカヲ知ラント欲シ敬語ヲ用ヒテヲドレノ木ナリヤト返問ス官人誤認シ以テ樹名トナシ復敢テ問ハズ後此木ノ正名ヲ知ント欲シ遍ク州人ニ示シ其名ヲ問フモ知ルモノナシ依テ今ニ至ルマデ之ヲヲドレノ木ト稱シ正名ヲ呼ブモノナシト云フ余甲府ニ於テ此說話ヲ聞キ道ヲ上岸ニ取リ木葉ヲ採收シ古來ノ疑問ヲ決セントスルノ意アリケレ𪜈歸京ノ期日切迫セシヲ以テ已ヲ得ズ舟ニテ川ヲ下リ空シク其木ヲ望見セルノミニシテ其果シテ何樹ナリヤヲ探究シ能ハザリシハ遺憾ノ至ナリ

日光ノおんのれ木 (Betula corylifolia)

をんのれ一名をのおれ一名みねばり日光ニテ盆械等ニ作ル名木ナリ余日光山ニ採藥スルコト前後二回而シテ未ダ其生木ヲ見ザルナリ本年八月復日光ニ遊ビ此木ニ注意シ中禪寺畔獅子ガ淵ノ道傍水涯ニ於テ三株ヲ發見セリ然レ𪜈木高クシテ果實ノ有無ヲ知ルヲ得ザリシハ遺憾ナリ同感ノ士同處ヲ通過スルアラバ此ニ注意シテ其木實ヲ得ラレンコトヲ望ム余先年日光ニ至リシトキ此木ヲ檢出セント欲シ諸樹ニ注意シ遂ニ索メ得ズ却テ一株ノあさだノ木ヲ撿出セリ此木モ中禪寺湖畔なつつばき多キ處ノ路傍右方ノ林中ニアリ木膚ぶなニ似タリ之ニハ雌雄ノ花ヲ着タリ此木モ余リ多カラザル様ナレバ因ニ記スコト然リ

笹子峠ノ大杉

相模ト甲州トノ境ニ笹子峠アリ峠ノ頂上ヲ相模ノ方ニ去ル數町ノ處ニ杉ノ大樹アリ矢立杉ト云フ直徑六尺余ニ及ヘリ惜哉近年震災ニ罹リ樹頭ヲ失ヒ樹姿全カラスト雖𪜈尙ホ五六丈ノ高度ヲ有シ天外ニ聳出ス斯ノ如キ大

樹近縣ニ於テ稀ニ見ル所カト思ヘバ參考ノ一助ニモト記シツ.

以上六件　白井光太郎

伊勢菰野山ノ植物

ハ往年伊藤博士ガ採集ノ節ニモ三百六十余品ノ發見アリシガ共後新ニ發見セラレタルモノ尠カラス今同山ノ植物ノ一班ヲ示サムニしぎんがらまつさう, みやま はたざほ, いはきんばい, つるきんばい, りんぼく（カタザクラ (Prunus spinulosa, Sieb. et Zucc.) しろねこのめさう, みづきんばい, きんれいくわ, よぶすまさう, くまぎく, うんせんつゝぢ, しろはなこめつゝじ, ばいくわつゝじ, いはざくら（トサヾクラ）(Primula tosaensis, Yatabe ノ方) きむらたけ, (Boschniakia glabra,C. A. Mey.) にしきごろも, ながはのやのねぐさ, くもきりさう, すずむしさう, ふたばらん, いちゑうらん, いゝぬまむかご (牧野氏ノ Habenaria Iinumae) じんばいさう, のしらん, こきんばいざゝ, たまかはほとゝぎす (Tricyrtis latifolia, Max) ばいけいさう, きんこうくわ, ゐさしだ, くものすしだ, ナリ

而ノ全山ハ高巓御在所岳ニ直緣スルノミニテハ絕頂ニ石南, きんれいくわ, わかもの, まんねんすぎ, 等アルノミニテ存外ニ面白カラス宜ク一ノ谷, 稻森, 犬星, 及ビ江洲境ヒノ谷々ヲヨク穿索セバ多少得物アラム

三重縣ニ新發見ノ食蟲草

アリトテ各地ノ新聞雜誌ニ記載セル由豫テ聞及ビシガ小生先月上旬上京シテ繪雙紙屋ノ店頭ニ中國ノ華ト云ヘル雜誌第五號(?)ニ尙此伊勢國度會郡明野勸農場ノ松林中ニ一種ノ食蟲草云々ノ件ヲ登載シアルヲ見タリ, 成ル程二度マデモ伊勢新聞ニ出デタレドモトヨリ日本普通ノいしもちさう (Drosera lunata) ニシテ北ハ伊勢ノ員辨桑名ノ二郡ヨリ南ハ多氣度會ノ二郡ハ申スニ及ハス志摩, 鳥羽, 磯部邊ニモ各郡各地彼ノもうせんごけト共ニ

一モ之ヲ見ザルノ地ナキ程ニ蕃布セル植物ナルヿ明瞭シタレバ予ハ伊勢,三重ノ兩新聞ヘモ其由ヲ申シ遣リタレド都部ノ諸雜誌ニ皆此誤ヲ傳載シ少シモ訂正スルヿヲ爲サヾルニ於テ大ニ世人ヲ誤ルノ恐レアレバ餘白ヲ借リテ世人ニ示サムトス嗚呼三重縣ニ新發見ノ食蟲草アリトハ抑モ誰カ其僞ヲ作リシモノゾ

會員　梅村甚太郎報

原形質ノ運動

原形質ノ運動ヲ學バシムル例トシテ教科書等ニ擧グルモノハむらさきつゆくさ(Tradescantia Virginica)若クハむらさきれもとノ花絲ニ生ズル毛,Hydrocharis Morsus-ranæ 即チとちかゞみノ最モ嫩キ根ノ毛,せきしやうも,くろもノ葉,いらくさノ毛,たうなす,へうたん,きうり,等ノ最嫩莖,ニテラ(輪藻科ノ植物)等ナリ,然レ圧以上ノ中むらさきつゆくさ,むらさきれもとハ東京ニハ栽培シアレ圧本邦ニ多普ク通ニ栽培セルモノニハアラス其他とちがゞみ,くろも,せきしやうもハ何人モ知レルモノニアラス,いらくさノ毛ハ取ルニ用心セザレバ疼キ思ヲセネバナラス,たうなす,へうたん,きうりハ何人モ知ル所ノモノニテ其嫩莖ニ生スル毛ヲ取リテ顯微鏡下ニ見ルハ誠ニ容易ノ事ナリ然シ其等ノナキ時節ニハ何カ好キカ本邦ニ普通ノ植物ノ例ヲ見出サントト思ヒ少シク取調ヘタルヿアレバ左ニ之レヲ記シ置クノミ

1. つゆくさ,一名あをばなトモほたるぐさトモイフ此植物ハ原野ニ極テ多ク春夏秋トモニアリ誰人モ能ク知ルモノナリ花ハ通常深碧色又白花モアリ葉ハ互生シ其基脚ハ莖ヲ包メリ此ノ葉片ノ基脚ノ左右ニ無色ノ毛疏生スルヲ見ルベシ此ノ毛ヲ取リテ硝子板ニ載セ少シク水ヲ滴ラシ極テ薄キ硝子ニテ覆ヒ顯微鏡下ニ視察セバ原形質ノ運動ヲミトムベシ

2. むくげ一名はちす此花ノ瓣ノ基脚ノ兩側ニ毛アリ此毛ニテモ原形

質ノ運動ヲミトムベシ

3. もみぢあふひ　此ノ花瓣ノ毛ニテモ右運動アルトハ松田定久氏ノ實驗ナリ.

大久保三郎報

並頭ノ百日草

並頭ノ蓮花トハ世人ノ祥瑞ト稱スルモノニシテ屢書物新聞紙等ニテ之ヲ讀ミタレドモ余ハ未ダ其實物ヲ見ズ蓋シ特ニ一種此物アルニアラズ莖ノ頂ガ偶然兩花ヲ著ケタルニハアラザル乎余ハ過日百日草 (Zinnia elegans) ヲ多ク培養シタル園中ニ於テ一莖ノ端ニ兩個ノ花（否花叢）ヲ戴ケルヲ見タリ是レハ二個ノ莖ガ癒合シタルニハ非ズ全ク一莖ノ端ニ兩花叢ヲ有スルモノニシテ花叢ガ發生スル際兩個トナリタルモノニ似タリ其園中又ハ他ノ場所ニテモ注意シタルモ外ニハ並頭ノモノニ見當ラザリキ是レモ變態學 (Teratology) ノ一例ニ加フベキ歟

葉面ニ生ズル芽

カキドホシ, スベリヒユ, ハイトリグサ, モウセンゴケ, アヲキ, 柑類, コモチシダ, クモノスシダ, オソヅルシダ等ノ葉面ニ不定芽ノ發スルヿハ植物通解等ニ記シアルヲ見ル余ハ曾テ小石川植物園ニテ鉢栽トナシタル猩々袴 (Heloniopsis grandiflora) ヲ檢スルニ其葉ノ上面ニテ殆ト尖端ニ近キ所ニ芽ノ發シ居ルヲ見タリ其一株ヨリ生シタル葉ノ過半數ハ芽ヲ出シ居タル樣ニ記臆セリ此芽ハ都合ノヨキ場合ニ逢ヘバ必ズ新植物ヲ生ズルナラン余ハ其後數個所ニテ採集セラレタル同種ノ植物ヲ檢シタレドモ芽ノアルモノハ見當ラサレドモ此ノ如キ發芽ハ通例此植物ニ生スルモノナルヤ否ヤ余ガ之ヲ見タルハ四月ノ初旬頃ナリキ

三タビやどりきノ寄主ニ就テ

度々余ハやどりきノ事ニ就テ報シタルガ其後尚少シク見聞シタルヿア

レバ讀者諸君ノ嫌厭チ心配セザルニハ非ルモ倘又數行チ記シテ敎チ乞ハントスひのきやどりき (Viscum articulatum) ハ鳥山啓氏ノ話ニ據レバひらぎもくせい及茶ニモ寄生スト云フ是レハ何レモ常綠樹ナリ又同氏ノ話ニ通例ノやどりき (V. album) ノ方ハさんざしニモ寄生スルチ見タリ且又岩崎灌園翁ノ本草圖譜ニ桑ノ寄生ト稱シ一種ノ寄生植物チ載スルモ是レえのきニ見ルモノト同一ナルベシ云々其後大學所藏ノ本草圖譜ヲ見ルコヲ得タルニ正シク桑ノ寄生ニハ (V. albun.) ノ名チ附記シアリ蓋シ圖說ニ據ル𪜈ハ此植物ハ桑ニモ寄生スルナルベシ又會員藤井健次郎氏ハなら類ニ之チ見ラレタリト云フ Henfrey 氏ノ書ニハ此植物ハりんご,やなぎ,かしは,にれ,いちぢく Thorn, Lime 等ニ寄生スルコヲ記セリ又 Le Maout 氏ノ書ニハりんごやなぎ等ノ外ニ Loranthus europaeus ニモ寄生スル場合チ記セリ此植物ハ元來 V. album トハ同科異屬ノ寄生植物ナリ而シテ自身モかんば又ハくりナドニ寄生シ居ルモノナルニ V. album ハ更ニ此寄生植物ヲ寄生トシテ寄生ヲナスガ故ニ第一ノ寄主ヨリ見レバ恰モ子分ノ子分トカ厄介ノ又厄介ニ當ルナリ奇ナリト云フベシ同氏ハ更ニ記スル所アリ少シク題目ノ外ニ走レ𪜈附記スベシやどりきノ類ノ實ヨリハ黏ヲ取ルコチ得ルナリ而〆其黏ノ性質ノ良否ハ寄主ノ種類ニ因レリ先ヅもみぢ及にれニ寄生スルモノヨリ得タルハ第一等ニシテかんば及 Service (ざいふりぼく?) ノモノハ之ニ亞ギりんご及やなぎノモノハ更ニ下ルト云フ

以上三件　S. M. 生 報

ネーゲリー氏沒す

獨乙國ミユンヘン大學敎授樞密顧問官ドクトル,カルヽ,井ルヘルム,ネーゲリー氏 (Karl Wilhelm Nägeli) 本年五月十日を以て沒す齢七十四抑氏は一千八百十七年を以てチユーリツヒなるキルヒスベルクに生る初めチユーリツヒ大學に敎授たり後ミユンヘン大學に轉じて本年に至る嗚呼氏は世

界の植物家中一二を爭ふ屈指の大家にして就中植物解剖學に長ず方今日新の解剖學を創立したるもの實にシユライデン, モール及びネーゲリー三氏の力多きに居る今や學術世界此の一俊傑を失ふ吾人豈に痛惜せざらんと欲するも得べけんや氏が詳傳の如きは他日に讓りこゝに氏が大著數種の題名を揭げ以て氏が學術上に竭せる功勞の一班を表出せんとす

1) Zur Entwicklungsgeschichte des Pollen bei den Phanerogamen. 1842.

2) Die neueren Algensysteme. 1847.

3) Pflanzenphysiologische Untersuchungen. 1855-1858. (クラーメル氏と合著)

4) Beiträge zur wissenschaftliche Botanik. 1858-1868.

5) Das Mikroskop. 1865-1868. 1877再版 (シユヱンデーチル氏と合著)

6) Das Dickenwachsthum der Sapindaceen. 1864.

7) Zur näheren Kenntniss der Stärkegruppe. 1874.

8) Theorie der Gährung. 1879.

9) Untersuchungen über niedere Pilze. 1882.

10) Mechanisch-physiologischen Theorie der Abstammungslehre. 1883.

ゲーベル氏

前項にある如くネーゲリー氏病沒せるに付ドクトル, カー, ゲーベル(K. Göbel) 氏代てミユンヘン大學教授となれり

サツカルドー氏

伊國ローマ府大學にては同國パヅアなるドクトル, ペー, アー, サツカルドー氏が菌學上大功あるに因りその賞として金一萬フランを贈與したり

澳國ウヰーン大學植物生理學實驗所

是の實驗所は千八百八十四年の創立に𫝆て今の所長教授ドクト, ヰーズネル氏の發意にかゝるその面積は七百三十四メートル平方にして室の數十二あり即ち所長實驗室, 書籍室, 講義室及び學生實驗室, 助手室, 生理學器械

室,標品室,暗室,化學室,工場,園丁室,温室及び外に一室なり（モリッシユ氏に因る）

江州琵琶湖の疏水

これは音に名高き江州大湖の水を京都へ引く工事にして水は大津より南禪寺の方へ流る余本年夏季休業中該地に旅行の序疏水の模樣を一見せんと思ひしに恰も好し大津より南禪寺に至る疏水の乘合船ありその途は大抵トンネルの內なれどもトンネルに非ざる所も少々之あり余は此のトンネル外にては常に水面をながめ居たりしが疏水の水中には早く既に植物の繁茂を見るに至れり然してその植物に二種ありその一はクロモ (Hydrilla verticillata Casp. var Roxburghii Casp.)にして至る所之を見ざるなし一はサヽバモ (Potamogeton tretocarpus Max.)にして稍少し余の採集せるものは正に開花中なりき此の二種共その種子琵琶湖より流れ來りてこゝに繁茂せるに至りしならんと思はる

京都邊植物分布の奇相

是は人のよく知りたることにはあれど筆の序でに一言するは別儀にあらず京都近傍の平地には高山の植物あることこれなり例へばイハナシ (Epigaea asiatica Max.) の如きは他にては高山に非ざれば得難しと雖も京都にては鞍馬近傍の田畔にもあり比叡山の中腹にもあり此の山は登り五十丁に過ぎざる小山なればその中腹といふも平地と左ほどの差あらず又ホツヽジの如きも高山の植物なれども京都近傍には甚だ多く愛宕山にもあり比叡山にもあり伏見の稻荷山にもあり二軒茶家と稱する鞍馬山麓の平地にもあり

ボコルニー氏の類化實驗

植物類化により第一に生ずる見ゆべき物質の澱粉たることは植物生理學上確定せる事實なり然れども澱粉の如き複雜なる化合物が第一に造成せらるゝことは生理學者の疑ふ所にして澱粉の造成せらるゝ以前に見ゆべからざる簡單の化合物を生じその化合物一變して澱粉となり始めて吾人の眼目に觸

るゝに至るならんとはこれ生理學者の異口同音に唱ふる所なり然らばその第一の化合物とは何物なりやと問ふにベーヤル氏 (Baeyer) は一千八百七十年に於て早く既にその蟻酸アルデヒードなるべきことを論ぜり即氏の說に隨へば類化の作用次のごとし

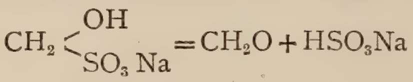
(1) $CO_2 = CO + O$ (第一酸化炭素+酸素)

(2) $CO + H_2O = CH_2O + O$ (蟻酸アルデヒード+酸素)

(3) $6CH_2O = C_6H_{12}O_6$ (葡萄糖)

(4) $C_6H_{12}O_6 - H_2O = C_6H_{10}O_5$ (澱粉)

然れどもこの事たる臆說にして實驗上確然たるものに非ず然るに近來ドクトル, ボコルニー (Bokorny) 氏はこの臆說を實驗的に證明しその說を本年五月の Berichte der deutschen botanischen Gesellschaft に載せたり而してその實驗法はオキシメチルスルフオン酸ナトロン即ち $CH_2 < ^{OH}_{SO_3\,Na}$ を用ふるにあり此の物質は水に容易に溶解し水中にて少く温むれば分解して蟻酸アルデヒード及び酸性硫酸ナトロンとなる今此の鹽を水に溶解し之を植物に與ふるに植物は之を用ゐて以て澱粉を造成するや否やこれこの實驗の目的なり若し植物が此の力を有すと見做せば其の作用次の如くなるべし



$$CH_2 < ^{OH}_{SO_3\,Na} = CH_2O + HSO_3Na$$

$$6(CH_2O) = C_6H_{12}O_6$$

此の分解により HSO_3Na なる毒物生ず之を無害ならしむるため此の溶液に第二燐酸カリ或ナトロンを加ふ然る時は此酸性亞硫酸鹽變じて中性となり同時に第一燐酸カリ或はナトロンを生ず

此の試驗に供したる植物は藻の一種 Spirogyra majuscula Ktz. とす之に用ふる榮養液次のごとし

硝酸石灰	0,1%
鹽酸カリ	0,05%
硫酸マグネシア	0,02%

第一燐酸カリ	0,02%
鹽化鐵	痕跡
オキシメチルスルフォン酸ナトロン	0,1%
第二燐酸ナトロン	0,1%

次の試驗は日光に當らしめて爲したるものなり

第一　澱粉に乏しき Spirogyra 多量を前掲の溶液二百立方サンチの中に入れ釣鐘ガラスを以て之を蓋ひ內の器にはカリの溶液を置て以て炭酸瓦斯を吸收せしめ以て此の瓦斯の痕跡なからしむ五日を經て試むるにオキシメチルスルフォン酸ナトロンを加へたるものは澱粉多量に生じ之を用ゐざるものには生ぜず之を加へたるものは繁茂の狀を呈し然らざるものは或は枯死し或は衰弱せり然れども若し此の內にバクテリアの生ずるあれば此のバクテリアの爲に炭酸を生じ其炭酸の爲に澱粉の造成せらるゝの患なきに非ざれども此溶液には決してバクテリアを生せず故に此の患なき者とす

第二　初め溶液にカリありしに後之を除きたれば光線及び炭酸の供給あるにも拘はらず植物は饑の狀を呈せり然れども此際 1/00 の際オキシメチルスルフォン酸ナトロン液を加へたるに三日にして澱粉を生ぜり蓋カリなければ炭酸あるも植物は之を類化する能はず然れども蟻酸アルデヒードなれば之を類化するに及ばず直に取て以て澱粉を造成すべし故にカリなきも澱粉を生ずるなり

以上はこれボコルニー氏が今回試驗の大略なり蟻酸アルデヒードより澱粉造成せらるゝの說稍々その根基を得たりといふべし

以上七件　池野成一郎報

三好學氏

文部省天下ノ秀才俊士ヲ擧ケテ海外ニ留學ヲ命ス三好學氏夙ニ嶄然ト

シテ頭角ヲ頭ハシ理學士中錚々ノ名聲アリ理科大學即チ薦ムルニ氏ヲ以テシ植物學研究ノ爲メ三年間獨逸國ニ留學セシム八月十九日海山萬里長途ノ旅地ニ向テ出發セラレタリ氏ノ博覽強記ヲ以テ氏ノ看察力ヲ以テ氏ノ忍耐力ヲ以テ歐洲科學ノ中心ニ入リ學者大家ニ親炙シ博物學ノ温奥ヲ探檢セハ啓發スル處盖シ尠カラサルナリ三年ノ星霜異界ニ攻究苦學シテ他日氏カ貯ヒタル處ノ智囊ヲ携ヒテ歸朝スルノ日ハ日本ノ植物學ハ將ニ其面目ヲ一新スルナランド然リト雖𪜈氏ニ向テ一言云可キハ當今日本ノ植物學ハ正ニ駸々トシテ歩ヲ進ムルノ状况三年ノ後氏意外ノ進歩ヲ見ザルナキヲ保セス余輩ハ又氏ニ向テ乞ハント欲スル處ノ者アリ他ナシ時々歐洲ノ新學說新事實ノ詳報是レ會員諸氏幷ニ記者ノ熱望スル處ナリ氏ノ海外留學ハ一身ノ榮譽ナリ日本ノ名譽ナリ余輩ハ會員諸氏ト共ニ之ヲ祝シ與ニ括目シテ氏ノ歸朝ヲ俟ツ　S.　H.

蘇鐵の開花

小生去る六日縣下多藝郡根古地村に遊ぶ當村に豪家あり高橋多助と云ふ庭前に蘇鉄の大木四,五株あり其内最も大ひなるものを測りたるに地上より二尺(竹尺以下同じ)の所にて周圍四尺三寸三分高さ實に一丈五尺なり數莖を出せり毎年開花すと云ふ當時雄花七,八個を顯はし其實の大ひなるものは已に胡桃位に達するも未だ成熟の期に至らず雌花は毎年澤山に開くも雄花は實に稀にして昨年は只一花を開きたるも本年は一花をも顯さずと云へり故に昨年開きたる殘花一個を得て歸れり本年の如く雌花のみにて雄花のなき時は種子の成熟は如何なるものに哉又其近傍には大ひなる蘇鉄は無き由なりと兎も角種子成熟したる時期に澤山遞送さるゝ筈なれば其際能々調査する考なり聊か記して貴會に報ず

九月三十日　岐阜縣岐阜市京町　會員　名和　靖

質問應答

問　久保定橘

(一) 曼陀羅草ヲ或地方ニテ氣狂ヒ茄子ト稱シ候哉三好學先生著植物學教科書上卷二百五十六頁ニ胞軸裂開果ノ例トシテ氣狂茄子ヲ記載有之候得共其氣狂ヒ茄子トハ果シテ如何ナル植物ナルヤ詳細御答アリタシ

答　大久保三郎

きちがひなすびトハ曼陀羅花ノ事ニテ石州ノ方言ニ有之候讃州ニテ外科コロシ，伯州石州豫州ニテ外科ダウシ，ト申シ候其他てうせんたばこ，とうあさかほ等ノ名有之候普通ニてうせんあさがほト申スモノニ候

問　久保定橘

(二) 浸水田ハ勿論或ハ水田乾燥スルモ夕方ニハ必ス稻葉ニ露滴ノ成生スルハ如何ナル作用ナルヤ詳細御答アリタシ

答　大久保三郎

夕方ニ露滴ノ生ズルハ單ニ稻葉ノミニアラズ禾本科天南星科植物其他ニモ往々アルヿニ候此露滴ノ生ズル譯ト申スハ夕方ニナレバ大氣中ノ温度減少スルモ地中ノ温度ハ未ダ温ニ〆盛ニ根ヨリ水ヲ吸收致シ根壓ニヨリ勢ヒ能ク葉ニ送リマス是レガ日中ナレバ葉ヨリ蒸發シテシマヒマスガ大氣中ノ温度ガ冷氣ニ成リマスニ依リテ蒸發力ヲ減シ爲メニ葉緣若クハ葉ノ先端ニ水玉ヲ生ズルノテ御坐ヒマス

早朝ニ野ヤ園ノ草葉ノ緣リニ水玉ノ附着シテ居マスノハ通例葉ニ露ガ溜ッタト申マスガアレハ其實植物ガ汾泌シタノデアリマス

水玉ノ生ズル處ハ水孔 Water-stomata 或ハ通常ノ氣孔等一定ノ場處ヨリ出マスヲ常法ト致シマスガ間々上皮ノワレメヨリ出ルヿモアリマス又Moll氏ノ試驗ニヨレバ葉緣若クハ葉面ノ別段開孔ノナキ處ヨリ出ルヿモアルト申シマス

植物學會記事

會員齋田功太郎,松村任三,横山又二郎,石川千代松ノ四氏ハ今回理學博士ノ學位ヲ享受セラレタリ本學會ハ四氏ノ榮譽ヲ祝シ博物學萬歲ヲ大呼ス

理科大學敎授松村任三同助敎授大久保三郎ノ兩氏ハ去月二十日靜岡縣下ヘ出張ヲ命セラレ理科大學植物學科三年生藤井健二郎氏同行シテ御殿場近傍富士山麓ノ植物採集セラレタリ

理學士池野成一郎氏ハ農科大學助敎授ニ理科大撰科卒業松田定久氏ハ高等師範學校敎諭ニ孰レモ此程任セラレタリ

會員渡部協氏ハ四國植物採集トシテ凡ソ四週間ノ見込ヲ以テ理科大學ヨリ出張ヲ命セラレ九月二十日採集地ニ向テ出發セラレタリ

九月二十六日第四土曜日午後二時ヨリ本會月次會ヲ理科大學植物學敎場ニ於テ開會ス來會員十八名次ノ演說アリタリ

稻ノ語源ヲ論シテ其原產地ニ及ブ	松村任三君
九州植物採集旅行談	齋田功太郎君

演說終テ本會幹事二名ナリシヲ三名ニナス可キ動議ヲ可決シ補欠撰擧ヲ行ヒタルニ多數ヲ以テ堀正太郎氏當撰セラレタリ

植物學雜誌

第五卷　第五十七號

明治廿四年十一月十日

THE

BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V. No. 57.

November. 1891.

東京植物學會印行

東京植物學會

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

內藤耻叟君序
理學士農科大學助敎授白井光太郎著

日本博物學年表

全壹册

正價五十錢　郵稅四錢

但植物學雜誌購讀者ニシテ著者ヱ直接ニ申込ノ諸君ニ限リ郵稅共金三十四錢ニテ貴需ニ應ズ

日本新聞批評

本書ハ日本博物學ノ歷史ナリ著者ハ上古ヨリ今日マデチ大別シテ三期ト爲ス第一期本草學時代（上古ヨリ德川氏ニ至ル）第二期（博物學時代（德川氏ヨリ明治ノ初ニ至ル）第三期（明治ノ初メヨリ今日ニ至ル）即チ是ナリ而シテ第一期ノ沿革略史チ述ヘシ後第二期ニ移リ慶長十五年チ紀元トシテ明治戊辰ニ至ル迄ノ出來事チ年代紀体ニ之チ編述ス此部分ガ則チ本書ノ主眼ニシテ之ヲ一覽スルニ博物學上ノ沿革歷然トシテ指掌スルチ得ベシ蓋シ非常ノ苦心ト莫太ノ勞力チ以テ博ク諸書チ涉獵ズルニ非ズンバ焉ゾ能ク此ノ如ナランヤ方今人心浮華唯タ彫文繡辭庸人ノ喝采ヲ博センコトニ汲々トシテ又タ力チ這般ノ著述ニ用ユルモノナシ慨ス可キ哉

理學士白井光太郎著

增補訂正 植物自然分科撿索表

第二版

正價八錢

右久シク品切レノ處先版チ增補訂正シ第二版チ發行ス此段廣告ス

發兌　日本橋區通三町目　丸善書店
書肆　神田區裏神保町　敬業社

每月一回發行

獵之友

石版畫入

第一號本月十三日發行

定價一册十二錢六册前金（郵稅共）六十五錢十二册前金一圓○二十錢

獵之友ハ銃獵、獵犬、放鷹、鳥網、魚釣、魚網等ニ關スル經驗家之說話チ集輯シタル日本唯一ノ漁獵雜誌ナリ

發行所　東京小石川大塚坂下町　獵友社
賣捌所　同神田裏神保町一番地　敬業社

動物學雜誌

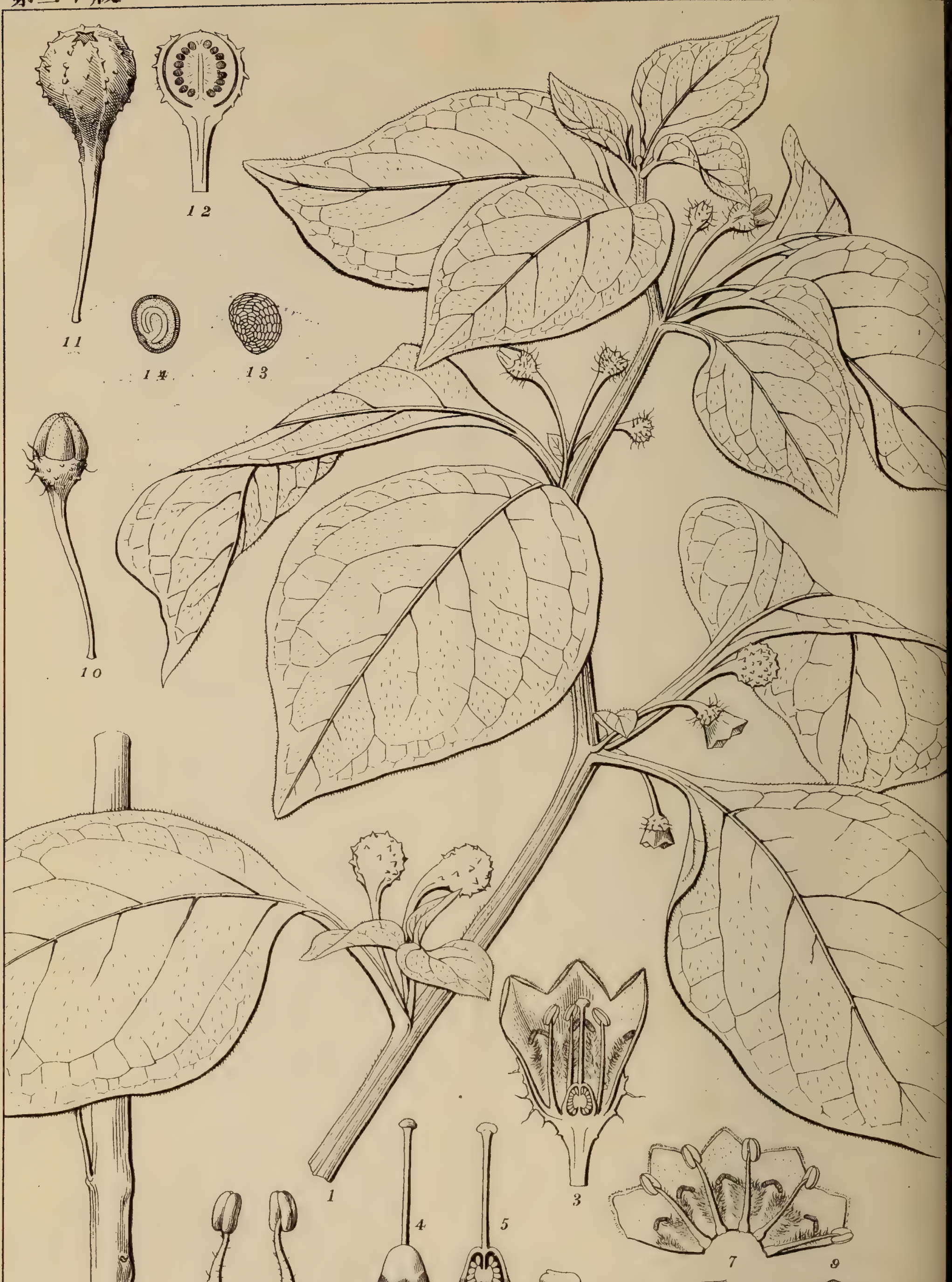
第三拾六號　明治廿四年十月拾五日發行

●壹部拾錢郵稅壹錢六册前金（郵稅共）金六拾六錢

●目次○日光產さんせうをノ卵並に產卵期　池田作次郎君○うみがめノ產卵ニ付キ續報　箕作佳吉君○蟬ニ付キテ○田中勝之丞君○鳥雜記　飯島魁君○からむくどりニ付テ○動物解剖手引草（鳥類之部）　岩川友太郎君普通動物學講義第廿五　箕作佳吉君●寄書○動物聲音考第十七（蟬、寒蟬、みん〳〵がな〳〵）　野村彥太郎君○眞珠の說（承前）　二宮生君●雜錄○越王餘算○ひがひ之說○本邦珊瑚ノ產地○土佐ニ於テ新ニ發見セシ蝶類○伊勢菰野山ノさんせううを　同山ノかはがらす○蠵龜（Chelonia）ノ產卵○鮎の食物○トリストマ科寄生蟲ノ感觸器○評判ト事實○小蛾の群集○小蛾とは蜉蝣なり最下等ノ生物○東京動物學會記事

發行所　東京神田區裏神保町壹番地　敬業社

第三十版 Plate XXX.



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
K. WATANABE, DEL.

CHAMÆSARACHA ECHINATA, YATABE.
IGA-HŌZUKI. イガホヽヅキ.

植物學雜誌第五卷第五十七號
明治廿四年十一月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V.] November. 10, 1891. No. 57.]

MEIJI GAKUIN LIBRARY

New or Little Known Plants of Japan.

No. 15.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Chamæsaracha echinata, Yatabe.

Nom. jap. Iga-hōzuki. イガホヽヅキ.

Solanaceæ.

(Plate XXX.)

Chamæsaracha echinata, Yatabe, in Bot. Magaz., Tōkyō Bot. Soc., vol. v., p. 317.—*C. japonica,* Franchet et Savatier, Enum. Pl. Jap., vol. ii., p. 455, pro parte.—Catal. pl., Science College, Imp. Uuiv., Tōkyō, p. 139.—Catal. Pl., Bot. Gard., Imp. Univ., Tōkyō, p. 158. Icon. Jap.—Sōmoku Zusetsu, vol. iii, fol. 47, sub *Iga-hōzuki.*—Honzō Zufu, vol. xvii., fol. 23 verso, sub *Ine-hōzuki.*

A coarse perennial herb, 2—4 feet high. Rhizome thick, branched. Stem angular, with prominent ridges; branches subdichotomous or subtrichotomous, divaricate, more or less hairy. Leaves exstipulate, geminate, often unequal, 3 or more together at the apex of branches, broadly ovate, somewhat acuminate at the apex, oblique and decurrent into winged petioles at the base, scattered with jointed hairs and under the lens minutely pubescent on both surfaces, pale and with prominent veins on the under surface, ciliate at the margins. Peduncles 1-3-flowered, sometimes more, from the axils of leaves, ½ inch or more long. Flowers nodding. Calyx cup-shaped, 5-lobed, 1½ lines long, 2 lines across, covered with long delicate deciduous hairs from thick bases which grow into prickles in fruit. Corolla white, subcampanulate, somewhat 5-angular, minutely pubescent outside, hairy inside towards the base, finely ciliate at the rim, 5-lobed, with a pair of small green elevated spots below and opposite each lobe, 3 lines across; its lobes acute, valvate-induplicate in æstivation. Stamens 5, alternate with the lobes of the corolla, attached to its base, filaments hairy, subulate, 2 lines long; anthers 2-celled, ovate, notched at both ends, versatile, extrorse, ¾ line long. Ovary subovoid, 2-celled, white, about 1 line long; its base yellowish, somewhat 5-angular; style filiform, 1½ lines long; stigma capitate; ovules numerous, on thick axile placentæ, anatropous. Berry pendulous, globose, white, 5-6 lines in diameter, closely surrounded by the leatherly and prickly calyx except at the star-shaped opening at the top; peduncles thickened towards the apex, 1 inch or more long. Seeds numerous, subreniform, flattened, ¾ line long; testa pale-brown, concentrically favoso-rugose; embryo coiled in the albumen.—Fl. June—September. Hab. Shady place.

My specimens of this plant are from Nerima and other localities near and in Tōkyō, and also from Nikkō, Aizu, Yukawa (Kii), Mt. Hakusan, Sapporo, Hakodate, &c.

In the last number of this magazine I stated the difference between this species and *C. Watanabei;* these two species being included, as I believe, in *C. japonica* by Franchet and Savatier. I thought it might be well to give a figure and description of the present species in this number of the magazine in order to make the distinction between the two species clearer to the reader.

Plate XXX. Fig. 1, upper part of plant; 2, lower part; 3, vertical section of flower; 4, ovary and style; 5, vertical section of ovary; 6, ovule; 7, corolla laid open showing the insertion of stamens; 8, ventral and dorsal views of stamen; 9, floral diagram; 10, flower-bud; 11, fruit; 12, vertical section of fruit; 13, seed; 14, vertical section of fruit showing the embryo;—*all except 1, 2, 11, and 12 enlarged.*

日本藥局方植物篇

(前號ノ續キ)

會員 澤田駒次郎

第五十六號正誤(320)ノ第十二行廿五字目ルハリノ誤(323)ノ第十九行十九字目ヨリ廿一字目ニ至ル的依兒ハ依的兒ノ誤

成分　本品ハ百露拔爾撒謨ノ基本植物ト同屬ニシテ極メテ類似ノ植物ヨリ滲出セシモノト雖𪜈其化學的作用ハ大イニ異ナリ其主成分ハ不晶結性樹脂ニシテ百露拔爾撒謨中ニ含有スル黑色疏脆ノ樹脂ト同物トス一千八百四十九年*Kopp*氏ノ說ニ據レバ該樹脂ノ一部分ハ容易ク酒精ニ溶解スト雖𪜈他ノ一部分ハ只微ニ溶解ス又本品中ニハ多量ノ酸ヲ有スト一千八百四十四年*Carles*氏ノ說ニ據レハ該酸ハ單ニ桂皮酸ヨリ成リ百露拔爾撒謨ノ如ク安息香酸ト混和セスト然レトモ一千八百七十六年ニ*Busse*氏ハ游離ノ安息香酸及ビ安息香酸ト桂皮酸ノ「エステル」ノ八.五「ペルセント」ヲ檢出スト

篤留拔爾撒謨ヲ水ト共ニ蒸餾スレバ油質(Tolen $C_{10}H_{16}$)大約一「ペルセント」ヲ生ス此油質ハ無色ニシテ佳快ナル香氣及ヒ苛烈性胡椒樣ノ味ヲ有シ設氏百六十度ニテ沸騰シ其比重ハ〇.八五八ナリ又本品ニ水ヲ加ヘテ煑沸スレバ桂皮酸及ヒ安息香酸ヲ溶出ス乾餾スレバ「スチロール」(Styrol)「プエノール」(phenol)「トルチール」(toluol or toluene C_7H_8)ヲ生ズ

「トルチール」ハ「メチールベンゾール」(Methylbenzol $C_6H_5CH_3$)ニシテ無

色ノ油質トス其比重ハ〇.八六設氏百十一度ニテ沸騰シ零下二十度ニ冷却スルモ凝固セズ適宜ノ法ニ因テ安息香酸ニ變ストス日本藥局方註解（醫科大學敎授藥學士下山順一郎氏著以下之ニ傚フ）ニ云篤留拔爾撒謨ハ甚ダ佳快ノ香氣ヲ有スル油質(TolenTolenト稱ス)ノ少量ヲ含有ス少量ノ遊離安香息酸及ヒ桂皮酸ヲ含有ス故ニ本品一分ニ大約十分ノ水ヲ加ヘテ煮沸シ其濾液ヲ放冷スル𬼀ハ此二種ノ酸類ヨリ成レル結晶ヲ折出ス又此二種ノ酸類ハ「エステル」トナリテ存在スルヲ以テ本品ニ苛性加里或ハ石炭乳ヲ加ヘテ煮沸シ濾過シテ得タル液ニ鹽酸ヲ加ヘテ放冷スル𬼀ハ以上二種ノ酸類ヨリ成レル結晶ヲ得ルモノトス」トアリ

贋造品　篤留拔爾撒謨ハ樹脂或ハ古僧仿紐謨ヲ以テ贋造スト雖𪜈之ヲ混和シタルモノハ硫化炭素ニ著シク溶解シ硫酸ニハ泡沸シテ亞硫酸ヲ發出ス純眞ノ篤留拔爾撒謨ハ硫化炭素ニ因テ桂皮酸ヲ生シ硫酸ニ溶解シテ赤色ヲ呈ス其試驗法ハ日本藥局方註解ニ詳カナリ合衆國ノ *Mattison* 氏ノ說ニ據レハ人造篤留拔爾撒謨ハLiquidambar Orientale ノ皮部ヨリ製シタル拔爾撒謨六三「ペルセント」皮部及ヒ燃燒木質一一「ペルセント」篤留拔爾撒謨二六「ペルセント」ヨリ成リ溫石油扁陣ヲ加ヘテ冷却スレバ「スチラシン」ヲ折出スルコト多量ナリト

醫治効用　衝動祛痰ノ特効藥トシテ用フルニ其効驗百露拔爾撒謨ニ稍々優レリ或ハ壯胸藥ノ一成分トシ用フ

篤留拔爾撒謨ハ緩和ナル衝動藥ト雖𪜈炊衝ヲ兼ヌル諸症ニハ禁戒スベシ又篤留拔爾撒謨依的兒溶液蒸發氣ヲ吸入シテ久欬頑固性欬嗽ヲ治シ錠劑ト爲シ頻煩ナル欬嗽ヲ寬解スルノ殊効アリ日本藥局方註解ニ云其効百露拔爾撒謨ニ類シ疥癬ニ効アリトスレ𪜈目下應用スルコト稀ナリ多クハ粉粧料ニ供ス藥局方ニ於テハ篤留拔爾撒謨舍利別ヲ製シ又前藥局方ノ沃度鐵丸ニ衣ヲ附スルニ用ユ」トアリ

篤留拔爾撒謨ハ薰物ノ一成分トシ又酒製溶液ハ佳快ノ香氣ヲ有シ久時之ヲ

失ハザルニ因リ花毬等ニ香氣ヲ附加スルニ用フト云フ

廿六　コペーイフエラ,ラングスドルフイ

羅甸名　Copaefera Langsdorffii, Desf.

荳　科

南亞米利加ニ自生スル小喬木(或云灌木)ニシテ枝杪チ繁茂シ其高サ六十尺ニ達スルモノアリ皮部褐色殆ンド平滑嫩枝ハ毛茸チ帶ブ葉ハ偶性翼狀ニシテ互生シ葉柄椎ハ矮短平滑或ハ微ニ毛茸チ帶ブ托葉ハ糸狀ニシテ速ニ墜落ス小葉三對乃至五對形チ廣濶卵圓若クハ長圓平緣ニシテ先頂鈍シ葉底不同其質羊皮紙樣脉胳微細ニシテ網狀ヲ爲シ透明ナル班點チ散布シ其長サ通常一寸三分許然レトモ多少長短アリテ八分餘ヨリ一寸七分許ニ至ルモノアリ葉柄ハ矮短ニシテ或ハ對生シ或ハ殆ンド對生狀チ爲シ托葉チ有セス第十二月ノ頃葉腋ヨリ花梗椎チ抽キ葉ヨリ稍々延長シテ弛緩ナル總狀花チ綴ル抱花小葉ハ細小ニシテ速ニ墜落ス花ハ細小ニシテ其蕚五出其裂片厚クシテ鋭尖形チ長披鍼ニシテ外面平滑內面銀色ノ毛茸チ密生シ白色若クハ淡紅色チ呈シ上部ノ一片ハ大イニシテ帽狀チ爲シ花瓣ハ缺如ス十雄蘂花絲纖長游離擴張シテ蕚ヨリ稍々延長シ葯ハ細小球形ニシテ暗黃色ヲ呈ス實礎ハ肥厚矮短ナル柄ヲ有シ卵圓形ニシテ扁平其邊緣褐色ノ長毛チ密生シ單房ニシテ房中二個ノ卵子チ有シ花柱糸狀矮短ニシテ先頂狹小柱頭微ニ膨脹シテ缺刻ス花後果實チ結ブ莢ハ不整卵圓形ニシテ平滑上部扁平兩側稍々壓扁セラレ橙褐色チ呈シ長サ六分餘乃至八分四厘許其柄矮短成熟スレバ二個ノ硬瓣ニ裂分ス種子一個懸生シ珠柄ハ非薄廣濶ニシテ肉質杯形ノ核衣ト爲リ種子ノ半ハチ被覆ス種子膜ハ平滑ニシテ濃褐色チ呈シ其臍痕細小子葉ハ大イニシテ形チ凸圓蛋自質チ有セス

本植物ハ西阿拉(Ceara)迷那日來斯(Manas yeraes)勝寶蘆(S. Paulo)（共ニ南米ノ地名）等ノ原野及ヒ森林ノ乾燥地ニ產シ殊ニ巴西ニ多ク此等ノ地ニ在テハ第十二月ノ頃開花スト

日本藥局方註解ニ云本條ノ藥品ハ殊ニ南米ノ北部ニ產スル Copaifera officinalis, L. 南米赤道下ノ東部ニ於ケル C. guianensis, De sfontaines. 其他巴西利ノ東部ニ產スル C. Coriaces, Martius 及ヒ中央巴西利ニ產スル C. Langsdorffii. Desfont ナル决明巴科 (Caesalpiniacea) ノ諸植物ヨリ採集スル樹脂液ナリトヿアリ

本植物ハ葉ノ大小及ヒ毛茸等ノ景況ニ因リ種々ノ變種アリ C. Glabra. Vog. C. laxa Hayne ハ此等ノ變種中ヨリ區別スト

Copaeifera ノ屬植物ニシテ骨湃波抜爾撒謨ヲ產出スル植物ハ花部ノ構造果實ノ形狀極メテ相似タルヲ以テ專ラ葉ノ形狀ニ因リ種類ヲ分別ス故ニ不完全ナルモノトス

*Bentham*氏ハ巴西植物書(Flora Brasiliensis)ニ於テ十一種ヲ揭載スト

C. officinalis, Linn. (C. jacquini, Desf.) ハ最初ニ知ラレタル種類ニシテ委內瑞辣トリネーダット等亞米利加中部ニ自生ス但シ巴西ニハ產セス又西印度ニ栽植スルニ罕レニ開花スト

C. Martii, Hayne ハ英領瓜牙那 (Britisn Guiana) 巴西北部亞馬孫沿岸ノ諸國ニ產ス*Bentham*氏ハC. pubiflora, ヲ以テ本植物ノ變種トス

C. Guianensis, Desf. ハ瓜牙那巴西北部ニ產スト

C. Coriacea, Mart. (C. Coridiflia, Hayne) ハ巴西北部ニ產ス之ヲ詳明セシハ*Hayne*氏ナリ

C. rigida, Benth. ハ巴西北部ニ自生スト　　（以下次號）

富士山植物彙報

（前號ノ續キ）

會員　渡邊協
同　松田定久

Saxifrageae. 虎耳草科

Astilbe japonica, *Miq.*

アワモリショウマ

„ Thunbergii, *Miq.*

トリアシショウマ

„ chinensis, *Max.* var. japonica, *Max.*

チダケサシ （大）

Tiarella polyphylla, *Don.*

ヅダヤクシユ （三）

Parnassia palustris, *L.*

ウメバチサウ （三）

Hydrangea pauicnlata, *Sieb.*

ノリウツギ

„ involucrata, *Sieb.*

タマアヂサヰ （三）

„ petiolaris. *S.* et *Z.* var. Cordifolia, *Max.*

ゴトウヅル （三）

Schizophragma hydrangeoides, *Sieb. et Zucc.*

イハガウミ

Deutzia scabra, *Thunb.*

ウツギ

Philadelphus coronarius, L. var. Satzumi, *Max.*

サツマウツギ （矢野）

Ribes alpinum, L. var. japonicum, *Max.*

ザリゴミ （大）

Crassulaceae. 景天科

Sedum kamtschaticum, *Fisch.* et *Mey.*

キリンサウ (大)

,, aizoon, *L*

ホソバキリンサウ

Halorageae. 蟻塔科

Haloragis micrantha, *R. Br.*

アリノタウグサ (三)

Onagrarieae. 柳葉菜科

Epilobium Hookeri, *C. B. Clark.*

アカバナ (三)

,, affine, *Bong.*

イハアカバナ (大)

Circaea erubescens, *Fr.* et *Sav.*

タニタデ (三)

,, alpina, *L.*

ミヤマタニタデ (三)

Umbelliferae. 繖形科

Hydrocotyle sibthorpioides. *Lam.*

チドメグサ

Sanicula europaea, *L.*

ウマノミツバ (三)

Bupleurum sachalinense, *Fr. Schm*

マルバサイゴ (三)

,, falcatum, *L*

ミシマサイゴ (三)

Carum Tanakæ, *Fr.* et *Sav.*

ミヤマセントウサウ (大)

Pimpinella calicina, *Max.*

ダケゼリ (三)

Chamaele tenera, *Miq.*

セントウサウ (三)

Ligusticum acutilobum, *Sieb.* et *Zucc.*

タウキ (三)

Angelica hakonensis, *Max.*

イハニンジン

,, Florenti, *Fr.* et. *Sav.*

シラネニンジン

Archangelica Gmelini, *D C.*

シヽウド

Caucalis japonica, *Houtt.*

ヤブジラミ (三)

Araliaceae. 五加科

Aralia cordata, *Thunb*

ウド

Acanthopanax aculeatum, *Seem*

ウコギ (矢野)

Helwingia japonica, *Dietr.*

ハナイカダ

Hedera Helix, *L.*

キヅタ

Cornaceae. 山茱萸科

Cornus Kousa, *Buerg.*

ヤマボウシ (大)

Caprifoliaceae. 忍冬科

Sambucus racemosa, *L.* var. Sieboldiana, *Miq.*

ニハトコ

Viburnum furcatum, *Blume.*

ムシカリ (三)

„ tomentosum, *Thnnb.*

ヤブデマリ

„ Sieboldi, *Miq.*

ゴマキ (矢野)

„ dilatatum, *Thunb.*

ガマズミ

„ Wrightii, *Miq.*

ミヤマガマスミ

Lonicera japnica. *Thunb.*

スヒカヅラ (三)

Diervilla japonica, *D C.*

タニウツギ (三)

„ grandiflora, *Sieb. et Zucc.*

ハコネウツギ (三) (未完)

花の色香

(前號ノ續)

理學士 堀正太郎

第五章 花色進化論

夫レ花色ノ原彩ハ黃色ナリトセハ如何ニシテ彼ノ白色純皓ノ花橙黃ノ色赤紫或ハ蒼色ニ現出シタルカヲ探究セサル可カラズ近年ニ至ル迄テ彼ノ

昆虫及ヒ草花ノ關係ハ人能ク其理由ヲ了知セサリシト雖𪜈有名ナルダーヰン氏ワレース氏ラボツク氏ヘルマンミユーレル氏等ノ探究考察ニ依リテ全ク明瞭トナレリ花ノ色彩ハ實ニ一般諸種ノ昆虫ヲ透引スルノ目的ニ出テタルモノナリ然レ𪜈昆虫ハ各色感ノ差異ナカル可カラス故ニ一種ノ色彩ハ又一種特別ノ昆虫之ヲ好ム即チ一種色彩ノ嗜好ニ依リ草花ハ昆虫ヲ透引セントヲ欲セハ其嗜好ニ適應スル處ノ色彩ヲ顯彰セサル可カラス今實例ノ二三ヲ列擧セハ花若シ其孳植ヲ雜多ノ小蠅ニ依賴スルモノニアリテハ其花常ニ白色ナリ其甲虫ニ依ルモノハ黃色ナリ其胡蝶或ハ蜂ニ依ルモノハ通常赤色桔梗色或ハ蒼色ナリ又或ハ一種ノ昆虫ハ常ニ一種ノ花ノミヲ撰擇シテ毫モ他色ヲ顧ミサルモノアリ又他ノ一種ニアリテハ諸種ノ草花ヲ轉々經歷シテ以テ花蜜ヲ穿鑿スルアリ彼ノ有名ナルミユーレル氏ハ高等ニ發達セル菊科植物ニ來集スル處ノ昆虫ヲ調査セシニ百部中七十五ハ皆蜜蜂ニシテ白色ノ繖形科植物ニ戲ルモノニアリテハ僅々百分ノ十四ニ過キス此等ノ事實ハ以テ蜜蜂ノ發達セル花ニ多ク來集スノ證ト見テ可ナラン又深赤色ノ花ハ眞ニ其色其香能ク腐敗ニ傾ケル獸肉ニ似ルヲ以テ特ニ蒼蠅ノ來集シテ花粉ヲ掠食スルヲ見ル

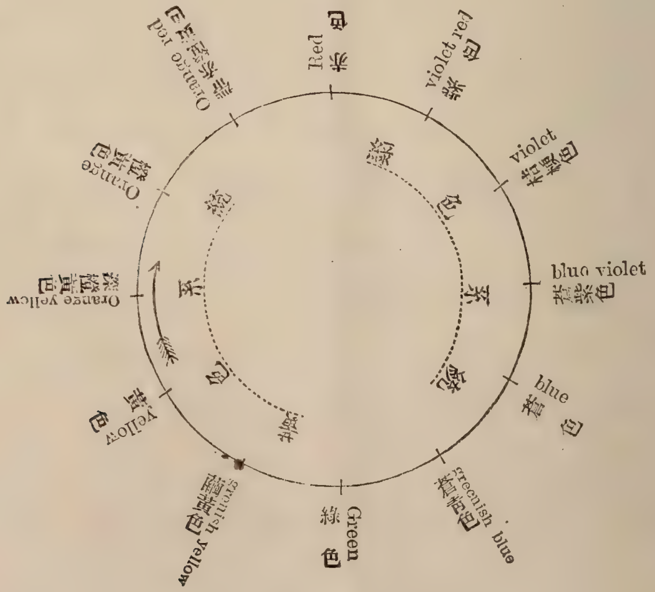
ダーヰン氏ハ嘗テ一ノさはきゞやうヲ取リ其ノ花辨ヲ截斷シテ試驗ヲ行ヘシニ群蜂其ノ近傍ニ來リ又ハ其ノ花辨アルモノニ來ルモ遂ニ其ノ無辨ノモノニ來ラサルヲ目擊セリ最モ面白キ試驗ハサージヨンラボツク氏ノ蜜蜂ニ於ケル試驗ニシテ小玻璃盤數ケヲ取リ蜜ヲ其ノ上ニ置キ之レヲ黃色淺紅色或ハ蒼色ノ紙片上ニ安置シ以テ蜜蜂ノ至ルヲ待テリ蜜蜂ハ自ラ各自一種ノ色彩ヲ判別セルモノヽ如ク常ニ蒼色紙片上ニアル蜜ノミヲ撰ンテ來レリ此ノ試驗ヨリシテ蜜峰ハ諸色中蒼色ヲ最モ撰ム事ヲ知リ又蒼色ノ草花ハ常ニ蜜蜂ノ媒介ニヨリテ交互孳殖ヲナスモノタルヲ知ル可シ

夫レ昆虫ノ特殊ノ色彩ヲ撰擇スルモノ其色彩其物ヲ好ムニアラスシテ其ノ色彩アル草花ハ自己ニ尤モ適當セル求食場タルヲ知レハナリ故ニ昆虫

ノ色彩嗜好ノ異同ハ直チニ原花ノ始草色即チ黄色ヨリ轉化遷變シテ或ハ白色トナリ淺紅トナリ赤色トナリ蒼色トナル變色進化ノ因タリ又果タルモノナリ

花色若シ其ノ始原色ノ黄ナリトセハ今日見ル處ノ諸種ノ色彩ハ如何ニシテ起リ又或ハ一定ノ規律ノ下ニ變化セルモノナルヤ昆虫若シ其ノ初メ黄色ノ外一モ他ノ色彩ヲ見サルモノトセハ如何ニシテ此等色彩撰擇嗜好ノ異同ヲ來セシカハ讀者ノ正ニ聞カント欲スル處ナル可シ

花色ノ性質ハ未タ充分ニ學者ノ説明シ能ハザル處ナリ然レドモ彼ノソールビー氏ハ花及ヒ葉色素ヲ化學的ヨリ驗究シタル人ニシテ又大ニ吾人ニ新知識ヲ與ヘタルモノナリ花辨ノ色彩ハ秋葉紅ニ染ムルト同シク皆正ニ存在セル處ノ色素ノ酸化ニ起因シ且ツ種々配合分離ニ依リテ諸種ノ色彩ヲ生スルモノナリドカンドル氏ハ花ノ色素ヲ二ノ系統ニ區分シ綠色ヲ中間ニ置キ黄色系統(Xanthicseries)ハ萌黄色(greenishyellow)ヲ以テ初メ蒼色系統(Cyanicseries)ハ蒼青色(greenish blue)ヲ以テ初メ各赤色ニ終ル次ニ掲クル處ノ圖式ニ依リテ知ル可シ


赤色 Red
紫赤色 violet red
violet
blue violet
blue 蒼色
greenish blue 蒼青色
Green 綠色
greenish yellow 萌黄色
yellow 黄色
Orange yellow 深橙黄色
Orange 橙黄色
Orange red 橙赤色
綠色系統
黄色系統

諸花ノ色彩ハ略一定ノ規律ノ順序ニ從フテ進化變遷セサルモノ如ク最モ下等ニシテ單簡ナル草花ハ多クハ萌黄色或ハ黃色ニシテ漸次高等ニ發育スルヤ上圖ニ示ス處ノ矢ノ方向ヲ以テ色彩ノ變遷スルモノアルカ如シ故ニ草花ニ屢々見ル處ノ色變ハ多クハ此順序ヲ踏ムモノヽ如ク即チ動物學上謂フ處ノ胎生進化 Ontogeny ニシテ花色ノ種屬進化 Phylagney ヲ一花ニアリテ反覆セルモノナリト信ス

るりさう科ノ草花ハ將ニ蕾ヲ破ラントスルヤ淺紅色ナリト雖𪜈滿開ノ期ニ至テ全ク紫色トナル深紫ノ牽牛花亦然リ彼ノ天笠牡丹鬱金香ノ如キハ其花元來黃色ナリ然レ𪜈園丁ノ培養ニ依テ白色トナリ(白色ハ色素ノ全クナクシテ空氣ノ存在ニアルカ亦色素ノ存在僅少ナルニ素ク)或ハ赤色或ハ紫或ハ蒼色ニ殆ント花ノ全色彩ヲ影彰スルモノナリ(Myosotis versicolor)ハ其開カントスルヤ黃色ニシテ桃色ニ變シ滿開期ニ至テ蒼色トナル以上ノ事實ハ以テ其花色進化ニ一定ノ規律方向アルヲ知ルニ充分ナリト信スルナリ

花色變遷ニ一定ノ規律アルコヲ記セリ今進ンテ如何ニシテ各種色彩カ起リシカ亦如何ニシテ昆虫ノ嗜好ニ應セシカヲ論ス可シ

花色ノ赤タリ紫タルハ已ニ云フ如ク花辨中ニ存在スル處ノ色素ノ酸化作用ニ基キ且ツ互ニ混合配別シテ初メテ起ルモノナリ彼ノ有名ナルワルレース氏ノ所説ニ隨ハ此等美麗ノ色彩ハ動植物ニ在テ其最モ多ク變化ヲ亨受スル局部ニ顯彰セルモノナリ故ニ動物ニアリテハ孔雀ノ尾毛山鳥雉ノ如キ其他頭冠ノ如キ胡蝶ノ翼翅等ニ有リテ班紋等ノ壯飾ハ實ニ吾人ノ目ヲ眩マスモノナリ植物ニアリテモ然リ其最モ變化ヲ經過セル局部ハ其色亦異ナラサルヲ得ス是ニ依テ見レハ植物ハ其ノ發達ノ少キ花ニアツテハ黃色或ハ白色ニシテ其一歩ニ進メタルモノハ淺紅或ハ赤色ヲ取ル可ク而シテ其ノ最モ高等ニ發達變遷セルモノハ紫色或ハ蒼色ニシテ青藍色ハ恐ラクハ最モ高等花ノ色采サル可シ

夫レ蜜蜂或ハ胡蝶ハ其ノ体其ノ口蜜槽ヲ探メテ生活スルコト他昆虫ヨ

リモ遙カニ適應セルモノナリ蝴蝶ハ渦狀ニ變回セル細長ノ尖口ヲ有シ以テ他虫ノ達シ能ハサル處ノ蜜槽ニ其ノ食ヲ得可ベク蜜蜂ハ鋭利ノ害針ヲ有スルカ故ニ勇進シテ花ノ基底ニ入リ以テ食物ヲ穿鑿ス此等動物ノ進入ハ實ニ害ナクシテ反テ望ム處動物ハ此等植物ナケレハ一日モ生ヲ保ツ能ハス植物モ亦此等昆虫ナカリセハ競爭場裡ニ現在スル能ハサルナリ故ニ若シ一旦其ノ蜜槽ノ位置及ビ形狀ノ蝴蝶或蜜蜂食物穿鑿ニ便利ナレハ之ヲ失フコトナク益々此等動物ニ利便ナル方向ニ變化シ反テ他動物ハ益不便利ヲ來スニ至ルヘシ期ク花ノ局部ニ變遷ヲナセハ其色亦從テ變遷セサル可カラス而シテ動物ハ其發達變遷セル色彩ハ直チニ蜜槽存在ノ記號トシテ記臆スルナル可ク故ニ種々ノ草花ヲ東奔西走繁忙ニ花蜜ヲ穿鑿スルニ及ハスシテ或ハ赤色或ハ紫色ノ花ハ必ス蜜槽アルヿヲ記臆セル以上ハ最モ少小ノ勞働ニヨリテ多量ノ花蜜ヲ得ルニ至ルモノナリ　（以下次號）

雁皮ノ種類

理學士　白井光太郎

日本紙ハ我邦特有ノ名産ニシテ品質ノ佳良ナルハ實ニ宇內ニ冠絕スル所ナリ就中雁皮紙ノ如キハ其最モ上等ニ位スル者ト謂フベシ日本植物家否日本人タル者其製紙ノ原料ヲナス植物ヲ熟知セズシテ可ナランヤ

左ノ一說ハ頃日某氏ノ問ニ答フルガ爲ニ實物ト書籍トニ據リ考定セル者ナリト雖モ紕謬ナキヲ保セズ記シテ會員諸氏ノ討究ヲ俟ツ

日本産雁皮屬分種表

I. 葉互生ス

卵圓形ニシテ先尖リ兩面柔毛アリ下面ニ殊ニ多シ花ハ枝頭ニ叢生シ穗ヲナサズ筒ハ白毛滿布シ辨ハ黃色ナリ其木高サ一丈余ニ達ス………………………………………………………………………………………がんぴ

卵圓形,楕圓形,長楕圓形,若クハ短披針形ニシテ先或ハ尖リ或ハ尖ラズ

上面無毛若クハ微毛アリ下面脉上ニ毛アリ花ハ枝頭ノミナラズ梢葉腋ヨリ一二寸ノ花軸ヲ出シ其先端及苞葉腋ヨリ花叢ヲ生ス色白シ葉ノ形楕圓形長楕圓形若クハ短披針形ニメ花繁ク葉揚起シ密生ス…………………………………………………………………………こがんぴ

葉ノ形がんぴニ似テ兩面ニ毛アリ卵圓鋭頭ニシテ本濶シ花ノ數稀ニメ葉稍疎生ス……………………………………………………いぬこがんぴ

2. 葉對生ス

花枝頭ニ限リ叢生シ穗ヲナサズ色白シ……………………………ひをう

花枝頭及梢葉腋ヨリ花梗ヲ對生シ少々穗狀ヲナス…………きがんぴ

花枝頭ニ限リ叢生シ穗ヲナサズ筒青色瓣黄ナリ…………あをがんぴ

解說

(一)がんぴ　又かみのき

羅丁名 Wikstræmia Sikokiana *Franch et Sav.*

本草啓蒙曰「一種紙ヲ造ルがんぴト云木アリコレモ山中ニ生ス高サ一丈許又小木ナルモアリ葉互生ス形こがんぴヨリ廣クメ蔓荊(はまがう)葉ノ如クニシテ白毛多シ四月莖梢ニ花ヲ開ク數多ク聚リ生メ穗ヲナサズ花形モ亦丁香ニ似テ小シ筒ハ白色瓣ハ黄ナリコレ亦黄芫花ノ一種ナリ

又日本產物志美濃國部ニがんぴノ圖說アリ其說ニ曰「東濃善師野土田ノ邊又川浦三坂西濃高津等ニ產ス又勢州朝熊山ニモアリ此樹ハ落葉灌木ニシテ高サ三四尺或ハ一丈許ニ及ブ者アリ其葉互生ス形蛋圓ニメ端尖リこがんぴノ葉ヨリ濶ク較南天ノ一小葉(?)ニ似タリ葉背柔白毛茸ヲ帶ブ芒種後枝端葉間ニ小花ヲ綴ル形頗ル丁香ニ似テ小シ淡黄白色ニメ八雄蕋一雌蕋ナリ此樹皮柔靱ニシテ斷レ難シ山民三月コノ枝條ヲ刈リテ之ヲ鬻グ是雁皮薄様紙ヲ漉クノ料トシ武儀郡神洞村片村等ヨリ製出ス云々」

今西書ニ據リ此種ノ羅丁名ヲ考フルニ前揭ノ種名ニ相當ス但シ獨逸ライン氏ノ日本紀行ニ此種ノ圖ヲ載セ其羅丁名ヲ W. canescens, *Meisn* ト

セルハ恐クハ非ナリ從フコト勿レ

(二)こがんぴ

漢名地綿(質問本草)

羅丁名 W. Gampi, Max. (W. canescens, Meisn. var. Gampi, Miq)

本草啓蒙曰「こがんぴ一名やまかご。いぬかご。いぬがんぴ。のがんぴ。わさやいと。しらはぎ。ひよ。

大和河内播摩近江其餘諸州ニ多シ京師近邊ニテハ西ノ大原野ニアリ皆陽地ニ生ス小木ナリ高サ一二尺枝條叢生ス芫花(ふぢもどき)葉ニ似テ互生シ繁密ナリ六七月枝梢ニ花穗ヲナスコト一二寸許花ノ形丁香ニ似テ白色芫花ヨリ小シ內ニ黃蕋アリ後圓實ヲ結ブぬまとらのをノ實ニ似タリ皮茶褐色內ハ白シコノ根皮及黃芫花ノ根皮ヲ用ヰテ紙ヲ製ス鳥子紙ノ如シ

質問本草外篇卷一三葉ニ此種ノ圖說アリ曰ク

地綿（蕘花一種シラハギ）

生山野中八九月開小白花邦俗或以充於白鮮皮敢問是非

按白鮮皮葉似茱萸高尺餘莖青葉稍白四月開花根似小蔓青細觀此種不甚相同或云係是地綿非白鮮也（辛丑石家辰）形雖似白鮮皮其根土名地綿其性溫散可治跌打損傷等症（辛丑宋宣觀林大明）

今西書ニヨリ此種ノ種名ヲ考フルニ前掲ノ者ニ適當ス

(三)いぬこがんぴこがんぴニ似テ葉面ニ毛アリ故ニ名ク(新稱)

羅丁名 W. pauciflora, Franch. et Sav. (W. canescens, Meisn. var. pauciflora.)

此種ハこがんぴニ比スレバ葉大ニシテ疎生シ葉ノ形がんぴ葉ノ如ク本濶クシテ蛋圓形ナリ先尖レリ兩面殊ニ下面白毛アルコト亦がんぴ葉ノ如シ花梗毎ニ二…六小花ヲ生ス

今西書ヲ按スルニ前掲ノ種名ニ適當ス

(四)ひをう

羅丁名 W.

植物雜誌第　號ニ矢田部博士ノ圖說アリ參考スベシ

(五)きのこがんぴ（又きがんぴ）

漢名土地綿（質問本草）

蕘花（啓蒙）

黃芫花羅丁名W. Japonica, Miq

本草啓蒙曰黃花ノこがんぴハ長門周防薩摩日向其他諸州ニ產スル小樹ナリ高サ三四尺枝葉對生ス葉ハ芫花ニ似テ薄ク毛ナシ秋ニ至リ枝梢每ニ小枝チ對生シ花チ開ク四瓣筒子芫花ヨリ小ニメ黃色

質問本草外篇四ニ此種ノ圖說アリ

土地綿（綿花一種 ヒノチ）

木高四五尺春生葉夏開花

此一種其花葉莖根似與前圖稍別第其根皮比前圖更見綿而有力似敝處山谷間生名土地綿之類云云（壬寅陳文錦李 與成盧亨春）

○質問帖中次此種於芫花之後故有比前圖之語

今西書チ按スルニ前揭ノ羅丁名ニ適當ス此種ノ根皮ヲ製紙ノ料トスルコトハ啓蒙こがんぴノ條ニ見ユ

(六)あをがんぴ

羅丁名 W. retusa, A. Gray

琉球小笠原島ニ產ス樹高四五尺葉對生シ毛ナシ長楕圓若クハ楕圓形ニメ先鈍ク若クハ稍凹メリ花枝頭ニ限リ叢生ス筒子綠色瓣黃色ナリ

今西書チ按スルニ前揭ノ種名チ適當トス

胡椒ノ說

會員　澤田駒次郎

胡椒ハ羅甸名チ Piper nigrum, Linn. 又 Piper trioicum, Roxb. ト稱シ胡

椒科ニ屬スル植物ニ〆老幹ハ其ノ皮部粗糙若枝ハ平滑分岐シ莖節膨脹〆根ヲ生シ之ニ因テ他樹ニ攀上スルヿ高サ二十尺乃至三十尺葉ハ卵圓形若クハ披鍼形ニシテ互生シ托葉ヲ有セス長サ三四寸革質平滑平緣ニシテ兩端尖リ表面濃綠色ニ〆光輝アリ裏面ハ其色稍々稀薄五條乃至七條ノ脈管葉ノ基底ヨリ起走シテ先頂ニ至リ其間隔網狀ノ脈胳ヲ有ス葉柄ハ圓柱形ニシテ長サ四分餘花ハ偏性ニシテ或ハ雌雄株ヲ異ニシ或ハ一株ニ雄花ト雌花ヲ有ス然レトモ間マ兩全花ヲ有スルモノアリテ各々花梗ヲ有セス花梗椎ハ纖長ニシテ懸生シ長サ二寸五分餘乃至五寸餘雄花ハ花被ヲ有セス鱗片ニ因テ花梗椎ニ附着シ雄蘂二個花絲廣潤厚重其葯二房ヲ有シ鱗片ニ附着シ數花聚集シテ肉穗花ヲ綴ル雌花ハ花梗及ビ花被ヲ有セス花梗椎ハ細小ナル抱花小葉ノ腋ヨリ生ス實礎ハ球形ニシテ柱頭三個乃至五個ニ缺刻シ數花稍々弛緩ニ附着シ抱花小葉ハ肉質平緣ニシテ舌狀ヲ爲ス果實ハ類球形其直徑二分余外面平滑頂端柱頭ノ痕跡ヲ存シ初メ綠色稔熟スルニ從ヒ赤色ト爲リ終ニ黃色ニ變ス而シテ數果弛緩不整ニ果軸ニ附着ス子殼ハ肉質ニシテ菲薄種子一個胎盤ハ褐色ヲ呈シ胚子ハ細小ナリ

本植物ハ印度南部殊ニ馬剌巴爾海岸森林中豐饒ノ陰地ニ自生シ其莖節ヨリ根ヲ生ジ他樹ニ攀上シテ繁茂ス其他印度諸部ニモ亦產ス但シ錫蘭,新嘉坡,ペナンク(Penang)婆羅,蘇門答臘,呂宋,瓜哇等ニ產ス是レ往時移植セシモノナラント云フ此等ノ諸國殊ニ印度南西部ニ於テ大イニ栽培シ支柱ヲ架設シテ攀上セシムト

本植物ハ開花結實スルコト漸次ヲ以テシ開花後五六箇月ヲ經テ其果實稔熟シテ採收ニ適應ス西印度ニ於テモ亦之ヲ試植スト

本植物ハ攀上性ヲ有スルニ因リ Pipper vine ト稱ス又 *Roxburgh* 氏ノ命名セシ P. trioicum ハ *C. De Candolle* 氏ニ因テ一種ノ變化トス此植物ハ兩全花或ハ兩全花ト雌花ヨリ集成セル葇荑花ヲ有スルノ外異ナルコト無シト

藥品　胡椒　黑胡椒　Piper nigrum.

胡椒ハ本植物ノ未熟ノ果實ヲ採收シテ乾燥セシモノニシテ英國印度合衆國藥局方ニハ藥用トス

收穫　果實ノ赤色ヲ呈スルヲ度トシ花梗椎ト共ニ採收シ機械ヲ以テ其果實ヲ脫離セシメ篩ヒ分ケ莚上ニ撒布シテ日光ニ曝露シ或ハ微熱ヲ用ヒテ乾燥シ貯フ但シ充分稔熟セシモノハ刺戟性ノ氣味ヲ減少スルノミナラズ採集ノ際果實脫離スルノ不利アリ

本植物ハ開花結實スルコト極メテ不整ナルニ因リ子實ヲ採收スルニ五六箇月ノ時日ヲ要ス

本品及ヒ白胡椒ヲ輸出スルハ新嘉坡等ニシテ一千八百七十二年ニ於テ英國ヘ輸入セシ高ハ二千五百萬磅ニシテ英領印度等ヨリ二十五萬六千磅其他ノ諸國ヨリモ多少輸入アリテ其總額二千七百五十七萬六千七百十磅ニシテ其三分ノ二ハ日耳曼伊太利露西亞西班牙等ヘ輸出シ殘リ三分ノ一ハ英國ニテ消費ス又馬拉巴爾,交趾,新嘉坡,暹羅等ヨリ一種變種ノモノヲ產出スト云フ

性質　坊間ニ鬻賣スルモノハ球形ニシテ直徑一分六厘餘硬固ニシテ黑褐色ヲ呈シ大イニ皺縮シ頂端三個乃至五個ニ分裂セル柱頭ヲ存シ果梗ヲ有セズ種子ハ皮壁ニ附着シ殆ント外胚乳ヨリ成リ卵子ハ通常萎縮シテ種子ノ尖端ニ存ス其解剖的構造ハ生藥學ニ詳カナルニ因リ玆ニ之ヲ贅セス

胡椒ハ特異ノ芳香ヲ有シ味ハ芳香性ニシテ苛烈ナリ

成分　樹脂,揮發油,胡椒素 (Piperin) 澱粉等ヲ含有シ之ヲ燃燒スレバ五「ペルセント」ノ無機物ヲ殘留スト

樹脂ハ軟柔ニシテ苛烈ノ味ヲ有シ大約一八「ペルセント」ヲ含有ス但シ胡椒ヲ用ヒテ衝動ノ効驗アルハ主モニ此樹脂ノ存在スルニ因ルモノトス

揮發油ハ一.六乃至二.三ヲ含有シ炭化水素ノ混和物ヨリ成ル胡椒ニ特異ノ芳香アルハ此揮發油ニ基因スト

胡椒素（$C_{17}H_{19}NO_3$）ハ無色方柱形ノ結晶ニシテ殆ンド無味無臭亞爾加里性ヲ徵セス其含量八「ペルセント」ニ至リ水ニ溶解セスト雖𪜈酒精ニハ容易ク溶解ス本品ヲ解熱藥トシ効驗アルハ胡椒素ノ存在スルニ因ルモノトス

胡椒素ハ分解セシムルトキハ胡椒酸(Piperic acid)ト「ピペリデア」(Piperidia)ヲ生ス此「ピペリデア」ハ無色ノ液ニシテ強亞爾加里性ヲ徵シ安母尼亞臭及ヒ胡椒臭ヲ放チ酸類ト抱合シテ直チニ結晶性ノ鹽類ヲ生スト

混和物　胡椒ノ全形ヲ有スルモノハ他物ヲ混和スルコト能ハスト雖𪜈其粉末中ニハ澱粉芥粉番椒粉等ヲ混和ス然レトモ該粉ヲ顯微鏡下ニ照シ或ハ化學的試藥ヲ以テ驗スレバ之ヲ識別スルヲ得ウ此際注意スベキハ本品中ニ澱粉ヲ含有スルコトヲ記臆スルニ在リ然レドモ胡椒中ニ存在スル澱粉ハ其粒極メテ細小ナルニ因リ他品ヨリ製造セシ澱粉（米ノ澱粉テ除ク）ト鑑別シ得ルナリ *Evans* 氏ノ說ニ據レハ米ヨリ製シタル澱粉ハ殆ンド同一ノ大イサヲ有スト

醫治効用　芳香性驅風藥及ヒ衝動藥トシ應用ス其効驗アルハ直腸及ヒ輸尿管ノ粘液膜ヲ刺衝スルニ在リ又胡椒ハ歇私的里亞及ヒ脫腸ノ特効藥トシ腹痛ニハ他ノ緩下劑ニ伍用シテ効驗アリ○解熱ノ一良藥トシ往時歐羅巴諸國ニ於テ規尼涅ニ代用シ癇歇熱ニ應用スト雖𪜈其効驗確實ナラザルニ因リ現今胡椒及ヒ胡椒素ヲ用フル者罕レナリ○胡椒ハ嗽藥トシ弛緩性懸壅垂,舌部,痿痺,咽喉病ニ用ヒ或ハ引赤藥トス或ハ蓽澄茄ニ代用シテ淋病ニ用フ

胡椒ハ香味料トシテ歐米諸國ニハ最モ多量ニ賞用ス此レ一ハ其氣味ヲ賞シ一ハ胃ヲ刺衝シ消化ヲ助クルニ因リ胃弱ノ人ハ常ニ之ヲ用フルヲ良トス

白胡椒(Piper album)ト稱シ支那人ノ大イニ貴重セルモノアリ此レ上記植物即チ Piper nigrum. ノ稔熟セシ果實ヲ採集シ製造シタルモノニシテ其方法ハ土地ニ因リ差異アリト雖𪜈概言スレバ稔熟セシ果實ヲ採集シテ二三日間ヲ經テ洗淨シ籠類或ハ適宜ノ器中ニ納メ擣碎シテ梗椎及ヒ菲薄暗色ノ果皮ヲ除去シ乾燥セシモノナリ故ニ白胡椒ハ果皮ヲ剝脫セシ黑胡椒

實ニシテ種子ヲ被覆スルニ些少ノ子殼ヲ有シ殆ンド球形平滑ニシテ其頂端多クハ壓扁セラレ周圍ハ下部ヨリ上方ニ向テ通走スル十個乃至十二個ノ脉管ヲ具有シ外面角質鼠白色若クハ灰色又ハ帶黃白色ヲ呈シ其內部ハ軟柔氣味ハ黑胡椒ニ比スレハ佳快ニシテ其性溫和其粒黑胡椒ヨリ稍々肥大ナルモノアリ

坊間ニ鬻賣スル白胡椒ニ四種アリ打拉者白胡椒ペーナング白胡椒吧唎非白胡椒新嘉坡白胡椒是レナリ但シ打拉者(Tellicherry)ヨリ產出スルモノヲ上品トス

白胡椒ハ支那ニテ大イニ貴重シ之ヲ消費スルコト年々二百萬磅以上三百萬磅ニ至ルト

白胡椒ノ成分ハ黑胡椒ニ同ジト雖ドモ其含量ニハ稍々差異アリ

蕎 麥 史

前々號ノ續キ

野村彥太郎

昇平夜話に卯年(天明三年なるべし)の飢饉のころ長崎屋半兵衛なる者の手紙の中に諸物價の騰貴したることをいへる處に玄米一升二百五十文蕎麥一升百二十四匁とあり

衣食住記に夜鷹そば切其後手切そば太平盛寶曆の後風鈴蕎麥切品々出るとあれば風鈴そばと夜鷹そばとはをなりとみゆ狂詩諺解に風鈴そば夜鷹そばと似て非なる者なり太平にもり上れきありといへりこれ上に太平盛とあるも今のしつぽくなるを知へしと嬉遊笑覽に見えたり橘庵漫筆（享和元年京田仲宜作）に京師下河原に佐野屋嘉兵衛といふ者享保年中長崎より上京して初て大椀十二の食卓を料理して弘めける是京師浪花に食卓料理の初とかや嘉兵衛娘はんといへる者老婆となりて近頃まて存命せり則今の佐野屋の祖なり大坂にては彼これ食卓料理あまた弘りたれと野堂町の貴德齋はど久しく續きた

るはなしといへり銅脉が太平樂府に饂飩蕎麪焚火行とあり京師も同し頃夜そば賣出しとみゆ蜀山人が一話一言に前方は甘酒うり蕎麥うり夜計賣歩行しも買人皆遠慮がりて手前の家の前に不賣して遠く行過るを見て跡より追駈買ふ樣に致せしが度々の類燒に晝夜賣歩行ける故今は誰とても無遠慮に我家の前にて買ふ樣に相成淺草門跡並に横山町名物也近來(文化頃ならん)所々にみせ出來る昔は夜の煑賣御法度なり寛文元年辛丑十二月廿三日先も如相觸候町中茶屋煑賣仕候者幷に振賣の煑賣夜に入堅商賣仕間敷云々

寛文十年庚戌七月六日以後より煑賣可爲停止前方相觸候今程方々有之沙汰とも稱可爲無用事

其後夜そば賣もありと見えて貞享三年十一月晦日うどんそば切如何によらず火を持あるき商賣仕候義一切無用可仕候

成形圖説に食物便覽（予は未此書を一見したるとなければ其著作の年月を詳にせず）を引ていふ關東の俗に除夜每に蕎麥麪を食ふを福蕎麥と云ふ是關東三長者に增淵民部と云者の家より起れり（三長者は小金玄蕃，增淵民部，東金茂右衛門）彼每除夜年中の事濟て蕎麥麪を喫ひ一首を咏す世の中に目出度ものは蕎麥の種花咲實のりみかど納る是に倣ふて年越そばを食ふ夫れ貧富ハ命なり何んぞ人に效はんや愚婦の意といふべし（此みかさとさむろさ咏しに付てとかしき話あり或窮士の隣に富者あり極て吝嗇に窮士問て曰吾等は家の業は固より世間の交にも家貧しく父母を養ふとのまゝならさるを憂ふさぞ談りければ富者對てそれはうこ元の心掛あしき故也先さんかくの角とさるの業を行ひ玉へさ示しけるうれはいかなる教ぞさ問へば富者曰まつ禮義をかき事をかき耻をかき玉へしからすは貴殿一生貧なるべしさ得色していひけるさかやいでうの事をかくの一事はさてもありなん人さして禮義をしらず耻辱をしらずこは獄にもしかさる者なりかくるとこのわざをば世の笑具させるもかくる鄙夫の世にあればなりかゝる事して金錢を貯たらんは卽守錢奴なり）とあり今は晦日蕎麥とて每月末に喫べるは世間利に走るの極とやいふべき

出放題（善謔主人著さありて實名を載せず又序に天安萬年長至日さありて陽に年月を載せず字典に保は安也さもあれば天保年間の著作なるべし或は云小林歌城の作なりさ）に其頃の有名なる戲作家畑銀雞か淺艸の猿屋まち月都庵といふそばやの引札をかきたるを載すれば

抑蕎麥の初まりは,人皇五十五代の御代,仁明帝の御時に,初めて畿內に此種を,うゑさせ玉ひし其をうから,所々方々に弘まりて,田地田畑持る人是

> をうゑさる國もなく,うゑれば實法豐年の,目出度年は格別に,新蕎麥ひきぬき温飩まて,召上られぬそのうちから,皆々樣の御言にもそりや旨からふ善からふと御贊くださる程なれば,漢土人は此事をうま河漏とぞ申すとかや,かゝる目出度品なれば,三都をはじめ田舍まて,棟上井戸がは仕立土藏あらうち煤はらい,引越長屋のくはりもの,或は喧嘩の中なをり,主從かための請狀にも,此品なければかたつかす,さればこそあれおしてるや,浪花にきこへし砂場そば,御結搆なる雞がなく東に名高き,正直の天窓にやどる林屋の工いだせる新蕎麥は外に類なきうち加減,蕎麥粉は原より色白く娘盛の二八より,きみを思ひの玉子とぢ大蒸籠に小蒸籠,あんかけうどんあられそば,天麩羅花卷しつぽこそば,別して念入諸君子の,御心に叶ひしやうに製したる,風味は飛切上鹽梅,おこのみならばまだ外にけんどんならぬ上品は主人が自慢の印籠蕎麥,月の都と名附しは雲の上迄御評判偏に願ひ奉るといはぬばかりの腹の中よつく見込んだそれがしは,淺艸堀田原のほとりにすめる我儘骨張の醉客月都庵のあるじにかはりて
>
> 平亭主人誌

されば天保の頃には蕎麥の品數もふへて現今の如くになりしものなるべし天麩羅蕎麥などは何時頃より始まりしか詳かならざれども蓋してんぷらの始まりしよりてんぷらに准へて蕎麥に調進せしものならん歟此の天麩羅の事につきては北越雪譜,蜘蛛の糸卷などに出れば參考の爲に次に之を掲ぐ

天明の初年大坂にて家僕四五人もつかふほどの次男年廿七八はかり利助といふもの身よりとしの二ツもうへの歌妓をつれて出奔して江戸に下り余(京山)か家の（京橋南街第一街）對ひの裏家に住しに一日事の序によりて余が家に來りしより常に出入して家僕のやうに使などさせけるに花柳に身を果したるものゆへ談もをもしろく才もありてよく用を辨するゆへをしき人に錢がなしとて亡兄(京傳)もたはむれき或日利助いふやう江戸には胡麻揚の辻賣多し大坂にてはつけあげといふ魚肉のつけあけはうまきもなり江戸にはいま

だ魚のつけあけを夜みせにうる人なしわれこれをうらんとをもふはいかん亡兄いわくそれはよきをもひつきなりまづこゝろむべしとて俄に調じさせしにいかにも美味なり利助いわく之を夜みせの辻にうらんに其行灯に魚のでまあげとしるさんもなにとやらまはりどほしなにとか名をつけて玉はれと乞ひければ亡兄しばらくしあんして筆をとり天麩羅とかきてみせければ利助不審の貌をなし天麩羅とはいかなる所謂にかといふ亡兄うちゑみつゝ足下は今天竺浪人なりぶらりと江戸へ來りて賣創る物ゆゑ天ぷらなり是に麩羅といふ字を下したるは麩は小麥粉にて羅はうすものとよむ字なり小麥の粉のうすものをかけたといふ事なりと戲言云れければ利助も洒落たる男ゆえ天竺浪人のぶらつきゆゑ天ぷらは面白しと大によろこびやがて此店をいだす時あんどんを持きたりて字をこひしゆゑ余がをさなき時天麩羅と大書して與へしに此てんぷら一ッ四錢にて毎夜うりきるゝ程なりさて一月とたゝざるうち近邊所々に天麩羅の夜みせいで云々又京山の友人靜盧翁（靜盧氏北,名愼言江戸葺工也）の語りしををも書き添へたり翁曰事物紺珠（明人黃一正作廿四卷）夷食の部にてんぷらに似たる名ありきといはれしゆへ其書を借りゑてよみしに塔不剌とありて注に葱,椒,油,醬を熬後より鴨或は雞,鵝をいれ慢火にて養熟とあり蟹をあぶらげにするも見ゑたりともありされども天麩羅の說につきては予は京山の說に滿足する能はず其語勢より考ふるも大に洋語に似たり又支那にても塔不剌といひ且つ夷食の部に編入しあるを見れば英語 Fry の荷蘭或は葡萄牙などの語ならんも知る可らず古くより洋語の我國語に化する者少しとせずたとへば烟草(Tabaco).榲桲(Marmeleiro).南瓜(Abobora)（予が鄕里石川縣金澤にては南瓜をボブラといへり）等の葡萄牙語を見ても知るへし此等を考ひ合せば京傳は一時の興に乘して此戲言を發せしも京山は其戲言なるをさとらずして實說と取違へしものならん歟また蜘蛛の糸卷に京山が友人齊藤彥磨の朱注を加ふる異本ありこれによれば天麩羅ハ天明年中始りしにあらず安永十年正月豐竹東治が芝居昔唄今物語といへる淨瑠璃の內に天麩羅の事見ゑたりとあり若し此

をして實說ならしめば京山の天麩羅の說も牽强附會たるをしるし

扨蕎麥の成分につきては其種の良否と其培養の精粗如何によりて多少の變化を來すは云ふまでもなし故に予の玆に其成分を揭くるものは看官諸君の意を滿たすに足らずと雖も其概略を知るには充分ならん歟左にあぐるものは和英對譯分拆表に據る

蕎麥	一百分中
水分	六五·二三
灰分	·四五
纖緯	·二八
含窒素物	一二·九七
無窒素物	二一·〇七
合計	一〇〇.〇〇

次に揭くるものは蕎麥を粉末となしたる所謂蕎麥粉の分拆表にして衞生局彙報第一號（明治二十年三月刊行）に據る

蕎麥粉	一百分中
蛋白質	一三·一三
脂肪分	二·七二
無窒素有機物	六八·六六
植物纖緯素	一·一六
灰分	一·四三
水分	一二·九〇
合計	一〇〇.〇〇

右は主に我邦に關る蕎麥のヿを載たれば次には歐州にかゝる蕎麥調理法の一端をあぐ

タスカネー地方にては蕎麥粉と大麥粉とを混合て麵包となせり然るときは其色較や黑きも純粹の小麥より製したるものよりは濕潤を帶ふるを久

して且つ滋養分にも富めりといへり獨逸國にては汁,膓詰などに用ゆる粗惡なる麵粉は主に蕎麥より製したるものなりとありブランデンブルヒ地方にてハ麥酒を釀造するには蕎麥に麥芽を混せりともいへり且つこれより蒸餾したる帶藍色なる最良の火酒は其の味佛國製の「ぶらんでー」に減せすともいへり其他ニユセルセー地方にては玉蜀黍の粉と蕎麥粉とを混合て柔靭なる餅を製し得へしともいひ或はラッシヤ.プランダー地方などには農家の一大產物なりともいひ或は佛國の南部.瑞西國などには蕎麥をもて食料に充つる處ありといへども我邦の如く盛なるにはよもあらさるべし他國ハいざしらず英國などにハ專ら家禽を飼ふに蕎麥を用ゆと云へり或は又之をもて家畜(牛馬羊豚)などにも食ましむるといへり

此蕎麥は家禽の最良なる食料となるのみならず馬鈴薯と混合て食料となすときは豚は肥滿し又之を粉末となして馬を飼ふときは其効蕎麥粉の二「ぶつせる」（一「ぶつせる」は我一斗八升許）ハ燕麥の三「ぶつせる」に均しといへり又牝牛に食はしむる時は大に乳汁を增し開花の節に羊此植物を食む時は醉へるが如く顚倒するを間々ありといへり

因にいふある人橘千蔭翁（江戸名家墓所一覽に逸樂窩と號し文化五年九月二日没す廻向院に葬るとあり萬葉集略解などの著あり）に標榜を書てよとこへりしか日をへて消息して,そばきりをおくりければ,千蔭がそのかへしに

さらしなや,寒ざらしなの,名にしおふ,おばすてならぬ,そばきりを,しばらく見ねば,わが心,なぐさめかねつ,きのうしも,寺へまうづる,日なれども,ひるのあつさに,たへかねて,夕ざりつがた,いでゆきて,寺にいたれば,腹もはや,むなしくなりて,かへるさには,人しげからぬ,茶づけやへ,たちもよらんと,おもへども,天王すゞみ

本草綱目所載胡桐東廧二種考

栗田萬次郎 纂述

胡桐（本草綱目香木部第三十四卷第六十九頁）

Populus balsamifera L.—P. S. Pallas. Flora Rossica, petropoli, 1784. V., 1. p. 67. Tab. 41

Anglis *Tocamahaca*. タカマカ

Germanis *die Balsam—pappel.*

Rossis *duschistoi ossokor* i. e. balsam polpar. ドーチーストイチソコル

Coreacis *yakal* ヤカル

Camtschatcam *kitehel.* ギーツエル甘査甲

已上五名俱出巴剌氏俄國草木記

胡桐ハ楊柳科ノ屬類ニソ扶移(ハコヤナギ)ノ一種ニ係ル,北亞墨加洲及ビ西白里等ニ產シ,好ンテ河岸卑濕ノ地ニ生ス,米國ニハ大抵新英吉利ノ北部ヨリ「ウイスコンシン」ノ北部ニ至ル中間ノ地方ニ多シ,其葉卵圓形末尖リ,背ハ白色,幹甚ダ長大ナラズ,此樹秋候葉落ノ後,其葉芽上ニ黃色粘稠ナル多量ノ脂液ヲ以テ被包セラル,其脂液ノ樹上ヨリ滴瀝流下スル者ヲ采リテ,藥用ニ充ツ,加拿達州ヨリ年々歐邏巴ニ輸シ,販賣スルモノアリ,○此脂黃色滑澤ニソ香氣アリ,○西白里人ハ此樹芽ヲ用テ一種ノ藥酒ヲ製シ,（按此樹芽ヲ酒精ニ浸メ丁幾劑トナスヲ云フナリ）之レヲ利尿ノ効アリトソ貴重シ又壞血症ヲ治スルニ効用アリト言フ（「グレー」氏聯邦植物志並ニ「リンドリ」氏藥物植學）

(本草綱目釋名)胡桐鹼,胡桐律,〔珣曰〕胡桐淚,是胡桐樹脂也,故名淚作律字者非也,律淚聲訛爾,(時珍曰)西域傳云,車師國多胡桐顏師古注云,胡桐似桐不似桑,故名胡桐蟲食其樹而汁出下流者,俗名胡桐淚,言似眼淚也,其入土石成塊如鹵鹼者,爲胡桐鹼,音減,或云律當作瀝,非訛也,猶松脂名瀝青之義亦通,

(集解)恭曰,胡桐淚出肅州以西,平澤及山谷中,形似黃礬而堅實,有夾爛木者,是胡桐樹脂淪入土石鹼鹵地者,其樹高大,皮葉似白楊青桐輩,故名胡桐木堪器用,〔保昇曰〕涼州以西有之,初生似柳,大則似桑桐,其津下入地,與土石相染,狀如薑石極鹹苦,得水便消,若礬石消石之類,冬月采之,〔大明曰〕此有二般,木律入中入

藥,惟用石律,石上采之,形如小石片子,黃土色爲上,〔頌曰〕今西番亦有,商人貨之,〔時珍曰〕木淚,乃樹脂流出者,其狀如膏油,石淚,乃脂入土石間者,其狀成塊,以其得鹵斥之氣故入藥爲勝,

〔宋王延德高昌行紀〕歷伊州,地生胡桐樹經雨即生胡桐律,（按李氏歷代地理沿革圖説云伊州在哈密南）

〔文獻通攷樓蘭條下注〕胡桐,小蟲食其樹而沫下流出者,俗名胡桐淚可以銲金銀

〔西域聞見錄〕（長白七十一椿園著）胡桐,譯言柴也,其樹徧滿沙灘,或數十里成林,而橫斜曲側,不任器用,間有端直者,亦不堅實,回人謂之胡桐,言僅可取作燒柴而已,夏日炎蒸,其津液自樹杪流出凝如琥珀者爲胡桐淚,自樹身流出,色如粉者,名胡桐鹻

按胡桐淚,本草和名不載,啓蒙ニハ和產舶來共ニナシト言ヘリ古今舶載ナキヿ知ラルヘシ,支那ニテモ甘肅以西塞外ノ地ニ產シ,內地ニハ無之品ニメ,古方家モ醫藥ニ用ユル稀レ,唯後世ノ口齒料,齒牙ノ要藥トシ,用ユルヿ綱目ニ見ユ,又亞墨利加ノ土人ハ利尿劑トシ,或ハ壞血病ヲ治スルニ用ユル由,又歐邏巴ニテハ瘧疾,或ハ飮食不消化ニ效アリト謂フ,又支那ニハ金銀ノ銲藥トスルヿ,本草等ニ載セタリ,○先年小林君端一予ニ朝鮮鐵製ノ煙草匣ヲ贈ラル,是匣蓋並ニ四面,皆銀ヲ以テ松梅麟鳳ヲ殕嵌ス,極メテ古物ナリ,其底所々鐵片鏽蝕メ小孔ヲナス,其孔ヲバ錫片ヲ貼メ修補セリ,其錫片ヲ貼付シタル銲藥ヲ諦視スルニ,黃色透明ニメ尋常金屬製ノ藥銲ニ非スメ,甚ダ木脂ニ類ス,因テ其胡桐淚タルヘキヲ知ル,已ニ巴刺氏ノ著書胡桐淚ノ朝鮮方言ヲ記スルヲ見レバ,彼土ニモコレアルニ相違ナシ,該地ノ北部咸鏡道近邊ニ產スルカ,或又滿州地ヨリ輸入スルモノナルヘキヤ,何レニモ彼土ニ賣品アルヘシト想像セラル,東藩紀要,朝鮮物產中ニ安息香ヲ載ス,是品本草所載,安息香ト名同物異恐クハ胡桐淚ノ朝鮮方言ナランカ,姑ク記メ後考ヲ俟ツ

東醫本草綱目穀部第二十三卷第十六頁　〔サマニカ〕俄屬裏海部落方言

Nitlaria schoberi, Willdelnow.—P. S. pallas. Flora Rossica. V. 2.P.76. Tab. 50

Rossis Versus mare Caspicium habitantibus *samanicha.*

沙蓬米　沙米　登廂　登粟　登相

此種創メテ植學士「スケレベル」氏西白里地方ナル硝石製造局ノ近傍ニ於テ發見ス,因テ仝氏ハ之ヲ「ナイトリヤ」ト名ツケタリ,此新奇ニソ多刺ナル灌木ハ殊ニ西白里鹹鹵ノ沙場ニ生ス,〇巴刺氏ノ報告ニ據レハ此子其味淡泊ニメ稍鹹味アリ,裏海近傍沙地ニ住スル所ノ土民ハ之ヲ采リ食料ニ充ツ,且ツ言フ其乾燥ソ堅實ナルモノニ於テハ,唯ニコレノミノ奢侈トナシ,其食用ニ供スト又其枝葉ヲ以テ駱駝ヲ飼フヘシト云フ,此品灌生ニソ小刺アリ,葉ハ細小,長卵圓形,稍厚ク多汁,小白花穗狀ヲナシ,枝頭ニ攢簇ス,萼五出·花瓣亦五出ニソ凹圓形ヲナス,十五雄蕋,一雌蕋,其軟果ハ外多肉,內堅實,秋熟スレバ紅色ヲナス,此種「ヂゴビーラッセー」科ニ屬ス,(蒺藜モ此科ニ屬ス)或植學家ハ之ヲ別ニ東廧科トナスヘシト思想セリ

植物名實圖攷云,東廧,本草拾遺始著錄,相如賦東廧雕胡,魏書烏丸傳,地宜東廧,似穄,廣志,東廧粒如葵子苗似蓬,色青黑,十一月熟,出幽涼并烏丸地,臣伏讀聖祖御製幾暇格物編,沙蓬米,凡沙地皆有之,鄂爾多斯所産尤多,枝葉叢生如蓬米似胡麻而小,性暖,益脾胃,易於消化,好吐者食之,多有益,作爲粥滑膩可食,或爲米可充餅餌茶湯之需,向來食之者少,自朕試用之,知其宜人,今取之者衆矣,仰見神武遠敷,翠華所居仰觀俯察,纖芥不遺,遂使窮塞小草上登玉食,似后菲飲,豳風勸稼,千載符節,小臣備員山右,得覩此穀,時際豐盈,民少攟摭,考保德州志,産登相子沙地多生,一名沙米,作羹甚美,又天祿識餘云遼志,西夏出登相,今甘涼銀夏之野,沙中生草,子細如罌粟堪作飯,俗名登粟,皆東廧也,然則今之沙蓬米,即古東廧,爰繪斯圖恭錄聖製俾撫斯民者,知沙漠塞朔亦有良産,勿耽膏粱罔知艱難云爾

本草拾遺,東廧,味甘平無毒,益氣輕身,久服不飢,堅筋骨能步行,生河西苗似蓬,子似葵,可爲飯,魏書曰,東廧生焉,九月十月熟,廣志曰,東廧之子似葵青色,並涼間有之,河西人語,貸我東廧,償爾田粱,

天祿識餘,瀚海在火州柳城東北,沙深五尺,大風則行者人馬相失,沙中生草名登相,可食,按遼史,西夏出東廧,一統志,韃靼産東廧,似蓬草,實如穄子,十一月始

熟,子虛賦,雕胡東廧,色青黑,粒如葵子,似蓬草,十一月熟,出幽凉並烏丸地,魏書烏丸,地宜東廧,今甘凉銀夏之野,沙中生草,子細如罌粟,堪作飯,俗名登粟,一名沙米,按登廂東廧,皆登相之誤,不必瀚海始有之也,

高昌行紀,初自夏州歴玉亭鎭,行入六窠沙,砂深三尺,馬不能行.行者皆乘橐駝,不育五穀,砂中生艸,名登相,收之以食,

按東廧,本草綱目ニ拾遺ヲ引キ著錄ス,惜ム其所說委詳ナラズ,又啓蒙ニモ詳ナラズト言フ,此品本瀚海並ニ蒙古部落鄂爾多斯等（ゴルトス山西ノ北境歸化城ノ所ノ西喀爾喀ノ東ニ在リ）ノ所產ニソ歷,代諸家本草失載,但本草拾遺始メテ存錄ス,植物名實圖攷特ニ東廧ニ係ル古今ノ說錄ヲ網羅シ遺ス所ナシ,其圖モ亦頗ル精緻巴剌氏俄國草木圖紀所載銅版圖ト彼此參觀ソ其形狀ヲ察知ス,因テ東廧ハ所謂「ナイトラリヤスコベリー」タルヿヲ證明ス,因テ删錄ソ博雅ノ稽考トナス

雜　　錄

秋田八丈縞の染料

秋田にて產出する八丈縞の茶褐色の染料にはハマナス(玫瑰)の根を用といふ

そば　其他ノ學名

近頃歐州ニテ發刊セル諸雜誌中ニそばノ學名ヲ記載セルモノヲ見ルニ大概 Polygonum Fagopyrum, L. トナセリコハ至極適當ノコトト思ヘリ如何トナレバそば屬トたで屬ノ區別ハ實ニ些少ナレバナリ甲ハ乙ヨリ花蓋シテ長キト胚ハ胚乳ノ中心ニアリテ子葉大ニシテ摺疊包旋シ幼根ヲトリマク此他ハ乙即チたで屬ト異ナル點ナシ

ぎしぎしノ學名ヲ Rumex japonicus ト Meisner 氏ハ名ゼシカコハ林那氏ノ R. crispus ト異ナルヿナシ

フォルベス及ヒヘムスレイ兩氏ノ支那」植物目錄ニヨレバかでのき(六

駿)ヲ Litsea lancifolia, Villar. トシ Actinodaphne lancifolia, Meisn. ヲ一名トセリ又やまもがしノ學名ハ Helicia cochinchinensis, Lour. ト記シしいばるど及びざくかりにい兩氏ノ名ゼシ Edgeworthia papyrifera ハ E. Gardneri, Meisn. ト同物トセリ

五稜子結實

七八年前五稜子を香港より得たれは直ちに種子を播種し置きたるに本年始めて夏至後六日即六月廿八日開花秋分後二日即九月廿五日子熟したり甘酸にして美味なりと栗田氏語らる

玉蜀黍ノ雄穗ニ雌花ヲ生ス

本年八月余ガ後園ニ栽培セル些ノ玉蜀黍ヲ收獲セントト欲シテ園中ヲ搜索セル所壹株異常ノ發育ヲナシタルモノアリテ雄穗ニ雌花ヲ雜生シ結實セルモノアルヲ撿出セリ此苗株ハ他ノ生長旺ナル者ノ間ニ生シ充分ノ光線溫度ヲ受ケザリシ爲發育不良ニシテ高サ僅ニ三尺許莖太ノサ栂指ノ大サノ如キニ過キズ從テ花穗甚ダ不完全ニシテ高ク柔葉外ニ出デス短小ニシテ長短不同ノ技穗五箇ヲ分生セリ而シテ雌花ハ此技穗ノ上ニ三四箇ツヽ着生シ雄花ト雜居セリ此雌花ノ結實セルモノ凡テ顆アリ余ハ明年復此子粒ヲ播下シ其性質ヲ遺傳スルヤ否ヲ撿定セント欲シ之ヲ貯藏セルヲ以テ其結果ハ明年ニ至リ更ニ報道スル所アルベシ

八丈絹ノ染料

八丈絹ニ黃八丈黑八丈鳶八丈ノ三種アルハ人ノ能ク知ル所ナルガ此等ノ織物ハ如何ナル染料ヲ用ヰテ之ヲ染成スル者ナルヤハ人多ク之ヲ知ラズ余先年彼地ニ巡航シ植物ヲ採收セル時取調タルモノアリ事植物ノ應用ニ關係アルヲ以テ此ニ記載シテ異聞ヲ弘ム

(一)黃八丈ノ染料ハ藎草ナリ

和名にぶなぐさ諸國原野田畔ニ生ス八丈島ニテ之ヲをがりやすト曰フ

或ハ單ニかりやすト曰フ黃色ヲ染ムルニ用ユ內地ノ所謂かりやす亦八丈ニ產スレドモやまかりやすト稱シ染色ノ用トナサズ八丈ニテハ藎草ヲ畑ニ播種シ七月頃苅取リ用ユ染色ノ法頗ル丁寧ニシテ大抵一ケ月ヲ費シテ成ル其法藎草ノ煎汁ヲ作リ毎日一回之ヲ以テ糸ヲ染メ夏日ノ日光ニ曝ラシ大抵二十五回許溫汁ニテ染メ後二回冷汁ニテ染メ最後ニつばき.うらじろ.ひさかきノ三樹葉ノ灰汁ヲ以テ之ニ注キ其色ヲ鮮美ナラシムルナリ

(二)鳶八丈ノ染料ハいぬぐす樹皮ナリ

いぬぐす又たまくずハ八丈島及大島ニテまだみト稱スル大木多シ船材又建築材トス樹皮ヲ取リ紅褐色ヲ染ムルニ用ユ其法十七八回溫汁ニテ染メ其煎シ殼ノ皮ヲ燒キ灰トシ之ヲ糸ニ塗リ乾シ又染メ之ニ灰ヲ塗リ乾ス斯クルコト前後二回ニシテ染色成ル

(三)黒八丈ノ染料ハしひのきノ樹皮ナリ

八丈島三宅島等ニ大樹アリ果實ハ東京ニ輸出ス樹皮ヲ取リ黒色ヲ染ム其法初メテ十四五回ハ溫汁ヲ以テ染メ後ノ六七回ハ冷汁ヲ用ヰ毎回鐵氣多キ田ノ土ヲ塗リ乾スナリ此染色ニ用ユル器具ハ余ガ著ハス所ノ伊豆七島採集植物目錄ニ圖載セリ（此目錄ハ明治廿年四月十四日ヨリ五月十六日ニ至ル三十二日間伊豆七島(神倉島ヲ除キ)ニ於テ余ガ採集セル植物ノ種類三百七拾余種ヲ分類記載シ傍ラ其方名所用等ニ付キ緊要ナル解説ヲ附錄シタルモノナリ要望ノ諸君ハ郵券三錢ヲ送附セバ贈呈スベシ

以上二件　白井光太郎君報

觀富山龍華寺ノ蘇鐵

駿河國有渡郡不二見村觀富山龍（リユーウ）華寺ハ有渡連山ノ麓ニアリテ遙ニ興津ノ清見寺ト相對シ富嶽ノ壯觀三保ノ洲影一眸中ニ攢リテ風光絶佳且ツ蘇鉄ノ

大樹アルヲ以テ春月胎蕩ノ候又ハ秋天晴勝ノ日此地ニ杖ヲ曳クモノ多シ小生モ亦去ル十七日ノ祭日ヲトシテ此寺ニ至ル蘇鐵ノ子實既ニ成熟シテ其觀頗ル美ナリキ却説其蘇鐵ノ最大ナルモノハ莖幹ノ周圍一丈六尺アリテ五十八條ニ岐レ高サ一丈五六尺ニ及ベリ雄本ニシテ每歲春夏ノ交數多ノ雄花ヲ開クト云フ又長蘇鐵ト稱スルモノアリ莖幹ノ周圍六尺五寸高二丈六尺ニ達ス其他類株ノ大樹アレドモ多クハ雌本ニシテ每歲必ス數個ノ花團ヲ生スト云フ而シテ本年ハ開花ノ數甚タ多ク十餘個ニ及ビ皆善ク結實セリ子實ノ數ハ一個ノ團塊中多キハ二百四五十粒少キモ百六七十粒ニ下ラスト云フ

靜岡市內ノ蘇鐵

本誌前號ノ紙上ニ於テ蘇鐵ノ開花ニツキ名和靖氏ヨリノ報告ヲ掲載セラレタリ小生モ多年岐阜ニ住居セシガ美濃ニ於テ該報告ノ如キ蘇鐵ノ大樹ヲ見シコトナク又蘇鐵ノ開花シタルヲ聞キシコトナシ美濃ニ於テハ隨分珍ラシキコトナラン當靜陵ハ美濃ニ較フレハ氣候温暖ナルカユヘニ蘇鐵ヲ栽殖スル所多ク從テ大樹アリ而シテ花ヲ開キ實ヲ結ブコトハ珍ラシカラネドモ本年ノ如ク諸所ニ花ヲ開キテ多クノ實ヲ結ヒシコトハ未タ曾テ聞カザル所ナリ賤機山麓ノ淺間社內ニハ四株ノ蘇鐵アリ每歲二三ノ花團ヲ生スルモ實ノ成熟セシコトナカリシガ本年ハ每株ニ二三ノ花團ヲ生シテ悉ク美麗ナル實ヲ結ビ其成熟セルモノハ兩三日前ニ之ヲ截取レリト云フ又尋常師範學校內ノ蘇鐵ハ莖幹ノ周圍大約三尺高サ僅二尺余ニ過キザレトモ本年始テ莖端ニ一個ノ花團ヲ生シ其實ハ目下成熟セリ其他市內ノ蘇鐵ニ花ヲ開キシモノアレトモ皆雌花ニシテ雄花ヲ開キタルモノアルヲ聞カズ唯三里餘ヲ距ル龍華寺ノ境內ニ雌本ノ大樹アルヲ知ルノミナリ嘗テ聞ク公孫樹ノ如キハ雌雄ノ兩株ヲ相距ル三里餘ニシテ實ヲ結ビタルコトアリト蘇鐵モ亦其類ナルカ兎ニ角本年ハ蘇鐵ノ豐年ナルベシ因ニ云フ小生ハ一昨年ノ秋龍華寺ニ至リ數個ノ實ヲ得テ昨年ノ春之ヲ播種シタルニ善ク發生シテ目今二枚ノ葉ヲ出セリ其種殼ハ久シク地上ニ殘留スルヲ以テ之ヲ盆奔トスルトキハ頗ル雅致

アリ

十月二十三日　在靜岡　小笠原利孝君報

牛乳及ヒ咖啡ノバクテリアニ於ケル關係

牛乳ノ一立方センチメートルノ容量中ニ僅々乳牛ヨリ穿リ取リ實驗場ニ運搬スル二時間ノ經過ニモ係ラス9000ノバクテリヤ存在スルヿヲ發見セリ而ソ他ノ時ニアツテハ31.750ノ増加トナリ二十五時間後ニ至リテ5.00000,餘ノ多キニ達ス然レ𪜈温度ノ高低ニ依リ其數ハ異ナルモノニシテ假令ハ牛乳ヲ二十五度ニ温メハ其數非常ニ夥多トナル斯ク多數ノバクテリアハ盡ク有害ノモノニアラス多クハ牛乳ノ消化ヲ助クルモノナリ咖啡ハ下毒ノ性質ヲ有スルモノニシテ「タイフオイド」バチレン等ハ此ノ咖啡浸液中ニハ永ク生存シ能ハス而シテ「コレラ」病菌ノ如キハ殆ント生存シ能ハス (Rev. Mycol., XII. 1890 pp. 199-200.)　S. H.

つちとりもちノ新産地

此程木曾ノ友人余ニ送ルニ一ノ奇草ヲ以テセリ之レヲ一見スルニばらのほら科ニ屬スルつちとりもちナリキ信濃國西筑摩郡御嶽山麓ニ得時ニ明治廿四年八月下旬ナリト　森貞次郎君報

編者曰コレマテ我國ニ在テつちとりもちノ産地ハ豆州天城山四國琉球等ノ暖地ニ限リ生スルモノヽ如ク思ヒシニ這回木曾山中ニアルヿヲ知ルヲ得然レ𪜈從來採集セシモノハ雌花ニシテ雄花ヲ見ス爲メニ其種名ヲ定ムル能ハス編者森氏ニ望ムニ木曾産つちとりもちニアリテハ雌雄同株ニ生スルモノナルヤ將タ異株ナルヤ詳細ナル報告ト共ニ寫生圖若クハ標本ヲ本會ニ送ランヿヲ希望ス

正　誤

前號雜錄中植物園ノ貴樹ノ項ニ明治二十四年トアルハ明治二十三年ノ誤リ

新刊植物書

日本植物志圖篇

牧野氏圖篇第一卷第十一集ハ十月九日ニ敬業社ヨリ發兊セリ本篇ニハ左ノ六種ヲ掲出セリ

第一ハひしもどき　第二ハあをほゝづきナリ此あをほゝづきハ今回氏ノ下セシ新稱ニシテ土州並富士山ニ產スル茄科ノ植物ナリ氏ノ圖ニ依レバ其形狀いがほゝづきニ似タリ又本誌第五十六號ニ矢田部良吉氏ノ新稱チ附セシふじほゝづきニモ甚ダ近シ只タ其ノ異ナルハ蕊ノ內向,柱頭ノ二分,果實ノ有刺ト葉裏ノ無毛ナルトノ四大點ナリ氏ハ本植物ニ Chamæsaracha Savatieri ナル名チ命ゼリ之ニ依リテ見レバ本屬ニ入ル植物ニシテ本邦ニ三種アルモノヽ如シ即チ C. Savatieri, Makino. C. Watanabei. Yatabe ト今一種いがほゝづきコレナリ而ソ「フランシエー」「サバチユー」兩氏ハ以上三種チ總稱シテ C. japonica., トイフモノヽ如シ果シテ C. japonica チ分割スルノ必要アリヤ? 三個獨立ノ種ナルヤ? 第三　しはいすみれニ Viola violacea ノ新名チ下シ　第四　しのゝめさう(新稱)ニ Swertopsis umbellata ナル名稱チ命ゼリ此草ハ龍膽科中ノモノニシテ土州ノ產ナリ屬種トモニ新稱　第五　うすゆきむぐら Asperula trifida ニシテ和名種名トモニ新稱　第六　はなむぐらモ新稱ニシテ又新種ナリ氏ハ命ズルニ Galium tokyoense ノ名チ以ス

質問應答

問　　　　　　　　大川正明

普通植物學,植物生理學,植物解剖學,隱花植物學,菌類學,等ノ邦語及ヒ英書

ヲ御教示被下度候

答　堀正太郎

矢田部良吉譯植物通解,丹波敬三著普通植物學,三好學編植物學教科書,岡村金太郎編植物教科書,矢田部良吉譯植物學書 Gray's Lessons in Botany.; Beherens—Text book of Botany; Bessey—Botany; Prantle and Vines—Text Book of Botany; Sachs—Text book of Botany

植物生理學ニハ齊田,染谷共譯植物生理學 Goodale———Physiological Botany;———Vines.———Lecture on the Physiogly of Plants; Sachs———Lecture on the Physiology of Plants; Goodale———Physiological Botany.

隱花植物學ニハ三好學氏編隱花植物學大意 Bennet and Morry———Cryptogamic Botany; Göbel———Outlines of Classificition and Special Morphology of Plants; De Bary———Comparative Morphology and Biology of Fungi and Bacteria; Cooke———Fungi.

問　大川正明

或ル顯花植物ヲ採リ其ノ分類上ノ位置及ヒ和名學名等知リ得ヘキ書籍ハ

答　堀正太郎

當時日本ニ在リテハ植物ノ學名和名ヲ同時ニ知リ得ヘキ書籍未タ出版ナシ故ニ日本名ヲ知ラント欲セハ本草圖譜及ヒ綱目ノ類ノ書籍ニ就キテ索鑒スヘシ然レ𪜈其分類ニ至テハ之レヲ洋書ニ就キテ知ルヘシ學名ヲ知ランニハ Gray's—New Lessons of Botany 尤モ佳ナラン又白井光太郎氏著植物自然分科檢索表ヲモ見ルヘシ

問　大川正明

植物學ヲ研究スルニ密接ナル關係ヲ有スル他學科ハ何何ナルヤ

答　堀正太郎

地質學,化學,理學,動物學,及ヒ英語佛語獨乙語羅甸語ノ研究尤モ必要

ナリ

問　　　　田代安定

支那ノ諸書ニ扶桑木ト云ヘルヿアリ是ハ何木ニ凡ソ當ルヘキモノヤ一説ニハ木名ニアラスシテ扶桑國ニ産スル木ト云フコトナリト然トモ此説ハ至テ尠シ矢張リ一種木ノ名ト爲スモノ多シ而テ此扶桑國ハ從來日本ノ異稱ニ充テ來ル所ナレトモ是ハ我カ古學者ノ自惚魂性ヨリ出ル探リ當テノ如ク思ハル又日本開闢由來記ニハ大櫟木ニ充テアリシカ如シ櫟ハ著シキ大木トナリ且幾里ニモ連ル大林アレハ全ク道理ナキニモアラス然トモ本會ニ向テ第一高教ヲ受ケントスルハ左ノ説ニ就テナリ

扶桑トハ別段日本ノミノコトニ限ラスシテ只タ日ノ出ル諸邦即ヲ東向キノ國々ヲ支那人カ總稱セル語ニシテ其中ニハ日本モアレハ南北米洲モアルヘシ「タヽカ梁書ノ説ニアリシカ扶桑國ニ木アリ其葉如銅其初笋其實如梨熟赤其葉糸績織布云々」ト全スレハ鳳梨 (Bromeria ananas) ニ最モ適當スルカ如シ葉銅ノ如シトハ其堅硬ニシテ暗綠赤色ヲ帶フルカ故ニ必シモ無理ノ形容詞ニモアラス因テ問フ Bromeria ananas ハ例ヘハ米國「メキシコ」即中アメリカ諸國ノ原野ニ自生スル説如何又彼ノ百合科ノ Agave americana (龍舌蘭) ノ子實ハ Capsub 殼果ニテ食サレスト思ヘリ然トモ未タ熟視セス此子實ノ大サ色彩幷食否ノヿヲ詳ニシタシ又何カ外ニ如斯植物アリヤ又鳳梨ハ隨分木ト名クル程著ク莖ヲ抽キ起スコトアリヤ如何少々流儀違ヒナレトモ偏ニ示教ヲ祈ル

答　　　　堀正太郎

扶桑木ノ説確答シ難シ暫ク福羽美靜氏ノ豎木辨中ヨリ二三ヲ拔粹シテ記サンニ支那ノ本邦ヲ稱シデ扶桑ト云フ久シ淮南子ニ曰ク扶桑在陽州又曰ク日拂于扶桑説文ニ曰ク博桑桑木也桑木名東方自然之神木也ト此等ノ記事ヲ以テ察スルニ西海筑紫ノ支那ト相對峙スル處古昔大樹アリシモノナラン然シテ此大樹ノ在ル處ヲ稱ジテ扶桑ト云シモノカ桑音若若木ト稱スルモノ

即チ扶桑ミミハ三木相扶ケ合ヿノ象ニ取ルモノニシテ桑樹ニアラス字書ニ桑順也道相似也古人桑明取友之義以三叉ト云ヿ是レナリ書記景行卷ニ到筑紫後國御木居於高田行宮時有僵木長九百七十丈焉　天皇問之曰是何樹也有一老夫曰是樹者歷木也　天皇曰是樹者神木政是國宜號御木國トアリテ公望私記曰按筑後國風土記三毛郡　今三池町西南歷木村（古高泉村ト稱ス）二高田行宮ノ遺趾アリ是等ノ事項ヲ以テ按スルニ神木三木御木三毛三池等國音相通スル處ヲ以テ見レハ扶桑樹ナルモノハ書記ニ曰ク歷木ニアラサルナキカ和名抄ニ木草云釣樟一名烏樟和名久叉沼木トアリ叉櫸樹和名久沼木日本私記云歷木ト本居翁云ヿ釣樟ト櫸樹ト共ニ久沼木ト記シナガラ別ニ出セルハ名同シクシテ異物ナルカ將タ別ニ出セルハ過リカト今此樹筑後國三池郡ノ土中ニ埋レアリテ其片稀ニ出ルヿアリ其樹質ヲ見ルニ樟樹ナラントト松村任三氏ハ謂ヘリ大久保三郎氏ハたぶノ樹ナラント

今三池地方ニテ土中ヨリ堀出ス處ノ埋木ヲシテ支那ノ謂ヿ扶桑木トセハ其樹ノ鑑定誠ニ容易ナリト雖𪜈此判定ハ或ハ誤ナキ能ハス暫ク參考迄ヲニ記ス

問　久保定楠

藥用胡椒ノ製法ハ如何

答　澤田駒二郎

胡椒ハ黑胡椒白胡椒等ノ種類アリテ往時ハ芳香性驅風藥或ハ衝動藥トシ應用シ叉華澄茄ニ代用スト雖𪜈現今之ヲ用フル者ナシ本品ハ特異ノ芳香ヲ有シ其味ハ苛烈芳香性ナルニ因リ歐米諸國ニテハ香味料トシテ汎ク賞用ス但シ坊間藥舗ニテ粉末ト爲スニハ兩手切ヲ以テ剉切シ藥研ニテ粉末ト爲シ絹篩ヲ以テ篩過ス

編者曰ク本紙載スル處ノ澤田氏胡椒ノ說ヲ參照ス可シ

植物學會錄事

會員田代安定氏ハ本年初夏ノ候園藝植物採集ノ爲メ北海道ヘ旅行札幌四近ヨリ西海岸岩内ヨリ黑松内山道ヲ經過シ函館ニ出ツルノ間專ラ採集シ本月上旬歸京セラレタリ

理科大學生藤井健二郎氏ハ十月六日東京出發甲州ニ起キ前號雜錄中白井光太郎氏報ノ銀杏ノ奇樹ヲ實見シ富士川ヲ下テ九日富士山ニ登リ松柏科植物ヲ採集シ十日歸京セラレタリ仝氏ノ報ニ依レハ富岳頂上未タ降雪セス然レ氏寒威嚴烈寒暑針零度ヲ示セリト氏ハ又十八日東京出發日光ニ起キ男体山如法山ニ登リ松樅類ヲ夥多採集シ且ツ松柏科植物分切ノ模樣ヲ取調ヘ二十一日歸京セラレタリ

十月廿四日午後二時ヨリ本會月次小集會ヲ理科大學植物學教室ニ於テ開ク來會員十八名左ノ演舌談話アリタリ

海藻ノ新屬　　理學士　岡村金太郎君

一種ノ日本產海藻ノ標品數多ヲ陳列シ此海藻ハゆひぎり,こぶもくさ,ドゆずくさ等產地ニ依リテ種々ノ方言アリ重ニ志州ヨリ房州ニ至ル太平洋岸ニ產ス予ハゆひきりヲ以テ日本名ト定メント欲ス此海藻ハ Gelidiaceæ てんぐさ科ニ屬スルモノニシテ其分岐法及ヒ鱗片ノアルヿ等ニ依リテ他三屬ニ異ナレバ Acanthopeltis Japanica. nov. sp. ト名命セリト論セリ

次ニ理學博士矢田部良吉君ハ一種奇異ノ物体ヲ示シ

是ハ熱帶地方ニ產スル Palmaceae 棕櫚科ニ屬スル Phytelephum macrocarpa ト稱スル樹即チ Ivory plant ノ實ノ胚乳ニシテ俗ニ vegetable ivory 植物象牙ト稱スルモノナリ是ハ堅硬ニシテ其質其外觀恰モ象牙ノ如ク以テ彫刻ニ用フ可シ故ニ此名アリト氏ハ序ニ溫帶地方ニテハ食用ニハ禾本科植物荳科植物建築器具ノ製作ニハ松柏科植物非常ニ重要ナリト雖氏熱帶地ニアリテハ棕櫚科植物以上ノ諸科植物ノ溫帶ニ於ケルト同樣ノ功用ヲナスモノナリト說タレリ

松柏科植物採集旅行談　　理科大學藤井健二郎君

甲州產銀杏ノ奇樹ヲ實見シタルニ一本ニ止ラス數株アル事ヲ發見セリ此ノ如キ銀杏ノ奇果ハ或ハ孳殖ノ關係ヨリ起ルモノナランカト暫ク疑ヲ措キ旅行ノ順路ノ模樣ヲ說話シ續テ松柏科植物ノ種名ヲ定ムルニ枝葉ノミテハ容易ニ判定シ難ク其例ニハ今回富士山採集ノ標本ニ以テ示セリ又球

果ニアツテハ同樣ニシテ Meyer 氏カ Tsuga diversifolia ト T. Sieboldii ヲ區別スルニ球果ノ大小ヲ以テセリ且又葉ノ裁斷面ニアリテ hypoderm celi カ T. diversifolia ニアリテハ常ニ連續シテ T. Siebaldii ニアリテハ間斷アリトハ實ニ粗雜ナル分類法ニシテ余カ數多ノ採集品ニ付キ調査スルニ孰レモ不完全ナラサルハナシ又松脂管ノ位置及ヒ數球果ノ色モ種類ノ判定ニハ無效ナルモノヽ如シト決論セリ終リニ氏カ採集ノ爲メ登山シタル諸高山ノ松柏科植物分布ヲ表記シテ其異同ヲ論セラレタリ

大黄之說　　會員　澤田駒二郎君

日本ノ藥舖ニアリテ古來大黄ト稱シ漢方醫ノ甚タ重貴シ且ツ高價ナル處ノ大黄ハ全ク大黄ノ殆ンド藥用ノ効ヲ失フタル數十年前ノ古物ニシテ間々庸醫ノ上等ナル新大黄ヲ用ユル時ハ反テ其ノ藥功ヲ奏セス反對ナル便秘ヲ起因スルモノニシテ古キモノニハ虫ノ爲メニ單寧ノ太分ヲ失フタルモノ故能ク小量ヲ以テ其ノ效ヲ見ルモノナリ大黄ノ原植物ハ如何ナルモノナルヤニ付キテ嘗テ督國人某氏ハ支那ヨリ大黄ノ種子ナリトテ得タルモノヲ播種シテ Rheum palmatum ナランド謂ヘリ然レドモ支那太黄ハ此植物ニアラスシテ嘗テ佛國領事某氏カ同シク支那ヨリ種子ヲ得テ是ハ Rheum officinalis ナリト判定セリ故ニ支那舶來ノ大黄ハ Rheum officinalis ノ宿根ヨリ製シタルモノニシテ其特徵トスル處ハ髓線及ヒ導管ノ方向ニアリテ他ノ大黄ト異ナル詳細ノ點ヲ歷述シ續テ英國大黄 Rheum Angelicum 墺國大黄 R. raponticum ニ論及シテ局ヲ結ヘリ

次ニ矢田部良吉氏ハ前數氏ノ演舌談話ニ附キテ批評的ニ注意ヲ與ヘラレタリ其大意ハ

藤井君ノ松柏科植物ノ演舌ハ甚タ面白キ演舌ニシテ且ツ分布ノ事ハ從來高山ノ植物ヲ採リ直ニ種名ヲ下スハ其當ヲ得タルモノナルヤ若シ高山ノ植物ヲ平地溫暖ノ地ニ移殖シテ變種セサレハ種名ヲ下スニ差支ナカル可シト雖ドモ是ソノ試驗ハ中々多年ヲ要スルモノニシテ歐洲ニモ近年一問題トナリ旣ニ佛國ニテハ之カ試驗ヲ初メタリト聞ケリ又大黄ノ說ニ付キ宿根ハ澤田君ノ說カレシ如ク藥用トナルカ其葉柄ハ米國等ニテ pie ヲ製スルニ用ヰ酸味ヲ帶ヒテ食膳ノ珍味ナリト

去月廿八日午前六時半地大ニ震動ス飛報アリ阜岐大垣最モ其慘狀ヲ極メ家屋覆潰死傷千ヲ以テ數ヒ加フルニ祝融全市ノ大半ヲ灰燼ニストス本會幹事ハ取不敢次ノ在岐阜縣會員ニ向テ見舞狀ヲ發セリ

飯野盛益君　名和靖君　松井竹三郎君　森吉太郎君

然レﾄﾓ編者此稿ヲ草スル迄テハ其安否ヲ詳ニスルヲ不得ザリシ本會幹事ハ會員ト共ニ四氏ノ安全無事ノ報ニセンヿ渴望ニ不堪

次ノ諸氏ハ新ニ本學會ニ入會セラレタリ

西田又三君　岡田眞一郎君　大渡忠太郎君　渡邊正三郎君　狩野長男君
中西準太郎君　山崎治太郎君　後藤牧太君　篠田祐太郎君　稻垣千代吉君

社告

本會々費爲替ヲ以テ御送付相成候諸君ハ本會幹事宛東京市本鄉郵便電信局ニ向ケ御拂込被下度候

會員諸君ニシテ宿所御變更ノ節ハ其都度御通報被下度間々雜誌送達ノ御督促ニ接シ候得共宿所ノ不分明ヨリシテ時々送達方遲延又見合候事モ在之候間念ノ爲メ御注意致置候

雜誌送達上間々脫漏致候事ナキモ不計候間遲延又ハ發送ナキ節ハ御一報被下度候

本學會々員ニシテ植物學上ニ關シタル事項ハ精々御通報被下度希望候本雜誌ハ好ンテ登錄可致乍去事項ノ如何ニ依リ編輯員或ハ取捨スルヿアル可クト存候

至急ヲ要スル件ノ質問又ハ報告ハ編輯上ノ都合在之候間幹事堀正太郎宛ニ御送付被下候

東京本所綠町三丁目四十七番地　　堀　正太郎

寄送書目

國本　自第一號至第四號	殖産協會(岡山)
大日本山林會報告　自第百號至第百四號	大日本山林會(東京)
東京醫學會雜誌　自第五卷第三號至第十九號	東京醫學會(東京)
東京氣象集誌　自第五年第十二號至第十年第七號	大日本氣象會(東京)
東京人類學會雜誌自五十九號至六十六號	東京人類學會(東京)

北水協會報告　自六十號至六十五號	北水協會(北海道)
動物學雜誌　自三十號至第三十六號	東京人類學會(東京)
牧畜雜誌　自第五十號至第六十六號	牧畜雜雜社(東京)
地學雜誌　自第二十六號至第三十二號	地學會(東京)
北海之殖產　自第七號至第十三號	勸農協會(北海道)
擴農會雜誌　自第十九號至第二十五號	擴農會(岐阜)
日本園藝會雜誌　自第二十一號至二十九號	日本園藝會(東京)
藥劑誌　自第二十二號至三十號	藥劑雜誌社(東京)
藥業雜誌　第一號至第十號	精々藥舘(神戶)
上野教育會雜誌　第四十號	上野教育會(群馬)
南山農事會雜誌　自第二十二號至第二十八號	南山農事會(京都)
日本植物志圖篇　自第七號至第十一號	牧野富太郎君
北水協會報告　號外一册	農學士　野澤俊二郎君
北海道水產調查區畫圖	仝上
北海道重要水產物分布圖	仝上
東京藥事新報　第四號	草樂社(東京)
地理歷史教授用世界全圖	理學士　金田楢太郎君
北海道移住案內	北海道廳
北海道殖民地撰定報文	仝上
北海道廳第四回勸業年報	仝上
帝國大學圖書舘和漢書目錄	帝國大學圖書舘
Auther Catalogue of the Library of Teikoku Daigaku	仝上
帝國博物舘天產部動物標本目條	帝國博物舘
仝　植物標本目錄	仝
仝　金石岩石及化石標本目錄	仝上
仝　農業區列品目錄	仝上
Bulletin of Miscellaneous Information.	Royal Gardens Kew.
The Journal of Botany	Temes Britten.
Auswahl grösserer Werke und Zeitschriftenreihen aus dem Gebiete der beschreibenden Naturwissen schaften No 14	Felix L. Dames, Berlin

◆

植物學雜誌

第五卷　第五十八號

明治廿四年十二月十日

THE BOTANICAL MAGAZINE.

Vol. V.　No. 58.

December.　1891.

東京植物學會印行

PUBLISHED BY
THE TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
TŌKYŌ, JAPAN.

東洋學藝雜誌　第百廿貳號

明治廿四年十一月廿五日發兌○表紙廣告ヲ除キ六十頁石版一面插圖數個

○帝國大學略圖（藍色石版）

●論說

○天文學ノ効用　理學博士　寺尾壽
○月ノ大サニ就テ　文學博士　元良勇次郎
○炭素ノ原子量ヲ十二トナスハ何ノ故ナリヤ　理學博士　櫻井錠二
○再ビ男尊女卑ヲ論ジ併セテ元良文學博士ニ答フ　法學博士　和田垣謙三
○農家經濟ノ狀況　農學士　酒匂常明
○相續の話（承前）　法學博士　穗積陳重

●雜錄

○ゑざる廐ニ就キテ
○濃尾大地震史　理學博士　矢田部良吉
○地震虫之圖　理學博士　關谷清景

●寄書

○在ロンドン坪井正五郎君より通信

●雜報

○帝國大學略圖に付て○地震記錄編纂○ミルン氏及パルトン氏○醫科大學出張員○工科大學出張員○理科大學出張員○關谷博士の告文○關谷博士の心事○兵庫縣知事幷に兵庫縣私立教育會の厚意○義捐金○本誌中地震に關する記事○學士會○第二回學士會通俗學術講談會筆記○外國の事情は知り難きもの○喫烟は時と場所を撰ぶべし○生物學上研究の燒點○進化論の誤解○振子の歷史に就て○歐洲物理學者の泰斗○電信機の發明者○東京物理學校同窓會

●學會記事

●應問　七件

○ヴイスマン氏ノカイムプラスマ　石川千代松
○鼻息　大澤謙二

（定價一冊金拾錢）

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

動物學雜誌　第三拾七號

明治二十四年十一月十五日發兌
一冊金拾錢郵稅金一錢●六冊前金郵稅共金六十六錢

◉目錄

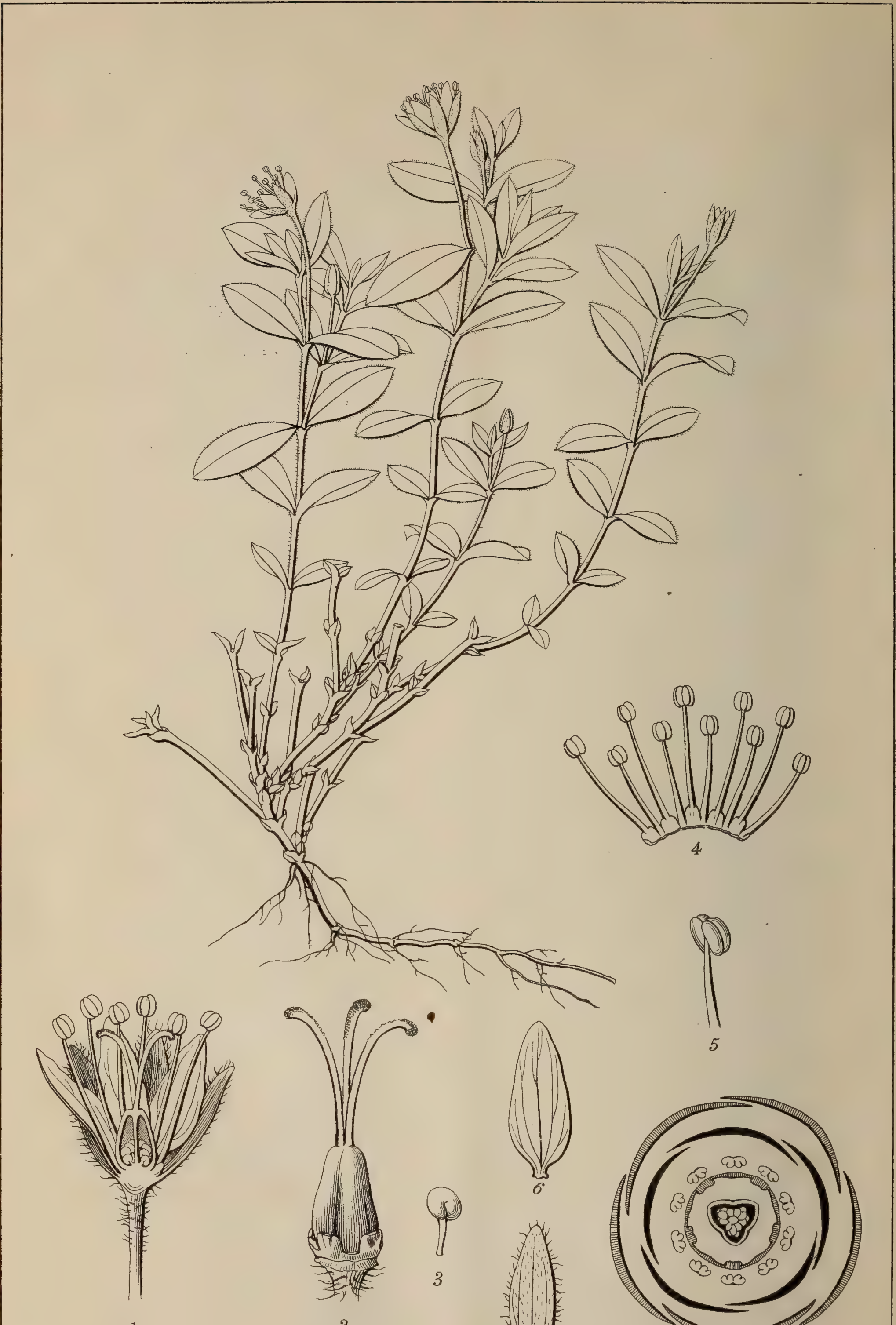
●かりぶであ屬ノ二種ノ新くらげ（木板圖六箇入）　岸上鎌吉君
●こきくがしらかはほりニ就テ　波江元吉君
●動物解剖手引草（鳥類ノ部）　岩川友太郎君
●あまがひる（Hyla arborea, L.）の卵並ニ產卵期　池田作次郎君
●鷸ノ話　飯島魁君
●最下等ノ生物（前號ノ續キ）　石川千代松君

◉雜報

●三浦三崎ニ付テ（服部捨太郎君）●斷リ●うみがめノ新產地●ぎふてふ及他二種ノ新產地●ちやたてむし●昆蟲頭部ノ發生●にてちんト下等動物●帝國博物館天產部動物標本目錄●處カワレハ品カワル●かはがらすノ報●益鳥保護

●東京動物學會記事

發行所　東京神田區裏神保町一番地　敬業社



呉服町東京刷版社石印

K. WATANABE, DEL.

ARENARIA CHOKAIENSIS, YATABE.
CHŌKAI—FUSUMA. テウカイフスマ.

植物學雜誌第五卷第五十八號
明治廿四年十二月十日
THE BOTANICAL MAGAZINE.

[Vol. V. November 10, 1891. No. 58.]

New or Little Known Plants of Japan.

MEIJI GAKUIN LIBRARY

No. 16.

Ryōkichi Yatabe, Sc. D.

Arenaria chokaiensis, nov. sp.

Nom. jap. Chōkai-fusuma: テウカイフスマ.

Caryophylleæ.

(Plate XXXI.)

Rhizome slender, long-creeping, somewhat woody. Stems cæspitose, branched from the base, tomentose, 2—5 inches high. Leaves sessile, rather thick, oval or oblong, or oblong-lanceolate in luxuriant specimens, 1—nerved, acute, pubescent on both surfaces, ciliate at the margins, 3 lines to 1 inch long, 2—4 lines broad; lower leaves reduced to small ovate scales, 1—2 lines long. Flowers few towards the apex of stems or branches, solitary, erect, axillary and terminal; peduncles 3—6 lines long. Sepals 5, lanceolate, acutish, 3—4 lines long Petals ovate-lanceolate, obtuse, short-clawed, about as long as or a little longer than the sepals, white. Stamens 10, inserted on the hypogynous annular disk, about as long as the petals, 5 longer ones on the 5 lobes of the disk; filaments filiform; anthers 2—celled, dorsifixed, each cell oblong and about $\frac{1}{4}$ line long. Ovary ovoid, 1—celled, $1\frac{1}{2}$ lines long; styles 3, filiform, recurved and divergent towards the apex, stigmatose on the inner side, $1\frac{1}{2}$ lines long; ovules several, subreniform, amphitropous, on rather slender funicles attached round the base of the central column.

Specimens of this plant were collected by Mr. Samurō Ōkubo and myself on the summit of Mt. Chōkai in the province of Ugo, on July 28, 1887. Although I have a number of specimens, none of them have fruit.

In habit this plant somewhat resembles *Arenaria merckioides*, maxim. (Mél. Biol., vol. xii., p. 721.). Prof. Miyabe of Sapporo was kind enough to lend me the only two specimens in his possession, from which M. Maximowicz described the species. These specimens can be at once distinguished from my plant; for the stems of the former are more robust than those of the latter, and the leaves of the former are deflexed and thicker than those of the latter.

Plate XXXI. Fig. 1, flower cut vertically; 2, pistil and disk; 3, ovule; 4, stamens and disk; 5, stamen; 6, petal; 7, sepal; 8, floral diagram:—*all enlarged.*

富士山植物彙報

（前號續キ）

會員　渡邊　協
仝　松田定久

Rubiaceæ. 茜草科

Paederia tomentosa, *Bl.*

ヤイトバナ

Pseudopyxis heterophylla, *Max.*

シロバナイナモリサウ

Rubia cordifolia, *L.* var. mungista, *Miq.*

アカ子 (三)

Galium obovatum, *Kunth.*

オホバノヨツバムグラ (矢野)

,, parodoxum, *Max.*

ミヤマムグラ (大)

,, verum, *L.* var. leiocarpum.

カハラマツバ (大)

Asperula trifida, *Makino.*

ウスユキムグラ

Valerianaceæ. 敗醬科

Patrinia scabiosaefolia, *Link.*

オミナヘシ (三)

,, villosa, *Juss.*

ヲトヘシ (三)

,, palmata, *Max.*

キンレイクワ (大)

Dipsaceæ. 山蘿蔔科

Scabiosa japonica, *Miq.*

マツムシサウ (大)

Compositæ. 菊科

Adenostemma viscosum, Forst.

ヌマダイコン (大)

Eupatorium japonicum, *Thunb.*

ヒヨドリバナ (大)

,, chinense, *L.*

フヂバカマ (三)

Solidago virga-aurea, *L.*

アキノキリンサウ (大)

Boltonia indica, *Benth.*

ユウガギク (三)

Aster trinervius, *Roxb*, var. congestus, *Fr.* et *Sav.*

コンギク (三)

,, Glehni, *Fr. Schm.*

ゴマナ (三)

,, dimorphyllus, *Fr.* et *Sav.*

タテヤマギク (大)

,, scaber, *Thunb.*

シラヤマギク (三)

Anaphalis margaritacea, *Benth.*

ヤマハヽコ

Inula britanica, DC. *var.* vulgaris, *Ledeb.*

ヲグルマ (三)

,, salicina, *L.*

カセンサウ (大)

Achillea ptarmicoides, *Max.*

シロバナノコギリサウ

Artemisia pedunculosa, *Miq.*

ミヤマヲトコヨモギ (大)

,, Keiskeana, *Miq.*

イヌヨモギ (三)

,, vulgaris, *L.* var. vulgatissima, *Bess.*

ヤマヨモギ (大島)

,, vulgaris, *var.* indica, *Max.*

ヨモギ (三)

Petasites japonicus, *Miq.*

フキ (三)

Senecio stenocephalus, *Max,* var. comosus, *Fr. et Sav.*

メタカラカウ (三)

,, japonicus, Schultz. *Bip.* var. integrifolia.

マルバチヤリウサウ (三)

,, Zuccarinii, Max.

モミヂサウ (三)

,, sagittatus, Schultz. *Bip.* var. glaber, *Max.*

ヨブスマサウ (大)

,, adenostyloides, *Fr.* et *Sav.*

カニカウモリ (大)

,, nikoensis, *Miq.*

サハギク

,, flammeus, *DC.*

コウリンクワ (三)

,, nemorensis, *L.*var.Fuchsii, *Koch.*

ヒゴオミナヘシ (三)

,, palmatus, *Pall.*

ハンゴンサウ

Atractylis ovata, *Thunb.*

ヲケラ (矢野)

Cnicus purpuratus, *Max,*

フジアザミ (三)

,, spicatus, *Max.*

ヤマアザミ (大島)

,, japonicus, *Max.*

ノアザミ (三)

Saussurea triptera, *Max.*

ヤハズヒゴダイ (大)

,, affinis, *Spreng.*

キツネアザミ (三)

Picris hieracioides, *L.*

カウゾリナ (三)

Hieracium umbellatum, *L.*

ヤナギタンポポ

Lactuca squarrosa, *Miq.*

アキノゲシ (三)

,, Raddeana, *Max.*

ヤマニガナ (三)

Campanulaceæ. 桔梗科

Campanumæa japonica, *Max.*

ツルギキヤウ

Campanula punctata, Lam.

ホタルブクロ (三)

,, circaeoides, *Fr. Schm.*

タニギキヤウ (大)

Adenophora verticillata, *Fisch.* forma serrata.

ツリガネニンジン (三)

,, remotiflora, *Miq.*

ツバナ (三)

(未完)

長胡椒ノ說

會員　澤田駒次郎

長胡椒ハ羅甸名ヲ Piper longum, *Linn.* 又 Chavica Roxburghii, *Miquel* ト稱シ胡椒科ニ屬スル植物ニシテ莖ノ下部ハ木幹狀ヲ爲シ平滑圓柱形ニ〆莖節ヲ有シ各節膨脹ス枝杪ハ莖ヨリ叢生シ或ハ滑澤或ハ毛茸ヲ有ス葉ハ平緣卵圓形ニシテ互生シ先頂尖リ底部心臟形ヲ爲シ其質柔軟滑澤五條ノ脉管著シク隆起シ葉底ヨリ先頂ニ縱走シ表面濃綠裏面ハ其色稍々務薄ナリ而シテ下部ノ葉ハ長サ二寸五分許葉柄長クシテ一寸六七分ニ至ル上部ノ葉ハ長サ八分四五厘幅四分許ニシテ葉柄矮短ナリ第八九月ノ頃一株ニ雌雄兩花ヲ開ク花ハ穗狀ニシテ長サ一寸乃至一寸五分各花其基部ニ鱗片ノ抱花小葉ヲ有シ其背部ニ因テ矮短ナル花梗椎ニ附着ス雌雄兩花共ニ花被ヲ有セス雄花ハ雄蘂二個ヲ有シ其花絲矮短ナリ雌花ハ其實礎殆ント球形ニシテ花柱四裂シ柱頭鈎曲ス果實ハ形チ卵圓ニ〆稍々壓扁セラレ先頂尖リ數十花花梗椎ニ密着シテ硬固ナル圓柱形ヲナシ長サ一寸二三分厚サ二分餘其色赤褐種子ハ略ボ黑胡椒ニ似タリ

本植物ハ印度南東部及ヒ錫蘭等ニ自生シ下拉巴爾，コロマシデール，巴西，瓜哇，新嘉坡等ニ於テ大イニ之ヲ栽培ス

本植物ハ第八九月ノ頃開花シ第一月下旬ニ至リ果實稔熟ス

收獲　稔熟ノ果實ハ其刺戟性ヲ減少スルニ因リ稔熟前即チ第一月ニ採收スト

長胡椒ヲ多ク產出スルハ瓜哇，新嘉坡ニ〆英領印度等ヨリモ亦輸出ス但シ沖繩縣下八重山島等ヨリ產出スル草撥ハ或ハ此等ノ種類ナランカ

性質　瓜哇產長胡椒ハ形チ圓住ニシテ上部狹隘先頂稍々尖リ長サ八分

四五厘乃至一寸二分餘厚サ二分强外面螺旋狀ノ溝ヲ有シ氣味ハ黑胡椒ニ似テ稍々强烈ナリ

成分　一千八百二十年 *Dulong* 氏ノ說ニ據レバ主成分ハ黑胡椒ニ均シク揮發油樹脂胡椒素トス

應用　現今醫藥ニ供セス然レ𪜈獸醫家ハ猶ホ多少之ヲ用フト又印度波斯亞羅比亞ノ土人ハ根ヲ藥用トス其効驗ハ果實ニ均シト雖𪜈其衝動ノ効ハ稍々劣ルト云フ

長胡椒ハ主モニ香味料トシテ用フ坊間ニ販賣スル齒磨粉ニ混和スル胡椒ハ專ラ沖繩縣ヨリ產出スル蓽撥ナリト

日本藥局方植物篇

（前號ノ續キ）

會員　澤田駒次郎

第五十七號正誤(358)ノ第四行二十八字目香息ハ息香ノ誤同第十四行十八字目「クル」ハ「シタル」ノ誤(360)ノ第八行二字目ノ屬ハ屬ノヽ誤

藥品　骨湃波拔爾撒謨 Balsamum Copaivæ. 日本藥局方ニハ Copaifera officinalis, *Linn* 及ヒ其他 Copaifera 屬諸種ノ樹ヲ鑽刻シ大孔ヲ穿チテ得タル所ノモノヲ以テ藥用ニ供ス

採收　骨湃波拔爾撒謨ヲ採集スルニハ地面ヨリ少シク隔テヽ樹幹ニ楔形ノ深キ孔ヲ穿チ其滲出スルモノヲ採集ス期節ヲ撰ヒ鑽刻スレバ其滲出多量ニシテ大約三時間ニ十二磅許ヲ產出ス若シ滲出セザルトキハ蠟或ハ粘土ヲ以テ直チニ其孔ヲ充塞シ十四五日ヲ經テ再ヒ孔穴ヲ鑽刻スレバ多量ノ拔爾撒謨ヲ滲出ス最初ニ滲出スルスノハ無色澄明ニシテ極メテ稀薄ト雖𪜈直チニ濃稠ト爲リ黃色ヲ呈ス又此等ノ植物ノ木部ヲ截片ト爲シ煑沸シテ樹脂ヲ取リ製スルモノアリト雖𪜈其品位下等ナリ但シ老樹ニ在テハ年ニ二三回採集スルコトアリ *Kesten* 氏ノ說ニ據レハ本植物ハ大イナル樹脂管ヲ有シ其

間マ八分五厘許ニ至リ管中多量ノ拔爾撒謨ヲ含蓄シ其壓力ニ因リ樹幹ヲ破壞セシムルコトアリト但シ此管ハ全幹中ニ貫通ス *Spence* 氏云此破壞ノ響キハ南亞米利加ノ寂莫タル森林中ニテ屢々聞ク所ナリト

本品ハ亞馬孫沿岸ノ幽谷ニテ採集シ之ヲ桶ニ納メテ巴拉 (*Para*) マランハム (Maranham) ヲ經テ歐米諸國ヘ輸出ス又疴勒諾哥 (Orinoco) 沿岸ニテ採收ノモノハ主モニ昂哥斯都拉 (Angustura) ヨリ輸スト雖𪜈其一部分ハ「トリンダツト」ヲ經テ運輸ス又委內瑞辣ヨリ產出スルモノハ多量ニシテ主モニ馬拉該波 (Maracaibo) ヨリ輸出ス里約熱內盧 (Rio Janeiro) 特默拉拉(Dmerara) 加爾達日那 (Carthagena) 及ヒ西印度諸島ヨリ產出スルモノハ「ハアーブル」(Havre) 及ビ紐育ヘ輸シ然ル後英國等ヘ運輸スト

性質　骨湃波拔爾撒謨ハ多少粘稠性ノ液ニシテ其色淡黃若クハ暗褐黃香氣ハ特異芳香性ニシテ味ハ微カニ苦ク久シク辛烈ヲ存シ其比重ハ〇.九四〇乃至〇.九九三ナリ此差異ハ揮發油含量ノ多寡ニ基因ス

本品ハ通常澄明ニシテ螢石彩ヲ有セズト雖𪜈或ルモノハ微ニ之ヲ有スルコトアリ又巴拉產骨湃波拔爾撒謨ニハ無色稀薄ニシテ水樣ノモノアリ

骨湃波拔爾撒謨ヲ貯藏スレバ每ニ濃稠トナリ稍々濃色ヲ呈ス此變化ハ一ハ揮發油ノ蒸散ヨリ起リ一ハ揮發油ノ酸化ニ基因ス *Buignet* ト氏ノ說ニ據レバ骨湃波拔爾撒謨ハ光線分極ノ度ニ差異アルノミナラズ其回轉ノ方向ニモ亦差異アリテ或ハ左旋シ或ハ右旋ス又本品ヲ熱スレバ大イニ液体ノ狀ヲ增加ス此性質ヲ有スルヲ以テ偪兒雲拔爾撒謨ヨリ鑑別シ得ルナリ但シ偪兒雲拔爾撒謨ハ硝子管中ニ納メ密閉シ大約華氏二百七十度ニマテ熱スレバ膠質ニ變ジ之ヲ冷却スルモ液体ニ復スルユトナシ

骨湃波拔爾撒謨ハ同量ノ安息香油ニ充分ニ溶解シ無水酒精アセトン, 硫化炭素ニ溶解ス又苦土, 石灰, 等ト共ニ徐々ニ熱スレバ此拔爾撒謨中ニ含有スル酸性樹脂ノ多寡ニ因リ多少硬固ナル化合物ヲ生ズト改正日本藥局方ニ云骨湃波拔爾撒謨ハ帶褐黃色或ハ淡黃色澄明ノ樹脂液ニシテ特異芳香性

ノ香氣ヲ有シ多クハ微ニ螢石彩ヲ現ハス味ハ微苦ニシテ久シク辛烈ヲ遺ス比重〇.九四乃至〇.九九ナリ

本品ヲ蒸發スルモ著ク的列並底ノ臭氣ヲ放ツ可ラス終ニハ冷後脆クシテ粉碎シ易キ樹脂ヲ殘スヘシ又本品ハ純酒精ニ全ク或ハ殆ソト澄明ニ混和スヘシ

本品一容量ニ石油偏陣四容量ヲ混和シタル液ハ澄明ナルベシ或ハ微ニ絮狀ノ溷濁ヲ生ズルニ過ク可カラス

本品一滴ヲ硫化炭素二十滴ニ溶解シ之ニ硝酸，硫酸等分ノ冷混和液一滴ヲ和シテ振盪スルモ類紫色ヲ呈ス可カラス」トアリ日本藥局方註解ニ云藥用品ハ帶褐黃色或ハ淡黃色澄明ノ液ヲナシ螢石彩ヲ現ハサス或ハ微ニ之ヲ現ハスモノアリ特異ノ芳香ヲ有ス味ハ微ニ苦ク久シク苛辣ナリ比重〇.九四乃至〇.九九ニシテ重湯煎上ニ蒸發スレバ冷後透明堅脆トナル所ノ暗褐色ノ樹脂ヲ留ムル者ヲ藥用トス可シ酒精（比重〇.八三），脂肪油，揮發油，硫化炭素，依的兒等ニ混和ス眞正ノ品ト雖𪜈此諸液トノ混和物ハ往々澄明ナラサルコトアリ其他加里滷液.安母尼亞ニモ混和ス六乃至十「ペルセント」ノ麻倔涅矢亞或ハ石炭ト混和シテ放置スレハ一二時間ヲ過クルノ後固結ス偏陣ニハ澄明ニ混和シ永ク放置スルノ際僅ニ絮狀ノ物質析出スルノミ水ヲ加ヘテ煮沸スレハ其水ニ苦味ヲ分賦ス」トアリ

骨湃波拔爾撒謨ハ種々ノ種類アルニ因リ其產地ヲ記シテ以テ其種類ヲ區別ス例ヘハ巴拉產骨湃波拔爾撒謨マランハム產骨湃波拔爾撒謨，馬拉該產骨湃拔爾撮謨西印度產骨湃波拔爾撒謨等ノ如シ此等ノ拔爾撒謨ハ各自形狀，彩色，氣味，透明ノ度，揮發油ノ含量ニ差異アリ熟練家ハ其性狀ニ因リ其種類ヲ鑒別ス

成分　骨湃波拔爾撒謨ノ主成分ハ揮發油及ヒ樹脂トス *Flückiger* 氏ノ說ニ據レバ本品ノ澄明ナルハ揮發油ノ存在ニ基シ苦味ニシテ久シク辛烈ヲ遺スハ脆性樹脂ト苦味質ヲ含量スルニ因ル者トス或云骨湃波拔爾撒謨ハ揮

發油中ニ樹脂ノ溶解シタルモノニシテ松柏科植物ヨリ滲出スル流動的列並底ニ類似スト

骨湃波拔爾撒謨ハ安息香酸及ヒ桂皮酸チ含有スルコト無シ此酸ノ一チ存在スルチ以テ拔爾撒謨組成ニ緊要ナルモノトス故ニ此說チ主張スル論者ハ骨湃波拔爾撒謨ノ名稱チ不適當ト爲スハ之ニ基因ス

骨湃波拔爾撒謨中ニ含有スル揮發油ノ量ハ其原植物ノ異ナルニ因リ差異アルノミナラス同一ノ植物ニ於テモ其樹ノ年齡等ニ因テ四十「ペルセント」ヨリ六十「ペルセント」ノ差異アリ近來歐羅巴ヘ輸入セシモノニ揮發油八十「ペルセント」チ含有セシモノアリト日本藥局方註解ニ云揮發油及ヒ樹脂ヨリ成ル揮發油ノ含量ハ四十乃至六十「ペルセント」樹脂ノ含量ハ六十「ペルセント」以下トス」トアリ

揮發油 (Oleum Copaivæ) ノ骨湃波拔爾撒謨チ水ト共ニ蒸餾シテ得タルモノニシテ無色澄明若クハ暗黃色ヲ呈シ試驗紙チ以テ驗スレバ中性ニシテ比重ハ〇.八八乃至〇.九一光線分極ノ方向ハ間マ右旋スルモノアレドモ通常ハ左旋シ味ハ苦クシテ辛烈香氣ハ骨湃波拔爾撒謨ニ同シ

本品ハ大約設氏二百五十度（華氏四百八十二度）ニテ沸騰シ依的兒ニハ容易ク溶解ス合衆國藥局方ニ據レバ同量ノ酒精ニ溶解スト或云比重〇.八五ノ酒精大約四十分ニ溶解シ沃度ニハ紺青色チ呈セズシテ混淆シ鹽酸ノ蒸氣ニ因テ液体ト結晶性化合物チ生ズ合衆國ニテ消費スルモノハ巴拉產骨湃波拔爾撒謨ヨリ製造ス其含量五十「ペルセント」乃至六十「ペルセント」ニ至ルト

本品ハ的列並底油ニ均シク炭水ノ二元素即チ $C_{15}H_{24}$ ヨリ成ル同量異質体ニシテ沸騰點及ヒ分極光線ノ度ニ差異アリ又本品ニ的列並底油チ混和スルモノアリト雖モ其臭氣ニ因リ鑒別シ又沃度チ以テ驗スレハ紺青色チ呈ス

骨湃波拔爾撒謨チ蒸餾シテ揮發油チ除クトキハ褐色不晶形ノ樹脂ヲ殘留ス其性疏脆ニシテ酸性ノ返應チ呈ス

骨湃波拔爾撒謨及ヒ安母尼亞水ノ混和液ニ微熱ヲ施シ蒸發シテ結晶ヲ析出セシメ之ヲ依的兒ニテ洗滌シ附着ノ拔爾撒謨ヲ除去シ無水酒精ニ溶解シ更ニ之ヲ結晶セシムルドキハ純粹ノ結晶性樹脂ヲ生ス之ヲ骨湃波酸ト云フ一千八百七十九年ニ *Rush* 氏云骨湃波拔爾撒謨一分ヲ比重一·三〇ノ那篤倫滷液三分ニ混和シテ振盪スレバ揮發油，亞爾加魯乙度，樹脂化合物ノ三層ヲ生ス下層ナル樹脂化合物ヲ取リ洗ヒ石油偏陣ニ溶解シ稀鹽酸ヲ加ヘテ振盪シ水ヲ以テ洗滌シ偏陣ヲ蒸發シテ結晶性樹脂ヲ得タリトス又此結晶性樹脂ハ間マ骨湃波拔爾撒謨中ヨリ自カラ析出シテ結晶スト

骨湃波酸 (Copaivic acid $C_{20}H_{32}O_2$) ハ細小稜柱狀ノ結晶ニシテ其質柔軟ナリ酒精，依的兒，硫化炭素，揮發油，流動油ニ溶解ス其他骨湃波拔爾撒謨中ニハ二種ノ酸性樹脂ヲ有ス一ハ一千八百四十一年ニ *Fehling* 氏巴拉產骨湃波拔爾撒謨中ヨリ發見シ之ヲ Oxycopaivic acid ($C_{20}H_{28}O_3$) ト命名シ一ハ一千八百六十五年ニ *Strauss* 氏馬拉該波產骨湃波拔爾撒謨溶液ニ炭酸安母尼亞ヲ加ヘテ振盪シ鹽酸ヲ注キテ沈澱セシメ之ヲ得テ Metacopaivic acid ($C_{22}H_{34}O_4$) ト命名セリ　（以下次號）

千島ノ海藻

理學士　岡村金太郎

十一月廿八日例會ニ於テ來會ノ諸氏ニ示ス

去ル十一月十六日學友札幌農學校敎授ドクトル宮部金吾氏ヨリ大學院淺井郁太郎氏ノ北海道ヨリ歸京スルニ托シ千島ウルップ島ノ採集ニ係ル海藻標品三種ヲ余ニ送ラレタリ如何ニモ珍奇ナルモノナレバ茲ニ其形狀ノ概略ヲ記シ以テ同好ノ諸士ニ報ズ尙ホ氏ハ他日北海全道ノ海藻ヲ研究シテ之ヲ公ニセラルヽト云ヘバ定メテ精細ナル記事珍奇ナル種類ヲ見ルコトヲ得ベシ希クハ一日モ早ク其世ニ公ニセラレンヿヲ切ニ請フ所ナリ

右三種ノ海藻ハ孰モ皆こんぶ料ノモノニシテ既ニ外人ノ採集命名セシ

所ナリ左ニ之ガ概形ヲ記サン

きくいしこんぶ(宮部氏新稱)　學名ヲ Thalassiophyllum Clathrus (Gmel.) Post. et Rupr. ト云フ外形稍ざるめ (Agarum Turneri Post. et Rupr. ニ類ス葉(即チフロンド)ハ團扇狀ニシテ頗ル厚ク短莖アリ徑凡ソ六七寸ナレドモ必ズ尙ホ大ナルモノアルベシ葉ノ基部捻レテ葉面ニ無數ノ小孔ヲ存ス孔ノ緣邊小片ニ裂ケ葉ノ一方ノ面ニ反卷ス外觀恰モきくめいしト稱スル珊瑚ノ紋樣ニ似タリ氏ノ命名シタル盖シ之ニ因ルナランカ

れにわかめ　學名ヲ Alaria fistulosa Post. et Rupr. ト云フ標品唯フロンドノ一部分ナルヲ以テ其ノ全形ヲ知ルニ由ナシト雖トモ察スルニ莖アリテ其ノ上部廣キ葉トナレルナラン葉ハ巾廣ク凡ソ一尺七寸計ニシテ葉ノ中央ニ一條ノ脉ヲ貫ク脉ハ中空ニシテ所々ニ隔膜アリ巾五分余往々四十尋ノ長キモノアリト云フ然レトモ多クハ二十尋ノモノ多シト其ノ大ナル驚ニ堪タリ

ねこあしこんぶ　學名ヲ　Arthrothainnus kurilensis Rupr. ト云フ此モ稍不完全ナル標品ナレドモ曩ニ農商務屬下啓助氏ガ根室ニテ取リ余ニ送ラレタルモノアルヲ以テ其全形ヲ知ルヲ得タリ其形狀ノ如キハ載セテ本誌第五卷第五十六號三百三十五頁(十月十日發兌)ニ詳ナレバ玆ニ贅セズ此種ハ余當時學名ヲ詳ニセザリシカドモ今氏ノ報此アルニ至テ初メテ知ルヲ得タリ深ク氏ニ謝スト云爾

雜　錄

瑣事一束

(一)獨乙人アー.ワイス氏の研究に因ればハボタンは葉の表面一ミリメートル平方每に二百十九個の呼吸孔を有しその裏面には同寸方に三百〇一個を有し一枚の葉は總計一千百五十四個を有すといへり又ヒマハリは表面一ミリメートル平方に付百七十五個裏面には同寸方に三百二十五個一枚

モ一千三百萬個を有すといへり

(二)梨子を食するとき齒にヂヤリヂヤリと觸るゝは膜壁の極めて厚き堅硬なる細胞にて植物家がいはゆる石細胞と唱ふるものゝ果肉の內に存するに因る

(三)麻糸は靭皮纖維とて植物体を堅むる長き細胞なり

(四)植物の根が水を吸收するとは誰人もよく知るとにはあれども根の如何なる部分にても之を吸收するものに非ず水を吸收するはその小根の先端より少しく上の部分に生ずる根毛とて極て細き毛の所爲なり此の毛の密生せる狀恰も天鵞絨を見るがごとし根毛を見んとする人は宜しくタウモロコシなれエンドウなれを濕りたる鋸屑の內へ播き數日を經てその發芽せる種子の根を見るべし

(五)植物の莖中を水が運行する速力は植物に因ても異り外界の有樣にても異りと雖もサックス氏が試驗に因ればブダウにてはその速力一時間に九十八サンチメートル,タバコにては百十八サンチメートル,プフㇶヒツェル氏の試驗に因ればヒマハリにては二千二百サンチメートルなりといふ

(六)植物の葉は水を吸收するや否や例へば水なきが故に將に枯死せんとする植物に水を注ぐときは植物は再生し勢を復すこれ根より水を吸收したるは勿論なれども葉も亦幾分か水を吸收したるに非ざるか若し植物の根に水を與へずたゞ葉にのみ之を與ふれば植物は再生すべきや否や或る植物家は葉は水を吸收し能はずといひ或る植物家は之に反對し吸收すべしといふ孰れが是なるか未だ分明ならず

(七)食虫植物の一なるマウセンゴケが虫を捕ふる爲即肉食するが爲果してその一身に利益を收むるや否や肉食するもせざるも植物に取て別段異なるとこれなきやフランシス,ダルヰン氏の試驗の決する所なり氏はマホセンゴケの多數を培養して之を二組に分ち甲の組にのみ肉を與へたりしが三ケ月を經て次の成績を得たり

	肉を與へざるもの	肉を與へたるもの
植物の目方(花梗を除き)	一〇〇	一二一.五
花梗の數	一〇〇	一六四.九
花梗の總目方	一〇〇	二三一.九
蒴の數	一〇〇	一九四.四
種子の平均目方	一〇〇	一五七.三
種子の數	一〇〇	二四一.五
種子總目方	一〇〇	三七九.七

(八)植物に麻醉劑即たとへばクロヽフオルムを施せば植物は衰弱し或は死するを動物と異らず

(九)語に曰く Omnes cellulæ a cellula と凡そ生物は必ず親ありて生ずるものなり親なくして自然に湧き出づるものに非ず虱の生ずるも黴の生ずるも必ず虱の卵黴の種子より生ずるなり汗は變じて虱と爲らず餠が化して黴とも爲らず植物動物を構成する細胞は必ずその親細胞より生ず母細胞の分裂より來る故にこゝに一個の細胞あれば必ずその母細胞あり然してその母細胞は祖母細胞の子なり祖母細胞は祖祖母細胞の子なり而してこの祖々母細胞の母は如何又その母細胞の母は如何と斯く順々にその元に逆りて此の世界に第一最初に出顯したる細胞の來る所を考ふればその原明ならず凡細胞は母より來る然れども第一に出現したるものハ如何母なく父なし學者こかに於て曰く今世に於ては必ず母あり, Omnes cellulæ a cellula の語空しゝらずと雖も第一に出現したる細胞のみは母なくして自然に生じたるなり無機物より生じたるなりと

日本植物家の著書

近着の獨逸國ベルリン府フリードレンデル書店の古本目錄第三九二號(植物地理學及びフロラの部)を見るに日本人の著大分あり今次に左の名と代價とを擧ぐ但一マルクは三十錢程なり

牧野氏日本植物志圖篇第五，六集	八マルク
松村矢田部氏日本植物名彙	十マルク
宮部氏 Flora of the Kurile Islands	七，五〇マルク
大久保氏 On the Plants of the Sulphur Islands.	一，二〇マルク
帝國大學植物標品目錄	六マルク
飯沼氏草木圖說(新訂)	二四〇マルク
田中小野兩氏同目錄	一〇マルク

牡丹芍藥ノ學名及異名

牡丹ハ花ノ王ト稱ス其屬ニ芍藥アリ然ラバ此レ其王族タルベキカ全世界ニ散布セル王族ヲ擧グレバ無慮十有四種アリ而シテ日本ニ在ルモノ三種ナリ

一ニ曰ク Paeonia albiflora, *Pallas.* (1788)

異名 Paeonia lacteo flore, *Amman* (1739.)

Paeonia edulis, *Salisb.* (1806)

和名 シヤクヤク 漢名 芍藥

二ニ曰ク Paeonia obovata, *Max.* (1857)

異名 Paeonia oregoton, *S. Moore.*

和名 ヤマシヤクヤク 漢名 草芍藥

三ニ曰ク Paeonia Moutan, *Ait.* (1811)

異名 Paeonia officinalis, *Lour.,Thunb.*

Paeonia papaveracea, *Andr.*

Paeonia arborea, *Don.*

Paeonia fruticosa, *Dum.*

和名 ボタン 漢名 牡丹 是レナリ

亞非利加ニ柿樹ヲ産ス

一ヲ Diospyros Fischeri, Gürke トイヒ, 二ヲ Diospyros conocarpa, Gürke et Schum トイヒ, 三ヲ Diospyros Soyauxi, Gürke et Schum. トイヒ, 四ヲ Diospyros Hildebrandtii, Gürke トイヒ, 五ヲ Diospyros Preusii, Gürke. トイフ日本ヨリモ其種類ニ富ム

木管ニ網狀ノ隔壁アリ

木材ヲ組成セル木管內ニ網狀ヲ爲セル隔膜ノ存スルコトハ千八百八十年ヂックソントイフ人ガ薯蕷科ニ屬スル鶴龜草トイフ植物ニ於テ發見セルコトアリシガ當時此人ノ論ゼル所ニテハ夫ノ網狀隔膜ハ閉封シテ孔ヲ見ズト言ハレタリ然ルニ近頃ロダムトイフ人ハ紫葳ノ大ナル木管內ニ鶴龜草ニ均シキ網狀隔膜ヲ發見セルニ其網孔ハ昭カニ孔ヲ通シ居レリト而シテ此ノ如キ木管ハ啻ニ外部ノ木材部ニ之ヲ見ルノミナラズ髓心ニ接スル木材部ニモ之アルコトヲ發見セリ之ヲ實驗スルニ サフラニン ヲ用ウレバ愈ヨ明白ニ見ルヿヲ得ベシトナリ

反足細胞トハ何ゾヤ

英語ニ Antipodes ト稱シ獨乙語ニ Antipoden-zellen ト稱シ邦人之ヲ譯シテ反足細胞トス何ノ意タルヲ解スルヿ能ハズ抑モ此細胞タルヤ胚囊內ニ在テ卵球ニ反足ノ位置ヲ占ムルモノニシテ從來ノ說明ニ據レバ單ニ不發器官ト見做シテ敢テ生理上効用ナキモノトセリ近頃獨乙國ニ「ウエストマイエル」ト云フ人アリ毛茛科, 禾本科, 其他單子葉, 雙子葉兩類中ノ植物ニ就テ夫ノ反足細胞ノ効用ヲ研究シ以テ先輩未發ノ結果ヲ得タリ其新說ニ據レバ所謂反足細胞ニハ物質ヲ含有スルモノニシテ其物質タル胚ノ養料トナリ若クハ胚乳ヲ造成スルノ用ニ供スルモノナリ叉玉蜀黍等ニ在テハ其反足細胞ハ胚乳ノ元始タリト追々研究ヲ積ムニ從テ甲論乙駁遂ニ不明ノ事物モ照々タルニ至ラム

花粉粒ノ研究

肉眼ニ觸ルベカラザル幺微ノ花粉二千二百十四種ヲ顯微鏡ノ下ニ研究

シテ其構造,其大小,等ヲ明カニセル人アリ誰ソヤ獨乙ノ人ニシテ名ヲフヰッシエルト云フ之ヲ研究スルニハ夫ノ細粒ヲ縱横ニ截斷シ以テ染液ヲ施シテ點染スベキナリ染液ハ「フクシン」「サフラニン」「メチレンブラウ」「ヨード綠」「マラキド綠」健質亞那藍,「ビスマルクブラチン」「ウェスウヰン」等ヲ適當トス但シ水ニ能ク溶解セル安仁林ハ用ウベカラズ

花粉粒ハ凡テ單細胞ヨリ成ルモノナリ然レ𪜈莎草科ト牻牛兒科トニ屬スル植物ノ花粉粒ハ數細胞ヨリ成ル而シテ其要部ハ膜壁,原形質及核ノ三ナリ膜ニ內皮ト外皮トノ別アリ原形質ニ接スルモノハ內皮ニシテ無色ナリ沃度及ヒ亞仁林ヲ施スモ其質ハ染マズ外皮ハ其質上皮ニ似テ沃度ヲ施ス𬼀ハ褐色ニ染ム時ニ外皮ヲ缺如スルモノアリ外皮ヲ有スル𬼀ハ大抵全面均シキ發育ヲ爲シテ薄所ヲ餘ス之ヲ出口ト稱フ又眞正ノ孔ヲ有スルモノアリ之ヲ芽口ト稱フ花粉ノ最大ナルモノヲ鳶尾ノ一種トス 250 M. ノ直經アリテ平均ハ 150 M. トス單子葉類ノ花粉ハ雙子葉類ニ比スレハ其外皮ノ發育稍單純ナリト謂フベシ風媒植物ノ花粉モ其相隣ナル高等植物ノ花粉ニ比スレバ其構造稍單純ナルガ如シ以上陳ブルカ如ク植物ノ部類ニ依リテ其形狀ヲ異ニスルガ故ニ之ヲ能ク研究スル𬼀ハ以テ自然分科ニ應用スベキナリ(「フヰシエル」ノ說ヲ拔萃ス)

蘆薈素ノ成分

蘆薈素トハ Aloine ノ謂ヒナリ「グロエネオルド」ノ研究ニ據レババルバドス及クラカオノ兩蘆薈ヨリ得タル蘆薈素ハ其化合式 $C_{16}H_{16}O_7$ ニシテ量ニ不同アル結晶水ヲ含ムヤ相似タレ𪜈唯其異ナル所ハバルバドース蘆薈素ニハメトキシルノ一類ヲ含有スレ𪜈クラカオ蘆薈素ニハ之アルコトナシトナリ

胡藍子ノ揮發油

ランツベルグノ研究ニ據レバ胡蘿蔔ノ果實ヨリ得タル油質ノ主成分ハピネンニ近似セルテルペーネノ物質ト $C_{10}H_{18}O$ ノ化合式ヲ有セル物質

トヨリ成ルモノニシテ後者ハ「チ子オル」ニ類似スルノ點多ク想フニ「テルペンモノヒドラート」トスベキモノナラントナリ

延胡索族ニモ亦乳管アリ

罌粟族ニ屬スル植物ノ組織ニハ乳管ヲ含ムヿハ皆人ノ知ル所ナルガ延胡索族 (Fumariaceæ.) ノ組織中ニモ之アルヲ見ルモノニシテ佛人「レジエール」ノ研究セル結果ニ據レバ單獨ノ細胞ニシテ乳液チ含ムモアリ延長セル細胞ニシテ又之チ含ムモアリ單獨ノ乳液貯藏細胞ハ其周圍ノ細胞ト其形狀均一ニシ別チ難シ延長セル乳液貯藏細胞ハ或ハ單獨ニ存在シ或ハ並列シテ存在ス然ル場合ニハ其隔壁消滅スルヿ多シ

以上ノ乳管タル凡テ諸器官中ニ散在スルモノニシテ髓心細胞ニ之チ見ルベク木材中ニモ之ヲ見ルベク靱皮纖維中ニ之チ見ルベク又厚皮（コルテツキス）細胞中ニモ之チ見ルベクシテ實ニ表皮細胞中ニモ乳液ニ類似ノ物質チ含ムヿモアリトス

此乳液ハ顆粒ナクシテ暗紫チ帶ビテ透明ナリ然レ𪜈器官老エルニ及ベバ全然消滅ス罌粟族ニ屬スル植物中ニモ該乳液ニ類セル物質ヲ含メルモノアリト

水草ニ水孔アリ

眼子菜トハ和名ヲヒルムシロト稱シ水中ニ棲息スル草本ノ植物ナリ佛人サバショーハ彼國ニ產セル眼子菜一切ノ構造ト其他ノ水草チ解剖シテ其葉末ニ大ナル空隙ヲ發見シ其隣傍ニ當リテ一ノ維管束チモ見出シキ而シテ諸維管束ノ管部ハ頗ル強大ノ發育チ爲セルモノニシテ夫ノ陸草ニ於ケル水孔ト同一ノ効用チ爲セルモノナルコトチ説明セリ何ソヤ水草ノ根ニシテ周圍ヨリ吸收セル水其內ニ充滿スル卩ハ之チ外ニ洩出セザルチ得ズ此用チ勤ムルハ正ニ此水孔ナリト

小豆ノ培養廣シ

日本支那ニハ往昔ヨリ培養スルコト皆人ノ知ル所ナルガ「トランスコ

ーカシヤ」「フェルグハナ」「チワ」「トルケスタン」ウツスリ南方,波斯國等ニモ耕作スルモノナリ

地衣モ亦炭酸瓦斯ヲ分解ス

佛人ジュメル曾テ其試驗ヲ施行セリ何ソヤ試驗管ニ地衣ヲ入レ以テ日光ニ曬露セルノ前ト後トニ當テ試驗管ノ空氣ヲ分析セリ一ニハ綠色ヲ呈シ若クハ稍々綠色ヲ帶ベル地衣ヲ其材料ト爲シ一ニハ綠色ヲ呈セル地衣類ヲ材料ト爲シ一ニハ又殼狀ノ地衣類ヲ材料ト爲シタリキ

斯クテ其結果タルヤ日光,潤濕,季節其宜キヲ得ルニ當テハ皆大氣中ノ炭酸瓦斯ヲ盛ニ分解シ以テ呼吸作用ニ依テ吐出セル炭酸瓦斯ニ逈ニ優レリトス於是乎地衣ハ炭素ヲ其躰中ノ成分ト爲スヤ昭カナリ

地衣ノ同化力ハ各種ノ異ナレルニ由テ亦異ナレリトス石蕊屬,兜苔屬ニ在テハ灌木狀地衣類及葉狀地衣類ヨリモ同化力稍微弱ナリトス夫ノ殼狀地衣類ノ樹木岩石等ニ附生シ僅ニ斑點狀ヲ呈スルモノニ至リテハ強度ナル日光ヲ受クル時ト雖モ其之ヲ認識スルニ殆ト苦シムトイフ

甘藷ノ甘キハ何物ノ存スルニ由ルカ

吾人甘藷ヲ食ヒバ其甘味喜スベキヲ覺ユ其甘キハ如何ナル物質ノ存在スルニ由ルカ蓋シ其物タル甘蔗糖ノ存在ニ由ルトハ曾テ其專門家ノ分析ニ依リテ知ラレタリトハイヘ未確乎タル證明ヲ得ルニハ至ラザリキ近頃獨乙國ノ人「ストヲン」其研究ニ從事セシニ先ツ生マノ甘藷ニハ既ニ糖分ノ狀トナリタル物質ヲ含ムヿナクシテ而カモ其生液ハ鑛物酸類ヲ以テ煖ムル𪜈ハ倏チ變シテ砂糖トナルヿヲ發見セリ尋テ更ニ強度ノ「アルコール」ヲ用テ甘藷ヲ煑タリシニ白色ニシテ甘味アル結晶狀ノ物質ヲ甘藷ヨリ分解離脫スルコトヲ得タルニ由リ正シク其物質ハ甘蔗糖タルコトヲ確定スルニ至レリ其含量タル種々ニシテ二,十ヨリ一,四十四%ノ間ニ居レリ

以上砂糖ノ他ニ澱粉ヲ多量ニ含メリ焼芋トスル𪜈該澱粉ハ大概ヲ溶解性ノ狀態ニ變轉シ甘蔗糖ハ「グルコース」ニ化ストイフ

依蘭苔ノ成分

ヒルガル及ブーフネルトイフ二人(獨乙人)ハ依蘭苔ニ存在セル「リケステアリン」ト「セトラル酸」トノ成分ヲ研究シテ左ノ如キ分子式ヲ得タリ

リケステアリン酸　$C_{43}H_{76}O_{13}$

セトラル酸　$C_{30}H_{30}O_{12}$

日本產地衣新編

此書ハ佛人ニーランデルノ著ニシテ先ニ博士アルキストガ橫濱長崎間及富士山等ニ於テ採集セル地衣ノ類ニ就テ論述セラレタルモノナリ題シテ Lichenes Japoniæ ト云フ巴里府千八百九十年ノ出版ニ關ル

三百八十二種ヲ擧ケタル中ニ二百九種(五十五%ノ割)ハ歐洲產ト同物ナリ Lecano-Lecidei 類ニ百九十三種アリ

Stereocaulei, Pyxinei 及 Pertusariei ノ三類ハ歐洲ヨリモ本邦ハ其種數ニ富ムトイフ本邦ノ無花植物ヲ研究スル人ハ一本ヲ購求シテ其書庫ニ藏シテ可ナラム

植物生理上燐酸ノ効用

獨乙人ロエーノ實驗セル結果ニ據レバ植物ニ燐酸化合物ヲ加フレバ其細胞核ニ營養ヲ增シ以テ生長シ隨テ分裂スルニ至ル水綿(綠色藻類ノ名)ヲ試ミニ飼フニ久シキ間之ニ燐酸化合物ヲ加ヘザルモ能ク澱粉ト蛋白質トヲ造成ス然レ𪜈生長スルヿナク又增殖スルコトナシトス是ニ依テ之ヲ觀レバ水綿ニ在テハ燐酸化合的ノ鑛物質ヲ攝取セザルモ蛋白質ヲ造成シ得ルト見ユ

以上十五件　寸ノ木公名ハ三字ハ壬人報ズ

ふくろのりの學名

岡村金太郎

ふくろのりは淡褐囊狀皮質の褐藻にして往々ほんだわら類の莖に附着し空虛にして內に海水を充つ始は豆大にして球狀なれども漸く大なるに至

れは直徑二寸余に達し時に或は裂開する者あり此藻は本邦沿岸所として產せざるなく又歐米各國の海岸にも生じ專ら温帶地に適する者の如し學名を Hydroclathrus sinuosus Zanard. と稱し其囊狀なるを以てふくろのりの名あり此藻は外貌甚だ歐米並に本邦に產する Leathesia tuberiformis Gray に類するを以て往々之と混同するをあれども造構大に異なるを以て一目の下其孰れなるやを辨じ得べし曩に地方有志の諸士より余に海藻の記名を依賴せらし當時余は唯大學所藏の標品に依り先輩の記名したる者に因て此藻の記名をなしたりしが此頃自ら此種を研究するに當り其全く別種なることを發見したるを以て正誤旁々茲に之を記し以て右諸氏に報ず

因に記す右 Hydroclathrus sinuosus は元と暫く Asperococcus 屬中に置かれしが此頃に至て全く此屬より取分けられたり而して現今 Asperococcus 屬に屬する種は二種にして即ち A. bullosus Lmx. 及び A. echinatus Grev. 之なり此二種の內 A. bullosus は短莖を有する腸狀の囊にして本邦所產のものは我大學植物標品中明治十二年五月長崎にて採集するものあれども A. echinatusは未だ之を見ず

うつぼかづら 猪籠草

小石川帝國大學植物園ニハ內外種々ノ珍草奇樹等數多アルハ同園ニ趣キタル者ノ皆知ル處ナリ帝都ニ居ナガラ寒氣凛烈ナル北方ノ植物巍々タル高山ノ奇草數千里外ノ諸植物ヲ見ルヲ得ベキハ此ノ園ノ如ク夥多アルハ國中ニ他處ニアルヿナシトイフモ敢テ過言ニハ非ザルベシ如此珍奇ナル夥多ノ植物中ニハ往々諸書ニ圖說ヲ載出スル處ノ蟲食植物ノ一ナル Nepenthes 屬ノ一種 Hookeriana モ同園中ニアリ此植物ハ過グル明治廿二年八月ニ橫濱在住ノ英人ヂンスデール氏ヨリ買上ケ爾來同園煖室內ニ培養セリ栽培其宜シキヲ得タルトミヘ生育盛ニ現今ハ二株トナリタリ此植物ハ印度多島海諸島ニ生ズルモノニシテ下部ハ尋葉ノ如クナレ𪜈上部ハ卷鬚トナリ其又上

端ハ瓶子狀ヲ成ス頗ル珍奇ノモノナリ前ニモイヘル如ク諸書ニ圖說ノ出ルアルヲ以テ其如何ナルモノナルヤハ讀者諸君ノ知ル處ナルハ疑ヒナシ然レ𪜈讀者中ニハ未ダ生物ヲミザル方モアルベシ在京ノ諸君同園ニ行キテミラルベシ燰室內ハ諸人ノ入ルヲ禁ズレ𪜈此ノうつぼかづら（草籠豬）ヲ見ント欲セバ燰室ノ南側ノ窓ヨリ見ルヲ得ベシ未ダ實物ヲ見ザル諸君ハ同園ニ至リ一覽セラルベシ　れ．　さ．

扶桑木ニ就テ

桂川中良著桂林漫錄ニ扶桑木ノ說アリ曰「伊豫風土記曰上古有㆓二大木㆒一曰㆓桂木㆒一曰㆓巨木㆒其實曰㆑椹」今桂木ノ朽殘リタル者豫州伊豫郡森村ト云地ノ海底ヨリ出ヅ又同處ニ桂谷ト云地アリ其邊方一里程ノ間ヲ掘レバ古木ヲ得土人桂木ノ根ナリト云フ二種共ニ同物ニ乄即チ世ニ稱スル扶桑木ナリ清ノ王漁祥ガ香祖筆記ニ桂板トアル者是ナリ」トアリ又伊豫國僧某ノ著シタル書ニ扶桑國號考ト稱スルモノアリシト覺ユ前號扶桑木ノ質問ニ付キ思出ツル儘ヲ記ス

關東第一ノぐミノ木

ト稱スル者ハ農科大學ノ正門ヲ去ルコト東方二町許ノ地ニアリあきぐみノ大木トナリシモノナリ幹ノ大サ地上二尺許ノ處ニテ直徑二尺ニ余レリ地上五尺ノ處ヨリ樹身分レテ二トナリ一ハ本幹ヲナシ直立シ其大サ直徑一尺餘アリ一ハ枝幹ヲナシ西方ニ出ツ其大サ亦一尺許アリ本幹ノ先端ハ余程以前ニ折レタルモノト見ヘ已ニ朽腐セリ斯ル古木ナレバ處々朽腐シ過般ノ暴風ニテ西方ニ出タル大枝ヲ折リ大ニ樹貌ヲ損セリ然レ𪜈尙高サ三間ニ餘リ小樹ノ間ニ翹楚スルハ實ニ其名ニ反カザルノ大樹ナリ

靴匠ノ用ユル木釘

一日僚友內山平八君木釘數箇ヲ懷ニシ來リ余ニ示シテ曰ク是本邦靴匠ノ用ユル木釘ニシテ常ニ供給ヲ外國ニ仰グノ品ナリ本邦ノ樹種ニシテ之ニ

代用スベキモノアラバ國益ノ一端ナラン余二三樹種ヲ以テ之ヲ試ムルモ好結果ヲ得ズ依テ鑑定ヲ乞フト其後閑ヲ得テ諸種ノ材鑑ヲ集メ顯微鏡ヲ以テ之ヲ比較研究シ遂ニ本邦ノもみぢ材尤モ此ニ近似スルモノタルヲ撿出セリ然レ𪜈外國ヨリ來ル木釘ノ原料ハ彼地ノ何樹ヲ用ユルヤハ諸書ヲ捜索スルモ之ヲ探知スルコト能ハズ依テ不得止此ヲ以テ之ヲ林學敎師マイル氏ニ質ス氏一見シテ曰ク是 Acer ノ材ナリ種類ハ一定セズト雖モ專ラ使用スルハ Acer platanioides ナリト是實ニ一昨年ノ事ナリ少シク舊聞ニ屬スト雖モ世人ニ報道シテ其傳ヲ弘メンコトヲ欲スレバ本紙ノ餘白ニ掲載セラレンコトヲ希フ

靴匠ノ用フル木釘ノ材ハ Acer ナル由ハ此報道ニヨリテ詳トナレリ余ハ某書中ニ左ノ木材ヲ木釘トシテ造船家ノ使用トナス由ヲ見タルヿアリ靴匠ノ木釘ニモ用フルヿヲ得ベキヤ否ハ知ラザレトモ記シテ以テ參考ニ供スQuercus alba 英名White oak, はりゑんじう即チRobinia Pseudo-acacia英名Locust, Pinus australis英名Long-leaved pine及ヒ Quercus virens 英名 Live oak 等ノ材ナリ而シテ以上ノ內最木釘トナシテ善良ナルハ Live oak ノ由ナリ　大久保三郎

かぢ。かうぞ。ひめかうぞノ區別

此三種ハ皆其樹皮ヲ以テ紙ヲ製スベキモノナリ就中かぢ, かうぞハ多ク諸州ニ栽培セリ然レ𪜈樹名混亂シ區別ノ要點ヲ知ラザレバ之ヲ見分ケ難シかぢハ葉尤大ニソ葉ノ裏ニ浮毛頗多シ葉柄モ甚長ク六七寸ニ至ル者少カラズ其葉片ニ着ク處葉ノ縁ヨリ少シ內ニアリ葉柄ノ本ニアル托葉濶大ナリかうぞハ葉かぢヨリ少ク葉ノ裏ノ毛脉上ニハ多ケレ𪜈背面ノ衣皮ニハ少シ葉柄ノ着方かぢト異ナリ直ニ葉ノ邊縁ニ着クナリ葉柄ノ長ハ通例一寸內外ナリ托葉狹小ナリひめかうぞハ葉ノ裏ノ脉ニモ毛少シ或全ク無キナリ葉柄ノ葉邊ニ着ク處ノ上面ニ小キ黑色ノ魚ノ目(疣ノ名)ノ如キモノヲ生ス是其

特徵ナリ此秘傳ヲ用ヰテ鑑定セバ三種ノ區別易クタルノミ

以上三件　　白井光太郎報

日本植物雜記

大久保三郎報

みづひきノ學名ヲ「ツンベルグ」氏ハ Polygonum filiforme ト命ゼシガコハ林那氏ノ P. virginianum ト稱セシモノト同物ナリ故ニ乙名ヲ用フル方穩當ナリ又たにそばノ學名ハ P. alatum, ト Hamilton 氏ノ名アリ

Buchenau 氏ハ Engler 氏ハボタニシェ,ヤールビュッヘル第十二卷ニ於テ燈心草科錄ヲ著セリ書中本邦ニ關スル種類ニシテ新種若クハ名稱ノ變更等ヲ擧グレバ次ノ如シ

Luzula japonica, *Buchenau.*

L. plumosa, *E. Meyer.*

Juncus balticus, *Willd.*—名 Franchet及ビSavatier 兩氏ノ J. glaucus, *Ehrh. var.* yokoscensis.

J. balticus, *Willd. var.* japonicus, *Fr. Buchenau.*

J. ,, ,, *var.* Haenkei, *Buchenau.*

J. beringensis, *Fr. Buchenau.*

J. pauciflorus, *B. Brown* —名 J. communis, *E. Mey. var.* japonicus, *Miq.*

J. pauciflorus, *R. Br. var.* (?) Cheesemani, *Fr. Buchenau*

J. xiphioides, *E. Mey. var.* macranthus, *Engelman.*

J. diastrophanthus, *Fr. Buchenau.*

J. prismatocarpus, *R. Brown.*

J. ,, *var.* Leschenaultii, *Fr. Buchenau.* —名 J. Leschenaultii, *J. Gay.* かうがいぜきしやう

J. prismatocarpus, *R. B. var.* Leschenaultii, *Fr. B.* subvar. pluritubulosus, *Fr. Buchenau.*

J. prismatocarpus, *R. B var.* Leschenaultii, *Fr. Buchenau* subvar. unitubulosus, *Fr. Buchenau.*

ブケナウ氏曰 J. Leschenaultii, *Gay. var.* radicans, *Fr. et Sav.* ハ莖地上ニ平臥シ節ヨリ根ヲ生シ莖葉及ビ常葉ニ隔膜ヲ生ズ而此 var. unitubulosus モ往々如此事アリ故ニ同物ナリトイフ

subvar. thermalis, *Fr. Buchenau.*

J. niponensis *Fr. Buchenau.*

フランシェ, サバチエー兩氏ノ命ゼシ J. papillosus 即チほそばのかうがいぜきしやうハ疑ハシキ種ニシテ恐ラクハ J. niponensis ト同種ナラントイフ

J. Maximowiczi, *Fr. Buchenau.*

土佐ニ於テしてうげ Leptodermis pulchella, Yatabe. ノ發見

此種ノ伊勢國宮川ニ產スルコハ博士矢田部氏著日本植物圖解ニ載スル所ナルガ予ハ曩ニ四國植物採集ノ節土佐渡川河端ニ於テ得タリ仝國幡多郡西上山村邊ヨリ仝郡中村ニ至ル沿河ノ畠上ニハ夥シク產セリ

Solidago virga aurea, *L. var.* linearifolia. ほそばあきのきりんさう

ほそばあきのきりんさうノ產地

ハ土佐仁淀川上流沿岸ノ地ニハ往々產スルアリ

以上二件 K. W. 報

からくさしだ

からくさしだハ明治二十年十一月友人牧野氏ノ土佐吾川郡名野川村北川, 並ニ下名野川(伊豫ニ近シ)ニ於テ創メテ發見セル所ニシテ後之ヲ魯國ノ植物學士故マキシモウヰッチ氏ニ贈ル氏之ニ命スルニ Gymnogramme Makinoi, ノ新名ヲ以テス牧野氏ノ詳細ナル記載ハ本誌第四卷第三十六號日本植物報知第四ニアリ予ハ每年夏期土豫ノ境ナル所謂四國ノ脊梁山脉ニ入リ羊齒科植物ヲ採集スル數年未ダ嘗テ此羊齒ノ其他ニ產スルヲ見ズ而シテ本邦ニ於テ

未タ其他リ產スルヲ聞カザル也然ルニ本年十一月十一日予ハ越前坂井郡豐原ノ溪間ニ於テ比羊齒ヲ夥ク採集セリ左レバ此羊齒ハ南土佐ヨリ北越前ニ至ル迄其產地ノ散布セルヲ知ラルヽナリ

吉永生報

飯沼氏草木圖說ノ版木灰トナル

彼有名ナル草木圖說ハ世人ノ知ルガ如ク大垣ノ藩士飯沼翁ガ二十餘年ノ星霜ヲ積ミ日夜刻苦精神ヲ此一篇ニ萃メ其後裔大金ヲ投シテ梓ニ上セ以テ世ニ公布セル以來僅カニ數十年內外ノ人之ヲ貴重シ大日本無二ノ本草書ト稱セラレ海外國ノ書肆ニ於テハ之ヲ五十圓ノ高價ニ鬻ク𪜈尚足ラサルヲ憾ムルニ至レリ然ルニ嗚呼天變地異ハ無情ナル哉今回岐阜尾張ノ地方ニ震災起ルヤ大垣ノ市城ハ人家爲メニ粉碎ニ歸スルコト過半ニ及ビ之ニ加フルニ火起リ以テ日本無二ノ寶ナル元板モ火燼トナリヌトハ特ニ我輩後學者ハ之ヲ聞キテ嘆息ノ至リニ堪エズ玆ニ之ヲ錄シテ普ク本會々員ニ告クト云爾

* * *

質問應答

問　白井光太郎

我邦ノ諸書ニへみのき(婆々枕頭)一名へらのき一名なべとうし一名すべら一名ひせぶト記載スル木アリ Viburnum ノ一種ナルハ疑ナシト雖モ何物ヲ指スニヤ決定シカダシ近時ノ書ニテハ北海道志ノ物產部ニ此木ヲ揭出セリ又大和本草，日州採藥記等ニモ此木アリみやまがまずみラナンカト推定スレ𪜈詳ナラズ會員諸氏ノ敎示ヲ乞フ

答　松村任三

ヘラノ木ハ大和本草ニ從ヒバ シナノキ ナルヿ疑ナシ其皮ヲ剝テ麻ヲ製スル如ニシテ繩トス農夫是ヲ以テ馬具ニ作ル又農夫皮ヲ以腰蓑ニ作ル又之ヲ以テムシロヲヲル絲トス葉ノ間ヨリ菩提子ノ如ナル薄葉生ジテ其薄葉ノ半ヨリ實ナルヿ恰如菩提子奇物ナリ其薄葉及實形如此ト記述メ圖ヲ載

セタリ全ク シナノキ ノ翅狀物ニ實ヲ結ベル圖ナリ但シ益軒先生ハ之ヲ救荒本草婆々枕頭ニ充テズシテ本草綱目ノ莢蒾トセルガ如シ ヘミノキ ナベトウシ スベラ イセブ ハ皆此一名ナルカ否ハ詳ナラズ

問　白井光太郎

和名カ方言カ知ラザレドモはしかの木ト呼ブ木アリ又みづはしか,かたはしか杯形容詞ノ付キタルはしかノ木モアリ加州及紀州邊ノ名ナリみづきノ類ナラント推考スレドモ詳ナラズ實物又ハ說明ヲ與ヘラレンヿヲ乞フ

答　渡邊協

土佐ニテ常ニくるまばしかト呼ブモノハみづき Cornus macrophylla, Wall. ヲ云ヒ亦みづばしかト呼ブハくまのみづき Cornus ignorata,Koch. ヲ云フナリ

くるまばしかトハ枝葉ノ四出スルヿ略ゞ車輻ノ如キ觀ヲナスヨリ云フナリ

土州ニテハ所ニヨリ幹ヲ割リテ箸ニ製スル地アリ「は・し・」かの土名ハ是ヨリ出デシテモナラン

問　白井光太郎

同

沖繩縣ニ方言はまゑんじゆト呼ビナス木アリ桑葉ノ如ク蠶兒ニ與ヘテ飼料トナルト云フ其屬,種ノ學名ヲ知ラズ說明ヲ乞フ

* * *

學會記事

十一月廿八日午後二時本會月次會ヲ例場ニ開ケリ來會員十六名本日ノ演說談話ハ次ノ如シ

千島ノ海藻　　理學士　岡村金太郎君

上ノ演說ハ論說欄內ニアリ

次ニ藤井健次郎君ハ花瓣ノ運動ノ事ニツキ「ペッフヘル」氏其他ノ說ヲ引

キ花瓣ニモ運動アルヿヲ述べふくじゆさう，ぼたん其他ノ例ヲ擧ゲラレ且花瓣ノ運動ノ最モ多キハ菊科植物ナル事ヲ示サレ氏ハ近頃さゝんくわノ花瓣ノ運動ニ就キ實驗中ノ由ニテ數多ノ寫生畫ヲ示シ且寒暖ニヨリテ運動ノ差異アルヿ等ヲ述ベラレタリ次ニ澤田駒次郎君ハ攝涅瓦ノ鑑定法ニ就キテ大久保三郎君ハふぢばかまトひよどりばなノ區別ヲ述ベ且此二種ハ果シテ別種トナスノ價ヒアリヤ否ヤノ疑問ヲ出サレタリ

海藻ニ沒食子ヲ生ズ

E. S. Barton 氏ハ本年三月發兌ノ Journal of Botany ニ Rhodymenia palamata ノ葉狀躰（フロンド）ニ細小隆起ヲ生ズルヿアル由ヲ述ベ此隆起ハ沒食子樣ノモノニテ Harpacticus chelifer ナル動物ノ爲メニ生ゼシモノナルベシ此隆起內及ヒ葉狀躰ノ患部內ニ於テ「ハルパクチクス」ノ死躰ヲ發見セリ又其卵ヲモ見出セシコトアリトイヘリ

正　誤

前號384頁下ヨリ六行目「花蓋シテ」ハ「花被ノ」ノ誤リ同號385頁下行「にぶなぐさ」ハ「こぶなぐさ」ノ誤リ又同號375頁蕎麥史ノ始メニ「昇平夜話」ノ前ニ次ノ數行ヲ加フ

堀田紀方舊が護花園隨筆に延享甲子(元年)菰野（こもの）温泉（伊勢）入浴中の記を載せたる處にうどん蕎麥切麪なとゝうどん屋より入用はなきやと伺に來る帳に記して其日の誂ある程をうつ故臨時なしといへり譚海（多分談海とは別本なる）しに櫻町天皇新造仙洞にうつらせ給ふ夜（延享四年五月二日の事ならん）やかて御口に蕎麥を召れしとかやかゝれば蕎麥も此頃に至りては御所にも入りしものと知らる

會告

本會々費爲替ヲ以テ御送付相成候諸君ハ本會幹事宛東京市本郷郵便電信局ニ向ケ御拂込被下度候

會員諸君ニシテ宿所御變替ノ節ハ其都度御通報被下度間々雜誌送達ノ御督促ニ接居候得ヘ𪜈宿處ノ不分明ヨリシテ時々送達方遲延及見合候事モ在之候間念ノ爲メ御注意致置候

雜誌送達上間々脫漏致シ候事ナキモ不計候間遲延又ハ發送ナキ節ハ御一報被下度候

本學會々員ニシテ植物學上ニ關シタル事項ハ精々御通報被下度希望候本雜誌ハ好ンテ登錄可致乍去事項ノ如何ニ依リ編輯員或ハ取捨スルヿアル可クト存候

質問又ハ報告ハ編輯上ノ都合在之候間幹事堀正太郎宛ニテ御送付被下度候　　東京本所區緑町三丁目四十七番地　　堀　正太郎

一本誌廣告料五號文字一行(廿五字詰)一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金一圓四十四錢○會員ニ限リ一册十錢

配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　郵便爲替金ハ神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十二枚御送致アレバ御屆可申候

LIST OF PLANTS COLLECTED IN CHŪGOKU.

(*Continued from Vol. IV. supl. p. 2.*)

BY S. HORI.

Skimmia, *Thunb.*

35. Japonica, *Thunb.*
Jap. name:—Miyama-shikimi.
Loc.:—Tsubame-mura (Oki); Daimanji.

XII. ILICINEÆ.

Ilex, *L.*

36. crenata, *Thunb.*
Jap. name:—Inutsuge.
Loc.:—Daisen.

XIII. CELASTRACEÆ.

Evonymus, *L.*

37. Japonicus, *Thunb.*
Jap. name:—Masaki.
Loc.:—Kaga-ura.

Celastrus, *L.*

38. articulatus, *Thunb.*
Jap. name:—Tsuru-ume-modoki.
Loc:—Dangyō (Oki)

XIV. AMPELIDEÆ.

Vitis, *L.*

39. heterophylla, *Thuub.*
Jap.—Nobudō.
Loc.:—Tsubame-mura (Oki), Shinzu, Gakuenji-yama.

40. Coignetiæ, *Buill.*
Jap.:—Nobudō.
Loc.:—Daisen.

41. Thunbergii, *Sieb. et Zucc.*
Jap.:—Ebizuru.
Loc.:—Tsubame-mura, Daisen.

XV. SAPINDACEÆ.

Acer, *L.*

42. Japonicum, *Thunb.*
Jap.:—Hauchiwa-kaide.
Loc.:—Daisen.

43. rufinerve, *Sieb. et Zucc.*
Jap.:—Kōmori-kaede.
Loc.:—Daisen.

44. Sieboldianum, *Miq.* ?
Jap.:—Itaya-meigetsu.
Loc.:—Summit of Daisen.

XVI. SABIACEÆ.

Meliosma, *Blume.*

45. tenuis, *Max.*
Jap.:—Miyama-hahaso.
Loc.:—Daisen.

XVII. LEGUMINOSEÆ.

Lotus, *L.*

46. corniculatus, *L. var.* Japonicus, *Regel.*
Jap.:—Miyako-gusa.
Loc.:—Daisen, Kaga-ura.

Indigofera, *L.*

47. tinctoria, *L.*
Jap.:—Komatsunagi.
Loc.:—Daisen.

Desmodium, *Desv.*

48. Oldhami, *Oliv.*
Jap.:—Fuji-kanzō.
Loc.:—Dangyo-yama, Gakuenji-yama.

49. podocarpum, *DC.*
Jap.:—Nusubito-hagi.
Loc.:—Daisen, Daimanji-yama.

LIST OF PLANTS COLLECTED IN CHUGOKU.

(*Continued from Vol. V. no. 48. supl. p. 4.*)

BY S, HORI.

Lespedeza,

bicolor, *Turcz.* var. intermedia, *Maxim.*
Jap. Hagi.
Loc.—Summit of Daisen.

pilosa, *Sieb. et Zucc.*
Jap.—Nekohagi.
Loc.—Gukeunji-yama.

cyrtobotrya. *Miq.*
Jap.—Marubahagi.
Loc.—Daimanji-yama (Oki).

sericea, *Miq.*
Jap.—Medohagi.
Loc.—Shigaku (Iwami).

Pueraria.

Thunbergiana, *Benth.*
Jap.—Kudzu.
Loc.—Gakuenji-yam, Tsubame-mura (Oki).

Atylosia.

subrhombea, *Miq.*
Jap.—Noadzuki.
Loc.—Gakuenji-yama.

Sophora.

angustifolia, *Sieb. et. Zuce.*
Jap.—Kurara.
Loc.—Daisen.

Albizzia.

Julibrissin, *Darazz.*
Jap.—Nemunoki.
Loc.—Daimanji.

XVIII. ROSACEÆ.

Prunus.

Ssiori, *Fr. Sch.*
Jap.—Uwamizuzakura.
Loc.—Daisen.

Spiraea.

Japonica, *L. f.*
Jap.—Shimotsuke.
Loc.—Summit of Daisen.
Kamtschatica. *Pall.*
Jap.—Shimotsuke-sō.
Loc,—Summit of Daisen.

Stephanandra.

flexuosa, *Sieb. et Zucc.*
Jap.—Kogome-utsugi.
Loc.—Daisen.

Rubus.

parvifolius, *L.*
Jap.—Nawashro-ichigo.
Loc.—Daimanji-yama.
hakonensis, *Fr. et. Sav.*
Jap.—Miyama-fuyu-ichigo.
Loc.—Gakeunji-yama.
rosaefolius, *Sm.*
Jap.—Baraichigo.
Loc.—Daisen.

Geum.

Japonicum, *Thunb.*
Jap.—Daikon-so.
Loc.—Dangyo-yama.

Fragaria.

Indica, *Andr.*
Jap.—Hebi-ichigo.
Loc.—Gakuenji-yama.

Potentilla.

fragarioides, *L.*
Jap.—Kiji-mushiro.
Loc.—Daisen.
Chinensis, *Ser. var.* hirtella, *Fr. et. Sav.*
Jap.—Kawara-saigo.
Loc.—Daisen.

Agrimonia.

pilosa, *Ledeb.*
Jap.—Kimmidzuhiki.
Loc.—Dangyo-yama, Daimanji-yama.

Poterium.

officinale, *L.*
Jap.—Waremoko.
Loc.—Summit of Daisen.

地學雜誌

第三集第三十五卷

◎地質調査所録事

●濃尾越以下震災地概察報告（圖入） 農商務技師理學博士 巨智部忠承君

◎論説

●土性編（前號の續き） 農學士 恒藤規隆君

●天降鉄（第三十四卷の續き） フォン、ペーテルスドルフ君述 理學士 三浦宗次郎君譯

●山口縣下土性の試驗（第三十四卷の續き） 農商務技師試補農學士 東條平二郎君

◎雜録

●美濃國根尾谷陷落の略況 理科大學地質學生 比企忠君

●イシカリ川水源巡回雜話 理學士 神保小虎君

●長崎縣の地貌（第卅三卷の續き）理學士 奈佐忠行君

●地球の内部は如何なる物質より成るや 西和田久學君

●中外度量衡表 大川通久君

◎雜報

●大塚技師の新鉄鑛床發見●今回の地質要報●陸中の玄武洞●天降鉄中の金剛石●十年間に於ける世界中の水銀産額●米國地質學會●神保小虎氏●イシカリ川の水源を見し人●北海道中生化石に就き●大陸の平均高●水及陸の容積●地殼及地球の重さ●井戸の發音●全國戸口總數●亞細亞鉄道の進歩●地學雜誌中地震及火山に關する事項を登録して時節柄愛讀者の注意を惹く

◎批評

●菊池安氏編中等敎育鑛物學敎科書 奈多列生君

●地學會記事●會員の移動●正誤

發行所 地學會事務所

賣捌所 東京神田區裏神保町 敬業社

同 同日本橋區通三丁目 丸善書店

東京人類學會雜誌

第七卷第六十八號

●毎月一回月末發兌一册金拾錢郵税壹錢六册前金郵税共六拾一錢十二册前金全一圓廿二錢

目録

○記事

○論説及報告

第九回萬國東洋學會 坪井正五郎

檳榔子ヲ嚼ム風俗 佐藤重紀

輪抜考（圖入） 羽柴雄輔

我ガ書棚 坪井正五郎

○雜報

古墳墓發見ノ長大ナル直刀、豐後ノ磨製石鏃、六頭雷
斧ニツキテ、磐城國田村郡遺物出所村名表、貝塚土偶、
本紙卷末ノ石版圖、奥羽人類學會第十三會記事。
銅鐸ノ石版圖

●發賣元 東京市本郷六丁目 哲學書院

明治廿四年十二月九日印刷
明治廿四年十二月十日出版

版權所有

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉 神田區小川町五十一番地
印刷人 滋賀縣士族 熊田宜遜 神田區松下町十三番地
發行所 東京植物學會編輯所
賣捌所 敬業社 神田區裏神保町一番地
賣捌所 丸善書店 日本橋區通三丁目

遞信省認可

目　錄

テウカイフスマ　理學博士　矢田部良吉　397

富士山植物彙報　松田定久　渡邊協　398

長胡椒ノ說　澤田駒次郎　403

日本藥局方植物篇　仝　404

千島ノ海藻　理學士　岡村金太郎　408

雜　錄

瑣事一束…日本植物家ノ著書…牡丹芍藥ノ學名及異名…亞非利加ニ柿樹ヲ產ス…木管ニ網狀ノ隔壁アリ…反足細胞トハ何ゾヤ…花粉粒ノ硏究…蘆薈素ノ成分…胡蘿子ノ揮發油…延胡素族ニモ亦乳管アリ…水草ニ水孔アリ…小豆ノ培養廣シ…地衣モ赤炭酸瓦斯ヲ分解ス…甘藷ノ甘キハ何物ノ存スルニ由ルカ…依蘭苔ノ成分…日本產地衣新編…植物生理上燐酸ノ効用………ふくろのり…うつぼくさ…扶桑木…關東第一ノくみノ木…靴匠ノ用フル木釘…かぢ,かゝず,ひめかうずノ區別…日木植物雜記…土佐ニ於テしてうげノ發見…ほそばわきのきりんさうノ產地…からくさしだ…飯沼氏草木圖說の版木灰トナル…………………………………………………… 409-422

質問應答……………………………………………………………………

* * *

CONTENTS.

Arenaria chokaiensis, nov. sp. By R. Yatabe. Sc. D. 397

Plants Collected on Mt. Fuji. By K. Watanabe and S. Matsuda. 398

On Piper longum, L By. K. Sawada. 403

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. By K. Sawada. 404

Algæ from the Kuril Islands By K. Okamura. 408

Miscellaneous: 409-422

Hydroclathrus sinuosus.—Nepenthes Hookeriana—The Largest Elæagnus in the Eastern part of the main Island of Japan.—Difference between Broussonetia Kasinoki, B. papyrifera, and B. papyrifera, var. Japonica.—Notes on Japanese Plants.—Leptodermis pulchella, Yatabe and Solidago virga-aurea, var. linearifolia found in the Prov. Tosa.—Gymnogramme Makinoi.—Destruction of Printing Blocks for Iinuma's *Sōmoku Zusetsu* by the recent fire at Ōgaki.

Queries.
Proceedings of the Society.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

地學雜誌

第三十四卷　十月廿五日發兌

◉論說

●土性編（前號の續き）　農學士　恒藤規隆君

●山口縣下土性の試驗　農商務技師試補　東條平二郎君

●天降鉄　フォン、ペーテルスドルフ述　理學士　三浦宗次郎譯

●福島縣會津地方沼鉄鑛層地　農商務技師　鴨下松次郎君

◉雜錄

●八谷（ヤダニ）層に就て　理學博士　橫山又次郎君

●地圖學叢談（第二集第十六卷の續き）　大川通久君

●東北地方二三の石膏床の生成に就て　理學士　三浦宗次郎君

●土佐南部諸島漫遊の所見（承前）　高知縣尋常中學校教諭心得　黒岩恒君

●水の蒸發及凝縮　理科大學簡易科卒業生　長濱兼吉譯

◉雜報

●水中の視力●海震●エトロフ島の介●長門國大津郡產介化石の分析試驗●黃金を含有する温泉堆積●越中の立山●餅鉄●尾濃低地の有史的變遷●赤坂近傍に於ける有孔虫並に石蓮虫石灰岩の散布●男鹿島の藍鉄鑛●在釜石大塚理學士の書簡●仝後報●土佐海の深さ●第五回列國地質學會議開會●南極探撿の計畫●列國地理學會議々事一班●マルチニック島近傍に於ける颶風●烏蘇里州植民部落の地質調査

◉地學會記事　●會員の移動　●寄贈書目

發行所　地學會事務所

東京神田區裏神保町

賣捌所　敬業社

同日本橋區通三丁目

同　丸善書店

東洋學藝雜誌

第百廿壹號

明治廿四年十月廿五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十八頁挿圖六個

●論說

○街路ノ話（承前）　工科大學教授博士　古市公威

○所謂子女敎育資金に付て○商法第六百八十三條に付て　藤澤利喜太郎

○相續の話　法科大學敎授博士　穗積陳重

○運動療治附按摩ノ話　醫科大學敎授博士　三宅秀

○パナマ運河失敗始末　工科大學敎授博士　田邊朔郎

○敎員學力撿定試驗ノ一問題ニ付テ　理科大學敎授博士　菊池大麓

（附受撿者心得）

●雜錄　○角ヲ三等分スル器械　理化大學敎授博士菊池大麓○佐久間玄蕃　文科大學敎授博士外山正一

●寄書　○倫理學統計ノ二三ニ就テ　吳文聰

●雜報　○空中飛行○高山頂上の氣象○白山頂上觀測臺○シヤム大學校○理學獎勵會○酸素の色○一學士三博士の歸朝○試驗問題○敎員免許狀○曹達を混じて茶水を得○亞細亞中央地窪●批評○日本現今之基督敎並ニ將來之基督敎を讀む思川漁夫○關根正直氏著國語學中郡秋香●學會記事九件●質問七件●應問○エヂルギーニ付テ菊池大麓●總目錄（第一號至第九十九號）ハ第百號ニアリ

●定價　壹冊金拾錢　拾貳冊前金壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

明治廿四年十一月九日印刷
明治廿四年十一月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉　神田區小川町五十一番地
印刷人　滋賀縣士族　熊田宜遜　神田區松下町十三番地
發行所　東京植物學會編輯所
賣捌所　敬業社　神田區裏神保町一番地
賣捌所　丸善書店　日本橋區通三丁目

東京　熊田活版所印行

遞信省認可

目　　錄

いがはゝづき　理學博士　矢田部良吉　355
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ)　會員　澤田駒二郎　357
富士山植物彙報(前號ノ續キ)　會員　松田定久　渡邊讓　360
花の色香(前號ノ續)　理學士　堀正太郎　364
雁皮ノ種類　理學士　白井白太郎　368
胡椒ノ說　會員　澤田駒二郎　371
蕎麥史(前々號ノ續キ)　野村彥太郎　375
胡桐東廧二種考　粟田萬三郎　380

雜　　錄

秋田八丈縞ノ染料—そば其他ノ學名—五稜子ノ結實—玉蜀黍ノ雄穗ニ雌花ヲ生ズ—八丈絹ノ染料—觀富山龍華寺蘇鐵—靜岡市內ノ蘇鐵—牛乳及珈琲ノバクテリアニ於ケル關係—つちとりもちノ新產地　384-389
新刊植物書
質問應答
植物學會錄事
寄送書目

CONTENTS.

Chamæsaracha echinata, Yatabe. Ry R. Yatabe, Sc. D. 355
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. By K. Sawada. 357
Plants Collected on Mt. Fuji. By K. Watanabe and S. Matsuda. 360
Colours and Scents of Flowers. By S. Hori. 364
Japanese Species of Wikstrœmia. By M. Shirai. 368
Remarks on Pepper. By K. Sawada. 371
A History of "Soba." By H. Nomura. 375
Miscellaneous: 384-389
Rosa rugosa as a Dye-stuff for "Akita Silk."—Buckwheat and Others—Androgynous Spike of Maize—Dyeing Materials for "Hachijō silk"—Cycas revoluta—Microbes on Milk and Coffee.—New Locality of Baranophora.

Queries.
Proceedings of the Society.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

●●●東京人類學會雜誌●●●

第六卷第六十五號　八月廿八日發兌

●定價郵税共一部金十一錢●六部前金六十一錢

目錄

○記事

○論說乃報告

沖繩縣諸島結繩記標考（續キ）（圖入）　田代安定君

本邦涅齒考　佐藤重紀君

朝鮮里程標ニ就キ（圖入）　羽柴雄輔君

寶谷ノ人穴實見談（圖入）　羽柴雄輔君

岩代國安積郡大槻村ニ於テ古墳奥壁ニ大王ノ二大字アルモノヲ發見ス（圖入）　犬塚又兵君

花ノ堂山石棺（圖入）　月輪眞成君

○雜報

ソロモン叢島土人ノ骨骼、阿波國三好郡中ノ庄塚穴ヨリ出タル土器、伊勢員辨郡治田村ニテ發掘セル土器、地理上及ビ氣象上ノ蝦夷語、奥羽人類學會記事

發行所　東京本郷六丁目　哲學書院

東洋學藝雜誌　第百拾九號

●論說○虎列拉病ノ用心（醫科大學教授博士緒方正規君）○會社法ノ話（前號ノ續）（法科大學教授梅謙次郎君）○感情ノ表出（文科大學敎授元良勇次郎君）○勢力ノ話（理科大學敎授博士菊池大麓君）●雜錄○忘れがたみ（文科大學敎授博士外山正一君）○迷ひ子（仝君）○攝津國神戸ニアル金星經過表（關谷清景君）●寄書句點之位置ニ就テ（八見忠次郎君）●雜報十七件●質問十件●應問曆ニ就テ●總目錄（第一號至第九十九號）ハ第百號ニアリ●明治二十四年八月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十頁木版挿圖數個●定價壹冊金拾錢六冊前金（郵税共）五拾四錢拾貳冊前金（郵税共）壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル内ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御届可申候

明治廿四年十月九日印刷
明治廿四年十月十日出版

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町五十壹番地

印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地

發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

版權所有

東京　熊田活版所印行

遞信省認可

目　錄

ふじほゝづき（新種）　理學博士　矢田部良吉　315
たちすみれ（新種）　仝　上　318
ながばなのすみれさいしん　仝　上　319
日本藥局方植物篇　會員　澤田駒次郎　320
富士山植物彙報　會員　渡邊協　會員　松田定久　323
日本植物報知　會員　牧野富太郎　329
花の色香　理學士　堀正太郎　330
北海道ノ海藻ニ就テ　理學士　岡村金太郎　333

雜　錄

繇條書屋植物雜記—きばなのあまなニ就テ—甲州葡萄ノ病菌—銀杏ノ奇樹—おどれノ木—日光ノおんのれ木—笹子峠ノ大杉—伊勢菰野山ノ植物—原形質ノ運動—並頭ノ百日草—三タヒやどりぎノ寄生ニ就テ—ネゲリー氏歿ス—ゲーベル氏—墺國ヴヰーン大學植物生理學實驗所—江州琵琶湖の疏水—京都邊植物分布ノ奇相—ボコルニー氏ノ類化實驗—種樹祝日—種樹送別會—將軍ノ紀念樹—帝國大學植物園内ノ貴樹—理學士三好學氏—會員名和靖氏ノ來状—　336-352
質問應答　二件
植物學會記事

CONTENTS.

Chamæsaracha Watanabei, sp. nov. By R. YATABE, Sc. D. 315
Viola deltoidea, sp. nov. By R. YATABE, Sc. D. 318
Viola vaginata, Max var. annustifolia. By R. YATABE. Sc. D. 319
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. By K. SAWADA. 320
Plants Collected on Mt. Fuji. By K. WATANABE and S. MATSUDA. 323
Notes on Japanese Plants. By T. MAKINO. 329
Colours and Scents of Flowers. By S. HORI. 330
Remarks on Some Algæ from Hokkaido. By K. OKAMURA. 333
Miscellaneous: 336-352
Notes on Some Plants in Makino's Herbarium.—Gagea lutea, Rœm. et Sch.—Parasitic Fungi on Kōshū Vines.—An Abnormal Gingko Tree.—"Odore" Tree.—"Onnore" Tree from Nikkō.—The Large Cryptomeria Tree in the Sasago Pass.—Plants from the Komono Mountain, Prov. Ise.—Movements of Protoplasm.—Cohesion of Two Flower-heads in Zinnea elegans.—Viscum album.—The Late Prof. Nägeli.—Prof. Göbel.—Prof. Saccardo —Institute of Vegetable Physiology in Vienna.—The Lake Biwa Canal.—Peculiar Distribution of Plants in the Vicinity of Kyōto.—Prof. Bokerny's Experiments on Assimilation —Arbor day.—Memorial Trees of General Grant.—Trees Planted by Crown Prince in the Imperial University Botanic Garden.—Mr. M. Miyoshi.—Correspondence from Mr. Y. Nawa.
Queries.
Proceedings of the Society.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

ILLUSTRATIONS OF THE FLORA OF JAPAN.

to serve as an Atlas to the "Nippon-Shokubutsushi,"

By Tomitaro Makino.

牧野富太郎先生著

日本植物志圖篇

本書ハ後日公ニスベキ日本植物志ノ圖篇ナリ

* * *

毎月一回發行

第一集ヨリ第十集マデ發兌

第十一集以下續々發刊

每集正價金貳拾錢

郵稅各貳錢

第一集再版第二集不日再版

* * *

帝國大學理科大學植物學教授理學博士松村任三先生嘗テ植物學雜誌上ニ於テ本書ヲ批評シテ曰ヘリ「本日只今日本帝國內ニ本邦植物圖志ヲ著ハスベキ人ハ牧野富太郎氏一人アルノミ……今ヨリ後絶ヘズ止マズ續篇ヲ出版シテ本邦所產ノ植物ヲ全璧センノ責任ヲ氏ニ負ハシメントスルモノナリ」ト又曰ク「今氏ノ圖ヲ評センニ紙ノ大サハ大ニ過ギズ小ニ失セズ英國出版ノ Botanical Magazine ニ稍大ナル如キ者ナレバ閲覽ニ極メテ便ナリ圖ハ着色セザルモ花序、葉、根ハ充分ニ其形ヲ摸寫シ花、實、雌雄蕊等ノ要部ハ一々精密ニ解剖シテ示シタレバ……Botanical Magazine モ及バザル處トス……牧野富太郎氏ハ植物形貌學ト植物分類學トヲ辨ヘ畫工ノ手ニ委セズ自ラ手ヲ下シテ眞物ヲ摹寫スルノ精細此ノ圖ノ如ク分類上ノ要部ヲ解剖スルノ明瞭此ノ圖ノ如クンバ後日其說文ノ出ルニ及ビテモ必完全ナランヿ期シテ待ツベキナリ」ト余ハ評セント著者ハ實ニ日本植物志（Flora japonica）ノ未ダ備ハラザルヲ慨歎シ爲メニ本書ヲ出版セリ而シテ其圖ノ精巧ナル寫生ノ正確ナル解剖ノ詳密ナル印刷(石版)ノ鮮麗ナル發刊以來夙ニ大ニ內外人ノ好評ヲ博シ今又世ノ必要ニ迫ラレ每月一回之ヲ發兌スルニ至レリ殊ニ多キ日本植物調査ニ從事セラレツヽアル同君ノ探究記述シタル新種ハ同君新ニ之レニ命ズルニ新學名(ラテン名)ヲ以テシ又之レガ說文(英文)ヲ附シ圖ニハ圖解(邦文)ヲ添ヘ一ニ此書ニ由テ之ヲ世ニ公ニスルヲ以テ書中始メテ從來未ダ之レナキ所ノ新學名ヲ見ル者多シ故ニ苟モ日本植物ニ就テ知ラント欲スルノ士ハ必ズ之ヲ繙閲セザル可カラザルニ至レリ曾テ世界第一ト稱セラルヽ所ノ英國 Kew 皇立植物園ノ長 W. T. Thiselton Dyer 氏幷ニ同國ノ學士ハ大ニ之ヲ賞賛シ出版ノ絶ヘザランヿヲ切望シ又露國聖得彼堡府帝立植物園植物學首座、帝立學士會員、樞密顧問官 C. J. Maximowicz 氏ハ殊ニ著者ノ此擧アルヲ激賞シ著者ニ贈ルニ下ノ言ヲ以テシ又切ニ出版ノ連續シテ遂ニ完備ニ至ランヿヲ望メリ曰ク Your illustrations have very agreeably surprised me by the excellency of the figures, the detailed and very correct and clear analysis, which brings your figures up to the height of the best European publications. ト亦以テ本書ノ如何ヲ豫想スルニ足ルベシ而メ每集六七八葉ノ石版密圖ヲ插入シアルニ係ハラズ其賣價ノ殊ニ廉ナルハ第一ニハ著者ノ熱心ニ由リ第二ニハ此書ノ出版必ズ數年ニ繼續スベキヲ以テ永ク之ヲ購求スベキノ便ヲ謀リ著者ガ時間ト勞力トヲ吝マズシテ親シク寫生幷ニ版下ノ業ヲ執ラレ假令其圖ノ外觀ハ美麗ニ製シ得ベキモ植物學ニ少シノ嗜好モ有セザルヨリ往々其圖上ニ誤謬ヲ見ルベキ賃金高キ畫工ノ手ニ委セザルニ由ルナリ是ヲ以テ其圖ノ極メテ正確詳密ナルニ關ハラズ其賣價ノ殊ニ廉ナルヲ致セシナリ故ニ賣價ノ如何ハ未ダ以テ此書ノ學問上ニ占メ得ル價値ヲ評定スルニ足ラザルナリ尚此書ヲ出版スル所以ハ著者ガ此書ノ緒言ニ於テ之ヲ評述セラレタリ

發兌書肆

東京神田區裏神保町一番地
敬業社

東京本鄉區本鄉四丁目
同支店

○東洋學藝雜誌　第百拾九號

●論說

○虎列拉病ノ用心　醫科大學敎授博士　緒方正規君

○會社法ノ話（前號ノ續）　法科大學敎授　梅謙次郎君

○感情ノ表出　文科大學敎授　元良勇次郎君

○勢力ノ話　理科大學敎授博士　菊池大麓君

●雜錄

○忘れがたみ　文科大學敎授博士　外山正一君

○迷ひ子　仝君

○攝津國神戶ニアル金星經過表　關谷清景君

●寄書　句點之位置ニ就テ　人見忠次郎君

●雜報　十七件　●質問　十件　●應問　曆ニ就テ

●總目錄（自第一號至第九十九號）ハ第百號ニアリ

●明治二十四年八月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十頁木版挿圖數個

●定價　壹册金拾錢　六册前金（郵稅共）五拾四錢　拾貳册前金（郵稅共）壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　**東洋學藝社**

定價改正廣告

理科大學敎授理學博士ドクトル　飯島魁君編纂

中等敎育動物學敎科書　全二冊

舊定價第一卷金八十五錢　改正定價金六十錢

同　第二卷金一圓　同　金七十五錢　郵稅各卷六錢

敬業社編纂

三版　小物理學　全一冊

舊定價金四十五錢　改正定價金三十五錢　郵稅四錢

敬業社編纂

日本小歷史　全三冊

舊定價上卷金三十錢　改正定價金廿五錢　郵稅二錢

同　中卷金四十錢　同　金三十錢　郵稅四錢

同　下卷金三十錢　同　金廿五錢　郵稅二錢

敬業社譯補

訂正二版　佳氏生理學　全一冊

舊定價金四十五錢　改正定價三十五錢　郵稅四錢

尙左ノ四書ハ本月一日ヨリ改正ス

敬業社編纂

訂正八版　**植物學**（全一冊舊定價金三十錢改正定價金二十錢郵稅二錢）

訂正六版　**鑛物學**（全一冊舊定價金三十錢改正定價金二十錢郵稅二錢）

訂正五版　**動物學**（全一冊舊定價金三十錢改正定價金二十錢郵稅二錢）

訂正四版　**萬國小歷史**（全一冊舊定價金三十錢改正定價金二十錢郵稅二錢）

訂正二版　**化學書**（全一冊舊定價金三十錢改正定價金二十錢郵稅二錢）

發兌書肆　東京市神田區裏神保町一番地　**敬業社**

第三十二巻
八月廿五日發兌

地學雜誌

定價金十錢、郵稅金一錢、六册前金郵稅共五十四錢、十二册前金一圓八錢、

◉論說
●日本之氣候（ドクトルマキスフェスカ君）●日本群島（承前）（ドクトル原田豐吉君述理科大學々生石井八萬次郎君譯）●河流之說（承前）（理學士奈佐忠行君）
◉雜錄
●ウルップ島小誌（理學士神保小虎君）●丹波天田郡在の新化石（但馬T.K.生）
●地質學答案●高知市近隣往時の景況（土州澤田中君）
◉雜報
●原田豐吉氏の消息●世界家畜の數●陸と海の重さ●古風の學者●八口一萬以上の町●青海セメント●鈴木技師の消息●霧島嶽噴火續報●石炭含藏地の面積●北海道第三紀の硅藻●火山群島の一なる硫黃島の現況●新潟、浦潮斯德間航海貿易を開かんとす●西比利亞貿易探撿者の一行●シヤトル日本店の近況●妙高山の硫黃●點燈用瓦斯の新製造法●諸縣雨水被害
◉質疑　一件
◉應問　三件
◉批評
●大日本地誌の組織を評す（下）　R、K、生
◉地學會記事
●會員の移動
●寄贈書目

發行所　地學會事務所
賣捌所　東京神田裏神保町一番地　敬業社
賣捌所　日本橋區通三丁目　丸善書店

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ

○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御届可申候

明治廿四年九月九日印刷
明治廿四年九月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町五十壹番地
印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地
發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地
賣捌所　敬業社
同所
同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目錄

とがくししやうま及ビしこくめぎ(新種)　理學博士　矢田部良吉 281
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ)　澤田駒次郎 284
富士山植物彙報　松田定久　渡邊協 289
花の色香　堀正太郎 295
蕎麥史　野村彥太郎 298

雜錄

池野氏よりの來信—龍腦—庚申草—如峰ノ匍松—赤名古ノ槭—やとりきノ寄主—へちまノ氣根—不忍池ノ蓮—とろゝあふひ—まめ類ノ葉—再ヒ蘇鉄ノ花ニ就テ—みづあふひノ根—あさがほノ花冠—日本ニ產スル高等生物ノ種數—新刊植物書…………………… 301-313

CONTENTS.

Yatabe japonica, Maxim., and Berberis sikokiana, nov. sp. By Prof. R. Yatabe, Sc. D. 281

Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. (Continued from No.54.) By Mr. K. Sawada. 284

Plants Collected on Mr. Fuji. By Messers K. Watanabe and S. Matsuda. . 289

Scents and Colours of Flowers. By Mr. S. Hori. 295

A History of "Soba." By H. Nomura. 298

Miscellaneous: 301-313

A letter from Mr. S. Ikeno.—Borneo-Camphor.—Notes on Pinguicula ramosa, Miyosoi.—Creeking Pine of Mt. Nyoho.—Acer of Akanago.—Host-Plant of Viscum album.—Aerial Roots of Luffa Petola.—Euryale ferox.—HibiscusManihot.—Leaves of Certain Leguminous Plants.—Flowers of Cycas revoluta.—Roots of Monochoria vaginalis.—Corolla of Conovoluvulus.—New Literature.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TOKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan

地學雜誌

第三十一卷

◉論説

●日本群島（承前）

●淡路の地理と地質（第一卷の續き）

●常盤之磁鐵鑛層成生論

●尋常教育に於ける地理學科

●河流之説

◉雜錄

●地球發育史試驗答案

●石油產出の狀態

●土佐南部諸島

●漫遊の所見

●秋田縣地理篇

ドクトル 原田豐吉君

大學々生 脇水鐵五郎君

鈴木敏君

理學士 大塚專一君

大學院 金田楢太郎君

理學士 奈佐忠行君

理科大學簡易科生 石川一男君

理科大學生 脇水鉄五郎君

高知縣尋常中學校教諭心得 黑岩恒君

秋田市 笈川榮助君

◉雜報

●理科大學簡易講習科卒業式●簡易科生徒募集●羽後森吉山●美濃の鉄鑛●伊勢の磨砂及硝子厚科●伊太利の地震●列國地理學會議●千八百八十九年露國鑛物採製高●磐梯山今日の情況●神保氏の「ウルップ」行●西伯利の地積及人口●西和田家君地學の蘊奥を究められんとす●犀ケ崕の由來●新著鑛物學書●ドクトル原田豐吉氏の消息●霧島嶽鳴動●無人岩と三宅岩●本邦各市現住人口●時ならぬ降雹●石油泉發見

◉質疑 十件

◉應問 七件

◉地學談話會記事

◉地學會記事

發行所 本郷區弓町二丁目廿五番地 地學會事務所

賣捌所 神田區裏神保町一番地 敬業社

同 日本橋區通三丁目 丸善書店

一本會ヘ御投寄ノ論説雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌毎月一回發兌一冊金拾二錢○六冊前金七十二錢○拾貳冊前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹冊十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル内ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿四年八月九日印刷
明治廿四年八月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町五十壹番地

印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地

發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

（遞信省認可）

目錄

日本羊齒類 第四 めうぎしだ(英文)　理學博士 矢田部良吉 245
佐渡植物一斑(前號ノ續キ)　大久保三郎 247
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ)　澤田駒次郎 250
蕎麥史　野村彥太郎 256

雜錄

本朝三木ノ一ナル御賀玉ノ木ニ就テ—漢防已—むじなも等ノ花候ニ就テ—蘇鉄ノ花—花粉粒ノ數—ゆづりはノ木髓—むらさきつゆくさ—やどりき類ノ寄主—裸子植物—花序中ノ花數 ……260-276
書籍雜誌類 ……277
質問應答 ……279

CONTENTS.

Ferns of Japan. (No. 4.) Polypodium Someyae, nov. sp. By Prof. R. YATABE, Sc. D. 245
Plants from Sado. By Mr. S. Ōkubo. 247
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. (Continued from No. 53.) By Mr. K. SAWADA. 250
Miscellaneous: 260-276
One of the Three Famous Trees of Japan.—Stephania tetrandra, S, Moore—Aldrovanda vesiculosa and Trapella Sinensis in flower at Mama.—Cycas revoluta, Thunb.—Number of Pollen-grains.—Pith of Daphniphyllum macropodium Miq.—Tradescantia Virginica.—Host-Plants of Some Parasies.—Gymnospermous Plants.—Number of Flowers in an Inflorescence.
Literature. 277
Query. 279

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

地學雜誌

第三十巻
六月廿五日發兌

定價金十錢、郵稅金一錢、六册前金郵稅共五十四錢、十二册前金一圓八錢、

◉論說

●日本群島（承前）（ドクトル原田豐吉述　大學々生石井八萬次郎譯君）●豐後木浦鑛山（地質調查所技師理學士中島謙造君）●日本海流即黑潮（神戸港長マールマン君）●普通學校學制に於ける地理學科の位地（大學院金田楢太郎君）●島原温泉嶽の記（理學士奈佐忠行君）

◉雜錄

●十九世紀地學大家傳（承前）（理學士金田楢太郎君）●石油産出の狀態（理科大學々生脇水鐵五郎君）●水の蒸發及凝縮（承前）（理科大學簡易科生石川一男君）●氷の記錄（理科大學簡易科生土屋勇之輔君）

◉雜報

●本邦最近の人口統計に就きて●（新版）地理歷史教授用世界全圖に題す●河床の傾斜●尋常小學科に於ける本邦の地理及歷史を加ふるの方法及其程度●栃木縣雹害の詳報●富士山の火熱●現在鐵道の効用及ひ欠點●バクーの新石油坑●石窟發見●長崎の滿俺鑛●サブオン土の新産地●筑前煤炭の産格●東京府戸口現在數●エグレストン氏の來遊●地質調查所分析場燒失

◉質疑　四件

◉批評

●帝國大學紀要第四册第二號　大學院　金田楢太郎君

◉地學會記事　三件

發行所　地學會事務所

賣捌所　神田裏神保町一番地　敬業社

賣捌所　日本橋通三丁目　丸善書店

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿四年七月九日印刷
明治廿四年七月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地

印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地

發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目　　錄

ヒオウ　理學博士　矢田部良吉　217
日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）　澤田駒次郎　218
日本植物家列傳　山本頼輔　223
植物生理學輓近ノ一大問題　池野成一郎　225

雜　　錄

獨和對譯植物名彙——スモモノ說——きばなのせきこくノ產地——針ノ生出ハ大氣ノ乾濕ニ係ス——顯微鏡的標品調製用溶藥——…………… 231-242
新刊書類………………………………………………………… 242
中國植物目錄…………………………………………………… 5-6

CONTENTS.

A New Japanese Wikstrœmia. By Prof. R. Yatabe, Sc. D. 217
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæa. By Mr. K. Sawada. 218
Biographical Sketch of Japanese Botanists. By Mr. Y. Yamamoto. 223
A Recent Problem in Vegetable Physiology. By Mr. S. Ikeno. 225
Miscellaneous: 231-242
Names of Plants in German and Japanese.—On Prunus Communis.—Yellow-flowered Dendrobium.—Relation of Spines and the Moisture of the Atmosphere.—Some Preserving Media for Microscopical Specimens.
New Literature.
List of Plants Collected in Chūgoku. 5-6

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

地學雜誌

第二十九卷
五月二十五日
發兌

定價金拾錢郵稅一錢六册前金郵稅共五十四錢
十二册前金一圓八錢

◉地質調査所錄事

●長崎近傍建築石材試驗成蹟　理學士　奈佐忠行君

◉論說

●日本群島（承前）　ドクトル　原田豐吉君

●普通教育幷に學術上に於ける地理學の位置を論す　大學院理學士　金田楢太郎君

●本邦建築石材一斑　理學士　巨智部忠承君

●千島國シコタン島　北海道廳技手農學士　橫山又次郎君

◉雜錄

●十九世紀地學大家傳　理學士　金田楢太郎君

●石炭話　O. S. 生君

●石油の原因（承前）　理科大學地質學生　脇水鉄五郎君

●政治地理篇（第五回）　酒井恒三郎君

●水の蒸發及凝縮　理科大學簡易學生　石川一男君

◉雜錄

●對馬の新温泉●壹岐の温泉●人と船の化石●西伯利亞煤炭●長崎の磁鉄鑛●ヘルマンベルグハウス氏沒す●地球引力の强弱●獨逸の人口●日本紳士の欠點●化石熱心家●西伯利亞及滿州鉄道●亞弗利加の人口●本年度地質詳査圖幅●地產要覽圖及說明書配布●近成北海道實測地形圖の私評

◉地學會記事

●會員の移動

發行所　神田裏神保町七番地　地學會事務所

賣捌所　東京神田裏神保町　敬業社

同　日本橋通三丁目　丸善書店

第六卷第六十二號

東京人類學會雜誌

○記事、

○論說及報告

ロンドン通信（圖入）　坪井正五郎

日本の磨製石鏃トグリーンランドの磨製石鏃（圖入）　坪井正五郎

我が書棚　坪井正五郎

飛驒國石世期の遺蹟（圖入）　田中正太郎

羽前國石世期の遺蹟（圖入）　羽柴雄輔

坪井君の曲玉定義に就き尙默することを得ず　羽柴雄輔

德島近傍七ッ山及丈六山ノ石棺（圖入）　香川槐三

日本の人口に就きて　金田楢太郎

沖繩縣諸島結繩計標考（續キ）附圖解　田代安定

○雜錄、「タフ」ノ事、奧羽人類學會記事

每月末一回發兌一册定價金拾錢郵稅壹錢六册前金郵稅共六拾壹錢郵券代用ハ壹割增

●發賣元　東京本郷六丁目　哲學書院

目錄

カハノリ(第廿五版) 理學博士 矢田部良吉…187
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ) 澤田駒次郎…189
こんぶの蕃殖に就テ 理學士 岡村金太郎…193
新稱日本地衣 理學士 三好學…197
植物生理學輓近ノ一大問題 池野成一郎…200
花ノ色香(第五十一號ノ續キ) 堀正太郎…206

雜錄

雌雄異株植物ノ雌雄數ノ比例—さればえゝがしら—獨和對譯植物名彙—地衣体ノ分裂……209-213
新刊書類……213
巴里理科大學ノ懸賞問題……214

CONTENTS.

A New Japanese Prasiola (*In English.*) By Prof. R. YATABE, Sc.D. 187
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopæa By Mr. K. SAWADA. 189
On the Reproduction of Laminaria Japonica, Aresch.? By Mr. K. OKAMURA. 193
New Japanese Lichens. By Mr. M. MIYOSHI. 197
A Recent Problem in Vegetable Physiology. By S. IKENO 200
Colours and Scents of Flowers. (*Continued from p. 134.*) By Mr. S. HORI . . 206
Miscellaneous: 209-216
Relative number of male and female individuals in Diœcious Plants.—Lomaria Spicant, Desv. Var?—Common Names of Plants in German and Japanese.—Dissociation of a Lichen.
New Literature.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

版權所有

明治廿四年六月九日印刷
明治廿四年六月十日出版

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉
東京神田區小川町一番地

印刷者 滋賀縣士族 熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地

發行所 東京植物學會編輯所
東京神田區裏神保町一番地

●敬業社發兌書目

農科大學教授
理學士
ドクトル石川千代松君著

進化新論

博士おいすまん氏肖像挿入紙數三百五十七頁挿圖一百六十八個定價金一圓七十五錢郵稅十錢

全一册

本書ハ我國進化學家ノ泰斗タル理學士ドクトル石川千代松先生ノ著サレタルモノナリ先生嘗テ獨逸國ニ遊學スルヤ此學ヲ以テ世上ニ顯著ナル博士おいすまん氏ノ助教トナリ共ニ大ヒニ進化ノ理ヲ攻究シ歸朝後理科大學農科大學哲學館等ニ於テ親シク其眞理ヲ講義セラル今ヤ之ヲ上梓セラル丶ニ當リ普通讀者ノ爲メヲ測リ始メニ動植物ノ大意ヲ掲ケ大ニ進化之歷史ヲ述べ人爲陶汰、自然陶汰、雌雄陶汰等ヲ明白簡易ニ說明シ生物變異ノ原理遺傳ノ玄論等ノ難問題ニ入リ氏ノ研究ニ係ル所ノ事實ヲモ多ク掲載シテ之ヲ論究シ終リニ人類ノ自然ニ對スル位置ヲ論セラル全編務メテ進化ノ原理ヲ說キ之ヲ學ブ者ヲシテ覺エズ佳境ニ入ラシム人智日進列國競爭ノ今日ニ於テ學士、學生生徒諸子ハ勿論苟モ意ヲ國家ノ盛衰ニ注クノ士ハ坐右缺ク可ラサルノ良書ナリ

理學士平賀義美先生口授
關口寬一郎君
平尾鍈三郎君 編纂

應用化學

全十册
第一卷發兌定價金三十錢
郵稅二錢（以下續出）

本書ハ理學士平賀義美氏ガ曾テ工科大學教授タラレシ時東京職工學校ニ於化學工藝科生徒ニ口授セラレシ應用化學大意ニ基キ同師ノ門生タル關口寬一郎平尾鍈三郎兩氏ガ編輯增補セラレタルモノニシテ第一卷ニハ斯學ノ要領燃燒論燃料及爐造法ノ四章ヲ紀述シ行文平易ニシテ意義詳密實ニ斯學ヲ研究スルモノ丶一日モ缺ク可カラザル寶典ナリ抑本邦製造方法ニ關スル書籍其類少カラズト雖モ概ネ杜撰ニメ工場ノ分量覺書タルニ過キズ未ダ此書ノ如ク深遠ナル化學上ノ源理ヨリ論述シタルモノアルヲ聞カズ是レ特ニ弊社カ兩氏ニ請テ爰ニ出版ノ榮ヲ得タル所以ナリ第一卷ニハ單ニ斯學ノ誘導編ナリト雖モ第貳卷以下諸般製造方法ノ本論ニ入ルニ及ンテハ此書ノ價値弊社カ贅言ヲ待タズシテ明カナルヘシ

農學士菊池熊太郎先生編

二版 物理學教科書

全一册 定價金一圓 郵稅金十錢

曩キニ本書ヲ發兌スルヤ直ニ各府縣公私學校ニ於テ盛ンニ御採用相成リ忽ニシテ品切ヲ告ケシモ今ヤ第二版ヲ發兌セリ而テ本版ニ於テハ初版ノ誤字ヲ訂正シ且ツ改正增補スル所尠カラズ即チ紙數ニ於テ八十二頁挿圖ニ於テ四十七個ノ增加ヲナシ且ツ美麗堅固ナル製本ヲ以テ整備仕候間陸續御注文ノ程奉希望候

理學士富士谷孝雄先生編

中等教育 日本地理教科書

全二册上卷發兌定價金五十五錢郵稅六錢下卷（六月下旬發行）

富士谷先生の地理學に精邃なるハ世の業已に熟知する所なり本書ハ先生が多年研究の學理と數年經歷の實檢とを根據とし廣く農工商の現況に說き及はしたる斷新完璧の良著にして其尋常中學并師範學校其他同程度の諸學校の教科書に適當なるは固より論を俟たず苟も日本地理の眞相を識らんと欲するの輩は宜しく一閱す可きの價値あるを信ずるなり弊舖幸に請て之を發行するの榮を得たり仰き願くば大方の諸君よ速に一書を購讀して我帝國今日の形勢を覺知せられんを

敬業社新刊廣告

理學士三好學先生編

●普通植物學教科書（全一册定價五十錢郵稅四錢）

本書ハ汎ク普通教育ノ諸學校ニ於テ教授スヘキ植物學ノ教科書トシテ、殊ニ編纂セラレタルモノナリ本書ハ植物學上普通主要ノ智識ヲ得セシムルモノニシテ、即チ植物形態學、植物構造學、植物生理學、植物分類學（有花、無花共）ノ要領ヲ說キ且ツ卷尾ニハ植物解剖實驗記載法ヲ記セリ、本書ハ先生ガ曩ニ編纂セラレタル、中等教育植物學教科書（上下二卷）ノ楷梯トシテ用フヘキモノナリ

理學士三好學先生編

●中等教育植物學教科書（上卷二版定價金壹圓（郵稅八錢）下卷二版定價壹圓（郵稅八錢））

本書下卷品切之處訂正ノ上再版セリ此段廣告ス

◉●◉每月一回（十一日）發行◉●◉

（●速記彙報●）

正價一册八錢 ● 十二册前金九拾錢 ● 全國無遞送料

速記彙報第廿九册には

金子貴族院書記官長の速記者に對する演說速記全文

中村文學**博士**の讀速記錄有感と題せる詩

速記者學力論

泰西速記大家列傳

雲州の方言其他速記社會の**記事**異聞を網羅掲載す

東京神田區裏神保町一番地

速記彙報發行所

牧野富太郎君著

●日本植物志圖篇

Illustrations of the Flora of Japan, to serve as an Atlas to the Nippon-Shokubutsushi.

●第八集發兌（每集定價金二十錢郵稅二錢）

本集以下每月五日發行

帝國大學理科大學植物學教授松村先生嘗テ本書ヲ批評シテ曰ヘリ「今日只今日本帝國內ニ本邦植物志圖篇ヲ著スヘキ人ハ牧野富太郎氏一人アルノミ――今ヨリ後絶ヘズ止マズ續篇ヲ出版シテ本邦所產ノ植物ヲ全璧センノ責任ヲ氏ニ負ハシメントス」ト著者ハ實ニ日本植物志（Flora of Japan）ノ未ダ備ラザルヲ遺憾ナリトシ爲ニ本書ヲ出版セリ而シテ其圖ノ精巧寫生ノ正確解剖ノ詳密印刷（石版）ノ鮮美ナル發刊以來大ニ內外人ノ好評ヲ博シ今又世ノ必用ニ迫ラレ毎月一回之ヲ發兌スルニ至レリ殊ニ日本植物調查ニ從事セル同君ノ探究記述セラレタル新種ハ新「ラテン」名ヲ附シ一ニ此書ニ由テ之ヲ世ニ公ニスルヲ以テ書中始メテ其學名ヲ見ル者多シ故ニ苟モ日本植物ニ就テ知ラント欲スルノ士ハ必ズ之ヲ坐右ニ備フ可キナリ曾テ英國 Kew 皇立植物園ノ學士ハ大ニ之ヲ賞賛シ出版ノ絶エザランヿヲ望メリ又露國大學ノ植物大家ハ著者ニ贈ルニ下ノ言ヲ以テシタリ曰ク　Your illustrations have very agreeably surprised me by the excellence of the figures, the detailed and very correct and clear analysis, which brings your figures, up to the height of the best European publications, ト亦以テ本書ノ如何ヲ想像スルニ足ル而シテ毎集六七八葉ノ石版密圖ヲ挿入シアルニ關ラズ其價ノ殊ニ廉ナルハ著者自ラ寫生且版下ノ勞ヲ執ラレ之ヲ畫工ノ手ニ委セザルニ由ルナリ

發兌書肆　東京神田區裏神保町一番地　**敬業社**

○東洋學藝雜誌　第百十五號

●故福富文學士　杉浦重剛君○論説●遺傳の説　農科大學教授石川千代松君●腦病の話（前號の續）醫科大學教授弘田長君●何をか道德と云ふ　山口高等中學校教授谷本富君●神田乃武先生のエジプト象形文字解釋に付きて疑を記す　大學院坪井正五郎君●生死の話　醫科大學教授博士大澤謙二君●雜錄　岡崎奇八中條勇次郎氏の發明品に關する話　文學博士末松謙澄君●雜報十二件●批評　日本文學史贅評　春風園隱士君●學會記事六件●應問　アヴォガトロノ法則ニ付テ○向斜層ト背斜層　石川一男君●明治二十四年四月二十五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十頁木版挿圖十數個●定價壹册金拾錢○六册前金（郵稅共）金五十四錢○拾貳册前金（郵稅共）金壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

○動物學雜誌　第三十號明治廿四年四月十五日發行

●一部金十錢郵稅一錢、六部前金郵稅共金六十六錢

●日本鳥類ノ分布ニ付キ　飯島魁君●理科大學標本日本頭脚類目錄（第五回）池田作次郎君●遺傳（承前）石川千代松君●動物解剖手引草（鳥類ノ部）岩川友太郎君●普通動物學講義（第二十二）箕作佳吉君●雜報●北海道產鮭族●北海道ノ魚類●地名ト魚類●しゆしやも●北海道產あわび●原形質運動ノ實驗的類似●同溫度によれる蟻の單爲生殖●アナビヲーゼ●貝殼中ノ貝●小昆蟲ヲ採集スル簡便法●蠅ノ恐ルヘキヿ●セームボーム氏著日本帝國ノ鳥●電信柱ト動物●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）●東京動物學會記事

發行所　東京神田區裏神保町一番地　敬業社

一本會ヘ御投寄ノ論説雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御屆可申候

明治廿四年五月九日印刷
明治廿四年五月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地

印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地

發行所　東京植物學會編輯所
東京神田區裏神保町壹番地

賣捌所　敬業社
同所

同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目　錄

こわついた(英文)　理學博士 矢田部良吉…149
ばんだいのきのりニ就テ(獨文)　三好學…152
秩父諸峯及ビ筑波山植物採集略記(圖入)　全…………153
日本產櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ズ(前號ノ續キ)　松村任三…158
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ)　澤田駒次郎…160
佐渡植物一班(前號ノ續キ)　大久保三郎…163
日本植物報知(第十三)　牧野富太郎…165
日本植物家列傳　山本賴輔 167

雜　錄

總房地方植物採集—鎌倉及ビ江ノ島近傍ノ植物—植物性嗜好品ノ顯微鏡的化學—うちはどころノ產地—日向國都農產ノ海苔—すみれノ香氣—白花ノさくらさう—ぼうらん並ニなんかくんノ產地—獨和對譯植物名彙(前號ノ續)—マキシモウ井グツ氏……………135—148
新刋植物書……………185
質問……………186

CONTENTS.

Acrostichum tosaense, sp. nov. (*In English.*) By R. YATABE, Sc.D 149
Eine Essbare Japanische Flechte (*Deutsch*). Von. Herrn Miyoshi. 152
A Botanical Tour to Chichibu and Mt. Tsukuba. By Mr. MIYOSHI. . . . 153
Japanese Species of Quercus (*Continued from p. 124.*) By Prof. J. MATSUMURA. 158
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa (*Continued from p. 120.*) By Mr. K. SAWADA. 160
Plants from Sado. By Mr. ŌKUBO. 163
Notes on Japanese Plants.—Part XIII. By T. MAKINO. 165
Biographical Sketch of Japanese Botanists By Mr. Y. YAMAMOTO 167
Miscellaneous: . . . . 171—184
Plants from Awa and Kamazura.—Notes on the Plants of Kamakura, Enoshima, and Vicinities.—Herrn Hans Molisch, Grundriss einer Histochemie der pflanzlichen Genussmittel.—Localities of Dioscorea nipponicus.—Gloeopeltis.—Fragrance of Viola.—White flowered Primula cortusoides, L.—Luisia teres,—Common Names of Plants in German and Japanese.—Prof. C. Maximowicz.
New literature.
Queries.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the

TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,

Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

東洋學藝雜誌 第百拾四號

●故巖谷工學博士　文學博士加藤弘之君●論說●寫眞の手續を述べ併せて其學理を說く　理學士石川巖君●腦病の話　醫科大學敎授弘田長君●自然ニ於ケル人類ノ地位（圖入）　農科大學敎授石川千代松君●フワン、デル、ワールスの等熱式其由來幷に應用の概略（圖入）前號の續　理學士池田菊苗君●敎育と學問　理科大學敎授博士矢田部良吉君●寄書　日本汽車ノ速力　ＳＦ君●雜報　十二件●學會記事　○史學會○工學會○東京人類學會○東京化學會●質問　二十件

●總目錄（第一號至第九十九號）ハ第百號ニアリ

●明治廿四年三月廿五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十二頁丁數外一枚木版插圖十數個

●定價一冊金拾錢○六冊前金（郵稅共）金五拾四錢○十二冊前金（郵稅共）金壹圓○八錢

發行所　東京神田區裏神保町　東洋學藝社

動物學雜誌 第廿九號

明治廿四年三月十五日發行

●一部金拾錢郵稅金一錢六冊前金郵稅共金六十六錢●ゆふれつくらげ（第二版）岸上鎌吉君●日本產蝶類（第四回）石川千代松君●動物解剖手引草（承前）岩川友太郎君●冬季六足蟲採集の必要名和靖君●動物彩色の起源及び其効用（承前）宍戸一郎君●普通動物學講義第二十一箕作佳吉君●遺傳（承前）●日本產ノ蝸牛科（第四回）飯島魁君●寄書●動物聲音考第十五（猴、羊蝙蝠、）野村彥太郎君甕牖雜記（水母目蝦瑣蛣腹蟹、鰹魚ハ火光ヲ忌ム）上田英吉君●雜報●甲殼類ト蜘蛛類ノ頭胸部ハ相同ナルカ●Rhabdnema nigrovenosm ノ內皮ニ於ケル核ノ直接分裂●Ascidians Worms, Echinoderms 等ノ幼蟲飼養法●とんぼトか●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）●東京動物學會記事

發行所　東京神田區裏神保町　**敬業社**

一本會へ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會へ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一冊金拾二錢○六冊前金七十二錢○拾貳冊前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹冊十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局へ宛御取組相成度候○第五條　御特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿四年四月九日印刷
明治廿四年四月十日出版

版權所有

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地
印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地
發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地
賣捌所　敬業社
同所
同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目録

アツイタ第廿三版　理學博士　矢田部良吉…109
佐渡植物一班(前號ノ續キ)　大久保三郎…112
日本藥局方植物篇(前號ノ續キ)　澤田駒次郎…114
日本產櫟槠柯ノ諸種ヲ論ズ(前號ノ續キ)　松村任三…121
日本植物報知(第十二)　牧野富太郎…124
本草綱目ニ所謂波羅蜜トハ何ゾヤ　松村任三…126
花ノ色香　堀正太郎…130

雜録

めだけノ赤衣……135
獨和對譯植物名……135

CONTENTS.

A New Japanese Acrostichum. (*In English.*)By Prof. R. Yatabe, Sc.D. . 109
Plants from Sado. By Mr. Ōkubo. . . . 112
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa (*Continued from p. 49.*) By Mr. K. Sawada. . . . 114
Japanese Species of Quercus (*Continued from p. 77.*) By Prof. J. Matsumura. 121
Notes on Japanese Plants.—Part XII. By T. Makino. . . . 124
On the Plant called "Po-lo-mih" in the Pentsao kau mou. By Prof. J. Matsumura. . . . 126
Colours and Scents of Flowers. (*Continued from Vol. 5, No. 46.*) By Mr. S. Hori. . . . 130
Miscellaneous: . . . 135-148
Puccinia corticoides, Berk. et Br.
Common Names of Plants in German and Japanese.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

動物學雜誌第廿八號目錄

壹冊金拾錢郵稅壹錢六冊
前金六十六錢 明治廿四
年二月十五日發行

○備前くらげ　岸上鎌吉
○日本產蝶類（第二回）　石川千代松
○日本產ノ蝸牛科（第三回）　飯島魁
○理科大學標本日本頭脚類目錄（第四回）　池田作次郎
○海產動物保存法（第四回）　岳淺治郎
○動物彩色の起源及び効用（承前）　宍戸一郎
○普通動物學講義（承前）　箕作佳吉
○東京市民ノ食膳ニ供スル動物ニ就テ　波江元吉
○寄書
●動物聲音考第十四（鹿、豚）　野村彦太朗
●甕牖雜記（承前）
○牡蠣ノ中毒
○とびはぜ
○かからせゑび
○雜錄
●とんぼトか●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）●三重縣下ノ
永良部鰻●十二月ノ蝶●白魚トぎやふノ漁獲●生物學
ト教育令●十二月中蝶の捕獲●ブラキストン線●うな
ぎノ秀物●稀類亡滅の兆●札幌博物學會●日本重要水
産動植物圖●進化新論●單細胞蟲ノ排泄器●とうきん
●鳥類の体重ト腦重ノ割合●外國ヨリ來狀
○東京動物學會記事

發行所 神田區裏神保町一番地 敬業社

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一冊金拾二錢○六冊前金七十二錢○拾貳冊前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹冊十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絕ス○第四條郵便為換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御屆可申候

明治廿四年三月九日印刷
明治廿四年三月十日出版
編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地
印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地
發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地
賣捌所　同所　敬業社
同　東京日本橋通三丁目　丸善書店

版權所有

遞信省認可

目　録

ヒロハノヌマゼリ(新種)第廿二版　理學博士　矢田部良吉…73
日本產櫟槲櫧柯ノ諸種ヲ論ス(前號ノ續キ)　松村任三…74
佐渡植物一班(前號ノ續キ)　大久保三郎…78
日本藥局植物篇(前號ノ續キ)　澤田駒次郎…80
信州戸隱山採集植物目錄　三好學…85
Lycopodiumノ胞子ノ萌發　全…………89
日本植物家列傳　山本賴輔…90
植物界ノ美妙　堀正太郎…92
植物學解剖學獨案內(第五)　池野成一郎…96

雜　録

菌類ノ誘導的性質 …………………………………… 98
もくせい(巖桂)結實ノ說(圖入リ) …………………… 98
Woodsia insularis, Hance 今尙箱根ニ產ス ……………100
おにく ……………………………………………………101
苔ノ莖ニ對スル光リト重力ノ作用 ……………………102
ゑんごさく科ノ乳管 ……………………………………103
近百年間植物學ノ進步 …………………………………104
日本博物學年表 …………………………………………107

CONTENTS.

A New Japanese Sium. By Prof. R. YATABE, Sc.D. 73
Japanese Species of Quercus (*Continued from p. 57.*) By Prof. T. MATSUMURA. 74
Plants from Sado. By Mr. ŌKUBO. 78
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa (*Continued from p. 48.*) By Mr. K. SAWADA. 80
List of Plants Collected on M^{t}. Togakushi, By Mr. M. MIYOSHI. 85
Germination of Lycopodium. By Mr. M. MIYOSHI. 89
Biographical Sketch of Botanists.—Part III. By Mr. Y. YAMAMOTO. . . 90
Wonders in Vegatable Worlds. By. Mr. S. HORI. 92
Gude to Anatomical Work in Botany.—Part V. By Mr. S. IKENO. . . . 96
Miscellaneous: 98-107

Attractive Characters in Fungi.—Fruit of Osmanthus fragrans, Lour.—Woodsia insularis, Hance, in Hakone —Boschniakia glabra.—Relation of Light and Gravity to the Stems of Mosses.—Lactiferous Apparatus of Fumariaceæ.—Progress of Botany.—" Chronological Table of Japanese Natural History."

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

動物學雜誌第廿七號目錄

明治廿四年一月十五日發兌一部金拾錢郵稅壹錢

○緒言○日本產蝶類 石川千代松○日本產ノ蝸牛科（第二回）飯島魁○相州三浦三崎近傍に於て獲たる Hydroidea（承前）稻葉昌丸○海產動物保存法（第三回）丘淺治郎○理科大學標本日本頭脚類目錄（第三回）池田作次郎○動物解剖手引草（承前）岩川友太郎○動物彩色の起源及効用（承前）穴戶一郎○普通動物學講義第拾九 箕作佳吉○遺傳（ばいすまん氏演說）石川千代松譯○寄書●甕牖雜記（鯨ノ噴潮及ヒ拜風○鱣魚）上田英吉○雜錄●佐太神社の龍蛇○同蛇に就て●ダーウヰン氏ノ自傳（承前）○東京動物學會記事

神田區裏神保町壹番地
發行所 敬業社

東洋學藝雜誌 第百拾二號

●論說○天氣圖ニ就テ 理學士中村精男君○人ノ感覺ヲ測定スル法 文學士井上圓了君○教育ト疾病トノ關係 醫科大學教授博士佐々木政吉君○ファン、デル、ヴールスの等熱式其由來并に應用の概略 理學士池田菊苗君○ニウジーランドの舌出し彫り 理學士坪井正五郎君○採決器ニ就テ 文科大學教授元良勇次郎君

●雜錄 コフ氏結核新治療法ノ發明ニ就テ 醫科大學教授博士三宅秀君●雜報 十一件●學會記事 東京地學協會○東京人類學會○史學會○工學會○東京化學會

●總目錄（第一號至九十九號）ハ第百號ニアリ

●明治二十四年一月廿五日發兌○表紙廣告ヲ除キ五十八頁石版圖二面木版插圖數十個

●本誌定價 一冊金拾錢 六冊前金（郵稅共）五十四錢 十二冊前金（郵稅共）壹圓○八錢

發行所 東京神田區裏神保町 東洋學藝社

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌毎月一回發兌一冊金拾二錢○六冊前金七十二錢○拾貳冊前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條 代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條 前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條 郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條 郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條 特ニ一冊限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御居可申候

明治廿四年二月九日印刷
明治廿四年二月十日出版

版權所有

編輯兼發行者 東京府平民 井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地
印刷者 滋賀縣士族 熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地
發行所 東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地
賣捌所 同所 敬業社
同 丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目　　録

おほくぼしだ（新種）第廿一版　理學博士　矢田部良吉…35
佐渡植物一斑　大久保三郎…38
日本藥局植物篇（前號ノ續）　會員　澤田駒次郎…44
日光山中ノ地衣植物　三好學…48
日本植物科屬篇（第四）　牧野富太郎…50
日本植物報知（第十一）　仝…………52
日本産櫟檞櫧柯ノ諸種ヲ論ス（前號ノ續キ）　松村任三…54
日本植物家列傳（第二）　理科大學簡易科　山本頼輔…57

雜　　録

菌類ニ於テ動物ヲ誘導スル性質ノ價直……58
結晶セザル地衣色素……61
硅藻ノ防禦機關……61
Eriodendron anfractuosum……62
雄蘂及ビ雌蘂ノ運動……62
植物葉中澱粉ノ有無檢察法……64
伊豆國ニセ採集セルしだ類ノ名稱……64
新刊植物書……67
投書……68
寄贈書目……72
中國植物目録……3-4

CONTENTS.

A New Japanese Polypodium (*in English.*) By Prof. R. Yatabe, Sc.D. (Plate XXI.) 35
Plants from Sado. By Mr. Ōkubo. 38
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa (*Continued from p. 12.*) By Mr. K. Sawada. 44
Lichenes from Nikkō. By Mr. M. Miyoshi. 48
Orders and Genera of Japanese Plants Part IV. By Mr. T. Makino. . . . 50
Notes on Japanese Plants.—Part XI. By T. Makino. 52
Japanese species of Quercus. By Prof. J. Matsumura. 54
Biography of Japanese Botanists.—Part II. By Mr. Y. Yamamoto. . . . 57
Miscellaneous: 58-68
Mr. ~~Nr.~~ C. R. Stration's Letter to the "Nature" on the Attractive characters in Fungi. Noncryptalizable Color~~a~~ing Matters of Lichenes.—Movements of Pistils and Stamens.—Method of Showing the Presence of Starch in Leaves.—List of Plants collected in the Province of Izu.—New Publications. Communications:—
Appendix:—
List of the Plants of Chiūgoku (*continued from Vol. IV. p. 2.*) Sup. 3-4

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

よ之部

よこ濱、神戸、長崎ノ地衣　二七〇

ら之部

ライケン通說　二五。五九。九一。一四二。一八七。二一三
らん（襴）科菌分類ノ仕方　八一。一六五。二五五。二七八

り之部

りやう毛（信州）植物採集雜記　三二五
りんねうす略傳　一

わ之部

わかめノ生殖法　四五
わひだたけ　三八五

へ之部
へつかにがき　八九
ほ之部
ぼう縣私立教育會雜誌　三四九
ほろばしほで　二三
ほろばのいたちしだ　四五四
ほろばのおさこよもぎ　三三二
ぼたもげさんはいぶりごす　三〇二
ほん草家小野職愨氏逝　四二七
ほん草家西村翁沒ス　一二〇
ほん邦產かぢめ屬ノ種類及ヒ蕃殖　二四二。二七五
ほん邦產ちゝみ科菌ニ就テ　三八〇
ほん邦ノ理學　三四四
ほん邦理學ノ氣運　二三一
ま之部
まつ島陸產植物一斑　一六〇
まつたく葉柄ニ隱蔽セラレタル芽ヲ有スル日本植物　二六六
まつノ壽命　一一五
まろばさんきらい　二四
まろばれこのめさう　一三五
まろばっゆくさノ地中結實　二三五
まろばのさはたうがらし　一七三
まるばのまんれんぐさ　五八
み之部
みさとのき　八八
みづなゝこすげ　二二九
みつばしようま　四一四
み重博物學會　三八四
みや城農學校　一六一
みやまがんぴ　一七三
みやましようま　四一五
みやましゝらんニ就テ（しゝらん並ニ）　九三
みやまれこのめさう　一三五
む之部
むかごれこのめさう　一九〇
むじなもノ冬期經過　四二五
め之部
めあぜがやつり　四一六
めのまんれんぐさ　五六
めやぶまと　一七三
も之部
もえぎすげ　二二九
や之部
やなぎたで　四一六
やなぎぬかぼ　四一六
やなぎすぶた　一七三
やのれぐさ　四一六
やまいばら　八八
やまさぎさう　四五三
やまぢわう　四五二
やまれこのめさう　一三五
やま本賴輔先生ノ植物略史ニ就テ　四六六
やへむぐらノ效用　一五二
ゆ之部
ゆう蕊雌蕋觸感　二六六
ゆきのしたノ雄蕊ニ就テ　二二七

ぬ之部
ぬかいたちしだ　四五三
ぬかぼたで　四一六
ぬまはりゐ　四一六
ね之部
ねこのめさう　一三五
ねむりの松　三四四
の之部
のうぜんかづらノ柱頭閉合　三〇一
のくわんぞう　一七三
のぢこめ　四一五
のぢぎく　四五一
は之部
はいちござゝ　九〇
はこねぎく　一五一
はこ根植物錄　三十五號ノ24。卅六號ノ26。卅八號ノ26
はこ根植物錄ニ加フ　一六〇
はすのはいちごノ産地　二六八。三八五
はつだけ及ビあかはつニ就テ　三九二
はト緯度ノ關係　三八三
はなたで　四一五
はなかたばみ　四一五
はなノ色香　三七七。四一二。四五五
はまきけまん　一五一
はまくわがた　一七三
はませんだん　一五一
はまちん丁族ノ説　五
はまむぐら　四五一
はまはゝきぎ　一七三
はまふだんさう　二四
はるかや　二三〇
はるたで　四五二
はやましだ　四五三
ひ之部
ひえすげ　二二九
ひかげみづ　一七三
ひしもどき　三〇三
ひしもどきノ發生　一七四
ひながやつり　二二九
ひなざくら　三五七
ひなさゝ　二三〇
ひなしやじん　一五一
ひなすげ　二二九
ひなのしやくぢよう　二三
ひめあかばな　一五一
ひめねこのめさう　一三五
ひめみかんさう　一七三
ひめれんげ　五八
ひらはりたけ　三八五
ひるむしろニ二種アリ（東京近郊ノ）　三〇二
びろうどきび　二三〇
びろうどたけ　三八六
ひろはべにしだ　四五三
Pinguicula ramosa. ニ就テ　三一五
ふ之部
ふくわうさう　四五一
ふく岡尋常師範學校植物園　三八四
ふん中ニアル種子ノ散布　二三〇

たい西植物學者諸氏ニ告グ　三五五
たい平洋諸島經歷報告　一二五。一六八。二〇一。二四四
たい類一斑　二〇八。二四一
たう日ノ植物採集　一一〇
たうもろこしのくろぼ病　三八七
た代氏歸朝ス　一一八
た代氏ノ羊齒名稱　二九九
たにがはすげ　二二九
たぢでんだ　四五三
たちすげ　二二九
たかれますぐさ　二二九
たか尾山ノ草木植物　三〇三
たちがしは　一五一

ち之部

ち衣雜説　四〇四
ちう國植物ノ目錄　（四十四号）I（四十六号）3
ち島音信　三八三
ち方教員　一九五
ち方植物熱心家ニ望ム　一一一
ち方植物學有志者ニ望ム　一五五
ち方ノ植物學教員ニ望ム　三九七

つ之部

つれのちやだいごけ　三八七
つりしゆすらん　三八五
つるがしは　一五二
つるれこのめさう　一三五
つれさぎさう　四五三

て之部

てい國大學植物園　二三一
てんぐさノ新應用　一五七
てん然教場　一九六

と之部

ときほこり　九〇
とう京市街綠日ノ採集　二三一
と田ノ原　四二九
と佐ニ於テ發見シタル新屬ノらん科植物　一九七
と佐國產羊齒科植物目錄增補　四二三
ともしりさう　一一
とらのをすゞかけ　一七三

な之部

ながばやのれぐさ　四一六
なしノべつかう病害菌　三八七
なんきんまめノ地下結實　三五三

に之部

に本藥局方植物篇　二六。五一。九四。一三一。一七五。二一六。二五八。二八二。三二一。三六六。四〇六。四五九
に本槭樹屬　二八六
に本菌類學大意　三三三
につ光街道杉並木　三八二
に本植物新稱　一〇。四八。一三五。一九〇。三三二
に本植物報知　二二。五五。八六。一五〇。一七二。二二八。四一四
に本植物ニ關スル西洋新刊書　一一五
に本植物科屬篇　四一七。四四四
に本植物學略史　四二二
に本新種植物二種　三五六
に本植物家列傳　四六三
に本ノ櫻草十二種　三一〇
に本ノ蘭族植物　一一四
にんじんニ就テ　一九三

しよく物學ニ關スル講談　三五〇
しよく物解剖　一一九
しよく物解剖ノ書籍及論說　一九九
しよく物解剖學獨案內　二六二。二八七。三二七。三七六。四〇九。四五四。
しよく物腊葉　一一一
しよく物採集旅行雜記（信州兩毛）　三二五。三七一
しよく物(普通)學講義　六五。八五。一七九
しよく物細胞學講義(高等教育)　八。四三。八四。一三四
しよく物生殖論　一三
しよく物書ト植物學實驗　一一九
しよく物名ハ以テ學者ノ學力ヲ測定スル「セオドライト」タル能ハズ　三〇六
しよく物ニ關スルダーウヰン氏ノ著書　四一
しよく物ノ方言　一〇九
しよく物ノ意義　一一七
しよく物ノ根絕シ　一一三
しよく物病理學講義　三〇。六六。一〇〇。一四七。一八〇。二二〇。二五二。二九三。三二九
しよく物標品交換　一一二
しよく物分類學ノ效用　一五二
しよく物ノ防禦機關ヲ論ズ　六二
しよく用地衣　四四一
しようろ　三八六
しられあざみ　三三三
しろいれのひげ　一七四
しろいれなづな　四五一
しろやましだ　三〇〇
しろがや　四一六
しろれこのめさう　一三五
しろばなのこぎりさう　三三二
しろにがな　三三三
しん葉樹ニ濶葉樹　四一
しん撰ノ隱花植物書　一五五
しん刊書批評　三一〇
しん刊植物學書類　一六一。一九七。二三三。三八九
しん刊植物學教科書　一二〇
しん刊ノ隱花植物書ヲ讀ム　一四四
しん州御嶽ニテ地衣植物採集ノ記　一三五
しん州兩毛植物採集旅行雜記　三二五。三七一
じん代綿ニ就キテ　二六七
しん形花族識別法　二九六

す之部

すい草ノ比較解剖　一四。一〇六
すゝひさつば　二九九
すゞめのたうがらし　二二
すなぢまめ　九〇
すぶた　一七三
すもゝノふくろみ病害菌　三八七

せ之部

せい物學誤解時代　一五八
せい洋古今植物學大家略傳　一五八
せき色苔ノ種屬　一六一
せんにんも　一七四

そ之部

そなれむぐら　八九

た之部

たい葉地衣　一五五
だい三勸業博覽會出品植物腊葉　一九二

くろほしくさ　一七四
くはあかさび病ノ屬名　三八一
くわ名及ビ屬名ノ語言　一一。九八。一四一。二二五
くはもんぱ病害菌　三八七
くはよごれば病害菌　三八六
Glossoconia ussuriensis, Rupr. et Maxim.　三〇二

け之部

げん微劣等植物運動ノ發見　二三四

こ之部

こあぜてんつき　二二九
こきつれのぼたん　四一四
こ耳草屬花雄蘂ノ運動　二六九
こさんばさう　四五二
こばのねこのめさう　一三五
こふうろ　一五一
こふぢうつぎ　一五二
ごまくさ　五五
こみやまくさすげ　二二九
こもちまんねんぐさ　五七
こみねかへで　四五一
こやなぎすぶた　四一六

さ之部

さい新ノ植物解剖學一班　二三七
さじばも（これはさゝばもノ誤リ）　一七四
さう朮ノ學名ニ就テ　四三五
さう(桑)樹ニ着生スル地衣植物　一二三
さう木圖說ニ Polygonum sagittatum, L. ノ圖ナシ　一九〇
さう木圖說ニ圖セル いらくさハ Urtica Thunbergiana, Sieb. et Zucc. ニ非ズ　四六七
さかきニ就テ　四二七
さぎごけノ花色　一五五
さぎごけノ香氣　二六八
さくらさうノ一種ささどくらニ就テ　三九一
さじらん　四五四
さなへたで　四五二
さはひよどり　八八
さはねこのめさう　一三五
さっくす氏ノ顯微鏡論　七六
さっくす氏ノ植物學史　二六九
さるのこしかけ　三八五

し之部

し賀縣私立教育會雜誌　三五〇
しゝらん並ニみやましゝらんニ就テ述ブ　九三
し然分類法　三〇九
しろくさ　一七二
したきさう　二四
してうげ　三五六
し丁香屬　二七二
しほかぜてんつき　四五三
しばくされむ　九〇
しほ釜神社ノ神木　一六一
しまつり　三四五
しむらにんじんノ產地　二三六
しよく蟲植物　四〇
しよく物園　二三三
しよく物學入門　二三三
しよく物學ヲ修ムル者ハ宜シク獨逸語ヲ學ブベシ　三〇七
しよく物學研究生　四一

え之部

えふ柄ニ隱蔽セル芽　二三〇
えい和對譯植物俗名　七九。一二一。一六三。一九八。二三六。二七三。三一二。三五一。三八七。四三〇。四六八。
えぞすずしろ　一一
えぞのじやにんじん　一一
えぞやまぶきしようま　一〇

を、お之部

をう洲大學博物場の腊葉　一九五
をきざりすろうさ　四一五
をかのり　四一五
おながうらぼし　四五四
をのへやなぎ　四一六
をのまんねんぐさ　五八
おほはまぐるま　八七
おほにがな　四五一
おほねばりたで　一七三
おほゝしくさ　一七四
おほはりゐ　二二九
おほばのさんばさう　四五二
おほばのあまくさしだ　四五三
おほふじしだ　四五四
おほがんくび　三三二
おほ分縣栽培の禾本に付て　四二四
おほちどめ　四一五
おほはりゐ　二二九
おほやまさぎさう　四五二
おにがやつり　二二九
をげてうじ　一七三

か之部

かご島縣中之島の植物　三五九。三九九
かい藻採集　一六一
かい藻採集法　一五六
か期講義　一六九
かく土の著述　四一
かな川縣採集植物　七七
かにつりすゝき　二三〇
からくさしだ　五八
かうたけ　三八六
かうやまきノ自生地　三八四

き之部

きうり葉病菌の種名ニ就テ　三八
きざみ莨ニ薰リヲ付スルニ用フル植物　一五二
きつねのゑふで　三八六
きみづ　八九
きやう科書ハ如何　二三二
きれんげしやうまニ就テ　四三三
きりんさう　五八
きん刊植物學書類　一二〇
きんしん食法　一九二
きん類採集案内　二五七。二九八

く之部

ぐわい國植物學士　七二。一一四。一九七
くさびろうどたけ　三八六
くらがりした　二六八
くらがりしだノ新產地　三〇八
くろいちご　四八
くろたまがやつり　二二九
くろもノ雄花　三〇一

植物學雜誌第四卷目錄

ARTICLES IN ENGLISH.

Notes on Pinguicula ramosa, Sp. Nov. By Mr. M. MIYOSHI. (Plate XI.) No. 43, p. 1.
A few Words of Explanation to European Botanists. By Prof. R. YATABE, Sc. D. No. 44, p. 1.
Two New Species of Japanese Plants. By Prof. R. YATABE, Sc. D. (Plates XII, XIII.) No. 44, p. 2.
A New Japanese Primula. By Prof. R. YATABE, Sc. D. (Plate XIV.) No. 45, p. 1.
On Hatsudake and Akahatsu, Two Species of Japanese Edible Fungi. By Mr. N. TANAKA. (Plates XV-XVII.) No. 45, p. 2.
A New Genus of the Order Saxifragaceæ. By Prof. R. YATABE, Sc. D. (Plate XVIII.) No. 46 p. 1.

あ之部　丁數
あをかごのき　四一六
あをかもめづる　一五一
あをがれしだ　四五三
あをやぎさう　四五一
あかまつ、くろまつ　一五五
あかつゝじ　四五二
あけぼのつゝじ　一五一
あさぐれい氏ノ遺稿　一五五
あさがほニ就テ　三四五
あさまりんだう　八七
あすなろのやどりき否あすなろのひじきニ付質疑　二七七
あきかさすげ　二二九
Aldrovanda（あるどろばんだ） vesiculosa（ゑしくろさ）, L.　日本否東京近郊ニ産す　二三五

い之部
いがゝやつり　二二八
いけ野成一郎氏　三〇八
いそつゝじ　一五一
いそやまてんつき　二二九
いち二ノ語言　三〇八
いちじゆくノ乳ノ消化作用　一六、四八
いつ種ノ色素　二三三
いも瓜ノ氣根　三八二
いてう　七二
いぬしようま　四一四
いぬたで　四一五
いぬがらしノ略式花　三〇一
いぬつげ着色胚珠　三〇〇
いねノ害菌　四二五
いぬのひげ　一七四
いはづたい　一五一
いはれこのめさう　一三五
いぶきすみれ　二四
いらくさ　四六七
いりもていししだ　二九九

う之部
う歎莓莖ノ構造　三八二
うへ野公園樅ノ壽命　一一六
うしがやつり　四五三
うすべにゝがな　四一五
うますげ　四五三

新刊理科書廣告

理科大學教授松村任三先生編著

教科用

植物分科學要（百四十二圖入）全一册（定價金七十錢郵稅金六錢）

○本書ハ顯花植物ヲ二部、二類、八群、二區、四十三科、二百二十五族ニ分類シテ、各標徵ノ要ヲ提ケ、數語ノ記事ヲ以テ一目ノ下ニ瞭然識別スルヿヲ得ラルヽモノナリ

○本書ハ現今學術進步ノ程度ニ適ヘル分類法ヲ記述シタルモノナリ

○本書ハ植物分類學ノ教授本ナリ、稽古本ナリ、植物學者ノ參考ニ供ス可キモノナリ

○本書ハ植物分類學ニ長ジ、且其教授法ニ熟セル先生ノ手ニ成レルモノナリ

○本書ハ冗長ノ記事ヲ省キ、簡潔明瞭ナレバ、數箇月ノ時日ヲ費サヽルモ、教授ヲ遂ケラルヽモノナリ、修習ヲ得ルモノナリ

○本書ハ中學校、師範學校、其他高等諸學校等ニ於テ用ヰルニ適スモノナリ

發兌所（東京日本橋區通三丁目十四番地）**丸善商社書店**

一本會ヘ御投寄ノ論說雜報ハ東京府北豐島郡南千住町六番地東京植物學會ヘ宛御送寄ヲ乞フ

一本誌廣告料五號文字一行（二十五字詰）一回金五錢三回以上割引仕候事

○本誌每月一回發兌一册金拾二錢○六册前金七十二錢○拾貳册前金壹圓四十四錢○會員ニ限リ壹册十錢

○配達概則

第一條　代價收受セザル內ハ縱令御注文アルモ遞送セズ○第二條　前金ノ盡ル時ハ改テ御請求仕ル故次號發兌迄ニ御送金ナキ方ハ御送付相成マデ雜誌ヲ遞送セズ○第三條　郵便切手ヲ以テ代價ト換用ハ謝絶ス○第四條　郵便爲換金ハ東京神田郵便局ヘ宛御取組相成度候○第五條　特ニ一册限御入用ノ向ハ一錢切手十貳枚御送致ナレバ御居可申候

版權所有

明治廿四年一月九日印刷
明治廿四年一月十日出版

編輯兼發行者　東京府平民　井上蘇吉
東京神田區小川町壹番地
印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜
東京神田區松下町十三番地
發行所　東京植物學會編輯所
東京神田裏神保町壹番地
賣捌所　敬業社
同所
同　丸善書店
東京日本橋通三丁目

遞信省認可

目録

はちぢやうしゆすらん ニ就テ　理學博士 矢田部良吉……1
さつまぎく ニ就テ　仝上……2
本雜誌躰裁ノ變更ニ就テ……4
日本產槲櫧柯ノ諸種ヲ論ズ　松村任三……5
日本藥局方植物篇（前號ノ續キ）　澤田駒次郎……8
植物解剖學獨案內第四（前號ノ續キ）　池野成一郎……12
耆多尼訶經　岡田信利……13
植物ノ防禦機關ヲ論ス　堀正太郎……15
博物學ノ研究ヲ諸君ニ勸ム　三好學…18
日本植物報知（第十）　牧野富太郎…27
日本植物科屬篇（第三）　仝上……30

雜録

ばんじろうノ葉ノすとまたノ數。毛茸ノ形狀。Pinguicula ノ新產地…………32

CONTENTS.

A New Japanese Goodyera. (*in English.*) By Prof. R. YATABE, Sc.D. (Plate XIX.) 1
A New Variety of Chrysanthemum Sinense, Sab. (*in English.*) By Prof. R. YATABE, Sc. D. (Plate XX.) 2
Reason why we have Altered the Mode of Writing in this Magazine. . . . 4
Japanese Species of Quercus. By Prof. J. MATSUMURA. 5
Plants Employed in Medicine in the Japanese Pharmacopœa. (*continued from Vol. 4.*) By K. SAWADA. 8
Guide to Anatomical Work in Botany. Part V. By Mr. S. IKENO. . . . 12
"Botanikakyō." By Mr. N. OKADA. 13
Protective Organs of Plants. By S. HORI. 15
On the Study of Natural History. By M. MIYOSHI. 18
Notes on Japanese Plants.—Part X. By T. MAKINO. 27
Orders and Genera of Japanese Plants. By Mr. T. MAKINO. 30
Miscellaneous: 32
Number of Stomata in the Leaves of Psidium Guyava, L. About Hairs.—New Locality of Pinguicula.

All letters and communications to be addressed to the Secretary of the
TŌKYŌ BOTANICAL SOCIETY,
Botanical Laboratory, Imperial University, Tōkyō, Japan.

SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES
3 9088 01109 9876